大正十二年五月十五日印刷
大正十二年五月二十日發行

花袋全集第九卷

（非賣品）

不許複製

著作者　田山錄彌
東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行者　川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　松浦政吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市小石川區東青柳町二十九番地
發行所　花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

ちも遁れなければならないと思つた。

Kはすぐその支度をした。

『もう行くのかえ？』

『何うも難有う……もう行く。ぢや、さやうなら。』急いでKはAやSの持つて來てくれた荷物を取り上げた。

『大丈夫かな――』

『大丈夫だ、大丈夫だ。』

かう言つたまゝKは遁れるやうに坂を下つた。Kは一散に走つた。振り返りもせずに走つた。漸く恐ろしい脅迫から遁れて來たやうに――。しかし、暫く來た時には、恐ろしい疲勞と恐ろしい悲哀とがかれの眼を眩ますやうにした。かれは林の中に入つて、その避難所を求めた。

――花袋全集第九卷終――

Ｋの内部の光景が、さういふ風に、不整、不安、不調をきはめてゐるに拘らず、また、いざと言へば、何うなつて了ふかわからないやうな恐怖に滿されてゐるに拘らず、あたりは、明るく、靜かに、落附いて、そしてしんとしてゐた。ともすると、秋の初めに不意に起つて來る凄じい風もなければ、妖怪か何かのやうに恐ろしく黑く卷き上つて來る雲もなかつた。Ａ岳の上に一片靡いてゐる白い雲も、動きさうで動かずにじつとしてゐるのをかれ等は目にした。次第に、かれ等は山脈の脊のやうになつてゐる所へと近づいて來た。

そこには、夏中は、溫泉場から茶店が出てゐて、わざわざ高い山を越してやつて來る浴客達を迎へるやうになつてゐたのが、つい、この近くに下りて行つて了つてからは、組み立てた柱が、板が、風雨に曝されて、すつかり捨てられたさびしさをあたりに見せてゐた。かれ等はそこに行つて休んだ。

遠く前に展げられたＴ川の狹谷をＳは指すやうにして、

『あれがＴ山だね。それから、此方に大きく見えるのがＹ岳だ。そら、そこがＵ町だ……。』

しばし、かうやつて眺めてゐたが、今度はＫに向つて、

『何うだね？　ちつとは好いかね。かうひろびろした眺望を見たら、少しは氣も晴々するだらう？』

『…………………』

Ｋは何か言はうとしたが、しかも言はずに、唯ちよつと頭を振つた。Ｋは一刻も早く、このＡやＳ達か

圍を取卷いたSもAも女中も、矢張、山や川や樹と同じやうに、絶えずかれを脅迫してゐるやうに彼には思へた。

Kの顏は、誰の眼にも、わるく蒼白く昂奮して見えた。眼もイヤにギヨロ〳〵と氣味わるく光つた。

『大丈夫かね、君。』

此方に來てからAは心配さうにSに言つた。

『さアね。何うかしてるね。……しかし、僕の見たところでは、さう大したこともないと思ふけれど、つまり疲れてゐるんだね。落附いてやすむと好いんだけども――』

『山や空が動き出してでも來るやうな氣がしてるらしいね。大丈夫かしら?』

『そこまで、あの山の上まで送つて行けば大丈夫だらう。』

で、AとSとは、荷物を持つてやつたりして、その山脈の脊になつてゐるあたりまで送つて行つた。

Kは頭を垂れて默々として歩いた。こつちから言葉をかけても、單に受答へをするだけで、すぐ深い沈默の中に入つて了つた。否、そればかりではなかつた。をり〳〵低頭き勝ちの顏を上げて、こつそりとあたりを見廻すやうにしたが、その時にはKの顏は全くあるものに恐ろしく壓迫されたやうにオドオドと筋肉を顫はせてゐるのが見えた。K自からにしても、一刻も早く、この山から遁れなければならないと思つてゐた。

かうAが傍から訊いた。

『いや、氣持のわるいことは、ちつともないんです。唯、いろんなものが私を脅かすやうな氣がするんです。それもそんなことはないといふことは、ちやんと、理性でわかつてゐるんですけども、何うもしやうがないんです。何しろあのA岳が動き出して來るやうな氣がして爲方がないんですもの。』

『ふむ。』

かう言つて、Sは心配さうにKの顏を見た。

『こゝの醫者に見て貰つたら、何うです？』

『いや、それよりも、一刻も早く此處を出て了ふ方が好いと思ふ……。その方が好い……』

かう言つてKは行李にいろいろなものを詰めた。つゞいて、Kは旅舍の女中を呼んで、宿錢の勘定をして貰つた。

女中もそれと知つて、驚いて、

『お歸りになるの？』

『あ、もう、歸る……。』

『何うして、そんなに急に……。電報でも來たんですか。』

Kはしかしその理由は話さなかつた。唯一刻も早くその勘定をして來て呉れることを命じた。彼の周

『一刻も早く、早く……。』

かうまた何處かで言ふ聲がした。

『もう歸るんですか？』

かうそこにやつて來たSとAとは言つた。

Kは默つてゐた。Kの眼はギラギラとSとAとの上に光つた。

『餘り急ぢやありませんか。』

『でも、もう歸ります。何うもいろいろなものが私を脅かしてしやうがない。此處にゐると、山でも、川でも、樹でも、皆な動き出して來るやうな氣がするんですから――。』

『頭が疲れてゐるんですな。』

『さうです、さうです――。もう二三日も此處にゐると、私は何うなつて了ふかわからないやうな氣がしますから、何としても、もう歸ります。』

『東京に歸つても、何うかと思ひますけれど、さう思つたら、お歸りになる方が好いかも知れませんね。』

『氣持もわるいんですか？』

へ下りて行つたが、ふと、氣がつくと、矢張、その湯氣の籠つた燈火の中に、いつも見る黃い粉が、また夕日に榮えた塵埃のやうなものが簇々と渦を卷いて舞つてゐるのを目にした。頭がまたぐら〳〵とした。かれは湯に入らずに、そのまゝ室の方へともどつて來た。

『これはいかん。』

かうまたかれは叫んだ。

これはとても此處にかうしてじつとしてはゐられなくなつたのではないか。最早浮ぶ瀨もないやうな深い暗い淵に沈みつゝあるのではないか。こゝが、この山の中が、かれの最後の土地となるのではないか。かう思ふと、かれはズウンと深く底の底にその身が押し落されて行くやうな氣がした。冷めたい汗が氣味わるく絞るやうに體中から出て來た。

その夜も、かれはぐつすりと丸で死にでもしたかのやうに熟睡した。

やがて何も彼も生物のやうにかれには見え出して來た。柱も、庇も、鴨居も、欄干も、山も……。殊に、吃驚させられたのは、翌朝、その二階の欄干から正面に見えてゐた大きなA岳の姿が、丸で大入道のやうに恐ろしく動き出したことであつた。否、そればかりではなかつた。周圍をめぐつてゐるあらゆる山岳が、寄つてたかつて、かれを壓迫するやうに、かれを刻々に襲つて來るやうに見えた。『一刻も早く、一刻も早くこの山の中から遁れ出さなければ駄目だ……。』かう何處かで誰かゞかれを促した。

あらゆるものが、山が、林が、崖が、路が、そのいろいろなものが、すべて自分を犇々と十重二十重に取巻いて、如何に出ようとあせつてももう再びとそこから出ることが出來ないやうに、頻りにその計畫を進めてゐるやうな氣がした。一種の恐怖が何處からともなくやつて來て、烈しくかれの心を脅かした。

かれは谷川の岸にある大きな石に腰を寄せて、額を兩手で押へて、長い間じつとしてゐた。

そこにSがやつて來た。

『何うかしましたか？』

『いや――』かうKは言つたが、後頭部を片手で押へて、『何うも、頭がわるくつていかん。』

『めまひでもするんですか。』

『何だか、かう地面が凹んで了ふやうな氣がしていけない。何か何だか、丸でわからなくなつちやつたやうな氣がするんだからね。』

『それはいかんね。醫師に見て貰つた方が好くないかな……。』

『なアに、それほどのことはない。少し落附けば好いんだ……。』

かう言つてKは靜かに明るい日影の中を旅舍の方へと歩いて來た。

旅舍に歸つてから、かれはぐつすり熟睡した。そして再び眼がさめた時には、いくらか氣分が清々してゐるのを發見して、安心した。かれは長押にかゝつてゐる手拭をつかんで、そのまゝ廊下を浴槽の方

Kにはしかし、さうしたものは何でもなかつた。さうしたものを目にしても、Kは何とも思はなかつた。寧ろKにはさうしたことを面白がつて、つまらなく騷いでゐるAやKやその他の人達の氣が知れないやうな氣がした。

それでゐながら、いつともなしに、Kの心や體が、そつちの方に引寄せられて行つてゐるのをK自身すらも知らなかつた。Kは唯重苦しさを感じた。世間から來る重荷の上に、更にある不可解の重荷を積み上げられたやうな氣がした。頭が夥しく眩惑した。

かれのまだ本當に知らない性慾の領土――それが厭な、厭な、何とも言はれない光景を彼の頭にひろげて見せた。と、黃い粉が、夕日の光線の前にわびしく舞つてゐるやうな塵埃が、かれの眼の前を通つて行つた。矢張、山や川や林がかれの頭を壓迫すると同じやうに、それがかれに重苦しい辛い感じを與へた。

Kは頭を押へて暫しそこに立つてゐた。

『とても、駄目だ、とても駄目だ！』

かうKは自から呻くやうに言つた。堪へられないさびしさが次第に彼を襲つて來た。

しかしそれは二三日前からであつた。谷川の岸を歩いてゐたかれは、俄かにその大きな石や、烈しい瀨や、折れ曲つた潭が自分の體を目蒐けて流れ落ちて來るやうな氣がした。否そればかりではなかつた。

たのかな？』

『さうだね。たしかにさうだね。……何でも、あの隣の室では、隨分えらいところを見せつけられるツていふ話だぜ――。』

『それから、此間は、夜中に二人して、湯の中でふざけちらしてゐたつて言ふぢやないか。』

『厄介な奴等だな。』

かうは言ひながらも、ＡやＳを始め、滯在してゐる浴客達に取つては、さうした噂の種がないよりはある方が好いらしかつた。皆なは笑ひながら、その二人についての話を持寄つた。

しかし、その二人づれはそんなことには頓着してはゐなかつた。ことに女の方は、さうして若い男を自由にしてゐるのを見得か何かのやうにして、平氣で歩いた。谷川の岸でも、林の中でも、山の上でも、何處でも二人は手を組んで歩いて行つた。

『馬鹿だな、彼奴は？　よく恥しくないな……。』

かうまたＡは言つた。

と、Ｓは、『でも、さうばかりも言へないぜ！　あゝいふ年を取つた奴は、離れられないつて言ふぜ！彼奴、あゝやつて、くつついてゐるのは、見得ばかりぢやないよ。』

『さうかな……よく君は知つてゐるね。』こんなことを言つてＡは笑つた。

近在のもの、または山の向うのもの以外には、滅多にこの山の上の溫泉にやつて來るものもないのであつたが、何うした風の吹きまはしか、女は人の細君、男はそれよりも五つも六つも年下といふやうな二人づれが、ひよつくりこの溫泉にあらはれたので、いつとなしに、それが滯在してゐる人達の噂の種となつた。

Sや A は頻りにそれを面白がつて話した。

『何うも、僕はあの男見たやうな氣がする……。』

『さう言へば、僕等の三年ばかり前にゐやしなかつたかな。』

かう A が言ふと、S も、

『何うも、僕もさう思ふんだが……。たしかにゐたと思ふがな。勿論、卒業はしないがな。』

『たしかにゐたよ。』

かう言つて A は笑つて、『無論、女房ぢやないね。誰か人の嬶に相違ないね。』

『さうらしいね。』

『たしかにさうだよ。何うも、口のきゝ方が自分の嬶ぢやない。……それに、何うだ、あのふざけ方は？　女房ならあんな眞似はしやしない。』

『矢張りさうかな……。里に近い溫泉では露見の虞があるので、それで、こんな山の上までやつて來

もうさう思はれなくなつて了つた。情けないと思ふね。』

『何うしてだね？』

『何も彼も空虚になつちやつた。何れが本當だか、何れが虚僞だか、それさへわからなくなつて了つた。何故、僕等がかうして生きてゐなければならないのか、それすらわからなくなつちやつたんだから――。』

『それは困るね。何うかしたんだね。餘り勉强しすぎたんだらう？』

かうSはKの顏を見るやうにして言つた。

『でも、その中には、何うかなるだらう。何うか解決がついて行くだらう。何うも仕方がない……、かういふ風になつて了つたんだから――。』

『疲れたんだね。さういふ時には、じつと落附いてゐるに限るね……。なアにぢき治るさ。』

此頃でも、Kは、SやA達が、本を持つて行つて、眺望の好い山の上だの、靜かな林の中だの、谷川の畔の石の上などで一生懸命に讀んでゐるのを見た。しかし、Kは何も言はなかつた。言葉をすらかけなかつた。向うで此方を見た時には、爲方なしに會釋はするが、さうでなければ、そのまゝ默つてその傍を掠めるやうにして通つて行つた。

恐らく、さういふ風に客觀的に、自分で自分を觀察するといふことは、つひぞこれまでにはなかつたことに相違なかつた。Kはつくぐ〵その自分が、そのあはれな姿が、さびしさうに、或は溪流の畔、或は白樺の林の中、或は溫泉場から山へとのぼつて行く路の附近に彷徨つてゐるその身が、可哀相に惘れに思はれ出した。時には、それが自分でなしにさうした不仕合せな人の姿か何かのやうに思はれたりなどした。

本當に不仕合せな男だ……。あらゆるものから見放され、あらゆるつつかえ棒から取離され、何處に行つても、親身にこの身を思つて與れるものゝないその男！　全くひとり限りになつて了つた男！

自分より一年上であるSといふ男と、Aといふ男とが、本を讀みに――靜かに本を讀みに、矢張、この山の溫泉場に來てゐたが、來た當座、Kはすぐ懇意になつて、二三度話をしたことがあつたが、その專心に勉强してゐるさまも、かれに勉强は刺戟せずに、却つて空虛といふことを思はせた。『いくら努力したつて、仕方がない……。』かうかれは思はずにはゐられなかつた。

Sは K に言つた。

『でも、さう言つてもいかんよ。努力と勞働とは、人間とは、切つても切ることの出來ないもんだからな……。』

『それは、さうだ。さうに違ひない。僕だつて、つい此間までさう思つてゐた。しかし、今は僕には

つきりわからないやうになつて了つた。かれは前の方にのめるやうにして、または傷いた獸がそのかくれ場所を求めるやうにして、この山の中のさびしい溫泉場にやつて來たことを思ひ出した。

『何故、お前は死んだんだ……。せめて、お前だけでも生きてゐて吳れれば、さうすれば、俺にも生命があつたんだ……俺の今までの苦勞も努力も、水の泡にならなくつても好かつたんだ、何故、お前は死んだ？』

溪流の咽ぶやうに流れてゐる岸を步きながら、Kはひとり言のやうにそれを口に出して言つた。

『俺が、俺が、この辛い、苦しい世の中に生きてゐたつて、何になるのだ！　俺が、大學を卒業して、世の中にいくら用ひられるやうになつたつて、それが何になるのだ！　お前がゐずに……また母さんがゐずに――』かう思ふと、ひとり手に顏の皺がよつて、嗚咽が胸にこみ上げて來た。

Kはその山の上の溫泉場に來てから、既に一週間を經てゐることを思ひ出した。少し休んで來よう。あまりに疲れた。かう思つてかれはやつて來たのであつたけれども、しかもその疲勞は容易に醫され得たとも思はれなかつた。またその悲哀の重荷も、いくらも脫却し得たとも思はれなかつた。かれはいつものかれと違つて、人とも口をきかず、湯にも碌々入らず、蒼い顏をして、寢たり起きたり、またさびしさうに散步したりしてゐるかれを他人か何かのやうに其處此處に發見した。

るのをも思はず、いろいろ内職めいたことをした。否、その學資が十分でないために、その學資をつくる時間に學課の時間を取られて了ふために、他人が一年で成功するところをかれは二年も三年もかゝつて漸くやつて來たのであつた。何んなにかれは苦しんだであらう。また何んなにかれは人生の不平均を怒つたであらう。時には、全く絕望して、何うしてももう再び起つたことは出來ないと思はれたやうなことも一度や二度ではなかつたのである。『學校なんか、何うでも好い。學士の稱號なんか何うでも好い。もつと手近なところで滿足して了はう。』かう思つたことも度々であつたのである。しかも、その時には、いつも母が、妹がそのつつかえ棒となつた。意氣地なく倒れやうとするかれのつつかえ棒となつた。そして何遍となくかれはそこから起き上つた。であるのに……であるのに、もう大學に入るばかりといふ今になつて、あらゆるつつかえ棒からかれは離れなければならなくなつた。かれは何のために勉强したらう。また何のためにかれは刻苦したらう。母がゐればこそ、妹があればこそ……。母の喜ぶ顏を見たいと思つたればこそ、妹の娘になつて行くのを十分に保護したいと思つたればこそ……。それだのに、それだのに、この二月には流行感冒で母親が死に、この八月にはチブスでその妹が、一緖に母親の死を泣いた妹が、そのまゝ死んで行つて了つたではないか。否、そればかりではなかつた。貧しいかれは、その跡始末や何かについても、常に世話になる親類達から夥しい侮蔑を受けなければならなかつた。かれはすつかり悲觀して了つた。何のために勉强するのか、何のために刻苦するのか、自分にもは

譬へて見れば、底の底の底に、落ちてゐるやうなものだ……。もうとても人生の烈しい渦卷の中に生息してゐることが出來ずに、避くべからずに底の底に沈んで來たやうなものだ。自分のゐるところは、山の上の上の、旅客などは滅多にやつて來ないやうな高い溫泉場の一室ではあるけれども、しかも、そこが人生の底の底――もう何うすることもできない底の底なのだ……。

『母さんが死んだのさへ、俺には堪らない打擊であつたのに、それだのに、何故お前まで死んだのだ。……。辛い世の中に唯一の慰藉であるお前まで死んで行つたのだ。兄を一人この廣い世の中に殘して死んで行つて、それでお前は好いと思ふのか。』

この溫泉場に來た當座は、いつもかう心の中に獨語して、母のことを思つたり、妹の夭死を嘆いたりしたものだが、今はそれさへ、さう思ふことさへ、堪らなく重荷になつて行つた。

Kに取つては、何と言つて好いかわからないほど辛い人生であつた。かれは幼くして父に別れた。そして幼い妹と共に、賃裁縫などして暮してゐる母の細い痩腕のもとに生長した。あまつさへ、かれは豪くならうとする志を捨てなかつた。母もまたかれに豪くなることを激勵した。かれが中學にも滿足に行けない身で、高等學校に入學し、また誰も學資の世話を見て吳れるものがない身で、その學校の寮舍に在學したことだけでも、それだけでも、いかにかれが人生に、實生活に、また學業に刻苦精勵したかということがわかつた。かれは新聞配達もした。牛乳配達もした。學校の寮舍に入つてからも、人の嘲け

一つの恐怖

Kはぐらぐらと眼が眩むやうな氣がした。何が何だかわからなくなつた。かうして山の中の溫泉場の二階の一室に身を橫へてゐる、それだけはわかるけれども、またさつき女中が來て、湯を取換へて行つたのもおぼろげながら記憶に殘つてゐるけれども、それ以外には、なにも彼もぼんやりして了つた。Kは餘りに疲れた。

Kは何時間、さうやつて、兩手を後頭部に組み合せて、空虛な眼を天井に仰向けて眠るともなく覺めるともなくぢつと身を橫へてゐたかを知らなかつた。

しかし、ある期間經つた後、かれはすつくと身を起した。『かうしちやゐられない………かうしちやゐられない!』かう言つて自から頭を振つた。『まご〳〵すれや、俺は駄目になつて了ふ。亡びて了ふ。………折角これまで堪へ忍んで來た艱難も何も彼も無駄になつて了ふ。………』かうて續いて彼は思つた。また、頭がぐら〳〵した。家の柱や、長押や、鴨居がぐる〳〵廻るやうな氣がした。

『剝ぐんぢやたまらねえな。』

『何故？』

『何故でも……見てゐられねえや、慘めで……。』

『そんな氣の弱いことで出來るかよ、この仕事が――。』

かう鐵公が言つた時、崖の上から、鹿の獲物が一頭、二頭、三頭――後には何頭ともわからないほど數多く音を立てて凄じく落ちて來た。

うからきこえて來た。他の二人のものも、路を求めて、此處へと下りて來たのであつた。

崖の上までのぼつて行つた鐵公は、何か頻りに親方と話してゐたが、やがて再び下におりて來て、

『とつさん、松火を二本べい、つけてくれや。』

『よし、よし。』

かう言つて、豫ねて準備して置いた松火を船の底から出したが、それに、石油を灌いで、マッチを摩つて火を點した。松火は明るく燃えた。

『ぢや、好いか、上から落すからな。海の中に落ちねえやうに、よく見てて呉れろな、とつさん。』

『よし、よし。』

鐵公の持つた松火は、樹の下の草藪の中を上へ上へとのぼつて行つた。下から見てゐると、その崖の上から右に少し偏つたところに、他の二人もゐるらしく――そこまで、旣にその獲物は運んで來てあるらしく、頻りに何か話し合つてゐるのがきこえた。松火もそこにまで行つて留つた。

暫くした時には、その松火の一つを振り翳して、三十二三になる方の男の鬚面が、崖の上から下を見てゐるのが、はつきりと船の中から見えた。鐵公はまた下りて來た。

『それにしても、今夜皮を剝ぐんかな。』

『何うだか知らねえ。』

等知らん顔をしてゐたもんだけれど、今度はさうは行かねえ。影さへ見れや、ぐんぐん逍げて行つて了ふだ。だから、鐵砲打つた割に獲れてゐねえや。』

『隨分、鐵砲打つたな……。よくきこえるぜ……。艀舟にきこえやしねえかと思つて、おらア、心配したぜ！』

『きこえたつて、大丈夫だ。』

『でもな……。』

『いざとなれば、船で逍げ出せば好いんだ……。そんなことを氣にしちや、こんな仕事は出來ねえや。とつさん、好い男だけども、臆病でいけねえや。』

『だつてな、おめえ……』

『まア、好いや、そんなこと……。それよりか、此處に、崖の傍に路はねえかな。』

『さア。』

『ありさうなもんだがな。』

『何うするんだ。』

『一つ一つ運ぶのは、大變だで、上から落さうつて言ふんだがな。』

かう言つて鐵公は、その崖の傍から林の中へ入つて行つた。暫く立つと、オウイオウイといふ聲が向

『馬鹿臭い。』

『とつさん、臆病だから、威かしてやれつて、親方が言つただ……。』

『うそこけ。』

『ほんまだ、ほんまだ――。』

『それで何うした？』

『何が――？』鐵公はわざとしらばくれたやうにして言つた。

『何がもねえもんだ。獲物さ、取つたものさ？』

『あゝ、それか。』始めて氣が附いたやうにして、『大しめ、大しめ！』

『この前と何うだ？』

『さアな、此間とは、とても比べものにはならねえがな……。それでも隨分打つた――。』

『二十頭も打つたか？』

『それではきくめい……。でもな、矢張、始めとは違つて、段々逃げるのが旨くならア。あいつらだツて、命は惜しいてな……。』

『それはさうともな……。』

『だから、この前のやうに、樂には行かねえ……。此前は、つい、鼻先まで近寄つて行つても、彼奴

である。……かう思ひながら、かれはまたぢつと耳を欹てゝ見た。今度は波の音の外に際立つて、耳に入つて來る何等の音響もなかつた。『やはり鹿だつたのかな……。』こんなことを思ひながら、かれは再び崖の上を仰いだ。夜の暗い空氣の中に、樹のこんもりしてゐるのが際立つて物凄く見えてゐるばかりであつた。潮がさして來たと見えて、舟の動搖がやゝ強く、七輪の火や、湯氣を白くたぎらせてゐる鐵瓶や、小さなランプの灯が頻りに夕闇の空氣の中に行つたり來たりするのが見えた。向うの岩には、波が絶えずドウドウと打寄せた。

五

氣が附くと、崖のすぐ傍のところに、誰か立つてゐるものがあつた。

『何だ？　鐵公か？　びつくりした。二つとない膽をなくして了つた……。何うして、默つて立つてゐるのだ。』

『あはははは。』

と、鐵公は戯談らしく笑つた。

『戯談ぢやねえぞ、本當に――』

『びつくらしたな……とつさん……。うまく俺が手にはまつたな。』

かれの眼の前には、此時何うした聯想か、自分の家にゐる妻子のことが浮んで來た。此間、錢を持つて行くと、ひどくびつくりしたといふよりも、ある恐ろしい想像に捉へられたといふやうにして、『お前さん、何うしたんだねえ？　わりいことをして來たんべ……わりいことをして取つて來た金だんべ……。おらア、いくら貧乏してゐたツて、そんなさもしい根性にはならねえのに、えらいことをして呉れた。』かう言つて、女房は何うしてもかれの言ふことを信用しなかつた。正しい排ぎで、そんな澤山な金がお前さんに取れるわけがないと女房は言つた。それを、何の彼のと言ひなだめて、漸く、此方を信用させるまでにするのは容易なことではなかつたことをかれは思ひ出した。『本當だ……嬶の言ふ通りだ……。正しい排ぎで、そんな大金が俺に取れる筈がないのだ。……ばれれや、おれだツて、牢に引張つて行かれなけれやならねえんだ。』またしても、考へがそつちの方に戻つて行つた。

また、崖のところで、ガサガサと草を分けるやうな音がした。はつと思つて、かれは其方の方を見上げた。しかし、何も見えなかつた。三人の中の誰かゞ戻つて來たのかと思つたが、さうでもなかつた。鹿かと思つて見たが、それでもないらしかつた。また、ガサガサと音がした。

急に、恐怖の念が強くかれを捉へた。かれ等は誰かに發見されたのではないか。海軍の望樓のランチか何かに發見せられてそのまゝ引かれて行つたのではないか。でなければ、もう、今頃は、誰かゞ歸つて來さうなものである。運んで來なければならないにしても、その前に、何とか報告〆あつて然るべき

な氣がした。
その時には、最早明るい夕日の光線は、全くその狹い奧深い入江から消え去つてゐた。あと三四十分もしたら、海にも山にも名殘なく薄暮が襲つて來て、あたりは全く暗くなつて行つて了ふであらう。美しい星が樹間からそれと仰がれるやうになるであらう。ふと思ひ出されて來たのは、都合に由つては、今夜この島の裏海岸で假泊するかも知れないといふことであつた。『困つたな……。假泊するとすれば、此處はあまり好い位置ではない。もう少し奧の入江、あの千人岩のあるあたりまで入つて行く方が安全なんだがな。……』かう思つて見たが、しかも夜になつてからでは、到底そこまで入つて行くことは出來さうには思はれなかつた。『まア爲方がない。あとで相談するんだ。』かうひとりで考へて、今度は七輪の火の消えかゝつたのを煽ぎ出した。
山の上では、銃の音がまだきこえてはゐたけれども、しかも以前のやうな盛んな音の連續はもうしなかつた。かれ等はあら方目的を達して今はその獲物を運び下すことについて相談をしてゐるか、でなければ、仕事が漸くすんだと言ふので、ほつと呼吸をついて、烟草でも吸つてゐるところであるらしかつた。次第に、薄暮はあたりを包んだ。樹間から透いて見えてゐた海の波の掀翻も、いつかすつかり見えなくなつて了つた。
七輪に起きてゐる炭の火が、目立つて赤くあたりに見え出して來た。

その時には、ボンボンといふ音はかなり高くはつきりときこえてゐた。無論、沖を行くその舟は、餘りさうした音には重きを置かなかつたに相違なかつたけれど、それよりも自分の歸つて來ることにのみ心を奪はれてゐたに相違なかつたけれど、しかも、かれには、その石油エンジンのカタカタいふ音響が堪らなく氣になつた。もしや、あの舟の中の人が、その不思議なボンボンいふ音に耳を留めて、『あれは何だらう。あそこは、鐵砲は禁制な筈だのに……』かう思つて一緒に乘つてゐるものにそれを話しはしないか。それから、いろいろなことが想像されて『太い奴だ……。お山の鹿を打つてゐやがるに相違ない……』かう言つて、そのまゝ舟の舳先を此方に向けてやつて來はしないか。さうすれば、最早おしまひだ。自分は賴まれたから漕いで來たのだ、自分は手を下して鹿を殺したのではない……かう言つて辯解して見たところで、それは何の役にも立たない。さうした惡事の共謀者として、自分も必ず牢に入れられる。いや、そればかりではない、お山の鹿を打つとは、ひどい事をしたものだと言はれて、牢から歸つて來ても、村には落附いてゐることが出來ずに、自分も、自分の妻子も路頭に迷はなければならなくなる……。かう思ふと、あゝして無殘に、殘酷に殺された鹿の思ひだけでも、その位の罰はやつて來るのが當然であるやうに思はれ出した。『あゝもう、決してやらない。今度、歸つたら、もう二度とかうした事はしない。きつとあらためる……誓つてあらためる。』かう思つてゐる中にも銪舟のエンヂンの響は、そのまゝ海上を横ぎつて、急いで岸の方へと遠ざかつて行つた。かれはホツト呼吸がつけたやう

されて行つた。

鹿は依然として、そこに坐つてゐた。かれがそこにゐるのを、また、かれがぢつとそれを見てゐるのをちやんと知つて居りながら、しかも何うしようともしなかつた。その恐ろしい虐殺の共謀者でかれがあるといふことは少しも知らぬかのやうに――。

四

この前の時ほどそれほど盛んではなかつたけれども、それでも始まつてから一時間位は、その銃聲が絶えず斷續してきこえて來てゐた。

それから押して見て、矢張、かなりの獲物はあるらしく思はれた。

かれの舟の漂つてゐる入江は、初めてやつて來てから、三度まであたりの感じが變つて行つた。初めは、樹の影で蔽はれて暗かつたが、夕日が低くなつて行くにつれて、その餘照がこの奧まつた中までもさし込んで來て、一時にぱつと明るくなつて行つた。それは鹿が慌てゝ遁げ込んで來た頃のことであつた。細かい波の寄つてゐる上に斜にさし添つて來た夕日の影には、何處か靜かな、落附いた感じさへ加つてゐた。それに、その明るい時間はかなり長い間續いた。波の上に微かに映つた夕日の影は、容易にそこから消えなかつた。沖には、歸つて來る石油エンジンの艑舟の音がした。

上げると、一疋の鹿が、再び起つた恐ろしい虐殺から免れやうとするかのやうに、慌てゝ、崖と密林との間を下りて、そのまゝ入江の岸の草藪の中にその身を投じた。

或はその鹿はさつきの一發に重く傷いてゐるのかも知れなかつた。ぢつとかれが見てゐると、その草藪の中に半ばその身を埋めたまゝ、動きもせずにゐるのであつた。そしてその驚いたやうな、慌てたやうな大きな眼は、ぢつと此方を見詰めてゐた……。かれは始めは、此方から飛び蒐つて行きたいやうな、または折角の獲物を取り逃しては殘念だといふやうな衝動に驅られたが——その時手元に銃があつたなら、無論、それに向つて一發を放つたに相違なかつたが、暫らくその大きな眼を、悲しさうな眼を見てゐると、何とも言はれず可哀相になつて來て、かうした惡事の手傳をしてゐる自分が此上なくあさましい人間のやうに思はれ出して來た。『かうした惡事を我々さへ思ひ立たなかつたならば、この島の鹿はこんな目に遭はなくつても好かつたのだ……。何百代前の祖先から今日に至るまで、全く危害といふものを知らずに、また他の世界に見るやうな競爭といふことを知らずに、極樂の別天地に生きて來た鹿として、のんきに、平和に暮らして行くことが出來たのだ……。それを、慾のために、自分達だけ好い儲口を得たいがために、かうした惡事を實行するといふことは、何と恐ろしいことだらう、何といふわるいことだらう……。』かう思ふと、一緒に事をしてゐる三人の仲間達の心も、そのまゝ呪はずにはゐられないやうな氣持がした。この前にも起つたと同じやうな、淺ましい、悲しいやうな氣分に次第にかれは浸

ボンボンとまた二つばかり銃聲がした。

『いよいよやつてゐるな。』

かう思ふと、一方無邪氣な鹿が殺されてゐるのを憐れむやうな心持が起つて來ると同時に、自分等の事業の成功して行くのを喜ぶ心が起つて來た。

かれも出かけて行つて見ようかと思つた。かれは崖の方を見上げた。何處か、そこらから上つて行くやうなところはないかと思つて、あたりを見廻した。しかし、そこは崖が高く岩が多く、それに、こゝらの岩は崩れ易いので、滅多にそこに上つて行くことは出來なかつた。出懸けるならば、矢張、さつきのやうに、船を向うに廻して、そこから上陸して行くより他爲方がなかつた。かれは躊躇した。『行つたところで爲方がない……邪魔になるばかりだ……それよりも、此處にかうしてゐる方が好い。』かう思つて、かれは半ば立ちかけたのを再び元のまゝにした。銃聲は次第に高くきこえ出して來た。

『草刈りなんかが來てゐると困るな。』

かう思つて見たが、今時分、二里もあるこの島の裏海岸に、さうしたものが來てゐようとも思はれなかつた。

かなりに近いところ――その崖の上の密樹の中あたりにも、一發、二發、銃聲がきこえたと彼は思つた。それからいくらも經つてゐなかつた。ふと、何か物の動く氣勢が崖の上でしたので、仰向いてかれが見

三

次第に夕暮が迫つて來た。

船に殘つたかれが、船底から身を起した時には、大海の夕日のかゞやきは最早すつかり消え果てゝゐた。かれが横になつてゐた間は、決してさう長い間ではないと思つてゐるのに……。碧であつた海の色は今はさびしい錆びた色になつてゐるのをかれは目にした。

『何うしたらう？』

かう思つてまたかれは耳を欹てた。

ボン、ボンと二つばかり何處かできこえたやうな氣がした。それにしても思ひ出されるのは、此前の冒險の時の銃聲であつた。その盛んな銃聲であつた。四時頃からやつて來て、三時間ばかりの間に、かれ等は四十頭近い鹿を殺したのであつた。そして何の苦もなくそれを舟に持つて來たのであつた。

『今日は駄目かな……。動物でも、矢張性があるて、さうした危險のない處に遁げて行つたかな……。』

こんなことを考へながら、かれは時計を帶の間から出して見た。まだ六時少しすぎたばかりであつた。樹の間から微かにさして來てゐた夕日の最後の光線が、チラチラと碧い淵の上に動いた。小さな波が寄せてはまた返して行つた。

こえつこはありやしねえ。』

『それは、さうだけども……何となく、氣がひけるよ。』

『燈臺や金華山の表の方は、大丈夫だが、海の上を警戒しなくつちやいけない……。』かう親方は注意深いやうな顔をして、『何うかすると、海軍の望樓のランチが通ることがあるから。』

『そんなことは滅多にない。』

『それはないけれども、注意だけはしなくつてはいけない……。それにしても、今度はいつ行かう？』

『いつでも……』

『五六日したら、行かうぢやないか……。漁に行くふりをして？』

『よし、よし。』

かう皆なが同意した。ところが、その話のあつた五日目、即ち二度目の冒險の當日は生憎夥だしい暴風雨だつたので、それから三日延ばして漸く今日やつて來ることになつたのであつた。

『まだ、始めねえと見えるな。』

船の底に身を横たへながら、かうかれはひとりで言つてそのまゝ耳を欹てゝ見た。

しかし、この前にきいたやうな銃聲――其處にも此處にもボンボンときこえるやうな銃聲をかれはまだ耳にすることは出來なかつた。

あるからな。何うだ、捨公……』かう船頭の方に向いて、『漕いで行かねえか。K浦あたりまで?』

『さアな。』

『無理かな……あの舟ぢや……。』

『あそこに行くんでさへ、命がけだでな。K浦までは、とても駄目だんべいな……。それも、五月頃の凪ぎでもあれば行けねいこともあんめいがな。』

『K浦まではとても無理だ……。』

かう傍から親方が言つたので、そのまゝ皆な默つてしまつた。今度は荒した島の後の話が皆なの口に上つて來た。

『でも、わかりやしねえ。』

かう言つたのは、親方であつた。

『さうだな……。別に、あそこで皮を剝いだわけぢやなし、草位少しは寢てゐたかもしれないけれども、跡つてあとは殘つてゐやしねえ……。唯、あそこで鐵砲を打つのがきこえやしないかと思つて、氣がかりには氣がかりだが――。』

『でも、あそこらで打つたつてきこえやしねえ。あそこから、人のゐるところへは、燈臺が一番近いんだが、それだつて一里はあるからなア。そして、山の向う側になつてゐるからな。鐵砲の音なんかき

かう言つてもう一人の若い方のが笑つた。
『でも、さう骨が折れずに、鹿が捕れるかなア？』
かう船頭が不思議にすると、一人は、
『何しろ、今まで人に打たれたことなんかない鹿だから。のんきなもんだ。何んなに近くまで行つて、鐵砲を向けても、平氣でのそのそしてゐるんだから。面白いやうだよ、それは――。』
『ゐることも澤山ゐるんだね？』
『ゐるにもなんにも……。金華山の表の方よりも、もつとゐるね。何疋ゐるかしれやしない。ちつとやそつと我々が捕つた位ぢやわかりやしない。』
『でも、鹿も吃驚したらうなア。』
『何しろ、鐵砲なんかにでつくはしたことのない動物だから。』
こんなことを言つて皆して笑つた。やがて、今度は、鹿の肉を捨てるのが惜しいから、何うかして、あれを祕密に處分することは出來ないものかといふことになつた。
『遠くにさへ持つて行けば、何うにでもなるんだがなア。』
かう一人が言ふと、他の一人は、
『本當だ……。捨てるのは惜しい。何んなに捨て賣にしても、一匹の肉が二兩にやなる。大きなのが

ひながら、それを皆な海の中に投じた。肉の處分まではかれ等には何うしても出來なかつたのである。成るほど、それは好い金儲けであつた。鹿の皮一枚が非常に高い値で賣れた。唯、賴まれて、斷ることが出來ずに、餘儀なくつれて行かれたかれでさへ、一月拃いでも容易に得ることの出來ないほどの澤山な金をかれ等から貰つた。皮を持つて行つて、遠い町から歸つて來たかれ等の財布は、十圓紙幣や五圓紙幣で一杯に滿されてあつた。『だまつてゐろ……だまつてゐろ、祕密を洩すと、生かしちや置かねえぞ……』かう威嚇するやうに親方が言つたり、『けども、好い儲け口だ……。あんな金箱はありやしねえ。それや、まア、行くのは骨さ。命がけさ……。しかし、命がけでなけれや、何でも旨いことは出來ねえや……。それに骨の折れるのは海の上だけだからな。鹿を捕るのは、ちつとも骨は折れないんだからな。』と言つたりした。ある日、皆なして、一緖になつた時には、『まア、しかし、餘り度々やると、わかるて、成るたけ、祕密にやらなけれやいけない。』

かう三十二三の男が言ふと、

『さうとも、滅多なことは出來ねえ。村でもな、俺達の金を持つてゐるのを吃驚してゐる奴があるだで、さういふところから、ばれて行くだで……。此間も、正公、不思議にして、何うして儲けて來た。俺らにも話せ、決して口外しねえなんて言ひくさつてゐたつけ。』

『危ねえ、危ねえ。』

る舟が、靜かに、人知れず隱れて漂つてゐるとは氣が附くものはなかつた。舟の中からは、七輪の烟が微かに蛇のやうに夕暮近い空氣の中に靡きわたつてゐた。

舟に殘つた一人は、三十七八の屈竟な男であつたが、吩咐けられた飯を焚いて了ふと、その儘ごろりと仰向になつて舟の底に身を倒した。『また、あの殘酷な光景が繰返されるのか。』ふとかう思つたが、それと同時に、いろいろなことが眼の前にあらはれて來て、かうしてぢつとしてはゐられないやうな氣がした。かれは腥さい殺戮の血が今もその身の周圍にくつついて匂つてゐるやうに思はれた。動物とはいへ、あの無殘な殺戮は? あの殘酷な光景は?

かれの眼の前には、無數の鹿の殺されたさまが見えた。何疋となく――殆ど何疋となく岸から舟へ積まれたさまが見えた。しかも此處では落附いて、皮を剝いてゐるわけに行かない。さうかと言つて、この島でなしに、かれ等の住んでゐる海岸に持つて行つてそれをやるわけには猶更行かない……。それこそ忽ちその罪惡は世間に知れる。世間の人達は眼を睜つてそれを見る。國禁になつてゐる金華山の鹿を打つて來たといふことが忽ち知れる……。で、爲方がなしに、かれ等はそれを海の中でやつた。凄じい荒海の怒濤の中でやつた。それにしても、それは何といふ光景であつたらう。一枚々々鹿の皮を剝ぐために、刀も、手も、腕もすべて血だらけになつて、丸で人間がやつてゐるとは思はれないやうな殘酷なさまであつた。そして、一疋の皮を剝ぎ終ると、『惜しいな……。この肉を捨てるのは惜しいな。』かう言

の陰に入るやうにしてをれ。それに夕方までに、飯を炊いて置け。』

『よし、よし、それはわかつた。しかし歸りは夜だな。』

『夜だ……。それに、そこが一片付いたら、手前も上までやつて來い。舟んなかでぐづぐづしてゐねえで。』

『おらア嫌だ。』

かう言つて、舟に殘る方の男は、そのまゝ岩に繋いだ纜を解くために岸に上つて來た。

その時には、先きに行つた二人の姿は、もう全く密林の中に沒して了つてゐた。男は急いでその跡を追つた。やがてその姿も見えなくなつた。波の音が凄じくあたりを取卷いて聞えた。

二

暫く經つた後には、その舟は狹い入江の奧の、深く樹木の繁つた、外からは容易に見出されない、さびしいところに艫を繋いで、靜かに波の上にたぷたぷに漂つてゐるのが見えた。

そこからは、樹間を透して、夕日に彩られた外海のかがやきがキラキラと美しく輝き渡つて見られた。たまには、沖近く石油エンジンの鮪舟が通つて行く氣勢がしたり、大きく孕んだ帆がまともに夕日を受けて通つて行つたりしたが、しかも此處に、かうした舟が——惡事を働いてゐるもの丶手下になつてゐる

せたりしてゐる上に、密生してゐる樹木を鳴らす風の音が添つて、あたりは何となく騷々しい、落附かない氣分で滿されてゐた。沖には一帆の白いのも認められなかつた。

そつと滑り込んで來た舟からは、一番先きに、四十位な、岩乘な、いやに陰慘な顏をした男が上陸した。つゞいて、若い二十二三の男と、三十一二位の男とが上陸した。皆な肩から獵銃をかけて持つてゐた。

舟に殘つてゐた一人は、最後に上陸した男を呼びかけて、

『いゝのか?　此處らで?』

『さア。』

かうその男は言つたが、自分の一丁餘ではよくわからないといふやうに先きに行つた四十位の男を呼びかけた。呼ばれた男は、二三間引返して來て、何か頻りに聲高く話したが、そのまゝ若い二十二三の男と先後して、岩の上を傳つて、向うの密生した樹林の方へと行つた。

一人の男が戻つて來ると、

『好いかな?　此處で?』

かう再び舟から問はれた。

『もう、少し奧へ入つてゐるつて――。そこぢや、何うも、外から見えるとわるいつて。成るたけ、樹

島の虐殺

一

深く入込んだ崖のやうなところに、すうと滑るやうに一隻の舟が入つて來た。そこは、樹が深く生茂つて、晝も小暗いやうなところであつたが、それから少し崖に添つて廻ると、一ところ開けたところがあつて、そこから岸に連つた岩石つたひに、島の上へとあがつて行くことが出來るやうになつてゐた。

一歩漕ぎ出して行けば、沖には凄じい波が立つて、何うしてさうした荒れわたつた海を小さなこの舟でわたつて來られたかと思はれるほどであつたが、しかも一度その狹い入江の中に入ると、潭のやうに深く碧い水が靜かに湛へて、波といふほどの波も立たず、をりをり寄せて來ても、纔かに岸の扁平な岩石の上に、さゝらのやうに碎けて行くばかりであつた。

しかし、騷がしい波の音――岩に寄せて碎ける音、岸に一面に押せて來る音、海の中で波と波とがぶつかり合つて押倒し押倒される音、さうした音響が一つになつて、ざわざわ、ざわざわと引いたり、寄

て來たかと思ふと、堪らないわびしさと、辛さと、悲しさとが一杯になつて胸に押寄せて來てゐた。時には日の光がさし込んだりしてゐるそのぬかるみの中に、かれ自身の暗い心もすつかり雑り込んでゐるやうな氣がした。否、かれ自身のこれまで經て來た生活の苦しみも、女に對する苦しみも、何も彼もすべて其處に……。

いくらも行つても、その路は盡きなかつた。その泥濘は盡きなかつた。かれはかれの心が一條のレイルに連つて遠く彼方に行くやうな氣がした。何處かで休みたいと思つても、休むやうなところもなければ、腰を下ろすやうなところもなかつた。かれの衣には夥しい泥のハネがあがつた。

午に近い日影は、明るくそのぬかるみの上に照つた。

ずるその鐵道馬車の二條のレイルが、路と共に、曲つたり、眞直になつたりして、次第に開けた大きな高い山の裾野の方へと出て行つた。ところに由つては、そのレイルがギラギラと遠く日に光つて見えたりした。

少しやつて來ると、車掌が言つたやうに、果して路が泥濘になつてゐるのをかれは眼にした。林のある中は、または湖水の岸を辿つてゐる中は、雪が殘つてゐたり、氷つたところがあつたりして、拾つて歩けば、さう大して草鞋や草鞋がけを濡さなくつても好かつたが、段々高原に出て來るにつれて、深い、深い泥濘が冷めたくかれの脚に染みるやうになつた。

ふと後から馬車のやつて來る音がレイルに傳はつて響いて來た。

かれは振返つて見た。

果してさつきの馬車が――マッチ箱のやうなペンキ塗のはげた小さな馬車が、いくらか下りになつてゐる路を勢込んで此方へ走つて來るのが見えた。かれはそれを路傍に避けなければならなかつた。

さつきの車掌は、車掌にして馭者を兼ねてゐると覺しく、馭者臺に立つて、頻りに馬を鞭打つてゐるのをかれは目にした。馬車の中には、客が五人ほど乘つてゐた。

見てゐると、その小さな馬車が眞直に走つて遠くなつて行くさまが、いつまでもいつまでも見えてゐた。かれの心は益々暗く暗くなつて行つた。行つても行つても盡きぬ泥濘の路が、かれの前にあらはれ

『それから、もう一つ、お願ひがあるだ。蔦屋さん、こまかいのを持つてゐべいと思つてえ。』

『小錢か。何うも、何處でも小錢がなくつて困るなア。』

かう車掌は笑つて見せたが、しかし、その下げた鞄の中には、澤山小錢が入つてゐるらしかつた。やがて、その中から、小さな札やら、白銅やら銅貨やらをガチヤガチヤ音させて出して、上さんの出す五圓札と取り替へてやつてゐた。

『どうも難有うごいした。』

かう言つてその上さんは出て行つた。

白髪の婆さんが、外から抱へて來ては入れて行く榾は、ふすふすと燻つて、青い、黄い、灰色の烟を家の中に漂はした。やがて火はぱつと燃え上つた。かれは大福を頰張つたり、茶を飲んだり、周圍の人達の話に耳を傾けたりして、やゝ、暫くそこで體を暖めてゐたが、やがて靜かに立上つて、大福の代をそこに置いたりして、再び難儀なその路へと上つて行つた。

六

路は碧い色をした湖の岸を縫つて、曲つたり折れたりしてつゞいて行つた。

日の光が映ゆくさしたり、ところどころに杜があつたり、残雪があつたりするその路には、Yまで通

けた。

『あの菜漬はいくらだつたな？』

『二圓と二貫。』

『二圓と二貫ぢや、高くはねえな。何でも彼でも馬鹿値だでな。』

『さうかな、安いかえ、あれでも……。』

『安いとも……きのふ、おらが持つて來たのは、一圓と五貫で、もつと小せいや――Yにも、Kにももう漬菜も大根もねえだて。』

其處に、村の上さんらしい中年の女が入つて來て、始めは、頻りに、家の人達と挨拶してゐたが、やがて、その車掌の傍にやつて來て、

『萬屋さん、お前さまにお願があるだがな……。』

『何だな？』

『家のあまつ子、向うの學校さ、行くやうになつたて、毎日これからお願ひしていだがな。』

『馬車けえ？』

『一人ぢやこはがつてるだて、まだ小せいだでえ。』

『ようがすとも――。』

裏の周圍にゐた村の人々は、客の來たのを見て、一人二人と上さんに挨拶して出て行つて了つた。

『まア、お當んなさい！』

そこにゐた手拭をかぶつた色の白い上さんは言つた。

『ぢや、一つ、當らせて貰ふかな。』かれはかう言つて圍爐裏の中に入つて行つた。

此時、その向うで、茶を飲んでゐた外套を着た男は、此方を見て、

『お前さア、馬車かな。』

かう言つて訊いた。

『いや――。』

『歩いて行くんかな。』

『さう――。』

『路がわるいぜ、ぬかつてゐるでな、雪が溶けたで――。』

『さうだんべな。雪が溶けて、路がわりいだんべな。』

かう傍にゐたもう一人の男が言つた。

『わりいとも、わりいとも――。』

しかし、馬車の車掌は、煩さく乘車をかれに勸めようともしなかつた。馭者は今度は上さんに話しか

つゞいて、かれの頭に簇つて上つて來たことは、此處からあるところまで、五六里の間、鐵道馬車が通つてゐるといふことであつた。それに由つて行けば、Y乃至Kまで、さう大して骨を折らずに行くことが出來た。しかし、かれにはそれに乘ることの出來るやうな旅費の餘裕はなかつた。かれは何處までも歩いて行かなければならなかつた。

その倉庫らしい家屋は、その鐵道馬車の車庫であり、またその傍の藁葺屋根の家屋は、半は峠の休茶屋で、半は鐵道馬車に乘る客の集合所であるといふことが、次第にかれにも飲み込めて來た。ふと見ると、氷つたレイルの上にマッチ箱のやうなペンキの剝げた馬車が一臺既にやつて來てゐた。

日は照つてゐるに拘らず、湖水から來る風は寒く肌を刺すやうにした。藁葺屋根の日に當つたところからは、雨だれが頻りに音を立てゝ落ちてゐた。それにも拘らず、鷄はそのあたりで頻りに餌を啄んでゐた。

鐵道馬車には乘ることは出來ないけれども、ちよつと休んで、大福でも食つて行かうと思つて、かれはそのまゝその峠の茶屋の中へと入つて行つた。

かれの眼には、百年も二百年も前からあつたやうな、天井などの黑く煤けた、休むところの廣い、一隅に大きな圍爐裏に榾の燻つてゐる、いかにも峠の茶屋らしい家が映つた。かうした峠の茶屋、標式的な峠の茶屋をかれはその他に何處に發見することが出來たであらうか。やがてかれが入つて行くと、圍爐

少し來たところには、國と國との境界柱が大きく立つてゐた。

『はゝア、これから先きが、Kの國になるのだ！』

かうかれはその前に立つて獨語した。と、不思議にも、今まで經て來た路よりも、これから行かうとする知らないKの國のさまざまなシインの方が、かれに親しさを增して來るやうに思はれた。しやうがない。今更此方に入つて來た運命を慨いだとて爲方がない。それよりも、これから先きにあらはれて來る知らないKの國のさまざまのシインに親む方が、その方が得策だ……。かうした心持がいつとはなしに起つて來た。

峠近く來た時には、そこには、此間降つた雪がまだかなりに多く殘つてゐるのをかれは目にした。地上にもところどころに殘つて、日の當つたところだけ、くちやくちやと泥濘になつてゐるのをかれは目にした。

忽ちかれはそこに一二軒の藁葺の屋根を發見した。つゞいて倉庫ともつかず、車庫ともつかない家屋のそこに連つてゐるのを發見した。否それぱかりではなかつた。その向うに碧い碧い湖水が午前の日に美しく輝いてゐるのをかれは見た。

『お、おれが湖水だ！』

かう思はずかれは心に叫んだ。

五

漸くかれは、山巒の一角をぐるぐる廻つてゐるやうなところへと出て行つた。そこには、また廣い路があつた。

『峠は、まだ遠いかね？』

かうかれは向うからやつて來た旅客に訊いた。

『もう、すぐだ……。この向うを廻ると、もう峠だ。』

『まだ十町位あるかね？』

『さア、さうはあんめい……。』

『湖水がある筈だが、峠に行くと見えるかね？』

『見えるよ。』

『難有う……。』

かう言つてかれはまた歩き出した。次第に、高原や、林や、谷は後になつて、前には、ぐるりとすぐその近くを取巻いた山巒があらはれ出して來た。山の日陰になつたところには、數日前に降つたらしい雪がところどころに殘つてゐた。

をりをりかれは立留つて休んだ。そしてまた木の根をつかんだり、石に縋つたりして一生懸命にのぼつて行つた。次第に、呼吸は切迫した。休んでも、休んでも、その呼吸苦しさを禁めることが出來なかつた。後には、一歩のぼつては休み、また一歩のぼつて行つては休むといふやうになつて行つた。心臓の鼓動が烈しくなつた。

かれのさうして立竦んだやうにして休んでゐる傍を、荷馬車の馬は、倒さにのめるやうにして、逸早く掠めて下りて行つた。そのために、――それを避けるために、かれは時々路の傍の荊棘の中に入つて行かなければならなかつた。

かれの大きな運命、このさびしい山の中にわれ知らず入つて來たといふ大きな運命よりも、それよりも、今はこの急な阪路を征服することの方が、かれに取つての第一の急務となつた。かれはこれに對して全力を擧げなければならなくなつた。さびしい路のことなどを考へる暇はなくなつた。

三分の二ほどのぼつて來た時には、もうとてものぼれさうには思はれないほどそれほどかれは疲勞してゐた。(何うして、新道をやつて來なかつたらう。少し位、近いからと言つて、こんな苦しい目に逢つてはつまらない。)こんな弱音をも吐くやうになつてゐた。かれはぺたりと地上に尻餅をついて、そして眼下に展げられたパノラマのやうな景色を眺めた。

暫くしてかれはまたのぼり初めた。

『橋があるでな……。それを渡つたら、眞直ぐに上へ上へと昇つて行きなせい……。間違ひこはねえ。』
『さうですか。どうも難有う。』
かう言つて、かれはまた歩き出した。暫し來て振返ると、その赤い焚火は、既に下に下になつて、矢張ボツカリと澄んだ朝の空氣の中に赤く高く燃えてゐるのが見えた。

四

『こゝから舊道ですね？』
『さうです。』
上から下りて來た旅客は答へた。
急な、急な勾配で、これをのぼつて行くのかと思はれるほどであつた。それに、路は一面に柔かな深い砂で、一步のぼれば一步退くといふやうな風であつた。それでも、始めは、かれは勇氣を鼓してのぼつた。(これも、何うも爲方がねい。かうした運命だ！)かう思つてのぼつて行つた。
あらゆるものがすべて下に下になつた。林も、谷も、折れ曲つてついてゐる路も、何も彼も……。注意して見れば、その赤い小さい焚火も微かに見えてゐた。昨日、夕暮近く馬車で越えて來たさびしい高原が、さながら手に取るやうに見えた。

かれにはそれが不思議に見えた。この寒い霜の朝に、山の雪が人を壓すやうにあたりにキラキラしてゐる朝に、林に添つて、ポツカリ赤く小さく焚火の燃えてゐるといふことは、かれにあるサンボリツクな感じを與へずには置かなかつた。それはかれの魂ではないか。その賦與された運命に向つて、勇しく邁進するために燃やされた魂の焔ではないか。

かれは何處からともなく勇氣が添へられて來たやうな氣がした。今になつては、かれに取つて、この路を突破するより他爲方がなかつた。いかやうな路であらうとも、——またいかやうな運命であらうとも。かれは次第にその焚火の方へと近寄つて行つた。

焚火の周圍には、樵夫が五六人集つて、頻りに何か話してゐた。かれ等は朝、仕事にかゝる前に、一あたり火に當つて煙草などを吸つてゐるのであつた。

かれは立留つて訊いた。

『舊道の近道があるつて言ひますが、それはまだ先きですか?』

『もう、すぐそこだアな。』

かう其中の一人が指さして敎へた。高い山に續いて連つてゐる低い山巒は既に其前に近く迫つて來てゐた。

『すぐわかりますか?』

『…………』

かれは何か言はうとしたが、言はずに、默つて其處に立つてゐた。

（馬車に乘つて、Sまで行つたつて、しやうがない。引返した方が好い。この次ぎの汽車に乘つて、暖かな海岸の方へ行く方が好い。）かう一方では思つてゐたけれども、しかし、汽車を下りたといふことが、停車場から此方へ出て來たといふことが、そこにSの方へ行く馬車があつたといふことが、その馬車の傍に寄つて行つて、馭者と口をきいたといふことが、既に何うすることも出來ない運命をかれの身の上に齎らして來てゐた。かれはたうとうその馬車に乘つた。そしてさびしい路の方へと入つて來た。

三

煙つたやうな林に添つて、赤いものがちらりと目に着いた。

始めは、それは何だかわからなかつた。女の赤い前垂のやうにも見えた。また、赤く塗つた廣告板か何かのやうにも見えた。しかし、段々近づくにつれて、それが絶えず動いてゐるものであるといふことが大きくなつたり小さくなつたりするものであるといふことが次第にわかつて來た。

『あゝ火だ、焚火だ！』

暫く來た時、かれはかう叫んだ。

出て來た時には、まだ、かうしてこんな方に出て來ようとしてはゐなかつた。兎に角、町を見よう、町外れあたりまで行つて見よう、そして、場合に由つたら、此處に一晩泊つても好い、またあとに戻つて次ぎの汽車で旅をつゞけても好いと思つてゐた。ところが、町の中ほどまで來ると、其處に繼立場に、馬車が一臺、もう出るばかりになつて待つてゐた。旅客が二三人そこに集つて來てゐた。

『Sの方に行くのかね？　この馬車は――』

思はずかうかれは立寄つて訊いて見た。

『さうでさ……。旦那も、いらつしやるかね？』

『いや、行くときめたわけではないけれどもね、』かうかれは曖昧なことを言つて、『いくらだね？　Sまで。』

『一圓五十錢でさ――』

『一圓五十錢？　高いなア。幾里あるんだえ？　一體、Sまで？』

『四里たつぷりありまさア。』

『そんなことはありやしまい。三里位なもんだらう？』

『何うしやして！　そんなこつちやきゝません。四里半つていふんでさ。それに、夏と違つて、今は路がわるいで――。』

限なくつゞいてゐるのではないかとさへ思はれた。かれは思はず溜息をついた。

しかし、かうした路ばかりを通つて來たかれではなかつた。彼は長い旅を振返つて頭に浮べて見た。橋の袂が見えたり、さびしい町外れの人家が見えたり、美しい色彩のチラチラする郊外が見えたり、川の帆が見えたり、山裾の靜かな驛亭が見えたりした。時にはかれは高い峠の上から、はるばると眼下に連つて見えてゐる長い路を眺めた。

（何處まで行つたら、この路は盡きるんだらう――）

かうかれは思ひながら歩いた。

二

（何うしておれは此方の方へ入つて來たのだらう。）かうかれは思ひ返して見た。（さうだ……。あの汽車を、あの停車場で下りさへしなければ、かうしたさびしい路に入つて來なくとも好かつたのだ。）かう思ふと、種々な光景が心の中に浮んで來た。

（あの時、あゝ思つたのが、いけなかつたのだ……。平凡に汽車の進んで行く路よりも、人の知らないめづらしい路の方が好いと思つたのがいけなかつたのだ……。）かう思ふと、さうした心の萠芽が何處からともなく生れて來たのがかれには恨めしく情けないやうな氣がした。しかし汽車を下りて停車場を

ぬかり道

一

朝、早くかれは立つて來た。何處を見わたしても、村といふ村もなければ、人家といふ人家もなかつた。唯、雪に埋れた大きな高い山と、それに續いて割合に低い山巒がずつと長くその前に横はつてゐるばかりであつた。かれの歩いて行く路の兩側には、幹の白い葉の落ちた林が、煙でも靡いてゐるかのやうに遠く微かに連つて見えた。

霜は一面に白く地上に置いた。

かれは靜かに歩いた。まだ、朝であるに拘らず、朝日が朗らかに山の晴雪に映えて照つてゐるに拘らず、またあたりが靜かで落附いてゐて、何物も心を攪すものがないにも拘らず、かれの心は、佗しさと辛さと悲しさとで一杯になつてゐた。かれの前に横はつてゐるさびしい長い長い路——それは何處まで行つたら盡きるのだらうとかれには思はれた。或はそれは行つても、行つても、何處まで行つても、際

起上つたが、やがてすぐ下に、村の娘達が四五人で頻りに蘆荻をサクサクと刈つてゐるのを私は目にした。靜かな唄は其處から起つた。

れた。

次第に、私は空想と事實との區別のわからなくなつて來るのを感じた。事實にのみ縋つて探つてゐた今までよりも、かう考へて來た時の方が一層はつきりとその湖畔の廢墟が私の眼の前にあらはれて見えて來るやうな氣がした。

つゞいて、私の眼には、かうした時代も時の間に過ぎ去つて、すべて異つた人達で往來されるであらうと思はれる時の湖水のさまが歷々と映つて見えた。その時にも、矢張、この湖水は、今と同じやうにさびしいであらう。同じやうに、わびしいであらう。矢張、同じやうに曇つた灰色の空を銹びた水面に映してゐるであらう。矢張同じやうに村はさびしくそこに横はつて、夕炊の烟を丘の上に靡かせてゐるだらう。一帆の影がホワイトスワンのやうに靜かに暗い空氣の中に動いて行くであらう。そして、それを眺めた人達は、不思議なお伽噺の世界をそこに發見したやうな氣がするだらう。そして矢張、『沿革誌』の作者乃至はおゆき、または私と同じやうに、湖のさびしさにひとり手に引寄せられて行くであらう。かう思ふと何んなに微かな心でも、一本の葦の風に鳴るやうな微かな心でも、皆なそれからそれへと細かに繫がつてつゞいて行つてゐて、決して無意味に存在してゐるものでないといふことが染々と深く感じられて來た。ふと氣が附くと、何處かで靜かに唄を唄つてゐる聲がした。

私はあたりを見廻した。何處にも人の姿は見えなかつた。『はてな、何處だらう――』かう思つて私は

心が、おゆきを經、その殘した『沿革誌』を經て、かうして私に傳へられて來たさまを想像した。私は不思議な氣がした。何も彼も――沿革誌の作者の心も、そのさびしい心から生れて來たロオマンスも、おゆきのやさしいさびしい心も、私のかうしてこゝにやつて來た心も、すべて、このさびしい湖水から生れ出て來たやうな氣がした。

八

私には『沿革誌』の作者の描いた空想が再びはつきりと此處に繰返されて見えるやうに思はれた。かれはあらゆるものを想像したであらう。あらゆる人生の榮華、あらゆる人生の得失、かれの知識、學問で想像し得られる悲喜、かれの經驗で知ることの出來る運命、さうしたものをすべて、かれはそのさびしい湖畔で考へたであらう。とぼとぼと歩きながら考へたであらう。その中には、戀の歡びも苦しみもあつたであらう。嫉妬もあつたであらう。かれの人生に對する不如意もあつたであらう。私に於けるおゆきと同じやうな女が矢張かれにもあつて、時には全く憂鬱に閉されて了つたこともあつたであらう。そしてかれも矢張私のやうに、かうしてさびしく、心細く、この湖の畔を彷徨したであらう。

種々な支那の書物――その時分の知識階級の人たちの讀み耽つた支那の書物、その中のさまざまのロオマンスや悲喜劇が、いかにかれの空想に翅を添へたかといふことなども、私にはいろいろに想像せら

『さうだ……。さうだ……。それに相違ない。それに相違ない。すくなくとも、さう考へる方が事實に近い。』

かう考へると、不思議なロオマンスが私の頭に上つて來た。さうだ……。それに相違ない。私の眼の前には、さびしさうに湖畔を歩いてゐるその『沿革誌』の作者の姿が歴々と映つて見えて來た。『さうだ、それに相違ない。さびしさに、この形容することも何うすることも出來ないさびしさに、ひとり手に、さうした空想が其作者の頭にのぼつて行つたんだ……。そしてこの大きな都會や、美しい宮殿や、賑やかな港や、湖に臨んだ欄干に凭りかゝつた美女を、そこに、空中に描き出したに相違ない……。それに相違ない。』かう思つた私は、始めて此處に深い細かい心のあらはれをそのまゝ呼び返して來たやうな氣がした。

『さうだ。自分にしても、もし、こゝに、このさびしい湖畔に、一生住まなければならない運命であつたならば、屹度、さうしたシインを、自分の頭に描き出したに相違ない……。そしてそれを一つのロオマンスとして樂んだに相違ない。』かう思ふと、私は沿革誌の事實をその場所に發見せずに、却つて人間の心の中に發見したことを思はずにはゐられなかつた。

私はいろいろに『沿革誌』の作者を想像した。さびしさに堪へかねたやうな生活をしてゐたかれを想像じた。單調な湖水にひとり向つてさびしく暮してゐたかれを想像じた。そして、その作者のさびしい

辭儀をした。

しかし、いくら調べて見ても、事實らしいものは竟に一つも表面にあらはれて來なかつた。礎なども無論なければ、その址らしい感じのするものも何も出て來なかつた。調べて行つくにつれて、却つてそれを否定する材料さへ出て來た。

私はある日、いつものやうに、矢張その宮殿の址のあつたといふところに立つてゐた。それは空が低く湖水を壓してゐるやうな曇つた日で、あたりはしんとして、物象がすべて深い深い沈默に落ちて、水面に映つてゐる物の影すらも、少しの動搖をも見せてゐないやうな午後であつた。何と言つて好いか、何と形容していゝか、わびしいと言つて好いか、さびしいと言つて好いか――否、雪の來る前に必ず年に一二度はやつて來ないことはないといふ Dead Silence が、全く天地を、湖水を蔽ひ包んで了つたやうに私には見えた。

私の心にも、何とも言はれないさびしさが纏つて來てゐた。

氣が附くと、私の空想はおゆきに對する心持から、次第に『沿革誌』を書いた作者のことの方へと偏つて行つてゐた。ふと私はあることに思ひついた。

『さうだ……さうだ。』

突然精神に響いて來るある暗示の聲に聞き惚れたやうにして、私はかう叫んで起上つた。

『その間、村の人達は、大抵、何ういふことをしてゐるんです?』

『別に、ちがつたこともありませんけどもな……。繩をなつたり、筵を織つたり、この山の奥で出來る細い篠笹で養蠶の時に使ふ籠を編んだりして暮してゐるんですけどもな、つまりませんな、こんなところに住んでゐては、それこそ、空想だけでも好いから、こゝに都會でも出來たことを考へてゐたいですな。』

かうした話が長く續いた。うねうねと曲つた湖畔の路をずつと村の入口に來るまで續いた。やがて校長は鳥渡用事があるからと言つて、帽子を取つて、そのまゝ別の路を向うに行つた。

私は一人そこに立留つた。そして湖水の面から次第に夕日の餘照の消えて行くのをぢつとながめた。

七

かれ是一箇月に近い滯在の間に、『沿革誌』に書いてある址といふ址は、一々實際に當つて調べて見た。私の姿は一日として其の湖畔に見えないことはなかつた。私はあらゆる細かいもの、たとへば、そこに書いてある小さな祠までをも調べて見た。私は丘の上にも行つた。そこを流れてゐる小さな川の上流をも窮めた。今では、村で、私のことを知らないものは無かつた。『あ、あれや、何か昔のことを調べに來た東京の衆だんべ。』かう畑に出てゐる人達も私を見て言つた。路で私に逢つた學校の生徒は皆な丁寧にお

『寒くなりましたな?』
『さうですな。』
『雪が來るのも、もう、すぐですな。』
『本當です。』
『今月の末には、もう雪がやつて來ますか?』
『さア、每年、來月の中頃ですな……。早い時でも、大抵來月に入つてから降るさうですな。』
かう言つたが、校長は更に言葉をついて、
『雪が降り出しちやもう災難です。來年の三月までは、丸で雪の中に埋められて暮してゐるやうなものですからな。北海道の穴熊の生活と、いくらも違つた生活ぢやありませんよ。』
『湖水も凍つて了ふでせうな。』
『三分の二は凍つて了ひますがな。それでも眞中と、海につゞいてゐるところはいくらか暖かいと見えて、凍らずにゐるところが大部分を占めてゐます。』
『さびしいでせうな、その頃は?』
『それはさびしいですな。丸で他との交通が絕えて了ふんですから……。新聞が五日位來ないことがあるんですから。』

私ははつとして空想からさめた。見ると、そこには校長が立つてゐた。

『や……』

『此頃は御無沙汰ばかりしてをります。何うです？　ちつとはおわかりになりましたか？』

『いや、駄目です。』

『此間、沿革誌の作者のことについて、ちよつときゝました。何でも、その米山といふ、江戸に出て大きくなつた家の三代とか前に、かなり學問が出來た人がゐたさうです。その人が書いたもんではないかといふことでした。』

『それは、何ういふ處で、お聞きになりました？』

『これは、さう大してあてになるところできいたのではありませんけれども、何うも、さうらしいツて言ふことでした。』

『事實の方は？』

『その人ははつきり言ひませんでしたけれども、何うも、それだけでは、その沿革誌だけでは、ちよつと本當には出來ないやうな氣がするつて言つてゐました。』

『さうですかな。』

それ以上に話をつゞけようともせずに、私は校長と並んで、湖畔の路を歩いた。

中にあるやうな氣がした。

『さうだ……さうかも知れない。湖水のさびしさが、その沿革誌を書いた人の心に傳はり、それがまたさびしいおゆきの心に傳はり、更にまた、それが此身の心に傳はつて、さうして、かうして、今、このさびしい湖の畔を彷徨つてゐるのかも知れない。』

私はぢつと立盡した。俄かにある暗示が起つて來た。それは、その沿革誌の中に書いてあるその宮殿の中の美しい妃の一人のさびしい心もまたそこに雜つてゐるのではないかといふことであつた。急に私の前には、その昔の賑かであつたさまがあらはれて來た。

そこには、矢張盡きない心の紛爭、盡きない魂の戰鬪があつたであらう。美しい人の涙も、清いやさしい心も、何も顧慮さるゝことなく、縱横に踩み躙られたこともあつたであらう。恐ろしい嫉妬もあつたであらう。情の炎も燃えたであらう。欄干に凭つて、さびしく湖水に眺め入つた人もあるだらう。かう思ふと、私の眼の前には、いろいろな舞臺が――走馬燈よりも、もつと早く早く『時』といふものゝ中に陷沒して行つた無數のさまざまの舞臺が、再びそこにありありとひろげられて來るやうな氣がした。

『や、お寒う……』

突然かう傍から聲をかけたものがあつた。

して、ある不可思議なものがつゞいてゐるに相違ない。』

私は湖水の姿が、色が、氣分が益々深く私の心に絡みつき、纏はりついて來るのを感じた。ある日の夕暮であつた。私はいつものやうに、丘の方から湖水の岸へと向つて歩いて行つた。初めの中は、『沿革誌』の中に書いてあるシインや、事實や、その方に全く心を奪はれてゐたが、夕暮近く、湖の岸をとぼとぼとひとりで村の方に歸つて來る時には、もう、さうしたものからはすつかり離れて、おゆきのことばかりが私の胸に集つて來てゐた。

をりをり私は立留つて、その眼の前に浮んで來るさびしい、しかしなつかしいおゆきの姿を捉へやうとしてゐた。

やさしい眼が其處にあつた。笑つた顏がそこにあつた。かと思ふと、何か面白がつて言つてゐるやうな顏の表情がそこにあらはれて來た。しかも、いつものやうにぼんやりとしてではなく、この世にゐない人とは何うしても思はれないやうに、はつきりと――。

『不思議だ……。死んだとは思はれない……。七八年も前に、あゝして死んで行つたものとは思はれない。』

かう思ふと、次第に、その錆びたさびしい湖水が、かの女の姿のまゝであるやうな氣がして來た。かの女の悲しさも、かの女のさびしさも、またかの女の優しかつた一生も、すつかりそのさびしい湖水の

私の心は
さびしい。
湖水のやうに、
さびしい湖水のやうに。

夕日がさす、
朝日がさす――時々
私の心にも、色ある雲が通つて行く。

かうその娘が唄つてゐるやうにも私には思はれた。時には、またその唄が、さびしい湖水の上を微かに――他界のある消息が微かに人間に傳へられて行くやうに靜かに、人知れず私の耳を通過して行つてゐるやうにも思はれた。私は時にはかう自分に言つた。『でなくつては、かうして、私が此處に來るわけがない。長い間、引張られてやつて來るわけがない。だから、そこには、何か不思議なことがあるに相違ない。その不思議なものが、湖水から出て、そしてそれが沿革誌を書いた人の心ともなり、おゆきともなり、この身ともなつたに相違ない……。つまり、縦には長い年月を透し、横にはひろい場所を透

『此處は箇人の所有ですか。それとも村の所有ですか。』

『無論、村のです。』

『昔からさうでせうか。』

『さうらしいですね。それも一つ古い人に聞いて見なければなりませんけども……。』

『一つきいて見て下さい。』

二時間ほどそこにゐて、そして私達は歸つて來た。湖は靜かに秋の日に輝いてゐた。

『さうでせう! 確かにさうだつたでせう。』かう校長は何遍も何遍も繰返して言つた。

六

次第に、さびしい湖水の氣分が、私の心を壓すやうにした。私は全く氣が沈んだ。一種言ふに言はれない重苦しい懊惱を總身に感じた。湖水の銹びた姿が、色が、氣分が、そのまゝ死んだおゆきの心につゞいてゐるやうにも、また時には、その湖水から、おゆきの心を透し、沿革誌を透して、この自分の心にまでつゞいて來てゐるやうにも考へられた。隣の垣越しにきこえて來る娘の唄の中にも、その不可思議の誘惑が織り込まれてあるやうにも——。

『さうですな……地形から押して見ると、何うもさうらしい氣がしますね。』

私達はこんなことを言ひながら、臺の草藪、笹藪の中を縱橫にわけて歩いて見たりした。何か礎見たいなものでも殘つてやしないかと思つたり、または何となしに昔の址を偲ぶといふやうな感慨に滿たされたりして……。暫しあちこちを歩いてから、私は靜かにおゆきのやさしい心などを思ひながら、學校の小使の敷いて與れた筵の上に腰を下した。

暫くすると、皆なそこに集つて來て休んだ。ある一人の教員は、石とも瓦ともつかないものを持つて來て、

『これは、瓦の斷片ぢやないでせうか？』

かう言つて校長に見せた。

『さア。』

『いや、それは瓦ぢやないでせう。石でせう。』

『でも、何處か瓦のやうなところもあるぢやありませんか？』

こんなことを言つて、その石を一人々々手に取つて見た。やがてビイルの罎は明けられて、それからそれへと小さなコップに注がれて行つた。

私は校長に訊いた。

うした探討には持つて來いといふ日和であつた。私達は學校の小使に、ビイルの罎や、莚などを持つて行かせた。

成るほど、そこからは湖水が一目によく見えた。海と湖水の相交錯してゐるさまも明かなれば、此方に深く入り込んだ湖水の奥の方もそれとはつきり指さゝれた。錆びてはゐるけれども、またさびしい湖水らしい感じは、何うしても除くことは出來なかつたけれども、それでも何處か靜かな美しい、世離れた藝術的の感じがしてゐた。帆がさびしく一つ通つて行くのが見えた。

『こゝがさうだつたとすると面白いですな。宮殿の室からは、何處からでも、この湖水がはつきり見えた筈ですからな……。此處に美しい女などを置いて見ると、何だか詩か、繪のやうな氣がしますな。』

教員の一人は、こんなことを言つて、私の方を見た。

校長は校長で、

『さうだつたかも知れませんな……。何うも地形がちやんと合つてゐますからな。それに、こゝから海を眞直ぐに行けば、シベリアはすぐなんだから、貿易なども此處から盛んにやつたかも知れませんな。』かう言つて指さして、『何うも、さうらしい。これから一方はあの山の下まで、一方は湖にずつと添つて賑かな町であつたらしい。何うもさうらしい。でなくつては、かうして、ちやんと珍らしい感じが殘つてるわけはない。』

て言ふには言ふんですけど……。しかし、それだけは、まア、何うやら彼うやらわかるにしても、沿革誌はその人が書いたのではなく、その前、何の位の年代の人に由つて書かれたか、それがわからないんですのが、何うも困りますよ。』

『それは、さうですね。』

『しかし、その寫本が、此處から出たものであることだけは確かですな。曾て此處に住んでゐたものが、その事實を書き殘して置くつもりで、さうしたものをつくつて置いたものであることだけは確かですな。』

『さうですね。』

私はかう言つて、深く考へ込むやうな心持になつた。

五

その翌日は、日曜日だつたので、私は校長達と一緒に、その宮殿のあつたらしい址のところへと出懸けて行つた。

それはほんの下の方の一部が畠になつてゐるばかりで、臺と言はれたところは、あら方細い篠や、草などの繁つてゐる藪地になつてゐるのを私は目にした。幸ひにそれは、風もない暖かな好い晩秋で、さ

『そこですね？　覇王が美妃十數人を圍つて置いたといふところは？』

『え、さうです。』

『それから、町の具合は？』

『ずつと、それから此方まで、大きな町になつてゐたやうです。』

『無論、礎とか、何とかいふものはありませんな？』

『ありません。』

『さういふものがあると好いんだけど……。』

『餘程、さがさせては見ましたが、何うもありません。』

私は話頭を變へて、

『そして、あの方は何うしました。沿革誌の作者の方は？』

『矢張、わかりませんな。』

『しかし、あるところまではわかるでせう。米山姓のある一家が、百五十年乃至二百年前に江戸に行つて、大きくなつたといふことはわかるでせう？』

『何うも、それが曖昧なんです……。さういふ家はないことはないさうですけども、その時分、江戸に出て大きくなつた米山姓の家は、二軒も三軒もあるさうですから……。大抵はその分家の方だらうツ

『さうですか、それは難有い……。ひとつ、私達も本氣になつて、あちこちをきいて見ませう。』

かう誓つたのは、校長ばかりではなかつた。村のあらゆる知識階級――勿論知識階級と言つても、村長とか、分署長とか言ふものであつたけれども、兎に角、さうしたあらゆる人達がそれについては力を惜しまないといふ契約を私にした。從つて私の持つて來た十三冊の『沿革誌』はそれからそれへと、さういふ人達の手許に借りられて行つた。

校長は度々私の旅舍にやつて來た。何うも何處をきいても、さうした手懸りはないらしかつた。一番年寄の酒屋の隱居にきいて見ても、さういふことは知らないと言つた。校長は言つた。『しかし、沿革誌に書いてある地名には、昔あつて、今はない地名などもあるんですからな。何うも、虛構された事實とは思はれない……。現に、此間も、一々、實際に當てゝ見ましたが、ちやんと合ふんです。都のあつたあたりも、大抵、見當はつくんです……。』

『さうですか、つきますか……。』

かう言つて私は思はず乘出して『ちやんと、地名や、地形が合ふんですね？』

『それは合ひます……。あの本で見ると、丁度、湖水の奥に、一ところ臺のやうになつてゐるところがある。そこがその覇王の宮殿のあつたところになつてゐますが、そこは好いところです……。いかにも、さうした宮殿でも出來たやうなところです……。』

『大學の鑑定では、三四百年前のものだらうツて言ふんです。』
『その本の書かれたのがですね？』
『え、さう……』
『で、その事實についての鑑定は何うなんです？』
『それはよくわからない……。そんなことはないだらう。津輕の藩のことでも誇張して書いたんぢやないか。と、まア、かう言ふんですけれども、その前のことは、歴史にも、書類がなくてよくわからない。或はさうした大きな覇王がゐたこともないとも限らない……。それに、もう一つ有力なことには、何かの本に、G湖附近が一時、外國との貿易の中心になつたといふことが書いてあることです。だから、南北朝、もう少し前に、さういふ覇王が此處に都を開いてゐたといふことも、或は事實かも知れないとも言ふんだ……』
『大學の人がですか？』
『え。』
『それは面白いですな。』
『それで、私は、一度は是非此處に來て見たい、そしたら、いくらかは、さうしたことがわかるだらう、さう長い間思つてゐたんです。そして、今度、初めてやつて來て見たんです……。』

私は來たあくる日から、その廢墟のあとを探ることについて力を惜まなかつたことを思ひ起した。私は村の重立つた人達を訪ねた。あらゆる方面からその址の話を聞き、また、その所在を探らうと心がけた。しかし、さうした沿革については、村では誰も知つてゐるものはなかつた。その話をすると、誰も彼も、皆な不思議さうにして頭を傾けた。

『そしてそんな本があるんですか。それを貴方はお持ちなんですか。それは面白いですね……。へえ？大學の史料編纂でもそんなことを言ひましたか。へえ？　それは面白い。』

校長もかう言つて唯めづらしがるばかりであつた。

『ぢや、址ッていふものは、ちつとも殘つてゐませんな？』

『殘つてゐるとかゐないとかよりも、丸でさういふ話は、今日まで、一度だッてきいたことはないんですから。』

『誰か、老人か何かで、さういふことを知つてゐるものはないでせうか。兎に角、寫本にしろ、何にしろ、さういふことを書いた本があるんですから……。』

かう私が言ふと、

『聞いて見るには見ませうけれども、何うですかな。ゐますか、何うですかな……。そして、その寫本は、今から何年前のものといふ鑑定はついてゐるんですか？』

汚ない家ではあつたけれども、その離れのやうになつてゐる奥の一室が、丁度複雜して入り込んでゐる丘陵に面してゐて、いかにも靜かに落附いてゐられるやうな感じを私に與へたので、他に、もつと好い家が二三軒はあつたにも拘らず、兎に角私はそこに自分の荷物を置くことにした。

私はその窓の下に小さな庭のあるのを發見した。菊の花の白く夕暮の空氣の中にあらはれてゐるのを發見した。錦木の赤い實に、朝に、晝に、山から小鳥のやつて來るのを發見した。隣の桔槹がギイと音して下る度に、其處に、田舍にはめづらしい十八九の容色よしの娘が筒袖姿で水を汲んでゐるのを發見した。否、そればかりではなかつた。そこに私のゐるのを見て知つてゐながら、別に羞かしいとも何とも思はずに、頻りに鄙びた土地の唄を口にしてゐるのを發見した。

ある時私は女中に訊くと、

『え、さうだ……娘だア、あそこの……。村でも評判な容色よしだアな。』

かう女中は土地訛の言葉で、垣の外を見ながら言つた。

『本當に、好く唄つてゐる娘だよ。始終、何か唄つてゐないことはないよ。まるで小鳥か何かのやうだよ。』

『唄がうめえだで……。』

こんなことを笑ひながら言つて、そして女中は向うに行つて了つた。

『村に、米山ッていふ姓の家はあるかね？』

『米山？　あるどころぢやねえ、村の三ッ一は米山だ……。』

『はゝア……、さうかね、そんなに、米山ッていふ姓が、此處には多いかね。』

『何でも、米山ッていふえらい人が昔此處にゐたさうだで……。』

『ふむ。』

潤い、潤い、直徑にしても一里はあらうと思はれる湖水は、次第に對岸の深く入込んだ丘や、その丘の上に更に聳えた山や、谷間に靜かに沈んで行つた夕暮の雲や、Ｇの村の一部と思はれる人家などに近寄つて行つた。此處等あたりから見ると、湖の決水口、卽ち海に通じてゐるあたりが、ひろびろと一目に打渡されて、波の音が遠雷の轟きでも耳にするやうに佗しく凄じくきこえて來た。

次第に村の一部の人家が見え出して來た。わびしい低い茅葺の屋根に夕炊の煙の絡むやうに靡いてゐるのが見え出して來た。埠頭が見え出した。渡船小屋が見え出して來た。夕暮近い空氣の中に焚火の赤く燃えてゐるのが見え出して來た。

四

私はその舟の中で聞いたかど屋といふ旅舍に二週間もゐた。

私は唯笑つてゐた。

『鑛山は、何方に行くだね。龍飛（たつぴ）の方かね。』

『いや、鑛山の人ぢやないんだ、僕は。』

『おや、さうかね。鑛山へ行く衆ぢやねえんかね。それぢや、山林のお役人かえ？』

『いや、さうでもない……。』

『何だな？　それぢや……』

『唯、少し、用事があつて來たんだ……。』

かう言つた私は、つゞいて一週間、少くとも十日、殊によれば一月位此處にゐたいつもりだといふ話をして、何處か好いところがないかといふことをかれに訊いた。

『そら、あんべえよ、いくらも……。校長さんとこでも、村長さんとこでも、何處でも賴めば置いて呉れないことはあんめえ。』

『何處か靜かなところが好いんだが……。』

『靜かなところなら、何處でも靜かだんべ。かうした田舍だでな。かど屋に行つて、きいて見るが好いだ。あの爺、さういふ世話をするのがすきだで……。』

私はふと、おゆきの姓を思ひ出して、

『え、あります。』

『好い旅籠屋ですか!?』

『好いにも、わるいにも、かど屋一軒きり宿屋ツて言ふものはGにはねえだな……。』

『さうですか……そして、その家は湖水に近いですか?』

『湖水に近いこともねえだ……。二三町あるでな。』

『ぢや、そこから湖水は見えないですね?』

『見えねえな。』

私はそれきり話をやめて了つた。古い舟の艫の音が頻りにあたりに響きわたつてきこえた。

暫く經つた。

今度は向うから訊いた。

『Gに泊んのかね? 今夜?』

『さう……』

『何の用かね。鑛山の用かね?』

學校の教員ではなし、郡役所の役人ではなし、何うしても、鑛山に出入するものか何かにしか私は見られなかつたのであつた。

おゆきのことが頻りに私には思ひ出されて來てゐた。その美しい表情に富んだ眼、そのひろい利口さうな顏、ことに、私の心にぢつと海綿のやうに染み込んで行つたそのやさしい心！　G湖のその廢墟の忘れ難くなつたのは、無論私に取つて、その『沿革誌』の中の色彩の濃いロオマンスや、址や、またはそこに對する好奇心や、その他いろいろな考證癖も與つて力があつたのに相違なかつたけれども、しかもその戀しい女の悲しい追憶も、そのG湖に對する憧憬を深くしたには相違なかつた。

私は古い舟の船首のところに腰をかけて、村の男女達の何か頻りに騷ぐのを餘所に、湖上遠く微かにさし添つてゐる曇り日の夕日の影をぢつと餘念なく見詰めた。

そこには、それとなしに、おゆきの顏やら姿やらが、ぼんやり浮んで來てゐるやうにすら思はれた。

舟は靜かに蘆荻の繁つたところ、藻の一杯生えてゐるところから次第に湖の中心へと出て行つた。それにつれて、初めは竿、次ぎには櫂、それから艫といふ風に、船頭の爺は頻りにその漕ぎ方を變へて行かなければならなかつた。

思ひもかけないところから、一羽の水鳥がばたばたと飛び出して、夕日の淡い影を涵したしんとした水の上に、長い羽を曳きながら、やがて高く高く彼方に飛んで行くのが見えた。

私は私の一番近いところにゐる中年の男に訊いた。

『かど屋ツていふ旅籠屋がGにありますか？』

かうその群の一人の男が、默つて坐つてゐる爺を促した。

『うん……』

爺はかう答へたが、しかしなほ容易に立上らうともしなかつた。

また、そこに同じ扮裝の女が二人入つて來た。爺は漸く立上つた。

『もう、これつきりだんべえか――？』

『さうだな……お玉つこに、お秀つこ、』かう數へて見て、『あゝお鶴がゐねえ……。だけど、お鶴は、すぐは來めえ。また一時間もそこらで遊んでゐるべえや、屹度、なア、お定……』

『おらア知らねえよ。』

かうお定は突放すやうに言つた。

『おめえ、知つてべえがな？』

『知らねえ……。』

『まア、行くべえ……。』

かう他の一人が促した。

で、爺は立上つて、渡船小屋の陰から艫を一挺擔ぎ出して、そして皆なの先きに立つた。

女達も男達も皆な蘆の刈束を背負つて、そして舟の繋いである方へと行つた。

『馬鹿なもねえもんだ！　なア、お虎さん、なア。散々、人に見せつけて、お照つ子はまア女だて、しやうがねえが、お前は男ぢやねえか。男で、いちやついたら、奢るんが村の法だぞな。』

『馬鹿な！』

若者はいくらか顏を赧くしたやうにしてまたかう言つた。

『お照つ子、何うだ？』

女の方は却つて、づうづうしく、

『奢るともな――！』

『ハ、ハ、ハア……お照つ子の方がきついや。』

かう言つて皆なが笑つた。

そこへ、私が入つて行つたので、女も男も同じやうに口を噤んで了つた。

中折帽にトンビ、それだけでも、此處等あたりにつひぞ見かけたことのない人であるのがわかつたらしく――また何ういふ旅客で、何うしてこんな田舍までやつて來たのかを探るといふやうに、ぢつと一樣に私の顏を見た。しかし、それだけで、かれ等は何も私に言はなかつた。

暫くしてから、

『おんさん、もう、行くべえや？』

『おゆきは死にましたよ。逢ひたい、逢ひたいッて言ひづめに……』

かう言つて母親は泣いた。私は泣くにも泣かれなかつた。私は慌てゝ二階に上つて行つた。おゆきは靜かに……靜かに、死んだとは思はれないやうにして、そこにいつものやうに横になつてゐた。觸つて見た時には、體はまだ溫かかつた。『おゆき！　おい、おゆき！』かう私は體を搖つて見た。おゆきはいつものやうに、眼を明いて、笑つて返事をしさうで爲方がなかつた。

三

渡船小屋の方で、人の聲がしたので、其の方へ戻つて行くと、果して、其處に蘆を刈りに來たらしい女達や男達が頻りに何か冗談を言つて笑つてゐるのを私は認めた。

女は脚半を穿いて、手甲をはめて、てんでに長い鎌を持つてゐた。刈つて來た蘆の束ねたのが五つも六つもそこに並んでころがしてあつた。

皆な、私と一緒に、湖水をわたつて行くものらしかつた。

『おんあん、奢んなよ。』

かう上さんらしい女が傍の二十五六の岩乗な若者に向つて言つた。

『馬鹿な！』

か言ふんなら、面白いけども……。』

『駄目だな、無學な女は――！』

その時私はこんなことを言つて笑つたことを覺えてゐる。

G湖の畔にある廢都の墟が段々深く私の頭に染み込んで行つたのは、私がその本に次第に深く讀み耽つて行つたからであつた。おゆきの家の二階に通つてゐる間、私はいつもその昔の『G湖沿革誌』を私の周圍に出して置かせた。それを私は起きても讀み、寢ても讀んだ。私とおゆきとの戀心は、いつもその廢墟を思ふ心に雜り合つた。時には私が餘り熱心に讀み耽つてゐるので、

『いつまで讀んでゐるのよ。』

かう言つて、おゆきは私の手からその本を奪ひ取つたりした。

それにしても、私は何年、そのおゆきの二階に通つて行つたであらうか。やさしい靜かな、しかし明かな小さな心！　さびしい涙脆いこの世に長く存在してはゐられないやうな眼！　かう思ふと、急に、おゆきの病んで死んでいつた時の朝のことなどが思ひ出されて來た。

『何うしたの？　貴方は？』

かう言つて母親の泣いてゐる顏が私を驚かした。

『旅に行つてゐたもんだから――。』

『さうかも知れませんよ。祖父さんの代には、もう、江戸で、立派に暮してゐたんですけども、何でも、元は、津輕の方の出だッて言ひますから――』

『兎に角、それに相違ないだらうな……。おまへの先祖の六代だか七代だか前の人に、そこに、そのG湖附近に住んでゐた人があつて、その人が、丹念に、その土地をかうして書いて置いたに相違ないだらうな……。兎に角、面白い本だよ。かういふ本は、個人で藏つて置くよりも、大學とか、然るべき圖書館とかに寄附して置く方が好いんだがな……。事實か、何うか、わからないけれど、めづらしいことが書いてあるよ。』

『何んなこと？』

『その田舍の湖水の畔に、東京のやうな賑かな都會があつたなんて……。』

『それは本當なの？』

『それは何うだかわからないけれど――とにかく面白いことだからな。』

『金にはならないの？』

おゆきはまた笑ひながら訊いた。

『金にやならんね……。しかし、金よりももつと貴いもんだよ。』

『金にならなくつちや、つまらない。いくら貴いもんでも、いつまで取つて置けば金になるとか何と

の人が暇に任せて書いて置いたものだ位に思つた。しかし讀んで行く中に私は段々心を惹かれた。果して G 湖の附近にかうした古い沿革があるのかと思つた。あるなら、こんな面白いことはないと思つた。

『面白い本だな。どうしたんだ、一體、この本は？』

『昔から、家にあるんです……。これだけは寶物だから、無くさずに藏つて置かなければいけないッて言つて、代々箱に入れて持ち傳へて來たんです。』

『ぢや、お前の祖父さんとか、曾祖父さんが拵へて置いたのか？』

『祖父さんとか、曾祖父さんとか言ふよりも、もつと、もつと前からあつたんです。何でも六七代、もつと前から、寶物として傳へられて來てゐるんです……。價値のあるもの？』

かう言つておゆきは眼に美しい表情を湛へて訊いた。

『價値があるとか、ないとか言ふよりも、面白いもんだね。』

『さう。』

かう言つたが、また笑つて、『ぢや、矢張、寶物にして取つて置く方が好いのね。』

『それはさうだね……。』

私は一歩を進めて、

『それにしても、お前の家は、もと、そのG湖の近所に住んでゐたのかね？』

今はかうしたさびしい湖の畔であるのに拘らず、そこには嘗てある帝王の覇業が營まれたといふのである。正史にこそ書いてはないけれども、その湖水の海に通じたところは、外國の貿易港として、內地の船も外國の船舶も、一杯にそこに滿されてあつたといふのである。否、そればかりではなかつた、そのある帝王の覇業は、かなりにひろくその威を振つて、一時はその附近十餘箇國をその支配の下に置くことが出來たといふことである。

しかしさういふことを私は最初何處から知つたかと言ふのに、それは『G湖沿革誌』といふものを、あるところで私が見たからであつた。勿論、それは寫本で册數は十三册あつた。ところどころに拙い挿畫なども入つてゐた。

ある時それを私に出して見せたのは、おゆきといふ二十四五の眉の美しい女であつた。

『こんな本が、昔から、私の家にあるんですが、何かにならないでせうか？　貴方なら、かういふものの本當のこともわかるだらうと思ふんですが――。』

そのおゆきはかう言つて私に見せた。

私は何の氣なしに、唯、手に取つて見た。最初は唯、單純な鄕土誌位に思つた。その土地に住んだ昔

私は湖の周圍をぐるりと繞つてゐる低い山巒を目にした。その山巒にところどころに鼠色の雲が靡いて下りてゐるのを目にした。潟湖の特色とも言ふべき海の決水口の方には、曇つた空の間から、落日のさびしい光線が微かに洩れて、それがわびしく湖の半面を染めてゐるのを私は目にした。

馭者の言つた通り、少し行くと、果してそこに小さな渡船小屋があつた。爺さんが一人さびしくそこに坐つてゐた。

『Gへは、此處から渡つて行くんだね？』

『さうだ……。』

かう言つたきり、あとは何も言はなかつた。船はもう出るか、それともまだ間があるか――それを訊いても、更に要領を得ないので、爲方がなしに、私はまたそこから出て來た。

あたりには、蘆荻が一面に連つてゐた。そしてその白い花の上には、夕風が微かに渡つてゐた。そこには藻もあれば、水草もある。澤瀉のやうな綠の葉を重ねたやうなものもある。そしてそこには、黑いと言つて好いか、それとも鐵色と言つて好いかわからない水が、初めは微かに夕日を涵し、段々遠くなるに從つて、次第に鼠色になつて行つてゐるのを私は見た。Gの村は、丘のかげにでもなつてゐると見えて、そこからは何等の面影も見えなかつた。

な都でなくつても、殿樣か誰かゞゐて、外國との取引をしたとか何とかいふことが――。』
『知らねえな。』
『さうかねえ。』
爲方なしに、私はその話を切つて了つた。更に話題をかへて、
『でも、Gといふところは、町にはなつてるんだね？』
『なつてるもんかな、町などに……。村も村も、ひどい村だァ。』
『産物は？』
『米は少しは出來るがな。濕地で、質がわるいなァ。G米ツてな、此處等でも、評判のわるい米だ。』
『魚類は？』
『わかさぎが少し獲れるなァ。鯉も、鮒も、鰻もあるにはあるが、そんなに好くはねえ。』
兎に角、それでも、そこでG湖に對する多少の知識を得たことを私は思ひ起した。私はまたそこから七八里歩いた。そして、ある立場から、再び身を乘合馬車に託して、夕暮近くやうやく此處にやつて來た。
馬車を下りて、そして村外れまで歩いて來ると、漸くそのさびしい、錆色をした湖水があらはれ出して來た。

長い辛い思ひのまゝにならない生活を送つて來た。

漸くにしてその時が來た。一月をそのG湖の畔に過しても差支ないやうな時はやつて來た。私はあらゆるものを捨てゝやつて來たことを思ひ起した。長い、長い、退屈する汽車を私は乘つて來た。そしてその汽車の果てたところから、また長い長い路を、乘合馬車に搖られながらやつて來たことを私は思ひ起した。

一夜はさびしい田舍に寢た。その旅舍の主人は話した。

『さうですな……。好い宿屋なんかありませんな。何しろ、さびしいところですからな。此處等よりは、もつとぐつとひどいところですから。』

『でも、昔は榮えたところだツて言ふぢやないか。』

『昔つて、いつのこんだんべえ？　ついそんな話はきいたことがねえが――。』

『古いことかも知れないけれども、G湖の海の入口は、大きな港だつていふぢやないか。そして、此方には、大きな王樣の都會か何かゞあつて、湖水が外國の船や何かで一杯になつたことがあるツていふぢやないか。』

『そんな話はきかねえな――。』

『さうかねえ……。知らないかね……』私は考へて、『しかし、それに似た話はないかね。そんな大き

一つの空想

一

その日は曇つてゐたからでもあらうけれど、前に展げられたG湖の姿は、何とも言はれないさびしさに私の心を誘つた。私の心はそのまゝ暗い淵にでも引込まれるやうな氣がした。

長い間の憧憬、さまざまに想像した湖の姿、それにさしわたつた朝日夕日、私は十年に近い年月の間、何んなにその湖水に對して空想を逞うしたか知れなかつた。私は夢にも見た。幻影にも見た。ある時などは、現に歴々とその湖水の姿を眼の前に浮べた。否、私は何遍その湖の畔に立つて、ロマンチックな物語の想像に耽つてゐる私の姿を頭に描いたか知れなかつた。

『一生の中には何うかして一度は行つて見よう。假令、何んなに忙しい世の中であつても、また假令何んなに貧しい、生活に追はれるやうな自分の身であつても……。そしてそこに半月なり一月なり滯在して仔細にその址を探つて見よう。さうしたならば、屹度、面白いことがあるに相違ない。』かう思つて

の一間、さういふところでぱつたり逢つたら、何ういふ氣がするだらう。ツルゲネフのやうに、これもひろい人生の一斷面だといふ風に考へて哲學的にすましてゐられるだらうか。私にはさうは考へられない。では、世間の多くの第三者の人達のやうに、冷かに笑つてそれを通り過ぎて了ふであらうか。それは猶更私には出來ない。私の今の考では、Kの細君から、口づからその重荷の苦痛であつたことを聞いて、そしてその祕密の苦惱を救つてやりたいやうな氣がした。

不可思議の中に咲いた白い花、その花が白いがために、闇は全く深くなるのではないか。祕密の花園であるがために、そこに地獄の暗い影がさして來るのではないか。運命だ！　などと言つて、淺く片附けて了つてゐられるだらうか。

Sには、私はもう二度と逢はうとは思はない。しかしKの細君には、一生の中には、一度逢つて、そしてその重荷を卸してやりたいと心から思つてゐる……。

から私は絕叫した。

私は深い深い溜息をついた。人間の心の奧の祕密が地獄の繪を私に思はせた。暗い暗い心持がした。私は順序として更に、KとSと細君との間に起つた悲劇、それがKが死んだ後、今度はSと細君に移つて行つたさま、地獄の劫火の中を二人して翔けて行かなければならなくなつたさま、それが或は今日までその苦痛と歡樂とがつゞいてゐるさま、更に深く、墓の中のKにまでそれが動いて行つてゐるさま、更にそれが私と私の友達の心に生返つて來てゐるさまなどを私は想像した。私は深い心の顫動を覺えずにはゐられなかつた。

そしてその暗い地獄の繪卷の中に、一段際立つて私の眼に映つて見えるのは、さうしたあらゆる罪業の祕密を深くその小さな胸の中に押し包んで、その一生を劫火の中に過して行く美しいその細君の姿であつた。平生かの女のさしてゐた白い薔薇の簪はその暗い闇の中に微かに見えた。

十

Kの細君には、私はつひぞ出會したことはなかつたけれど、苟くも生きてゐる以上、または東京に現にゐるといふ以上、何處かでぱつたり出逢はないとも限らなかつた。

私はその場合を想像した。或は人込の雜沓した町の四辻、或は電車の中、または賑かな大きな吳服屋、

『さうだ！　それに相違ない！』
かう私は心に叫んだ。
それ以來、そのわからない日記が次第に私にはわかつて來た。Sの來た日の欄外には、さうした符徴が殊に多かつた。また細君の外出して行つた日には、ハアトの形の千變萬化などが書かれてあつた。それに、點が二つ打ち三つ打つてあるところが處々にあつた。それは何か深い事實を心覺えに記して置いたものに相違なかつた。
そして、かうした符徴は、最初の一册には少しもなかつた。二册目も僅かにその終りの方から、少しづゝ、火の燃えた形だの、眼だの、鼻だのが書いてあつたが、それが、三册目、卽ちKが死ぬ年の一册になると、到るところに一面に書いてあつて、？の印を打つたものも非常に多い。ドイツ語とも英語ともわからないやうなものも澤山に書いてある。
私は人間の心の奧にかくれた暗い心理の混亂した形をまざまざと眼の前に展いて見せられたやうな氣がせずにはゐられなかつた。そこにはあらゆる祕密の苦痛、快樂の苦痛、捉へられたものゝ苦痛、熱湯を呑ませられたものゝ苦痛、または氷の上に一夜坐つてゐるものゝ苦痛などがすつかり一つの繪になつてあらはれて來た。
『たしかにさうだ……それに相違ない……Kの死は、病死ではなくつて、確かに自殺であつたのだ。

なかつた。

私は初めは日附を詳しく調べた。また、友人の訪問に注意した。その度數に注意した。細君のこともちよいちよい書いてあるが、それも極く簡單で、Y子外出などゝ書いてあるばかりであるが、それにも注意の眼を向けた。

初めは氣が附かなかつたのであるが、單なるいたづら書きと思つて見捨てゝ置いたものであるが、日記の欄外またはその周圍に、いろいろなものが書いてあるのに私は段々注意して行つた。

△が書いてあつたり、×が書いてあつたりした。そしてその符徵に、圈點が打つてあつたりした。火の燃えた形を書いたもの、横線を細かく網のやうに書いてあるもの、菫の花の形をしたものがぽつつり一つ書いてある頁、または眼が二つ大きく書いてある頁、段々見て行く中に私ははつと思つた。これだと思つた。このいたづら書き、または符徵、火、花、さういふものに、かれはその苦惱の形を書き留めて置いたのではないか。或は女の心のあらはれ、祕密のあらはれ、其時々の苦悶の形、それをかれはこの象形であらはしてゐるのではないか。

何のために？　自己に取つても、深い祕密があるがために。日記とは言ひながら、猶それも人に見られる恐れがあるがために。またはその伴侶である細君にも見られないために……。更に進んでは、死後も人に判じられないために……。

た。その包の中に、Kの日記、――日記と言つても、小さなポケット用のものに、唯、その日その日の用事しか書いてないやうなものであつたが、それでもそれが入つてゐるのが不思議であつた。それを送つて來た男の手紙には、『これでは、別に何もわからないが、兎に角送つて見る。』と書いてあつた。

私は仔細にその日記を調べ始めた。

そこに記されてあるのは、死ぬ四年前のものが一册、二年前のものが一册、死ぬ年の月の前々月まで書いてあるのが一册、これだけしかなかつた。それに、送つて來たものも言つてゐるやうに、成ほどちよつと見ては、何の參考にもならず、平々凡々なものであつたが、それでも、私はこれを手にしたことを喜んだ。

何が書いてなくとも、兎に角、Kが死ぬ二月前まで、これを座右に置いたといふこと丶、その小さい日記にかれの手が觸れたり心が觸れたりしたといふことが、私には意味があつた。Sに私がぢかに逢つて見てそこから得たと同じやうな生きた材料を與へられるに相違ないと思つた。私は何遍もそれをくり返して讀んで見た。

しかし、日記の表面にあらはれたところでは、Kの死因に就いてすぐれた材料になるやうなものは何もなかつた。『――日、晴、S來る。』『――日、曇、九段に行く。』など丶書いてあるばかりであつた。Sのやつて來たことなども度々その中には見えてゐたが、何等詳しい內部の爭鬪はそこから探ることは出來

また、つゞいて、さうした祕密の重荷を一生負つて、離れようとしても離れることが出來ず、卽かうとしても卽くことの出來ない暗い戀の二人の苦しみを想像せずにはゐられなかつた。その地獄の苦しみと歡樂とが私にある怪奇なロマンチックな繪を展げて見せた。

その會の間、私はつとめてSから眼を放さなかつた。そのいやに靑白い皮膚、何處かに影を帶びたやうな表情、Kの血が女を通じてそこに入つてゐる肉體、果して私は豫想した通り、當事者は竟にその持つた罪惡をかくすことが出來ないことを思はずにはゐられなかつた。私はわざ〳〵此處にやつて來てSに逢つたことを喜んだ。私は私の空想の單に空想でないことをそれとなく意識した。

Sが私に對して、始めは疎々しく、中頃は傲慢に、最後は媚びるやうな形を呈して來たのも、私に、私の想像の誤つてゐないことを思はせた。

Sは寄つて來て、

『舊交を溫めませうぢやありませんか。』

かう言つて私に盃をさしたりした。

九

それから二三日經つて、いつか一緖に話した男から、小さな包が屆いたのも不思議な念を私に起させ

要領を得ないSの答であつた。

私は更に一歩突込んで、

『子供は何うしたえ?』

ぢつとSの顏を私は見た。

Sは伏目になつて、『何うしたかな。』

『もう大きくなつた筈だな。十三四になるな、もう。』

『さう。』

Sは成るたけそれを避けるやうにした。私はその態度に、ある大きな研究の材料を得たやうな氣がした。事に依ると、この男は何處かで、また何等かの方法で、Kの細君と關係をつゞけてゐるかも知れないと私は思つた。或はその關係を切ることの出來ないために、今も獨身で、表面には常に情婦を澤山に持つてゐるやうな顏をしてゐるのかも知れない。またKの細君にしても、矢張その關係を絕つことが出來ないがために、かくさないで好い身をかくしたり、時には田舍に行つたり、東京に來たりしてゐるのかも知れない。また、さうであるがために、十二年經つた今日、Kの死因までが私や私の友達の心に偶然に蘇つて來るのかも知れない。かう思ふと、私は一種の暗い不可思議の念の總身に簇つて來るのを避けることが出來なかつた。

私は單刀直入的に、

『それにしても、Kの細君は何うしたね。君なら知つてるだらう?』

かう言つて、私はぢつとSの顏に深く見入つた。

Sは、『君なら』がちよつと氣がゝりになつたといふ風で、『僕だつて、よくは知らんがね……』言ひかけて、私の顏を見て、『何うして?　何か必要でもあるのかえ?』

『別に、必要ツていふこともないけども、どうしたかと思つて。』

『東京にゐるにはゐるね、屹度。』

『ゐるかえ?』

『ゐるな、屹度、……誰れかゞ逢つたツて言つてゐた。』

『誰が……』

『Mだか、Hだか忘れたが、此間、そんなことをちよつときいたツけ。』

『何うしてゐるね。』

『それまでは知らない。』

『まだ、一人でゐるのかしら。』

『さア。』

私はまたしても、ぢつとSの笑つた顏に見入つた。

しかし、お互に知り合つた同士である私とSとは、いつまでもさうした狀態をつゞけて行くことは出來なかつた。膳に向ふ時か何かに、Sは私の近くにゐたのを機會に、

『ヤア。』

と言つて、初めて氣がついたやうに聲をかけて、『君も來てたんですか。ちつとも知らなかつた。Y君が來てゐようとは思はないからね。めづらしいね。何うした風の吹き廻しかといふ譯だね。』

こんなことを言つて笑つた。

私はちよつと挨拶したばかりで、別に何も言はずにゐると、

『本當になつかしいね、もう、何年逢はないか知れないね。』

『家にばかりひつこんでゐるからね。』

かう私は言つたが、研究する氣で『いつも若いね。』

『いやもう、年を取つちやつてね。』

『でも、まだ一人や二人は始終伴れてゐるツて言ふぢやないか。』

『いや――』

別に大した反應もなかつた。

よつとした單衣を着たSがステッキを振りながら入つて來るのを私は一番先きに目につけた。

『やー』

『遲いな、いつも早いのに、何うしたのかと思つた。』

など丶言ふ聲がきこえた。

Sの眼は、逸早く、そこにやつて來た時から、私の來てゐるのをちやんと見て居りながら、わざと私とは離れたところに座を取つて、相變らず元氣な調子で、歌人のFや小說家のRを相手に、頻りに何か面白さうに話し始めた。

私は流石に年を取つたかれを見た。まだ、髮は艶々と濃く撫でられてゐるけれども、顏や肌の皮膚に何處となく影が出來て、色男も年を取つたなと思はせずには置かなかつた。しかし、調子は元氣で、笑顏や話し振りは、多く以前と變らなかつた。私はをりをり其方の方を見た。

私は正面からよりも却つて側面からそれを觀察するのを便利とした。Kの死因をSと細君とに歸して考へた私の眼は、普通と違つて、銳利に且つ敏捷に、その外面の皮膚よりは一步奧へ入つて行くことが出來るやうな氣がして、好奇心が強く私の心に張り詰めた。書いたものにもまたはあらゆる材料にも、その事は湮滅して殘つてゐないけれども、また久しく年を經て了つてゐるけれども、尠くともその當事者であつたかれの體には、血には、まだそれがはつきり殘つてゐなければならないと私は思つた。

た。午後の日は明るく濠を照した。

Ｋの死んだ郊外の家も、まだ依然として殘つてゐた。勿論、その時分は周圍は廣い草場であつたが、その草場はすつかり家屋になつて了つてはゐたが、それでも、ぢきその所在を發見することが出來た。私の眼には、Ｋの死んだ室、棺、大勢集つた友人達、悲哀に暮れた細君の顏などが見えた。

しかし、この一日の探訪も、私に何の材料をも與へて呉れなかつた。日が暮れてから、勞れて、餓ゑて、そして私は家の方へと戻つて來た。

八

ある日は、Ｓが出席するといふある會に私はわざ〳〵出かけて行つた。

それは私達の仲間や若い畫家などの多く集るところであつたが、私は度々その知らせの端書を貰ひながら、つひに出かけて行つて見たことがなかつた。その日は、その會は郊外のある小さな料理店で開かれた。

私の行つた時には、Ｓはまだやつて來てゐなかつた。しかも、私の出席をめづらしがつて、仲間の人達は、何の彼のと言つて、私の周圍に集つて來た。文壇に新しい機運が動いて來てゐる話などが大分はずんで、Ｎの大きな笑聲やＯの眞面目くさつた物語などが其處此處で始まる時分、セルの袴をつけて、ち

一番先きにKと初めて知つた芝公園の家のところに行つて見た。しかし、そこにはもうその小さな家の代りに、大きな石の門のある邸が建てられてあつて、その時分の面影はあたりの樹木にすら發見することが出來なくなつてゐた。よくかれとビイルなどを飮んだ公園の小料理屋は依然として元のまゝであつたけれども、その周圍はひらけて、外にもさうしたレストランが澤山に出來て、夏の乾いた路がいやに白ちやけて見えて私の心を悲しくした。Kの詩集にある短かい公園の詩のやうな感じは、もう何處にも發見することは出來なかつた。

Kが三度目位に住んだ麴町の土手に添つた小さな家屋は、それでも依然として元のまゝであつた。其時分、その前に、外國人夫妻が住んでゐて、よくピアノを夕暮に鳴らした。と、そのメロディが何とも言はれず悲しく淋しいと言つて、かれは延びた詩人らしい髮を右の手に擧げるやうにしたが、そこから出て、靜かに土手の方へぶらりぶらり歩いて行くKの姿がはつきりと私の眼に映つて見えた。その時分から、旣にかれは戀に惱みつゝあつたに相違なかつた。如何ともすべからざる苦艱に悶えつゝあつたのであつた。美しい細君の顏、細い華奢な指、男の心を一刻も引かずにゐられないやうな眼、さうしたものを持つたKは、第三者にだけ羨まれて、內部は死にまで到達する恐ろしい種子の芽の發して來るのに苦しんでゐたのであつた。私は昔のまゝの低い軒に、しのぶや風鈴などが下つて、貧しい家族が住んでゐるらしいのをやゝ暫らく眺めて、それから、曾てKと歩いたと同じやうにして、土手の方へ行つて見

が無限に芽を持つて發生しようとしてゐるのを感じた。そしてその力は非常に强く且つ熾んであつた。何處にも其處にも、種子の發芽しかけてゐるのを私は感じた。唯、幸ひなことにはその種子の發芽をさまたげてゐるある力、でなければ、その種子が芽を發するまでに力を得て來る以前に、卽いたものが離れ、離れたものが卽いて了ふために、多くは形を成すに至らずして雲散霧消して了つて行つてゐるのを私はまざ〳〵と眼の前に見た。私はいよ〳〵不思議な氣がした。

『此頃、何うかしてゐますね、貴方は――。』

かうある時妻は言つた。

『何故?』

『だつて、變ですよ。いやに考へ込んでゐるぢやありませんか。』

『うん、ちよつと硏究してゐることがあるからね。』

『何うも變ですよ。餘り深く考へない方が好ゥ御座んすよ。』

『うむ。』

かう言つたけれど、私は容易にその不思議の硏究をやめようとはしなかつた。ある日は急に思ひ立つて、私がKについて知つてゐる土地、住居、または一緒に步いたところや、レストランや、さういふものをもう一度訪ねて見る氣になつて出かけた。

度あつたに相違ないが、細君が皆な何うかしちやつたんですね。燒いて了ふか埋めて了ふかしちやつたんですね。持つてゐるにしても、一生背負揚か何かの中に入れて、人知れず持つてゐるといふ譯ですね。』

こんな話をしながら、私達は長い都會の路を歩いた。

七

誰もゐない深夜の火鉢の火の中に細君がその祕密の手紙や何かを放り込んでゐるさまがはつきりと私の眼に映つて見えた。と思ふと、今度は人知れず、裏の林の中に小さな鋤を持つて行つて、土を掘つて、周圍に誰もゐないのを見廻して、袂から一束の文がらを出して、それを埋めてゐるさまが、現に私がそれを物蔭にかくれてゐて、一々見てゐるやうにはつきりと想像された。Kの死因に對する私の暗中摸索は愈々興味を深めて行つた。

ある夜は、その埋めた林の中に行つて、自分でその文がらを掘り當てゝ、寶でも得たやうに喜んでゐる夢から覺めた。そして夢であつたと言ふことに氣が附いた時には、非常に私は落膽した。

讀んでゐる小說の中などにも、私はKとKの細君とSとをよく發見した。そしてその發見の度毎にその暗中摸索が次第に明るくなつて來るのを感じた。否、そればかりではなかつた。私の周圍に動いてゐる女、または男、または家庭、さういふものゝ中にも、Kの死因乃至その死因を釀成して來る細かい種子

『いや、此間Gが話してゐたが、何でもゐるにはゐるらしいよ。日本橋近所の電車の中で、ちよつと見かけたといふことだよ。勿論、口をきいた譯ぢやないさうだけれど、確かにKの細君に相違なかつたと言つてゐたよ。ゐるにはゐるらしいね。』

『さうかな……兎に角、不思議に、Kの死因が氣にかゝつて爲方がないんだ……。Kが墓の中から何等かの要求を我々に向つてしてゐるやうな氣がして爲方がないんだ……。あの當時、書いて置いたものとか何とかなかつたものかな。』

『さア？』

と言つたが、『さア、あんまり神經過敏にはならない方が好いよ。それよりも、旅にでも出かけ給へな。』

『それも、さうだがね。もう少し深く研究して見るのも、我々の爲事の一つには相違ないのだからね。』かう言つて、私は考へて、『しかし、不思議だよ。十二年も經つてから、さうしたことが僕の心の中に生き返つて來るといふことは――。』

『いや、僕は二三年前、大分それで考へさせられた……。肉體は滅びても、精神はいつでも我々と一緒にゐるなどといふことを考へさせられたよ。その時にも、僕も君のやうに、何か書いたものでもないかしらんと思つて、あちこちさがしたけれど、誰も持つてゐなかつた。……僕の考では、書いたものが屹

『それはさうだね……。今ぢや、Sには別に女があるんだね。』
『それはあるさ……。あいつはいつでも一人や二人女を持つてゐないことのないやうな男だから。』
私は暫く默つた。
『逢ふことがあるかえ？ Sに？』
『つい、此間も逢つた。』
『もう、あの色男も、隨分年を取つたらうね。』
『それでもまだ若いですよ、五つや六つは何うしても若く見える。』
『何んな調子だえ？』
『いつも同じだよ。』
私は私などの持つた戀愛の世界とは丸で別な世界を持つたSやKの細君や、または多くの世間の男女達のことを思つた。さうした人達は、多くは祕密の世界に住んでゐる。薄青いヹィルで包んだ祕密の中から出て來て、そしてまたその祕密の中に入つて行く。永久に祕密から祕密へとそのやつたことを巧みに埋めて行くことがかれ等の爲事である。そしてその祕密の重荷を負つてゐることの辛いことは思はない。
やがて再び私は訊いた。
『Kの細君は、それぢや、今でも東京にゐないのかね？』

生きてゐたといふことだが、そつちの方にも、大分いろいろなことがあつたらしいね。』

『さうかね。』

私は深く考へずには居られなかつた。すぐ言葉をついで、

『Sは何うしたね。』

『相變らず不遇ですよ。』

『矢張、きまつた細君もまだ持たないかね？』

『あの男は、一生あれで通すんでせう。その方が便利ですからな。』

かう言つてその男は笑つた。

『あのSが、あのKの死因に大きな關係を持つてゐやしないかと、僕は此頃疑ひ出してゐるんだが、君は何う思ふね？』

『あつたかも知れないね。』

『Sがその後、Kの細君の處に出入したやうな形跡はなかつたかしら？』

『あつたかも知れないが、何しろ、僕はあまり近しくしてゐなかつたし、その後は細君の行方もわからなくなつたといふ形だから、詳しくは知らんが、或はSは暫くの間入り込んでゐたかも知れないよ。そんなことや何かで、細君、身をかくしたのかも知れないから。』

この男も私やSと同じく、Kの家によく訪問して行つた一人であつた。しかし、矢張、私位の交際で、さう深くKの家庭まで入つて知つてはゐなかつたけれど……。

二人きりになつた時、近頃さういふ風にKのことが考へられて爲方がないといふ話をすると、『それは不思議だ……。僕も二三年前ちよつとさういふことを考へて、先生の墓に行つて見たことがあつた。』

かうその男は言つて、凝と私の顏を見て、『何うも不思議だ……』私はその時分二月三月考へましたよ。矢張、精神的に氣分が立つてゐる時でしたがね。さうですか、君も墓へ行つたんですか。何だか因縁話見たいで氣味がわるいな。』

『そして、あの細君は何うしたね？』

『私も、その時、さう思つて、その想像を裏附けるには、現在の細君の生活狀態を知るのが一番好いと思つて、あちこちきいて見たんですよ。』

『何うしてゞす？』

『ところがわからないんです。Kが死んだ後、暫くはその里の近くに住んでゐたことは知つてゐますが、私がさがした頃には、そこにもゐず、その里さへ何處へ行つたかわからなくなつて了つてゐました。何でも其頃は東京にもゐなかつたらしいですよ。私達にはわからないけれど、何でもあのKの前の戀人であつた、つまりKがそこから奪つて來た幼馴染の男が、Kの死んだ二三年後位まで肺病でゐながら

Kもまたかうしたことを痛感したのではないか。戀の苦惱以上に、その異性の秘密に虐げられたのではないか。そして突如として自から自分を殺したのではないか。Kはその前々日までは平生に變るところはなかつたといふ。莞爾してゐたといふ。笑つて話をしてゐたといふ。かれは尠くとも表面と裏面との間隔をその時深く考へたに相違ないのであつた。

しかし、それをすつかりひつくりかへして、自殺でなしに、他殺として考へて見ることも出來る。ゾラの書いた"Thérèse Raquin"のやうに……。さういふ罪惡もあり得ないとは言へない。また、さう考へて見ると、一層その想像が怪奇になつて面白くロマンチックになつて來る。いよいよ探偵小説でもよんでゐるやうな氣がする。あの若いやさしい女が、その持つた男のために夫に毒をひそかにすゝめる。そして、その毒をかの女にわたした男はSでなくて、藥劑師か何かで、檢死が來ても知れずにすませるやうな術を知つてゐて、そして世間と、法律を巧みにくゞつて來たとする。卽ち"Thérèse Raquin"そのままの苦惱を二人は受ける……。こゝまで考へて來て、私は餘りに深く想像に耽りすぎることを思つて引返した。

六

その後暫くしてから私はHといふ仲間に逢つた。

られた。そしてそれを知つてゐるものは、Sでもなく、Kでもなく、唯それを生んだ女性であるといふことを考へた時には、その女性が、即ちKの細君が、何ういふ氣持でその秘密の鍵を死にまでその胸に抱いて行くであらうと思つて一種不思議な心持がした。何故なら、それはとても男性にはわからぬことであるからである。理解することが出來ない境であるからである。

細君は果してそれを辛いと思つてゐるだらうか。自分の子の本當の父親といふことを一生その愛する子にかくして置くのについて、何の懊惱をも感じないであらうか。またその懊惱を感ずるにしてもそれは男の秘密を抱いた心の種類の懊惱であるであらうか。男性は懺悔また自白をよくやる。その苦惱を末の末まで持つてゐられないやうなところがある。ところが、女にはそれがない。あつても自發的に懺悔するといふことは先づ少ない。かう思つて來ると、女はそれを抱いて生きてゐられるだけ強いとも言はれるし、又、それほど強く感じないからさうして抱いて持つてゐられるのだとも言へる。世間に知れてその罰を公然と受けて、あとを生れ返らうとするよりは、矢張つゝめるものはつゝんだまゝ持つてゐる方が女には好いらしい。その秘密なところは、私にある心の暗さを思はせた。ストリンドベルヒの女性觀など思ひ出されて來た。

そして私はその秘密が、欺騙が、總ての女に、私の妻にも、私の愛した女にも、または肉身を分けた私の娘にも、同じくあるのだといふことを考へて、一層暗い心の影の身に迫つて來るのを覺えた。

これと言ふのも、その好奇の種子が私の心にも十分に育てられてあつたからであらう。一々自分の身に思ひ當つて來るやうな追憶が多かつた爲めであらう。私はまたしても、Kの死因に引張られて行つた。

それに表面の穩かな世間に、さうした深い暗い事實と心とがあるのが私にいろいろな想像を誘つた。私はもう世の中といふことは男と女の中といふことだと信ずるやうな年齢に達してゐた。何處に行つても、それぱかりである。世間の表面から一歩入ると、皆なそれである。靜かな落附いた顏をしてゐる男にも、またはやさしい蟲も殺さないやうな表情をしてゐる女にも、一歩入ると、その暗い深い心の悲喜劇が藏されてあるのである。從つて人間は、皆な世間を、親兄弟を、友人をあざむいて暮してゐると言つても好いのである。

私はひとり手に溜息の出て來るのを覺えた。

そしてこの裏面は、表面にあらはれてゐないがために、いかに細かい觀察と洞察とを以てしても、表面のやうにはつきりと明白に具體的に知ることが出來ない。そしてその知ることが出來ないといふことが、祕密が、人間の本性の好奇心をそゝるといふやうな形がある。從つて裏面の歡樂と悲哀とにまで到達しなければ、人間は本當の壁に打突かつたといふやうな氣がしない。淺猿しいことである。しかし何うも爲方がない。

Kの遺兒がKのであるか、それともSのであるかといふ疑問は、かなりに強く私の胸に繰返して考へ

詣でたものは誰であらうか。あの細君ではなかつたか。さうした苦惱を甞めさせた男の墓前にひそかに花を供へる女の悲哀、その悲哀はあの細君にも必ず一生附纏はつてゐるに相違ないのである。私は心の世界の不可思議を深く感ぜずにはゐられなかつた。私は長い間そこにゐてそして出て來た。

五

時にはしかし飜つて考へた。こんなことを考へて見たところで爲方がない。そのKの死因を今になつて調べて見たところで、それが何うにもなる譯ではない。もし果して自分の想像通りに、Sと細君とKとこの三つの關係が、あの突然のKの死をひき起したとすれば、細君とSとは、既に人知れずに十分にその苦惱を甞めてゐる筈である。自然の報酬を得てゐる筈である。そのKの死があつたために長い間結んで解けなかつたSと細君との交情も破壞されて行つてゐる筈である。とても、Kの生きてゐた時のやうに、二つの心は張り詰めてゐることは出來ないにきまつてゐる。

かう思つて、私は何遍となく、そのKの死因から離れて了はうと思つた。そんなことは世間に澤山にあることだと思つて、忘れて了はうとした。しかし、またしても、そのKの死因は私の體の中に頭を擡げて來た。何のことはない。讀み始めた怪奇な小説を終まで讀まずにはゐられないやうに、またはそれが自分のある意義ある爲事でもあるかのやうに――。

發見するために此路を入つて行つたに相違なかつた。果してそこにかれの妻はゐたであらうか。またSはゐたであらうか。ちやんと現場を見つけても、愛した妻と別れることがいやさに、それをじつと餘所から見てゐはしなかつたであらうか。こんなことを思ひながら、私はその小路の奥深く入つて行つて見た。

少し行くと、芝生の美しい廣場があつて、そんなことがあらうとは夢にも知らない青年達が頻りにボウルを投げてゐた。

私はかれの墓が此處からさう大して遠くないのを知つてゐた。で、ふと行つて見る氣になつて、森を横ぎり、それから田舍路の日影にきらきらするところを通り、川にかけた橋をわたり、坂を上つてそしてその廣い墓地に行つた。

私は會葬した時やつて來たきりで、つひぞ一度も其後は詣でたことはないので、ちよつと墓がわからなくつて困つた。似たやうな路がそこにも此處にもあつた。此路に相違ないと思つて入つて行つて見ても、それはさうではなかつた。

しかし遂に私はKの墓を發見した。四目垣はもう舊く、其處に栽ゑた楓は繁つて、夏の日が美しくそれに照つた。ふと見ると、新しく詣でたものがあつたと見えて、樒の新しいのが墓前に一杯にさしてあつた。

私は戰慄した。

また私は私の無邪氣とぼんやりした形とを僞れまずにゐられなかつた。私はある日は、Mの停車場で下りて、そのKが『苦しい』と言つて躊躇んだところへとわざわざ行つて見る氣になつた。それほど今になつてKの苦惱が私に傳つて來た。

それは晴れた初夏の日であつた。その時分から比べると、東京の郊外はすつかりひらけて、Mの停車場も、もうその時分のやうに小さくなく、前には運送店や、飮食店などが並んで、郊外に出かけて行く若い家族の人達が歩いて行つたりしてゐた。車や人がぞろぞろ通つた。

畠であつたところは、もうすつかり人家になつてゐた。そして細い路が縱横にその人家の間を縫つた。私は容易にそのKの躊躇んだところを見出すことが出來なかつた。私は彼方に行きまた此方に來た。しかし暫くして、私は大抵こゝあたりと覺しきところに來て立留つた。

『失敬！』と言つてKが急いで入つて行つた路らしいところには、新しい二階屋が出來て、その門には齒科醫の大きな看板がかゝつてゐた。その向うには、楓の若い綠の中に交つて、紅い薔薇が一つ咲いてゐるのが垣越しに見えた。

路の奧からは、勤人の細君らしい女が出て來た。

私は不思議な氣がして、しばし其處に立つてゐた。確かに、その時、Kはその妻のSと嬶曳するのを

を與へるやうに私の眼の前を掠めた。『さうだ……さうだ。それに相違ない。』かう私は確實にあるものをつかんだやうにして獨り叫んだ。

Kが S に對する態度やら表情やらが續いてはつきりと私の心に蘇つて來た。S に對するKのあの眼、またS のKに對するあの眼と言葉、その中には何があつたか。火と水とがなかつたか。さうした苦惱を秘密にするために絕交も出來ずにゐた形が奧深く藏されてはゐなかつたか。互に弱點を握り合つて、左にも右にも行くことの出來なかつた苦惱がなかつたか。

『Kが死んだ時、先生、來てゐたかしら?』

かう私は思ひめぐらして見た。

其時はS はたしかに來てゐた。通夜もしてゐた。いつものやうに平氣で何か話してゐた。長い濃い鬚を頻りに撫でゝゐた。あの時、私に今の體感が出來てゐたならば、またその體感から生れた理解を持つてゐたならば、それこそすぐれた觀察が出來たであらうが、また出來たに相違ないが、惜しいことには、其時は私は普通の平行線から一歩も上に出ることは出來なかつた。私は穩かな空氣の奧に人知れずかくされてある秘密を看破することが出來なかつた。

『さうして考へて見ると、あの一人の男の兒も果してKのであるか、Sのであるかわからない。Kはその苦惱をも墓に抱いて行つたかも知れない。』

不思議な心の現象ではないか。かう思ふと、墓の中から、Ｋが出て來て、その本當の死因——世間も法律も親友も何も知らずに、そのまゝ墓に埋められて了つた死因を捜すことを私に勸めた。

四

『さうに相違ない。さうに相違ない。』

かう思ふと、私の眼の前には、Ｋと若い妻との關係、Ｋがその若い妻を幼馴染から奪つて來た關係、若い男女が性慾に夢中になつて行つた形、精神がすつかり肉體に壓されて了つた形、またはさうした熱中から女の方が段々さめて行つた形などが際限なく思ひ出されて來た。

Ｋの死んだ時分には、私にはまださうした境がわからなかつたことが一方に想像されると共に、私の心が、經驗が積んで行くにつれて、次第にいろいろなことがわかつて來たことを想像した。Ｋは次第に私の心の中に生きて來た。

ふと浮び出して來たのは、色の白い、眉の濃い、背のさう高くないＳといふ男であつた。その男はよくＫの家に來てゐた。矢張、詩をつくる仲間で、殊に、女性と戀愛とを歌ふのを得意にしてゐて、女と共に地獄の劫火の中でも翔つて歩くといふやうな熱い情緖をよく長い詩に歌つた。その男がふと浮んで來た。と、Ｋとかれとの交情の形がぼんやりしたさまではあるけれども、さう思つただけで、ある暗示

の中に身を躱して了つた。

この時のことは、かれの死んだ時にも、それから後にも思ひ出さなかつたが、また、思ひ出したにしても、さういふことがあつたといふ以上に何等の反響をも起さなかつたが、不思議にも、それが此頃頻りに思ひ出されて來た。『言つたつて、他人にはわからないよ。君が自分で出會して見なければ――』その言葉がまたしても私の身にからみ附いて來た。

其處には戀の惱み、女の虚僞に對する惱み、疑惑に對する惱みはなかつたであらうか。そこには、かれの若い妻の他の男が住んでゐはしなかつたか。そしてそこには妻はこつそり媾曳に來てゐはしなかつたか。またはそれを大目に見て置かなければ女を所有してゐることが出來なくなる恐れはありはしなかつたか。そしてまた、その蟲も殺さないやうなやさしい顏をした細君の體と皮膚には、さうした欺きの血が流れてゐはしなかつたか。かれがその日平生の沈默の態度を維持することが出來なかつたのは、さうした苦惱がその內部にあつたためではなかつたか。そこに來て、自分の妻の祕密をさがし出さうとしてゐたのではないか。

私はおぼろげになつたその事實をじつと見詰めた。

そこから心の一路をたどつて行くと、私は其處にＫの死因――本當の死因をさがす事が出來るやうな氣がした。

『何うかしたのかえ？』

『あゝ苦しい、あゝ辛い！』

『何うしたんだ？』

驚いて私は傍に寄つた。

『なに、何でもないよ。』立上つて、『しかし、君、世の中には辛いことがあるねえ。』

『何う？』

『君なんか、純だから好いよ。かういふ辛いことがあるのも知らないから好いよ。しかし人間だから、君だつて、一度はかういふ辛いことに出會すだらう。』

『何う辛いんだえ？』

『言つたつて、他人にはわからんよ。君が出會して見なくつちや。』と思ひ返したといふ風で、『でも、どんなに辛くつても、人間は生きて行くから不思議だ。……僕なんか、すつかり泥濘にまみれて了つた。詩の此頃出來なくなつたのもそのためだよ。もうあの前の詩集のやうな詩は考へたくつても、考へられなくなつちやつた！』

かう言つたが、急に、『ぢや、失敬、僕は此處にちよつと用があるんだから。』

かう言つて、私の何も言はない中に、呆氣に取られてゐる中に、右に連つた人家の中の細い巷路の闇

ち出さないことのないＰまでが、後には不思議さうにしてＫの顏を見た。たしか、その歸りであつたと思ふが、それともまたその時とは別であつたか、それは今ははつきり覺えてゐないが、何しろ、私はＫと二人で雜司ケ谷の森から此方へ來るところの路を歩いてゐた。

Ｋは默つて歩いた。

『こつちへ行つちや、遠くなるんぢやないか？』

『なアに、少し……』

かう言つて、Ｋは私に並んで歩いて來た。私はＭの停車場へ行く筈なので、Ｋが深切にそこまで送つて來て吳れるのかと思つて、

『もう、好いよ、歸りが遠くなるよ。』

『いや！』

もうあたりは暗くなつてゐた。夕日の餘照はそれでもまだ遠い地平線を赤く見せてゐたけれども、家家には灯がついて、畠の上には淡く白い靄が靡いてゐた。

『少し休んで行かなくつちや……。』

かう言つて、かれは急に路傍に蹲踞んで、深い溜息をついた。そして頭を抱へるやうにした。」

暫く經つても、頭を上げない。

れてはなかつた。顏には一種緊張した色が上り、いくらか昂奮したやうな狀態で、めづらしく聲を高くして頻りに話した。何でもそれは私達の仲間の大勢ゐる席上であつた。

『そんな馬鹿なことはない。それは空想だ。女はとても男にはわからない「何物」をか持つてゐる。その「何物」かで男を自由にしてゐる。女と同棲すれば、男は何うしてもその奴隷にならなければ、その愛をつないで行くことは出來ない。女はいやになればいつでもその後髮を男に見せる。そしてその後髮を見せた時には、屹度その前髮で別の男をつかんでゐる。……女といふものはさういふもんだ。貞操といふ字は、男がその必要上、女を都合よく縛らうとした言葉で、そんなもので女は縛られてゐるものではない。女には虛榮はあるが、貞操はない。だから、僕は言ふんだ。一番、女を縛るには、虛榮の二字が好い。虛榮でならば、いくらか女を縛つて置くことが出來る。』

『ぢや、戀愛虛無論者だね。』

かう誰かゞ言つた。確か理想派のHだつたと思ふ。

『戀愛虛無論者？　さうかも知れない。しかし、君等の言ふ虛無とはちがふよ。戀愛を蔑視したり、無視したりするのとは違ふよ。女性崇拜でもないよ。また女性反抗でもないよ。』

Kは猶ほそれについて、かなりに高い聲をして話した。沈默勝のかれにはめづらしいことでもあり、且つその言ふことが非常に熱心でもあつたので、平生議論好きな、何んな場合にもそれ相應の異論を持

『何でも、Tの學生ださうだが、幼馴染か何かださうだ。親達も許した仲なんださうだ。處が、Kがわきから行つて、忽ちそれを奪つて來ちやつたつて譯なんださうだ。』

『さうかね。』

『貞操なんかも、だから、あやしいもんだつて言ふことだぜ。』

こんなことをNは言つた。しかし、私に取つては、何は置いても、さうした美しい若い妻を持つたKが羨ましかつた。いろいろなことを世間で噂をするのは、半分は岡燒だなどゝ私は思つた。

Nは言葉をついで、

『君はさうは思はないかえ？』

『何う？』

『樣子をちよつと見てゐても、わかるぢやないか。あの眼がいろいろなことを話すぢやないか。あの皮膚がいやに色つぽいぢやないか。あの態度が肉感的ぢやないか。』

『さうさな。さう言へばいくらかさういふところもあるな。』

三

ある時は、Kは不思議な表情をして、不思議な人物として私に見えた。其時はKはいつもの沈默のか

ゐたが、逢つたのはその時が初めてで、その近くに住んでゐたNといふ矢張筆を持つ友達が、『Kがゐるよ。このすぐ向うに……行つて見ようか一つ……。先生、綺麗な細君が出來たぜ。見に行かうぢやないか。』かう言ふので、ふと行つて見る氣になつて、Nと二人で訪問した。その時、あの若い美しい戀女房であつつた細君が上り端の障子を細目にあけて、きまりがわるさうにして私達を迎へた。私は羨しかつた。生活は貧しいかも知れなかつたけれども、兎に角人生の最初の荒海に乘り出すに當つて、さうした美しいやさしい同伴者を得たことを羨まずにはゐられなかつた。細君は私達のために、茶を勸めたり菓子を出したり、飯時分だつたので、鮨などを取つて御馳走をして與れた。

歸りにNは言つた。

『でも、あの細君と一緒になるには、Kは大騷ぎをやつたんだぜ。』

『何う？』

『競爭者があつてね。』

『でも、細君の方でも、Kに惚れてはゐるんだらう。』

『それはさうかも知れないがね。そのために、その競爭者は失戀しちやつて、何でも病氣になつて、今ぢや海岸に行つてゐるさうだよ。』

『何だえ？　その競爭者は？』

でついて行くには行つたが、深く立入つて一家の事情を聞くやうなことはしなかつた。Kと親しくしてゐた友達の中には、其後いろいろなことを話してきかせたものもあり、その死因が怪しいなどとも言つたものもあり、あの未亡人の美しい顏を見ただけでもわかるぢやないかと言つたやうなものもあつたが、しかも私は別にそれを氣には留めなかつた。私はまだ若かつた。さうしたことに對して何等の理解も疑惑をも持つやうな資格がなかつた。私は却つて唯一人の遺兒を抱いて泣き崩れてゐた未亡人の涙や、さびしく靜かに棺の中に横はつた友達の遺骸にのみ心を惹かれた。美しい珠のやうな『詩集』一巻を世に公けにして、そして忽ちにこの世から去つて、郊外の墓地の春は桃や椿が咲き、青草が萠える一隅にさびしく墓となつたかれを思つた。」

二

しかしKは不思議にも長い間私の頭の中に生きて動いた。あの莞爾した靜かな顏の表情、何處にか明るい中に暗い影のあるやうな氣分、他人がはしやぐ時にも大抵は默つて深く物を思つてゐるやうな態度、さうしたものが何ぞといふと私の眼の前を掠めて通つた。そして、『や、君、久し振りだつたね。』かう言つて人なつかしさうに近寄つて來るかれが見えた。

つゞいてかれに初めて逢つた芝の公園に近い小さな家などが見えた。Kの名は私はその前にも知つて

Kの死因

一

友人のKが死んだのは、もう十二三年も前のことである。その時、その死が餘りに突然であつたのと、病死にしてはちよつと怪しいと思はれるやうなことがあつたので、内部には何かかくれた意味がありはしないかと親しいもの丶二三は疑つたものもないでもなかつた。しかしKといふ男が元來自殺などをしやうとする方の質ではなかつたし、家庭は圓滿だつたし、生活の方面は、それはさう有福ではなかつたけれども、何方かと言へば金の入る方であつたから、そんなことをするやうな空氣や動機は何處にも見出すことが出來なかつた。『Kが死んだつて？　何うしたんだ。一體……。昨日、僕は逢つたんだよ。別にこれと言つて變つたところはなかつたよ。』かう言つてある友達は私の顏を見た。

『腦だとさ……急に、ひつくりかへつたんだとさ。』

かうは私も言つたが、別にさう平生深くは交際してゐなかつたので、葬式にはそれでも郊外の墓地ま

つたり別れたりする人は澤山あるが、深い印象を後まで殘して吳れるやうな人は滅多にはないものだ。さう思ふと、何んな人でも、印象の深かつた人は、自分の一生に賓を與へて吳れたやうなものだ。不思議だからな、ちよつと旅で逢つた人などでも、非常に深い印象を殘すことがあるからね。』

『本當ですね。』

私はまたぢつと深く考へ込んだ。それはこれから春にならうとする大ぶ暖かい夜のことだつた。私は再びなつかしむやうにしてその大きな二つの足を眼の前に浮べた。私は不思議な氣がした。かうして長い一生の間、をりをり浮び上るやうにやつて來る足は、實際I翁の魂ではないか。埋められた墓の中から蘇つて來る魂ではないか。I翁は未だにその大きな存在を要求してゐるのではないか。私はぢつと空間を見詰めた。その大きな足はもう一度はつきりと私の眼に映つて見えたが、次第に薄く、遠く、果てはその元の位置へと深く沈んで消えて行くやうに見えた。

『安らかに落附いて眠り給へ！』かう思つて私は立つて書齋の方へ來た。

て、宅へよくやつて來たんだよ。』

『何うして、また、あなたはあんなおぢいさんが友達なんだらう。と私はまた當座思ひましたよ。』

『好い氣分の人だつたからな。年寄りらしいところなんか少しもなかつたからな。いやに若い者を褒めるぢやなし、さうかと言つて、自分の持つてゐる經驗を見せびらかすぢやなし、年こそ違へ、お互に書生のやうな氣分で話の出來るおぢいさんだつたからね。詩なぞでも、この字はこれよりもこの字の方が妥かではないかなどと言ふと、さうだ、さうだ、その方が好いなんて、すぐ言ふやうな氣分の人だつた。まあ、年を取つたからでもあらうが、あゝした氣分には、人間は容易になれるもんぢやないよ。』

『だから、あの息子の嫁さんなぞにも、好いおぢいさんだつたさうですね。』

『さうさ、もうあらゆることを超越してゐたやうな人だもの。』

『あゝいふおぢいさんが、今でも生きてゐて、始終來たり何かして呉れるんだと樂しみで好いんですけれどもね。』

今は父母にもすべて別れた妻は、かう言つてさびしさうにした。

『好い人は皆な死んで行つて了ふよ。それも仕方がないさ。それよりも、これからは、我々が、後から來る人のために、好い人になる修養をしなければならないよ。あの大きな足を二つ並べたやうには容易になれなくとも、それに近いところまでは行きたいからね。』かう言つて私は考へて、『一生の中に、逢

族の零落も、會津藩だけに他の藩の人よりも一倍多く辛い思ひをして通つて來たし、あらゆる辛酸も歡樂も嘗めて來たんだ。でなくつちや、死んでまで人を壓倒するやうなあの大きな足の印象を人に與へるやうなことなぞは出來やしないからね。』

『さうでせうね。』

『兎に角、豪い、大きい人だつたに相違ない。何しろ、あの年になつてからでも、唯、じつとしてゐると言ふことは出來なかつた人だから……。だから、田舍に行つてゐた時でも、郡長樣の隱居ですましてはゐられないで、その土地の歷史を調べたり、風俗を調べたりして、大きな鄕土誌見たいなものを五册も六册もつくつてゐるし、漢詩はさう旨いつていふ方ぢやなかつたけれども、澤山に澤山につくるし、和歌まで、出來ないなりに詠んだり何かしたんだからね。片時も唯はゐられなかつた人なんだよ。』

『歌や詩はよく作るおぢいさんでしたね。』

『何でも、あの詩は殘つてゐるだらう。十册や十五册はあつたよ、詩が……。長い古詩なんか澤山あつたよ。』

『その詩や歌の話をしに、あなたのところにあの時分よく來たんですね。』

『うん、まアさうだね。詩か歌が出來ると、誰かに見せて樂しまずにはゐられなかつたんだね。それ

『言葉がよくわからないから、あの時だつてはつきりよくはわかりませんでしたけれど、變でしたよ、あの時分は――。』

『家の近所に、火事があつたのをそのひやかじの材料にして、これは大變だ……。若い夫婦が餘り交情が好すぎるんで、それで、火事でも出したんぢやないかつて心配したなんつて言つて、あの大きな體をゆすぶつて笑つたことがあるぢやないか。』

『さうさう、そんなことがありましたね。』妻も遠い昔を思ひ出すやうにして、『さう言へば、本當に面白いおぢいさんでしたよ。貴方のことを錄彌さん、錄彌さんて言つて、いつもあの入口の格子のところに來て、あのフウ、フウをやつてゐるから、出て見ないでも、あ、あのIのおぢいさんがやつて來たといふことがわかるんですよ。と暫くすると、錄彌さんゐるかなつて言つて入つて來るんですよ。本當に、まだ昨日のやうですけどもね。』

『あれて、あのおぢいさん、大變な旅行家だつたぜ！　一度、いろいろなところを知つてゐるので驚かされたことがあつた。何でも、房州の話だつたが、あんなところを知つてゐるのかしらと思ふやうなところをすつかり知つてゐるんだからね。あの時分では、此方も若く、自分ばかりが旅でもしてゐるやうに、または自分達ばかりが本當の經驗をしてゐるやうに獨り合點をして思つてゐたもんだが、あのおぢいさんなんかだつて、皆な同じことをやつて來たんだね。旅もしたし、戀もしたし、社會にも出て働いた

かう言つた私の眼の前には、そのＩ翁の大きな顔が、田舍武士のちよつと聞取りにくいスラングが、フウフウ言つて呼吸をついてゐるさまが歴々と浮んで見えた。

『あれで、會津の藩士では、有爲な人傑だつたんだ。南會津の山の中で集めた農兵を帥ひて、裏口から入つて來ようとする官軍を滅茶滅茶に破つた經驗なども持つてゐるんだからな。中々あれでやつた人なんだ。京都などにも、五度も六度も出かけて行つて奔走したり何かしたりしたこともあるんだ。その時分の話を聞くと、面白かつたよ。それに、隨分辛酸を嘗め盡したんだね。何ぞと言ふと、「何アに、戰爭の時のことを思へば、そんなことは何でもない、極樂ぢや、極樂ぢや。」つて言つてゐたがね。さうかと思ふと、あれで、細君に背かれて、三番目の女の子、その女の子は死んだが、それを抱いて乳を貰つて歩いたつて言ふやうな經驗もしてゐるんだからね。』

『そんなことがあつたんですか。あのおぢいさんに？』

初めて聞いたといふやうにして、妻は言つた。

『色戀だつて、散々あれでやつて來たやうな人なんだからね。』

『さうですかねえ。』

『さうぢやなくつちや、あんなに餘裕のあるおぢいさんにはなれやしない。さういへば、お前の來た時分、よくあのおぢいさんはやつて來てひやかしたぢやないか。』

いて、急いで出かけて行つたと覺えてゐるが、くやみなどを言つてその死骸の横はつてゐる室に入つて行くと、いきなりその足が、その大きな足が、深く土ふまずが刻み込まれてゐる、ザラザラするやうな皮膚の色をした、拇指などの思ひ切つて大きい足が、丁度、「俺は此處にゐる。俺は此處に存在してゐる。」といふやうに、眼の前に並んでるるぢやないか。その時は變な氣がしたね。その足に壓倒されるやうな氣がしたね。悲しいとか、凄じいとか、怖ろしいとかいふ氣分ではなくつて、大きなものを見たといふやうな氣がしたね。死んでまでもさうして自己の存在を人に示してゐるやうな死に對して驚嘆の念を起したね。』

『さうですかね……話だけでは、私にはよくわからない。』

『それはさうだらう。あれを見ないお前にはわからないだらう。見ても亦お前にはさうした氣は起らなかつたかも知れない。俺だけにさうした氣がしたのかも知れない。』

『兎に角、面白いおぢいさんでしたよ。』

『面白い位ぢやない。本當の人間だつていふ氣がするね。いや味なんか少しもなくつて、何んなことでも平氣で言つて笑つてゐるやうな人だつたからな。今の老人にはとてもあんな眞率なおぢいさんを發見することは出來ない。矢張、昔の人だつたんだな。武士の魂と、擊劍とで築き上げたやうな人だつたんだな。』

は談話が出來ないといふやうな眞似を妻はして見せて、『あのフウ、フウ言つてゐる大きなおぢいさんが今でも目に見えるやうな氣がします。』

『面白いおぢいさんだつたからな……。それにしても不思議なのは、あのおぢいさんの大きな足が、何うかすると、いつでもはつきり思ひ出されて來ることだね。そしてその足を思ひ出すと、何とも言はれない氣がするね。あのおぢいさんの持つたやうな大きな足を持つやうにならなければ駄目だつて言ふ氣がするね。』

『その話は、もう何遍もうかゞひましたね。』

『幾度話しても、決して古くならない、つまらなくならないから不思議だ……。大抵の印象は、何んなに其時感激したことでも、現に自分がその渦卷の中に入つてみて、直接に痛切に受けた印象でも、時を經ると淺くなつたり、平凡になつたり、別に心を動かさなくなつたりするものだが、あの大きな二つ並んだ足だけははつきりと頭に殘つてゐるからね。いかにも活動した昔の人の足つて言ふ氣がするからね。』

『何ういふ話でしたつけね。その話は？』

『なアに、別に、話つて言ふほどの話もありやしないサ。おぢいさんが二三日具合がわるいつて寢てゐるとは聞いてゐたが、つい、此方が忙しいかなんかして、近いのに、見舞にも行かずにゐると、死んだつていふ報知だから、吃驚して出かけて行つたのサ。何でも、社から歸つて來て、それをお前からき

足

ほつかり大きな足が二つ並んで私の眼に浮んだ。それは寢てゐる人の足ではなくして死の床に横はつてゐる人の足である。それも若者や中年の人の足でなくて、老人の足である。大きな老人の足である。いかにも活動の一生を送つて來たやうな、死んで迄も人を驚かさずには置かないやうな大きな足――。

『あゝまたIのおぢいさんを思ひ出した。』

かう私が妻に言ふと。

『面白いおぢいさんでしたね……もう亡くなつてから餘程になりますね。』

『さうだね。もう餘程になるね。お前が嫁に來た翌年か、翌々年かに死んだんだから、もう二十五六年になるね。』

『さうなりますかね。喘息か何かで、家に來るにも休み休みやつて來て、それでゐて元氣で、よく冗談などを言つて、私達をからかつたり何かしましたね。フウ、フウ、フウ。』とある時間呼吸をつかずに

Ｋは暫しの間足を留めなかつた。かれは不思議な心持がした。禁斷の果實に手を觸れなかつたことを惜しむやうな心もすれば、また一方にはさうした所爲に出なかつたことを自分のために喜ぶやうな氣もした。『何うせ、あゝいふ女なんだ。節操も何もない奴だつたんだ。狼になつてやれば好かつた。』こんな風にも考へられた。かれは一町ほど來て振返つて見たが、二人が竝んで、さながら互に抱き合ふやうにして、餘所目も觸らずに、何か頻りに話し合つて居るのが小さくはつきりと手に取るやうに見えた。

Ｋは羨しいやうな情けないやうな氣がした。人並よりもませて熱い心を抱いてゐる自分が、さうした女とは、まだ容易に近づいて行くことの出來ない年齢であることが悲しく辛く情けなくなつて來た。かれは再び振返つて見ようとはしなかつた。

かれの前には矢張、退屈な、單調な、兩側に草藪や林などのある杉並木の長い路が續いた。午近い日影は麗らかにあたりに照つた。

ま放つたらかして、急いでKのあとに續いて、此方の並木路の方へと出て來た。

庚申塔の傍に立つてゐた女は、それを見ると、

『まア、貴方。』

男は男で、

『お前かえ、何うしてやつて來たんだえ？　歩いてやつて來たのかえ……。』

急には口もきけないといふやうに、またKがその傍に立つてゐるのなどは眼中に置かないやうに、心と心、體と體とが兩方からひとり手に合つて行くやうに、二人は相對して顏を見合せた。

Kは自分がわるい狼どころか、人の好い驢馬であつたことを思はずにはゐられなかつた。暫く立つて見てゐたが、Kはやがて挨拶して別れようとした。

流石に、女は氣の毒さうに、

『何うも難有う御座いました。お蔭で何んなに安心して來たか知れやしないんですよ、貴方。』半ば男の方に向つて言つて、『本當に、お禮の申上げやうもないんですよ。』急に、帶の間から財布を出して、その中から五十錢銀貨を一枚Kにわたさうとした。

『そんなものいらない。』

かう言つて、Kはそのまゝ驅け出して了つた。

ふと其處に、畠に耕してゐる日雇らしい男と何か頻りに話してゐる若い男をKは目にした。段々近づくと、向うもKの入つて行くのに目をつけたらしく、農夫との話をやめて、立つてぢつと此方の近寄つて行くのを待つやうにした。

Kは突如に、

『此處に、弘治ッて言ふ人はゐるでせうか？』

『こうぢ？』

ちよつとわからぬやうにその男は反問したが、

『益田弘治ッて言ふんです。』

かうはつきりKが言ふと、

『益田弘治……それは僕です。』知らない青年にかう呼びかけられると怪しむやうにしてその男は言つた。

『今、ちよつと、路づれの女に頼まれたんですが、ちよつと來ていたゞきたいッて……』これだけ言ふにもKは顔が赤くなり、呼吸がつまるやうな氣がした。

しかも忽ちそれが男にはわかつたらしく、『あ、さうですか、何うも難有う……』早口に、しかもおどおどと、または最初の尊大な口振は何處に行つたかといふやうに、今まで話してゐた農夫などはそのま

『ね、後生、一生のお願ひですから。』

かう女は一方に賴むと共に、『何うせ、私もI町まで行くんですけど、通り路だからちよつと寄つて行つてやらうと思つて……。』などゝ辯解した。

やがてその庚申の石の立つてるところに來た女は、

『あ、あの家！……あの屋根に日の當つてゐる家だ。ね、お氣の毒ですけどもね、ちよつとさう言つて下さいな。ね、好いでせう？』

斷ることの出來ないやうなやさしい姿態を女はKに見せた。

『ゐるんですか、屹度……？』

『ゐると思ふの？　屹度ゐると思ふの？　私、ぢかに行つても好いんだけども、家の人に逢ふと、面倒だし、すぐまた行けないから。ね、お願ひですからね。後生ですから。』

『弘治つて言ふんですね。』

『え、弘治よ。』

爲方がないので、Kはその儘、その路を左に入つて、その女の爲に、きまりが悪い思ひをしながら、一歩一歩その日の當つた藁葺の家へと近寄つて行つた。半ば開墾された畠と林檎らしい花の一杯に咲いてゐる果樹園、それに雜つて、新綠の林がキラキラ光つて濃淡の縞を地上に織り出してゐるのが見えた。

『難有う。』
かう女は禮を述べて、農夫と別れて此方に來たが、急に、安心と不安とが一緒にやつて來たといふやうに輕い溜息を吐いた。
やがて、Kに、
『お蔭さまで、さびしい思ひをせずにやつて來ました。難有う御座んした。もう、お別れですね。』
かう言つて、また溜息をついて、言はうか言ふまいかと暫しは惑つたといふやうにして、『後生ですがね、もう一つお願ひがあるんですがね？』
『…………？』
『あのね、此處まで一緒に來て戴いたのさへお氣の毒でしたのに、こんなことをお願ひしてはすみませんがね。そこに益田ツていふ家があるんですがね。そこにちよつと行つて、弘治さんツていふ息子がゐるか、何うかつて聞いて、ゐたら、伴れ出して來て呉れませんか。』
『…………』
『ね、後生ですから。』
Kは種々のことがすつかり飲み込めたやうな氣がした。默つて、好いとも厭だとも言はなかつたけれど、さうかと言つて、振棄てゝ、すたすた向うに行つて了ふわけにも行かなかつた。

ちらほら農家らしい人家や、菜園らしい畑はそのあたりにあらはれ出して來てゐた。長い杉並木の路は、まだ依然として暗く續いてゐたけれども、それでも何處となく人聲がしたり、鷄犬の聲がしたりして、今までのやうな淋しい、荒凉とした氣分は漸く少くなつて行つた。（もうさうした空想も全く空想となつて了つた。）かう思ふと、Kはさびしいやうな氣がした。

向うから、ぼつかり、鋤を擔いだ農夫が一人出て來た。

女は立留つて訊いた。

『I町の近所に、Y村ツて言ふ村がありますが、そこはまだ遠いでせうか？』

その農夫も同じく立留つて『こゝもY村だが、Y村の何處だすな、Y村もこれで廣いでな。』

『萩原新田？』

『萩原かな、萩原はすぐそこだ。』後を向いて、並杉木の間から明るく向うに見える新しい古い藁葺屋根に日影のさしてゐるあたりを指して『あそこが萩原だな。』

『萩原に、益田ツていふ家がありませうか？』

『益田さんかね……』農夫はかう言つて胡散臭さうに、女と、女と一緒に歩いて來てゐるKとを見て、『益田さんなアな、すぐだ。もうちつとんべい行くと、右に庚申さまが立つてゐらア。そこから、左を見ると、奥のつき當りに見えてゐる新しい屋根が益田さんだア。』

時の歡樂でも何でも、人のゐない處で、思ふまゝのことをしたら、何んなに好いだらうなど、Kは思つた。Kは體が熱くなつたり、辛く辛くなつたり、またはこの女を護つて伴れて行つてやることを喜ばしく思つたり、一人では淋しい道に兎に角さうした伴侶を得たことを仕合せのやうに輕く考へたりして、向うから話しかけることを唯素直に點頭いてきくばかり、靜かに人氣のない石の凹凸した並木の中の路を歩いて行つた。

時には、その後について歩くのを苦しむやうに、わざと二三間距離を隔てゝKは歩いた。

五

女はまた立留つて、後れ勝なKを待つた。

『もう一里の上歩いたわね。』

『さつきのところから？』

『さうよ。』

『歩いたでせう。……』

『ぢや、もう一町ぢきね。』

『…………』

にして、いろ〳〵なことを話し懸けた。

『もつと早く、歩いて下すつても好いですよ。私が足が遲いと思つて、遠慮して下さるんでせう。もつと、いくらでも早く歩けるんですから。』

などと言つた。

時には馴れ馴れしく、故鄕のことやら行先のことやらを訊ねて、

『さう、T町なの……あそこに、私、一度行つたことがありますよ。賑やかな好い町ね。四辻のところに釣竿なんか賣つてゐる家がありますね。あそこに子供のうちに行つて泊つたことがありますよ。』

『親類なんですか？』

『親類ぢやないけど……。死んだ父親があそこの旦那を知つてゐましてね。T町には大きな城だの、沼だのがありますね。』

『え。』

かと思ふと、女も何か心配でもあるやうに、今まで話しかけてゐた話をぷつつり切つて、默つて、物思はしさうにして、溜息を吐いた。

實はわるい狼であるのに、人の好い驢馬と信用されて、平氣で、相手にされてゐるのがKには辛いやうな氣がした。これがもし此方の心がわかつて、向うも、わるい狼か猫と言ふ風に出て來て、ほんの一

ふことやら、何んなことをしてもあたりに誰も見て居るものもなく、さうした禁斷の果實を食つても、一時間か二時間の後に別れて行つて了ひさへすれば、あとに何の痕跡も責任も殘らないといふことやらが、不思議な、今までに經驗したことのない、言はゞ不良少年に近いやうな心を誘つた。かれは赤い腰卷の下から出てゐる白い肌膚をした足や、銀杏返しの髱のところに、すらりとつゞいてゐる艶な襟首や、田舍の女に似合はない手首や指の白く細いなどに眼を注いだ。

一歩一歩小刻みにかれの前に歩いて行く小さな肉體から發散する空氣が、ともすると、かれの疲れた體と心とに甘く心持よく浸み透つて來るやうな氣がした。

しかしKをして、さうした不良少年らしい態度に出でしめなかつたのは、性來臆病であつたからでもあるし、またそれまでに何等さうした經驗のない身であつたからでもあるが、一方さうした自分を客觀して、(そんなことは知らずに、女はいゝ伴侶を得たと思つて歩いてゐるのだ。そのすぐ後に、さうした巽圖を抱くわるい狼がついてゐて、いつ飛蒐つて行くかもわからないのをも知らずにゐるのだ。)かう思つて、人間の心と言ふものゝ解らないものであるのを思つたりする餘裕があつたからであつた。かれは唯默つて歩いた。

それとは反對に、女は益々信用をかれに置いたらしく、やがては、更に、思つたよりかれが年少で、默つて歩いてゐるのを、唯、きまりがわるいとばかり解釋したらしく、頻りに、後から續くKを待つやう

なことは考へなかつた。Ｋは唯默つて歩いた。

『あなたもＫ町から今朝來たんですか？』

『え。』

『私は今朝早く立つて來たんですけれども、男の足は何うしても早いわねえ。』

『…………』

坊ちやんでなしに、あなたと言はれるのがＫには變にきこえた。一つか二つしか年が上ではないであらうが、ぐつと世馴れて、さうした男女の世界にも旣に十分浸つてゐるやうな女の態度は、ともすると、Ｋの心を壓すやうにした。

一人かうして若い女がさびしい路を選んだのを辯解するやうに、

『汽車でいつも來るんですけどもね。くるッと廻らなければならないし、時間も、歩いた方が早い位だつて言ひますからね。それて歩いて來て見たんですけども……。人通りのないのはきいて知つてゐましたけれど、こんなぢやないと思つた……。』

矢張、Ｋはその話相手にはなれなかつた。

しかし、默つて、成るたけ、一緒に歩いてやらうとしてゐるＫの胸には、いろいろなことが渦を卷いて起つて來た。さつきの心と體との性慾の甘い壓迫やら、あたりに自分とその女と二人しかゐないとい

普通なら、こんなに素直に、平氣に、女に向つて口のきけないKであつたけれども、その時は、女の態度に引張られるやうにして、思はずかれはかう言つて訊いた。

『何うもしないいんですけれども……何處まで行つたつて人つこ一人ゐないんですもの……。さびしくつて、さびしくつて、びくびくしながら歩いて來たんですよ。I町まで、何うせ、貴方も行くんでせう。後生ですから、一緒に行つて下さらないこと？』

『えゝ。』

『まア好かつた。これで安心した。』かう言つて女はKの樣子を見るやうにした。十九の一少年だとは思はなかつたらしいけれど、路伴としては決してわるい狼ではないと思つたらしく、『だつて、さつき、あそこを通ると、山小屋があつたでせう。あそこに男が二三人ゐたでせう。何にも言ひはしないですけどもね、もし、何か言はれたら、何うしようと思つて、生きた空はないやうな思ひをして來ましたよ。』

Kは笑つただけで、別に何も言はなかつた。何だかきまりがわるいやうな、またさつき林の中でやつたことが振返られるやうな氣がした。

Kが一人で林の中に入つたと同じやうな心理が、矢張さうして一人で淋しい路を歩いて來た女にも起つて來てゐたのであつた。勿論、男と女の相違があるために、男のやうにプラス式の加算では起つて來ずに、マイナス式の減算であべこべにさうした小さな恐怖となつたのであつた。しかしKは決してそん

來た林に添つた草藪の中の路ではなかつたけれど、その人通りのない杉の並木道に、派手な帶に着物をくるりとまくり上げて、赤い中に紫の色の交つた腰卷と白い足袋とを見せて、銀杏返しに結つた若い女がてくてく歩いて行くのを目にした。

かれははツと思つた。

不思議な氣がした。微かに、何處かで何物をか惜むやうな思ひがした。

やがて、此方の歩く氣勢が聞えたといふやうにして、女は振返つてKの方を見た。Kもちらつと色の白い、年もまださう取つてゐない、少くとも自分より二つか三つ上位の美しい女の顏を見た。

女は立留つて、Kの近く歩いて行くのを待つた。

すぐかう聲をかけた。

『あんた、I町まで行くの？』

『え……』

『なら、一緒に行つて下さらないこと。私、さつきから怖くつて、怖くつて、何うしてこんな路を歩いて來たかと思つて後悔してるんですから……。』

『何うかしたんですか？』

つた。

あとが振返つて見られるやうなわびしい悲しい氣がした。

しかし、さうした感じも、瞬間であつた。Ｋの心はすぐその坐つた傍の草藪の綠葉、または處々に點綴された赤い小さい躑躅林を透して漲り落ちて來る美しい明るい光線に移つて行つた。(自然はかう美しいのに、人間ばかりは何うしてかう汚ない業をするのだらう。)かうむら〳〵と思つたが、それも長くはつゞかずにぢき消されて行つた。小鳥がすぐ頭の上で、鈴のやうな好い聲を立てゝ鳴いた。遠くで、木樵の木を伐る音が山のこだまに響いて聞えた。柔らかな撫でるやうな風が靜かに草藪の萱の葉を搖かした。

かれは暫しはぼんやりして、草の葉に縱橫に織り込まれた、何うしてあゝ自然は複雜した色彩を示すであらうと思はれるやうに美しい日の光線をぢつと見詰めた。と、不思議にも、眼の前には、黃い赤い、または紫の小さな輪がいくつともなく無數に出來て、その中に一つ一つ美しい顏やら、白い肌やら、メリンスの帶やらがチラ〳〵とちらついて動いた。

四

林から出て少し來た時、思ひもかけず、Ｋは、かれから少し先に、七八間先に、かれの今まで歩いて

『難有う。』

かう言つて別れた。暫く行つて振返つて見ると、ガサガサとまた草藪をわけて林の中にその山男の入つて行くのが見えた。

とんだ邪魔が入つたやうな氣がした。その樂しい世界に入るためには、かれはまたある期間を要さなければならないやうな思ひがした。しかし、さうでもなかつた。やがて再び美しい色彩と甘い想像とは漲つて來た。あらゆる美しいもの――本で見たもの、または實際に見たもの、夢に見たもの、さうしたものがすべて自由に、障碍なしに、再びかれの周圍に集つて來た。」

ある場所を求めるためにかれは路傍の林の中に入つて行つた。

三

悲しいやうな、淺猿しいやうな氣がKにはした。しかし、何うすることも出來なかつた。もしこれがもう少し年を取つてゐるか、でなければ更に深くさうした性慾に入つて行つてゐるかしたならば、(何うもしやうがない。これが人間なんだから。)とか、(淺猿しいけれどしやうがない。)とか言ふのであらうけれど、否、更に、もつと年を經て、妻でも持つてゐたり子供でもあつたりするならば、(へゝん、馬鹿な！)かう言つて笑つてすまして了ふのであつたらうけれど、Kにはまださうすましてゐるわけには行かなかか

しかし内部から誘ひ起つて來る力は、容易に押へてしまふことは出來なかつた。再び氣がついた時には、さつきの理性の聲はもう何處かに影も姿もかくして了つて、(だつて、しやうがない。)といふ心と、(誰も見てやしない。)といふ念とが、その焦燥と一緒になつて渦を卷いた。

思ひもかけず、林の中から、ガサガサと音がして、大きな鉈を持つた山男が出て來た。じろりと此方を見た。

Kは自分の腹の中まで、すつかり見られて了つたやうな氣がして、はつとした。すぐ低頭いて了つた。しかし、その山男はかれの思つたやうなものではなかつた。また、かれを十九歳の青年とも思つてるなかつた。かれは體が大きかつた。手足などはもう誰にも大人に見えるほど發達してゐた。

山男は、丁寧に、

『お暖かな日だなし。』

と挨拶した。

それに氣を得たやうにして、

『I町まではまだ餘程ありますか?』

かうKは訊いた。

『I町かな、さアな、まだ一里半にやちと遠かんべいかな。』

になりたいと思ふのも、功名富貴を得たいと思ふのも、またK自身が一生懸命に學業にいそしむといふことも、實は皆なそれを對象にしてゐて、一に美しい姿とはなやかな色彩とに望みをかけてゐるやうなさうした歡樂が漲るやうにかれの心と體とに集つて來た。

《あの昨夜の若い可愛い女中が此處にゐたら何うだらう？》

こんなことをKは考へた。Kは體中が燃えるやうになつて來るのを感じた。

誰もゐなければ、そんなことは何でもないことだなどとつゞいて思つたKは、樂しいやうな、焦々するやうな、草も木も皆な自分と一つになるやうな、日影も、日に照された躑躅の赤い花も、何も彼も、皆なさうした歡樂の世界に自分と一緒に溶けて來るやうな氣がした。

と、不意に、その心の底から、ある聲が來て呶鳴つた。

《意氣地なしめ！　馬鹿め！》

かうその聲は言つた。Kはびつくりした。一時さうしたイリユウジヨンがすつかり消えたやうな思ひがした。

《獨りを愼むといふことは、さういふことを言ふのだ。》

小賢しくも學校の倫理の先生に敎はつた言葉まで思ひ出されて來た。

Kはまた默つて歩いた。

ナイフを出して、稗木の枝の素性の好いのを伐つて、それをステツキにしたりなどした。
（あの言葉の意味は、何ういふ意味だらう？）
またKはこんなことを考へた。昨夜の女中の赤いメリンスがチラチラと眼の前に動いて見えた。

二

晩春の暖かに明るい日影が、草藪に雜つた小さな山躑躅に榮えて照つた。林に囀つてゐる小鳥の聲は、何となく樂しい戀の歡びを唄ひかけでもしてゐるやうにきこえた。
一人でゐるといふことが、あたりには山の影と、日の影と、草木と、小鳥と、それより他に何にもないといふことが、誰もかれの歩いてゐるのを見てゐないといふことが、いつかKを一人でゐる時によく逞うした性慾の方へと伴れて行つた。
三四里歩いてやゝ疲れかけてゐる心と體の甘い倦怠も、ほかほかと上からさして來る暖かい日影も、倶にさうした心をかれに誘つて來るやうな氣がした。
Kにはまだよくわからなかつたけれど、人生の最大快樂であるらしいシイン、これまでにも繪や何かで人知れずこつそり知つてゐるにはゐても、それが何處まで本當で、何處まで誇張であるかわからないやうな祕密なシイン、祕密であつてそしてこれにのみ人生の辛苦を忘れてゐるやうな歡樂、否、豪い人

（あの時、言つたことは何ういふ意味だらう。何故、あの時、馭者と乘客とは面白さうにして笑つたらう。いづれ、その女に關係した言葉には相違ないが――）こんなことを考へながらＫは歩いた。

つゞいてＫは昨夜泊つた大きな旅舍から、愉快な心持で出發して來て、雲のぽつかり山から湧き上るやうな路を歩いて來たことを思ひ浮べて見た。またつゞいてさびしい杉の並木路――初めは松並木であつたのが、いつとなく杉並木に變つて、それが爪先上りといふほどではないが、いくらかのぼりになつてゐるやうな路、行つても行つても同じやうな杉ばかりの路、その杉の並木の間からは不思議な形をした岩石の山の一部の見えるやうな路、右にも左にも草藪と雜木の背の低い林とが連なつてゐるやうな路を隨分長く歩いて來たことを思ひ出した。

その間には、人家と言ふものもなければ、宿場といふやうなものもなく、偶々あるのは、林に添つた山小屋らしい中に、あらくれ男が一人二人大きな鋸で板を挽いてゐる位なものであつた。旅客といふ旅客には一人も逢はなかつた。

初めはその人のゐないのが、人影すら見えないさびしさが、却つて不安を除き去つたやうな氣がして、元氣に、詩などを朗吟したり、何かして歩いて來たが、またその聲のあたりに反響してきこえるのを、自分の伴侶か何ぞのやうにして、一歩一歩力強く踏みしめて歩いて來たが、次第に疲れが出たといふやうに、またあまりに單調なあたりのさまに退屈したといふやうにしてＫはわざと路から林の中に入つて、

かつた。そこまで來る乘合馬車の中でも、かれは何遍となく懐に手をやつて胴卷に觸つて見た。

『坊ちやん一人？　Ｎに行くの？　よく一人でやつて來たわねえ。本當に可愛い坊ちやんだ……。』

こんなことを昨夜の旅舍の女中が言つたが、その時にも何だか怖いやうな、氣味がわるいやうな、うつかりすると、何んな目に遭ふか知れないやうな氣がして、碌々口もきけずに顔を赤くして默つてゐた。その癖、Ｋは、その女中が綺麗な、色白の、肌理の細かい肌をしてゐるのや、派手なメリンスの腰卷を歩くたびにチラチラ見せてゐるのや、笑ひかけて來る顔に一種色つぽい人なつこい表情のあるのなどを見遁さなかつた。その他にも、その旅舍には、まだ女中が五六人ゐたが、中で十四五の、豊かな頬をした、可愛い顔の若い女中をかれは忘れなかつた。厠に下りて行つた廊下でその女中の向うから來るのに逢つた時には、何となく胸が躍つて、顔が赤くほてるのを覺えた。

それぱかりではなかつた。かれは昨日、ある處からある處まで歩いて、午過ぎにそこで馬車に乘つたが、その馬車の立場が丁度街道に並んだ遊女屋の角で、大きな二階建の家に、淺黄の暖簾のかけてあるのを見たり、女がだらしのない風をして、なまめかしく路傍の人に話しかけたりしてゐるのを見たが、その時乘合客の一人が馭者に向つて言ひかけて笑つてゐた言葉——かれにはよくわからないやうな言葉、その言葉からかけて、ずつとひろくひろがつてゐるその色つぽい知らない社會が繪か何ぞのやうに想像されて見えた。

林に添つた道

一

もう三里ほどは歩いた。

行つても行つても盡きない杉の大きな並木路であるK町からI町まで五里、それからまだ二里歩かなければ、目的のN町に達することは出來ないのは知つてゐたし、汽車が出來てから、此の道はすつかり荒廢して、昔は冠蓋相望むと言はれた賑かな驛路も、今は人一人通らなくなつたといふことも知つてゐたけれども、それでも餘りにさびしすぎ、餘りに荒涼すぎ、また餘りに單調すぎるとKは思つた。

Kは十九歲の少年で、旅に出たのは初めてであつた。世間が怖いやうな、他人が恐ろしいやうな、または何處から何んな災厄がやつて來るか知れないのを恐るゝやうな、小說本で見たごまの灰とか、惡漢とかが不意に自分の前にあらはれて來て、胴卷の中の路銀を無理やりに奪ひ去つて行きはしないかといふやうな不安が、絕えず胸に渦を卷いて、昨夜とまつた旅舍でも、落付いて安らかに眠ることは出來な

戰から贏ち得たものでした。しかし、私はその盡きない戰ひから、漸く遁れて浮び上ることが出來ました。』

　私は私の苦痛と歡樂と疲勞と困憊とをその人の顏に見ることが出來た。五年前の私は、矢張その人と同じであつたことを私は考へた。私は言つた。『まァ、お上んなさい。しかし、こゝは私の室だ。私きり入ることの出來ない室だ。こゝには、貴方を長く留めて置くことは出來ません。貴方は貴方で、自分の孤獨の室を新しくつくらなければなりません。そして辛い長い努力をつゞけて行かなければなりません。しかし、まァ、お上んなさい。貴方は疲れてゐらつしやる。休まなければならない。』で、新しい客の爲めに私は谷の水を沸かして勸めた。

　暫くして客は矢張私と同じ沈默をつゞけるために、別な庵室をもとめて林の中へと出て行つた。日は月と經つた。谷の草花はまた咲いた。卓、ピストル、鏡、すべて元のまゝにそこに置かれてあつた。夕日は窓にさしてそして消えた。

　靜坐した私の姿は、朝に夕に猶ほ依然として其處に見えてゐた。

ある日、戸を叩く氣勢がした。しかしさういふことは今までにつひぞ無かつたので、私は立つて行かうともしなかつた。戸を叩く音は段々高くなつた。

遂に私は立つて行つた。

扉の半ば明いところには、ある人が立つてゐた。その人は蒼白い疲れた顔をして、手にはステッキを持つてゐた。五年前の私の苦惱と煩悶とを私はその人の顏に見た。

『何處から？』

『人生から。』

『何を求めて來たのです。』

『人生の波から辛うじて浮び上つて來たものです。私はそこから浮び上るのに、全力をあげました。今でも、いろ〳〵なものが私を元のところに引き戻さう引き戻さうとしてゐます。私は疲れ果てゝ了つた。』

『何故、人生の歡樂を求めやうとしないのですか？』

『歡樂は歡樂ではありません。苦痛は苦痛ではありません。私は何うしても、その中から遁れて來なければならないと思ひました。私は二十年人生の渦卷の中にゐて戰つた。權力とも戰ひました。名譽とも戰ひました。中でも愛慾とは最も烈しい戰ひを戰ひました。疲勞、困憊、さういふものは、皆なその

現はれた。

黄い美しい花が暗黑を地にして、くつきりとそこに現はれて咲いてゐるのが見えた。世間では到底嗅ぐことの出來ない匂ひがあたりに高く薫じた。

『孤獨に咲いた花だ。』

かう誰かが說明してきかせた。

洞門の前には、無數の群集が織るやうに集つてゐた。誰も彼も爭つてその中に入らうとしてゐるのであつた。『他人の心、自己の心。』かう言ふ聲が喧しく聞えた。

群集を押わけて私が入つて行かうとすると、ある力とある聲とが、急に私を遮つた。聲は言つた。

『もう一度歸れ。まだ、お前は庵室の中にゐなければならない。』

で、止むなく私は其處から引返した。

私はまた私の一室に歸つた。やがて谷の花は咲き、山の鳥は歌ひ、川は雪解の水に凄じく音を立てた。

一年はまた過ぎた。

洞門の中で見た『孤獨に咲いた花』の色彩は、長く私の眼に殘つた。そのかをりは長く私の周圍に薫じた。私は暗黑の四壁から冷たく滴り落ちる水の音を聞いた。『生死の谷でもなく、藝術の道でもなく、私の通つて行く路は確かに其處だ。』私はかう考へて、默つて猶ほ靜坐を續けた。

えた。

暗い中を無數の不思議な形相をしたものが通つて行つた。それが時には影のやうに、時には幻のやうに見えた。あるものは早く私を掠めて通つて行つた。

ある聲とある聲とは話した。

『光の見えるところまで行つたか？』

『行かれない、とても行かれない！』

『でも、引返しても仕方がない。』

『まだ、この先きには凄じい瀧津瀬がある。高い岩石がある。この道が一番辛いといふことだ。』

『しかし、光に達するには一番正しい道だと言ふではないか。』

『正しいかは知らないが、容易ではない。私はこれから五つ洞門を越えたが暗くなるばかりで、少しも明るくはならない。』

『然し初めて最初の光を仰いだ時は、到底形容することの出來ない歡喜を感ずるといふではないか。あらゆる苦痛も、あらゆる艱難も物の數ではないと言ふではないか。まだその光を見ないか。』

『見ない』

二つの聲は絶えた。種々の形相は私の立つてゐる傍を行つたり來たりした。洞門がまた一つ私の前に

に續いた。四壁のまゝに、私は深くその洞窟の中に身を沈めた。其處には些の光線もなければ、些の色彩もなかつた。私はある暗い洞門を通過した。ふと水の滴る氣勢がした。形は見えずに、ある聲が其處から聞えた。

『誰だ?』

『孤獨の道を行くものです。』

『孤獨はさびしいか?』

『さびしい。』

『孤獨は辛いか?』

『辛い。』

『さびしい辛い孤獨の道を、お前は何故に守らなければならないのか?』

『何故か、私は知つて居りません。知らずに、私は此の道へと入つて來ました。』

『入れ!』

かういふ聲がした。

で、私はその暗い洞門の中にある更に小さい洞門をくゞつて入つた。暗さは更に一層の深い暗さになつた。全く漆のやうな暗黒である。四壁からは冷たい水の滴の落つる音が、絶えず瀧津瀬のやうにきこ

永久たるものではないか。卓、書籍、光線、鏡、赤いダリヤ。かういふものゝあると同じやうに、この我があり、この我の心があるのではないか。否、この我、この我が心、この心がこのまゝにして、我々の頭上を蔽つた空間と、同じ空間を持つてゐるのではないか。かうしてこの一室に坐つた自己の形が、そのまゝ空間になるのではないか。鏡の中に一度現はれたHorla、それも矢張自分と同じものではないか。』

ある時は、私はいつもに似ない寂寥と焦燥とを渾身に感じた。自己の周圍の壁、その壁が牢獄ではないかと思はれた。『一刻も早く、此處を拔け出て了はなければならない。このまゝにしてゐては身は亡びるばかりだ。腐つて、たゞれて、亡びて了ふばかりだ。孤獨の快感は、私を亡すこと、女色と鴆毒とに均しい。爾は何故にかくしてあるか。かくしてあらねばならぬか。何故にかうした一室の中に身を閉ぢこめて靜坐してゐなければならぬか。』

私は答を待つた。しかし、何の答も得ることが出來なかつた。

『この骨に徹する冷めたさ。この魂に滲み入るさびしさ。爾はこれを如何に堪へようとするのか。爾は如何にこれを超脫しようとするのか。或は、或は、この骨に徹する冷さと魂に滲み入るさびしさとをそのまゝ自己の中心にしなければならないのか。』

またある時は經過した。私はある日、深く底に穿たれた洞窟をその靜坐の下に發見した。暗黑は暗黑

と、私の經て來た人生は再びあり〳〵とその前に現はれて見えた。私は眼を閉ぢた。重なり合つた木葉のやうだと私は思つた。何千年、何萬年、それが全く重なり合つて地に委した。泥土に委した。戀も苦痛も歡樂も何も彼も皆同じやうに、名譽も富貴も貧賤も何も彼も同じやうに……。

『あゝまた人生の波の音がする。あの騷音がきこえる。』

かう獨語した私は再び靜かに耳を欹てた。霧の海の深い底には、不整な、混亂した、ある一種の調を持つた悲壯な音がそれからそれへと長く續いた。

沈默は再び全く私の一室を封じて了つた。落日にも再びその美しい壯嚴な光景を見せず、Horlaもその不思議な姿を鏡の底に現はさず、霧の海も底に悲しい騷がしい音を立てなかつた。朝每の霜は唯赤裸々の木々の梢を白くするばかりであつた。

私は終日唯默して靜坐した。

『さうだ。この路があるばかりだ。この路を他にしては、私は行くべき路を知らない。生死の谷を越えることも出來ず、藝術の山を攀ぢることも出來ない私は、唯拱手し靜坐してゐるばかりだ。沈默、唯、沈默があるばかりだ。』

ある時は又考へた。

『この沈默した形、そこに、刹那卽永久の谷があるのではないか。靜坐――この靜坐は刹那にして且つ

壯な張詰めたセンチメンタルな聲が起つて、裂帛のやうな急調を促して、忽ちそれが絶えて了つた。あとは暫ししんとした。

底で低い雜音が響いてゐた。

そしてその雜音が一刻々々に波動を起して、次第に高くなつて來るのを私は耳にした。それは丁度泥濘の中から無限の亡靈が浮び上がらう浮び上らうと努力してゐるさまに似てゐた。高くなつて來る聲は浮び上つたもの丶聲だ。確かにさうだ。と私は思つた、しかし大抵はその途中で、他の大勢の亡靈に引摺り落されて同じ泥濘の中に落ちて行くのであつた。

また悲しい聲がきこえた。

しかし、あとからあとへと續いて湧いて來る雜音は、決してその最初の希望と期待とを失はなかつた。如何なる難關をも突破するやうな強さと若さと鋭さとを持つてゐた。『己の生活は己がして見なければわからない。己の人生は己が通つて行つて見なければわからない。』あらゆる箇々の聲は、皆なさうした心と言葉とを旗じるしにして、上へ上へと浮び上つて來た。

霧は漸く深くなつて行くらしかつた。騷音は次第に底へ底へと沈んで行つた。段々遠く徽かになつて行つた。

今度は谷川の音が聞え出した。

ゐる。其處にも此處にもゐる。今までも常にお前の體の中に住んでゐた。たゞ、形を現はさないばかりだ。』

『何うして、形を現はさずにゐた？』

『要求がなかつたからだ。要求さへあれば、私はいつでも形を現はすのだ。』

『俺は要求したか。』

形相は默つて點頭いた。

『これから始終この俺に附纏つて離れないのか？』

答がなかつた。

私は深く其鏡の底を見入つた。形相は段々小さくなつて行つた。遂には底の底に沈んで見えなくなつた。あとには依然として卓の一部と赤いダリアとが靜かに映つた。

霧の中から無限の喧噪が手に取るやうにきこえる。叫ぶやうな聲もすれば、笑ふやうな聲もする。泣くやうな聲もする。歔欷げるやうな聲もする。そして、それが一つの雜音になつて、靜坐した私の耳に入つて來た。行進曲のやうなものは中でも殊にはつきりと聞えた。

そしてその聲は何を言つてゐるのかよくわからない。何か話してゐるには相違ないが、それが一つの音と他の音と混亂して、時には高く時には低く、唯騷々しい音と調子とがあるばかりである。と、急に悲

答がなかつた。

『お前は何だ？』

その顏は笑つた。しかし、矢張答へなかつた。

『本當に、何だ。話して呉れ。賴むから話して呉れ。』

『Horla―』

『お前か Horlaが。何うしてお前はこゝに來た？　海を越えて來たのか。山を登つて來たのか。』

その形相は頭を振つた。

『また、このおれに取つかうと思ふのか。それで來たのか？』

『…………………』

『默つてゐてはわからない。お前は俺の孤獨の隙を覘つてやつて來たのか。昔からお前はゐた筈だ。千年も二千年も前からゐた筈だ。そしてお前はいつも孤獨の境にのみその形を現はして來ると聞いた。さうか。』

その形相は點頭いて見せた。

『お前は海を越えた名高い詩人の頭に住んだことがあるだらう？』

その形相は笑つたが、やがて恐ろしく空虛な聲で言つた。『私は今、來たのぢやない。私は何處にでも

さまざまの形相とさまざまの光景とが私の眼の前を過ぎて行つた。心といふもの丶複雜さ廣さ不思議さよ。かう思つて、私は眼を閉ぢた。

偏つたもの、歪んだもの、不整なもの、不統一なもの、さういふものが絶えず私の心の興味を支配して來た。私は肉體と精神との亡靈が絶えず私にある復仇をしてゐるのを感じた。

そこに一つ鏡があつた。

それは私が此室の奧の物置からさがし出して來た古い古い鏡だ。硝子の鏡が始めて此の土地に渡つて來た時分に、この庵室の昔の主が、高い價を拂つて買つたものであるといふことは、その鏡のつくりや裝飾やらで知れた。裏にはある象形人物が浮彫にしてあつた。私は埃を拂つて、それを私の卓の前の柱にかけた。

其處には終日長く、机の上の書籍と花瓶に生けた赤いダリアとが映つてゐた。丁度靜かな秋の空がその前にあらはれたものを明るく鮮やかに映したやうに――。

時には私の衣の裾が映り、私の青白い手が映り、ピストルが映り、『戀の日記』が映り、卓の上の白い陶器が映つた。私はある時、その明るい鏡の底に蒼白い髮の長いある顏を發見した。

不思議な形相だ。

『お前は何だ?』

ある處では、私はかう言つて叫んだ。私の前には、あらゆる美しいもの、やさしもの、正しいものは亡びた。私は強ひて否定を肯定した。

歡樂の巷にゐる私は、中でも殊に慘めであつた。卑められ、虐げられ、あなどられ、笑はれ、罵られた。執着と煩惱と愛慾とが雜り合ひ絡み合ひ縺れ合つた。闇の中に泣いてゐる男、明るい灯のかげに歔欷けてゐる男、それは果して私だらうか。ある時は私は "A Rebours. の中の Des Esseintes のやうな境に身を置いてゐる私を見た。あらゆるものから私は離れて住むことを計畫した。所謂ヒユマニチーなるものは中でも殊に嫌つた。社會や人道は箇人を測り知れない泥濘の中にひき落すものとして少しも疑はなかつた。私は其時分、黄い色が好きだつた。紅よりも紫よりも黄い色が最も神祕に近いと思つた。私は人の顏を見ることを避けた。人と語ることを避けた。私は黄い壁の中にひとり住んでゐる私を見た。

戀を得た喜悅よりも戀を失つた悲哀の方に私は一層深い興味を感じた。『もう、お前とはこれでおわかれだ。それがいやならば何故お前は私に惚れた。何故私を最後まで振つて振りぬかなかつた。別れる原因は他にはない。それはお前が俺に惚れたからだ。俺の所有物ときまつたものに、其處に、何の興味があらうぞ。俺の言ふなりに何うにでもなるものに何の興味が起らうぞ。』こんなことを言つて私はある女と別れた。それは細い巷路のやうなところであつた。黄いくちなしの實が垣根から覗くやうにして見えてゐた。

一室の中にぽつねんとして私は猶は坐りつゞけた。

私は一室の中の長い年月を繰返した。室、壁、長押、卓、すべて同じた。すべて同じ灰色だ。矢張同じやうに、窓から黄ろい夕日がさし込んで來た。

圍爐裏の丸太は、何百年を燃えつゝ經過した丸太のやうにぶす〳〵とくすぶつてゐた。

かうした沈默と孤獨の年月を經過した今でも、昔の苦悶や懊惱や愛慾は、鏡に映つた影のやうに、をりをり私を襲つて來た。そして空間に向つて憧れ渡る心と體とを再び汚い泥濘の中にひき落さうとした。

ある光景とある光景とは、無數の繪巻物になつて私の靜座の眼の前を掠めて通つた。私は妻子の涙に引寄せられる私を見た。美しいやさしい情にひかされる私を見た。ある時は私は自己の持つた敗徳と罪悪との苦痛に堪へられなくつて、強ひてその敗徳と罪悪とを承認する私の姿を見た。それは血みどろになつた私の姿だ。大童になつた醜い私の姿だ。

ある時は降り頻る風雨の中をびしよぬれになつて歩いてゐる私を見た。私は醉漢のやうにして蹌踉として歩いた。頭から足の爪先まで雨の滴がしたゝり落ちた。髪はぬれてひつたりと首筋にくつついてゐた。それでゐながら、私は何か大聲を擧げて、叫んで歩いてゐた。丁度一生の大事件でもあるかのやうに――。

『何だ、馬鹿！』

襲つて來てその苦しさに堪へられない。私は、もう、二十年以上も、さういふものと戰つて來た。初めの五年は私はその巴渦の中にゐて戰つた。次の五年はその巴渦から出ようとして戰つた。その次の五年は、戰つても戰つても遂に遂に克てないことを悟つた。あとの五年は私は全く沈默した。』

『何故沈默した？』

『人間は孤獨でなければならないことを悟つたからです。沈默でなければ、遂に孤獨に打勝つことが出來ないことを悟つたからです。』

『そして孤獨に打克つことが出來たか？』

『出來ません。』

『何故出來ない？』

『何故だかわかりません。』

『それは自分の血が他人の血であり、自分の心が他人の心であり、自分の體が他人の體であることがよくわからないからだ。まだ、沈默が足りないのだ。』

私は默つて立つて、前に聳えた絶壁の上を仰いだ。成ほど細い道がそこについてゐるらしく思はれた。しかし、いかにも險しいので、とても其處に登つて行けさうには思はれない。私は止むなく、其處から引返した。

我の頭上を蔽つた空間とはまだひとつにはなつては居らないけれども、それでも、我々人間の見ることの出來ないやうな美しいところださうだ。古から、それでも、五人や十人は此處を越えて、向うまでは行けたさうだ。しかし、そこも我々の頭上を蔽つた空間ではないので、矢張失望して、戻つて來るものも偶にはあるといふことだ。』

『"En Route" を作つた人は？』

『此間通つて行つた。』

『トルストイは？』

『あれも通つて行つた。』

『フロオベルは？　モウパツサンは？』

『皆な通つて行つた人達だ。しかし、そこだつて面白い生效のあるところではない。退屈で仕方がないと言つてゐる。』

『私は通れないでせうか？』

『通れるか何うだか、行つて見るが好い。しかし、行つて後悔するよりも、お前は、お前の庵室に戻つてじつとしてゐる方が好いだらう。庵室の中にゐる方がお前には適當だらう。』

『でも、私の庵室の中は、さびしくて寒くつて仕方がない。それに、いろいろな形をしたものが日夜に

てるのを私は見た。私はやゝ落附いた氣分で歩いた。

不思議にも、今まで見えなかつた谷が新たに私の前に展開されて來るのを私は見た。下から見た絶壁——到底その上に到達することが出來ないと思つた絶壁が、遙かに下になると共に、更に廣い高い絶壁がその外廓を劃つてるるのを見た。

夕日は美しく谷を染めた。

突然私の路は絶えた。

私はまた其處にゐた人間の形をしたものに訊ねた。

『もうこれから上には行かれないのでせうか？』

『行かれないと見える。』

かう言つたが、『でも千人に一人、萬人に一人、行かれるものもあるといふことだ。』

『それは何ういふ人ですか。』

『よくは知らないが、何でも、藝術とかいふものを持つたものが、これからもう少し先きまで行けるといふことだ。』

『藝術ですと？

『さうだといふことだ。これから先きに行くと、少し平らな綺麗なところがあるさうだ。それはこの我

る。ある川の縁には、石で刻んだ佛像が數千年來寂として並んで立つてゐるのである。

私は、私の庵室の中の生活を振返つて考へた。其處では、いろ〳〵な形をした形相が絶えず私を苦しめた。その中には妻の顏もあれば子の顏もあつた。深く契つた女の顏もあれば、離れずに深く强く絡み着いて來る獸のやうな形をしたものもあつた。ある女は白い衣を着て、髮を長くして、鑢を手にして私の傍に步み寄つた。そして、『これは私と貴方の涙です、この涙の處分をして下さらなければ、私は歸らない。』かう言つて其女は歔欷げた。

顏は鳥で、體は獸のやうなものもあれば、體は蛇で、顏は美しい女のやうなものもあつた。ある時は、小さな小さな子供が十人も二十人も揃つて並んで私の庵室へと入つて來た。

私は戰慄した。

私は下を見ることをやめた。今の場合寺の屋根や窓を見ることさへ、自分には危險に思はれたのであつた。私は眼を閉ぢて岩角に凭り縋つた。

しかし再び眼を開いた時には、幸ひにも、下は霧に一面に蔽はれて了つてゐた。寺の屋根も古い彩色した窓も香烟も何も彼も、この前から消え失せて行つてゐた。私は急いで細い路を上へと攀ぢ登つた。

路は辛うじて續いた。兩側には草もなければ木もなかつた。唯、細い路が絶壁の間を縫つて狹く續い

私の唯一の希望であつた。私は行けるところまで行つて見ようと思つた。谷は愈々狹く、水聲は愈ゝ凄じく鳴つた。ふと見ると石門を前にして、路は絕えてゐた……。黑い滑かな石門の中に、水は泡を立てゝ流れ落ちて行つてゐるが、それから先は見えない……

絕望して、私は其處から引返した。

ある日は、私は私の裏にそゝり立つてゐる絕壁の一角にある細い道を發見して、それを辿つて行つた。

『さうだ、此處に路がある。』

かう思つた私は勇み立つた。私は今度こそその廣い空間に合した空間を發見することが出來ると思つた。絕壁と絕壁との間からさして來る光線の路――たしかにそこだ。かう私は思つた。

少し登ると、平らなところがある。そこから見ると、下に寺が見える。人間の心理の各方面を象徵した尖つた屋根と開いた窓とが見えた。古い彩色の加はつた窓に日の反射するのが美しく輝いて見えた。

私は立つてあたりを眺めた。

私は種々なことを想像した。あらゆる愛慾とあらゆる煩惱とを持つた人間と、そのあらゆる愛慾とあらゆる煩惱とを持つた人間を摸した佛像との相違などを考へた。そしてその大きな佛像がその寺の中にあつて、その前にある大きな扉に面して大勢の善男善女が蟻のやうに集つて來てゐるのである。香烟が遍ねくその山の半腹に靡きわたつてゐるのである。唄音と鐘聲とがその下界に滿ちわたつてゐるのであ

『行つたことはない。此處まで來たものさへ既に少い位だ。』

『誰か行つたものはないでせうか？』

『行つたものはあるかも知れん。しかし私はまだ聞いたことはない。生と死との間の谷がこれから始まるといふことだ。』

『生と死との間の谷？』

『さうだ。』

『行く道はないでせうか？』

『あるといふことは聞いてゐる。しかし、私は行つたことがないから知らない。』

私は默つて狹い石門のやうになつてゐる絶壁の方を見た。

『行つたものゝ話では、この石門を越えると、ひろい野があるさうだ。その野は我々人間の頭上を蔽つてゐる空間と同じ空間で、ひろ〴〵とした好い處だと言ふが、それには――そこに行くには、祕密な愛慾と恐ろしい煩惱とピストルと經文とを持つたものでなければ行かれないといふことだ。』

『難有う。』

かう言つて私はその人間にわかれた。

私は猶ほ谷川に沿つて下つた。我々の頭上を蔽ふ空間――その空間に一致した空間に出る事は年來の

折れ曲つた谷は、絶壁に添つて、處々に凄じい泡立つた潭を開いてゐた。鳴る音は巨人の叫びのやうにあたりに反響して聞えた。

谷に添つた路は、初めは廣く坦々としてゐた。草花などが路傍の藪を美しく彩つてゐた。渡るべきところには橋あり、橋のあるあたりには人家があつた。そこには戀もあれば物語もあつた。人間の形が嬉々として其間を通つて行つた。

しかしさうしたものも次第に見えなくなつて、谷は益々狹くなつた。絶壁と絶壁との間に水は怒號して流れ、細かく折れ曲つた谷は、行つても行つてもつきやうともしなかつた。

ある期待とある希望とを抱いた私は、疲れ果つるまでその谷川に添つて下ることをやめなかつた。丘と丘との間をも越えれば、山と山との間をも攀ぢた。ある暗い林の中からは、その下に白く泡立つた瀨の渦巻いて流るゝを見た。林からやゝ開けたところへ出た時には、あるものを前に發見したやうに、ほつと溜息を吐いた。

私は人間の形をしたものに訊ねた。

『この末は、何うなつてゐますか？』

『行つて見なければわからない。』

『行つたことはありませんか？』

う思つてをり〳〵その黑い滑らかな絶壁を見上げた。
ある日、私は驚くべき壯嚴な落日の光景を其處に見出した。それは何う形容して好いか、何う描寫して好いか、私にはわからないほどそれほど美しいものであつた。切立つたやうな絶壁と絶壁との間から、靜かに靡いて入つて來た光線は、一時暗い谷を極樂境のやうに明るくしたばかりではなく、あらゆるものを輝かし、あらゆるものを閃かし、あらゆるものをして光彩陸離たらしめるに十分であつた。光芒のない日輪は、丁度絶壁と絶壁との間に金環のやうに輝き、その餘光は深く曳いて谷の隅々までを遍く照した。
私は眺め盡した。
私の心は明るく、私の胸は爽かに、私の魂は歡喜に顫へた。『いかなる日、いかなる時、かうした落日があつたであらうか。いかなる日、いかなる時、かうした壯嚴な光線が私の胸に滲み込んで入つて來たであらうか。』しかし見よ。そのかゞやきは、次第に薄く、その歡喜は次第に消えて、谷は再びもとの暗黑にかへつて行くではないか。
見よ、美しい日輪は、絶壁の陰に、光線は次第に斜めに、明るい輝きは次第に茶褐色より灰色に……谷はもとの佗しさと寒さと淋しさにかへつて行くではないか。
ある日は私は谷川に添つて下つた。

と同じ私だ。燃える火は矢張私の體の中に凄じい焰をあげてゐる。感情は四圍にそゝり立つた尖つた絶壁のやうに、矢張私を取卷いてゐる。

圍爐裏の火の燃えてゐるところから、奥に入つて行くと、其處に、さう大して廣くない一室があつた。その隅には、机が置いてあつて、種々な書籍やら、日記やら、反古やらが一杯載せてある。その中には法華經の斷冊もあれば、フランス革命史の一冊もある。"En Route."もあれば、燃えた火の餘燼とも言ふべき『戀日記』もある。卓の上には、ピストルが一つ載せてあつた。

その一室には、いつも朝と夕とに靜かに光線がさし込んで來た。それは黄い佗しいしかし明るい光線であつた。そしてその光線は、破れた窓の間から、こつそり忍び込むやうに、室の中を照し、卓を照し、ピストルを照し、机の上の書籍を照し、最後に私のさびしい顔を照した。

そして暫くすると、その光線は、一日の勤めを終へたかのやうに、靜かにさびしくその窓から消えて行つて了ふ。そして卓の上のピストルは、再び薄暗い佗しい光の中に沈んで行つて了ふのであつた。

谷の底の底にゐることを私は意識せずには居られなかつた。それは深い深い谷の底だ。出ようにも出ることの出來ないやうな谷の底だ。それを出ようとするには、少くともその周圍を圍んだ凄じい恐ろしい絶壁を攀ぢ上らなければならなかつた。あまつさへ、その絶壁には、足場とすべき岩もなければ草や木もない。一條の蔓すらもない。私は永久に、さうだ、永久に其處から出ることが出來ないのだ……か

絶壁

私は默つて圍爐裏の火の燃えるのを眺めた。外には凄じい風が山の巓を渡つて、それが谷から谷へとわかれて落ちて行く。と底の底にある深い谷川が、四方にそゝり立つた絶壁に反響して、凄じい音をあたりに漲らせた。

大きな丸太に移つた火と、渦のやうに簇り上る黑い濃い煙とを私は唯凝と見た。

私は屈曲した細い谷川を想像した。そこには一つの岩があつた。そこには水が一ところ深い潭をつくつて靜かに淀んで流れてゐた。繩のついた桶を其深潭に投じて、毎日そこから水を汲んで來る人間、汲み上げた水桶を擔つて靜かに林の間の道を辿つて來る人間――それは私だらうか。

私は何年も滅多に口を開かない私を其處に見た。それは曾て、『人間は皆な孤獨だ。何をすることも出來ない孤獨だ。人間は種々な言葉、種々の表情、種々な心を持つてゐるけれども、それは唯一人々々の言葉、表情、心で、互に理解されずに話をしたり思つたりしてゐるばかりだ。』かう言つたことのある私

つて行かなければならない。」

かれの頰には淚がひとり手に流れて落ちて來た。

な本山も得ることが出來ずに、さびしい朝夕をその汚ない狹い下宿屋の二階に過してゐた。鬚の濃く生えた、體格のがつしりした、緊張したかれの姿は猶をり〳〵その巷頭から街の方へと歩いて行つた。

八

ある日、Gの大きな街の通りをかれは靜かに物を考へるやうにして歩いてゐた。

ふと見ると、かれの前には大きな鳥肉問屋があつて、その店には、はつぴを着た若い者などが其處此處に集つて、頻りに鳥の肉を料理してゐた。一方には鷄やしやもの入つた平たい籠が澤山に重ねられてあつて、羽と羽と重なり脚と脚と重なり嘴と嘴と重なり合つた中で、一匹の雄鷄が頻りにときをつくつてゐるのを耳にした。

かれは夥しく撲たれた。

まさか立留つて見てゐるわけには行かないので、靜かに、同じ足取りで、此處へ二三歩歩みをつゞけて來たが、熱い涙が全身に漲つて溢れて來るのをかれは感じた。『あれだ、あれでなければいけない。あゝした籠の中にゐて、いつ殺さるか知れない身でゐながら、生命のある中はあゝして快活にときをつくつてゐるやうな、さうした强い心でなければならない。世尊が死に面してあの大きな敎を説かれたのも、その强い張りつめた心があらはれたからである。その强い心！　その心は飽くまでも、死にまで自分も持

立つた人達に託さうと考へてゐた。それが、妻や子供に對するかれのせめてもの情だと思つた。

『勉強しなくつちやいかんよ。』

『え。』

『若い中に勉強しないと、大きくなつてからは、いくらしたいと思つたつて、いろ〳〵事が多くつて勉強なんかしてゐられなくなるんだから……』

『え。』

『それでも、お前そんなに難かしくはないだらう、東京の學校でも……』

『英語がちつと難かしい。』

『さうか、英語はむづかしいか。數學は何うだ……』

『數學は大丈夫だ。』

『さうか。數學はお前は出來る方だな。』ちよつと考へて、『何でも勉強するんだ。そしてえらくなるんだ。』

男の兒は點頭いて見せた。

都會の花の盛りの頃に出京したかれは、その花も散り、若葉青葉の色も濃くなり、時々散歩に出かけて行く日比谷の公園のさつきが明るく初夏の日にかゞやく頃になつても、まだ、何處にも入つて行くやう

『え。』
かれは慈愛ある父親らしく、ベルを押して、女中を呼んで、近所の菓子屋で、子供の好きなくづ餅を買つて來させたりした。
『父さん、まだ、用があるの？』
『うむ。』
『ぢや、まだ、中々國には歸らないんですか？』
『うむ、まだすこしゐる。ことに由ると、半年ほど山に行つて來なければならなくなるかも知れない。』
『山つて？』
『山のお寺へ。』
『さう。』
かう言つて何も知らない男の兒は菓子を口に入れた。
かれは悲しい辛い氣がした。かれは愈々山に入らうとする時には、その時には、詳しくそのことを手紙に書いて、國の方へも、または友達の群にもそれを知らせる決心をしてゐた。かれは田舍にゐた時分に、ちやんとしらべて置いたその財產の處分を、たとへば妻と幼い女の兒達に與へるもの、または東京に出て來てゐる男の兒の學費にすべきもの、さういふものを一々明細に書いて、そしてそれを親類の重

『今日は何うした？』
『日曜日です、今日は。』
『さうか、何うだ、面白いか。』
『え。』
莞爾して、『今日、母さんのとこに手紙を出した。』
『さうか。』
ポッケットから紙片を出して、
『父さん、かういふ本がいるんです。』
かれはそれを取つて見て、
『一册、二册、都合、五册ゐるんだな。よし、よし、買つてやる。その代り、勉強しなくちやいけないぜ。』
『え。』
『下谷の方は何うだ？』
『別に……』
『よくして呉れたらう。』

つんで行くより他爲方がない。』實際さうだと貞助も思つた。田舍にゐた間にも、かれはよく寺に行つた。僧侶とも話した。しかしその會話は決してかれを滿足させなかつた。成ほど友達の言ふ通りに相違ないとかれは思つた。

かれはまた曾つて知つてゐる名高い僧をも訪れた。そこでもかれはその決心に共鳴して貰へた。

七

しかし、下宿屋の二階に一人ぽつねんとしてゐると、さびしさが、悲しさが、過去の追恨が、ある處からある處へと行く途中にあるものの疑惑が、いつもかれを脅かした。かれは獨り立つて、無限に眼の前に連つてゐる瓦甍を眺めた。

巴渦の中に沒頭してゐた時分の彼、功名にあこがれてゐた頃のかれ、熱中して政治運動に奔走したかれ、酒と女に沈湎した彼、かう思ふと、その間を縫つて、母親のめぐみ深き情が顧みられ、Sの觀音堂に放つた毛の逆立つた鳩が見え、暗いさびしい且辛かつた家庭が見え、幼い女の兒達にわかれて來た悲哀が押寄せて來た。半白にして、かうした悲しい路にある自分の不仕合せなども脈々として迫つて來た。

さうしてかれの思ひ耽つてゐるところへ、何うかすると、何も知らない男の兒が、新たに入つた學校の新じい制帽制服をつけて、トン／＼元氣よく階段に音を立てゝ入つて來たりした。

た。それが貞助にはさびしいさびしい心を誘つた。しかし何うすることも出來なかつた。この友達などにしても、矢張多くの世間の巴渦の人である。それから一步も先きに出ようとはしない。また出ようとも思はない。自分に追はれて唯一生を外面的にすごして行く人達である。世間的効果のあらはれ如何ばかりを見て、輕々に人間の價値をきめて了ふ人達である。かう思つたけれど、かれはそこまで入つて行かなかつた。かれは唯男の兒を託して、そして其處から出て來た。

かれはその日から、かれの知つてゐるいろ〳〵な人々を訪ねた。昔の友達の家を郊外に訪ねた時には、その友達が心から自分の心に共鳴して呉れたので喜び勇んで歸つて來た。その友達は言つた。『それは面白い。非常に意味のあることだ。是非それはやりたまへ。覺醒には遲いと言ふことはない。死に面してからでも覺醒は來る。しかし、肝に銘じて忘れてならないことは、その大悲大慈と言ふ積極的の心持を失はないことだ。それさへ持して居れば、いかなる生活も立派な生活である。いかなる漂浪者も立派な漂浪者である。』かう言つた友達の眼は一種の輝きを放つて見られた。友達は無論、さういふところがあつたなら、喜んで君のために世話すると言つて呉れた。

また、その友達は言つた。『しかし、本山と言つても、今の僧侶の中には、高德の師は實に晨の星の如くである。容易に得られない。從つて君が行くにしても、本山といふものに重きを置いて行つてはきつと失望する。今の僧侶に多きを望むことが出來ない。それよりも、君のその一心を賴りにして、修行を

それでも、妻子はまだ安樂に暮して行かれる。唯、男の兒が一番氣がかりだが、これも、君が監督して見て吳れるといふから安心した。あれも親の慾目かも知れないが、馬鹿ではないから、自分で獨りで立つて行くだらうと思ふ。唯、過失のないやうに、君に保護して貰ひさへすれば――』

『それで、僧になつて、世捨人にならうと言ふのか。』

『世捨人？　馬鹿を言つて困る。捨てるどころか、世を救ふ志を持つてゐるのだ。何んなにすこしでも好いから、本當に人間のためになりたいと思ふんだ。そのための發心だ。そのための修養だ。』

『ふむ……』

と友は考へて『しかし、妻子を捨てるといふことは？』

『捨てはしない。しかし、妻子を養ふために私は生きてゐるのではない。妻子としても、本當に、私の心を知つたならば、決してそれを捨てたなどと單純に思ふべき筈のものではない。』

『で、その行くところはきまつてゐるのかえ？』

『いや、これから搜さうと思つてゐる。先づ子供の方をきめて、それがきまつたら、何處でも好い、本山に行つて、然るべき高德の師をさがしてもつと修養しやうと思ふ。』

『ふむ、さうか。それも好いだらう。』

かう友達は言つたが、この上言つたところで爲方がないと言ふやうにして、話を別の方に持つて行つ

『それは、誰にも話さないで來た。ひとりで今まで自分の腹の中に祕めて來た。しかし、男の兒を君に賴むにつけ、また、君がそれを引受けて吳れたにつけ、その厚意に對して話すが……』

『何う？』

『私はこれから宗敎に入つて、自分の本當のことをしやうと思ふ。これまでにも隨分このことについては、長い間考へた。』

『それで、何うしやうと言ふんだ？』

『先づ今までの生活をこゝで斷ち切つて、大きな寺なり、本山なりに入つて、自分の修業をしやうと思ふ。これについては隨分考へた。二年も三年も考へた。もつと考へた……。私も折角人間に生れて來た。これまでのやうなことをしてゐたのではいつまで經つてもしやうがない。句切がつかない。今、斷乎として句切をつけて了はないと。これからも今までと同じやうな生活をして行かなければならない。それでは自分の一生が無駄になる。で、今度は斷乎とした決心をした。』

『さうか……』

かう言つて友達は考へるやうな顏の表情をして、

『田舍の方は何うする？』

『何うかなるだらうと思ふ。祖先の財產は、爲體な生活をしたためにすつかり蕩盡して了つたけれど、

の漂浪者、落伍者がある。さうして見れば、本當の落伍者はさうした人達のために役に立たないであらうか。』

かれは街頭の賑やかな群集の中で、または淒しい虚榮の巴渦の中で、毛の逆立つた鳩のことを考へたり、旅の男をめぐんでやつたことを考へたり、また故郷に置いて來た妻子のことを思ひ浮べたりして歩いた。

幸ひにも、男の兒は、初めの學校の入學には失敗したけれども、二度目の學校には、首尾よく入學することが出來た。

かれは安心した。

郷黨の子弟のために、監督をしてゐる人の家に男の兒を賴みに行つた時には、久し振ではつと呼吸をついたやうな氣で、此頃滅多に口にしなかつた盃を手にしたりした。それに、その監督をしてゐる人は、親しいといふ間柄ではなかつたけれども、昔から一緒に遊んだ友達の一人であつた。

『で、君は何うする?』

かうその人は訊いた。

『私には志すことがあつて……』

『何う?』

飛行機は飛揚するけれども、心の方面については人間は何等の不安をも持たず、また何等の進展をも示してゐなかつた。それに比べて、男の兒の眼は、その賑かさに、またそのめづらしさに驚き且つかゞやくのをかれは見た。

男の兒をも憫むやうな氣分に滿たされてかれは賑やかな街頭を步いた。

かれは二三日は男の兒のために、都會のあちこちを步いて見せた。花をも見せてやつた。飛鳥山にもつれて行つてやつた。博覽會へも行つた。旨い牛肉をも食はせた。そしてかれは步きながら、昔、靑年時代に通つたり住んだりした時分のことを思ひ浮べつゝ、それを今の心の境遇に比べて見た。かれは泣きたいやうな氣がした。

『漂浪者――落伍者。』

かういふ氣がをり〳〵强くかれの胸をついて來た。しかし、さうした弱い心を彼はいつも强く押へた。

『漂浪者でも好い。落伍者でも好い。しかし、本當の漂浪者、本當の落伍者といふ心持は、人間のためにならないであらうか。自分がかうして都會の塵埃の中を步いてゐるといふことは人間のためになつてゐないであらうか。落伍者でも本當の落伍者であれば好い。漂浪者でも本當の漂浪者であるば好い。さうすれば、却つて落伍者は落伍者でなくなり、漂浪者は漂浪者でなくなるのではないか。世間には、無數

いから、寺の本山のあるところに行かうと決心した。

殊に、かれに取つて幸ひなことには、かれが青年時代に交を結んだ友が東京にゐて、それとの年始狀の交換が今だにつゞいてゐるといふことであつた。その他にも、かれの知つてゐる僧侶が二三あつた。

暖かい南の國では、春の來ることが早く、男の兒がK市から學校の業を終へて歸つて來た時には、桃も櫻も既に散つて畑には菜の花が黄ろく、蛙の聲がそゝるやうに夜もすがら啼いた。かれは默つて行李を修めた。妻にも友人にもその思ひ立については何一言をも語らなかつた。かれは半年ほどを送るに足る金を身につけたのみで、幼い女の兒のまつはるのを振り切つてそして停車場へと急いだ。かれはもう一生見ることはないであらうと思はれる故鄕の山々を見返りながらSの觀音堂に向つて心中に合掌した。

六

數日後には、かれとその男の兒とは、都會の眞中にある大きな停車場からさう遠く離れてゐない細い巷路の中にある下宿屋の二階の一間にその身を發見した。

貞助の眼にふれるものは、大小の區別があり、また一國の首府と一村落との區別はあるけれど、そこに生息してゐる人達のすべての營みは皆なかれのこれまで經て來た世間の混雜した巴渦にすぎなかつた。そこには權力の爭鬪、名譽の爭鬪、戀の爭ひ、慾の爭ひ、さうしたものばかりがあつた。自働車は飛び

周圍をめぐる山、靑い美しい田、豐饒な畑、少し行くと見える海。さうしたものもかれには何の意味も愛着をも與へなくなつて來てゐるのをかれは日々に感じた。時にはかれはひとりで、あとに殘つた財產を調べて、その財產が妻子及び一家を支へて行くことの出來ることを考へて、直ちにそれを實行しようかと思つた。かれは昔のやうにもう盃をも手にしなかつた。好きな煙草の道具も、人にやつたり何かして了つた。

さうした思ひ立をいつも力強く遮るものは、妻でもなければ、一家でもなく、世間でもなく、唯、あとに殘る幼い二人の女の兒であつた。その幼い罪のないものが片親に離れて生長しなければならないといふことは、かれにはいつも淚を誘つた。しかし、さうした愛着に捉へられてゐては、いつまで經つても自分の志を遂げることが出來ない。自分を本當に生かすことが出來ない……。かう思つてかれは强ひてそれを抑へた。

この出離の決心を固めるまでには、かれはかなりに長い月日を要した。思ひ立つて思ひ止り、思ひ止つてはまた思ひ立つた。しかしK市の中學校に行つてゐる男の兒が漸くそれを卒業する頃になつて、かれは漸くその決心をはつきりときめた。

かれは男の兒と一緒に東京に出ることを計畫した。男の兒を然るべき學校に入れて、そしてそれから自分の本當の道を行かうとした。かれは何處でも好

は、新しい生を望む心が常に漲るやうに湧き返つて來てゐるのを感じた。

妻のため、子のため、または一家のためにも、心を盡さなければならないのは無論であるけれども、それ以上、かれにはかれの爲なければならない使命があるやうな氣がした。かれはこれまでやつて來た事業、また努力したと思つてやつて來た事業、世間のためまた村の人のために盡した事業、乃至は家庭や子女のために盡した事業、及ばずながら時には國家のためにも盡したと思つた事業、さうしたものはすべて泡幻のやうなもので、皆な一つ〳〵消えて亡くなつて行つて了つたことを考へた。深く考へると、かれはこれまで何一つ、本當のことをやつてゐないのであつた。母親の切なる願望により、または觀世音菩薩のめぐみに由り、兄の死に代つて世に生れて來たといふやうな深い因緣を持つてゐる身でありながら、何一つそれに酬いるやうなことはしてゐないのであつた。かれは決してその目覺めの遲く、既に人生の半以上を過ぎた身であることを慨きはしなかつた。かれはこれからでも決して遲くはないと思つた。何んなに些かでも好いから、本當のことをしたいと思つた。

從つて、世間のことにはすべて顏を出さなくなつたかれも、附近のK市やまたそれよりやゝ遠く離れてゐるM市あたりに、名僧、名士などのやつて來る時には、何を措いても必ずその話を聽きに出かけた。しかしかれはいつもそこから失望して歸つて來た。いかなる名僧もかれのためには何等の光明をも與へて與れなかつた。かれ等の說くところは多く世間のことにすぎなかつた。

るのである――。しかも、その心を一轉換しさへすれば、皆な善に歸するのである。悪人とてはゐないのである。かれは今日は好い功徳をしたと思つた。鳩の群を寄附した時にも増して好いことをしたやうな氣がした。かれはその一日愉快に煩雜な仕事に從事した。

五

三女の死の床の唇から目覺めさせられて、それからずつと糸を引いたやうに續いて來てゐる他界に對するかれの心のあこがれの萠芽は、實世間に於けるかれの家產の蕩盡、物質の缺乏、ぢり〳〵と押し寄せて來る生活の重荷と反比例をなして、益々かれの心に濃やかになつて行つた。かれは古びた暗い家の空氣の中に、多い子供達の喧しく騷ぐ聲の中に、または、半ば老いた妻の日增に愚痴つぽくなつて行く言葉の中にひとり寂然と坐つて、法華經を讀んだり、また阿彌陀經を誦したりした。鳩を放つたり、旅の男に金をやつたりした時からはもう一二年を過ぎてゐた。かれはもう村長をもやめて了つた。あらゆる政治上の運動には振り向いても見なかつた。常に往來した人達とも疎く疎く暮した。

勿論、家產を蕩盡したと言つても、昔からの家柄であり、田地などもまだいくらか殘つて居て、一家が衣食するに困るといふやうなことはなかつたのであるけれども、またその總領の娘は望むものがあつて親類に養女にやつたり、長男はK市の中學校に通はせてあつたりするのであるけれども、貞助の心に

『K町です。』
『東京にも行つたことがあるのかな。』
『え、昨年まで東京に行つてゐました。いろ〳〵な苦勞をしました。人間は、親でも兄弟でも、友人でも、何でも彼でも、皆な敵だと一時は思ひました。皆な自分を滅さう滅さうとしてゐる奴ばかりがこの天地に充滿してゐると思ひました。』
『自分一つの心で、さういふ氣にもなるのだ。そして益々辛くなつて行くのだ。』
『わかりました。よくわかりました。貴方が一番先きに、劍の刃の上を渡つてゐるやうな生活ぢやないかと仰有つたが、あれがグッと胸に應へました。もう今日からこんな眞似は致しません。』
『それは、嬉しい。私のやうなものの言葉も君の役に立てば、それこそ何んなに本意だかわからない。』
かう言つて、かれは財布から金を少しばかり包んで男に渡した。男は始めは手をも出さぬやうに恐縮してゐたが、度々勸められて、漸くそれを自分の懷に收めた。そして厚く禮を述べて役場の門から出て行つた。
貞助はぢつとそのさびしい後姿を見送つた。と、艱難の多い人間の生活といふことが深く脈々としてかれの眼に簇つて來た。何も知らずに、さうした辛い心の生活を行つてゐるものは世間に澤山に澤山にあ

相だ……。』

『わかりました。わかりました。……申譯がありません。』

涙がほろ〳〵と疊の上に落ちた。

『人間は皆な同じだ。無理なことをして辛くないものは一人もない。わかつて呉れてうれしい。』

『いゝえ、始めて……始めて……。目が覺めました。貴方のやうに、人の肺腑を貫くやうに仰しやつて下すつた方は、これまで一人も御座いませんでした。』いくらか頭をあげて、『よくわかりました。實際です。實際、あなたの仰しやる通りです。辛い道を通つて來たのです。かうしてあちこちに參つて、ゆすりがましいことをするのは、快して樂では御座いませんでした。しかし、これまでさうした方は、一人もありませんでした。皆な敵として私に對してきました。冷笑、罵詈、時には追ひかけられて棒でなぐられたりしたこともありました。そのために、くやしいが昂じて、人間のすべてを敵と見るやうになりました。……實際、貴方の仰有る通りです。辛い辛い生活でした。』

『それもすべて心だ。心の持ち方如何に由つて、敵にもなり、味方にもなる。善人にもなり惡人にもなるんだ。君はそれでもよくわかつて呉れた……。何處だ、君は？』

『K縣です。』

『K縣は何處だ――』

つて歩いて、それを得意にしてゐる人間ぢやない。私などと矢張同じ人間だ。働きさへすれば、そんな辛い路をわたらなくても、いくらも生きて行くことも出來る人だと思ふがな。人のいやがるものを無理に取るといふことは大抵な骨折ぢやあるまいと思ふがな。決して樂にや出來まいと思ふがな。そしてその得たものは、僅かに一日の食に費して了ふ位のものしか取れないぢやないかな。私も、君も同じ人間だ。だから、困つた時にはお互に助け合ふのが當り前だ。出來ることはしてやる。しかし、さういふ辛い劍の刃の上か、でなければ焰の上をわたつて行くやうな君は可哀相だと私は思ふな。金で助けるのはわけないが、それ以上に、もつと、君をその辛い生活から救つてやりたいと私は思ふのぢや。』

見てゐると、初めは昂然としてゐたその男の頭は次第に垂れて、かう貞助が言つた時には、男は上を仰ぐことも出來ないやうになつてゐた。涙も催して來たらしかつた。

『何うも、申譯がありません……。』

『さうか。君は私の言つたことをきいて吳れたか。それはうれしい。人間として、同じ人間として、さう早く私の言つたことを聞いて吳れるのも、これも何かの緣だ……。人間は何處に行つたつて辛いことばかりだ。正直に、本當に働いて行つてゐたとて、辛いことばかりだ。私なんかだとて、その苦しみは、君といくらも異つてゐやしない。人間には劫と言ふものがあつて、それが滅して了はなければ辛いにきまつてゐるものだ。それを、君のやうに、小さく求めて辛い道に行くこともあるまい、それが可哀

打解けた、しかし何處かに重みを持つた態度で貞助は言つた。

男はちよつと尖つた機先をそがれたやうな顏の表情をした。

男が何か言はうとするのを、それはもう言はないでもわかつたといふ風に貞助は手で遮つてとめて、

『わかつてゐる。わかつてゐる。よろしい。君の欲しいものは、私がやる。村でなしに私がやる。しかしその前に、ちよつと話したいことがある。』

ぢつと男の顏を見て、

『困つた旅客ぢやか、それともさうでないかは、私が見ればちやんとわかる。一番先にきくがな、君も私も同じ人間ぢやが、君のやうにして世の中を渡つて行くといふことは辛くはないかな。』

『…………』

『私は辛いぢやらうと思ふがな。決して樂ぢやないだらうと思ふがな。私達の方は、貰はれる方は、やつて了へばそれで好いんだが、君の方はそれからそれへとさぞ辛いことだらうと思ふ。何故なら、君などは言つて見れば、劍の刄の上を渡つて世を送つてゐるやうなもんぢやないかな。』

『…………』

『辛いにきまつてゐると思ふな、私は――。何故、さういふ辛い世間の道を渡つて行くのだ。かうして見たところ、君だつて、決して惡人ぢやない。何うしても、私の眼には惡人とは見えない。人をゆす

よ。』

『で、何て言ふんだ？』

『村長さんに是非逢ひたいッて言ふんですがね……。村長さんは、今、村のことで協議中ですからッて斷つて來たんですがね。』

『よし、よし、私が逢つてやる。』

かう貞助は落附いた態度で言つて『少し待たして置いて呉れ給へ。』

貞助は此方に戻つて來て、猶廿分ほどいろ〳〵と村のことについて協議をしたが、ひまを見て、

『ちよつと待つて下さい。壯士見たいな奴が來てるさうだから。』

かう言つて、靜かに、その事務室を出て、廊下を通つて、そこに待たせてあるといふ一間へと入つた。

かれの眼には、まだ年の若い、神經質らしい、背廣を着た痩せた二十五六の男がいやに堅くなつて坐つてゐるのが映つた。

かれは靜かに入つて行つた。

その男は入つたかれを觀察するやうにして、鋭い眼附で、敵にでも對したやうにして、じろじろとかれを見詰めた。

『ヤ、私が村長だが……。』

『何ッて言ふんです？』

かう他の一人が訊いた。

『中々、ちつとや、そつとぢや、動きさうもないや。』

『何ッて言ふんです？』

『補助するのが當り前だッて言ふやうなことを言ふんだ。』

『困つた奴だな。』

ふとさうした會話に耳を挾んだ貞助は、

『何だな。』

『なァに、北士見たいな奴がやつて來て村長なり書記になり逢ひたいといふんですが、私が行つて見たんですが、中々しぶとい奴でしてな、金でも貰はなければ、動きさうもないんです。』

『何んな奴だえ？』

『若い男です。』

『年は？』

『二十五六でせう。扮裝だつて、そんなにわるくはないんですよ。小綺麗な背廣か何か着てゐるんですよ。何でも、あちこち荒らして來たらしいですよ。昨日あたりS村の方にも入つて行つたらしいです

その時分、村から村へとわたつて行つて、ゆすりに近いやうな行爲をして歩いてゐる若い旅の男があつた。何處の村でも、さういふものに取り合つてゐては、何んなわるいことをされるかも知れないといふので、何處でも言ふなりにいくらかづつ金をやつて、そしてその村から一刻も早く別の村に行つて貰ふやうにした。

四

田舍のことであるから、今度に限らず、さういふことはこれまでにも隨分度々あつた。壯士のおちぶれ、不良青年、無錢旅行者、浪花節語、さういふものがよく入り込んで來ては平和な村を荒らした。さういふ人達は、多くは、普通のおとなしい乞食とは違つて、いくらか綺麗な扮裝をして、かうして旅で困つてゐる者は當然村で助けるのが當り前だといふやうな態度で、押强くやつて來るのが例であつた。一二里も隔てたところにある分署の巡査などをかれ等は殆ど眼中に置いてゐなかつた。

ある日の午後、貞助は役場で事務を取つてゐた。丁度忙しい村の事業の計畫のある時で、重立つた人達が寄り集つて、頻りにいろ／＼協議をしてゐたが、ちよつとと言つてさつき席を外して行つた書記が再び入つて來て、

『厄介な奴だな。』

かう訊かれて、貞助も立つてその籠の傍へと行つた。

『それそれ、そこにゐるだらう。』

『はア、なるほどな。人間なら十二代、十二代と言へば、四百年ぢやな、まア、その間、魂が何處かに行つてゐたかな。あゝ勿體ない、觀音さまのお生れがはりかも知れねえ……。好い功德ぢやな、お前さま……。』

かう言つて老婦は再び手を合せた。

この主婦の態度が貞助には非常にうれしく感じられた。まだ世は末ではないと思つた。で、かれはそこでしばらく休んで、再び車を曳いて出かけた。自轉車がすうとその傍を掠めて通つて行つたりした。

Sの觀音堂では、かれはしかしその毛の逆立つた鳩の話は、つひに住職にはしなかつた。今の寺の僧達には、さうした話も唯通り一遍にしかきかれないといふことを、あの茶屋の老主婦ほどの感銘すら起さないといふことを、かれはよく知つてゐた。さうしたことを說明するよりも、しない方が好いと思つた。かれは寄附の手つゞきをすまして、世間並の住職の感謝の言葉で滿足して、籠を境內に持つて行つて、これまで自分の唯一の伴侶であり孤獨の慰藉者であつた鳩の群をそこに放つた。鳩は皆喜ばしげに飛んで行つた。かれはこれを見送つてから、長くこの寺の境內に住み馴れることを心から祈つて、そして長い間合掌した。昔も今も變らない堂宇には午後の日が明るくさしわたつた。

『でも、いつも丈夫で結構だ。……いくつだな、媼さまは。』

『お前さまのお袋さまよりは、これでも五つ六つ若いだでな……お袋さまはもう少し生かして置きたかつたのに。』

『鳩を上げるのもお袋の功德にもなると思つてな。』

『本當だともな。』

かう言つて、老いた主婦は腰をまげて外に行つて、店の前に置いてある車に載せられた大きな籠の中の鳩の群を見た。種々の毛色をした鳩は彼方此方と飛び違つてゐた。午後の日が斜にさして、向うに海の碧がピカ〱と光つて見えた。

貞助は辨當を使ひながら、その中にゐる毛の逆立つた鳩の話を老婆にはなしてきかせた。老婆は頗る動かされた。

『さうかな。さういふもんぢやな。人間も同じぢやな。死んだつて、だから、魂は生きてるぢや、南無阿彌陀佛……』

かう言つて老婦は手を合せた。

暫くして老婦は再び立つて行つて、

『その鳩は何れぢやな。』

村長が子供と一緒に鳩を載せた車を曳いて行つてゐるので、いくらかあやしんで誰もかれも皆なかう言つて尋ねた。

『Sの觀音さまへ……』

『何しにな？』

『鳩を寄附するぢや。』

『はァ。』

かう言つて村の人達はそのあとを呆氣に取られたやうにして見送つた。

二里の路ではあるけれども、車を曳いて行くのでかなりに手間を取つた。その海の見えるところには、依然として、昔の休茶屋があつたが、そこでは、昔かれが母親に伴れられたやうにして、車をとめて休んで、子供と一緒に辨當を使つた。

此處でもかれは老いた主婦から訊かれた。

『それは御奇特ぢやなし……。』

流石に主婦は、昔からかれを知り、かれと母親と一緒によくお詣りに行つたことを知つてゐるので、かう言つて感心して、

『もう昔になつたな、あの時分のことは――。』

『本當に父さん、何うかしてゐるんだよ。もう少し、本氣になつて、家のことをかまつて吳れないではしやうがありやしない。……村長なんか、いつまでもしてゐては、家がつぶれて了ふばかりだ……。何處か町へでも出て、月給でも取るやうにして貰はなければ――』こんなことを言ふ妻の言葉も、段々家道の衰へて行くにつれて貞助の耳に入つた。

貞助はある日、不意に、その自分の飼つた鳩をすつかりSの觀音堂に寄附して了ふことを思ひ立つた。

それを聞いた妻は、

『あほらしい……。折角世話をして寄附する位なら賣つた方が好いぢやありませんかね。』

『いや寄附する。』

『寄附しなけれやならないわけがあるなら仕方がないけれど……本當に、父さんは、人に物をやることを何とも思はないんだから。』

『まァ好いから……。やかましいことを女は言ふもんぢやない。』

これより他には、かれは別に爭はずに、男の兒と一緒に、十羽ほどゐた鳩を籠に入れて、二里ほどあるそこの觀音堂へと荷車に載せて曳いて行つた。

村の人達は幾人となくすれちがつた。

『何處へお出でですな?』

は度々そこにお詣りに行つた。半は崖のやうなところに祀られてあるその觀音堂、長い長い石の階段、お堂の奥に今も昔も變らずに趺坐してゐらせられる觀世音菩薩、かれはその前に長い間合掌して、熱い熱い涙を流したことも尠くなかつた。

遠い遠い越後の地に墓となつた兄、佛に念ずることを一刻も忘れなかつた母、愚かなる父の魂を甦らせるために生れて來た幼ない兒、さういふものがそこに端坐してゐる觀世音菩薩と一緒になつてかれの眼に映つて見えた。本當の道を知らない以前には、さうした心の連續をもかれは唯々うはの空に見たり思つたりして通つて來た。何うしてそんなことを人間は考へるのだらうとすらも思はずにやつて來た。さうしてかうした悲しい心の周圍を、政治に熱中した後悔や、何も知らずにやつて來た無知や、人間の生活の虚僞や、家產の蕩盡や、妻や子供の何も知らない無意味やが常に繞つた。

かれは先祖からつゞいて來てゐる古い暗い家屋の中に一人ぽつねんとしてさびしく住んでゐるのであつた。

毛の逆立つた鳩は、次第に大きくなつた。かれはその鳩に無限の親しみを感じた。否むしろそれ以上の深い感銘を感じて、その哺育に一方ならぬ注意を拂つた。

『また、裏かえ？　父さんは……。』

などと妻は言つた。

されて、むづかしい問題の衝に當らせられた。

かれの母親はとうの昔に死んで了つてゐるけれども、それでもその母親のことをかれは常に思ひ出した。

三

かれが幼い頃、母親は常に口ぐせのやうにかれに言つた。

『おぬしはな、Sの觀音さまにお參りして、そしてな、さづかつた子ぢやでな、佛さまの御恩は忘れてはならんぞな。それにな、おぬしには兄があつてな、御維新の時に、戰爭に行つて、越後の小千谷といふところで討死したぢや。その討死した日が二月の十五日、その三月にお前が身ごもつたんぢやで、二重にお前は、佛さまのめぐみを受けて生れて來たんだぞ。』

かう言つては母親はいつもかれをそのSの觀音堂に伴れて行つた。長い長い田舍道を母親と並んで歩いて行つたのをかれは今でもはつきりと思ひ出すことが出來た。その途中からは、をりをり海が碧く美しく光つて見えた。そしてその海の見えるところには、小ぢんまりした休茶屋があつて、そこでよく宅から持つて行つた辨當を食つた。白い帆が一つ斜に敧つてゐたりした。

Sの觀音堂は、大きくなつてからも、かれは度々行つて參詣した。母親が死んで了つてからも、かれ

かう言つてかれが傍に行くと、その幼い兒はぽつかり眼を開いて、につこり笑つて父親の顏を見た。父親が口をその傍に持つて行くと、もう臨終であるのに拘らず、幼い兒は強く父親の唇を吸つた。その吸つた唇がかれに人間の深い魂をひらいて見せたのであつた。

『さうだ。たしかにさうだ。……愚な父親のために生れて來たのだ。』

かうかれは今でも思つた。

その頃からである。かれが法華經を手にし始めたのは——。また、人間の魂の不滅であるといふことを感じ始めたのは——。また地獄といふものの死んだ後にも必ずあるものだといふことを信じ始めたのは——。かれは人間の現在の生活の些しも本當の道に觸れてゐないことをつくづく思はずにはゐられなかつた。世間には唯勝敗ばかりがあつた。虛僞ばかりがあつた。欺騙ばかりがあつた。折角持つて生れた魂をわざと盲目にさせて置くやうな生活が多かつた。殊に、地方の政治に熱中したかれには、さうした世間が一層色濃く塗られて映つて見えた。貴重な生命も、魂を蔑ろにしてゐるがために、輕く淺く取扱はれてゐるのをかれは到る處で見た。

かれは今でも村長をしてゐるが、しかし絕えずやめたいと思つてゐる。三女の死んだ頃から、さうしたことはすべてやめて了ひたい。もつと自分のことを本當に考へたいと思つてゐるのであつた。しかし村の人達がそれを許さないほどそれほどかれは村に人望を持つてゐた。何ぞと言ふと、かれは引張り出

熱中のために、父祖傳來の家產を蕩盡した慘めな人達の生活をもかれは澤山に見て來てゐた。また、一時、朝日の昇る勢ひのやうに代議士にまでなつて、そしてまた忽ち亡びて行つて了つたやうな人をも見た。それに、年から言つても、かれはもう若いとは言はれなかつた。それに、かれが政治熱からさめて、靜かに自分の村に落附いた時には、自分の家の財產も尠なからず蕩盡されてゐるのを發見した。

かれは今でも法華經などを手にし始めた頃のことを思ひ出すことが出來た。忘れもしない、それは、かれの三女の死んだ時であつた。それは毬子と呼ばれて、可愛い子であつた。また怜悧な子であつた。かれは何方かと言へば、子煩惱の方ではなかつたが、現に、總領の娘の生れた時にも、次の男の兒が生れた時にも、さうした愛はつひに一度も感じなかつたのであるが、その三女のみには不思議にもかれは心を惹かれた。まだ母親の懷にゐて、無意味に笑つて見せる頃から、その笑顏がかれに取つて忘れることの出來ないものであつた。何等かの不可思議があつて、また何等かのかくれた理由があつて、それでさうした愛着をかれに起させたとしか思はれないやうにかれには思はれた。今日でもかれは思つた。『さうだ。あの子が自分に本當の道を教へて呉れたのだ。心の盲目な親に本當のことを知らせて呉れるためにあの子は短かい生を持つてこの世に生れて來たのだ。』かう思つてかれはいつも獨りで熱い涙を流した。

呼吸を引取らうとする時、

『毬、父さんだよ。』

『よし、よし。』

かれは元のやうに雛を巢の中に入れて、深い思ひに滿されながら、靜かに母屋の方へやつて來た。妻に話しても無駄だと思つたけれども、飯の箸を取りながら、その話をすると、果して妻はのんきなもので、『へえ、そんなことがありますかねえ。』と言つたきりですぐ別の話をした。子供達はそれでもめづらしがつて、『さう、いくつかへつて？　五つ？　行つて見ようや。』かう言つて、箸を置くや否、裏の鳥小屋の方へと驅けて行つた。

二

貞助は村の人達から推されて今猶ほ村長を勤めてゐた。かれは青年の頃、都會に遊學し、歸つてからは政治の方に力を注いだので、地方では政友會派の政治家として一國に知れわたつてゐた。郡會議員にもなつたことがあれば、縣會議員にもなつたことがある。それに、家柄も郷士上りで、財產も相應にあり、物もよくわかつてゐる方なので、他からも人一倍立てられてゐた。しかし、貞助の身に取つては、一時熱中した地方の政治といふものが、いかにつまらぬものであり、またいかに淺薄なものであり、利己でかためられたものであるかといふことを長い間痛感させられて來てゐた。そこには眞實らしい何物もなかつた。人は唯權力の勝敗に沒頭して他を顧みなかつた。力のあるところにのみ人は唯雷同した。その

らも見せなかつた。それが、今になつて、ゆくりなくかうしてあらはれて來ようとは！　かれはまたしても、ぢつとその小さな雛を見詰めた。

不思議な宇宙と人生との交錯がそこに祕密にかくされてあるやうな氣がした。

かれはまた指を折つて數へた。

『人間ならば、十二代後に、その種があらはれたのだ……。』

かう口に出して言つて見た。かれの平生考へてゐる神祕、佛教なぞで言ふ三世の因緣、生死といふことのある力に支配されてゐる形、さうしたものが歷々とかれの身に迫つて來るやうな氣がした。『人間なら、十二代の間、その種は何處かに潛んでゐた形になるのだ。その間、この種は何處にゐたであらう。何處にさまよつてゐたであらう。不思議だ……實に不思議だ。』かう思つて、かれはピイピイ鳴くその雛鳩を掌の上に載せた。

『自分の考へてゐたことは、何も彼も本當なのだ。死んだからとて、この魂だけば何うにもならないのだ。不滅不動なのだ……。』かう思ふと、何とも言はれない難有さが、また力强さが、かれの胸にこみ上げて來た。

其處に、今年十五になる娘がやつて來た。

『父さん、御飯！』

入つた時には、暗くつて何もわからなかつたにも拘らず、暫くすると、かれはそこに思つただけの雛の數が、或は白く、或は灰色、或は黑色に、ピイピイ固まつて小さな聲を立てゝゐるのを眼にした。かれはそゝられるやうな興味を總身に覺えた。かれはそこにしやがんで、一つ一つそれを掌に載せて、そして明るい方へと持つて來た。

毛色の好し惡しや、質のすぐれたのや、生立の行末のありさうなのや、さういふものを仔細に、注意深く檢べるともなく檢べてゐたかれは、ふと、その中に一羽、首のところの毛の逆立つてゐるのを發見して、はつと思つた。

かれは全身の魂がそれに引き寄せられるやうな氣がした。

かれは目も放たずじつとそれを見且つ檢べた。小さな灰色をした毛の逆立つた雛！　つゞいてかれは持を折つて數へはじめた。

一年に四度孵るとして、あれはもう三年前である。かれはその三年前に、別の種類の雄鳩を一つ持つて來て自分の鳩に合せた。そしてその種族の、血の、または系統の雜り合ひ方に注意したことを思ひ出した。またその好奇心が、研究が一度も酬いられずに今日まで來たこと思ひ出した。一度合せて、その別の鳩は他に持つて行くのに任せて了つたが、三度目位にまでは、何とかして、その種が一羽位は雜つて生れて來さうなものだと思つてゐた。しかし、遂にその別の種は今日まで姿も形も、またはその氣勢す

强い心

一

ある夏の朝、貞助は急いで裏の鳥小屋の方へと出懸けた。それは今朝はもう遲くも、鳩がかへつてゐるに相違ないと思つたからである。かれは半ば白くなつた髪といくらか皺の寄つた顔と岩乘な體をした姿とをあたりの晴れた氣持の好い空氣の中に見せながら、野菜の青々と繁つた細い路を向うの方へと歩いて行つた。

朝日は晴れやかに照り渡つた。

鳥小屋——鳥小屋と言つても、小さな物置のやうな處であるが、その前に行くと、かれはいきなり戸をあけた。中はまだ暗かつた。しかもその暗い中にも何處か誕生の氣分と言つたやうなものがそれとなく感じられて、さゝやかな鳴聲と何處となく騷々しい氣分とがあたりに漲りわたつてゐた。親鳩は光線が入つて來たのを見て、急に羽搏きをして、けたたましく屋根裏の垂木に飛び上つた。

ことは考へずに、「これは堪らない。」とかれは思つた。これでは、明方までは、とても眠られさうにもないと思つた。かれはうんざりした。

『もう、お休みなさいよ。』

『うん、寢るにや寢るが、あいつ等けしからん奴だ……』

『まア、そんなこと言はずにさ……。』肥つた女中は、後から押すやうにして、『だつて、ああ二人並べて了つては駄目ですよ、貴方。貴方、あれまで何うもしなかつたの？　さう。』と言つて笑つて、『私は、また貴方のことだから、ちやんとトンと要領を得て、それからかをるを呼んだのだと思つたのよ。さうぢやなかつたの？』

さうだとも言へずに、かれはすごすごと二階に戻つて來た。『しやうがねえ、しやうがねえ。』かう言つて、かれはぐつたりと床の上に身を倒した。

ちよつと眠つたが、ふと何の物音か耳に入つたと思ふと、かれはすつかり眼が覺めて了つた。『はてな――』とかれは思つた。

かれは耳を欹てた。

『はてな、』とまた續いて思つた。今まで少しも氣にも留めなかつた隣の室に――さつき歸つて來て細目にしきりの襖を明けて見た隣の室に、女のゐる氣聲がした。

細々と艶かしく囁く女の聲――『お玉ぢやないかな。お玉だ、お玉が湯から出て行つたんだ。あんなにべつたり白粉をつけて變だと思つた。さうだ、お玉だ。』今まで散々此方が隣の室の客に業を沸かさせた

した。

ぼんやりして、電氣ばかり明るい廊下にぢつとして立つてゐた。

その向うの風呂場に、ふと女中達の湯を使ふやうな氣勢がした。『女中達が仕舞湯に入つてるんだな……』かう氣がついたかれは、厠に行く振りをして、そこからちよつと中を覗いて見た。

『歸つたんだね、あいつ等は……？』

『え、歸りました。』

『怪しからん奴等だな。默つて歸るなんて……主も祝儀も拂はんから好い。』

『だつて、それは無理だわ。』

『お前達が歸したんだね。』

『でも、もう時間ですもの。それに、貴方が歸つても好いつて仰有つたんぢやなくつて……？』

『それは言つたけども、戯談に言つたんだ……。』

『でも、二人とも本當にしてゐたらしいわ……。』

『けしからん奴だ……。』

『だつて、時間ですものねえ。もう、あれからゐたつて、三十分とはゐられなかつたんだもの。』

上つて着物を着てゐた方の女中が、かう言ひながら此方に出て來た。

と言つて、急には起き上れないのを扶け起した。『あ、いた――いた。』顔を顰めながらかをるは漸く立ち上つた。

六

まさかあれきり歸りはしまい――かう思つて、ある期間、床の中で眠つたやうにしてゐたかれは、いつまで經つても、さうした氣勢もなく、あたりがしんとしてゐるのに業を煮やして、再び起き上つて、障子を明けて、廊下へと出て見た。

折れ曲つた階段の上から、下を覗くやうにしてかれは耳を傾けた。

しかし、何の物音もきこえて來なかつた。あたりはしんとしてゐた。柱にかけた時計の針のチクタクと動く音が、それとあたりに際立つてきこえるばかりであつた。急いでかれは階段を下におりた。

誰もゐない。……電燈ばかりが明るくついてゐて、店にも何處にも誰も起きてゐるものは一人もゐない。それもその筈である。時計を覗くと、もう五分で十二時が打たうとしてゐる。

業が煮えて、業が煮えて爲方がない。折角骨折つて、土壇場まで相手を引張つて來て置きながら、巧に、それに遁げられたのが、癪で癪で爲方がなかつた……。『馬鹿!』と自分で自分の口に出して言つて見たが、それは女共に向けられた罵倒の言葉ではなく、却つて自分に向つて放たれたもの丶やうな氣が

『でも、私、厭よ。』

『だつて、お前さん、厭つて言はれた義理ぢやないわ。お前さん、いろんなことを言つたつてね。いろんなことを素破抜いたつてね。えらい腕だわよ、私なんかに氣がねしなくつたつて好いんだから、お前さん、ぐんぐん取つてお了ひよ、ね。』

『あら、とん子姐さん、さうぢやないのよ。私だつて、いろんなわけがあつたのよ。それで、しやうがなかつたのよ。姐さんそんなに怒つてゐちやいやだわ。』

『怒りやしないよ。そんなことを怒つたり何かする私ぢやないよ。お前さんだつて、そんなことを氣がねしてゐる人ぢやないぢやないか……。』

『でも、私、今日は歸るわ。』

かう言つて、かをるは無理に、折れ曲つた階段を下りようとしたので、あとの三段ばかり踏み外して、ばたばたとけたゝましい音をあたりに立てた。

『あ、痛……。』

といつたまゝ、かをるは尻餅をつゝいた。暫しはそこから立上られなかつた。

つゞいて下りて來たとん子は、

『何うしたのさ。』

『…………』

『…………』

『ぢや、歸れ！』

『私に、歸れつて言ふの？　歸つて好ければ歸りますとも……』

さうは言ふものゝ、とん子にしても、かをるが來てからは、かをるを一人そこに置いて自分だけ歸つて行くといふ氣にはなれなくなつてゐた。

『早く歸れ！　役に立たないものが、いつまでゐたつてしやうがない。』

『え、歸るわよ。』

とん子が立つより先きに、かをるが障子を明けて、廊下へと出て行つた。

『かをるさん。駄目よ、出て行つて了つては――私、歸るから、かをるさんゐて下さいよ。』

かう言つて、とん子も障子を明けて、あとを追つて出て行つたが、階段の上のところで、今しも下りかけたかをるを捉へてとん子は何か頻りにゴト〳〵言ひ始めた。

『だつて、姐さん、私、厭よ。』

『厭つて言ふ筈はないわ。何も、私に氣がねなんかしなくつたつて好いぢやないか。そんなことを平生氣がねしない癖に、何うしたの、今日は――』

時計の蓋をそれとなく明けて見たかれは、

『もう、十一時だ！』

さもさも驚いたやうに、何うしてさう早く時間が經つて行つたかを疑ふやうに、またそれと共に、まごまごしてゐると、何うやら今夜もフイになつて了ふやうな形勢に思はれて來たので、いくらかせき心になつて、

『何うするんだね、一體？』

『何をさ？』

フイと顏を上げたとん子は笑ふやうにして言つた。

『何をつて、わかつてゐるぢやないか。』

『私にはわからないわ。』

『分らない奴は、わからないで好いや――お前、歸るなら歸つても好いよ。』

『私？』

いやににやにや笑つて、『かをるさん、私歸つて好い？』

『とん子姐さん、もう少しゐて頂戴よ、一緒に歸りませうよ、もう、ぢき時間が來るわよ。』

『馬鹿な奴等だなあ。』

……………………………………

とん子は此方を見ようともしなかつた。手持無沙汰に、とん子の後のところに來て、かをるは坐つた。

『何處に行つてたえ?』

かれは突然かをるに訊いた。

『もう少しさつきまで、よし屋にゐたのよ。』

『馬鹿に、長いお座敷だつたぢやないか。』

『え、もう、倦き倦きしたわ。』

突然、とん子は訊いた。

『はァさん歸つた、もう?』

『歸つたわ、さつきの汽車で――』

長谷川といふ客は、巴といふ妓の旦那であつたが、それに由つて、とん子は自分の惚れてゐる男の消息を知ることが出來た。その男も矢張、長谷川と一緒に下りの最終で歸つて行つたに相違なかつた。

『はァさん、よろしくつて言つてたわ、姐さんに――。』

『さう――。』

とん子はかう言つたきりで、またぷつつり默り込んで了つた。

『そら、また出たわ。何うして、こちらはかうなんだらうね、姐さん。折角、藝者をあげて、これで面白いのかしら? 理窟ばかり言つて、人のわる口ばかり言つて。それよりも面白く酒でも飲んだり、三味線でか彈いたりして騷いで遊ぶ方が好ささうなものね。』

『大きなお世話だよ。』

かれははき出すやうにして言つた。

とん子はそれには頓着せずに、『姐さん、藝者なんかやめて、學校の先生になるのよ、私。』かう言つてまた筆で字を書き始めた。

女中のあがつて來たのは、實はかをるが下に來てゐるので、それをあげても好いか、わるいかを見に來たのであつた。

『來たのかえ、好いとも、上げても好いとも……。』

かうかれは自棄のやうに言つた。

女中は下りて行つても、かをるは容易に上つて來なかつた。かなりにひどい不見轉で、そんなことは平生何とも思つてゐない方の質であつたけれども、それでもとん子がゐては、流石に心持よくあがつて行く氣にはなれないらしかつた。『とん子姐さん、何うしてゐて? 怒つてゐて?』などと二度も三度も訊いたあとで、びくびくするやうな形で漸く二階に上つて行つた。

見ると、女は、とん子だの、橘はるといふ名だの、かをるだの、お客様だのといふ字を一面にその巻紙の上に書き列べてゐるのであつた。

『おい、何うしたツてば？』

『何うもしないわよ。』

『…………？』

『………………………………………………………………』

『馬鹿！』

また大きな聲でかれは罵つた。

そこに丁度入つて來た女中は、

『何うしたの？　とんちやん？』

『怒つてるのよ。だつて、姐さん、爲方がないわね。私だつて、女だものね。馬鹿にされて、踏みつけられて、それで、默つて、男のおもちやになつてはゐないわよ。』

『いつ、馬鹿にした？』

『今したぢやないの。馬鹿ツて言つたぢやないの。』

『馬鹿！』

『あゝ、あゝ。』

と、かう溜息をついて、かれはごろりと仰向けに寢て了つた。何うも爲方がないといふやうな調子で。

とん子は默つて傍にあつた硯箱を引き寄せたが、丁度そこに卷紙があつたのを幸ひといふ風に、筆を取つて、頻りに字を書き始めた。

沈默の中にまた時は經つて行く。經つて行く。經つて行く。かをるの來る時が――かをるが來れば、何うすることも出來なくなつて了ふ時が――？

かれはもう一度半身を起した。

『そんなに、意地をわるくしなくつても好いぢやないか。』

『私？』

とん子は一生懸命に字を書いてゐた筆を留めて、美しい顏をあげて、『私？　私、意地をわるくしたことなんかないわ。』

『…………？』

『だつて、それは無理だわよ。』（かをるさんが今來るから、お待ちなさいよ。）といふ表情をして見せて、再び卷紙の上に字を書きつゞけてゐたが、『藝者なんか、もうつくづくいやだから、私、學校の先生にならうかしら？……かうして、字を習へばなれるわねえ。』

ませうか。』

『そんなことを言つてやらなくつても好いよ。來るつて言ふなら、來たつて好いよ。』

『ぢや、來るんですね。』

『あゝ。』

女中のトントン下りて行く氣勢があたりに際立つてきこえた。

かれもとん子も默つてゐた。かれは床の中に半ば身を容れて、腹這ひになつて、一本取つて火を點けた朝日をすぱすぱ吸つた。

かをるの來ることを二人とも考へてゐながら、しかもそれについては何一語も互ひに言葉を交はさなかつた。

男は朝日を火に近いあたりまで吸つて、それを火鉢の中に棄てたが、もう一度、とん子の坐つてゐる方へ半身を長く延した。

『……………………?』

『……………………』

『馬鹿!』

『馬鹿だつてしやうがないわ。』

『オイ、オイ。』かれが何か手眞似をするのを、わざと知らないやうに、悟らないやうにして、とん子は別の方を向いてゐた。

『オイ、オイ。』

『何ですよ。』わざと聲を大きく、『煩さいわねえ』といふ語調を見せてとん子は言つたが、矢張そこに坐つたまゝ、身搖きもしなかつた。

『オイ、オイ。』

『……………』

『オイ、オイ。』

『……………………………』

『勝手にしやがれ！』

『するわよ、勝手に――』

とん子も睨めるやうな顏をして、凝とかれを見た。かれも睨め返した。

五

『かをるさんあいたつて言ふんですがね、何うしませう？　もう、來なくつても好いつて言つてやり

すぐ應諾しない女の心の底には『あいつ』がゐるのであつた。さう思ふと、腹立しい氣がつと胸に突きあげて來た。しかしかれは何うすることも出來なかつた。それでは勝手にしろと言つて、打壞して了ふわけにも行かなかつた。二人はまた默つた。とん子は手巾をいぢくり廻してゐた。

かれは考へた。『兎に角、そんな大きな問題は何うでも好い。そんなことはあと廻しにしても、兎に角、今夜はものにしなければならない。ぐづぐづしてゐる中に時間は經つ。』いくらか急き心になつて來たかれは、急に女の機嫌を取り始めた。『なァに一時でも何でも好い。…………………、何うにかまた女の心が自由になつて行くものだから。』かうかれは思つた。

女も段々その手に乘つた。いつまで不機嫌でもゐられないやうに、『本當にあなた位むづかしい人はないわね。そんなに考へずに面白く遊ぶ方が好いのよ。』などと言つた。

ふと、とん子は立つて障子をあけて、下に下りて行つた。厠へ行つたのであつた。

と、かれは急に思ひついたやうに、今の中に、それをして置くに越したことはないと言ふやうにして、………………………………………………………………………

歸つて來たとん子には、それがグッと來たらしかつた。怒りがまさしく起つて來たらしかつた。しかもわざと知らん顏をして、………………………………、瀨戸の火鉢を押しつけられた室の隅のところに行つて坐つた。

『かをるさんは何うするの？』

大きな鐵槌でも下したやうに、とん子は平氣に落附いた調子で言つた。

流石にその鐵槌に打たれたやうにして、かれも默つて了つた。

暫し經つてから、

『まァ、かをるのことなんか、何うでも好いことにして、さういふことにしやうぢやないか。僕が、抱妓を置くと、……そしてあの方は斷然やめると……。』

『…………………』

『斷然やめることは出來ないつて言ふのかね？』

『………………』

『默つてゐちやわからんね。』

『だつて、今すぐそれを言へつて言ふのは無理だわよ。私だつて、母さんにだつて相談して見なくつちやならないんだもの。』

『母さんに相談するのは、いくらでもして好いがね……。それよりもその方をきつぱりして置かなければ――』

『無理だわよ、そんなに急なことを言つたつて……。』

『でもね。あとで、後悔すると、わるいやうな氣がするもの。』
『ぢや、矢張、あの人が思ひ切れないつて言ふ譯だねえ？』
かう言つた言葉には、かなりに強い調子が籠つてゐた。
『すぐあゝだもの、さうぢやありませんよ。』
とん子も思はず強く出た。
『だつて、僕だつて、さうした金を出して一戸構へさせるには、その位のことをして貰はなけれや……その位のことを誓つて貰はなくつちや――。』
『…………。』
『さうしてお呉れよ。な、おい、男の心はわかりさうなもんぢやないか。これでも本當は、眞劒に思つてゐるんだぜ。これでも、都會で幅をきかせてゐる男が、名譽も地位も何も捨てゝ惚れてかゝつてゐるんだぜ。ちつとは考へて呉れても好いぢやないかな。おい、好いだらう。さういふことにしたら好いぢやないか。さうすれや、何もいざこざはちつともない。』
『…………。』
『うむ？　何うだ。いやだ。いやぢやない。イヤに、今日は默つてかんむりをまげてゐるね。好いんだらう？』

しかしさうして打解けずに坐つてゐる女をかれは何うすることも出來なつた。機嫌を取つて、此方に引寄せて來るか、それとも突放して知らん顏をしてゐるか、この二つしかかれには執るべき道はなかつた。

四

段々とん子は口をきくやうになつたが、それを引寄せるやうに、その機嫌の直つて來たのを機會に、再びそれを離さないやうに、熱心にかれは抱妓を置いてやる話などをした。

かれの言ふことをきいて、一方の男を思ひ切れば、『抱妓の五六人は明日にでも置いてやる。』とかれは言ふのである。『一體、いくらかゝる。四五人置くのに？』などといふ方にまでかれは話を持つて行つた。

とん子もいつかそれに引寄せられて、『さうね、五人なんてなくつても、二人か三人で好いわ。それも若いのをねえ。年增は何うしても藝でなくちや售れませんから、駄目ですわ。それに、私がまだ若いんですから。』などと言つた。

『それぢや、明日にも、行つて母さんに話して來ようぢやないか。』

『でもね、大變ですもの。』

『大變なことはちつともないよ。……その位の金なら、いくらでも、すぐにでも出來るんだから……』

つた。怒つて、『だつて、貴方だつて、わるいぢやありませんか。かをるさんなんかに手を出して……かう言つて來ればまだ好いのだが、それさへ言つて來ないのが、かれには物足らなかつた。長い間は默つて坐つた。

やがて混亂したいろいろな思ひやら考へやらの中から、辛うじてある統一を求め得たやうにして、かれは言つた。

『で、結局、何ういふ了簡なんだえ?』

『……………………』

『え?』

『別に、了簡といふこともないんですけどもね。』

かう言つて、とん子は頭を垂れた。

さつき湯に入つてゐた時には、とん子が來て、その美しい顏を見せて、一語二語輕い言葉を交はしさへすれば、二三日來の心の蟠りはそれですつかり除れて了つて、體と體の間に隔てはなくなつて了ふであらうと思つてゐたのに、此方からの出ようが堅かつたためか、それともまた腹の中でかをるとの一條を深くふくんでゐるのか、更にまたかれに對して本當に離れるつもりでゐるのか、兎に角、容易に打解けて來ようとしない女を半ば憎く、半ばもどかしく思つた。

なことは小さなことだよ。お前を本當に思つてゐればこそ、世話もしてやらうつて此前にもちやんと言つて置いたんだ。……それなのに、一昨日も、昨日も、恥を男にかゝせるつて言ふのは、何ういふ了簡なんだね。』

『別に、恥をかゝせたつもりではないんです。』

『ぢや、何故、一昨日も、昨日も來なかつたんだね？』

『…………………』

『矢張、捨てられないんだね。忘れられないんだね。あれほど此前、僕に堅い約束をして置きながら、何うせ、あれは駄目だからなどと言つておきながら、矢張、思ひ切れないんだね。』

『…………………』

『思ひ切れないなら切れないと言つてお吳れな。さうすれや、僕にも考へがないでもないんだから。』

『そんなことはないんですよ。あの時はあの人ぢやなかつたんですからね。』

『うそ言つてらア！　ちやんとわかつてゐるよ。いくらそんなに隱したつて駄目だよ。ちやんと種はあがつてゐるんだから。』

『…………………』

女に取つてかれは爲めになる客であるだけに、強ひてそれに反抗するやうな態度をとん子は示さなか

たー　食つた！』と言つてお膳を押した。
それを餘所に、とん子と女中とは頻りに話した。
『さう？　行つたの？　とんちやん……何う？　面白かつて？』
『さうね。此の前のよりはつまらないわねえ。』
『入りは？』
『入りはかなりだけども……』
『何だ？　活動か？』
傍からかれが大さく口を挿んだ。
『活動ぢやありませんよ。今度のは連鎖劇ですよ。』
かうとん子が意地わるく訂正した。やがて女中は酒だけを殘して、膳を持つて下へとおりて行つた。
暫し二人は默つた。
『一體、お前は何ういふ了簡なんだね？』
思つたのとは丸で違つて、堅く堅くなつてかれが出て來た。
『……………』
『本當のことを話しておきかせな。……昨日や一昨日のことは、そんなことは、何うでも好いよ。そん

暫くして階段を女の上つて來る氣勢がした。と思ふと、その足音は段々此方に近寄つて來て、ぱつたりとその室の前で留つて、やがて靜かにその障子が明いた。

とん子は來たのであつた。

かれの眼は逸早くとん子の眼を逐つた。しかし、とん子はそんないやらしい、見るも腹立しい眼などには眼も呉れないといふやうにして、すつとすまして、別の方を見て、わざと女中の坐つてゐる傍のところに來て、

『姐さん、難有う。』

と言つて坐つた。

『怒つてるな。』とかれはすぐ思つた。『怒るせきはちつともねえぢやねえか。自分がわるいんぢやないか。自分が來なければならないところに來なかつたために、かをるが出來たんぢやないか。怒るせきなんかちつともねえ。』かう思ふと、いくらか得意のやうな、此間の夜の復讐をしてやつたやうな氣がして、かれもわざと默つて飯の箸をとゞめなかつた。

平常ならば、『何うしたの？　御飯なんか食べて？』かうすぐ女の口から出るところであつたが、それすら今日は出て來なかつた。とん子は帶の間から默つて煙草入を出した。

いかにもお中が空いたといふやうに、かれは二つおかはりしたあとを茶漬にしてすゝつて、『あゝ食つ

『さうね、腹が減つてゐては駄目だから、十分底入れをして置かなくつちやね。』かう言つて女中はまた後向きになつて笑つた。

『オイ、オイ、困るよ、さう笑つちや――それお茶碗が出てるぢやないか。』

『これは失禮！』

わざとシャッキリ言つて、そして女中は茶碗を盆に受けた。

飯を意地わるく山盛に盛つて、『今日はトン？』

『…………』

『え？』

『わからないよ、まだ――』

『でも、都合をきいて置かないと、二人來て困ることがあるもの。』

『二人來たつて好いぢやないか。』

『いゝの？　本當に？』

かう女中は眞面目に訊いた。

『色男は二人でも三人でも多い方が好いね。』

『それなら好いけど……。』わざとすまして、かれの頻りに飯をかき込むのを女中は見てゐた。

まないやうにしなければ――。』かう思ひながら、かれはトントン階梯を上つて行つた。

その室には、丸い瀨戶の火鉢に鐵瓶が煮え立つて、湯氣を白くあたりに漲らしてゐた。傍にはさつき命じた夕飯の膳が既にちやんと運ばれてあつた。

女中は上つて來た。

坐つて、かれの顏を見て笑つた。

『何が可笑しいんだえ？』

『だつて……』

意味もなしに、顏を見ると唯可笑しいといふやうにして女中は笑つた。

『何うもしやうがない。姐さん方には世話になるんだから、いくら笑はれたつて、しやうがない。思ひ出して可笑しくなるんだね。矢張やけるつていふ譯だね。』

『さうかも知れないのね。』

かう言つて、また女中は愈々堪らないといふやうに笑ひ出した。

一度下りて行つた女中は、暫くして酒一本と飯櫃とを持つて上つて來たが、

『すぐ御飯？』

『腹が減つてるんだもの。』

違つた面白さがあつた。美しさがあつた。年の若いかをるに比べて、何うしても好く熟した果實のやうなところがあつた。矢張、金を出すなら、とん子だといふ風にかれは今でも思つてゐた。

今夜は一つ大に油を取つてやらなくつちやならない。かう思ひながら、かれは湯の中から出て、冷めたい水をザブザブ頭にかけた。

『お湯の加減は何う――？』

さつきの女中が、その前の縁側を通りながら聲を掛けた。

『丁度好いよ。』

『さう――』

かう言つて、覗いても見ずに、女中は向うの方に行つた。

三

もう一度ざつと湯に入つて、そのまゝ上つて着物を着たかれは、五燭の電燈の薄暗くさしてゐる大きな鏡にその半身を映して、少し延び加減になつた頭の髪を丁寧に右からわけた。

氣が附くと、夥だしく腹が減つてゐる。これではとても酒は入れられさうに思はれない。これで酒を入れては、すぐ酔つて了つて、體が役に立たなくなるに相違ない。それではつまらない。『今夜は酒を飲

ることだ。そんなことで切れたり何かするやうな危い間柄ではお互ひの間はない筈である……。もつと深い仲である筈である。かう思ふと、女の情が染々身に染みわたつて思ひ出されて來て、その體が自分の體に纏り附いて來るやうに感じられた。

『だつて、かをるに手を出したのは、俺がわるいばかりではない。』かう思ふと、田舍から着いた日の夜、女が富春亭に行つてるて、かけてもかけても貰ふことは出來ず、自暴と嫉妬とについ激せられて、『あんな女なんか、どうにでもなれ。』と思つてそれでかをるに關係したことが思ひ出されて來た。

『だつて、とん子姐さんにすまないもの。』

『なァに。あんな奴、構ひやしないよ。もう今日からあいつはやめだ……。』

『だつて……私……』

『本當だよ。浮氣でやつてるるんぢやないから、大丈夫だよ。もう、今日からは、お前にして了ふよ。』

こんなことを言つたことを思ひ出した。またその夜かをるの口から、とん子の貰つて來られなかつた理由を聞いた。その時には、かれは體中が熱くなつて、『道理で……そこにあいつが來てるたんだ。』と思つて切齒した。

かをるも、可愛い女になつたにはなつたけれど……………………………、

それでも、まさかにとん子をそのまゝ平氣で捨てて了ふ氣にもなれなかつた。とん子はとん子で、また

『ぢや、入らう……。』かう言つて、元氣よく手拭を取つて立つて、『出るまでに、飯を持つて來て置いてお呉れな。晝飯も碌々食はないから、腹が減つちやつた――』

『お酒は――』

『酒も一本位好いや。』

かう言つて、かれは階段の下のところにある風呂場へと行つた。

薄暗い五燭の電燈が、そこの壁に懸けられてある大きな鏡にかれの半ば裸體になつた姿を映した。

二

かれは何うかしてあの女の心をすつかり自分のものにしなければならないと思つた。何うかしてあの男の手から離して、そして完全に自分のものに――。

『場合に由つたら、此際、十分なことをしてやる方が好いかも知れない。さうすれば、何うしても此方に信用を置いて來る。何うしても女は金だ。』

こんなことを考へながら、かれは、じつと小さな角風呂の中に身を浸してゐた。今度來てから、もう三日になるが、何の彼のと行違つて――その行違つたために、同じ家の抱へのかをるに出したくない手を出したり何かして、一層わるいお互ひの心の狀態になつてゐるが、しかし、それは、話せばぢきわか

やがつたな、何時だ？　一體？』かう思つて、へこ帶に卷きつけた時計を出して見た。
まだ八時四十分だつた。
病院の白いベッドの上に、繃帶をして橫はつてゐる弟の姿が、ふとまた浮んで來た。夢中で、身をもがいて、『あ、あ、痛い——痛い——痛い。』と暴れ廻つたさまなどもはつきり見えた。かれはその弟の手術をするために、二三日前、田舍から出て來たことを頭に浮べた。弟は何も知らずに、すやすやと寢臺の上に橫はつて寢てゐるのである。
『まア、好いさ……。何うして、かう俺は氣がねばかりするだらう。一體、俺は氣が小さすぎる。いろんなことを氣にかけすぎる。』こんなことを思ひながら、女中の持つて來て置いて行つた急須に、鐵瓶の湯を持ち上げてさして、それを茶碗に絞つて飲んだ。
女中の階段を上つて來る音がして、再びそこにその笑顏があらはれた。
『とん子さん、今、すぐ上りますつて。』
かう言つて笑つて、
『お風呂は何う？』
『さうさな、入るかな、一つ……あいてゐるかえ？』
『え、空いてゐますよ。』

『今は？』

『ちよつとあそこで飲むには飲んで、逢つては來た。』

かう言つたが、かれは笑つて、『でも、あいつ、しやうがねえ――。』

『誰れ？　カアちやん？　それとも、トン？』

一種不思議な表情をして、笑ひかけるやうに、または機嫌を取るやうに、『何方さ？　貴方？』

『何方もかけて置いて呉れ給へ。しかしカアはゐない筈だ。よし屋へ行つてる筈だ。』

『ぢや、トンに。』

かう言つて早呑込みをして女中が出て行かうとすると、かれは、

『マア、きいて行けよ、よく。トンにかけて、ゐればよし、ゐなければ、かをるを貰ふやうにして呉れ。』

『はい、はい、かしこまり――。』

かう蓮葉に言つて、女中はトントン階段を下りて行つた。

かれはふと氣が附いたやうに、隣の室との間を劃つた襖の唐紙を細目にあけて見た。かれは輕い失望を感じた。隣の室には旅客が泊つて、床を敷いて寢てゐるらしかつた。『何アに、構ふもんか、そんなことに氣兼ねをしなくたつて好い。』かう思ひながら再び此方に來て坐つたが、『それにしても馬鹿に早く寢

二　夜

一

夜になつてから、かられは旅舍に戻つて來た。

『何うでした？　御病人は？』

病人の消息をたづねるにしては、いやに、にやにやと意味ありさうな、何事をか笑ひ懸けるやうな調子をして、かれの顏を見い見い女中は訊いた。

『手術は旨く濟んだが、見てゐられなかつたよ。』

かうは答へながらも、かれにも矢張、それは重大な問題ではないやうに、別に、女中の笑ひ懸けた、ある意味の方に心を惹かれるやうに、

『でもね、別に、危險もなしにすみさうだ……何うもね、あんな病室なんかに長くゐたくはないんだけども、さうかと言つて、放つたらかして置くわけには行かずね。半日あそこにゐたよ。』

その像はあらゆる世間の運命、またはあらゆる世間の悲劇、凄じさに目もそむけずにゐられないやうな地獄の叫喚、修羅の巷に流るゝ血、人間が互ひに相殺すことを何とも思はないやうな殘忍な光景、或は一生の豪奢を極めた歡樂から忽ち墮ちて行つた悲慘な運命の淵、或はナポレオン、或はカイゼルのやつたやうな人間の罪惡、さういふものをすべて見盡して、そして寂として數百年または千餘年の長い時をその暗い佛龕の中に經て來たので、人間の時代の幾起伏は完全にその中に疊み込まれたまゝになつて今日まで殘つて來たのであつた。幾度か蘇らうとして、しかし蘇ることが出來ずに、何遍も何遍も、その埋れたものゝ要求の地に歸したさまを、その像は見て來てゐるのであつた。お萬さまの悲劇も、Aといふ女の物語も、または今の僧の平凡な生活も何も彼も……。

S翁の寄進に成つた小さな堂の完成してから間もなく、その像は國寶に指定されて、今までそんなことを夢にも思はなかつた住職を驚かしたが、次第にその光明はあたりに遍ねく、賽客は陸續としてその周圍に集つて來た。新しい再生はルウインのあらゆるものゝ上に起つた。草にも木にも石にも起つた。

かれ等の胸にも、埋れたものゝ絶えざる要求と言ふやうなものがそれとなく上つて來た。

『ルウィンにも不幸があるね。』

『さうさ、本當だ……。しかし、こゝのやうな大きな規模で、それでゐて湮滅して今日まで傳はらなかつたのは不思議だ。』

こんなことを言ひながら、かれ等は猶ほそこに立盡した。山は靜かに聳え、雲は白く流れた。

暫くして、一行の車がまたその林の中を通つて行くのが見えた。

十一

池に捨てられて長い年月をその底に埋められた佛像が、光を放つて再び世に出るやうになつた話、或は漁夫の網にすくはれて最初は臼の上に安置されてゐたものが、次第に諸人の渇仰の元となつて、香烟萬世に遍く薫じた觀世音菩薩の話、さうした傳説は到るところにあるが、今やその古い佛龕の中に暗黑の長い生を經て來た不動明王の像の上にも、さうした傳説が當てはめられるやうな時機は到來した。機緣と言つて好いか、宿命と言つて好いか、それとも金剛不壞なあるものゝ持つた自然のあらはれと言つて好いか、兎に角その不動明王の像は、その暗い佛龕の中から躍り出して、その光明を世間に漲らせる時は來た。

見えてゐるんですな。』
『え、それは見えてゐます。』
『ふむ。』
と山高帽はまた考へるやうにした。
一行の車はそれから村の一番古いといふ家に立寄つて、そこで、いくらか殘つてゐる古記錄や、その節々に掘り出された古武器などを見て、晝飯の御馳走になつたりしたが、午後は再び車をつらねて、今度はその丘の上の小さな寺へと行つた。
そこでは、その古い佛龕の中にかくされた不動明王の小さな像が、學者達の目を驚かした。『これは立派なものだ……。成ほどこれがF將軍の持佛だつたらう。かうした像はたんとない。』かう肥つた方も山高帽も言はずにはゐられなかつた。そこから出て、かれ等はAの墓石をも見て、その不思議な傳說などに耳を傾けた。
此方に來て、立つてあたりを見たその二人は、
『好いところだな。』
『何うして、これが今まではつきり世に傳はらなかつたものかな。たしかに此處だ。此處に相違ない。』
かう言つてその眼下に展げられた潤い野のルウィンを眺めた。

近所で働いてゐる日雇取達は、いづれも手を留めて、或は鍬を立てたまゝ、或は草に腰をかけたまゝ、めづらしさうにして、ぢつとこの光景に見入つた。作はのこ〳〵出て行つて、その發掘當時のさまなどを說明した。

林には麗らかな日影が美しくさし透つて、少しある風にそれがチラ〳〵搖いだ。小鳥の聲は鈴を鳴らすやうにきこえた。

やがてまた一人々々車に乘つたが、一行は再び元の順で林の路を向うの本道へと出て行つた。

一行の車は彼方此方に見られた。沼の畔のお蔦さまの祠のほとりに行つた時には、參詣するものがかなりに多く集つて來てゐたので、都會から來た人達はめづらしさうにしてその光景を見た。

『いつ頃からです。かうしてお詣りに來るやうになつたのは？』

かう山高帽の紳士が訊くと、

『年代はわかりませんが、餘程古くからだといふことは口碑に殘つてゐます。沼なんかももつとぐつとひろかつたさうです。』S翁はあたりを見廻すやうにして、『こゝは小高いから此まゝでしたらうが、この向うのずつと先きまで沼だつたさうです。遺蹟志の作者の時代にも、もつとひろかつたやうに書いてあつたと覺えてます。』

『ふむ。』かう紳士は點頭いて見せたが、更に肥つた方の紳士に向つて、『沼のあつたことは、歷史には

『はゝア、此處ですか、この間、太刀を掘り出したといふのは?』
かう言つて、先に立つて、その半は開墾された畠の中に入つて行つた。
一緒について行つた村長は、
『丁度、此處のところださうです。』
かう說明した。
『他には、何か出ませんか?』
『人の骨のやうなものは出るには出るさうですが、あとには、別に何も變つたものは出ないさうです。』
『ふむ。』
かう言つて、肥つた紳士は考へるやうにしたり、またあたりの地形を見廻すやうにしたりした。
『まだ、掘ると、何か出るかも知れんな。』こんなことを言つた。
『こゝが本丸の跡だらうつて言ふんですがな。』
かう言ふ郡長のあとについて、白鬚のS翁は、遺蹟志に書いてあつた位置も矢張此の近所であつたやうに記憶してゐるといふやうな話をした。
『さうでせう。屹度。』
肥つた學者は言つた。

インの村長であつた。それにつゞいたのは郡長であつた。その次には、白い髯を常に右の手で扱くやうにしたSの隱居旦那が乘つてゐた。あとには山高帽子をかぶつた鬚の生えた紳士と、學者らしい肥つた半ば老いた紳士とが續いた。そして郡役所の書記らしいセルの袴をつけた頰鬚の男がその殿をなした。

それを目にした農民達は、何事かと思ふやうにして、畑を耕してゐた鍬の手を留めて、

『なんだべ、郡長さんと村長さんと一緒に……？　何か事でも起つたんべいか。』

などと言つて、その一行を目送した。

あるところでは、

『なァに、不動さまを見に、東京から役人が來たんだとよ。あの不動さま、大したものなんだとよ。』

かう言つてその噂をした。

一行の車は、川を渡り、林に入つて、次第にルウィンの中へと入つて行つたが、ふと、あるところに來ると、そのまゝ林の路から、更に細い路を傳つて、稞樹の綠の日影にきらめく中を段々奥へ奥へと進んだ。

やがてあるところに行つて、村長は車を留めて下りた。

誰も彼も皆下りた。

學者らしい肥つた紳士は、

十

F將軍の遺址の記事は、新聞に出たり、雜誌に書かれたりして、次第に世間の注意を惹くやうになつた。都會からそのあとを探りに來る人も段々多くなり、此頃では、今まであたりに見懸けもしなかつたやうな紳士や學生や、時には派手な美しい蝙蝠傘などをもあたりの人達は見た。

今になつては、あらゆるものが、山が、川が、丘が、土手が、橋が、絶壁がすべてそこに浮び出て、てんでにその昔を語ると共に、長い間埋れてゐた不平を、または權利を其處に要求してゐるやうに見えた。あるものはその日の兵燹の美しかつたことを語つた。またあるものは、その日そこに展開された地獄のすさまじさを語つた。叫喚、大叫喚の光景を語つた。或はその時の榮華のさまを、或は荒草田野に化して誰も顧るもの丶なかつたさまを、或は遺蹟志の作者の熱心にあたりを研究するために歩いてゐるさまを。

『あゝ、たうとう、芽が出た。』

かう何も彼も囁いて喜んでゐるやうに見えた。

矢張、天氣の好い晴れた日であつた。五六臺の車は、そこから一里半ほどある郡役所所在地の町から出て、田畔の間からその古驛を通つて、次第に此方へ此方へと近寄つて來た。先に乘つたのはそのルウ

不思議な心の現象だからな。』

二人はこんなことを言ひ言ひ、林を過ぎ、川を渡り、街道に出て、次第に人家のある方へと歩いて來た。

『何でも、此の大手のあつたところは此處等あたりだつて言ふぢやないか。』

『さうかね。』

『何でも此處等あたりだと言ふことだ。こゝからずつと奥に城が聳えてゐて、何でもあの丘の少し此方に、一番大きな立派な本丸があつたつて言ふことだ。』

『燒け落ちた時は壯觀だつたらうな。』

『何しろ、二日二夜燒けてゐたといふ記事は歷史にあるんだから、大きな城市であつたといふことだけはわかるね。それに、F將軍の遺蹟は、いろいろな說があつて、Mだとか、或はBがさうだなどと言ふものもあるけれども、單に、地形から見ただけでも、此方の方が本當らしいね。』

『今ぢや、大抵、此處と言ふことにきまつたんだらう？』

『大學の歷史家の先生達は、もう此處にきめてゐるやうだね。』

二人の姿はやがて小さな古驛らしい人家の中に入つて行つた。日は依然として麗かに、ぼんやりと霞んだ空には、同じく鳶が好い聲を立てゝ鳴いて舞つてゐた。

方も深く考へるやうにして『さうだね。死と一緒にその力までも滅びて了ふとは、ちよつと想像が出來ないね。再生が何ういふ形で生物の上に行はれて來るか、佛教などで說いたやうに行はれて來るか、それはちよつとわからないけれど、再生があるといふことは考へられる。When Dead Awaken; 實際さういふ氣がするよ。』

『兎に角、かうして、ルウィンの中から、いろいろなものが出て、その蘇生の權利を主張してゐるのは意味があるぢやないか。この間、何處からか知らないが、何でも此處等あたりから、金拵への太刀が掘り出されたさうだが、それなども、矢張、再生の權利を主張してゐると見れば見られるからね。』

『本當だ。』

こんな話をしながら、二人は林に添つた麗らかな路を步いた。

『外國の小說や戲曲をよむと、よく Dawn といふことが主材になつてゐるね。あれなども皆なさうした氣分を覗つてゐるのではないかね。心の黎明、魂の黎明、さうでなくつても、夜から黎明になつて行くあのリズムには、我々が考へなければならない宇宙の神祕の鍵があるやうな氣がするね。一日の中にも宇宙があるんだね。』

『さうかと思ふと、一方には沈んだ鐘が鳴るといふことがある。あれは舊道德と新道德とを象徵したものだけれど、それでなしに、沈んだ鐘が鳴つたり、埋れた劍が再び掘出されたりするといふことは、

うした生き返らうとする意志が人知れず芽を出して來てゐたんだからな。人間の心にも、これと同じことはよくあるぢやないか。』

『あるとも、あるとも、大いにあるよ。だから考へれば考へるほど不思議になつて來るんだ。人間の中を流れてゐるリズムと宇宙の中を流れてゐるリズムとちやんと共通してゐるある物があるんだよ。』

『さうだね。』

『このルウィンを心のルウィンに譬へて見れば一番よくわかる。』かう言つて一人の方は考へて、『さうだ、心のルウィン、心のルウィンとは好い言葉だ。誰でも屹度一度はこの心のルウィンを味つたことはあるに相違ないが、その心のルウィンは、このF將軍のルウィンと少しも異つてゐはしないのだ。しかし、このF將軍のルウィンが、全くのルウィンとなつて亡びて埋れて了はないと同じやうに、何んな心のルウィンでも、屹度芽を出して來る。生き返つて來ようと萌して來る。その力は何だらう。人間が生れたり死んだりする力と同じ力ではないか。そしてこの力は亡びない力ではないか。何んなことがあつても、この宇宙の生命のある間は亡びない力ではないか。かう思ふと、一種の新しいスピリチユアリズムを感ぜずにはゐられなくなるね。死は決して死でないといふ氣がするね。再生もあり得るやうになつて來るね。』

若い懷古の旅客の胸にも、かうなると、深い人生觀や宇宙觀が漲つて來たといふやうに、もう一人の

『本當だね。……それにしても、その本は本當に一冊もないのかね。何處かに一冊位殘つてゐさうなもんだがな。』

『何處をさがしてもないさうだ。今日傳つてゐるところでは、その本をその當時に見た人が、それを書き拔いて置いたとか、またはそれを人に語り傳へたので更に語り傳へられたかしてゐるのによつてゐるんだ。何でも、その本には隨分いろんなことが硏究して書いてあつたといふことだ。城郭の地圖までくつついてゐたさうだ。』

『惜しいもんだな。』

『本當に惜しいもんだ……。しかし、その本はなくなつても、その意志は矢張滅びずにかうして代々にまで傳つて來て、絕えず生き返らう生き返らうとしてゐるのは面白いぢやないか。いや、その作者ばかりぢやない。F將軍にしても、Aといふ女にしても、またその沼の畔のお萬さまにしても、皆な埋めた土の中から、その再生の意志をあらはして來るのは面白いぢやないか。』

『本當に、さうだね、さう考へて來ると、不思議な氣がするね。此處のルウィンなどは、一時は全く埋れ盡して、そんなことを考へて見るものさへなくなつて了つたことがあるんだからね。生き返りたいにも生き返ることが出來なくなるまで完全に埋れて了つてゐたんだからね。普通の野と少しも變らず、原始時代からこのまゝの野であつたと思はれてゐたんだからね。それでゐながら、いつとはなしに、さ

に霞の流るゝ空に舞つてゐた。

しかし、埋れたり、生れたり、亡びたり、または芽を出したりする意志は、こののどかな靜かな、何事もないやうな、唯、明けて暮れて行くとしか思はれないやうな空虛な中にも、微妙に、人知れずかくされて働いてゐて、無意味に働いたり呼吸したりしてゐる生物の上に絕えず動いて行くのであつた。

城郭の見事に聳えてゐた時にも、またその城郭などのまだ此處等につくられない以前にあつても、更に下つて、F將軍遺蹟志の作者の生きてゐた時代にも、矢張かうしたのどかな麗らかな日があつたに相違ない。空は霞に包まれ、野は春の色彩に美しく彩られたに相違ない。遺蹟志の作者は、かういふ春の日には殊にうかれ立つて、その遺蹟をあちこちさがして步いたに相違ない。その時には、山の上の小さな石も、川に添つて突き出した絕壁も、日影の斜めにさし込んだ林の中も、すべてかれの懷古の料として有効に役立つたに相違ない。そしてその壞古の情の中にかれの一生の生活の悲喜が複雜に織り込まれてあつたに相違ない。しかしかれもまた倏忽にして過ぎ去つた。F將軍の榮華が倏忽にして過ぎ去つたと同じやうに、Aといふ女の悲しい生涯が過ぎ去つたと同じやうに、また、今、此處に生きて泣いたり笑つたりしてゐる人達の過ぎ去るのも倏忽であるのと同じやうに――。

『その遺蹟志といふ本が殘つてゐさへすると好いんだがな。さうすれば、今日以上に、いろいろなことがわかつてゐるに相違ないんだがな。』

持つて行つて見せると、頗る珍品で、或はF將軍が自身佩いたものかも知れないといふことであつた。後には村役場から、郡役所、縣廳といふ風に傳はつて行つて、最高の學府の歷史家などもわざ〳〵出張して來てそれを見て行つた。

九

一度埋沒したF將軍遺蹟志の作者の意志も、この頃ではこの一帶の平地に名殘なく復活して來るやうに思はれた。

何も彼も再び人々の心を惹き初めたやうに見えた。靜かにのどかに霞みわたつた三面の山巒、その奥には、まだ殘雪の白く包まれてゐるのが見えながら、その一帶の野には、闌なる春が既に遍ねく、其處には桃の花、彼處には白木蓮の花といふやうに、紅い白い青い色彩が到る處に漲りわたつて、街道を通る車の音がのどかにあたりに響きわたつてきこえた。時は非常に長い轍の跡をそこにとゞめたやうにも見えれば、また新しい生々とした今生れたばかりの舞臺か何ぞのやうにも見えた。深く考へて深く悲しむのは、却つて人間のために取らないことであつて、逝くものは追はず、過ぎ去つたものは思はず悲しまずして、こののどかな春の幸福と歡樂とに十分に醉つてゐる方が本當のやうにも思はれた。鳶が靜かに輪をつくつて、何も知らないやうにして高く樂しげ

『好いだらう。……何うせ、貴樣なんか持つてゐたつてわかりやしねえ。もし、これが、金なら、金のやうにして買ふから。……貴樣、持つてゐたつて、何うせ、潰しにしきやしねえんだ。好いか。金はあとできめるが、他の者に賣つちやいけねえぞ。よしか――。』

『…………』

作は默つてゐたけれども、別に賣らない意志もないのであつた。

『旨いことをしやがつたな。』

また一人そこに來て言つた。

その主人にしろ、またそれを掘り出した作にしろ、その周圍に集つて來た日雇取達にしろ、決してさうした昔の繪をその眼には描かなかつたけれども、しかしその太刀は、實はその埋められない以前の人間の生活のさまをそのまゝそこに展げて見せてゐるのではなかつたか。凄じい兵燹にかゝつた城郭、逃げ惑ふ男女の叫聲、またはその佩びられた大將株の武士の戰死、さうしたさまをまざ〳〵とそこに展げて見せてゐるのではなかつたか。沼の畔の百日咳を治すお萬の小祠、または昔の戀の復活を絕えず今の世に試みやうとしてゐるAの墓、または暗い暗い佛龕の中からその光明を放たうとする不動明王の像、それと同じやうに矢張他界から蘇らうとする意志のあらはれではなかつたか。

その太刀の評判は、日ならずして村から村へ傳はり、Sの隱居の耳にも入つて、望まるゝまゝそれを

知れねえぞ。見ろ見ろ、こんなに光つて來るァ。』かう言つてそれをあたりの人達に見せた。

兎に角、金か何かわからないけれども、普通の唯の武士の持つたものではない。いづれ大將分の佩いたものには相違ないといふことに皆な一致した。

『何しろ、此處は、昔、城があつたり、戰爭があつたりしたところだッて言ふからな。』

中には、こんなことを言つて、遠い昔を思ふやうな顔の表情をしたものなどもあつた。昔は此處等あたりからは、隨分いろ〳〵なものが掘り出されて、現に、農夫でそれを珍襲してるものもないではないが、此頃では、もうさうしたことも滅多になかつた。『旨いことをやつたな、作！』などゝその親方らしい男はやつて來て言つた。

掘り出された太刀は、そのまゝ日の麗かに當つた臥蓆の一隅にと置かれた。長い間を土中に埋れて了つてゐても、通して持つてゐたある意志は、決して亡びずに、再び世に逢つたといふやうに、または死んで埋められたものは、再びある時が來て蘇つて來たかのやうに――。

午後になつてから、かれ等の雇はれてゐる農家の主人がやつて來た。

その話を聞いて、そこに行つて立つて、暫くそれを見詰めたり、布で拭いて見たりしてゐたが、

『作公、これを俺に賣れ――』

『…………』

あるといふことがわかつた。

『おーい！』

とかれは呼びかけて、

『こんなものが出た！』

と言つて、高く持ち上げて見せた。

『何だ！　何だ！』

近いところにゐた日雇取は皆な此方に集まつて來た。

作は周圍に集つて來た人達の中で、それを拔いて見ようとしたが、深く銹びついてゐて、容易に拔けなかつた。

『洗つて見ろ、洗つて見ろ……好い刀かも知んねえぞ。』

傍で見てゐた政といふ男に言はれて、作はそのまゝそれを持つて、臥席の敷いてあるところに來て、そこにおいてあるバケツの水の中に入れて、ごしごしとたわしで洗つて見た。

土は落ちても、黑く銹びてゐて、容易にその質はわからなかつたけれども、兎に角普通の木の鞘の刀でないことだけはかれ等にもわかつた。『金ぢやねえかな……金拵への太刀つて言ふが、金なら、豪勢なもんだぜ！』などゝその群の一人は言つた。他の一人は、それをグン〳〵こすつて見てゐたが、『金かも

『豪氣だな。金のある人は、金のつかひ道がねえだで、そんな眞似でもして使はなけれや使へねえだな。』

『本當だな。』

『それでも、女つちよに金をやるよりや好かんべ。』

『只、隱居がまたわるい奴に騙されなけれや好いつて、中にやそれを心配してゐるものもあるぜ。』

こんな話が一しきり續いたが、暫くして、皆なまた元のところに行つて、せつせと開墾に取りかゝつた。

それは丁度十二時にもう少しでならうとする頃であつた。一番林に近いところで働いてゐる作といふ日雇取の鍬に、突然カチリと物の當る音がした。

此處等に澤山ある石塊だと思つて、それを取除けようとして、猶ほ仔細に手をやつて見ると、それは石ではなくつて、何だか長い棒のやうなものらしかつた。

『なんだんべいな!』

かう思ひながら、作はその尖の出たところをつかんで、それをぐつと引き上げた。別にむづかしいことでもなかつた。さう大した力も入れないのに、その長いものはすぐ拔けて來た。

『變なものが出たな、何だんべい。』

かう思ひながら、一杯ついた土を落して見ると、鍔があつたり何かして、やがてそれは一口の太刀で

『さう言へば、寺の不動さま、大變好い由緒のある不動さまだつてな。』
『さうだつてよ。』
『今度、F村のSの隱居旦那が、大變あれに惚れ込んで、何でも、おれを世に出して、立派な不動さまにするつて、金も大分つぎ込むつていふ話ぢやねえか。』
『さういふ話だが、寺の坊主は、慾なし坊主で、ねつから、それに取り合はないつて言ふ話だぜ。』
『なァに、Sの隱居旦那はな、學者だし、金だつてうんとあるんだから、さういふ好い不動さまなら、世に出して貰ふ方が好いんだんべいけれど、旦那に一緒について來てやつてゐる奴等が信用がねえからな。あの寺ぢや、あの流行つた佛のことでもう懲りてゐるだでな。』
『それで、何うしやうつて言ふんだね？』
『なァに、Sの隱居旦那は、別にそんな氣もねえんだが、それを聞いて、さうした立派な不動さまだといふことをきいて、乘氣になつたんだ。成田の不動の本尊よりも此方の本が本當だつて言ふだで、それで、あそこのやうに流行らせやうつて言ふんだ。』
『それで一儲けしやうつて言ふんだな。』
『で、金はいくらでも、Sの旦那から出るつて言ふんか？』
『不動さまの堂位はこしらへてやるつて言ふんださうだ。』

春の麗らかな日影を帶びながら、一人の農夫は、頻りにやゝ小高くなつてゐる土を崩してゐた。今までそのまゝ放つてあつたのであるが、それでは無駄だからと言つて、少しでも畠にして桑を栽ゑやうと思つて、そして五六日前から開墾に取りかゝつてゐるのであつた。

土を崩す度に、鋤や鍬の刄がキラ〳〵と日に光つてかゞやいた。

『あついな。』

こんなことを言つて、その一人は働く手をやめて、腰から手拭を取つて、滴り落ちる汗を拭いた。

糸遊はキラ〳〵と空氣の中に雜つて、風もない麗かさは、此頃にもめづらしいやうな好い日和であつた。樹といふ樹は皆な新しい芽を着け、笹の葉は綠を加へ、草は青く繪具のやうに處々に點々として、あらゆる生命の大きい意志があたりに漲りわたつてゐるやうに見えた。鶯がをり〳〵好い聲を立てゝ鳴いた。

『一服やらねえか!』

かう言はれて、開墾をしてゐる傍の蓆の上に皆な集つて來た。

今年の麥の出來の好い話や、これで強い霜さへ來なければ、桑も養蠶も上出來だといふ話や、つゞいて、村の誰彼の話、米を遲くまで持ちこらへてゐて大儲をした百姓の話などが頻りに繰返されてゐたが、ふと、その中の一人が、

『それはあるよ。寺には、不思議なことが多いよ。死んだ人の魂はきつとやつて來るのだからな。』

『本當ですかしら?』

『まァ、好いぢやないか。そんなこと。』(それより早く寢よう、そんなことよりももつと……。)かういふ氣分の雜つた表情を住職はして、そこに坐つてゐる妻を促すやうにした。

『でも、怖い。』

『何にも、怖くはありやしないよ。』

『でも、その女がまた墓から出て來たら、何うでせう。』

『その時は可愛がつてやるさ。』

『まァ。』

笑ふにも笑へないやうな笑ひ方をその妻はした。

やがて二人はその長火鉢の置いてある室を出て、隣の床の敷いてある室へと入つて行つた。『怖くはないつて言ふのに、わからない女だな。』などといふ住職の聲は猶ほきこえた。あとはひつそりした。

八

丘からは餘程離れた野の中の畠、一方は楢の穉樹の林、一方は半は桑畑に開墾されたやうなところで、

『でも、話でも、さういふことはあつたんでせう。そしてその女は、その和尚さんの死ぬまで傍についてゐたんですか？』

『さういふんだがね。まァ、始終、和尚はその女と話をしてゐたつて言ふんだがね。』笑つて、『俺なら、結構なことだな、さうした別品がやつて來れば――』

『馬鹿を仰有い……』いよいよ怖いやうな顔をして、四邊を見廻して、『でも、他の人には見えなかつたんですね。』

『それはさうさ。』

『そして、それが、その和尚さんが、殺した方のでない戀しい男の生れ變りだつたつて言ふんですね。』

『そんなことを言ふんだよ。』

『おゝ、怖い――』

かう言つて若い妻は顔を掩つた。

『何うしたんだ――』

『だつて、そんな墓があると思ふと、ゾッとして來る。』

『寺の噂にも似合はないな。そんなことが怖くちや、一刻だつて、此處にゐられやしないぜ！』

『ぢや、もつと怖いことがあるんですか。』

こんなことを話しながら、二人は平野の方へ出て行つた。
寺でもその夜その話が新しい住職とその妻の間に出た。
それはおしきせの二合の酒にも醉ひ、夕飯もすんで、これからは寢に就かうといふやうなときであつた。
さつきそれとなく小耳に挾んだ妻は、ふとそれを思ひ出したやうにして、
『さつきのは何の話？』
と訊き出した。
『何アに、何でもないよ。』
『でも、何だか面白さうな話でしたがねえ。』
頻りに問ふので、住職は醉つたまぎれに、ザッとその話をしてきかせた。
と、妻は、
『まア。』
かう無氣味さうに目を瞬つて、
『ぢや、その墓から女が出て來たんですね。まア、氣味がわるい。』
『なアに、話だよ。』

と思へば面白いさ。』

『さうだね。さういふ見方も面白いね。しかし、その女が墓から蘇つて出て來たといふ形も面白いぢやないか。昔の戀人の生れかはりだなどと言つて了ふと、ちと話が荒誕になるけれども、墓から現世への再生は、ロマンチックで面白い。誰かの詩にあつたね、そら、

　　庭とこの花はいと靜かに
　　　息つくごとくに……

と言ふのがあつたね。たしかウウランドぢやなかつたか。あゝいふ風に、この世と他界との交渉は考へられないことはないからね。』

『さういふ氣はするにはするね。』

暫く默つて歩いたが、

『それから、そのAの墓が流行佛になつて、寺が金持になつたために、代々好色の僧侶が出たといふことも面白いぢやないか。何かそこにも深い意味がありさうぢやないか。墓場からの歡樂の漲りといふやうな氣がするぢやないか。』

『さうだね。』一人の方は考へて、『たしかにまたさうなつて行くやうに、心理も出來てゐるね。決して不自然でなく出來てるね。面白いな。』

やがて暫くして學生は山門から向うに出て行つた。

二人は話した。

『しかし、面白い話には話だね。その僧がその美女の死靈に惱まされたといふやうに解釋せずに、もつと新しく科學的に解釋しても出來るね。つまり、僧で、禁慾の生活をしてゐる身だから、さうしたことは、實際あり得ないとは限らないからね。女のことばかりを思つて、しかも女氣といふものはなしに暮してゐると、さうしたイリユウジヨンが起つて來ないとは限らないね。』

『それはさうだ。』

『すぐれた筆を持つてゐたなら、ネオ、ロマンチシズムの好い題材の一つになるぢやないか。それを因果とか、何とかいふ風に見ずに、元の戀しい男の生れ變りで僧があつたなどといふ風にはせずに、もう少しリアリスチツクに見ると、面白い事實だからな。』

『それはさうだね。』

『僕はさういふ坊主を知つてゐるから、殊にさう思ふよ。一室に籠つて、終日、起きても寢ても、女のことを思つてゐる坊主を見たことがあるがね。蒼い顏をして、始終手を合はしてゐるが、それは佛への一致でなくつて、女への一致――つまり女人佛となつたわけだが、さういふ坊主を見たことがあるがね。禁慾生活をすると、人間はそんな風にもなると見えるよ。つまり、その傳說の坊主だつて、それだ

暫くすると、その二人の青年はまた其處にやつて來た。
『こゝのぐつと前の僧がその墓の女のために狂氣になつて死んだつていふ話は、本當でせうか？』
『さァな。』
『そんなことが何かに書いて殘されてありますか？』
『ないな。』
『戀の流行佛になつて、一時お參りが澤山にあつたといふ話だが。』
『それはさうだつていふ話だ。一時、此寺は非常に金持になつたといふ話は今でも傳はつてゐる。ところが、そのため、女狂ひをする和尚が出來たり何かしたので、御維新前に、わるい佛だと言つて、堂も何も打毀して了つたのださうだ。』
『何處にあつたんです？ その堂は？』
『このぢき門前にあつたつて言ふこつちやがな。それはかなり一時は榮えて、遠くから若い男や女が澤山やつて來たさうぢや。ぢやが、お前さん方は、そんな話を聞いて何うするんだな。』
『いや、難有う。』
かう言つて、學生は向うに行つて、その堂のあつたといふあたりを頼りに步いたり何かしてゐるのが此方から見えた。

ぐつたりと後に倒れた。

七

つい、此間のことであつた。

新しい住職が、この寺に入つてから、村の世話人に勸められて止むなく貰ふことになつた二十五六の妻と、畠からつけ菜を取つてそれを井戸端で洗つてゐると、そこに學生らしい二人の青年がやつて來て、

『Aつていふ女の墓は？』

と訊いた。

『さア――――』

新しい住職には、ちよつとそれがわからなかつた。

『Aといふ、夫を毒殺した、また一時、戀の流行佛になつた……』

かう一人の方が說明すると、

『あ、それか。それなら、墓地に行つて、僧侶の代々の墓の中をさがして見なさい。その隅の方に、小さくころがつてゐる筈だ。』

さも面倒臭いといふやうにして、新しい住職はそれを敎へるとそのまゝ、また畠に菜を取りに行つた。

かう唯、僧は言つた。

しかし、僧の肉體は次第に衰へて行つた。後には、僧の夜床の中に現にまざ〳〵と美しい女を見たなどゝいふ評判が高くなつて行つた。何でもその頃には僧の傍には、坐臥進退、常にAが侍してゐるやうに見えた。

ある時は、こんなことがあつた。弟子の一人がそこに行くと、僧はそれには眼も呉れずに、

『本當か?』

『…………』

『それでは、その男が卽ち私ぢやと言ふんだな。私がその男の生れ變りだと言ふんだな。……その爲め、お前はお前の永久の住宅から出て來たと言ふんだな。』

『…………』

『それぢや、その私の若い時に思を寄せた女も矢張お前であつたか、私が道心堅固なために十分思ひを遂げることが出來なかつたと言ふのぢやな。』

『…………』

『あゝ、さうぢやつたか――。』

かう言つて、僧は身をもがくやうに、または自分の魂をずた〳〵にちぎつて捨てるやうにしてそして

はつきりその身に感じたのである。かれは本尊の前に來て、長い間その遠い昔の美しい女のために讀經した。

不思議はこれにとゞまらなかつた。そのAはそれからは常に親しくその姿をかれの前にあらはして來た。或は冥想の中に、或は夢の中に、またある時は思ひもかけない自分の坐つてゐる傍に………。

Aはいろ〳〵とその辛かつた一生の悲劇を話した。寺に入つてから、戀しい男に一度も逢ふことが出來なかつた悲しさをも語れば、半は僧形になつて居りながら死ぬまで戀心に燃えてゐた淺間しさや辛さをも語つた。數へるほどしかその男に逢つてゐないにも拘らず、その歡樂はインモウタルであつたことなどをも話した。時にはそのAの姿が難有い觀世音菩薩になつて見えたり、また時には、かれが昔思ひを寄せた女の笑顏になつて見えたりした。

僧は段々その墓を氣にし出して、その周圍の墓を他に移したり、新しく墓石の臺石を拵へたり、四目垣を結つたりした。をりをり出かけて行つては、線香を手向け花を手向けた。

『何うしたんだらう。不思議なことがあるものだ。無緣の墓を新しくしたり、花や線香を手向けたり……。』

かう周圍の人々は不思議にしたが、ある日、弟子の一人はそれとなく師の僧にそれをたづねた。

『何でもない……。』

かりであつた。

ふと白い紅い木槿の咲いてゐる垣の下に、一つの小さな古い墓石が多くの墓石に推されるやうになつて曲つて立つてゐるのが眼についた。僧は體を曲げて、それを仔細に檢した。

『これだ！　これだ！』

かう僧は思はず言つた。

考へて見ると、矢張、元から此處にあつたのであつて、初めあると思つてさがした位置は、自分の考へ違ひであつたといふことが段々わかつて來た。墓石の表面には佛像が刻んであつて、その傍に、その戒名が記されてあつた。

これが、この墓の主が、さうした美しい女であつたといふこと、髪が黑くつて漆のやうに、坐ると長く疊につくやうな女であつたといふこと、他の男のために他の男を毒殺しなければならないやうな色濃い色戀に一度は身も魂も溺らせた女であるといふこと、さういふことを思ふと、僧は不思議な世界が、自分等の知らずに經過して來て了つた世界が、歴々と眼の前に映つて見えるやうな氣がした。單なる石とは思へずに、その女が自分に向つて笑つたり泣いたりするやうにさへ思はれて來た。

僧は急いで本堂の方に歸つて來た。かれは魂の遊離と言つたやうなことを深く感ぜずにはゐられなかつたのである。死んで土に歸したものから、生のこの世界に要求して來るある不可思議なるものをかれ

て、かれは靜かに立つて、下駄を穿いてそして墓場の方へと行つた。

秋はまださう闌けてゐないので、蟬の聲などがいくらか梢に殘つてゐて、木犀の香りが、澄んだ空氣の中に咽ぶやうに強く強く匂つて來てゐた。

蝶などがヒラ〳〵飛んで行つた。

倂は初め墓地の西の隅の方へと行つて見た。そこにその墓があつた筈だとかれは思つたからである。ところがそのあると思つたところにそれがない。いくら搜してもない。ない譯がないと思つて見たり、またそれとも自分は忘れてゐても、いつか長い間にそれを何處かに移したのではなかつたかと思つて考へて見たりしたが、何うもわからない。『なアに、別に、今、そのAの墓を搜さなければならない譯があるのではない。わからなければしやうがない。』かう思つて、その考へから離れようとしたけれども、不思議にもそれが氣になつて、何うしても搜したいやうな氣がして、猶ほそれからそれへと一つ一つ古い墓の表面を見い見い搜した。

澤山そこにはさうした古い墓があつた。輪塔形のや丶丸いのや、それからまた佛像を刻んだのや、見る人が見れば、その墓の形だけでもその時代がわかるのであらうけれども、倂は唯それを見て廻つたばかりであつた。倂はこれ等の多くの墓に一つ一つ絡みついて殘つてゐるある物などをさがし出さうとする男ではなかつた。唯、『澤山あるな。一度は無緣は何うか處分しなければならないな。』など丶思つたば

勿論、それは今かれがその胸に浮べた女に何の緣故があるのではなかつた。また別にさうした墓を思ひ出さなければならない動機があるのでもなかつた。但しその墓はある女の墓ではあつたが――。

それはかれが初めてこの寺の住職となつた時に、先代の老僧から『それがAと言ふ女の墓だ。』と敎へられたばかりであつた。かれはそれまでにもう二十年近くもそこに住職をしてゐたが、つひぞかうしてその墓を思ひ出したことはなかつだ。それは別な用で墓地に行つてその墓を見た時には、Aといふ女のことを思ふには思ふことがあつても……

しかし僧自身にしても、そのAといふ女のことを深く知つてゐるわけでもなかつた。お上のお仕置に逢つて死刑に處せらるべき罪科を持つてゐながら、この寺にかけ込んだために、またはその時の住職が專念にその命乞をしたゝめに、死罪だけは許されて、半ば僧形になつて、殘年を此處に送つて死んだといふことゝ、その女が非常に美しく、その時まだ二十二か三かであつたといふ事と、その罪科と言ふのは、他に男があつたがために、夫を嫌うてそれを竊かに毒殺したといふことと、その位の知識しかAについて知つてゐるところはないのであつた。しかしその祕密が思ひ出されると共に、その美しい二十二三の女、その若さでさうした大罪を犯した女、それから發心して尼にはならないまでにも半ば僧のやうになつて殘年を過したといふ女、その女の後半生は、果して淸淨であつたか、それとも禁慾の中にかくれて飽まで慾を逞うしたのではないか。さうしたことがいろ〳〵に思ひ出されて、不思議なほど思ひ出され

るのをじつと見てゐた。何も考へてはゐなかつた。恐らくその時誰かかれの相手をする弟子達でもあつたなら、かれはそれを思ひ出さなかつたであらう。ところが、その時は、かれがいつも相手にする大きな三毛猫さへ其處にゐなかつた。ふとかれはかれが若い時いろ〳〵と思ひ寄せたり何かした女のことを思ひ出した。匆卒にすぎ去つて來て了つたものだ。あの時は生命を捨てゝもなどと深く思つたけれども、さうした女色の嚴禁されてあつた時代には、しやうにも何うすることも出來ず、またさうした位置に身を置いたがために、普通ならば、すぐその眞髓に入つて行くことの出來ることも、虚僞やら、欺騙やらに打壞されて、何うにも彼うにもならない中に、いつとなく年月は經つた。そしてあれもあれきりになつて了つた。年に似合はず、僧はこんなことを考へた。と、そのなつかしい美しい眉目もはつきりと目の前に浮んで來るやうな氣がして、暫しうつとりとなつた。

『何も彼もすぎ去つた。』

かう思ふと、かれはさびしい氣がした。秋の午後のことで、あたりはしんとしてゐる。空氣も靜まり返つてゐる。誰もお詣りに來るものもない。相變らず日は白堊に明るくさしてゐるけれども、僧は今ではもうそれを見てゐるのではなかつた。過ぎ去つた年月の早かつたのが悔まれるやうな氣がして、そのいろいろな記憶の雰圍氣の中に、その時分の若い女の面影を浮べて、そしてぢつとそれを見詰めてゐた。不思議な聯想ではないか。その時、その墓地の奧にある一つの小さな墓がぽつかり浮んで來た。

いてゐるといふ話であつた。
それは或は空想に陥り易いさうした作者の夢の中から生れ出た傳說であるかも知れないけれど、しかしそれは穿鑿する必要を須ひないではないか。さうしたことはあり得べきことではないか。ルウィンの中に漂つて殘つてゐる氣分ではないか。面白いことではないか。
否、さういふ觀察さへも實は何うでも好いのであつた。沼の畔の小さな祠の紅い白い旗は、疎らな林の中にいつもインプレッシイブに飜つて見えてゐるであらう。それには麗かに春の日がさすであらう。また秋のさびしい夕暮の落日が、沼を染めた返照をそこにさらに反照させるであらう。そしてその日影は、その城市の火焰に包まれた時の日影と更に變りがないであらう。そして旅客は靜かな日と變らない大空とを不思議な印象を以つて眺めるであらう。

六

その丘の寺の今の住職から少くとも五代や六代も前の住職の時のことであつた。ある日、その僧はふと墓地の隅にころがつてゐる小さな墓を思ひ出して、靜かに其方へと歩いて行つた。
それも何うしたきつかけで思ひ出されて來たといふことは、それはその僧自身にもわからなかつた。僧はその少し前まで、庫裡の爐の前に坐つて、裏からさし込んで來てゐる日影の白壁に明るく當つてゐる

學生も上さんも別に何も知らなかつた。上さんは上さんで子供のために唯一心に祈念し、學生は學生で、『神樣にもいろいろな神樣があるんだな。子供の百日咳を治す神樣とは面白いな。』などと言つてそこを通りすぎた。

村の人も、こゝに祀られてあるお萬さまといふ女は、忠義な女であるといふことだけは知つてゐるが、それが何うして百日咳にきくかといふことなどは知つてゐるものはなかつたのである。勿論、何うして子供の百日咳にばかり有効にきくかといふことは、科學的にはちよつとわかりやう筈はないのであつた。ところが、それをF將軍遺蹟志の作者は、自分でその理由を發見したかのやうにして、熱心にそれを書いて置いたといふことであつた。

その作者の言ふところに由ると、そこはF將軍の二人の遺兒がお萬といふ老女に伴れられて、城の燒け落ちた時、遁れて蘆荻の中にかくれてゐたところであるといふことであつた。そのお萬といふ忠義な女は、何うかして、一時そこにかくれてゐて、すきを見て、その遺兒だけでも遠く落ち延びさせたいと思つてゐた。ところが、不幸にして、お萬は風邪か何か引いてゐて、ゆくりなく咳のために、その蘆荻の潛伏所が敵の巡邏兵に發見せられ、獸應なしに、一緒に捕へられて、そのため、二人の遺兒は幼ないあはれな身を並べて、その沼の畔で斬られたといふことであつた。その時、お萬はそれを殘念がつて、死んだ後も、その靈が此處に留つて、すべての子供のために咳を守護すると言つたとその遺蹟志の作者は書

『何かきつとおまじなひか何か見たいな迷信だよ。日本人は迷信にかけちや隨分馬鹿々々しい國民だからな。』

『何か子供の病氣平癒か何かを祈る祠だね。』

『さうらしいな。』

『それ見たまへ、お禮に上げた繪馬には、屹度子供が一緒に書いてあるから……それに違ひないよ。』

學生の一人は、丁度そこに來て禮拜してゐた田舍の子を負つた上さんを捉へて、

『何にきくんです？　この神樣は――。』

かう訊いた。

上さんは怪訝な顏をして急には答へはかつた。

『何にきくは、面白いきゝ方だね。』

もう一人の學生はかう言つて傍から笑つた。

やがて上さんの話したところに由ると、それは子供の百日咳の不思議に治る流行のお萬さまだといふことであつた。

『お萬さま？　それぢや。この祠の神體は女だね。』

などと言つて學生達は笑つた。

五

その小さな寺のある丘から左にだらだらと下りて、林や草藪の繁つた中を十二三町も來ると、そこに小さな沼――沼とも言ふことの出來ないほどの水溜があつて、それに、杉の黑い幹がさびしく映つてゐるのが覗かれた。

銹色をした水の周圍には、蘆荻が少しばかり生えてゐて、藻が女の髮か何ぞのやうに黑く漂つてゐた。林を切つた低い丘の上に、小さな祠が一つぽつねんと立つてゐた。そしてそこには小さな赤い白い小旗が無數に上げられてあるのを見た。

何うかすると、子供を負つた田舍の上さんが、遠くそこまでやつて來て、その小旗を祠頭に捧げて、一心に祈念を凝してゐるのが見られた。

都會から一月の休暇に遊びに來てゐる學生達は、何うかすると、こんなところまで散步に出かけて來たが、

『何の神樣だらう。』

こんなことを言つて、そしてその小さな祠の前に立つた。

『さア、何の神樣だかな。小さな旗が澤山あがつてゐるぢやないか。』

上にあるあらゆる没落の光景と少しも異つたことはなかつたであらう。或は淀君もそこにゐたかも知れない。秀頼もそこにゐたかも知れない。且元もまたそこにゐたかも知れない。また平生の瞋恚を捨てゝ互ひに抱き合つて泣いた美しい姫達もあつたかも知れない。しかし何うにも爲方がない。その境は最早神も佛も何もない世界であるのであるから……。

火は盛んに燃えたであらう。唯、燃えるのが木や竹の本質であるといふやうに燃えたであらう。また、人間の手で作らへられたものは、人間の手に亡びるのは當り前だといふやうにして忽ち灰燼に歸して了つたであらう。凄じい一日は全くその火の紅蓮と渦巻く煙と悲慘な叫喚とに暮れたであらう。或は一番大きな城壁の燒け落ちた時は、丁度日没か何かで、周圍の山巒は美しくその光焰にかゞやいて、未曾有の壯觀を呈したであらう。そしてその佳麗な城市は忽ち荒凉とした燒野原に化したであらう。

かう想像して來ると、かの不動明王の小さな像が、その火の中を免れて、山を越して、その寺に据ゑられたことなども思ひやられずにはゐられなかつた。現に、今、その址には何物も殘つてゐなくても、その不動明王の像がその時さうして運び出されたといふことを考へただけでも、深い冥想に耽らずにはゐられないではないか。

四

T川の一戰で破れたF將軍は、もう何うすることも出來なかつた。敵は東からも西からも押し寄せて來た。城まで引く前に、もう一度快く戰はうと思つた軍略も、味方の一部の裏切のために、すつかり齟齬して、城さへもう十分に守ることが出來ないやうな運命に墜ちて了つた。

恐るべき混亂と狼狽と疲勞とがあたりに漲り渡つた。

いかなる英雄も、ナポレオンも、カイゼルも、信長も、誰も彼も征服被征服の心の立場に立つてゐるもの丶すべて味はなければならない時がF將軍にもやつて來たのであつた。人を押したものは必ず押される。戰を好むものは必ず劍に斃れる。勝利もつひに絕對の勝利ではない。今はその時だ。もう何うすることも出來ない。萬能を信じた身にも今はその身の處分さへ出來なくなつて了つた。あらゆる歡樂も幸福も榮華も夢となつて了つた。F將軍は凝と城櫓の上に立つて、雲霞と簇つて押し寄せて來る敵の軍勢を眺めた。

其處にも此處にも火が起つた。十年の年月を費して構へ起した城壁も邸宅も皆すべて焰に包まれた。最愛の妻子とも別れなければならない時、さまざまの欲望をも何も彼も捨て丶了はなければならない時、自分で自分の處決をしなければならない時が來た。恐らくその時は悲慘な光景であつたであらう。歷史

澤山にあつた。昔の人達のやつた悲しいドラマよりも、またはさうしたロマンチックな芝居で見るやうな武士や姫達の運命よりも、それよりも自分達の運命の方がてんでに痛切に考へられた。『宅の爺さんにも困つたもんだ。』かれの息子もこんなことを言つた。

それに留らなかつた。中にはそれ以上にかれの考古癖、研究癖を馬鹿にして、『そんなことがあつて堪るかや。皆なあの人の見てゐる夢だァな。平泉以上だなんて、そんなことがあるかや。矢張、わが佛尊しでな、あゝいふ人達は、ドシドン平氣で名所古蹟をつくり出すだでな。』こんなことを言ふものさへ出て來た。

從つてそのF將軍遺蹟志は、世に傳はらなかつた。勿論、その頃は、今のやうに便利な活字もなく、それを版に起すにしても、容易なことでは出來なかつたためでもあつたらうけれど、せめて寫本の一部や二部は書き傳へ寫し傳へて持つてゐるものがあつても好いのであるのに、また、さうしたかれを親に持ち、祖父に持つた子孫達は、せめてその原本だけでも、家寶として珍襲愛藏して置いて然るべきであるのに、書目だけ殘つて、またはその原本を見た當時の人々の口碑だけ殘つて、一部も世に留つてゐないのを見ると、ある時、ある日に、その大切な一生の心血をそゝいだ冊子は、他に邪魔な反古と一緒に平氣で紙屑買の手に渡されたとしか思はれなかつた。

その冊子をつくつた人の生きてゐた時代にも、もうその址は、別に何も殘つてゐなかつたらしく、またそこに住んでゐた人達の口碑にも、唯僅かに斷片零語が傳はつてゐたゞけであつたらしかつた。

しかもその冊子の作者はいかに熱した心を抱いてその址をさがして歩いたであらうか。また埋れたさまざまの心をそこからさがし出さうとして骨を折つたであらうか。少くともその作者に取つては、一條の小さな流れも、土に埋れた石も、細く通じてゐる道路も、すべてみな徒爾に見過して了ふことが出來なかつたに相違ない。或はロオマのルウインを彷徨ふ歷史家以上に心を一木一草に留めたかも知れなかつた。また、或はその埋れた心の蘇つて來るのに逢つて、涙を流したり、深い悲哀に鎖されたり、人生の短く、事業の徒らなるを慨いたかも知れなかつた。

時にはかれは丘の上にのぼつて行つた。そして寺の墓石をさがした。また時には全くその廢址に捉へられた人のやうに、または廢址の中に夢を見てゐる人のやうに、田塍から田塍の間を歩き、林から林を傳ひ、草藪のさゝやきにも耳を欹て、鳥のなく音にも心をとゞめ、風の音にも月の光にも限りない心を寄せた。かれのさびしい心と、初夏の新しい綠葉から落ちて來る光線と相映對した。

村の人々も段々かれを相手にしなくなつた。『何の夢を見てゐるだが。』初めはいくらか信じかけた人達も、終にはこんなことを言ふやうになつた。ちよつとはめづらしいが、忙しい世の中には、そんなことは何うでも好いのであつた。それよりももつと忙がしく働いたり、考へたり、また樂しんだりするものが

其處に展開したのであつた。

あとには草が生え、林がしげり、全く原始時代の野が榮えた。

三

今から百年ほど前であつた。その昔の城市の址は、ある人に由つてかなりに詳しく研究されたことがあつた。それはF將軍遺蹟志といふ六七百枚の冊子であつた。

その冊子に由ると、こゝには御所といふ名のついた大きな建物が七つまであつたといふことである。少くとも東は向うの山裾まで、西は折れ曲つた川の流域まで、南はずつと平野に、北はその寺のある丘の下まで、市街やら、城壘やら、人家やらが、陸續として連つてゐたといふことである。その繁華は實に驚かるゝものがあつたに相違ないとのことである。

平泉のやうに、または奈良のやうに、あれほど規模は大きくないにしても、少くともそのF將軍の勢力は、その附近十數里の地を壓して、誰もそれに對抗するものはなかつたに相違なく『帶甲十萬、山河の固め嚴かにして、容易に他人の窺ふことの出來ざる』すぐれた城邑であつたに相違なかつた。唯、その年代が或は平泉などよりももつと古いがため、またはF將軍一代の榮華だけで、忽ち烟のやうにあと方がなくなつて了つたために、後まで細かいことが傳はらなかつたに過ぎないのであつた。

しかもその古い葛籠の中の、ぼろ〳〵になつた古い文書の中には何があつたか。仔細に見たならば、また然るべき歴史家乃至考古學者が見たならば、驚くべき新しい發見がそこにありはしなかつたか。新しい發見以上に、驚くべき人生の悲喜劇が其處にありはしなかつたか。

『人は生きてゐる時代しか知らないものである。時代から時代へと移つて行く境目などは、人は念頭に置かないものである。』かう誰かゞ言つた事があるが、何うしてかう人間は昔を念頭に置かないのであらうか。過去や將來を無視して、現在のみで生きて行つてゐるのであらうか。何故、人間は、『今さへ好ければ好い』のであらうか。過去や將來などに心を勞してゐては、現在を十分に生きて行くことが出來ないやうに人間がつくられてある爲めか。無學の僧が一目見て、その古い文書をまた元の塵埃の中に押しやつたのも決して無理ではない。

しかしその古い文書にも、果してさうした重要な記錄があつたか何うかそれはわからない。或はその古文書の更に更に數代前のものゝ中にでなければ、その事蹟は書いてなかつたかも知れない。平凡な寺の田地や財産のことであつたかも知れない。――しかも驚かるゝことは、この寺などは、僅かに昔のほんのほんの一部が殘つたもので、この下に橫はつた廣い一帶の地は、曾ては一度大きな繁華な城市の跡であつたのであつた。あらゆる人間が、或は榮華をつくし、或は悲涙に咽び、或は戀ひ、或は死し、或は泣き、或ひは笑つたことのあるところであつたのであつた。地獄と極樂とが曾ては一度完全にその繪卷を

こんなことを言ひながら二人の旅客は野の方へ出て行つた。

何百年となく其處の暗い佛龕の中に埋められるやうにして殘つてゐた不動明王の小さな像、その像の方にさうした意志が起つて、そしてその二人の旅客を引き寄せたといふ考へは、單に、徒らなロマンチツクな空想か。否、その不動明王ばかりではない、そこに無數に殘つてゐる墓、その石の墓にもさうした意志があるといふことを想像するのは、つまらない荒誕な空想であるか、否か。

二

新しく住職になつた無學の僧は、さうしたことについても何も知らない。また知らないのも無理はない。しかし、長い間にはその寺にもいろ〳〵なことがあつたに相違ない。悲劇もあれば喜劇もあり、また無數の人達の煩悶懊惱もあつたに相違ない。埋れた未死の心もあつたに相違ない。その僧の入つて來た時は、寺は大破して、屋根には雨が漏り、壁は落ち崩れ、殘つた寺の寶と言ふやうな物もなかつたけれども、それでも古い文書などは大きな古い葛籠に一杯に殘つてゐた。僧は一度はそれをひつくり返して見たけれども、そんな紙屑は何うにもならないといふやうにして――さうかと言つてこの寺についたものを無闇に賣つたり何かするでもない。それも金目にでもなるものならだが、爲方がないといふやうにして、そのまゝ本堂の奥へ押しやつて了つた。

臣の中の一人であるやうな氣がした。

『でなくつちや、こんな山の中の寺の不動明王が僕等の體に蘇つて來るわけはない。誰も知つてゐない、また誰も知らうともしないその不動明王の記事が僕等の眼につくといふことが、既に第一に不思議だ。何等かの緣故がなければ、細かい、人の智慧ではわからないあるものゝ要求がなければ、さうした考へが君なり僕なりに起つて來るわけがないぢやないか。』

『さういふ氣はするにはするがね。』

かう一緒に步いてゐた一人の旅客は言つた。

『何うも不思議だ。』

『兎に角、かうやつて訪ねて來るといふことに意味があるにはあるね。此方の心にさうした感じが先づしたのか、それとも亦あの數百年を塵埃の中に埋れた不動明王の方にさうした意志が起つたのか、それは何方だかわからないが、兎に角、僕と君とがこゝに訪ねて來て、何うしても見せないといふ頑なな和尙をも說破して、あれを見たといふことは不思議だね。』

『本當だとも……』暫し考へて『そればかりではないよ。さういふことは世間にはいくらもあるぢやないか。吾々の生きてゐる實際にもあるぢやないか。』

『さう言へば、さうだ。』

の奥の佛龕の中に入れられてある不動明王の小さな像を拜させて貰つた二人づれの旅客は、此方に出て來ながら、

『立派なもんだ。』

『國寶の價値がある。』

など丶言つて、頻りに住職の無學を罵つてゐたが、かれ等の言ふ所に由ると、その像はたしかにF將軍の守り本尊にして置いたものに相違ないといふことであつた。歴史や古文書に書いてあるところを綜合して考へると、F將軍沒落の後、その家來の一人がこつそりその持佛をその城から持ち出して、山を越して、この地方に來て、小さな寺に安置したと書いてあるが、それは地理から推し、當時の狀態から考へて、何うしてもこの寺でなければならなかつた。かれ等はその遠い時代の光景を頭に繰り返しながら、靜かに寺から平野の方へ下りて來た。

かれ等の眼には、山を越して凄じく炎上してゐる城のさまや、鎧や兜を着けた武士が互ひに斬り合つてゐるさまや、鎗の穗のキラキラと夕日にかゞやくさまや、被衣を着た姫達が裏口から丘づたひに難を避けて此方に來てゐるさまなどがはつきりと一つの繪卷か何ぞのやうになつて見えた。かれ等は全く數百年前の空氣の中に呼吸してゐるやうな氣持で、或はその時分にもかれ等は何等かの狀態で生きてゐて、そのF將軍沒落の一齣の中に働いてゐたやうに思はれた。或はその主人の持佛を此處まで持つて來た家

再生

一

半は丘に凭つた小さな寺の庭から眺めると、野はひろ〴〵と一目に見わたされて、その中を流れる川水に夕日がキラキラとかゞやき、更にその向うには、雪を載せた山巒が時には白く、時にはほの赤く、時には紫に、また時には全く暗褐色に包まれて見えた。夏の午後などには、そこから雲が湧き出すやうに無限に渦まき上つて、忽ちにして空を蔽ひ、野を蔽ひ、凄じい雷聲と共に銀箭のやうな驟雨が横さまに林や丘や草藪を掠めて通つた。

その寺は今は田舍寺になつて了つて、誰も顧みるものはなかつたけれども、それでもその本堂の構造には、長い年代を經たあとが殘つてゐると言つて、好古癖のある好奇な旅客は、何うかすると、をりをり其處に訪ねて來て、新たに其處に入つて來た無學の住職を困らせた。

ある時、面倒臭がつてゐるのを無理に賴んで、いくらか金などを紙に包んでやつたりして、漸く本堂

た。かれは此方に來て、

『もう水が來たやうですよ。』

『さうかえ。』

驚いたやうにして母親は立つて其方に行つたが、それと殆ど同時に、サッと一吹き吹き捲つて來る風と共に、病妻の寢てゐる向うの雨戸は一枚外れて、蚊帳に凭れるやうになつたと思ふと、白い珠のやうな雨は凄じく病妻の枕元に降込んで來た。

『あ……』

とかれは叫んで、そのまゝ立つて、もう一枚外れようとしてゐる雨戸を押へた。暫しの間に、病妻の枕元も、蚊帳も、蒲團も、またそこに立つてゐるかれもぐしよ濡れになつた。

病妻はよろめく脚を辛うじて立つて、その風雨の襲つて來るのを室の一隅の方へ避けた。

突然土手の切れたのを報ずる半鐘の音が凄じく聞え出した。

此方に來ると、母親は、

『氷がもうなくなつたがな。作に行つて貰はにやならんが――』

『さうですね。』

かう言つたが、この荒れでは、とてもA町まで行つて貰ふことなどは出來ないのはわかり切つてゐた。この烈風强雨を衝いて、あの長い土手をA町まで誰れが歩いて行くことが出來ようかとかれは思つた。風雨はまた一頻り荒れに荒れた。ゴォと風の吹き寄せて來る時には、家屋も搖ぐばかりに思はれた。

『土手が切れんければ好いがな。』

餘りに荒れが强くなつて來たのを見て、心配さうに母親は言つた。

『切れゝば、何方が切れるんです。沼の方からですか。それとも川の方からですか。』

『何方が切れても大事だ。』

折角丹誠に丹誠をして、漸くこれまでにした稻を、この一荒れのために滅茶々々にされて了ふのを心から心配するやうにして母親は言つた。

雨戶を細目にあけて、をりをり戶外を覗いたかれの眼には、稻が倒れ、樹の枝が飛び、水が既に街道にまで上つて來てゐるのがそれと明かに映つた。沼の方を望むと、凄じい黑い雲が集團をなして迅く迅く渦卷いて來る中に、一種怖しい物音がきこえて、今にもそこから危難が押し寄せて來るやうに思はれ

昨夜は風の方が強く、白箭のやうな雨がをりをりやつて來るには來ても、それも時の間に晴れて、月が白銀のやうな光を濡れた草木の上に漲らせたりした。その間をかれは遲くまで病妻の傍についてゐて、少し落附いたのを見さだめてから、離座敷に來ていつものやうに臥床に就いたが、ぐつすり寢込んで了つて、今朝目を覺した時は、最早時計は十時をすぎてゐた。見ると、空の模樣は益々險惡で、風は強く、雲脚は早く、雨戶を明けると雨は土砂降りに烈しくばらばらと障子を打つた。田も、稻も、土手もすつかり濡れて、凄じい雲は湧くやうに鼠色をした沼の方から簇つて來た。

樹の鳴るやうな、または瀧津瀨の漲り落ちるやうな、一種凄じい物音は、何處からとなく襲つて來て、ある恐ろしい暗示がかれの弱い心を脅かすやうにした。かれは一度明けた雨戶をぴつしやりしめて了つた。

それでもかれは病妻のことが心配になるので、到底傘はさゝれない土砂降の中を、土藏に添ひ、または小屋に添ふやうにして辛うじて母屋の方へ行くと、そこにも風雨の襲來は夥しく、雨の洩れるところどころを金盥やバケツで受けて、雨戶をしめ切りにして、母親と病妻とが小さくなつてゐるのを見た。

矢張終夜眠れなかつた樣子で、病妻は熱のかなりにあるらしい眼を明いてそしてかれの入つて來るのを見た。かれは默つて傍に行つて、そこに置いてある檢溫器を手に取つた。

熱は三十九度と少しあつた。

てあつた。そしてそれ等はすべてかれの勞れた心を鞭打ち、遊惰勝ちの生活を改めさせるやうな新しい刺戟性のあるものをそのかげに持つてゐた。昨夜一夜、田舍に埋れてはならないことを考へて眠られなかつたことをかれは思ひ出した。

空は昨日あたりからいくらか荒模樣になつてゐた。日は麗かに照つてゐたけれども、颱風は近く迫つて來てゐると覺しく、かなりに强い風が吹いて、ちぎれたやうな白い雲が早く早く碧い空を掠めて通つて行つた。

丘陵の方の空から、集團をなして押し寄せて來る雲のために日影はをりをり翳つては晴れ、晴れてはまた翳つた。それに、昨夜、急に、發熱した病妻の檢溫器は、近頃にめづらしいほどの高度を示したので、母親はじめかれも大騷ぎをして、人をA町まで走らせて、氷を買つて來て、氷囊に入れてそれで頭を冷やしたりなどした。風のために高く捲きあげられる蚊帳の爲めに雨戶を二枚ほど引いて、細目にそれを明けてゐるのが此方から見えた。

『あれなければ好いが……』

『何うも一荒れやつて來さうだ。』

かうした聲が其處此處に聞えた。

に鳴いた。

暫くして、瓜を食つてから、

『貴方、此頃、少しは出來て？』

『何が――？』

『書くものが……』

『書いても、何うも旨く行かん。この間の奴もまた破つて了つた。』

『何うしてでせうねえ？』

『書くよ、書くよ。』

かう早口にかれは言つた。

かれは此處に來て既に久しくなることを思つた。かれはいろいろなことをした。此處等で出來る食物――沼から獲れる鰻、それににんにくの磨つたのをつけて食ふことも知れば、川蝦の天ぷらの旨いのをも知つた。西瓜、甜瓜、さうしたものも都會ではとても味ふことの出來ないものであつた。かれは今度こそは自分の運だめしをやる作物に取りかゝらなければならないと思つた。昨日來た都會の友達からの手紙――それには、新しい氣運の熟して來てゐることや、誰れも彼も熱心に自分の藝術を築き上げることについて眞劍になつてゐることや、新しい表現に苦心してゐることや、その他いろいろなことが書い

わかるやうに言ふには容易なことではないといふやうに母親はそのまゝ言葉を切つて了つた。

『北海道に行つた時分のことはよく覺えてゐますよ。私は喜んで行きましたね。』

『…………』

かれはかうして一家團欒して話せば、母親と自分の間にも何の障碍もなく、眞心と眞心で相對して話すことが出來、自分と病妻の間にも水臭いやうなところは微塵もなしにゐられるのに、さて一歩深くお互の心中に入れば、てんでに解け難いこだはりを持つてゐて、何うすることも出來ない別の身であることをつくづく思つた。

病妻は起き返つて見たりした。

『あゝ天の川がよく見える。かうして天の川を昔はよく見たものだねえ。貴方、矢張かうした平野の方が天の川はよく見えますね。海よりも……』

『海でも見えるんだがね。』

『さうですかしら？　でも、矢張、子供の時に見た印象がはつきりしてゐるから、何だか一層なつかしいやうな氣がしますね。』

母親は甜瓜の遲く出來たのを持つて來てそして皮を剝いた。

『かうして、よく瓜を剝いて食つたもんだ。』いかにもなつかしさうに病妻は言つた。垣根の蟲は頻り

默つてゐる三人の間を時の榮枯盛衰が悲しく綾をなして織り雜るのを誰も感じた。しかも誰もその問題には今更觸つて見ようとはしなかつた。

『お前はその時分から弱い、むづかしい子だつたよ。』

『氣むづかしやだつたんでせうね、屹度。……誰がだましても言ふことをきかないで、長い間泣いてゐたことを覺えてゐますよ。』

『さうさ、一番困つたのは、あの時分ゐた幾さ。お孃さんのむづかしやには困る困るつて言つてゐたからね。』

『さうでしたね。幾といふ肥つた女中がゐましたね。あれは何うしたでせう。』

『何うしたかね。N町へ嫁に行つたまでは知つてゐるけれども。』

また沈默がその間を縫つた。金ぶんぶんが一つ灯を目がけて飛んで來て、それがぐるぐると座敷の中を飛び廻つた。かれは立つて行つて團扇でそれを落した。

ふと、病妻は母親に訊いた。

『何うして父さんは北海道に行くやうになつたんでせうね。』

『何うしてつて、別に……』

それを說明するには、餘りにいろ〳〵な事情が纏綿してゐるといふ風に、またはそれをはつきりと娘に

こんなことを言ひながら、學校から歸つて來て、よく水あほひや、みそ萩などを水邊に採りに行つたことを病妻は話した。

『祖父さんつて言ふ人がやさしい人で、それに、孫つて言つては、私一人しきやなかつたもんですから、それは可愛がつて呉れたんですつて……』

『覺えてゐるかえ？』

『覺えてゐますとも……』すぐ言葉をついで、『莞爾した、それは好い人でしたよ。祖母さんつて言ふ人は、何方かと言へば、怖いやうな人でしたけれど……』

『祖父さんつて言ふ人はそれでも豪かつた人なんだね。』

『豪いつて言ふこともなかつたでせうけれど、曾祖父さん時分が一番盛んで、下男が十五六人も始終ゐたつて言ふんですから、祖父さんの時代も人に立てられた時代だつたんですね。……母さんが嫁に來た時はそれは大したもんだつて言ひますからね。』

向うに坐つてゐた母親は、

『里も今のやうぢやなかつたからね。』

『さうですつてね、母さんの里も、その時分は大したもんで、舊家と舊家とで、それで緣組をすることになつたんですつて。……そしてその母さんの來た翌年には、もう私が出來たんですから。』

れは病妻と最初に暮した三四年の樂しかつた歡樂を不思議なやうな心持で振返つて見た。
かれは默つて立盡した。
歸つてから、『今日は初めて家の寺に行つて見た。』かう輕い調子でかれが言ふと、
『さう！』
と病妻は言つて、ぢつとかれの顏を見て、何か言はうとした。しかしその言ふことが、口に出しては厭味になり皮肉になり、または突詰めた暗い壁になるのを恐るゝやうにそのまゝ默つて低頭れて了つた。かれも悲しさの身に迫つて來るのを覺えた。

かれと病妻の前には、靜かな冴えた秋の夜の空がひろく展けられてあつた。垣根には蟲の聲がすだき、涼しい風は沼から來て、星屑のキラキラするのがさながら金屬性の破片の散らばつたやうに見えた。蚊はもう數へるほどしかゐなかつた。垣を越して灯が二つ三つチラチラした。
天の川が白く、さながら手に取るやうにはつきりと仰がれた。
仰向けに寢てゐる病妻も、今宵はいくらか機嫌も好く、熱も低いといふ風でいろいろと昔の幼い頃の話などをした。
『隨分、私はこれでいたづらな兒でしたんですつて、これで……』

地に埋められるよりは、何れほどひろびろとして、清々して好いか知れないとかれは思つた。

かれはやがて何の面倒もなしに、病妻の家の歷代の墓地の前に立つことが出來た。村で舊家と言はれ、一時は殿樣のやうな尊敬を受け、現にこの寺にもいろいろなものを寄進した家の墓だけあつて、規模も大きく、石碑なども高い大きな臺石の上に建てられたやうなものが多かつた。病妻の父親の墓――それは遺言では東京に埋めて貰ひたいといふことであつたが、親類の意見で、矢張その骨を此處に持つて來たといふ話はかねてきいて知つてゐたが、それがやゝ新しいだけで、祖父のも祖母のももうかなりに古く、青い苔が一面に封ぜられてあつた。かれは舊い家といふことを思はずにはゐられなかつた。またその舊い家が病妻だけで全く絕えて了ふことを思はずにはゐられなかつた。かれにはその一粒種の、またはその大きな家の最後の一人である病妻の死んで此處に葬られて行くさまが、既に事實としてあらはれてゐるかのやうに見えた。そして一時の人々の涙、花やかな葬式、七七日の讀經、その後は寂として全く蘚苔に封じて了はれるのも眼に見えるやうな氣がした。

かれは無論、そこには一緒に葬られない。……かれの墓はまた別にある。否、墓にかれがなるまでにはまだいろいろな色彩がかれを取卷き、いろいろな生活がかれを豐富にし、病妻一人がかれを占領することの出來ないやうな巴渦が、歡樂が、悲哀がつぎつぎにかれにやつて來るに相違なかつた。かれはそこでは松林の小さな祠の中で此間思つたやうなかなしいかれの將來の生活を考へることが出來なかつた。か

思つたことはなかつた。其日は不思議にもかれは其處に行つて見る氣になつた。そして松蟲や鈴蟲の鳴いてゐる草路を松山の方へと折れて、そして向うにそれと見えてゐるこんもりとした寺に向つて歩いた。一番先きに大きな山門が眼に映つた。長い草路の向うにある山門、屋根を蘆で葺いた古い古い山門である。蟬の喧しく鳴く聲があたりに響き渡つてきこえた。

かれは靜かに山門を入つて、鋪石道の兩側に綺麗に草花の咲いてゐるところを通つて、そして奥にある本堂の前へと行つた。流石に千葉氏時代からある古い寺だけあつて、構へも大きく、庫裡も廣く、掃除も行き屆いて、樹の影が涼しく蔭をつくつてゐた。沼から來る風が涼しく兩方の袖に滿ちた。

あたりはしんとしてゐる。

寺僧の姿が庫裡にちよつと見えたけれども、話をするのが面倒臭いので、そのまゝ普通の參詣者のやうな顔をして、ぐるりと本堂を廻つて、矢張涼しい樹の蔭の多い墓地の方へと向つた。

突然沼がキラキラと日にかゞやいてゐるのが眼に映つた。

かれは墓をさがすのも忘れて、その眺めに引き寄せられるやうにして、暫し立留つた。

成ほど病妻が口癖のやうに、沼の畔の寺と言つたのは無理はないと思はれた。丁度そこからは吉高城址の松は右になつて、廣い錆びた沼が、いろいろな不可思議のある沼が、此處が一番廣いかと思はれるやうに打開いて眺められた。墓となるならば、實際、都會のせゝこましい、借家住ひのやうな青山の墓

色彩も、あらゆる歡樂も、あらゆる生命も、とうの昔に失はれ且つ奪はれてゐる自分を發見したやうな氣がした。

淋しい淋しい氣がした。

『貴女のお家は？』

『この下のYで御座います。きたない家ですけども、御散歩の時には、お寄り下さいませな。』

『貴女のお勤めになる學校は？』

『Tの學校です。』

『ぢや、まだ遠いんですね。』

『いゝえ、こゝから十五六町しきや御座いませんが……ちと、學校の方へもお遊びにお出で下さいませ。』

丁寧にお辭儀をして、そして祠の境内を劃る松林の草路の中にその姿をかくして了つた。かれは女の姿の見えなくなつたあとの草や木に午後の日の濃い淡い影がチラチラと搖いてゐるのを見詰めた。かれは持つて來たヱルハアレンの詩集にやがて眼を移した。

かれが病妻のよく歌に詠む故鄕の沼に添つた松蔭の寺を訪問したのも、矢張かうした散歩の次手であつた。これまでにもかれは度々その近くを散歩したことはあつたけれど、つひぞ一度もそこに行かうと

に、時には外國の小說などを持つて來て半日を暮した。

ある日は其處で、小學校の女教員とかれは懇意になつた。『まア、さやうでゐらつしやいますか。おなつかしい。』と言つて、女教員はぢつとかれの顏を見た。女教員は文壇に於けるかれの微かな名をも記してゐた。かの女はノオトに書いた歌などをかれに見せた。

かれはその女教員の通勤してゐる谷の底にあるやうな小學校を想像した。それは綠の影の濃やかな松林の中か何かにあつて、そこからかの女は坂を登つて、豆畠の傍を通つて、沼の見えるところへ出て、そして此方へとやつて來た。かれはフランスのすぐれた短篇作家の作品の中のシインを思つた。つゞいて誰にも知られずに忽ち出來て行く二人の仲を想像した。これがもしあらゆる道德をも、またあらゆる反省をも忽ち破つて了つても悔いないやうな美しい女であつたならは……などとも思つて見た。しかし、いつもさうした場合に大きな障碍物であるやうに、矢張その場合にも、沼の畔の家の蚊帳の中に仰向けに枕を高くして寢てゐる病妻がかれの眼の前に大きく映つて見えた。

かれは侘しかつた。生きてゐる中ばかりではなしに、死んでの後も、かうしてかれの眼の前に病妻はあらはれて來はしないか。はつきりと大きくあらはれて來はしないか。そしてかれの新しい運命の開けて來るのを礙げはしないか。いつまでも、いつまでも、死にまでかれはその病妻の枕を高くした蒼白い蠟のやうな姿につきまつはられて行かなければならないのではないか。……かう思つたかれはあらゆる

不幸な若い主人の危難に赴いて、捕へられて殺された跡には、小さな祠が殘つてゐて、子供の百日咳に靈驗があると言つて、遠くから人々が參詣した。その祠はお信さまと呼ばれた。それは侍婢の名で、かの女は若い主人を遠く遁れさせて、そして蘆荻の深く茂つた中に身を躱した。追手は迫つた。恐らくぢつとして靜かにしてゐたならば、かの女はその繩目の辱めを免れたであらう。然るに、不幸にもその時小さな咳が出た。そしてかの女は發見され捕へられて殺された。かれはさうしたことが百日咳の靈驗のある小さな社として今日に殘つてゐるのを面白いと思つた。その祠の前には小さな旗が無數に上げられてあつた。かれはよく其處等を步いた。

丘から丘へ續いてゐるところに、こんもりと深く茂つてゐる松の林があつて、それは沼の畔からよく指されて見えてゐたが、殊に夕暮近い空には、松の幹の黑く浮き出すやうになつてゐるのがかれの離座敷の緣側から繪のやうになつて見えてゐたが、そこにもかれはよく出懸けた。その祠の傳說もかれにはなつかしかつた。帝の寵愛を一身に集めた妃が、一朝癩を病んで世をはかなんで、此の田舍に身を躱してゐたが、その精進に、効があらはれて、數年ならずして、すつかり病が癒えて都に歸つたといふことであつた。またもう一つの傳說は、其處に祀られてゐる姬は、戀のために、高貴の身を捨てゝ、一生こゝに農夫の妻として終つたその跡を後の人の祀つたものであるといふことであつた。かれはコルシカの島に一生を終つた『幸福』の老夫妻のことなどを頭に浮べた。かれは蟬の鳴き頻るその涼しい祠の木蔭

飮んでゐる姿をよく見かける小さな汚い料理屋も、すつかり閉ぢられて、白粉をぬつた女の姿も何處に行つたか見えなくなつた。しかしそれもほんの纔かで、『なァに、またすぐあいつ等はやつて來ますよ。村の忙しい間だけ町の方へ行つてゐるんですよ。』などゝ人々は話しに。

半年の間に何も彼も、初めはめづらしかつたかれ等の生活も、錆沼の中にかくれてゐるミスチックな氣分も、沼の周圍をめぐる複雜した丘陵も、その丘陵の底深く埋れたやうにして文化に後れてゐる村々の狀態も、今ではかれにはすつかり飮み込めて來た。かれは依然としてまだ筆に親しめない人であつた。三四枚書きかけたのをそのまゝ放つたらかして置いて、病妻の看護をしたり、母親と沈默の爭鬪を續けたり、舟を漕ぎ出したり、皆なの忙しい中をのんきさうに釣竿の綸を垂れたり、そこからそこへとはてしない冥想を抱いて逍遙つたりする人であつた。かれは沼を渡つてS市に行く街道の渡場の休茶屋の亭主や上さんにも懇意になれば、此方の臺地から泥川のやうに見わたされる沼の畔の古い寺の老いた僧とも知己になつた。吉高の城址の大きな松の聳えてゐる下では、かれはよく夕日の沼を明るく染めるのを見た。

かれは此處等に生息した昔の武士達のことなどをも頭に浮べた。S市の附近にある千葉氏の根據となつた大きな城郭の址、それを取卷いて、四十八もこの附近にそれに屬した城壁があつたといふことは、かれにいろいろなことを想像させた。矢張その時分にも種々なことがあつたのであつた。忠義の侍婢が

『母さんだつて、今はあゝして強情でゐるけれども、里の方にも、さう賴りになる人はないんだから、一人になつたら、可哀相だと思つて……』

『でも、母さんは、母さん一人の方が好いんだよ。』

かう言つたが『しかし、もうそんな話はやめだ。』

秋は深くなりつゝあつた。鷄頭の赤いのが垣を彩つて、影の濃い午後の日の光線が人の心に染み透つた。夜は天の川が白くさやかに仰がれて、來た時の蛙の聲の賑やかであつたのに引きかへて、今は蟲の聲が到る處に滿ちた。馬追が病妻の蚊帳の外の灯を目當てに飛んで來たりした。

沼には碧い空が靜かに映つた。あたりの空氣が晴れてゐるので、二月ほど前に見た眺めとは非常に變つて、鏽沼は矢張鏽沼ではあれけれども、何處となく爽やかに、鮮やかに、そこに影を涵すものがすべてインプレツシイブにくつきりと際立つた。眞菰と蘆の繁つたなかを舟が一隻二隻漕いで行くのも見えた。

『秋だ！』

かうしんから思つて立つてゐるかれの顏を夕日は明るく照した。

平生は懶惰に暮してゐる人達も此頃では皆な働いた。いつもかれの相手になる秀といふ土手の上の半ば痴呆に近い男すら、大勢の人達に雜つて野で働いた。村のところどころにある、夏中は農夫達の酒を

『いや――』
『この頃は馬もお倦きになつて？』
『倦きたといふわけではないけれど……』
『沼には？』
『さう、沼にばかりも行つてもゐられないからね。』
『矢張、都會が好いのね。田舍は駄目ですね。』
『さうばかりでもないよ。』
『落附いて、此處にゐて下さるやうにして下さると何んなに安心だか知れないんですけれど……』
『落附いてゐるよ。』
『何かお書きになつて？』
『何か書くよ。』
『いつまでも、いつまでも此處にゐるやうにして下さると好いけれど……』
かの女は輕く溜息をついた。
『お前の心持はよくわかつてゐるよ。さうまで僕のことを心配して吳れるのは嬉しいけれど、どうせ、何うにもならないことだから、餘り心配して熱でも出さない方が好いよ。』

の人達から、手紙やら小包やらで種々と慰藉を受けた。健全なかれの妻である中は、決して受けることの出來なかつたやうなやさしい悲しい手紙をもかの女は貰つた。何うかするとかの女はその手紙を顔に當てゝ長い間歔欷けてゐた。

妻の日記の中には、それがよく書いてあつた。『Sより手紙――悲しさに胸塞がる心地せらる。』こんなことが書いてあると思ふと、『この君の若き時は美しき君なりし。角帽に金釦、路ゆく少女の振り返らざるはなかりき。』などと書いてあつた。かれはしかしそれについても別に何の心をも起さなかつた。かれは唯あはれさを覺えた。

『昔の戀人からのお見舞だね。羨しいもんだな。』

半ば戯談にかれは言つたりした。

しかもかうした中にも、病妻が夫と母親のことに就いて、唯そのために心配してゐるさまはかれにもよくわかつた。かの女は歌に託してその心をかれに示した。

『退屈したでせうね、もう……』

ある時かうかの女は言つた。

退屈し切つてゐるけれども、田園のさびしさに、慰むもの丶ないのに、すつかり退屈して了つてゐるけれども、しかもそれを面にあらはさずに、

へと遊びに行つた。沼を繞つた丘陵の中をも縱横に歩いて見た。もう今では榮吉からきいたやうな沼の怖しさも思はなければ、丘陵の中に路を失つて歸りをまごつくやうなこともなかつた。次第にかれは田園の懶惰な生活などにも眼を開いて來た。

もた、かれは馬を引出して乘つて見た。今までさうした經驗がないので、初めの中は、それが非常に興味を惹いた。毎日、土手の上を飛ばしたり何かしたが、一月二月經つ中には、それにも倦きた。今でもかれは原稿を急いで郵便に託する必要のある時は、馬に乘つてA町の停車場まで出かけては行くが、平常は乘つて見ようとする氣も起らなかつた。

病妻の許にも、をりをり見舞の客があつたり、小包で物品を送つて來るものがあつたりすると同じやうに、かれの許にも、若い筆を持つ女から手紙が來た。その女はかれの周圍にある多くの色彩の中では、一番遠いやうでそしてまた一番近いやうな惑星であつた。その手紙にはいつも『奥さんはいかゞですか』と書いてよこすが、その質問は普通の見舞の言葉のみではないことはかれには餘程以前から知れてゐた。新しく開かれて來る筈の運命、それは何んな運命だか、かれにはそれは想像は出來なかつたけれども、しかしその中に何等かの形でその若い女が入つて來るには相違ないと思ふと、その手紙もむざと捨てゝ了ふのは惜しいやうな氣がした。

それと相對して、妻は垂死の床に臥してから、よく昔の戀した男、また戀された男、つまりかれ以前

別に變つたことはなかつた。明け放した母屋の一間に蠅を除けるための蚊帳が一杯に吊つてあつて、その中に病妻が枕を高くして落附いて寢てゐるのがそれとはつきり見えた。母親はもう畠に出たと見えて、それに隣つた室には、丸い火鉢に鐵瓶がかゝつてゐるばかりであつた。かれは顏を洗ひに井戸端に行く前に、垣を縁どつて咲いてゐる紅白の木槿などを眺めた。

かれはこれまで三年間病妻を看護したことなどををりをり思ひ起した。思ひ出してもぞつとするやうな光景もあれば、一緒にゐる自分に病氣の傳染するのを恐れて、薄情とは知りながらわざとそれから遠ざかつてゐたことなどもあつた。幾度かその病妻の死がかれに齎らして來る新しい運命について希望の多い眼を明けて見たこともあつた。一昨年も昨年も、『もう今度こそは新しい運命が開ける、』と思つた。しかし、それも遂に開けずに今日までやつて來たことを思つた。此處にやつて來た當座は、その運命が解決しないでも、落附いて自分の藝術を切り開いて行くことが出來るやうな氣がしたが、矢張それは駄目であることが段々知れて來た。相變らず種々なものがかれの頭に絡み附いた。錆びた沼の持つた神祕、田舍のさびしい生活、まぎらさうとしてもまぎらすことの出來ない退屈、一月も行かずにゐると手招きして自分を呼ぶやうに見える都會の賑やかな雜音と色彩、さういふものが絶えずかれを惱ました。かれはそれをまぎらすためにいろいろなことをした。初めは錆びた沼の神祕を一層深く探るつもりで、よく沼

は何處へでも行けるのだから。……貴方は立派な方だから、誰でも喜んで世話をするでせうからね。』

『さうなら、さう思つてゐるさ。』

何故か突放したやうにかれが言ふと、病妻は泣いて、

『後生ですから……何うかさう思はないで下さい。私の持つてゐるものは、魂でも何でも上げますから、私の死んだ後も、他の女には世話にならずにゐて下さい。その代り、いつでも貴方の不自由な時は私が出て來て、墓の中からも出て來て、そして世話をして上げますから……ね、ね、ね。……よう御座んすか。私は死んでも決して貴方の傍は離れませんから……何でもはつきりと見てゐますから……』

それについて何か自分が言つたのは覺えてゐないが、困つたな。……さうして執ねく死んだ後までつき纏はれてゐては……と思つて、そして病妻をつき放すやうにした。……病妻はまた泣いた。——と思ふと、夢が覺めた。

コ、コ、コ、コ、ココ、と水鷄が靜かに啼いてゐた。

それからまた一寢入りぐつすり寢て、日の長けるのをもかれは知らなかつた。

夢が猶いくらかかれの心に絡みついてゐた。勿論、夢の中で、一生執ねく着き纏はられてゐては困るな！　と思つたことは、すつかり消えて、その不安は白日のもとに殘なく解けて了つたが、それでもいくらか病妻のことが氣になつて、そのまゝ雨戸を明けて下駄を突かけて、外に出て、母屋の方を眺めた。

水鷄が頻りに鳴いた。

コ、コ、コ、コ、ココ――それは何處で鳴いてゐるんだらうとかれは思つた。そしてまたさうして鳴いてゐる鳥は何んな形をしてゐるのだらうなどと思つた。注意して聞いて見ると、確かにそれは二羽しかゐない。かう思ふと、その鳥が水草の中にかくれて、赤い嘴か何かを明いて、伴侶を終日呼んでゐるさまがそれと想像されるやうな氣がした。

コ、コ、コ、コ、ココ――

日は麗らかに且つキラキラと照つた。青田の稻は風に靡いてゐる。何處かで田草を採つてゐる農夫達の話す聲がきこえる。明るい光線が眩くかゞやきわたつた。

昨夜の夢をかれは繰返した。

病妻は泣いてゐた。そして言つた。

『私が死んだら、誰か他の女が來て貴方のお世話をするんでせうね。』

と、かれは平氣で、

『それはするだらうさ……』

『だから、私なんか一刻も早く死んだ方が貴方のためにはなるんですね。私が死にさへすれば、貴方

あらうか。かれは自分の眼を疑つた。

ぞつとして戦慄した。かれは立ち留つた。

月は無生物ではなくて、現に生きた魂がそこにもあつて、そして自分に向つてかうした不思議を見せてゐるのではないか。愈々かれは怖ろしくなつて來た。あらゆるものが、路が、松林が、畠にころがつてゐる瓜が、すべて自分を脅かして來た。かれは走るやうにして坂を下りた。

幸ひにかれの前を歩いて行く一人の人影が見えた。

急いで追ひついてきくと、

『これを眞直ぐに行けば、土手に出る。』

かう教へて吳れたので、命を得たやうにしてそしてまた走つた。

家では歸りが遲いので、母親も病妻も心配して待つてゐた。

『あゝえらい目に逢つた!』

で、その話をすると、右に行くべきを左に行き、方向を失つたと思つた沼の光は、別に長く深く入り込んでゐたのであるといふことがわかつた。しかしこの沼の印象と大きな月の印象とは長い間かれを脅かした。つゞいてかれは今まで想像にだも上らなかつた不可思議の世界がかれに迫つて來るやうなのををりをり感じた。さながら病妻の心の姿がそれに續いてゐるかのやうに――

が出來なかつたなんていふものがあるでさ。ちやんと吉高の森がくろくはつきりと見えてゐながら、いくら漕いでも漕いでもそこに行けねえことが私にもあつた。』

『さうかな……』

『何でも皆な主のする業だつて言ふがな。』

こんな話を榮吉は盡きずにした。後には杉の高い森の靜かに水に落ちてゐるのも無氣味になり出した。吉高の森の下に來て、かれは急いで舟を捨てた。

ふと仰ぐと、大きな黃ろい盆のやうな月が誰かに急に押し上げられたやうに出てゐた。

かれは沼のほとりの複雜した丘陵の中で路を失つて、行つても行つてももとのところに出て來られなかつた。沼が右にあるとばかり思つて步いてゐると、いつか左にその錆びた色が見えたので、驚いて、それから方向を取つてまた步き出したが、容易にそれと思はれるところに出て來ない。日はくれかゝる。人には逢はない。人家もあたりに見當らない。と、思ひもかけない坂がある。谷がある。松原がある。鈴蟲が頻りに好い聲で鳴いてゐる。

ふと大きな月を仰いだかれは驚いて立留つた。

こんな大きな月をかれは何時曾て見たことがあらうか。またこんな黃い月の光をかれは何處で見たで

い……。漁師なんか、それが鳴くと、もう今日は駄目だと言つてすぐ大急ぎで引かへして來るが、何うもそれが何の鳥だかわからない。不思議だよ、あの火は――。ほらの火なんかいつでもよく見えるさ。その時は藻の中でも何でも底まですきとほつて見えるからね。』

『矢張燐か何かだな。』

『兎に角、夜はあんまり氣味がよくねえ沼だ……。それでも、漁師は夜、うけを置きに行くが、夜は漁があるもんだでなァ。』

『古い沼だからな、矢張……』

丁度その日はいやに曇つて、その灰色の空がぴつたりと捺したやうに沼に映つて、水の底にある藻が女の髪ででもあるかのやうに氣味わるく漂つた。ベックリンの畫がまたかれには浮んで來た。かれにはそれが病妻の心とか恨とかに似てゐるやうに度々思はれ出して來た。錆びた水のあるところに、空の一ところ碧く晴れたのがぴたりと映つてゐるのも何となく不思議な怖れをかれに抱かしめた。榮吉の漕ぐ櫂に微かに觸れる藻の音も、何となく女の髪に指でも入れて、そしてそれをしごいてゐるやうな氣がした。

『晝間見ちや、何でもねえが、夜になると、丸で變つて了ふのはこの沼でさ、』と榮吉はつゞけた。『丸で見當がわかんなくなるでな。それは廣いにも何にも……よく一晩中漕いでも漕いでも歸つて來ること

妻を思つた。かの女はこれまで何遍その水あほひの美しいことをかれに話したか知れなかつた。かの女はそれを都會の眞中で思ひ出してはよく歌に詠んだ。『私が生きてゐる中は、何うか他の女には關係しないで下さい。後生ですから。』かうぢかに口に出してこそ言はないけれども、毎月都會に一二度出て行つて歸つて來た時などには、その眼が、その體が、すべて祈る樣にかれに向つてさうした要求をしてゐるのをかれは感じた。かれは悲しいやうな氣がした。ふとその水あほひの花を見てゐると、その感じが漲るやうに溢れて來た。そしてその紫の濃い花の中に、病妻の悲しい戀心が移されてあるやうな氣がした。

舟の中の榮吉は不思議の多い沼の話を始めた。

『何うも餘程不思議なことのある沼でさ。夜なんか漁に出て氣味がわるくなつて、慌てゝ遁げて歸つて來ることはよくありますだ。大きな主がゐるつて言ふが、實際怖かねえやうなことがありますよ。何にも見えないのに、急にざアといふ音がきこえる。瀧でも落ちて來るやうな音ですね。そして眞菰なんか皆な風もないのに、急に一面に靡き出すやうなことがあるだ。俺は見たことはねえが、いやな氣持だ、その時は――。何しろ、古い沼だでな、夜なんか隨分いろんなことがある。何にもなしに、臭い、臭い、何とも言へない臭ひが通つて行くことがある。さうさな、何と言つて好いかな、死人の臭ひのやうなにほひと言つて好いかな。』考へるやうにして、『それから變な聲をして鳴く鳥がある。それが何だかわからな

『明いてゐるにや明いてゐるんだらう? 舟は?』
『明いてゐるにやあいてゐるが……あぶねえだて、俺も行つてやるべ。』
『なァに、好い。』
『でも、行つてやるべい。何も用もねえだで、今日は。……』
『ぢや、うけでも上げに一緒に行くか。』
『うけなんか、何にも入つてゐめい。』
かう言つて小屋から、櫂と艣とを持ち出して、それをかついで、そして跣足で先に立つた。かれは舟の中に布くためのござを一枚持つてその後についた。
土手の上に來て、
『何うも、此頃は渇水だで、あんなところまでしきや舟を持つて來られねえ。』
かう榮吉は言つた。成るほど水は少く、波打際はずつと遠くなつてゐた。蘆荻や蒲葦がざわざわと風に靡いた。
閘門のあるところまで土手を傳つて、そこからかれ等は下へ下りた。半ば行つたあたりでは、洲がぐちやぐちやして、ともすると下駄が埋つて了ひさうになるので、かれはそのまゝ跣足になつた。
舟の繫いであるところに美しく咲いてゐる紫の水あほひを見た時には、かれはふと家に臥してゐる病

かう傍から母親が言つた。

『貞の家内？』病妻は漸く思ひ出したやうにして、『あゝ作ッていふ女、あの妹と一所に學校に行つたから……』

村ではその舊家の一人娘が病んで歸つて來たといふことが、かなりに噂の種になつてゐるらしかつた。をりをり土手の上や、田の畔で見かける派手なへこ帶をしめた男に就いても、誰もかれも皆な、『孃さんの旦那』として好奇の眼をかれに注いだ。

都會の空氣にのみ浸つて來たかれの眼には、あたりに見えるもののすべてが、景色と言はず、生活と言はず、何も彼も目新しく不思議の世界のやうに見えた。農夫達は皆なせつせと田に畠に出て働いた。かれ等は多く跣足で歩いた。

或る日はかれはぢき近くにある桑吉といふ家に行つて舟を借りようとした。

桑吉は幸ひに家にゐた。かれはこの前にも二三度逢つて知つてゐた。

『旦那さん、漕げるけえ？』かう言つてかれの顔を見て、

『あぶねえもんだな……。こゝの沼は川とは違ふで……』

『だつて艫を使ふんだらう？』

『艫にや艫だが、藻が多いでな。櫂の方が漕ぎ好いだ。』

た縁の中に剖葦の聲が湧くやうにきこえた。時には舟の一隻も出てゐないやうな時もあれば、また時には大きな帆が日影を帶びて、大きなスワンのやうに靜かに浮んで行くことなどもあつた。

土手を通る農夫や農夫の上さん達は、何時知つたともなしによくかれを知つてゐて、摩れ違ひながら、丁寧に、

『好いお天氣で。』などゝ挨拶して行つた。

中には、

『お孃さんは、何うだな……。ちつとは好い方かな。』

かう馴れ〳〵しく聲をかけて行く女などもあつた。此方は知らないので、好い加減に挨拶して、歸つてからその話をすると、

『誰だらうね。』

と病妻は考へて、『いくつ位の女?』

『四十先きだ。』

『丸顏ですか?』

『あゝ何方かと言へば丸い方だ。』

『ぢや、貞の家内だ。』

もまた面白いやうにも思つた。何も彼も過ぎ去つた。妻と樂しく暮した二三年の間の歡樂、色彩、人にも羨まれるやうな境遇、さうしたことも皆な過ぎ去つた。『奴は戀女房にばかり夢中になつてゐるから藝術が駄目なんだ……』といふ風に言はれたことも今は全く過去になつた。
かれは庭の草を拔り、室を掃除し、持つて來た書物を並べ、机を窓際に据ゑて、あらゆるものから離れたやうにしてのんきに卷烟草を燻らした。
と、一度失はれた藝術の女神が再びかれの身に、魂に、纏つて來るやうな靜かな心樂しさを感じた。昔の書生時分の自由な心持は流るゝやうに溢れて來て、此處で、かうしてゐて、少し落附けば、何んなすぐれたものでも書けさうに思はれて來た。
しかし落附いて筆を執る前に、かれはこのあたりのさまを精しく見て置かうと思つた。で、錆びた大きな沼の方へかれは何ぞと言ふと出掛けた。
かれのゐる離座敷の横から青々とした水田の畔に下りて、螽斯や蟲の飛ぶ草の露の中を分けて行くと、そこに長く高く連つた土手があつて、その上からは、どんよりしたさびしい大きな沼が一目に廣く見渡された。
かれはいろ／＼な眺めを其處で見た。或は灰色の空のわびしく沼に反映したさま、或は夕日の赤くまともにさしわたつてゐる光景、または空が碧く晴れて、いくらか風のある午前には、蘆荻の一面に茂つ

かう言つたかの女の眼からは涙が流れた。丁度その最中にかれが入つて行くと、

『母さんは私達のことなんかちつとも思つて呉れないんだから。』

かう言つてかの女は泣いた。かれは一伍一什詳しくその話を病妻からきかされたが、別に心を動かすでもなく、『そんなことは何うでも好いぢやないか。お前の名になつてゐたつて、母さんの名になつてゐたつて同じことぢやないか。何うせ、お前は母さんの世話にならなくつちやならないんだから。』と言ふと、病妻はいよいよ辛さうに悲しさうにして泣いた。『私は貴方の世話になつて死にたい……。母さんなんかの世話にならなくつても好い。』かう歔欷げながら絶々に言つた。

『いくら娘だつて、人の判を勝手に出して押すなんてひどい母さんだ……。さういふことをこの前にもいく度もしたことがあるんですから……』

娘はかう強く母親を非難した。

かれはさうした一家の事情に就いては別に深く心を動かさなかつた。親一人子一人になつても、さうした事情があるといふことや、それも半は自分といふ他から入つて來たものゝあるためだといふことや、母親の身になつたらさう思ふのも道理だといふことや、さうしたことを小説の材料に、または世間の人の心を解剖した形といふ風に思つただけで、却つてさうした境遇にこの身を置いたことを不思議のやうに

映つても、かれには餘所の話以上に耳に留つては聞かれなかつた。かれは病妻の籍が自分の方にも入つてゐず、また自分の籍が病妻の方にも入つてゐないのを寧ろ氣安いことに思つてゐた。今でも、宅地と田地三町程はこの家について殘つてゐたけれども、かれはそんなものに眼を呉れやうとはしなかつた。瘦せても枯れてもかれは藝術を以て生命としてゐるものである。

しかし病妻の眼から見ると、かれのやうにさう單純には考へられぬらしかつた。かの女はかれの困つてゐるのを知つてゐる。纔かの財產ではあるけれども、これでもかれの藝術家としての隱家とするには足りる。また一方から言つても、かの女が死んでから、矢張此處に、此の故鄕に、夫が住んで藝術に親しんでゐるといふことは嬉しいことである。妻としての美しい心の記念のあらはれの一つとするに足りる。からかの女は一方では思つてゐる。であるのに、母親が嫡女であり一粒種である自分に何の相談もなしに、法律上から言つても當然自分について來る筈の財產を押領したやうなことはかの女に非常に不愉快を感じさせた。

しかし母親は言つた。

『何と言つても、お前の世話は私がしなければならないんだから……。そしてお前がもしものことがあればあとは私一人ぼつちなんだから……』

『何うでも好う御座んす。私なんかどうせ長いことはないんですから……』

『恐ろしいもんですね。誰が一番わるかつたか、誰が一番さうした一家の沒落を誘ふ動機になつたか、その時はわからないけれど、いつか時が經つと、すつかりわかつて來るもんですね。父親と一緒になつて母が家を潰したといふよりも、母の惡が、わるだくみがかうしたことになつたといふ方がほんたうだと私は思ひます。私は母の一人娘ですから、なにも母をわるく言ふわけはないんです。母にも好いところがあるとは思つてゐます。しかし父が道樂をしたからとて、妾を圍つて置いたからとて、それにあのやうに反抗して、それもたちのわるい反抗をして、一緒になつて家を潰さなくつても好かつたんです。父と母との家庭の悲劇は、だからお互に水と油のやうなとても雜り合ふことの出來ないお互の性質から來てゐるのです。そしてその油と水とを無理に最初に一緒にした田舍の結婚制度から來てゐるのです。』

こんなことをも病妻はかれに言つたことがあつた。

成ほどさうかも知れないといふ氣が此頃では大分かれにもして來た。かれは勿論、この舊家の一粒種の娘の夫ではあるけれども、決して婿ではない。またその後を嗣ぐ身でもない。それに、自分の方から言つても、かうした家の後繼者に自から進んでならうとするほどそれほど魂が落魄れてはゐない。從つて母親の一擧一動が、病妻の眼には餘りに冷淡に見え、また餘りに狡猾に見え、時には、『ひどい母親だ。これだから父親の氣に入らなかつたのだ。これだから一家がかういふ風に沒落したのだ……』といふ風に

榮枯盛衰の理を考へて來れば、沒落したからとて、何も悲しむことはない。また丁度その時に際して運わるくその衝に當つた人達を墓から引き出して責めるでもない。しかし病妻の父母のことに就き、またその祖父母のことについては、かれはをりをり深い解剖メスを當てゝ見た。

何處にも――どんな零細な一隅にも、皆な一つづゝ立派な作品となるべき事件、人物、運命があるやうに、此處にも矢張さうした原因と結果があつた。病妻は母親のために家は沒落したやうにいふ。またそのために母親を憎んでゐるやうなところもある。しかしかれにはそのためばかりだとは思はれなかつたけれども、それでもかなりにはつきりと父親や母親や乃至は祖父母や、それを取巻いた親類を頭の中に入れることが出來た。

事件の中には、悲劇の中には必ず女性がある。そして大抵はその女性が巴渦の中の中心となつてゐる。この家でも矢張その例の一つであることは免がれなかつた。しかし此處で不思議なのは、その女性が父親の妾であつた色の白い惡魔でなくつて、現にその一家の沒落の後まで、祖父母も、父親も、またその妾も死んで、恐らくはその一種粒である娘の死の後までも生き殘つて行くであらうと思はれるその壯健な意志の強い母親であることであつた。

『母が一番惡いんです。』

かう病妻は度々その話をかれの耳に囁いた。

かう言つたかの女は、木口などのがつしりした、茶席らしく數寄に拵へてある室の中に坐つて、

『好いでせう、此處なら？』

『勉强は出來さうだ……』

『さうでせう……。貴方が此處で勉强してゐらつしやると思ふと、安心して寢てゐられますよ。』

かの女は微笑を湛へながら細い聲で言つた。

『ひとつ、しつかり此處でやつて見なくつちや……』

『さうなさいね。此處なら、落附いてゐられるから。』

いかにも嬉しさうな表情をして、病妻の言つたことをかれは思ひ出した。

かれは度々さうした田舍の舊家の沒落して行つた徑路を頭に浮べて考へた。かれには或時にはそれは單にその巴渦の中に出沒する人達のある罪惡、またある不明、またはあるわるだくみ、さうしたものばかりではなく、自然に衰へたり榮えたりして行く或る不可思議の力があるやうに感じられた。此處にも曾ては榮えた時があつた。あらゆる平和と快樂とが巴渦を卷いて、笑聲が家の外に溢れたことがあつた。土藏には財が溢れ、家には金が滿ちたことがあつたに相違なかつた。三代前位までは、村では殿樣か何そのやうに敬まはれて、その持つた田園は、殆どこの村の半ば以上に及んだといふ話だ。

『え、別に……』

痛妻はかう言つたが、流石に疲れたといふやうに、道具らしい道具も何も置いてない、がらんとした、日影の何處からもさし込んで來るやうな一間に身を横へた。

しかしながら、兎に角に、かうして故郷の家屋、――昔、十二三の時に見た面影は少しもないにもしろ、沼も土手も水田も向うに見える丘も、丘の上にこんもりと深く繁つてゐる松の古樹も、何も彼も昔のまゝである故郷にかうして夫と一緒に歸つて來たことはかの女には嬉しかつた。否、嬉しいといふよりは寧ろ心强かつた。此處では長く苦しんだ他鄕が、または他人が、海がかの女を脅かすことはなかつた。靜かに落附いて死の床に横はることが出來た。

少し休んだ後で、

『離座敷は何うなつてゐて？』

かう言つて、夫の住むところが心配といふやうにつとめてかの女は立上つて、下駄を突かけて、土藏つづきになつてゐる六疊の離座敷の方へと行つた。かれはそのあとにつゞいた。

庭には草がかなりに深く繁つてゐたけれども、一間の中は掃除をしたと見えて、割合こに綺麗になつてゐた。

『あゝ、此處に來ると、昔のやうな氣がする……。祖父さんが莞爾してそこにゐるやうな氣がする。』

た。

其處にやつて來たかれは、

『くたびれたらう。早く上つて休んだら何うだえ。』

『でも、餘り變つたからびつくりして了つた。……』

『それはさうだらうな。』

『こんなになつたとは思はなかつた。』かの女はまたしてもあたりを見まはした。

『この前のところが皆な家だつたんですものねえ。』

『さうらしいねえ。昔は大きな邸があつたつて言ふことはわかるねえ……』間を置いて、『いつだつけねえ、家を壞したのは？』

『祖父さんが死に、父さんが東京で死んでから間もなくでした……』

『何うも滅びる家つて言ふものは、爲方がないもんだ……』

『本當ねえ……』

猶ほ他に何か言ひたさうにしたけれども、そこに一家の沒落の發頭人とも言ふべき母親がやつて來たので、二人はぴたりと口を噤んで了つた。

『早く上つてお休みな。何うもなかつたね。別に……』

梶の中に微かに動いて行く病妻の束ねた髪と白い襟足とをかれは目にした。沼の上には白い雲が旗のやうに流れた。

車から下りて自分の家の地面の中に入つたかの女は、さも驚いたやうに、または悲しむやうにして言つた。

『まア、こんなになつちやつたの？』

かの女の眼には、昔の城郭のやうに家の周圍を繞つた濠、何百年を經過した大きな欅の樹、その中に建てられてある棟の高い廣い立派な家屋、さうしたものゝ代りに、屋敷の潰れたあとのがらんとした空地、その空地の隅に、母が住むために建てたといふ小さな二間の家屋、すつかり伐り倒されて日影も十分に遮ることの出來なくなつた周圍の樹木、唯一つそのまゝに殘された土藏、それにつゞいた祖父の隱居所に宛てられた離座敷とがさびしく映つた。それはその折々に、祖父の死んだ時、父の死んだ時（父には妾があつて、その東京の妾宅で死んで行つた）に、さうした話はかの女は聞いて知つてゐたけれども、さういふ風に滅茶々々になつてしまつたとは知つてゐたけれども、さてかうしてぢかに來て見ては、今更ながらに、その沒落のさまの悲しさを反覆して考へずにはゐられなかつた。かの女は、奥に小さく建てられてある家屋の縁に凭つて、青白い悲しさうな顏をあたりに見せて、暫しは何をも言はなかつ

うか。また何うしてかうしたまことの同情を否定し、又は冷笑するやうな心持が人間にはあるのか。今度自分がこゝに來ることになつたのも、本當を言へば、妻が海に倦きて故鄕に歸る氣安さを叶へてやつたのではなくつて、自分のために、自分の爲事をするために適當な場所を發見したがために、そのためにやつて來ることになつたのではないか。この故鄕が不幸にして自分の興味を惹かなかつたならば、自分は病妻のためばかりには決して此處に來はしなかつたに相違ない……。かう思ふと、いろいろなことがつゞいて押寄せて來て、妻の家の沒落、妻の父親の死、それについての母親の冷酷な行爲などが拂つても拂つても簇つて集つて來た。

『このセンチメンタルな心持が何故現代の思想に合はないのか。』

『この二つの相異つた性質のものが自己の胸の中に巴渦を卷いてゐるがために、そのために、自分は自分の持つたものを完成することが出來ないのではないか。』

『しかし、今度こそは、十分に落附いて、そして自分のやることをしなければならない。……今度出來なければ、もう自分は駄目である。』

こんな風に、いつか妻の身の上から自分の身の上に移つて來る考へに胸を滿しながら、靜かに土手を下りて來たと思ふと、もうその向うには、沼の美しいかゞやきが一ところ日に光つて見えて、かれ等の落附く家の屋根とその周圍を取卷いた疎らな樹とがそれと指さゝれて見え出して來た。

折れ曲つた田舍道、そこには鎭守らしい祠があつたり、綺麗に刈込んだ豪農らしい樫の高い垣があつたり、自轉車の不斷に通るやうな折れ曲つた平らな好い道があつたりして、やがて蘆荻や水草などの繁つてゐる小川に沿つて車は靜かに進んで行つた。紫の花などが咲いてゐた。

かれは病んだ妻のために、いろいろなことを思はずにはゐられなかつた。尠くともかれ自身などよりも、かの女の方がもつと深い深い追懷――思ひ出しても思ひ出し切れないやうな、またはあるとあるもののすべてが心に纏つて來るやうに追懷に充されてゐるに相違なかつた。第一、かうして病んで、とても再び全快する希望のない身を抱いて、十七八年振りで故郷に歸つて來るといふことは、墓になりに、祖父母乃至祖先の墓のある松かげの靜かな寺に墓になりに歸つて行くやうなものであつた。それを思ふと、さうした考へが、センチメンタルであり、ロマンチックであり、餘りに現代的な思想とかけ離れてゐることを知りながら、しかもさうした悲哀に心も魂も浸つて行くやうな氣がせずにはゐられなかつた。『爲方がない。あいつの生きてゐる中は――あゝした弱いものに氣まづい思ひをさせるのも罪だ。』かう思つて、單に犧牲的に世話をしてやつてゐるといふ氣には何うしてもなれなかつた。妻のためにも泣いてやりたいやうな心が湧くやうにかれの胸に簇つて來た。

かれは車に搖られながら、何うしてかういふやさしい悲しい心が一方にはこれほど豐富にあるのに、また一方には何うしてあゝした冷やかな、打算的な、自己の快樂に向つて起るやうな心があるのであら

ことはないのであつたから……。かの女は十三の時に、父親に伴れられて北海道に行つたきり、それきり故郷には歸つて來たことはないのだから……。

『此處はあの安の家のあつたところあたりだね。面白いところに停車場が出來たのね。』

あたりを見廻しながら病妻は母親に言つた。

『少し休んで行くかえ？』

『いゝえ、すぐ參りませう。』

『大丈夫かえ？　熱でも出ると困るぜ！　お前。』かうかれが傍から言ふと、

『でもすぐですもの……。もう此處からいくらもありやしませんよ、家まで。……』

『それはさうだがね。』病妻の顏と母親の顏を見較べて、

『大丈夫でせうか……。少し休んで行く方が好くはないかしらん。』

『大丈夫つて言ふから、家に行つてゆつくり落附いて休む方が好いでせう。』

かう母親が言ふので、そのまゝ三臺の車はそこに引き寄せられた。

一番先きに母親、つぎに病妻、最後にかれといふ順で車は靜かに走り出した。

『成るたけ靜かにやつて呉れ……病人なんだから……』

少し來たところで、かれはかう車夫達に聲をかけた。

遠い親類だといふ四十位の農夫が一切此方の方の世話をして呉れた。

病妻はまだ何うやら彼うやら立つて歩くことが出來た。海岸から靜かに汽車の客室へ。それから東京で二日ほどその疲勞を醫すために休んで、そしてまた靜かに辛うじて汽車に乘つて沼の畔の故鄕の方へ――。

病妻の顏はいつに似ず晴れやかで、汽車が其の近くにやつて來た時分には、窓からあちこちを眺めていろいろと幼い時のことを思ひ出すやうにした。何も彼も皆な親しくなつかしくかの女には映つて見えるらしかつた。

『こんなとこに停車場が出來たのね。』

汽車を下りて、車に乘る前に暫し休んだ時、かの女はかすれた聲で言つた。

かの女の聲の立たなくなつたのは、もうかなり前であつた。それほどかの女の病は重かつた。青白い蠟のやうな顏、見るも氣の毒のやうに瘦せ細つた體、手元も覺束なささうで、ついて來た母親が寄つて來て手を取つた。

『お孃さんかね、まァ！』

かう其處にゐた農夫は駕いたやうにして言つた。

それも理である。かの女の赤いリボンをかけた可愛い姿を見た後には、かれ等はつひぞその人を見た

れの方に偏つて絡み附いて來るのを感じた。停車場で汽車を待つてゐる間、『矢張、東京に出て行かれるのが心配なんだな。』などと考へて、さういふ心持を起すやうになつた病妻をあはれに思つたりした。しかし、體の丈夫なかれは、一方、都會の空氣の中に出て行く快樂を忘れてゐなかつた。

その頃にも、かれは病妻の横はつてゐる室の隣の一間で、机に向つて、そして筆を執つてゐた。いくら書いても書いても、思つたやうなものは出て來なかつた。食ふための方の爲事は出來ても、本當に書かうとすることは竟に竟に書けなかつた。かれは何遍となく立つて行つては、病妻のために種々な用事をしてやつた。花なども採つて來て枕元の一輪挿にさした。

『海にももう、つくづく倦きて了つた！』

こんなことを病妻は度々言つた。

海は遠く吼えるやうに鳴つた。そしてその餘響が佗しく鳴る松の音に雜つて、さながら訴へるやうにきこえた。かと思ふと、黄ろいわびしい日影が長く海中に落ちて見渡された。

單調な濤の音が朝にも夕にも近くやつて來てかれ等を壓した。

着いた田舍の停車場には、車が三臺來てゐた。

そこには一臺しかないので、他の二臺はわざわざ二里ほどあるA町から持つて來たのだといふ。

にあるやうに、或は咽び、或は悶え、或はたけり立ち、或は鏡のやうに靜かに滑かに海はかれ等の前に展けられた。その海のさまざまの色彩と氣分と調子とは、かれ等の二つの心の悶えたり悲しんだり苦んだりまたは柔かに靜かになつて行く心には似てゐなかつたか。またその佗しい海の暗澹とした色の中に、さびしいお互ひの心の爭鬪を見出しはしなかつたか。

Ｋの海岸にゐた時には、砂山を越して來た松原の中の小さな二間の家にかれはその病妻を見出した。そこではかの女は思ひもかけない重い容態をかれに見せた。もうかの女は外に出て行くことも出來なかつた。枕もあげずに『今日は海は暴れてますね。』などと言つた。小さな庭の向うにある井戸端には、鳳仙花が赤く白く咲いて、小さな蜻蛉などが來て停つた。時には松の聲と濤の音とが凄じく家を壓した。

『かうしてゐると、何だか海の波の中にでも漂はされてゐるやうな氣がしますね。』頭を押へるやうにして病妻は言つた。

その時分、かれはよく獨りで砂山を越して海の方へ行つた。凄じい白い波濤の掀翻、鉛色をした岩石の起伏、舟一つ浮んでゐない海はわびしくひろく橫つて、何とも言はれないさびしさをかれの胸に染み込ませた。最早かれはロマンチックに妻の病を考へてゐることは出來なかつた。また自分の色彩のない生活を『詩』のやうに鍍して考へることは出來なかつた。かれはをり〳〵松原の中から町の通りの方に出て、その向うにある小さな停車場に出かけて行つた。不思議にも妻の心がその頃になつて一層深くか

祖父母の墓
祖先の墓
その沼添ひの松蔭の
靜かな寺のある故鄕へ——

かうした詩とも句ともつかないやうなものを書いてかれに寄せた。かれはこれまでに何故此處にやつて來なかつたかと思つた。病妻は度々かれにその故鄕について話した。またかれを一度はそこに伴れて行きたいと言つてゐた。しかも田舍の舊家の持つた空氣がいつもかれの思立ちを遮つたことをかれは思ひ出した。かれ等は餘りに都會の空氣に親しみすぎた。派手な色彩とリファインされた濃やかな複雜した都會の空氣に馴れすぎた。カフエと活動寫眞と、夜の街頭の散歩とに心を奪はれすぎた。また妻が病に臥してからは、餘りに海岸の松原と佗しい海と砂濱とに月日を送りすぎた。妻は『海ももうつくづくあきましたね。……海はさびしい……單調だ。』かう言つて、蒼白い蠟のやうな顏に微笑を湛へた。

しかし海も決してかれ等に倦怠ばかりを齎らしはしなかつた筈だ。まだ、さう病氣が重くならない中は、かれ等は松原の中をよく二人して並んで歩いた。松原の中には眞紅な撫子が咲いた。ハイネの詩の中

て見てすつかり心を奪はれて了つた。『此處なら、何んなことでも出來る。落付いて出來る。世間のことを考へずに、何んな長いものでも書くことが出來る。』かれはかれの病妻がかうした故鄕を持つてゐるとは思はなかつた。かれはその時海岸にゐた病妻の許に手紙を書いた。『お前がさういふ積りなら、それに越したことはない。こゝなら、無論、自分は長くゐることが出來ると思ふ。お前の病の看護も落付いてすることが出來ると思ふ。それに、自分も此處で一つ本當になつて書くものを書いて見たい。』かう言つてやると、病妻は非常によろこんで、

昔のなつかしい記憶と、
幼ない思ひ出と
いかなる時にも笑顏で
私を迎へて吳れる故鄕へ——
錆びた沼の水あほひ、
白い藻の花
大きな黃い月の
忘れやうとしても忘れられない故鄕へ——

實際、その病に罹つた人でもあるやうに、自分の魂が自分の肉體から離れて、冷かに自分を見てゐるやうな心持もした。其處にも此處にもかれがゐる。醜い弱いかれがゐる。十のものゝ七つ八つまでやつて來て、そしてぐたりとなつて了ふかれがゐる。そして到るところで悶え苦んでゐるかれがゐる。現に、かれがかうして垂死の病妻を抱いて、そしてその病妻の田舍の家の離座敷に世間を離れて來てゐるのは、それは自分ではなくて、他にさういふものがあるのではないかといふ風にすらかれには思はれる。

と、今度は自分の爲事のことでなしに、病妻のことが頻りに頭に上つて來た。病のためにその力と賴む夫とさへ一緒の路を行くことの出來ないあはれさを深くかれは感じ出した。尠くとも妻は他界へ、不可思議の世界へ、神祕へと一步は一步と近づきつゝあるのであつた。あはれな妻! かう思ふと、死の不可思議が俄かにかれに絡み附いて來て、そのあやしげな異樣な月の形や、黑い森や、深い影で蔽はれた沼がかれの心を强く壓すやうにした。死んだ過去の無數の魂がそこにも此處にも澤山にゐて、白い細い手を出して、そして自分を引張つて行くやうな氣がした。かれは氣味がわるくなつて、そしてその月が見えないやうに、雨戸を一枚引寄せて了つた。……蟲の聲がまた聞え出した。

此處へ、この沼の畔の家へ、かれが始めてやつて來て見たのは、去年の秋の中頃であつた。かれは來

などには、その土手の下にある漁師の家に灯がぽつかりと一つはつきり見えるのが常であつたが、今は、深夜の今は、それが丸で別な世界で、月の昇つた黑い森も、森の上に二間ほどかけ離れて浮んでゐる月の形も、何も彼も今まで見たことのない處のやうにかれには思はれた。何だか自分の住んでゐる世界から浮び上つて、別な世界にでも來たやうな氣がした。いくらか怖ろしいやうな氣もした。

かれは凝と異樣の形をした半ば缺けた月に見入つた。

いろいろなことが次第にかれの魂と心とを脅かして來た。遲くまでかゝつて書かうとしてしかも旨く出來なかつた小說の細かい心のシイン、それが未だにかれの眼と心に絡み着いてゐたが、その複雜した心理のために、かれは旣に一週日を費して來た。『そんなことで何うする？』かういふ心持と、『何も急ぐことはない。ゆつくりやれ。』といふ心持とが兩方から出て來て戰つて、絡み合つて、そしていつも終にはぐたりとなつて、机から身を離して、仰向に倒れて、後頭部に手を合せて、長い間天井を見詰めた。

しかし昨夜ほど自分の身の上を、または自分の醜い腑甲斐のない姿を、または運命とは言ひながら、その運命を切り開くことも出來ずに、人生の半をとうの昔に通過しつゝしかも何うすることも出來なかつた自分の境遇を別に離して考へて見たことはなかつた。かれ自身ではなしに、誰か他にさういふ人間がゐて、さうした生活を送つて來てゐるやうにすらかれには考へられた。離魂病と言ふことがあるが、

錆びた沼

昨夜もかれは遲くまで眠られなかつたことを思ひ出した。月が遲く沼の向うの森の上に昇つて、それがいやに赤く、光芒がなく、ベックリンの繪にでも見るやうに異樣に不可思議な形に見えた。夜は寂としてゐた。宵の間にあれほど賑やかに、喧しい位に鳴いた蟲の音も一時途絶えたかのやうに、ジイといふ地蟲の鳴くやうな聲の他は、田からも沼からも村からも何等の物音も聞えて來なかつた。かれは自分の心の靜けさとこのあたりの靜けさとが一緒になつたやうな氣がして、否、むしろその靜けさの奥に何とも言はれない不思議な寂しさがあるやうに思はれて、愈々神經が鋭く尖つて來るのを感じた。かれは蚊帳の中でひとりで起きて坐つた。

蚊帳の外の机の上に置いてあるランプの薄暗い影が室の一隅だけを照して、夜風が入つて來る度に、その光が蚊帳の青いのと一緒に微かに搖いた。晝間見馴れた狹い庭の草花、木槿の垣、それから少し低く一面の水田で、青かつた奴が今は既に黃く、それがずつと沼の土手のあるところまで續いてゐて、夕暮

怒つた父親の拳は、霰のやうに、背や頭や肩に落ちた。束髮の櫛も折れた。父親はこれをするにも何一言も言はなかつたが、唯ならぬ物音に驚いてお銀も、お靜も、俊介も皆なその周圍に飛んで來てそして父親の手を遮つた。

『馬鹿、馬鹿、俺の娘だ、殺したつて構はない……』

かう金藏は呶鳴つて、また烈しく亂打した。俊介はそれはお春でなくつて自分のやうな氣がした。

しかしお春はギョッとした。その顏は初めは赤く、やがては眞青に變つて、何うして好いかわからないやうに體がぶる〳〵震へた。金藏は何も言はずに、默つて、鋭い怒りの一瞥をお春の上に投げて踵をめぐらした。お春は暫しの間は地に根が生えでもしたかのやうに立竦んで了つたが、やがて思返して母屋の方へと行つた。

お春は恐れ慄いた。美しく樂しかつた歡樂は足許から崩れて、今は眞逆さまに奈落の底にでも落ちて行くやうな氣がした。恐ろしい父親の顏——それを打消すやうにして、男と樂しんだ其折々のシインがきれぎれに頭を掠めて通つて行くけれども、また何うなるものかといふ氣になつて、頰を赤くし、眼を異樣にかゞやかしては見るけれども、しかし父親のその恐ろしい一瞥は拂ひ去り難く強くお春の身を壓した。お春は緣の柱に凭れて、庭の一方を凝視した。

しかし何うすることも出來なかつた。時が經つて胸の鼓動は靜まつたが、不安と恐怖の念は少しもその量を減じなかつた、爲方なしに、お春は座敷の次の一間の隅のところに小さくなつて、戸棚をあけて、縫ひかけたメリンスの前掛を出して、紐をつけ始めた。と、父親の怒る聲が居間の方できこえて、次第に、それが近くなつて來たと思ふと、荒々しい足音がして、振返らうとした途端に、その横顏をお春はしたゝかに打たれた。

お春はあつと言つて突伏した。

ふと氣が附くと、さつきそこにゐた傳次の姿が急に見えなくなつた。

『傳次！』

かうかれは呼んで見た。

矢張返事がなかつた。何うしやがつたらうと思ひながら、庭から勝手へ來て、店を見廻しても、其處にも矢張その姿は見えなかつた。

丁度午後三時すぎで、お銀は座敷の北方の間で仕事、お靜は體が少しわるいと言つて居間で枕をして橫になつてゐた。あたりはしんとして、鷄がこツこと言つて地を啄いてゐる音がそれと際立つてきこえるばかりであつた。お春の姿は何處にも見えなかつた。

金藏はふとあることに氣が附いたといふやうにして、庭から、樹と樹の間を小さな祠の方へ拔けて、庫の橫手の方へと步いて行つた。果して、其處に、午後の日の斜めにさしわたつた土藏のかげの五坪ばかりの狹いところに、傳次とお春とが立ちながら何か話して笑つてゐるのがかれの眼に入つた。

『傳次！　何をしてゐる！　傳馬があるぞ。』

かう金藏は呶鳴つた。

『へえ。』

傳次はわざと何氣ない風を裝うて、づうづうしく此方へと步いて來た。

思ふと、びくびくするといふほどではなくとも、少くとも氣懸りで爲方がなかつた。俊介は親父や同胞や世間があるために、思ふまゝに女と樂しむことの出來ないのを情けないやうに思つた。何うした連想か、田舍の農家から來て二三月ほど一緒にゐた色の白い離縁した妻のことなどが胸に浮んで來た。

其處に、金藏は入つて來た。

『耳がわりいつてな……？』

『え。』

『何處だ？　耳は？』

『表は何でもなんですけど、中が何うかしてゐるんですつて……。このまゝ投うて置くと、聾になるさうです。』

『何時から、そんなになつたんだ？』

『つい、先月の末あたりからです。何うも變だ、變だと思つてゐたんです。いやに、がァんとしたり、少し痛かつたりしたんです。』

何か猶詳しく訊くかと思つたら、きゝもせずに、そのまゝ金藏は店の方へ行つだ。

しかし、暫く經つた後には、金藏はしなければならない用事をふと思ひ出したといふやうにして、急いで、中庭を通つて、酒庫に行つて、九升樽に頻りに酒を詰めはじめた。

に細く書き附けた。

誰にもわからなかつたことが、父母にも、親類にも、同胞にも、或は世間の人達にも、誰にもわからずに、旨くしてやつたといふことが、尠なからずかれを満足させた。これで女は何うにでもなる筈である。あの可愛い離れられない女を人知れず身受けして、町に圍つて置くことが出來るのである。それは、いつかはわかるに相違ない。いくらのんきな親父でも、その大穴に最後まで氣がつかずにゐることは望まれない。しかし、兎に角半年や一年はわからずに町に圍つて置くことが出來る。かう思ふと、その後になつてわかつたところで、それはまたその時で、臨機應變な所置をすることが出來る。かう思ふと、かねてこつそり計畫してゐた爲事が一段落ついたやうな氣がして、ほつと呼吸がつかれた。今時分は、女は廓を出たに違ひない。そしてあの世話好きな女の伯母が、昨日約束して來た家に、女をつれて移つたに相違ない。かう思ふと、一刻もかうしてはゐられずに、今から飛び出して出かけて行きたいやうな氣がした。しかし、折角これまでにしたのだ。今になつて知れて、親父に茶々を入れられてはそれこそ大變だ……。かう思つて、俊介は矢張いつもの耳の療治に行く時間の來るのを待つことにした。

それに、何うしてだか、何か譯があるのか、この二三日、いやに、親父も家にばかり引籠つてゐて、出なければならない筈のところにも出て行かず、不愉快さうに、沈鬱な顔色をして、まごまごすれば、すぐ呶鳴られさうに見えるのも無氣味だつた。もしや自分のあの大穴が知れかゝつてゐるのではないかと

『…………』
金藏は默つてゐた。
暫くして、『俊介はゐるか？』
『もう、少しさつき出て行きました。』
『何處に行つたんだ……。この頃は、毎日、夕方になると出かけて行くぢやないか。』
『耳の療治に行くんです。』かうお靜は靜かに言つた。
『耳の療治？　何處かわるいのか？』
『何だか、耳が空鳴りがして、痛くつてしやうがないつて言つてゐました。』
『病院か？』
『さうでせう、屹度。』
金藏は不愉快さうな顏をして、風呂場の方へ行つた。

七

それから二三日經つたある日の午後、俊介は座敷の自分の机の前に坐つて、何か頻りに計算をしてゐた。算盤を彈いて見ては考へ、考へてはまた彈いて見、更にまたそれを鉛筆で小さな手帳のやうなもの

『え？　新聞に？』
『何ァに、小さく葉書だよりにちよつと書いてあるだけども、本當かえ？』
『なんて書いてあるんですか。』
『雇人と關係してゐるつて書いてあるんだが――』
さう聞いても別に驚いたやうな風もないお靜の態度も金藏には意外に感じられた。お靜は言つた。
『この間、光二もそんなことを言つてゐましたがね……』
『ぢや、知つてゐるんだな、お前は？』
『いゝえ、知つてゐるつていふわけでもないですけども、此間も、その事はよくお春に言つて置きました。』
『事實かえ？』
『そんなことはないつて、いくらきいてもあれは言ふんですけども……』
『本當らしいところもあるのか？』
『まだ、私にもよくわかりませんけども……。さういふことがあつちや大變ですから、それで、私も此間から心配して、貴方にも話さうか、話すまいかと思つてゐたんですが……。かういふことは、荒立てては損ですから、もしも、さういふ間違があつたらあつたで、そつとしければなりませんからね。……』

夜も、お靜は注意してお銀と二人の寐る一間にこつそり來て見たりした。お銀に話して、その監督を賴めば、一人で見張つてゐるよりも一層好いのはわかり切つてゐるけれども、しかしさうしたことをお銀に打明ける氣には何うしてもなれなかつた。

ところが、ある朝、いつものやうに、W市で發刊する新聞をひろげてゐた父親は、ふと思ひもかけないある二三行の記事を發見して、ぴたりとそこに眼が留つた。長い間、かれはそこから眼を離さなかつた。何故と言ふに、そこに、そこの葉書欄に、木村の酒屋の娘は土藏の中で、白晝小僧と乳繰り合つてゐるといふことが書いてあつたからであつた。

《小僧と言へば誰だ? 傳次より他にない。》かう考へて、『まさか、お春が?』かう口へ出して笑つて見たが、いろいろなシインを思ひ出して見ると、急に笑へなくなつて來るのを感じた。《馬鹿にしてやがる。早速新聞社に正誤を出してやらう。》それを見た刹那にかう思つた小さな忿りも、滅多なことは出來ないやうな氣もして來た。金藏には、お春の樣子が何だか急に目につき出して來た。

かれはその日一日、妻にすらその話をする氣になれずに懊惱したが、夕方になつて、ちよつとお靜がかれの居間に入つて來たのを呼留めて、小聲で、

『家のお春のことが、新聞に出てるが、本當かな。』

新聞といふ二字に、はつとお靜は驚いたやうにして、

それからはお靜は絶えず娘に注意を拂つた。よくはわからないけれども、何うもあやしい……。傳次もあやしい。しかし、これを金藏に打明けたところで爲方がない。只徒らに事を大きくするばかりである。それよりは、何うかして人に知られずに、娘に改めさせ度い。かう思ふと、お靜の苦心は並大抵のことではなかつた。庫の方へお春が出かけて行つたと言つては、後から娘の名を呼び、團子など買ひに行つて、歸りが遲いと言つては、店の前に出て、村の入口の方を眺めた。お靜はひとりで心を苦しめた。これといふのも、父親が餘り選り好みをして、此の年になるまで、嫁にやらなかつたために、かうした苦勞が湧いて來たのだとすら思つた。

『お前、そんなことがあるならばあるとお言ひよ。』

あたりに人のゐない時に、かうお靜が訊くと、

『そんなことはありやしないよ。』

かうぶつ切ら棒にお春は言つた。しかし、何うも、その言ひ方に、またその顏色に、面白くないところがあるのを母親はいつも見逃さなかつた。

『本當にないかえ？』

『ありやしないつて言ふのに、わからない母さんだねえ。』

お春はかう言つてすぐ起つて行つて了つた。

が好い。思ひ返させる方が好い。それに、まさかに、お春がそんな馬鹿ではあるまいといふ信賴もかなりにつよく胸の底にはあつた。で、母親はそれをこつそり娘に訊いて見る機會を求めたが、人出入の多い、忙しい家は、容易にさうした機會がやつて來なかつた。夜遲く、お靜は、一緒にお春を風呂に伴れて行つて、入つて、漸くそこでその話を持出した。

『學校へも行つたお前だから、まさか、そんなことはないだらうと思ふけれど、村には味方もあれば敵もある。飽くまで身持は潔白にしなければならない。さうしたことがなければ好い。一時いくら噂に立てられたつて、實際ないことなら、いくら難癖つけられたつて、そんなことは構はない……。しかし、もし、さうしたことを言はれる種がこればかしでもあるなら、私に言つてお呉れ、そつと言つてお呉れ。』

『……………』

『お前一人の恥ではない。父さんの顏にも拘はれば、家名にも拘はる。御先祖樣に對しても――』

『そんなことはわかつてゐますよ。』

母親のくど〳〵言ふ言葉が、兎角お談義になるので、お春は後には、荒々しくかう言ひ放つて、體も碌々拭かずに、着物を支へたまゝ戶外へ出て行つた。

『あゝいふ奴だ……』

母親は自分のもので自分に自由にならない娘を齒痒さうに見送らずにはゐられなかつた。

「ゐるよ。何うしたの？」

光二は母親の耳に口を寄せるやうにした。お靜の耳には、思ひもかけないことがきこえた。

「…………」

思ひ廻して見るやうにして――更にまた、さう言はれて見れば、そんな印象もぼつ〳〵見えないことでもなかつたことを思ひ出して、お靜はぢつと一ところを見詰めるやうにした。

暫くして、

「本當だらうか？」

「うそか本當か知らないけども、僕は顏から火が出るやうな氣がした。さう言はれて見れば、僕も可怪しいと思つたことは二三度ある。用もないのに、春ちやんは、よく裏に出掛けて行くが、あれが變だ。相手は傳次ですぜ。彼奴はずるい奴だから……。今の中に何うかしなければ駄目ですぜ、母さん。本當によろしくない。相當な家庭に育つて、教育もありながら。」

「でも、ね、お春だつて、そんな馬鹿ぢやあるまいがね。」

「それがいけないんですよ。母さん。わかるもんですか。」

そこに、お銀が入つて來たので話は切れた。

お靜はいろ〳〵に考へた。これは金藏に話してはいけない。それよりも當人に譯を言つてきかせる方

潰して了ふぜ？』

『酒はお旨くして飮むのが一番結構ですよ。』お靜はかう調子を合せた。

『光や、座敷でやれ、蓄音機は少し離れて聞いた方が好い。』

『私も行かう。』とお春も起上つた。

お靜は子供達の飮んだ茶碗や急須を片附けながら、『また、往來に、一杯、人がたかるでせうね。』

奥の座敷では、光二やお春の他に、小僧や下女達も大勢集つたらしく、やがて蓄音機の壺坂が靜かに始まり出した。

六

それから二月經つた。

ある日、外から入つて來た光二は、いきなり母親を捉へて、

『母さん、僕は赤面しちやつた――』

かう言つて呼吸をはずませた。

『何だね？』

『お春ちやんゐるかね？』

『はア、はア、』とお春は袂を顔にあてゝ笑つた。
『俊介は何うした? ゐないか。』
『さつき、何處かへ出かけて行きました。』かうお靜は言つた。
『あいつも困るんだ。餘り早く持たせすぎたもんで女房の味もよく味へなかつたと見える。(俊介は昨年兵營から歸つて、間もなく妻を持つたが、二月と經たない中に離縁した。)そいつも、何處か一人好いのをさがさなけれやならない。好いのがないかなア、何處かに――』そればかりが苦勞だといふやうに、それさへきまつて孫でも出來れば、もう俊介に家を讓りわたしても好いといふやうに、ちよつと頭を傾けて考へたが、さうした念からはすぐ離れて、またもとの機嫌好く、『光や、何かやれよ。』
光二は笑つて、
『やりますかな、何をやりませう。』
『何でも好いやな。』
『父樣は、呂昇の壺坂が好きだ。あれをやりませう。』
かう言つて光二は起上つた。
『今夜は、大變御機嫌ですね。』かうお靜は笑ひながら言ふと、
『うん、今夜は少し飲みすぎた。かう呑べエになつちや、やり切れない。仕舞には、家も身代も飲み

役人で御座候と威張つてゐても、精々四十五圓か五十圓で、その中から、やれ積立だ、同僚の見舞だ、辨當代だつて差引かれて、手に殘るのは、僅かしきやありやしない。それで、妻子を養つて行かなければやならないんだからな。だから、彼奴等の顏色を見ろ、皆な營養不良といふ顏をしてゐる。兎に角、世の中は金がなければ駄目だ。金を儲けるのは、矢張商人だ――』かう言つて大きく笑つた。

さういふ父親の意見の立場から、商人でなければ何うしてもいけないといふところから、器量は十人並であるのに拘らず、お春の婚期は後れたのであつた。

『なァ、婆さん。』と今度はお靜を顧みて、『今年の秋こそ、二人で伊勢詣りをしやうぢやないか。それまでには普請の方もすつかり片附くし、何時でもこの身代を俊介に渡すことが出來るばかりになるし、年寄も、もうそろそろ引込む時節だ。俊介もお蔭で、五年や六年この家の何處にも手を入れずに住めるよ。』

『本當ですね。もう引込んでも好い時分ですね。私も隨分、竈の前に踞んだから、もう好いかも知れない。』

かうお靜も笑ひながら言つた。

『何でも金ね。』

ふと、何を思ひついたか、傍からお春が言つた。

『さうだらう。だから、お春の亭主には、金持を見つけてやらうと思つて、父さんは心配してるんだ。』

『まア好いさ。』

其處へ、村の人が十圓紙幣を兩替して貰ひに來たので、お靜は用箪笥の方へと立つて行つた。光二もお春も、飯がすんで、父親が元氣に話してゐる明るい居間へと集つて來た。光二は羊羹を出して、茶を澁く煎れて、何杯も何杯も飲みながら、

『父さん、今度は電氣を引くんですね。瓦斯は臭かつたり、蟲が寄つて來たりしますよ。』

などと言つたりした。

金藏は赤く醉つた顏をあたりにかゞやかしながら、

『光二、お前は何になる。兄貴の支店か？』

『いやなこつた。商人は眞平だ。それは旨く行けば好いけれども、懸引が難かしくつて……。それに、僅かばかりの資本ぢや、中々成功しやしない。それに、頭は無闇に下げなけれやならず、拂ひを待てと言へば、はいと言つて、いつまでも待たなければならず、弱い者よ、汝の名は商人なりと言ひたい位ですよ。僕はそれよりか銀行か役所へ出た方が好い。その方が氣樂だ。』

其時、お靜は既に店に戻つてゐた。

金藏は、『そんなことを言ふが、月給取なんか慘めなもんだぞ。首になりやそれ切りだ。年中、上役の顏色ばかり見て、やれ免職になりやしないかと心配する。餘り好いもんぢやないぜ。縣廳へ行つて見ろ、

〔これからは、子供の身だ。女は女、男は男と、それぞれきめてやらなければならない。俺だつて、來年はもう五十六だ。いつまでも樽の呑口をギイギイ拈ねりたくもない。〕――急に、かれは大きな聲で、
『婆さん、婆さん。』
と呼んだ。
腰に手拭を挿んだお靜は、勝手から此方へとやつて來た。
『何か御用?』
『まア、好いから、少し此處にゐなよ。』
『はい。』
と言つてお靜は素直に其處に坐つた。
金藏はもうかなりに醉が廻つてゐた。
『あの石塀が出來ると、火事ももう怖くはなくなるな。何處も彼處も新らしくなる。』
『あの普請はまだ餘程日がかゝるんですか?』
相槌は打たずに、かう反問して來たが、別に機嫌もわるくもせずに、
『もう、たんとのことはない。』
『お金ばかりかゝつてしやうがありませんね。』

ものも皆盃をつきつけられるので、お春も、お銀も、俊介も皆なそこで醉つた。アセチリン瓦斯の灯は一間のすべてを涼しく美しく見せた。

金藏は盃を口に當てながら、心持好さゝうに、若い時分のことなどを思つた。この店を養父の手から讓渡された時には、僅か百圓の金の融通にも困つたが、それから思ふと、自分はよくこれまで大きくしたものだなどと思つた。庭の一つの方の土藏だつて、店前の米藏だつで、皆な自分の代になつてから出來たものだ。養父の手から受取つた時の家だつて、位置こそ同じであるが、あとも形も殘つてゐない位にかれが修繕した。新築する以上に金をかけた。酒庫の六尺桶も、付本植ゑたか知れやしない。それにかれは村長にも推された。郡會議員にもなつた。酒造組合長にも選ばれた。縣下でもかれの名を知つてゐるものは澤山にある……。これで、俺も學問さへ出來れば、人一倍すぐれた、誇るに足る人間だが、惜しいことに、それはやることは出來なかつた。仕方がないからと思つて、せめて子供達には、本でも讀ませようと思つて、莫大の金のかゝるのには頓着せずに、『大日本地名辭書』だの、『大日本百科辭典』だのといふやうな浩澣な書籍も買へば、歷史、地理、科學の本も隨分買つた。現に、駐在所の巡査や小學校の訓導などが、圖書館か何かのやうにして、調べ物があると、いつも來ては用を足して行く。しかし、折角、さう揃へてやつても、子供達は碌にそれを讀まうともしない。(矢張、親に似て、學問は不得手かしれんな。)盃を口に當てながらこんなことを金藏は腹の中で言つた。

時にはお春は小僧の着物を縫つたり、古い着物を解いて母親の手助けになるやうなこともしないでもなかつたけれども、しかし多くは懶惰にその日その日を送つて行つた。何も爲すこともなくて暮らして行くやうなことが多かつた。その癖、座敷の長押にかゝつてゐる東照宮の遺訓を、横になりなり見覺えて、電話室へ急ぐ縁側で『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。』などと小聲で誦しながらばたばたと歩いて行つた。

一日きこえてゐた石屋の音も既に止んで、仕事着の塵を拂つてゐるかれ等の姿が、樹と樹との間にチラチラと隱見した。やがて職人達がぞろぞろと帳場に聲をかけて歸つて行くと、親方だけ二人は、疲れたといふ風にして縁側に腰を下して休んだ。そこに、お春は酒と肴とを持つて行つて置いた。

金藏は金藏で、その頃、風呂に入つて、湯を水のやうにうめてゐた。

五

金藏には、風呂から上つての晩酌が、この世の中での一番の樂みでもあるかのやうに、暫くの間、湯上りの素裸で爐の前に胡坐をかき、臂を膝の上に立て、あたりを心地よげに見廻してから、一人靜かに盃を口に當てた。と、お銀は莞爾しながら、勝手から土間の通ひの板を渡つて、『兄さん、こんなものは何う？』などと言つて、胡瓜揉の小皿を運んで來て下に置いて、序でに二三杯お酌をして行つた。來るものも來る

皆な出拂つたらしく、夏の午後はひつそりとして、唯石切る音が夢見るやうに響いて來るばかりであつた。戸外は殘暑の暑い日がヂリヂリと照つた。お春は新聞の上に突伏したまゝ、好い氣持になつて、ついウトウトした。

家の前を眞直ぐに十二三町もゆくと町に出た。午後には町の市場に野菜物をつけて行つた百姓が、馬を店前に待たせて「一杯コップに……」などと言つて入つて來た。何うかすると、お春は桝を取つて煮豆の殘つたのと漬物の餘りなどを小皿に載せて出して、自分は遠くその百姓から離れて店に坐つてゐたりした。餘り近しくすると、さういふ百姓達は、お春のハイカラに結つた頭や異國模樣の出た帶などをめづらしさうに眺めて、ぐづぐづと一二杯のコップ酒を前に長く話し込んだ。お春はそれを恐れた。

店賣は、夕方が混雜した。近所の百姓の上さん、泥だらけの子供などがてんでに罎を下げて、二合呉れとか、十錢がた呉れとか言つてやつて來た。其時分は、西日が一杯に店に當るので白い日除をしてそれを遮つたが、それの外される頃には、倉の若衆が、逞しい體を素裸で、風呂から出て來て、敷石の上を倉敷の方へ歩いて行くいなせな姿が店賣の飲口を拈つてゐるお春の眼に映つた。夕日はあかあかと庫の向うの竹藪を染めた。

その時分には、小僧は鷄を塒に骨折つて追ひ廻して入れやうとしてゐるし、俊介は土間や店先を掃除して、そこに心地よく打水をしてゐたりしてゐた。

つも東京の甘いものが絶えないといふ形であつたが、しかも田舍のザラ〳〵する團子も食つて見てまづいといふでもなかつた。『東京の餡物は高くばかりなつて、しやうがない。』などゝ二人は話した。

暫くして、店に、『今日は。』といふ聲がした。

『あ、お梅の爺が來た。』

かう言つてお銀は半ば起ちかけた。

と六十ばかりの、鬚の半ば白く疎らな、顏の蒼白い年寄が、縞目もわからないやうな着物で入つて來た。汗くさい匂ひが何處からともなくした。

『相變らず、いつも御馳走がありますね。』

『さア、お上りよ。』

『御馳走さま。』

さう言つただけで、爺は手を出さなかつた。

『大變、肩が張つて、しやうがない。あとで、一本つけて上げるから、精出して揉んでお呉れな。』

『へえ、へえ。』

早速爺は仕事に取かゝつた。

お春は新聞を讀みつゞけてゐたが、お銀は口を利かず、母親はゐてもゐないやう、店では金藏も俊介も

『呼んで來て上げようか。』
かうお春が言つた。
『なァに、その中に來るでせう。』
『でも、待つてるでは、いつだかわからない。呼んで來よう。』
『さうかえ、氣の毒だね。』
『なァに――』
お春は立上つた。
しかしお春には他に目的があつたのであつた。お春は間もなく歸つて來たが、やがてそこに投り出した竹の皮包を見ると、中から串にさした團子が出て來た。『また、お團子かえ。』かう言つてお銀は笑つた。そしてすぐ一本取つて口に持つて行つた。
『よく食ふね。』
『だつて、もう十時よ。』
それから始まつて、盡きずに食物の話が出て來た。かれ等は何ぞと言ふと、商用で東京へ行くものに頼んでいろ〳〵旨いものやらめづらしいものやらを買つて來て貰つた。俊介は上野の廣小路の雀燒、お銀は淺草の仲見世の鹽煎餅、お春は上野停車場前の岡野の餅菓子といふ風に――。從つて戸棚には、い

拔けて、格子戸の一隅の方へと行つた。そこには絣を着た十五六の少年が立つてゐた。それは國雄であつた。幸ひにも店にも往來にも人の姿は見えなかつた。お銀は帶の間から鼻紙に包んだものを渡して、あたりを見廻しながら此方に來た。

四

座敷では、一面に新聞が散らされてある中に、だらしなくお春は寐そべつて、頻りに婦人畫報の寫眞を見てゐた。

其處へやつて來たお銀は、

『芝居へ行つた翌日は、何うしてもくたびれるね。あ、あ。』

かう溜息をついて、そこに半ば蹲踞るやうにしたが、一二三種の新聞の中から、特に都新聞を選み出して、一面の長い續き物を讀み始めた。

暫く沈默がつゞいた。

やがてそれをも讀んで了つたらしく、

『お梅の爺は、もう來さうなもんだな、肩がたまらなく張る。』

かうお銀は言つて、自分の肩を二つ三つ叩いて見た。

るために、三人の子供達――殊に長男の國雄は、何ぞと言つては、人目をかねながら母親の許にやつて來た。

それにしても、八年の間、お銀のゐるためにこの家庭は何んなに動搖したであらうか。お銀は姉のお靜の穩かな性質と違つて激しい氣性の持主であつた。それに神經が强かつた。今ではもう大分よくなつたけれども、以前は時計のセコンドの音にも、一疋の蚤にも安眠することの出來ないといふほどであつた。從つて家の者とは誰とも皆なよく喧嘩した。そしてそれは金藏が町へ用事を足しに出たあととか、旅に行つて留守の時とかによく起つた。勿論、穩かな姉のお靜は、何んな場合にも默つてゐた。困つた妹だとは思ひながら默つてゐた。

中でも、總領の俊介とは、一番ひどい喧嘩をした。女の癖に、後には組討をした。髮の壞れた物凄い顏でお銀が、『妾はこゝで生れたんだ。手前の叔母だぞ。畜生よく毆りやがつたな。』かう武者振りついて行くと、俊介は俊介で、『何だ、生意氣な。俺は此處の跡取りだ。貴樣のやうな餘計者は、さつさと何處へでも行きやがれ！』と言つて呶鳴つた。爲方がないので、お靜はいつもその留め役をつとめた。喧嘩のあとは、お銀は二日も三日も默つて口をきかなかつた。相手がお春だと、いつも負かされて、陰の方でシク〳〵泣いてゐるのが例であつた。

お銀は濡れた手を手拭で拭いて、居間に入らうとしたが、ふと表の方をちらりと見て、急いで帳場を

お銀はやがて洗濯物を白い腕にかけて、酒庫の傍の方へと歩いて行つた。そこには、僅かな野菜畑と、材木の物置と、得體のわからない小さな祠とがあるばかりであつた。その畠と土藏との僅かな空地にかの女は竿を二本通して、メリヤスのシャツだの、襦袢だの、單衣などをそこに干し竝べた。此處は人目に遠い處であつた。

向うの新築の石塀のあたりでは、頻りに石を斫る音がきこえ、土藏の前では、木挽が松板を挽いてゐた。

お銀の姿を見ると、

『今日は。』

と丁寧に挨拶して『結構な好い天氣で御座いますな。』

『本當に好い天氣ですね。』

かうお銀もにこやかに挨拶して通り過ぎた。

井戸端のところにきて見ると、お靜もお春ももうそこにゐなかつた。下女のお清が、ひとり低頭いて赤い太い腕をむき出しにして、せつせと釜を洗つてゐた。

お銀は自分の家から一町と離れてゐない農家に嫁づいたのであつたが、姑が難かしいとか何とか言つて、今から八年前に、三人の子をあとに殘して出戻つて來た。すつかり、もう緣は斷れて了つて、あとにも別な後妻が入つたり何かして、その家の內情もすつかり變つて了つたけれども、それでも近くにゐる

お靜はしかもその言ひつけ口には成るたけ取合はないやうに、

『さうかえ……。誰も子は可愛いからねえ。』

『可愛けれや、出て來なければ好いんだ。子供が三人もある癖に――。今度の阿母さんにだつてわるいやね。もう自分は他人になつたんだもの。』

『そんなことお言ひでないよ。聞えたら怒るよ。』

かう母親がとめると、お春は倍々好い氣になつて、『構はない。怒つたつて構はない。本當だもの。また、あの國雄の餓鬼も餓鬼だ。この間なんかも、俺は大きくなれば、母さんの世話をするとさ。始終小遣や着物なんか貰つてゐるもんだから、そんなことを言つてゐやがる。』

鷄の一群が店の方から餌を啄きながらやつて來て、母子の立つてゐる足元に近寄つて、そのあたりを暫し突ついてコツこと言つてゐたが、やがてまた奥の方へとぞろ〳〵かたまつて歩いて行つた。

三

お銀はそんな陰口を姉や姪にきかれてゐるとは少しも知らずに、滿天星の木の傍に盥を据ゑて、中腰になつて、頻りに白いものを洗濯板に擦りつけてゐた。此方から行つた鷄の群は、お銀の後の日當の好いところに行つてあちこちに散らばつた。

と出て行つた。
家のものでは、光二がW市の商業學校に行くので、大抵一番最初に食つた。それから暫くして、長男の俊介が膳に向つた。その膳は箱膳で、茶碗や箸や、また食ひ殘したものなどが皆なその中にちやんと仕舞はれるやうになつてゐる。俊介は今年二十九になるが、箸を子供のやうに握つて、味噌汁などは滅多に啜つたことはなく、常に絶えず東京から海苔や、佃煮や、雀燒などを取寄せてご飯の菜にした。
『この頃は、東京の佃煮はまづくなつたな。』などゝ言つて箸を置いた。
金藏は勝手で食つたり居間で食つたりした。
女達はいつもお終ひだ。
飯がすむと、金藏の姿は俊介と一緒に酒庫の入口に屈んで、酒を樽に詰かへてをるのがよく見られた。
小僧達が、脊中に四つ割、六つ割の樽を背負つて、自轉車で出て行かうとすると、
『お錢を貰つて來るんだぞ。向うのいふことばかりをきいてゐては駄目だぞ。』
などゝ後から聲を懸けた。
太い井戸繩を手繰つて、大きな洗桶に一杯水を湛へて、下女が茶碗や何かを洗つてゐると、その傍にお春も來て手傳つた。其處へ水差を提げてお靜が來た。お春は言つた。
『銀ちやんは、まだ國雄のを洗つてゐるんだよ。』

出して、逸早くも洗濯を始めてゐた。
金藏は居間にあがつて、お靜の汲んで出した茶を默つて啜つて、菓子皿の羊羹を一つ摘んだが、口をもぐもぐさせながら、机の上から大きな算盤を取上げて、節立つた指先で、敏捷にパチ／＼と彈いて見た。朝日はそこら一面に明るく美しくかゞやいてゐる。やがて金藏は、滿足した顏色で算盤を下に置いた。

『お春！』
とかれは呼んだ。
『何ァに――』聲をきいてお春が此方にやつて來た。
『酒を一本つけな。』
お春は默つて引込んで行つたが、やがて底の開いたガラス罎が一本爐の傍の猫板の上に持つて來られた。金藏は小さな盃で、チビリチビリそれをやりながら、頻りに帳面をところどころ明けて見て、算盤を彈いて見たり何かした。何だか氣持が好さゝうだつた。そこへ、自轉車ですぐ近い町へ新聞を取りに行つた光二が歸つて來た。新聞は東京のも大阪のもあつた。
朝飯は倉の若衆や小僧達がドャ／＼と竈の後の板敷に上り込んで、飯を食ふのが早いの、晩いのと大騷ぎをして食ひ出すのが始めであつた。しかしかれ等の食事はすぐすんで了つた。かれ等は瞬間にドャドャ

もすみませんね。さうお氣を揉ませては――』

かう言つてお靜はさびしく笑つた。お靜は去年心臟を病んで二月ほど病院に入つてゐたのであつた。今ではもうすつかり治つたと自分では言つてゐるけれども、それでも皮膚には血の氣がなく、何をするにも呼吸がきれた。

竈の下はもう火を引いた。味噌汁の支度も出來て、下女は汁の實を切つてゐると、やがて口や咽喉をガラガラ言はせる主人の騷しい音がかなりに長くあたりに鳴り渡つた。そしてそれがすむと、今度は拍手を打つ音が靜かな朝の空氣に冴えてきこえた。座敷の方では、お春が威勢よくはたはたと拂塵をかけてゐる氣勢がした。

顏を洗つて了ふと、金藏はいつも酒庫の方へと見廻りに出かけた。白壁の土藏が氣持よく朝日に照されてゐるのが先づ第一にかれを愉快にした。つゞいて土藏の前に、薪にする杉丸太や松材が堆高く積んであるが、それからずうと勝手の方へ大谷石で長く高塀を築いてゐる工事がかれを樂しませた。かれは昨日の工事の出來榮えなどを眺めて暫し立盡した。

やがてかれは居間の方へと引返して來た。

その時には、お春はせつせと緣側に雜巾をかけてゐたし、お銀は見事な孔雀の羽の縫ひのしてある襟などをかけて、いやに艶めかしく若返つた恰好をして、襷をかけたり裾を塞げたりして、盥を中庭に持

臺所は下駄穿きで何でも出來るやうにつくられてあつて、井戸は勝手の屋根の下にあつた。金藏の顏を洗ひに行く時分にはお靜は下女のお淸を相手に、いつも裾を塞げて、效々しく働いてゐた。

『婆さん、顏の色がわりいな。』

金藏は口のまはりを齒磨粉で白くしながら、丸々と肥つた體を猫背にして、眼尻に皺を寄せたあか黑い顏をお靜の方に向けた。

『何うもしませんがね。』

『葡萄酒飮んでゐるかえ?』

『え。』

『もうなくなつたらう、なくなつたら、電話で二三本言つてやりな。』

『まだありますよ。』

『困るなア。碌々飮まないんだな。餘所ぢや飮まうたつて、ロオド葡萄酒なんか飮めない家があるんだ。それなのに家なんぞは、何うか飮んで吳れつて、俺が謝るやうに、賴むやうにしてゐるんだが、それでも飮まうともしないんだからな。いけないぜ、此頃は玉子も飮まないな。黃味だけなら、一つや二つ何でもなからうがな。』

『まづくつてね、玉子は——。でも、葡萄酒は飮んでゐますよ。まだ、しかしありますから。……何う

其處は主人の居間で、少し片寄つて小さな爐が切つてあり、その隅に、茶簞笥、佛壇、神棚、本箱、机、その他澤山な帳簿が置いてあつた。電話室もあつた。

茶を飮んだり、少しばかり芝居の話の相手をしたりしてお靜はゐたが、もう遲いのと、さつきとろとろしたところを起されて一時目がさめたのがまた眠りを催して來たので、

『もうおやすみな。私は寢るよ、もう！』

かう言つて寢間の方に行つた。

あとで、お銀は戶棚をあけて、唐辛子の入つた小さな鹽煎餅を取出してそれをぼり〳〵食つた。お春はお春で、勢ひよく白い脛をあらはして立上つて、吊してある籠から水蜜桃を取つた。二人は暫く爐のそばで食つたり飮んだりして、役者や芝居の品評をした。

二

その居間には朝から日が射した。

小僧が力一杯にガラガラとその表の大戶を繰ると、朝日は家の內に流るゝやうにまともにさし込んで來て、いかな寢坊でも眩しくつて寢てゐることは出來ないほどであつた。いつも父親の金藏が最先に飛び起きて、ぞんざいに大急ぎに蒲團をたゝんで、それから、楊子を啣へて井戶流しに顏を洗ひに行つた。

あたりに滿ちてゐる酒の香りと、ぴつしやり閉め切つた家の中のいきれとが、入つて行つた女達を息苦しく感じさせた。入口は土間で、そこには大きな酒樽が並び、ビイル罎の一杯に置かれた棚が、奇怪な繪でもあるかのやうにチラチラと蠟燭の灯に映つて見えた。その土間は眞直に家の中を貫いて、酒樽の列んでゐる後の壁一重が勝手、右は店、それに接して主人の居間があるといふ風につくられてあつた。そしてそこに、主人の金藏と妻のお靜とが寐た。

子供達――總領の俊介と弟の光二とはその奥の二間の座敷の方に寐た。お春とお銀とはその次の一間へ。

お銀はお春の叔母に當つてゐた。

『芝居は何うでしたね。』

お靜は片膝を立てたまゝ、太い指の蒼い掌に茶の分量を計つて、それを急須に入れながら、笑ひつゝ訊ねた。

『大入りでね。』

かうお銀はいくらか顏を蹙め加減にして、『それに、役者も餘り好くはなかつた。』

『でも、狂言は好かつた。』

かう傍からお春が言つた。

とはつきり見える白堊の土藏、栽ゑ込みの繁み、半鐘を吊した梯子、さうしたものが段々續いて、やがて格子戶の大きな構への七八間前に來ると、前に立つたお銀は、『そこで好う御座んすよ、』と言つて車を停めて下りた。

やがてチヤラチヤラと錢の音がして、『御苦勞樣、五錢づゝ增しましたよ、』といふお銀の聲がしたが、そのまゝあとを振返つても見ずに、小刻みな日和下駄の音を小石に立てながら大きな格子の前に行つて、

『姉さん、唯今歸りました。』

かう小聲でお銀は言つた。

しかし中は眠つて了つたのか、ひつそりして、暫しはそれに答へるものもなかつた。

『姉さん、唯今。』

二度、三度と段々聲が高く、お銀の焦れてゐるのがお春にもわかつた。

しかし、やがてはわかつたらしく、戶內に駒下駄を引摺る氣勢がして、大きな鍵に手がかゝつたと思ふと、ガラガラと輕くくゞり戶が明いた。裸蠟燭の光がチラチラと內から二人の立つてゐる敷石を照した。

『今お歸りかね。』

かう五十近い體の丈夫さうな、しかし顏の蒼白い女が腰を延ばしながら迎へた。

土藏のかげ

一

お春の耳には劇場の騷音がまだ微醉のやうに殘つてゐた。身は夏空の夜更の廣い田圃を見渡してゐながら、賑やかなごたくした色彩はチラチラと眼の前に搖いでゐるやうな氣がする。赤い白いまたは紫の色彩が——と、かの女の前を同じやうに車に搖られて行つてゐるお銀の若い頃の役者狂ひなどが思ひ出されて來た。

かの女の娘盛りはそれに比べては淋しく過ぎた。女學校を出た時には月に一度位手紙の遣り取りをしなければならない友達もあつたけれども、それも次第に疎遠になつて、今では全く一人ぼつちになつた。お春は車に搖られながら、夜露のしつとりした空氣に誘はれたやうにこんなことを思つた。平生は世間や他人に對して誇りに思つてゐる自分の家の財産などは何うにもならないやうな氣がした。

星の光の煌々と映る村の境界の川の橋を渡ると、兩側には低い農家があらはれ出して、夜目にもそれ

ナルドの痛々しい衰頽のところにかゝつた。いろ〳〵なことがかれの心を惹いたが、中でも、あゝした天才さへ死に面してはじつとしてゐられなかつた苦悶のさまが、かれに言ふに言はれない驚きを誘つた。宗彦はをり〳〵本を傍に伏せては、長い間、默つてじつと空間を見詰めた。

それに比べると、かれの死などは、唯徒らに腐つて行くやうなものであつた。今までにもかれは何物をもこの生命の流の中につかむことが出來なかつた。否、將來生きてゐたからとて、矢張同じやうに何も捉むことは出來ないに相違なかつた。しかも、その平凡が、却つてかれに平靜な心を齎らして來てゐるのであるのに氣がついた時には、かれは不思議な心の衝動を覺えた。天才なればこそ、その死に對する苦悶――あのやうな慘ましい苦悶があつたのであつた。レオナルドなればこそ、あれほどさまざまの生効のある事業に一生を打込みながら、死に面して自分の生涯の徒勞であることを痛感したのであつた。宗彦は何もないかれの一生、さびしい平凡なかれの一生が何の理由、何の因緣があつて、この永久の生命の流の中にひよつこり浮んでそしてまたひよつこり消えて行つて了ふかを考へて見た。

暫くしてかれは再び『先驅者』を取上げた。

上に仰臥した心持は、何とも言はれなかつた。
かれは障子を隔てた外の忙しさなどををり〳〵頭に浮べて見た。
ある日の午前には、初冬の日の麗らかに暖かい四疊半の方に床を移した。
『大丈夫ですよ。まだその位の力はありますよ。』
かうは言つたものゝ、矢張、母親の力を借りなければならなかつた。
かれは青空を寢て眺めながら、若い女――美しい女を思ひ浮べた。母親の慈愛に比較して考へては罪深い事であるが、もし、かれの世話をして呉れるものが、母親でなしに、若い美しい女であつたならば？生きた戀に包まれてゐる身であつたならば？　しかし、そんな幸福は、この世では、かれには遂に遂にやつて來ないものであつた。悲しくとも、または他から見て可哀相に思はれようとも、何うもそれは止むを得なかつた。
しかし、かれは思ひ返した。さうした樂しさうな結婚生活、その生活とて、決してさう大した幸福なものではないに相違ないと思つた。妻を持ち、子を持ち、年老いて、矢張、同じく死んで行く人間の一生を考へて見ると、自分の若い死もそれと比べて五十步百步に過ぎないやうな氣がした。
ふとかれは枕元に置いてある一册の書物を取つた。それはメレジコウスキイの『先驅者』であつた。字が細かいので、眼が疲れて澤山は讀めなかつたが、それでも、昨日あたりから、あの多能多才なレオ

かな氣分であつた。障子を透して來た雨の日の光線すら、かれの衰へた眼には强すぎるやうに思はれた。

雨は靜かに音もなく降り頻つた。

宗彥には喜びも悔みもなかつた。かれは唯靜かに橫になつた。二三日の間、かれの頭は丸で白紙のやうであつた。澄んだ靜かな心には何の影も掠めて通つて行かなかつた。何か思ひ出すことがあつても、それを思ひ廻らすのが面倒である位に、かれは弱く弱くなつた。このまゝ死んで行くなら、死も好いもんだなどゝも思つた。

何遍となく霜が白く降つた。庭の楓はいつか眞赤になつて、病床の障子を明るくした。晝間眠るのは心持が好かつたが、夜眠られないので成るたけ起きてゐるやうに心がけた。夜が更けて——夜が明けて行くのに眠られずにゐるのは辛いものであつた。かれは曉近く戶外に吹き出した風の音などを幾夜か聞いた。

眠ると、盜汗がびつしよりと寢卷を濡した。この盜汗、この不愉快な盜汗、今夜もまたそれが出るのかと思ふと、夜の近寄つて來るのが恐ろしいやうな氣がした。けれど、明方僅かなる眠を貪つてからの午前の心持は、何とも言はれず好い氣分であつた。生れたばかりの赤坊のやうな氣分であつた。あたりのしんとした朝の室の內に、線を成してさし込んで來た初冬の午前の日の光線を浴びながら、靜かに床の

かのやうな氣がして、膝の接合點は離れるやうにだるく、體は綿のやうに疲れて、そのまゝ疊の上にごろりとならずにはゐられなかつた。かれは母親に熱い湯を一杯貰つて飮んだ。

夕飯だけは食ふには食つたが、何うしても起きてゐる元氣がないので、そのまゝかれは床の上に横はつた。この體のだるさも、この熱も、このなやみも、明朝にさへなれば、何うにかなるだらうとかれは思つた。若い者に取つては、睡眠はこの上なき療養である。春の夜なのに、枕を濡すほどの悲しい戀の涙を流しても、一夜すぎて朝になれば、遠い夢か何ぞのやうになつて了ふことがよくあるものである。こんなことを思ひながら、かれは間もなく眠りに落ちた。

しかしその夜はいつものやうに安眠することが出來なかつた。眼を覺す度に、體は氷のやうに冷えてゐるのを感じた。初めは、氣候の寒い故かとも思つて見たが、それは矢張多量の血液の損失から來た結果であることがやがて獨りでに理解された。で、うと〳〵と半眠半醒のさまで曉に及んだ。

會社は休むことにした。

その日は朝から雨が降つて、濡れた山茶花の紅白が美しく硝子障子を透して見えた。宗彥は終日床の上にうと〳〵して暮した。心は限りなく鎭靜して、時には眠り、時には覺めてゐたが、その現ともなく夢ともない狀態は、さながら鐵路を走る汽車の次第に速力を緩めて行くさまに似てゐた。それはいつか停止せずには置かないのにきまつてゐたが、しかもその停止はまだいつともわからないやうな靜かな靜

とゝは思ひませんか。私はいつも思ふ。天壽を全うするといふことは、生物として最も偉大なることで、東京見たいなところで、五十年以上生きた人は何んな人間でも本當に偉い人間だと私は思ふ。』

これだけ饒舌るにも宗彦は咽喉のイラ〳〵するのを覺えた。

大野は面倒臭いと思つたらしく、『それもさうだね。』などゝ言つて、すぐ話を他へ外して了つた。

宗彦は平生餘り餘計な口をきかないだけに、議論などをやると、いつも自分から先づ激した。今もあれだけのことで、何か大事件にでも打突りでもしたかのやうに夥しく胸が躍つた。しかし、一方には、自分ながら旨いことを言つたものだと思つた。

午後になると、頻りに寒氣がして、熱が出て來た。しかし、氣分は別にわるくはなかつたので、時間までゐて、そしていつものやうに歸途に就いた。

われながら體の衰へたのを感ぜずには宗彦はゐられなかつた。會社から電車の停留場まで僅に一二町、それにすらかれは疲勞を覺えて、電車の踏段を上るにも、老人のやうに膝に手を置いて、そして辛うじて上つた。閉つてゐる入口の扉を明けるのも容易でないほどかれは弱かつた。かれは疾病のいかに迅速に體力を消耗させるかに喫驚して、自分で自分を見るやうにした。二三の停留場を過ぎると、電車はやがて滿員となつた。車體の動搖、車輪の轟き、停留場毎に起る乘客の混雜、それが疲れ切つたかれの神經に名狀することの出來ない苦痛を與へた。辛うじて家に歸つた時には、丸で難破した船の水夫でもある

話はいつも變らず、人間の運不運や幸不幸や榮枯盛衰で持切られた。中でも、來年の高等文官の試驗の準備をしてゐる大野といふ男の話した『無教育で、無一物で、ぶらりと東京に出て來て、二三年で巨萬の富をつくつた好運の男』の話が人々の心を惹いた。

『何うしてさう旨く行くんでせう。』かう大野は言つた。

『矢張、あゝいふ人は豪いからですよ。』宗彥はかう傍から口を出した。

『豪い、何が豪いもんですか、伜の戀人を自分の妾にしたり何かして、丸で獸のやうな奴ですもの。』

『しかし、金を拵へたところは豪いぢやありませんか。』

『併し、金を拵へただけでは、人間として、豪いといふ理由にはなりますまい。』大野は煙草の烟を吐いた。

『いや、理由になりますとも……。金をためて、そして長命するといふことは、人間として一番偉いことです。』

『そんなことはないでせう。長命も人間としては豪い條件になりますまい。』

『なりますとも――。』宗彥は思はずかう聲を立てた。『東京のやうな生活の激しい處では、單に食ふ、單に生きるといふだけで、それで大變な問題です。君や僕のやうに、自分の肉を削るやうにして、それに由つて生活する者に取つては、長命は甚だ覺束ないことゝは思ひませんか。偉くなければ出來ないこ

私は唯笑つてゐた。

『鑛山は、何方に行くだね。龍飛の方かね。』

『いや、鑛山の人ぢやないんだ、僕は。』

『おや、さうかね。鑛山へ行く衆ぢやねえんかね。それぢや、山林のお役人かえ？』

『いや、さうでもない……。』

『何だな？　それぢや……』

『唯、少し、用事があつて來たんだ……。』

かう言つた私は、つゞいて一週間、少くとも十日、殊によれば一月位此處にゐたいつもりだといふ話をして、何處か好いところがないかといふことをかれに訊いた。

『そら、あんべえよ、いくらも……。校長さんとこでも、村長さんとこでも、何處でも賴めば置いて異れないことはあんめえ。』

『何處か靜かなところが好いんだが……。』

『靜かなところなら、何處でも靜かだんべ。かうした田舍だでな。かど屋に行つて、きいて見るが好いだ。あの爺、さういふ世話をするのがすきだで……。』

私はふと、おゆきの姓を思ひ出して、

『え、あります。』

『好い旅籠屋ですか!?』

『好いにも、わるいにも、かど屋一軒きり宿屋ツて言ふものはGにはねえだな……。』

『さうですか……そして、その家は湖水に近いですか?』

『湖水に近いこともねえだ……。二三町あるでな。』

『ぢや、そこから湖水は見えないですね?』

『見えねえな。』

私はそれきり話をやめて了つた。古い舟の艣の音が頻りにあたりに響きわたつてきこえた。

暫く經つた。

今度は向うから訊いた。

『Gに泊んのかね? 今夜?』

『さう……』

『何の用かね。鑛山の用かね?』

學校の教員ではなし、郡役所の役人ではなし、何うしても、鑛山に出入するものか何かにしか私は見られなかつたのであつた。

『今日は先生に診て貰ふ日だね。』
『さうです。ちよつと診て貰つて來ませう。』
歩いて見ると、流石に醉つたもの丶やうに體がよろ〳〵した。咳は成るたけ腹に響かないやうに、やうにと心がけたが、痰が矢張眞赤で、氣分の好いのも當てにならないやうな氣がした。
醫師はすぐ近所であつた。『如何ですか？』かう莞爾してかれの顏を見た。
成るたけ内輪に、咯血の話をかれはした。醫師は、『フム、フム』と言つて聞いてゐたか、しかも別段それに重きを置いてゐるやうな樣子も見えなかつた。
脈を見ながら、『食事はいけませんか？』
『食慾はありません。』
『フム。』
醫師はかれの咽喉を調べてから、肌をぬがせて、胸と脊とに聽診器を當て丶見て、さて指の尖でコツコツと叩き始めた。空虛から發して來るやうな音、餘韻の短かい音、雜駁の濁つた音などが、一しきりしんとした靜かな診察室に際立つてきこえた。醫師は脊中の下の方を叩き終ると、思ひ當つたことでもあるやうに『フム』と言つて自から點頭いて見せた。宗彥は然し別に何事をも聞かうとはしなかつた。
醫者はかうやつてすつかり飲み込めたやうな顏をして見せるけれど、果して何れだけ本當にわかつてゐ

前に浮んで見えた。と、自分の身體はたはいもなくふわふわと空中に浮動して行くやうな氣がした。心もそれと共に輕くなつて行つた。睡眠がひとり手にかれにやつて來た。

再びかれが眼を開いた時には、肴屋の通帳は、夕暮近い灰色の光線の中に半ば埋められたやうになつてゐた。かれは非常に長い間寢たやうな氣がした。再びこの肴屋の通帳を見たといふことが、何だか二度と見られぬものでも見たやうな喜びをかれに誘つた。自分はまだ生きてゐるのである。的確に生きてゐるのである。かれは靜かに自分の脈を數へて見た。六十一しかない――そんなわけはないと思つて、もう一度やつて見たが、矢張同じであつた。それに、さつきとはちがつて、頭もはつきりして、健康の折と少しも違はないやうな氣がした。

體にもまだ十分力が殘つてゐて、眠る前のさつきのあの咯血は、遠く過ぎ去つた惡夢か何ぞのやうに思はれた。何をさし置いても、頭が晴々としてゐるのが心丈夫であつた。

『何うだえ？　心持は――。』かれの起き出して行つたのを見て、母親はかう訊ねた。

『大變好い……。』

『さつきのあの足の冷めたかつたこと！　私は吃驚した。餘り熱い湯に入つてのぼせたんぢやないか。』

『さうでせう、屹度……。もうよくなつた。思つたより早く治つた……。』

母親は新聞紙の丸めた包を持つて立つて向うに行つた。宗彥に取つては、咯血の量が夥しかつたことが、しかもそれが黑い塊であつたことが、尠なからず意外に感じられたが、しかも、すぐ醫師に來て診て貰はうとは思はなかつた。醫師も、これを何うすることも出來ないのをかれは豫めよく知つてゐた。幸ひに家の內はしんとしてゐた。かれは靜かに仰臥した。

かれは一時目をつぶつたが、再び明いた時には、曇つた日の軟かな光線が臺所につゞいた女中部屋に流れるやうにさし込んで來てゐて、そこの柱にかけてある肴屋の通帳がさながら浮き出すやうに際立つてはつきりと見られた。と、每日やつて來る肴屋の姿がはつきりそこに浮んで來た。それは二十五六のいなせな男で、眉毛の薄いのを氣にして、いつも墨で黑く塗つてゐるが、時には地まで眞黑にしてゐるのを見ることなども尠くなかつた。腹掛の丼の中には、いつも小さな鏡が入つてゐて、人のゐない所でそれを出して、顏を映して見たりした。宗彥は肴屋の通帳に目を留めてから、心の中に、"Death stares me in the face"などゝ繰返した。と、死の冷めたい呼吸がそのまゝ顏にかゝつて來るやうな氣がした。自分は最早此世にゐなくなつても、肴屋は矢張やつて來るだらう。今日は！　と吹鳴つてやつて來るだらう。そして奧から人の來ない間、鏡を出して引眉毛の自分の顏を映して見るだらう。その柱にかけられてある通帳もいつものやうに母親と肴屋の手を往つたり來たりするであらう。かう思ふと、肴屋のぼての中の荷をあれかこれかと見廻しながら、安くつて旨い總菜の肴を母親が選んでゐるさまが歷々と眼の

『氣持がわるくなつた、急に！』

『もどしでもしたのかね？』

かう母親は心配さうに訊ねた。

『少し。』

『燒魚がわるかつたんだらうね。先生に來て貰はうかね？』

『もう大丈夫です。足が冷えるから、足袋を穿かせて下さい。』

母親の觸つたかれの足は、死人のやうに冷めたかつた。それに、曇つた日の光線の惡い室内に、顏も蒼白く、額の長い髮の生え際に汗を光らせて寢てゐる姿は、唯事でないやうに母親に思はせるに十分であつた。

『先生を呼んで來よう！』

かう言つて母親は起上つた。

『まア、そつとして置いて下さい。先生を呼ぶよりも何よりも、そつとして、容態なんかきかないで置いて下さい。』

かう宗彥は言つて、新聞紙も、塵箱に捨てずにすぐ前の溝川に流して下さいと賴んだ。母に咯血を見せたところで爲方がないと思つて、『中は見ない方が好う御座いますね。』と附加へて言つた。

かう思つたが、それと同時に、さびしい笑ひがかれの口の邊に漂つた。かれは冷めたい鐵か何かにでも觸つたやうな氣がした。やがて口の中に腥いものが一杯にたまつて來た。それをかれは辛うじて家まで押へて戻つて來た。

格子戸を明けて上り端に來るや否、そこにあつた新聞紙の中にそれを吐いた。激しく咳が出て來た。

『もう家だ。氣兼はいらない。』かう思ふと、毒々しい血が咳と共に一杯に出て、あとには黑い血の塊のやうなものが續いた。窒息するばかりの苦しさが總身を震はせた。

かれは上り端の三疊に仰向けになつた。

『枕！　枕！』

かうかれは叫んだ。

奥から母親が慌てゝ出て來た。冷めた燒魚のために胸をわるくしてもどしでもしたのかと母親は思つた。その前に、かれはすべて鮮かな生々しい血を新聞紙にかくした。

『胸をわるくしたのかえ？』

母親はかう訊ねた。

宗彦は何かそれに答へようとしたが、腥い液體がまた舌の上に流れて來たので、唯默つて點頭いて見せた。枕を頭の下にあてがつて貰つてから、そつと血を口から新聞紙に移して、

湯から上ると、汗が止度もなく流れた。かれはそのまゝぴたりと洗場に坐つて了つた。脈搏が自分にもきこえるやうに高く〳〵躍つた。ダラリと膝の上に置いた手には、青い血管が際立つて太く蚯蚓のやうに走つてゐるのが眼についた。ふと痰が咽喉に支へたやうな氣がしたので、洗場の細い溝のところへとかれはやつて來て、つゞけて二つ三つ咳をした。といつもの痰とは違つて、水のやうなものが咽喉の奥から舌の上へと流れて來るのを感じた。吐き出すと、それは赤い血であつた。

かれはギョッとした。

しかし何うすることも出來なかつた。かれはそのまゝ、板の間に腰を据ゑ、胸を押へて、出來るだけ落附かうと試みた。成るたけあたりの浴客に見せまいとした。しかし血はあとからあとへと出て來た。口から出さぬやうにしても、鼻孔の方へ廻つて、そこからタラ〳〵とかれの胸の上に滴つて落ちた。かれは暫しそこに蹲踞んだ。

かれの心はしかし冷靜であつた。外科醫のやうに冷靜であつた。かれは口や胸の血を綺麗に拭ひ、それが終ると、靜かに着物の脫いであるところへやつて來た。體からは、汗がまだ流れてやまなかつたけれども、それを拭ふだけの動作でも喀血を誘ひはせぬかと危まれたので、そのまゝ濡れた身體に着物を着せて、湯屋から出て來た。

『たうとう出たな。』

んやりして遠い地平線の上を見てゐたが、ふと、その鼻の先に、黄い羽蟲があらはれ出した。小犬は匂ひをかぎながら、激しくその羽蟲を追ひ廻した。羽蟲は低く〳〵飛んで行つたが、やがて急に、高い〳〵空の方へ舞ひ上つて行つた。小犬は急に吠えた。さながら羽蟲の急に見えなくなつたのに腹を立てたといふやうに――。それが宗彦には、言ふに言はれない無邪氣さを感じさせた。小犬は猶二三度吠えたが、それで滿足したかのやうに、やがて尾を下げて、再びもとの垣の中に入つて行つた。此處ですれ違ふ筈の電車の遠い唸りがやがてきこえて來た。

家に歸つて來たかれは、十里の道でも歩いたやうに疲れてゐた。腹が空いてゐないやうな氣も一方ではしたが、しかも夕飯はかなりに旨く食べた。唯冷めた燒魚がいくらか胸に觸つたやうな氣がした。暫し經つてから、かれは湯に出かけた。

湯屋の浴槽からは、高い硝子窓を透して、碧い空の一部が見られた。かれは湯に浸りながらいつもそれを眺めた。しかし、その日は生憎曇つてゐた。

郡部に近い湯屋の午後は、日曜でも客は少く、大きな水槽に滴り落ちる水の音は、がらんとした浴場に高くさひしく規則立つて響いた。宗彦は病氣にも拘らず、熱い湯に自分の肉が溶けて行くかと思はれるほどそれほど長く入つてゐることが好きだつた。かれは長い間靜かにじつとして浸つてゐた。

ごろした間に、綺麗な水が透き通るやうに日の光線を織り込んで流れてゐた。飲食店の前の畑には霜にしほれた黄菊が叢を成して澤山にかたまつて咲いてゐる。宗彦はひろびろした川原を少し歩いて見たが、すぐ疲れて、そのまゝ水の流れる端に、風を避けるやうにして休んだ。

川原では、砂利を選つてゐる人足達が大聲で饒舌つたり呶鳴つたりしてゐるのがさびしくあたりに響きわたつてきこえた。宗彦はじつと水を眺めた。秋の碧い清い水は日を帶びてキラ〳〵と美しく光つて流れた。

暫しはのんきにそれを眺めてゐたが、あまり暖かなので、かれは羽織を脱いだ。顏がのぼせて頰があつく、胸がわるくなつて來た。熱が出て來たのであつた。かれは歸らうと思つて靜かに起き上つた。

再びもとの處に來て、電車に乘つた。空には灰色に濁つた雲が出て、あたりはなんとなく陰氣になつた。かれは飽滿したやうな不快を絕えず胸に覺えて、堪らないほど手足を靜かに延ばしたくなつたが、しかもかれを乘せた電車は相變らず激しく動搖した。否、そればかりではなかつた。單線のために、ある停留場では、長い間もどかしく電車を待ち合はせなければならなかつた。あまりに焦れつたさに、かれは下駄で床を踏み鳴らしたりした。

ふとある光景がかれの眼に映つた。

山茶花の白く赤く咲いてゐる垣があつた。そこから尾の長い一疋の可愛い小犬が出て來た。始めはほ

らうか、それとも憐むだらうか。こんなことを考へてゐる中に、かれの眼には、衰へたかれ自身が映つて見えた。何の情熱もなくなつた眼と、溝のやうに皺の立つた額と、血の氣のすつかり失せ果てた唇と、ぼんやりして一ところをじつと見詰めてゐる姿とを持つたかれが――

切符に乘換の鋏を入れに來た車掌に、かれは年寄のやうに低い喪心した聲で、『澁谷！』と答へた。氣が附くと、二人の女は何處かで下りたと見えて、そのあとには、請負師のやうな男と土工らしい股引をはいた男とが乘つてゐた。

かれは依然として大きな悲しみの下にあつた。大勢の人達の中にゐても、かれは全く孤獨であつた。電車の終點から玉川電車まで行く間をすら、かれはとぼとぼと足を引摺るやうにした。

玉川電車の方では、風が少し出た。何處からともなく冷めたい風が車内に吹込んで來た。それを宗彥は非常に嫌つて、いつそ家に戾らうかしらと何遍も〳〵思つた。それに、電車の動搖も市内の電車と比べて夥しかつた。今にも座席から搖り落されはしないかと思はれるほどである。坂の上に來ると、行手に白い富士が見えた。

宗彥には、玉川は初めてゞあつた。電車だけの狹いレイル路が坂になつて勾配が急になると、前にはひろ〴〵した眺めがあらはれ出して來た。天高く、地潤しいといふ感じが簇々と胸に上つた。やがて、電車を下りて、路でないやうな小さな飮食店の前を眞直に向うに行くと、もう其處は河原で、石のごろ

を見ないからであつて、自分に取つてはそれが却つて、淨い口、無垢な眼であるといふ誇になる。旨く言へば、朝子だつて、内所で一緒に芝居に行く位は何でもないんだ。であるのに、躊躇した。何故だ？」その何故？に宗彥は又突當つた。屈辱と言つて好いか、女の冷淡を罵る心と言つて好いかわからないやうなもの丶ために焦々した。裏切られたやうにも、また人の心の賴み難ないやうにも思はれた。

宗彥は胸部に少し疼痛を覺えて、輕く咳をした。それが二三遍續いた。汗が額に滲んで來た。紙に受けた痰には細い眞赤な線が入つてゐた。しかしそんなことには馴れ切つてゐるもの丶やうに、無感覺な眼をして、暮秋の明るい光線の中にかれはそれを眺めた。

やがてかれは玉川の景色を見に行くことにきめた。で、電車に乘つた。また女のことが思ひ出されて來た。もう朝子の家には行くまい。自分の戀した朝子は死んだことにしよう。そして戀に破れた自分の果敢なさを味つて見ることにしようと思つた。ふと見ると、車内には女が二人乘つてゐた。かれはちよいちよいその方に眼をやつた。神の創造物の中では、何と言つても、女が一番美しく完全なものだと思ひながら、樂しむやうにして、かれはそれを眺めた。不幸にして、その女の美貌はその聲の音樂を持つてゐなかつた。「これで、もう少し、好い聲の持主であつたなら、何んなに好いだらう。」など丶かれは思つた。朝子がまた思ひ出されて來た。で、いよいよかれは失戀したことにきめたが、それにしても、その失戀をこの二人の女の前にさらけ出して話したなら、二人は何と言ふであらうかと思つて見た。笑ふだ

『行かない？』

『えゝ。』朝子はかう言つたまゝで、無頓着に頻りに繪具を紙に塗つた。

秋晴の町を此まゝ家へ歸らうか。それとも何處かへ行つて見ようか。こんなことを思ひながら、宗彥はひとり靜かに歩いた。

自分の誘ひには誰も應じて吳れない。もう自分は誰にも相手にされない。かう思ふと、天地の間に見捨てられたといふやうな誇張した淋しさが犇々とかれの魂を取卷くやうに襲つて來た。女の銳い天性で、朝子は默した自分の戀を知つてゐるのに違ひない。知つてゐて、そしてあゝした素氣ない態度に出たに違ひない。それと言ふのも皆なこの身が病んでゐるためである。不治の病に罹つてゐるためである。それはかの女を見る自分の眼、または自分を見るかの女の眼ではつきりわかつてゐる。

かれはしかしすぐさうした思ひを捨てゝ了つた。あんな女がなんだ。あんな女は自分の戀に値ひしないと思つた。かれは病氣になつて怒り易くなつたことを思つた。そしてその怒が病人によく見る執拗な毒々しいものであることを思つた。かれの考はまた朝子の方へ戻つて行つた。『俺は話は下手だ！　殊に朝子の前では一層さうである。よく吃る。よく顏をあからめる。しかし、吃つたり、體裁の好い口がきけなかつたりするのは、それだけこの唇が汚れたことを言はず、この眼が世間の汚れたいろ〳〵なもの

さしい顏を見て來ようか。しかしそれも大變だ。出て歩くと、いくら氣分が好いと言つても、矢張、疲れるにきまつてゐる。それよりも、靜かに落附いて家に寢てゐる方が好いかしら？　など〻思つた。その女の友達と言ふのは、他でもない、親友の原の妹朝子で、その快活な、血色の好い顏や、小さな紅い唇や、無造作に取繕はない髮や、生々とした眼色や、さうしたものが常に宗彥の眼の前にチラ〳〵した。砂糖のやうな甘い聲で、人を嘲弄するやうに少し唇を突出したりするその表情もかれは決して憎いとは思はなかつた。病める宗彥に取つては、殊に、此頃、さうした若い女の聲を聞くことが必要であつた。さうした若い女の聲や笑ひや表情は、熱した顏を冷めたい水で冷されるやうな快感をかれに與へた。

で、今日も遂に、朝子を見るために出かけて來たのであつた。

宗彥は室內をあちこちと眺め廻したが、小聲で私語くやうに朝子に言つた。

『芝居へ行つて見ませんか。』

『さうね――』

始めは行つても好いといふ風に首を傾けて見たが、突然、

『よしませう。』

『………………』

宗彥はグッと小さな怒を胸に覺えた。かれはかうした否ない拒絕を豫想してはゐなかつたのであつた。

氣勢を宗彦が示すと、朝子は更に袖の上に顏を埋めて了つた。宗彦は凝とその突伏した姿を眺めた。驚くほど長い間じつとしてゐてから、朝子は、

『あつちへ行つて下さい。』

と言つて顏を擡げて笑つた。

明礬を引いた紙の上に、ライオンはかなり大きく手際よく描かれてあつた。繪の具は既にところどころ塗られてあつた。朝子はもう見られて了つたから爲方がないといふやうにして、繪具筆を取上げて、ライオンの踏んでゐる地面のところをちよいちよいと無造作に塗り始めた。

『今日は、宗彦さん、屹度入らつしやると思つてゐてよ。』

『何うして?』

『今日はお天氣が好いでせう。かう言ふお天氣に、貴方は家にじつとしてゐられない性分ですもの!』

實際、かれは天氣の好いのにじつとしてゐられずに出て來たのであつた。朝、床の中で眼が覺めた時、いつもと違つて非常に氣分が好いので、それで今日は天氣の好いといふことが知れた。起きて緣側に出て見た。果して空は靑かつた。朝日は庭樹を斜に紅く照らして、鳥が頻りに心持好さゝうに鳴き交はしてゐた。かれは何處に行かうと思つた。淺草の雜沓する群集の中に行つていかにも人生を樂んでゐるやうな人達の顏でも眺めて來ようか。それとも自分の唯一の女の友達を訪れて、久し振であの莞爾したや

萎れた草

『何處か散步して見ないか。』

『散步——僕は湯にでも入つて寢ようと思つてゐるんだよ。』かう親友の原は眉を寄せた。

『好いぢやないか。芝居にでも行つて見ようぢやないか。』

『行く氣はないね。今朝から頭痛がして困つてゐるんだもの。』

爲方がないので、宗彥は、『朝子さん、何してゐるの？』

『昨夜から、ライオンを描くなんて大騷ぎをしてゐたつけ。まだ、一生懸命で描いてゐるだらう。見てやつて吳れ給へ。』

宗彥は起つて、玄關に接した朝子の居間に入つて行つた。机の周圍には、紙や、繪具や、書籍が一杯散らかされてあつたが、宗彥の入つて來るのを見ると、朝子はいきなり机の上を袂で隱して了つた。白いエプロンは子供のやうに赤や靑や黃の繪具で汚されてゐる。そのかくされた袖の下を强ひて窺ふやうな

れが俺の名譽と富貴とになつたと思ふと、悲しまずにはゐられなかつた。』長い言葉に勞れたやうに、またはこれだけのことを言ふにも一方ならぬ努力であるやうに、最後の努力のやうに、博士は呼吸を深く切つて、『治、許して呉れ、これは言はずに死なうと思つたが、それを言はない中は、俺は何うしても死なれない。許して呉れ、治。』

かう言つた博士の頰には涙が靜かに流れた。

『でも、そんなことは……』

『いや、さう言つて吳れるのは、かうして夫となり妻となつたお前の情だ。手を下したのではないからと言ふんだらう。しかしそれは同じことだ。……俺はお前のために、親友を深い危い海につれ出して、そして救ふことの出來るのを見殺しにしたのだ。……お前はNと一生を暮すべきだつたのだ。その方が幸福だつたのだ。』

治子も驚愕の後の悲哀に堪へないといふやうに深く低頭いた。この間から、博士が内心に苦しんでゐたさまが一々わかつて來た。治子は女の罪の深さを思はずにゐられなかつた。

『だから、あの時、お前のNに對して濺いだ涙は、俺は見てゐるに忍びなかつた。……實際忍びなかつた。だから、あそこから歸つてからは、俺は成るたけお前を見ることを避けた。お前を俺の物にしやうと思つたそのわるい心も、Nがゐなくなつてから、またお前の涙を見てから、すつかりさめた。俺はお前を妻にしなければ好かつたのだ。けれど、俺は旣に一度さうした毒に觸れた。お前を妻にしなければならなかつた。そして一生心の中で苦しまなければならない報酬は旣にその時に醸されてあつたのだ。考へて見ると、俺の一生は、その罪過のためにのみ暗くされて來た。Nが始終俺の心の中に生きてゐた。またお前の中にもNが生きてゐた。お前を見ると、何んな時でも、Nが俺にまつはつて來た。夜の床の中までも入つて來た。俺は辛かつた。その辛いのをまぎらせるために、俺は書齋に沒頭した。そしてそ

『何うして？』

驚愕が治子の胸を轟かした。

『俺はあの時、救へば救ふことが出來たのだ。……いや、それよりも、もつとわりい。Nをあゝした遠い海までおびき出したのは、俺がしたことだ。……俺はあの時、何んなにNに對して嫉妬を抱いたであらう。……人知れない嫉妬、秘密と言ふことは、何んなに恐ろしいものだつたつたらう。……しかし、治。許して呉れ、俺はその重荷を抱いて一生苦しんだ。』

博士の顏には言ふに言はれない苦痛の色が漲りわたつた。

『でも……』

かう治子が言ひかけるのを遮つて、

『お前は、あの時ちやんと見てゐた。だからそんなことはないと言ふんだらう。それは俺は手を下したといふわけではない。しかし、救ふつもりなら、無論、俺が救つてやることが出來たのだ。……しかも俺の心は、あの時、Nの死を喜んでゐたのだ。さうすれば、お前は俺のものになると思つてゐたのだ。あゝした樂しかつた海岸の一夏にも、さうした恐ろしい毒の影が周圍を取卷いてゐたのだ。……だから、あの災厄が突然に來たやうに誰も思つたが、決してさうぢやなかつたのだ。……さうした暗い人間の心からあゝしたことが出來たのだ。』

『もう、誰もゐないか、お前一人か。』
『え、誰も……』
博士はそれでも今一度そこらを見わたして、
『治。』
『はい……』
『俺は……俺は……是非、一つお前に言はなければならないことがある……』これだけ言ふのも、苦しさうで、胸から肩へかけて呼吸が大きく刻むのを治子は見た。『俺は、俺はこの苦しみを一人墓に背負つて行かうと思つた。……お前のために、またあとに殘して行く子供達のために。……しかし、それは俺には出來ない。……俺はそれを言はない中は、死ぬことが出來ない……』
『……………………？』
暫く博士の言葉は途絶えた。
『治。』
『はい。』
『俺は辛かつた。そのために、俺の一生は虐まれて來た。治。Nが水死したのは、俺が殺したやうなものだ。』

たりを見廻してゐたが、決心したやうに、
『治。』
丁度、其處には、看護婦と總領の娘としかついてゐなかつた。
『治っ』
『母さんですか。』
かう娘が覗くやうにして訊いた。
博士は點頭いて見せた。
治子はやがて呼ばれて病床に來た。『何うかなさいまして？』
博士は眼を明いたが、あたりを見廻して、手で、皆な下に下りて行つてゐよといふしるしをして見せた。
『私に、何か話すことでもおあんなさるのですか？』
博士は點頭いて見せた。
で、看護婦も、娘も下に下りて行つた。
治子は近寄つて、
『何か――』

なつて體も自由に動かすことが出來ないほどであるにも拘らず、その時ばかりは、身もだえして 枕を何遍となく外した。

醫者が來て、注射をして、いくらか樂になつた時には、苦痛の名殘のやうに呼吸をはずませて、『しかし……しかし……この苦しみよりは……これよりは、俺の送つて來た一生の方がもつと苦しかつた。』かう小聲で獨言のやうに言つた。

『あゝ、もう死ねさうなもんだ。……この位、苦しめば、俺の罪障も滅しさうなもんだ……しかし……しかし、』何か言はうとしてそしてまた急に口を噤んだ。

治子が見てゐると、仰向けに寢てゐる瘦せた土色の頰の上ををりをり涙が靜かに傳はつて流れた。

看護婦がゐない時に、

『何か仰有ることがお有りになるなら……』かう小聲で治子は訊いた。

『ウム、ウム。』

と言つたばかりで博士は何も言はなかつた。涙はまた流れた。

治子にもいろいろのことが一杯に胸に押し寄せて來た。

この頃でも、をりをりＮの夢は見るらしかつた。さうした時には、手で拂ひ退けるやうな形をしたり、何かに壓迫されるやうな狀態を見せたり、微かに唸つたり、顏を苦しげに歪ませたりした。ある日、あ

『奥さん、いつもお若いですね。』
『いゝえ、もう。』
いくらかきまりがわるいといふ風で艶に笑つて見せた。
病人はちよつと治子の方を見たが、そのまゝ眼を落して了つた。さびしさうな表情がその顔を掠めた。
『でも、今日は好いやうですね。僕は新聞で見て、もつとわるいのかと思つて、心配して來た。これぢや、もう少し氣永に養生すれば、全快近きにありだ……』
『何うも氣が弱くばかりなつて、爲方がないんですよ。昔のことなんぞばかり考へるんですもの。』
『何うしても、病氣をするとさうなりますな。』
二階の晴々した窓には、梅雨あがりの日影が麗かにさして、新しい簾には綠の青い影が靜かに搖いた。

五

博士の病氣は次第に重くなつて行つた。滋養分を十分に攝取することが出來ないので、體は痩せるばかり、鼻はいやに尖り、頰はわるく骨立ち、脛などは阜蜥のやうに痩せこけて了つた。もう一日二日持つか持たないかといふやうな醫者の口吻は、治子や周圍の人達や子供達を悲しませた。
それに、時々苦痛が起つた。さうした時には、看護婦や治子達にも手に餘るほどであつた。力がなく

『さうでない、さうでない。』

博士は手で振るやうにして見せた。

暫くしてから、

『何と言つても、學校にゐる時分が一番好かつたな。無邪氣で、何も知らないで……』

『それは、さうだがね。』

『まア、しかし、君なんか盛んで、丈夫で好い。長生をするんだな。』

『いやに心細いことばかり言ふな。』

『でも、今度は、俺はとても治らない。治らない理由があるんだ。死なければならない理由があるんだ。……しかし死ぬ以前に一つ是非しなければならないことがある。』と言つて考へて、『ところが、これが中々大問題なんだ。今の僕には非常に重荷なのだ。しかし、これは是非やらなければならないと思つてゐる。』

『治るよ、そんなにやきもき思はないでも……治つて、一つゆつくりやるのだ。實際、君なんかにはやつて貰はなければならない爲事はいくらもあるんだから。』

其處に、治子はちよつと綺麗な美しい姿をして、莞爾して上つて來た。あとから若い小間使がビィルに果物を運んで來た。

Ｏ博士は、

『さア、詳しいことは、僕も知らんが、マザアやファザアはもう死んだらうと思ふね。あのＮの弟が何うも出來がわるくつてね、學校にゐたんだけれど、失敗して、今ぢや滿洲へ行つてゐるつて言ふ話はきいたが……』

『困つてゐるんだらうな。』

『なんでも、大分落魄れてゐるやうな話だつた……』

『妹は？』

『さうさう妹がゐたね。そんなに容色の好くない。……あれは中學の教師か何かに嫁いだ筈だが、何うしたかな。』

博士は溜息をついて、

『つらい世の中だな。何處を見ても、彼處を見ても……もう、僕も今度は治りさうもない。』

『そんなことはないよ。君なんか、まだ若いんぢやないか。』

『年は若くつても、あまりに人生は辛すぎた。……とても、もう、この先き生きやうとは思はれない。』

『何うしてそんなことを言ふんだ。君のすぎて來たレイベンが辛くつちや、辛くない人は一人もゐないぜ。僕なんかでさへ、君のレイベンよりは辛いと思つてゐるぜ。』

Nが生きてゐたら、それこそ何んなに幸福であつたらうとも思ひ、何故あんな風にしてあそこで水死したのだらうと思ひ、當分はNのことが氣にかゝつて爲方がなかつた。KにもNの話をするのが辛いらしく、その話が出ると、不愉快さうな顏をして、話を別の方へと持つて行つた。その頃、Kは新婚當座のやうな人ではなく、いつも書齋に入つて、熱心に研究ばかりをつゞけてゐた。

しかし博士が死の床に臥して、をりをりNの名を呼んだり、Nに逢つた夢から魘されて覺めなかつたならば、治子は決して今のやうにその昔を思ひ出さなかつたに相違なかつた。かれ等の生活は、世間的から言つても、決して不幸福でもなければ、不滿足でもなく、富貴、名譽、年を經て加はり、可愛い丈夫な子供は生ひ立ち、家庭は圓滿に、博士は他の女に心を移すやうなこともなく、唯、博士の沈默と陰欝とが辛いと言へば辛いものゝ一つであつたけれど、それとて治子の好きな派手な生活を遮るやうなものではなかつた。それに、治子は現にそのNの死んだ狀態を自分で見て知つてゐるので、夫に對するさうした疑惑は起したくも起す材料を持つてゐなかつたのであつた。

博士の級友で、矢張Nなどをも知つてゐる O 博士が、赴任地の大きな製鐵所から上京した次手に、かれの病氣を見舞つて來た時には、いつもよりは元氣で、いろいろな話をしたが、ふと、

『Nの親や兄弟は何うしたね。』

かう突如としてK博士は訊いた。

三度目に深く沈んだNの首は、もう再び水面にあらはれなかつた。治子は俄かに起つた災厄、それにつゞいて起つたさまざまの光景、盡きない涙、村の漁師を頼んで來て漸く引上げた時の青白い屍、さういふものが歴々と見えた。何年にも思ひ出したことのない、または思ひ出しても、普通の水死以上に感じを惹かなくなつたシィンが、再び新らしく眼の前に蘇つて來たかのやうに――。

四

治子はその別莊に滯在してゐた間の三人の狀態を今一度細かく眼の前に展げて見た。また、Nが死んだ後のKの狀態をもそれと思ひ浮べて見た。長い時を經過してゐるので、とてもそれとはつきりと思ひ浮べることは出來なかつたけれども、Kがかの女をその時分ひそかに愛してゐたといふことだけは肯定することが出來るやうな氣がした。それからもう一つ不思議なことは、その後Kとの結婚問題が起つた時に、Kがそれを避けようとしたことであつた。その時分、『私のやうなものはとてもお孃さんを貰ふ資格がない。私とはとても一生幸福な生活を行へさうにもないから。』と、Kは度々その仲介者に言つたといふ。しかも、その頃になつては、Kよりも治子の方が却つてKを思ふやうな形になつてゐた。

それに、思ひ出して見れば、もう一つ忘れられないことがあつた。それは結婚當座であつたが、何故かNのことがいろいろに思ひ出された。Kと夫婦になつたといふことも、Nがあつたがためだとも思ひ、

かうした忘れ難ない平和なのんきな生活の前に、突然思ひもかけない災厄がひそんでゐようとは――。

しかもその日も別に變つたことはなかつたのである。天氣は好かつたし、風はなかつたし、美しい朝であつたし、また美しい午前であつたし、さうした災厄の前兆は少しも面影を見せなかつたのである。午後になつてから、三人は揃つて出かけた。Ｎの態度にもＫの態度にも何等變つたところは少しもなく、いつものやうに語り、いつものやうに戯れ、いつものやうに磯を歩いて、そしてその岩陰の海に行つて水泳した。

治子は始めは面白がつて、二人のいつものやうに泳ぐのを見てゐたが、つい足元にめづらしく綺麗な貝を發見したので、その方に氣を取られて、捜すともなくあたりを熱心にさがして歩いた。で、少くとも二三十分は經つた。不圖、氣がつくと、Ｎは非常に遠くに泳いで行つてゐる。平生行きもしないまた行くことも敢てしない白い波の立つてゐる方へと泳いで行つてゐる。Ｋはそれから見ると、全く別の方で離れて泳いでゐる。『まァ、遠くまで行つた！』と思つて見てゐると、ほつかりＮの首が水の中に沈んだ。おやと思つたけれども、別に氣にもとめずにゐると、また首が出てまた沈んだ。その時、何か言つた聲がきこえたが、それは救を呼ぶ必死の聲であつたのである。

暫くして、それと氣がついたらしく、Ｋがそつちに急いで泳いで行くのを治子は目にした。しかし治子の目には、Ｋの泳いで行くのが非常に遲く、且まどろこしいやうに感じられた。

それを、その大きな西瓜を、松林の凹みの冷めたい清水の中に一時間ほど冷やして置いて、好い時分になつてからいつも出して來た。そして男達は面白がつて、緣側に俎板と庖丁とを持出して、それを眞中から二つに割つて、

『ヤア、赤い。これは旨いぞ。』

などと言つて、半月形に切つた奴を啜るやうにして食つた。

『旨い、旨い。何うです、治子さん。』かうKは勸めた。

治子もこの別莊に來てから、西瓜の旨い味を始めて覺えた。かの女も二片も三片も食つた。

Nは言つた。

『支那の文章には旨いことが言つてある。美人が赤い桃の實を食ふのを形容して、何れか桃、いづれか唇たるかを辨ぜざるなりなどと書いてあるが、治子さんの西瓜を食ふところを見ると、丁度さういふ風だね。』

『まア、あんなことを。』

かう言つてかの女は笑つた。Kも笑つた。

新しい魚類なども、女はよく生きたまゝで買つて來た。鰺などの殊に旨かつたのをもかの女は今でも思ひ出すことが出來た。

れに話好きなよく笑ふ女であつた。『おい、また、西瓜でも買はうか。』かうNが言つて小さな財布から金を出すと、『また西瓜けえ！　あきれたもんだぜ！　お前さん方に逢つちや西瓜もかなはねえ。』こんなことを言つて、その女はそこから松林を越して、近くにある畠に行つて、大きな西瓜を買つて、それをかついで持つて來た。

『大きな西瓜ねえ、いくら？　これで。』

かうかの女が言ふと、

『あてゝ御覧なさい、お孃さん。』

『わからないわ。』

十錢持たせてやつた金のつりを女はそこに四錢置いた。

『六錢、安いわねえ。』

『ウム、六錢は安いな。今日のは安い……』

こんなことを言つて、Nはそれを叩いて見て、

『その代り、赤くないぞ。』

『大丈夫だともな……赤いともな……この位になりや、もう……』

女も一緒になつて叩いて見た。

なにロマンチックだらうなどとかの女は思つた。
しかし、かの女はKを決して邪魔とは思つてゐなかつた。かの女はKを無邪氣な好い人だと思つた。それに學問が出來て、深切で、篤實で、厭味がなくつて、Nにも畏友視されてゐる形が頼もしかつた。Kはいつも默つてゐるか、でなければにこにこしてゐた。
それでも何うかすると、NとKとは議論をした。その時には、あの沈默勝の人の口から何してあゝした數理的な確乎とした議論が出るかと思はれるやうに、センチメンタルなロマンチックなNの議論を壓倒した。『だつて、さうばかりは言へない。一に一を加へる卽ち二ばかりでは、餘りに殺風景すぎるぢやないか。』Nは終にはこんなことを言つて笑つて議論をよした。
それでも治子がNと二人だけで、松林の中や、磯や、または裏の小山に登つたこともないではなかつた。勿論、さうした時にも、二人はまだ戀そのものについては話したこともなければ、觸れて見たこともなかつた。『Kさん淋しがつてゐるでせうから、もう歸りませう。』かう言つては歸つて來た。さういふ時にはKはいつもぽつねんとして別莊の緣側にねころんで書などを讀んでゐた。
別莊にはその頃雇つた村の中年の女がゐた。村の女と言つても、純然たる漁師の嬶ではなく、若い時は近い町の工場に行つたり、男を知るやうになつてからは、町の小さな店の主婦となつたやうな女であつたので、何處か世馴れて、客の世話、炊事の世話なども上手で、何一つ不自由なこともなかつた。そ

な麥稈帽をかぶつて出かけた。磯にはいろいろなものが打寄せられてあつた。夫婦貝、小豆貝、時には遠い海からはるばる流れて來たらしい椰子の實などもあれば、難船した舟の遺物らしい器具などもあつた。Ｎは學科の工科であつたに拘はらず、Ｋとは違つて、文學が好きで、レグラムなどを懷に入れて、ロマンチックの小說の話などをよくかの女にしてきかせた。ボウルと丼ルジニィの話などは中でも殊にかの女の心を波立たせた。かの女は今でもその端麗な、色のいくらか青白い顏と、隆い鼻と、靜かなしかし何處かに貴族的なところのある姿をはつきりと思ひ出すことが出來た。

時には餘り暑いからと言つて、男達はサル股一つになつて、岩蔭に靜かに湛へてゐる海にザンブと飛び込み、白い肌を碧い波間に巧みに動かして向うの岩まで泳いで行くのをかの女は笑つてじつと見てゐたりした。遊泳にかけては、Ｎも下手ではなかつたけれども、しかもＫの縱橫自由た何處までも泳いで行くのにには及ばなかつた。あんなところまでと人に思はせるやうなところまでＫは平氣で泳いで行つた。

Ｋはあがつて來て、

『あなたもお入いんなさいな。』

などと言つた。

Ｎと二人きりならば、泳いで見ても好いやうな氣がしたことのあつたことを今でもかの女は思ひ出すことが出來た。その世離れた岩蔭の海、漁師すらも滅多にやつて來ない海、そこで二人で泳いだなら何ん

いた。殆どこの世も何もないやうに泣いた。つとめて押へても押へても何うしても涙が出て來た。それも道理であつた。結婚の約束こそしてなかつたけれども、かの女とNとの間には、戀愛狀態に近い空氣がいくらか出來てゐて、そこにその夏三人して行つたのも、Nと二人だけでは親達も許さないし、世間もうるさいので、それで、Nの親友のKが一緒に行くことになつたのである。かれ等は暑中休暇の一月を靜かにのんきにそこで暮すつもりであつた。

その頃の治子は美しかつた。靑春十九歲、女子教育の未だ今日のやうに盛んな頃ではなかつたけれども、父親が學者であつただけに、かの女は早くからお茶の水に入つて、當時の娘達に比べては、學問もあり、氣分も開け、色彩も濃やかであつた。Tさんの孃さんと言へば、若い角帽の群の中にもかなりに評判に立てられてゐた。

治子は今でも思ひ出すことが出來る。その世離れた靜かな海岸を、撫子の咲いてゐる松林を、清水のあるところからだらだらと濱へ下りて行く路を、碧い湧きかへるやうな海を、少し離れたところに島があつて、そこに住んでゐる漁師のジツクザツクした屋根から夕暮毎にかすかに海に這つて行く暮煙を、半島を隔てた岬の鼻にかすかに光る燈臺の火光を、または夕暮の濱の散步から歸つて來ると、松林の中の別莊にぼつつり灯がついてゐるさまを。

かれ等は三人してよく磯を散步した。或は朝に、或は日中に、或は夕暮に。……日中にはかの女も大き

『さやうでせうとも……男にはいろいろ女の知らないことが御座いませうから。』

『…………………』

何か言はうとしたが、よして、

『Nと一緒に一生を送つた方がお前には仕合せであつたに相違ない。』

『そんなことはありません。』

『いや、さうだ……さうに違ひない。』

『何うしてそんなことを仰有るんですの？』

『あの時、お前の泣いた顔は、未だにはつきりと眼について見える。』

『だつて、そんなことを仰有つたツて、しやうがありやしません。Nさんはお亡くなりになつたんですもの。……もう、そんなことを考へるのはおよしなさいまし。餘り考へると、體に觸りますから。』

かう治子はやさしくとめた。それにも拘らず博士は猶深くその時のことを思ふやうに見えた。

三

此頃は治子にも不思議にその遠い昔のことが頻りに思ひ出された。

つひぞ今までこんなことはなかつた。それはNが溺死した時には、身も世もないやうにかの女は泣

『でも、親友だつたんだから。』
『それはさうですけども、餘り亡くなつた人のことなんかお思ひにならない方が好う御座んすよ。』
『でも、思ひ出されて來るんだから、何うも爲方がない。』
かう言つたが、すぐ言葉をついで、『昨夕もいろいろとNのことを思つた。』
『氣味がわるいから、もうおよしになる方が好う御座いますよ。』
『治。』
急に改つたので、
『え？』
『お前は俺とかうして一生を送つて仕合せだつたかな？』
『え、仕合せでした……』
『僕等の一生は幸福だつたかな？』
『幸福でした。』
『さうかな、お前は幸福だつたかな？』
じつと考へて、口を歪めて、
『俺は辛かつた。』

ろには、綺麗な清水が湧き出してゐて、そこには村の娘達が桶を天秤で擔つて、夕暮などに大勢やつて來てそれを汲んだ。博士とNと治子とはよくそのあたりに立つて、もえあがるやうな夏の夕暮の雲を仰いだ。

その雲の美しかつたことは、今でも博士の眼に歷々と見えた。治子の父親は、矢張昔の學者であつたが、そこに小さな別莊を持つてゐて、夏は娘を伴れてよくそこに出かけて行つた。

治子と結婚した後も、その別莊は矢張舅が持つてゐたけれども、博士はつひぞそこに行かうとはしなかつた。治子が行かうと言つても、「いやな記憶のあるところだから、」と言つてかれは竟にその勸めに應じなかつた。二十年ほど前にその別莊は遂に賣られた。

「Nは好い男だつた。」

「さうですね。若くつて、氣の毒でしたね。……今、ゐれば、もう餘程いろんなことをなすつてゐらしつたでせうに……」

「氣の毒だつた！」

博士は顏を暗くした。

餘りNの話をすることが多くなつたので、治子は、

「此頃は何うしてかNさんのことばかりおつしやいますね。」

さういふ話が出る時には、いつも中途から別の話にして了ふのが常であつたにも拘らず、その時は種々と詳しく其時分の話をした。『あの時分は、まだ若かつたなァ。』などとも言つた。いろいろ思ひ出して來ると悲しくなつて來るといふやうに、後には博士の眼には涙が光つた。

『俺も樂な一生ではなかつた！』

悵然として、

『それは世間的には、俺もいろいろな事をして來た。國のためにもこれでも盡したつもりだ。俺の一生は徒爾ではなかつた。Ｎのやる爲事も俺が代つてしてやつた。』

『さうですとも……』

『お前も泣いたつけな……あの時――』

かう博士は言つて、その遠い昔の悲しいシインを思ひ出すやうにした。

一時間ほどして岸に漂着したＮの死屍、蒼白い肌、尖つた鼻、絣の浴衣がひたと體にからみ着いてるたさまを、今でもかれ等は歴々と眼に浮べることが出來た。若い美しい治子は身も世もないやうにその死屍に取り縋つて泣いた。かれはその傍に立つて暗い顏をしてじつとその死屍を見詰めた。

弓弦を引いたやうなあの美しい海岸、靜かに打寄せて來る波、靡くやうに綠を掩いてゐる松林、そこには眞紅のなでし子が到るところに咲いてゐて、それを治子は採つてよく髮に挿した。少しくほんだとこ

『N君、N君！』

傍に侍してゐた治子は、

『もし、もし、何うかなさいましたか。』

かう言つて呼覺ますと、

『ウム……』

と言つて、博士はぽつかり眼を明いた。そして無氣味さうに四邊を見渡した。痩せて骨立つた體には

眼が鋭く光つた。

『あゝお前がそこにゐたのか。』間を置いて、『何か言つたか？』

『何だか、大變に苦しさうでしたから。……何か夢でも御覽になつたんですか？』

『ウム。』

『Nさんの名を呼んでゐらしつた。Nさんの夢でも御覽になつたんですか？』

『Nが來た！』

かう言つて、其處に治子が坐つてゐるのを見るに堪へないやうにして、そのまゝ向うを向いて了つた。

ある時は長い間博士は治子を捉へて昔の話をした。勿論、それは今よりは少し前で、『俺も今度は駄目

かも知れない。』などと言ふ頃であつたが、これまでつひぞそんな話をしたことがないにも拘らず、また

が二人、平和で、圓滿で、嬉々とした聲は常にあたりに滿ちた。母親と娘と睦しさうに琴を合せてゐる氣勢なども、ひろい邸の庭の垣を通して路行く人達の足をとゞめた。

夫婦の仲の好いのも、友人間に評判であつた。『惚れ合つた中と言ふものも、後には餘り役に立たなくなるものだが、K夫婦ばかりは不思議に仲が好いよ。あんなのはめづらしい。』などと誰も彼も言つた。かれ等の家庭には、決して他から女が人知れず入つて來るといふやうなことはなかつた。博士は堅かつた。博士は一意その學問と研究とに熱中した。

しかし、博士は何方かと言へば、沈默勝にしてゐる方であつた。友人と話をする時にも、極めて口數の少い方で、見やうによつては、何か隱された煩悶が胸の中に深くたゝまれてあるのではないかと思はれた。五十を越した頃から、急に頭髮も白くなり、顏の皺も段々深く刻まれて行くのが眼に附いた。

二

急に惡夢に襲はれたやうにして病床の博士は聲を擧げた。

『N君、N君!』

暫くうとうととしたと思ふと、『僕がわるかつたのだ。僕がわるかつたのだ!』

かう手で拂ひ退けるやうにして、

Nの水死

一

博士Kが重い病を得て床に就いたのはもう五六ヶ月も前であつた。一時いくらかよくなつて庭などを散歩するやうになつたが、それもほんの僅かの間で、今では何うすることも出來なくなつた。あらゆる大醫も皆々匙を投げた。食ふものも少しも咽喉に通らなかつた。大きな立派な邸宅も、數寄を盡した瀟洒な庭も、仲間の博士達に羨まれる富貴も、世間で誰も知らないものもないかれの功業も名譽も、死に面しては何の役にも立たなかつた。一尋常人と同じやうにかれも死んで行かなければならなかつた。

博士の妻の治子は、もう四十を越してゐたが、それでもまだ其の美しい面影は何處かに殘つて、總領の娘の今年十九になるのと一緒に町などを歩くと、姉妹ではないかと疑はれる位であつた。それに平生派手づくりで、髮などを亂したことはない上に、小柄で、痩削であるのが年よりも一層若く美しく見せた。博士の家庭は、つひぞこれまで世間の口の端に上るやうなことはなかつた。總領の娘、あとは男の兒

ある日、買つて來た屑や罎や新聞を屑屋の店に持つて行つて休んでゐると、其處に、黑い僧衣の色の褪せたのを着た五十先きの鬚面の托鉢僧が『オウォオウ』と言つて其前に立つた。

Ｔは立つて行つて、小錢をその鉢の中に入れてやつた。僧は『オウ、オウ』と鈴を鳴らして讀經して行つた。

それを見てゐた上さんは笑ひながら、

『Ｔさん、大變後生願ひになりましたね。』

『いゝえ、さういふ譯ぢやないんですけども、何うしてか、私は昔から、あゝいふ坊さんを見ると、やりたくなるんですよ。』

『あれは坊さんでも何でもないんですよ。乞食ですよ、僧衣を損料で借りて來て、商賣にして歩いてゐるんですよ。』

しかしＴには、その笠の中に、または都會の塵埃の中に、聖者がさうして尊い教を衆生のために垂れてゐるやうに思はれた。今日に限らず、Ｔはさうした光景を見ると、渇仰の念に促されて寄つて行つて鉢の中に錢を投げ入れた。秋の晴れた日の空氣の中に、小さな佛像を無數に背負つて、周圍に大勢の子供を集めて鉦を鳴らして歩いてゐる僧の光景などは、ことにかれにかれの前世を思はせずには置かなかつた。Ｔは心の中で合掌した。

きな祠の境内の紅葉は、染めたやうに美しく夕日に榮えた。

かれはその時分、もう一度と思つて、またそれも東京に出て來る動機の一つであつたと思つて、もう醫師なんかに診て貰はなくつても好いやうな心の狀態ではあつたにも拘らず、或日の朝早く出かけて、大學に行つて、K博士の診察を乞うた。

博士の要求で、それから猶二三度大學病院の長い廊下にかれの姿は見えたけれど、しかしその診斷は矢張京都で見て貰つたものと同じであつた。頭の方から來てゐる眼病であるので、これがこの位ですんでゐれば好いが、いつ何うなるかわからないといふやうな口吻であつた。しかしかれは最早京都の病院で感じたやうな烈しい絕望と焦燥とには襲はれなかつた。

かれは圖書館に行く度に、さうした思想を書いた古い本をさがして、わからずなりにもその難かしい昔の文字を辿るやうにして讀んだ。

しかしTは稼業を怠らなかつた。雨の降る日の他には、かれはいかなる日でも出かけた。屑屋の主人夫妻の信用は益々厚くなつて、今では金でも車でも何でも貸して吳れた。今年の秋は、雨が降つて、稼業も思ふやうに出來なかつたけれど、ゆくりなき利得があつて、生活は、人生はさう絕望したものではないといふことを感じた。

金のある時には、それをかれは路傍の乞食などにわけてやつたりした。

Tはかう早口に言つた。

『だから、さうした境から成るたけ出るやうにするのが肝心だ。君にしても、その病氣などは措いて問はないことにする。さうして眞劍に自分の道を行く。さうすれば、勞れず、疑はずに、且つ一心に。……さうすれば、君がY觀音で參籠した時と同じ心に絕えずなつてゐることが出來る。從つて、病氣などゝいふ憂悶から解脫することが出來る。』

『わかりました。よくわかりました。』

かうTは頭を下げた。

Tはさうした思想を書いた書籍、古人が古から矢張自分のやうにして苦しんだことを書いた書籍、さういふ書籍の名を手帳に記した。そして暇を告げて歸る道すがら、深い神祕の中に、または自分の經驗した異常の心理の中に、ちやんと自分の行く道がしるしづけられてあるのを思つた。觀音大士の尊像がまた眼に浮んだ。Tは思はず合掌した。幼ない時、父母に伴れられて行つた大きな御堂の香烟に包まれた崇嚴なさまが眼の前にチラついて動いた。

それから二月三月經つて、かれは自轉車を出して、漸くそれを國の方に送り屆けた。國からも、段々感情が和らいだやうな手紙が來た。無論、それはかれの持つてゐたものばかりではあつたけれども、それでも本やら雜誌やら着物やら夜具蒲團やらを送つてよこした。野はもう秋で、常によく散步する大

當にやりさへすれば、それで明日死んでも好いんだ。明日死んでも遺憾はないのだ……』

『さうですな。』

かう言つたTは深く考へるやうな顏の表情をして手を組んだ。

『そこが、その微妙な處が世間にはよく解らないんだ。空想だと思ふんだ。……しかし、それは實際心の事實なんだから……』Bは T の方を見て言つた。

Tにもさうした心のさまから考へて見ると、Bのいふことは事實として肯けがはれるやうな氣がした。心の千變萬化は實に複雜してゐる。自分でもわからないやうな氣がする。そしてそのわからないところに不可思議とか、神祕とか言ふ深い境があるやうに思はれる。Tは手を更に深く組んで考へに沈んだ。

『その心理の不可思議に入つて行くから、だから、佛教なぞでは、因緣とか、三世とか言ふものを說いてゐる。唯、徒らに、荒誕にそれを說いてゐるのではない。ちやんと不可思議の、異常の心理を基礎として說いてゐるのである。だから、君のさうした病氣も佛敎で言はせると、前世まで入つて行かなければ說けない。實際、世の中の現象には、今の世だけは說けないやうなことが非常にあるからね。そしてまたその矛盾を科學思想で言つたやうに單純に解釋してすましてゐられないやうなところがあるからね。』

『本當です。本當です。』

の遊蕩の話もした。

Bは非常に動かされたやうに見えた。

『見上げた、實に見上げた。……君は豪い。さういふ志が即ち宗教だ。悲慘だけれども、それは悲慘だと思つてはいけない。また、その君の不治の病氣を不治だと思つてはいけない。況んや父親の位牌を投りつけるに於てをやである。君、君は維摩經を讀んだことはないか、ないだらうな。讀んで見給へ。それにはちやんとそのことが書いてある。一體、維摩經と言ふ經文は、維摩居士の病に臥してゐるのを文殊菩薩が訪問に行く結構で書いてあるものだが、私の考では、あの經文は解脱が中心だが、その解脱は一番むづかしい病に對する解脱を說くことをその主なる內容にしてゐる。であるから維摩は言つてゐる。癒ゆることの出來る病は身に着するより起る。不治の病は、これ病にして既に病にあらざるなりと言つてゐる。實際、君、さうぢやないか。我々は五十年の命を持つてゐる。しかしそれだけ經てば、誰でも一度は死ななければならないのである。さうすれば我々人間のすべては、矢張は死ななければならない不治の病にかゝつてゐると同じではないか。ちつとも違はないではないか。病氣にかゝらないと言つても、人間は明日死ぬか何うかわからないではないか。今日僕が生きてゐても明日は死んでもう僕は此世にゐないかも知れないのだ。そこだ。そこを考へなければならない。我々はさういふことに頓着してはならない。孔子も言つた通り、朝に道をきき夕に死するも可なりで、唯、人間として生れて來た道を本

た。その問題に打突ると、Tは世界のドン底から來るやうな重苦しい深い大きな悲哀に身を蔽はれた。その時には屹度京都の病院で宣告を受けた時の絶望と焦燥とが繰返して眼の前に浮んで來た。體中がくわつとして來た。父親が、時には戀ひ焦れてその面影を忘れかねる溫情の父親が憎く憎くなつて來るのを覺えた。かれの眼病の原因は父親にあるのであつた。父親の遊蕩の結果であるらしい宣告を病院の博士は宣告した。その時には平生大事にして、香花を供へるのは自分ばかりだと思つて、朝夕禮拜を怠らなかつた父親の位牌も、投りつけて了ふか、燃して燒いて了はうかと思ふほどの激情をかれは感じた。

Tはをり〳〵默つて雨の降り頻る屋根に向つて、手を拱いて、深く深くその問題に沈み込んだ。しかしいくら考へて見たところで、それを何うすることも出來なかつた。餘りに深くそれに執着すると、每日の稼業――自分の本當の生活のためにやつてゐる、またやらなければならない稼業すら厭に厭になつて行くのを覺えた。かれはつとめてそれを押しのけて、『屑ィ屑ィ。』と垣に添つて流して步いた。

郊外にあるのBの家には、其後一月に一度位づゝ出かけて行つた。最初に暗示された經驗以來、かれはBの思想や感情について深い共鳴を感じた。Bは不可解の解、不可思議の思議について常に話した。Bは宗教の話をよくした。

屑屋になつた話は、Tは容易に打明けなかつたが、ある日、ついその話に心を引寄せられて、それからそれへとその話をBにした。Tは何も彼も隱すことが出來なかつた。眼病の原因の話もした。父親

かれに對する主人夫妻の信用も段々深くなつて行つた。外ではまた得意の家が殖えて行つた。

かれは其時分になつてから、始めて國の方へ消息を書いた。自轉車はまだ質屋に入つたまゝになつてゐるけれども、かれはそれをもその中何うにかして出して、送りかへす積りでゐた。かれは不思議にも、此頃は國の養父母についても、もう以前のやうな反抗と憎惡とを持たなくなつた。養父にしろ、養母にしろ、先きには先き相應の理由があつてそれでさういふ冷めたい空氣になつて行つたのである。自分が不幸であつたのは、不幸なるべく自分が生れついて來たのである。養父は叔父ではあるが、本當の親ではない。ことに、養母はあかの他人である。それに本當の父としてまたは母としての恩愛を望むのは、望んだ自分が間違つてゐるのである。決して怨んだり嘆いたりすることはない。かうTは思ふやうになつた。Tは稼業の思ひの外に早く濟んだ時だの、または雨が降つて出られない時などには、家に籠つて本を讀んだり、または雨を衝いて、歩いて池を廻つて、Uの圖書館に行つたりした。ある時は讀書に興味を惹かれて、夕飯をパン半斤ですまして、館の閉ぢるまでゐて、歸りの闇がよく見えないので、山から灯の通りに出るのに非常に困難を感じたことなどもあつた。

この頃の和らいだかれの心でも、一度思ひがその眼病のことに及ぶと、身體の燃えるやうな激情を覺えずにはゐられなかつた。心の苦しみは苦しみを經るにつれて、却つて心が鍛錬されて來るが、それはこれまでの自分の經驗でもわかつてゐるが、體の病ばかりは何うすることも出來ないのをかれは痛感し

『慾をあんまり出さん方が好い。君だつて、屑屋を一生するつて言ふ了簡もないだらうからな。』

『本當です、本當です。』とTは言つた。

『なァに……車でも、金でも、儲るものがあつた時は、いつでも貸してやるから……落附いてやるが好い。

『難有う……』Tは其處にも本當の人の深切な心のかくれてゐるのを見た。上さんも出て來て、『拵けたかね、さうかね。これだけ買つて來たのね。お前さん、見かけによらない拵ぎ人だな、中々。』かう笑ひながら言つた。Tはこれに勇氣づけられて、それからその近所に下宿する手頃な貸間を搜すべく出かけた。

九

Tはそこから餘り遠くないところに、電氣つきの二階六疊の一間を搜して借りたが、一月二月經つた後には、今までの借蒲團も自分のものにし、火鉢なども買ひ、安いのではあるが茶器や藥罐やセト引の洗面器などをも買つた。かれはもう決して困ることはなかつた。また、家の人達もかれが屑籠をかついで外を流して歩くものとは知らなかつた。Tは毎朝、腰をかける近所の飲食店に行つて、汁につけ物の安い朝食をすまして、それから屑屋に行つて大きい籠と秤とをかりてそして出かけた。

そしてその商賣道具も、段々自分のものにするやうに、利得のあつた時にいくらかづゝ主人に納めた。

讀してゐるあの作者の青年の悲慘な心に對する共鳴も、矢張さうした淺薄な心で共鳴してゐたことを感じた。

『屑ィ、屑ィ。』

かうかれは流して歩いた。

まだ半日も歩かない中に、かれはその携へて來た大きな籠の既に一杯になるのを見た。歩いたところと言つても、苦學生のはみがき賣の時に歩いた五分の一もまだ歩かなかつた。しかし今日は先づこれだけにしやうと思つた。かれは最初の日の成功に勇みながら歸つて來た。

屑屋の主人は莞爾してTを迎へた。

『これは、新米にしちや出來が好い。』かう言つて、古新聞は古新聞、屑は屑と目方にかけて、そして銀貨をチャラ〳〵とかれに渡した。

『これぢや、小さな車を借りなけれやならないかも知れませんね。』

かうTが莞爾しながら言ふと、

『まア、さう乘氣になつて慾を出さずに、これで、少しの間やつて見る方が好い。これだけ毎日拵いでも、君一人位食ふには食へるんだから。』

『それはさうですな。』

かう言つてじろ〳〵とかれを見て、

『また寄つてお吳れよ。家は大勢だから、ぢき屑がたまるから、一週間か十日目位にはあるよ。』

『難有う御座います。……他にも何か空罎か新聞のやうなものが御座いましたら……新聞は成るたけお高く頂きますから……』

『また、その中さがして置くよ。』

それからそれへとかれは步いた。かれは此前やつた苦學生のはみがき賣の時に比べて、何んなに樂な愉快な本當な稼業と言ふことを感じたかわからなかつた。この前の時には、かれは到る處で迷惑さうな顏と怒つた顏と不愉快な顏とに逢つた。そしてつまらなく歎願したり口說いたりした。それから比べたら、この自由は！　この快さは！　何處に行つても見るこの笑顏は！』

かれは今にして始めて本當の生活に觸れたやうな氣がした。

自分の持つた不平、不滿、乃至は苦惱、煩悶、さういふものに對しても、かれは考へ方の一變したのを覺えた。今迄は少くとも自分は無理をしてゐた。此方で盲目な欲望に捉はれながら、その欲望の達せられないのにのみ懊惱した。非常に不自然であつたのである。また非常に思ひすがりすぎてゐたのである。あの苦學生の群がその好い例だ。口には立派なことを言ひながら、所業としては竊盜にも均しいことをしてゐるのである。さうしてあゝした魂を亡くしたやうなことをしてゐるのである。かれは平生愛

かれは今朝屑屋の主人から聞いた相場を言つて、そして不馴な手附きで、そしてそれを秤にかけた。大抵な屑屋は、さうした家に秤などを準備してゐないのを好い事にして、秤の紐を持ちながら掌を秤に押しつけて、目方をごまかすものが多いさうだけれども、またさうすると百目位はぢき違ふさうであるけれども、現に、今朝屑屋の主人がその秤のはかり方に種々あるのを教へて呉れたけれども、かれはさういふことをする氣にならないので、正直に秤をかけて、目方だけの金をそこに並べた。

『思つたよりあつたのね。』

かう言つて細君は莞爾した。

次に呼び込んだ家は、屑が少しあつたばかりであつた。混雜した家で、かれに應對してゐたのは四十先きの女であつたが、若い娘だの子供だの騷ぐ氣勢が賑かに奥でした。品のよいお婆さんの後姿なども見えた。

『あまり見かけない屑屋さんだね、お前さんは――』

かうその女は言つた。

『まだ新米ですから。』

『大抵、屑屋さんは、年寄が多いがね。お前さんのやうな若い人はめづらしいがね。さうかえ、まだ始めたばかりなの?』

て迎へた。

八

Tは其處で借りて來た屑籠に秤を入れて、それをかついで、尻を端折つて出かけた。

『旨く似合ひますよ。』などと屑屋の上さんはそれを見て笑つた。

山の手の垣の多い靜かな通りに來て、その屑屋のやつてゐるやうな懸聲を始めてかれのやつた時には、流石に年若い身の顏の赧らむ樣な心持がして氣がひけた。悲しいやうな氣がした。辛いやうな氣もした。かれは十分にその懸聲の出來ないのを感じた。

然し誰も知つてゐるものがあるのではない。また知つてゐるものがあつたとて、少して愧る處はない。自分の獨立のためである。また自分の生命のためである。死にまで到達してそして辛うじて贏ち得た心の境である。かう思ふと、悲しいとか辛いとか思つたことがすぐ打消されて、年の若い身でかういふ稼業をして歩いてゐることは、或は富貴の子弟が車や馬車で學校に通つてゐるよりももつと貴いことであるかと思はれた。『屑い、屑い――』かうかれは聲を張上げて流した。

最初、かれを呼込んだのは、中流階級の柴垣を取廻した家であつた。そこでは若い庇髮の細君が、屑の他に、新聞を束にしたやつを持ち出して、『新聞はいくらなの？』かう白い顏に笑をたゝへて訊いた。

さうにしてTの顏を見た。
『書生さんの屑屋さんはめづらしいわな。』
『本當ですね。……出來るかしら? 出來てもぢきに飽きるでせうね。』
『飽きたら、また、もつと好い仕事をやるさ。一生屑屋をやつてゐなくつたつて好いんだから。』
かう主人は笑つた。『一月、自分が獨立して食ふ位のことはわけありませんか。』とTが續いてきくと、
『それもお前さんの了簡一つだが、働けば、月十二三兩位かせぐのはわけはないさ。』
Tはいろいろと賴んで、始めて生き返つたやうな氣がして其處から出て來た。始めて自分の立脚地をさがし出したやうにかれは思つて勇氣が出た。それにしても不思議だとTは思つた。そこに來て、ふとした考の起つたのも、入つて行つた家の主人夫妻が深切で見ず知らずの自分にいろいろ世話をして吳れやうと言ふのも、場合によつては一臂の力を假して吳れるとまで言つて吳れたのも、皆なそこに心の不思議の連絡があるやうに、林の中の最後の大きな反響や、ゆくりなく訪ねて聞いて來たBの言葉などとつゞいてゐるやうに思はれて、Tは再びY觀音で參籠した時のことを頭に浮べずには居られなかつた。
Tは深く考へながら歩いた。その體には生々した心が滿ち溢れてゐた。世界が一瞬間の中にすつかり變つて了つたやうに感じられた。今まで絕えずかれを威嚇し壓迫した電車も、自働車も、暢氣さうに滿ち足つて生活してゐる人達も、美しい着物を着た女達も、何も彼も皆なかれに向つて好意を持つて笑つ

してちよつと億劫だが、やるなら、世話して上げても好う御座います。』
『何うかお願ひします。』
主人はその稼業について種々な話をして呉れた。TはまたTで、國で屑屋の友達を持つてゐたので、その話がかなり細かいところまで飲み込めた。此方に信用さへ出來て來れば、店で皆な元手を出して呉れるので、買ふ金には不自由をしない話などもそれとわかつた。『なァに、屑屋だから、成るたけ廉く買ふやうにするんだね。先方だつて、元が不用なものだから、安く言つたつて別に何とも思ひやしないから……唯、かうした稼業でも、仲間の競爭があつてな。中には成たけ分割よく買つて、好いお得意を拵へるものがあるからな。そこは注意しなけれやならんけれど。……なァに 少しやつて見ればわかるよ。』
主人は猶ほそれからそれへと種々な注意を與へた。
『食つて行けるどころぢやない。巧者にやれば、五人も六人も食はせてゐるものがあるんだから。』奥にゐた上さんに向つて、『なァ、喜作なんか大したもんだな。毎月五六十兩も稼ぐな。』
『え？』突然に聲をかけられた上さんは奥から顔を出した。
『何だ、お前、聞いてるなかつたか、この書生さんが屑屋をやりたいつて言ふからな……喜作なんか毎月五六十兩も稼ぐつて言つたのよ。』
『この書生さんが、屑屋をするんだつて……』始めてその話を耳にしたやうにして上さんはめづらし

『少しお願ひがあるんですが。』

『何ですか?』

眼鏡越しに主人はTを見た。

『此方で、屑屋はさせては下さらないでせうか。』

『屑屋ッて、何う?』

『僕が屑屋をして、買つて廻つて歩きたいと思ふんですがね。』

主人はまたぢつとかれを見た。暫くは返事もしなかつたが、

『貴方がやらうッて言ふんですか?』

『さうです。』

かう言つて、其處に腰を懸けたTは、自分の國を出てからの話を手短かにした。屑屋の主人は始めは面倒臭さうに、胡散臭さうにして聞いてゐたが、段々それに惹き込まれたやうにして、後は一々點頭いて見せた。『買つて貰つて此方で金を貰ふんでなくて、此方で金を出して買ふんだから面白い商賣だと思ひまして。』とTが言つた時分には、中々面白いことをいふ書生だといふ顏をして笑顏をTに見せた。

『まア、さういふ風に取れば面白い稼業かも知れないが、あまり好い稼業でもないからな。』かう言つて主人は笑つて、『それはしかし、國を出て、知人もなくつて困つたらう。やるには鑑札を受けたり何か

それは大勢屑を選つてゐるやうな家であつた。中年先きの女だの、小僧だのが二人も三人も並んで、一杯積んだ紙屑の中に埋つて、好い紙は好い方へ、わるい紙はわるい方へと何か話しながら選つてゐた。

かれはある貧い大きな力が、不幸な自分のために特にある暗示を與へて吳れたやうな氣がした。『さうだ。……この商業は買つて貰ふのではない。受身ではない。此方から錢をやつて向うから買つて來るのだ。此間中、やつたのとは、商賣の形が正反對である。同じ賤しい生活のたつきだとは言ひながら、買ふのである。錢を出してそして買ふのである。それに、求める心が多くない。無理に賣つて貰はなくつても好いのである。さうだ。これをやつて見よう。』

かうTは思つた。しかしこれには猶一二の動機があつた。かれは國にゐる時分から、身を勞働者と同じやうな境遇に置いた。筒袖で働くことを何とも思はなかつた。それに、性質としても、社會の階級と言ふものに區別を置かなかつた。もう一つは田舍のかれの友達に屑屋がゐた。屑籠をかつぎながら、手帳を懷に入れて、のんきに俳句などを詠んで歩いた。その友達から、屑屋の面白い商賣なのを聞いたことがあつた。

かれはづかづか入つて行つた。

店で紙を選つてゐた中年の女や子供は手をとゞめて、じろじろとかれを見た。五十先きの主人は店の帳場で、頻りに何か算盤を彈いてゐたが、怪訝さうな顏をしてTを迎へた。

ンなどさうだ。』

『實際、あゝいふ群には呆れて了ひました。……』

『さういふ群にはなるたけ入らない方が好い。まごまごすると、此方の持つてゐる魂を持つて行かれて了ふから。……だから成るたけさつき言つたやうに、自分の進んで働くやうな、また多く求めないやうなものをやる方が好い。』

『本當ですな、よくわかりました。』

かう言つてTは頭を下げた。

Tは遂に遂に自分の窮境は訴へなかつたけれど、Bを訪問したといふことは、かれに取つては大きな事實であつた。かれは一時間、それ以上もゐてそして暇を告げて歸つて來たが、今日林の中にゐた時とは違つて、心には活氣が滿ち、胸には生々した生の力が漲り渡つた。林の中での最後の大きな反響、それからつゞいてBの訪問、それに何か不思議な力が働いてゐるやうなのをTは感じた。

七

その翌日の午後、Tはだらだら坂になつてゐるある小さな通りを歩いてゐた。

ふとある店が眼に附いた。

見てやつたことですから……。神や佛が言つたわけぢやないんですから。それで一時は絶望しましたが、さう思つて自分で自分をやつて行かうと思つてゐたんです。奇蹟といふことは御座いますからな。』

『あるどころぢやない。』

『現に、私などの小さな經驗でも、Y觀音で一心になつた時には、眼病の苦痛なんてことは忘れて了ひましたから。ところが、先生がさつき仰有つたやうに、それが長くつゞかない。その一心が長くつゞかない。それだから駄目でしたんですけども……』

『さうだ、さうだ。……確かにさうだ。そこに宗教の奇蹟と言ふことがあるのだ。神祕があるんだ。人間は人間だけでは、この生を終つて見なければ、この人間のことはわからない。從つて失望することはない。唯一心でさへあれば好いんだ。そしてそれがつゞきさへすれば好いんだ。』

『本當ですな、先生のお話はよくわかりました。』

つい話につり込まれて、Tは苦學生の群の話まで持ち出した。

Bは熱心に聽いてゐたが、『それでは、やつぱり搔つさらひなんかをやるんだな。……さういふ奴等だから、あゝして頭を下げてづうづうしくやれるんだ。魂をもう持つてゐないのだ。自分で自分の魂を亡してゐるのだ。いや、世間にはさういふのが澤山あるよ。自然主義をはき違へたデカダンなども、さういふ風に魂を玩弄視する人達だよ。しかし、デカダンには玩弄にしながらまだ魂が殘つてゐる。ヹルレイ

心を得る修業なんだ。ところが、人間は誰でも一心を持つてゐるのだけれども、また時には一心になることが出て來るのだけれども、常にさうした張詰めた一心が出て來ない。折角その境を感じても、ぢきそれを失つて了ふ。そしてもとのだらけた心持になる。そして世のいろいろなものが、又は自分の中にある世間と同じ分子が、差別相卽ち貴賤とか貧富とかそれから起る虛榮とかいふ心を起して、そして煩悶したり懊惱したりするのだ。』

『本當です、本當です。僕にもさういふ經驗があります。』

かう言つたTはY觀音での一心になつた形を思ひ出さずにはゐられなかつた。Tはちよつとその話をした。

『さうか、君は眼がわるいのか。それはいかんな。』

『別に畫間は不自由にもなりませんから、放つて置きますけれども……』

『それは大學なり何處なりに行つて見て貰ふ方が好い。大學には知つてゐるものがあるから、いつでも紹介してやるよ。』

『難有う御座います。』

Tは思はず涙の惨み出して來るのを覺えた。暫くしてから、

『しかし、京都でその宣告を受けた時にも、科學は萬能ではないと思つたのです。矢張人間が人間を

の生活も吾々の生活も君達の生活も皆同じだ。少しも違ひやしない。世間では、これがわからないから、そこに達するまでの經驗と深い痛感とをしないから、さうした離れた又は欲した心になることが出來ない。君は知つてるだらうが、クリストが、「求めよ、さらば與へられん。叩けよ、さらば開かれん。」と言つた言葉があるがね、あの言葉はかなり有名な言葉だ。また眞理だ。苦しんだものでなければ言はれぬ言葉だ。ところが、佛教の原理はそれと正反對で、「求むるものは必ず失ひ、欲せざるものは必ず得」だ。何うだ、文句としても、思想としても正反對だらう。ところが君、深く考へると、これは同じなのだ。同じことを言つてるるのだ。』

Tは急に、

『何ッて仰有いました。佛教の原理と言ふのは？』

『原理と言つては語弊があるかも知れないけれど、要するに、さういふ風なんだ。「求むるものは必ず失ひ、欲せざるものは必ず得」といふんだ。』

『求むるものは必ず失ひ、欲せざるものは必ず得……ですな。わかりました。』

Tは口の中でもう一度繰返して言つて、『面白いですな。本當ですな。』Tは苦學生の苦しい經驗をまざまざと頭に浮べた。

Bはつゞけて、『だから、一心！　は肝心だ。僧侶の行をやると言ふことは、皆なそれなんだ。その一

で働くやうなことをするんだ。……いやいやながらすることは駄目だよ。成るたけ此方から進んでやるやうな仕事をするんだね。それやね、まだ年が若いんだから、さう一概には言へないけれど、成るべく他人に使はれないやうな爲事を選ぶんだね。何うも人に雇はれたり何かすると、了簡のきまらない若いものは兎角卑屈になつて困る。』

『本當ですな。』

かう思つたTは、此間中やつた苦學生の辛い經驗を頭に浮べた。

Bはそれからそれへと快活に話した。年齢の相違とか、地位の相違とかは丸でないやうに。……で、Tの故鄕に行つた時の話や、名高い名所の話や、Tの好んで讀んでゐる本の作者の話や、人生の悲慘な話などが續いて出た。Bは巻煙草を吸つては棄て棄てゝは吸つた。紫の煙がすうと長く明放した庭の方へ靡いて行つた。

それとなく聞いてゐたが、Tは段々Bの話に心を惹かれて行つた。Bの言葉の中には、思ひもかけず法華經の中の言葉が雜つた。一心といふことが話題になつた時には、Bは殊に力を籠めて話した。『一心！そこまで人間が達すれば、もう世間なんか何うでも好いんだ。全人格と言ふことは一心をあげて活動してゐることを言ふのだ。さうなれば、もう完全な自己で、世間の名譽とか貧富とか乃至は社會主義的階級とか言ふものは皆な無くなつて了ふんだ。皆なすべて平等だ。賤しきも貴きもありやしない。王侯貴人

あらはした。

一二時間前に草藪の中で悲觀したとは丸で違つた氣分にTはなつてゐた。縋るとか、救けを乞ふとか以外に、かうした隔てのない快活の言葉を聞くのをかれは嬉しく力強く思つた。元氣な張詰めたBの體や顏もかれにある力を與へた。

『いつ來たんだえ？』

『もう此間來たんですけれども、半月以上になるのですけれども、いろいろ生活の方の都合がありまして。』かう言つて、Tはそれとなく國を脫走して來たことなどを匂はせて、『知つてゐる國のものもゐるんですけれども、成るたけ世話になりたくないと思ひまして……』

『それは、さうだ。人の世話になつちや、一生頭が上がらないからな。何でも自分でやることが一番好い。自分さへしつかりしてゐれや、世の中は何でもありやしないよ。世の中の方がくつ附いて來るよ。』

かう言つてBはのんきさうに卷煙草をふかした。

『もう、職業は見つけたのかえ？』

『まだ本當には見つかりませんけれど……何うかかうか自分で見附けてやつて行くつもりです。』

『それが好いな。』

また卷煙草を性急に吸つて、『君位の中は働くに限るよ。それも能動的に働くんだね。君自身から進ん

たことである。それに、あの時はあゝは言つても、果して逢つて呉れるか何うかそれも疑問であつた。で、Tは全くそれを問題外に置いた。

そのBがこの近所に住んでゐると言ふことは、不思議に感じられた。無論、今もそれに縋る氣はTには微塵もなかつた。またさうして苦しんでゐる自分をあらはに話さうとも思つてゐなかつた。しかし逢つて見たかつた。自分の汚ない扮裝、すり減らした駒下駄、櫛の歯も入れない頭髮、それも氣になるけれども、兎に角訪ねて見たい心が強く起つた。

かれは番地を順ぐりにくつて見た。大きな門や垣が續いた。メリンスの被布を着た可愛い五つ六つの女の兒が遊んでゐたりした。深い植込の中から靜かに琴の音などが洩れた。

段々繰つて行つた番地は、路から路へ曲つて、漸くその數に近いところにTは來てゐた。その同じ番地には、他にも二三軒家があつたけれども、TはすぐBの邸を見出すことが出來た。

邸の構もかなり大きく、いくらか壓されるやうな氣がしたが、縋るとか、救けを乞ふとかいふ欲する念がないので、Tは割合に心安く玄關に案内を乞ふことが出來た。赤い顔をした肥つた婢が出て來たが、一度引込んでそしてすぐ案内した。

通された一間は、八疊の瀟洒な一間で、表の庭からも裏の庭からも新緑のすがすがしい色が座敷まで映つて入つて來た。『やァめづらしいな。』かう言つて何の隔意も置かないやうにしてBがやがてその姿を

で最初その人に遇つた。何うも見たやうな人だと思つた。念のため宿帳を調べて見た。しかしそこに書いてあるのは別の名であつた。變だと思つた。しかし、世間には似た人がいくらもある。他人のそら似かも知れない。もつとよく見た上でなければと思つて、Tは曾てそのBの顏の出てゐた雜誌を土藏の中に行つてさがして見た。それは三年も前の雜誌なので、容易に見つからなかつたけれども、遂にかれはそれをさがし出した。そして用事にかこつけて、そのBの室に行つて見た。何うしてもBだ。かれの平生愛讀してゐる本の作者のBだ。かう思ふと胸が躍る。また雜誌を出して比べるやうにして見る。どうしてもBだ。……Bは矢張他の旅客のやうにかれの故鄕の古い港町とそれからその附近にある名高い風景を見に來たのであつた。

で、たうとうTはBに逢つた。Bがその宿帳の匿名を取消した時には、Tは、『だつて、何うしても先生なんですもの、それでもさうでないと仰しやるなら、この雜誌の口繪と合せて見ようと思つて持つて來ました。』かう言つて笑つて、懷にして來た古雜誌を見せたりした。Bは東京に來たら來いなどとTに言つた。扇に歌などを書いて貰つた。

東京に出ようといふ決心をした時にも、または東京に來た時にも、Bを思ひ出さないのではなかつた。しかしTはさうした人に縋りたくないと思つた。飽くまで獨立獨步で行かなければならないと思つた。他人の救助を乞ふといふことは何方から言つても精神を失つたことである。また自ら自己の價値を低うし

どの力を感じた時、大きな心の反響――竟に竟に來なかつた大きな反響が來た。また電車が通つて行つた。

六

草原から身を起したTは、ある暗示を得たやうに思つた。不思議にも大きな力がかれに來た。眞に不思議な心だ。入つて來た時とは丸で違つた心持であつた。かれは林の中を元の路へと出た。

かれは廣い原から、新たに開けたらしい町に行つた。そこにふかした甘藷を並べて賣つてゐる店があつたので、そこで二錢ほどそれを買つて、そして餓ゑた腹を充たしながら歩いた。

不思議にも、今まで思ひ出したことのない、また思ひ出しても行つて見ようとも思はない、また行つたとてとても逢つて呉れようとは思はなかつたBといふ人がこの近所に住んでゐることをTは思ひ出した。

ふと兩側の人家に目を注ぐと、百七十五番地と書いてある。そのBといふ人の住んでゐる番地は百二十五番地である。それは確かに覺えてゐる。と、つゞいてその大きな鬚の深い顔が思ひ出されて來た。そのBといふ人は、かれが田舍にゐた時、または京都の病院にゐた時、常に愛讀してゐた本の作者で、しかも去年の四月頃、その人はふと二三人の伴れと共にかれの養父の旅舍に來て泊つた。Tは長い廊下

『さうだ……もうさうするより他爲方がない。途がない。死ぬより他何うすることも出來ない。日の暮れるまで、此處にゐて、そしてあのレエルに身を横たへる。……此處からあそこの路を行けば、あのレエルまではすぐだ。何の手間ひまも要らない。……轟と電線が唸つて、あの電車がやつて來る。……そして一瞬の後には、自分はこの世にゐないのだ。……この苦惱も、煩悶も、希望も、放浪も、飢餓も、絕望もないのだ。……さうだ、さうするに限る……。

かうTはぢつとして思つた。何等かの心の反響を期待してゐたが、それはつひに何もやつて來なかつた。

野花が靜かに風に動いた。

『さうだ。さうしやう……』

再びかれは口に出して言つた。矢張反響はなかつた。

かれの眼の前には、夜が、暗い夜が來るのが想像された。もうかれは恐ろしい夜だとは思はなかつた。またその暗い夜の闇の中を、路をさぐりさぐりレエルの方へ下りて行くかれが想像された。淚も悲哀も何も彼も盡き果てたかれが想像された。つゞいて空を劈くやうにしてきこえて來る電線の唸りの音を耳にしたかれが想像された。

かれは急に身を起した。そしてかれは手を組んだ。そしてその組んだ手の力がぐつと體に喰ひ入るほ

體の上にチラチラと動いた。涼しい風がサラサラと草藪や野花の上を通つて行つた。

ブス、ブスと射的場に丸の中る音は絶えず聞えた。

『あの丸が自分に中つて呉れたら、それは何んなに好いだらう。自から手を下さずに、また人に手を下して貰はずに、自然にあの丸が來て、プスと自分の腦天に中つたら、それは何んなに好いだらう。それこそこの苦惱を、煩悶を、放浪を、または不幸な身を永久に救つて呉れるものである。』Tはふとかう思つた。

また國を出てから東京にやつて來たさまが一幅の繪卷物のやうになつてかれの頭を通つた。また海近い故郷の古い町や、遊女達の平氣で街頭を歩いてゐる通りや、父の生きてゐた時分住んでゐた小ざつぱりした家などが見えた。『この身が死んでも、可哀相と思ふものは誰もゐない。故郷の養父母は、一人で勝手な眞似をして自業自得だと言ふであらう。友達は其れを聞いて初めは悲しんで呉れても、やがては忘れて行つて了ふだらう。草が自分の墓の上に生えるであらう。』Tはかう思つて見た。否、かう思ふのは今日ばかりではなかつた。これまでにも、さう思つたことは度々あつた。しかしいつも、『だから猶死なれない。さうした犬死は出來ない。』かういふ強い心があつてそれを引戻すやうにしたが、今日はもうその心も反響して來なかつた。かれは身を起した。

ふとかれの前を明るい綺麗な感じのする輕快な電車が大勢客を乘せて通つて行つた。

しかしTの胸に抱いた觀音大士の像も結局は何の役にも立たないので、時には自からそれを弊履のやうに捨てゝ、また再び元の不安な悲しいかれに歸ることが往々にしてあつた。さうした時には、Tは物質の重荷の上に更に精神の重荷を負つて、殆ど倒れるやうにして、夜の暗い塀に凭れかゝつたりした。時には、かれはあの男の群達のやつてゐる竊盜に均しき行爲をも尤もだと思ひ、更に深くMの言つた社會主義的思想のかれの心と共鳴して來るのを感じた。一日かれは焦々した心持で、賑かな街道を歩いた。

ある日は、郊外の黄く熟した麥畑に添つた野を歩いた。かれはもうすつかり絶望してゐた。何うすることも出來ない身の上だと思つた。それに、野にでも行つて、青い晴々した空でも見たなら、少しは氣がまぎれるであらうと思つてやつて來た空も、野も、新緑も、少しの慰藉をもTには與へずに、却つて勞れた心と體とを壓迫した。

かれは凄じい銃聲と一緒にプスプスと丸の中る音のする大きな射的場を後にした林の中に丁度來かゝつてゐたが、そのまゝ疲れたやうにその中に入つて、路を通る人達の眼から見えないあたりまで行つて、そこにどつかと腰を下したが、やがてこらへじやうがなく、仰向にばつたり倒れた。

兩手はかれの後頭部を抑へた。

周圍には、新綠の影が日に搖曳して、處々に濃淡の縞を織り、その一部の影は、仰向いたかれの顏や

『神佛の靈驗などと言ふが、本當に、この眼病が治るだらうか。』
かうした疑惑がすぐ起つて來た。そして馬鹿な眞似をしてゐるとふ風に客觀した。若さの身で、また
は文化の今の世に生れて、科學の權威も少しは知つて居りながら、かうした迷信者と一緒に徒らに時を
費してゐるのは愚の至りだと思つた。かう思つてはいけないのだと信じて居りながら、時にはさう思は
ない譯に行かなかつた。Tはやがて京都から故鄕に歸つた。そしてまた元の不安な動搖の多い青年とな
つた。
しかしながら、そこで、一心に手を神佛に合せた經驗は、Tに取つては忘れられないものであつた。
Tはあの喧嘩のあつた翌日、早速その男達の群を脫して、自轉車はそこの手で質屋に入れたまゝで、再
び廣い大都會の放浪者の一人となつたが、かれは不思議にもその深く佛に向つて合せた手が、またはそ
の心が、その心の狀態が、その眼前に蘇つて來るやうな氣がした。
Tは街頭を歩きながら、絕えずそのY觀音大士を頭に浮べた。
Tは町から町を歩いた。また賑やかな四辻から四辻へと立つた。何處をさがして歩いても、かれは三
日も四日もかれに相當したやうな職を發見することが出來なかつた。金はまだ少しは持つてゐるけれど
も、それをつかひ果して了つてはと思ふので、つとめてそれに觸れないやうにして、飮食も一日二食で
すませた。ある夜は公園のロハ臺の上に寢た。夏の夜の露はしたゝかにかれの頭髮を濡した。

精神が、魂が觀音大士の像に向つて一つになつて行くやうな氣がした。

さうして、三四日のお籠りをしてゐる中には、心には不安がなくなり、動搖がなくなり、胸は淸く拭はれ、手は自づから合はされ、額は自づからぬかづかれて、自分の病氣に對する苦惱は薄く薄くなつて行つた。Tは大勢の信者達と裏の山際に滾々として湧き出してゐる冷めたい手も切れるやうな淸泉に行つては、日に何遍となくそれで眼を洗つた。

Tは病院の病室にゐた時の不斷の懊惱煩悶と、寺にゐた時の動搖のない佛を信じた安らかな心持とを比べて考へた。同じT自身である。また同じT自身の心である。それでゐながら、境によりまたは心の持ちやうに由つては、さうも變つて行くのである。Tは續いて三七日の參籠のさまを頭に繰返した。

一心になりさへすればそれで好いのである。その他に神を祈るも、佛を祈るもないのである。それはTにもよくわかつた。自分の經驗ばかりではない、他人を見てもよくわかつた。參籠して神佛に祈つてゐる人達も決して一心を籠めた人ばかりではなかつた。面白半分ではないまでも、神佛を信ずる心の厚薄があつた。また淺さ深さがあつた。更に自分のその時の心持を考へて見ても、始終張詰めてゐる譯でもなかつた。一心になつてゐる時は、不治の病ももう何もなく、唯T自身の眞劍な心があるばかりであつたけれども、少しそれが何うかして、その眞劍な心が衰へると、不安の影や動搖の陰翳がすぐ萌して來た。

そこに上さんがその氣勢を聞いて慌てゝ留めに來た。

Tは頭の眩惑するのを覺えた。暗い心持が起つて來た。かうして魂を失つてゐる人達の群の中には、もう一日もゐられないやうな恐怖がTを襲つた。

五

Tは父親が佛教信者で、遠緣のものには僧になつてゐるものなどもあるので、幼い頃から佛に手を合せるやうな質であつた。かれは多くの青年のやうに佛像や寺堂や僧侶に就いて無關心ではゐられなかつた。何か其處に不可思議な神祕なものが隱されてゐるのを感じた。そしてその心持は、自分の眼病の殆ど不治であることを宣告されてから一層强くなつた。不治を宣告されたが、その宣告したものは神ではない。絕對ではない。神佛に縋れば、潰れた眼すら明いたためしはいくらもある。かう思つたTは京都の郊外二里のところにあるY觀音堂にお籠りをした。

Tはその時分の張り詰めた敬虔な心持を思ひ浮べた。實際、眞劍であつた。一意唯神佛の加護に由つて不治の眼病の平癒せんことを祈つた。朝早く、本堂の廣い板敷に坐つて、大勢の人達と手を合せて、讀經祈願した時は、それより他に何の求むるところもなかつた。世間の何物も思つてゐなかつた。艱難な生活も思はなかつた。養父母達の冷めたい家庭も思はなかつた。額の上に合せた手には力が入つて、

喧しい亂雜な唄やら議論やらが嵐のやうにきこえた。Mは社會主義者らしく、頻りに金持を攻撃し、無政府を高唱し、屹度一度はさういふ吾々の黃金時代が來るに相違ないなどと言つた。Pはそのじわじわの群には交はらなかつたが、しらふで頻りに何か言つてゐたが、これはまた肉慾より他に何もないといふやうな赤く心の爛れた論者らしく、『そんな野暮なことを言ふもんぢやない。一體、社會主義などと言ふ奴は、世間も女も知らない輩だから、そんなことを言ふのだ。もう少し女でも買へや、儲けた錢があるなら。』とMを罵つた、Mもまけてはゐなかつた。『何だ、貴樣なんか、女のけつばかり追廻してゐる靑瓢簞だ。理想なんかわかるもんか。』かう言つて、醉つたまぎれにほつかりPの頭を見舞つた。

『こいつ、手を擧げたな。』

『擧げたがわるいか。貴樣のやうな魂のない奴が日本にゐるから、社會が腐敗するんだ！』

また打たうとした。

『生意氣を言ふな。搔さらひめ！』

『搔さらひとは何だ。貴樣こそ搔さらひの女のいもじだ。』

互に腕を振り上げて、めちやめちやに打ち合つた。AもSも最初は『まアまア。』などと言つて留めてゐたが、後には二人のするまゝに任せた。MとPとは互にとつくみ合つて爭つた。Pの投つたものがAに當つたと言ふので、今度はAがPに喰つてかゝつた。

ではないか。かう思ふと、京都でYの觀音へお籠りをした時のことなどが思ひ出されて來た。……暗い暗い心持になつた。『僕のやうなものは死んで了ふ方が好い。』かう痛感した。

そこに電氣がぱつと室を明るくした。

隣の間では、酒と肉が既に來たらしく、七輪に火を起したり、あの汚い餉臺を持ち出したりする氣勢がした。それを聞きながらTは疲れてうとうとした。ふと目がさめた時には、隣ではもう皆な醉つて、デカンシヨを唄つたり、詩吟をしたりしてゐた。牛鍋は既に殘りなくあらされて、ジワジワと葱の焦げる匂ひと、炭の燃え立つ火氣と、酒のいやに甘くさい匂ひとが一つになつて、不愉快な空氣をあたりに漂はせてゐた。

『愉快だ、愉快だ……かうした愉快でもなけれや生きてゐられない。』

かうAが言つた。

『また、一儲けやるかな……何ァに、構ふもんか、金持が貧乏人に拂ふ税だ。さういふこともなくつちや、ひよこひよこ頭なんか下げてゐられるもんか。』

これはSであつた。Tは耳を欹だたせて聞いた。Tはある深い暗示と刺戟とを總身に感じた。かれは大都會の暗黑の底の底に落ちたやうな氣がした。

Tは溜息をついた。

『それはさうさ、當り前さ。』

『それぢや、錢を出せ。じわじわ五人の頭割で、一人前二十錢、酒は一本で好いか、二本か。』

『一升ぢや足らないや、一升五合買つて來いや。』

『Sが飮みやがるからな。』

『それは公平に出來てるアな。弱者は强者が扶けるやうに、弱者もまた何處かで强者を扶けるアな。Aの分を僕が飮めや丁度好いや。』

『こいつ奴、ずるい奴だ。多く飮む奴には多く出させろ。』

かうAの言ふ聲がした。

で、てんでに蟇口から金を出す氣勢がした。中には長い財布の紐を首からかけてゐて、懐から大きな財布を出すものもあつた。銅貨や銀貨のヂャラヂャラする音がTの寢てゐる方まできこえて來た。

昔からTには夕暮が佗しかつた。あたりが眞暗になると共に、頭が冴えて、神經が刺すやうに尖つて來るのをいつもTは感じた。それは國にゐる時からさうであつたが、東京に來てから、艱難のために一層それがひどくなつてゐるのを感じた。佗しい佗しい世界の果てにでも來たやうな氣がした。涙ももう出なかつた。

ふとTは思つた。この佗しさの中には、誰かゞゐるのではないか。誰かの怨恨が生きて動いてゐるの

『此間、持つてるたぢやないか。』
『じわじわなんかに使ふ金ぢやないんだ……』
『あいつにやる金かえ？』
『きまつてゐらあな。』
『それぢや、金のある奴だけでやらう。』かう發議したAは言つて、『おい、貴樣は贊成だな、』とMに言つた。
『錢がないが、贊成する。』
『貴樣は？』
Sに向つて訊くと、
『贊成。』
『奥に寢てる人は何うだえ？』
次の間に勞れて臥してゐるTに言ふともなく、またTをつれて來たMに言ふともなくAは言つた。
『駄目だよ、奥は。まだ馴れないから爲事が捗けないんだ。』
かう代つてMが言つてやつてゐるのをTは耳にした。
『一本づゝつけるか。』

れ違つて行つた。ふとTは傍を見た。そこには新緑の深く茂つた靜かな小さな祠があつた。かれは體がもう支へるのに堪へられないやうにして、急いでその祠の中に入つて、樹の蔭の下にあるロハ臺に身を倒した。

新綠を上に、大空を上に、大きな淚眼を見開いて、仰向に長い間Tは寢てゐた。

そこには誰もやつて來なかつた。をりをりTの歔欷げる音が、靜かな曇つた境内の空氣の中に聞えた。

四

夕方になると、その群の人達は一人々々歸つて來た。

Pだの、Aだの、Sだのといふ名であつた。かれを此處に伴れて來た大きな男はMと呼ばれてゐたが、今日は土曜日の上に賣上げの結果の好かつた人達も二人や三人はあつて、

『何うだ、今日はじわじわでもやらうぢやないか。』かう誰かが言ふと、

『そんな景氣ぢやねえ。』

かう室の隅にころがつてゐたPが言つた。

『そんなことを言はないで贊成しろよ。』

『したくもそんな錢はねえ。』

會主義などの起るのも尤だと思つた。しかしそんなことを思つても、何うにもならなかつた。矢張同じ群の人達のやるやうに、何でも彼でも下手に出て買つて貰はなければ爲方がなかつた。それが悲しかつた。

Tはある日は泣きながら山の手の垣根に添つた路を歩いた。もう何うしても、一軒一軒入つて行つて見る氣にはならなかつた。またさうした人間としての取扱でない取扱を受けるのかと思ふと、恐ろしいやうな氣がして神經が昂つて來た。周圍にゐる人間達は、自分とは全く異つた種類のものゝやうに、敵のやうに、また惡魔のやうに、または自分一人がぽつつりとこの大勢の異人種の中にかうした慘めに生きてゐるやうな氣がした。その打擊はTには大きかつた。拭つても拭つても涙が出て來た。

何の彼のと言つても、國にゐる時分はまだ好かつた。『しかし、しかし……』とTは下唇を咬みながら歩いた。しかし國から出て來たのは決してわるいのではない。わるい發意ではない、それは好い。決して後悔して、再びとあの養父母の冷めたい家庭に歸つて行かうとは思はない。思はないほどそれほど冷めたい家庭に自分はゐたのである。それほど慘めな家庭に自分は若い青年の時代をすごしたのである。不幸な自分の運命がまたしても犇々と押し寄せて來た。

それは曇つたイヤに蒸し暑い日であつた。行違ふ人達――お婆さん、行商の男、庇髪の細君、子供を伴れた年增の女、さういふ人達が皆な不思議さうにして、かれの眼の緣を赤くしてゐるのを見い見いす

聲高く言はれたりした。Tは到る處でくわつと腹を立てた。『腹を立てたり何かしちやこの商賣は駄目だよ。何でも下手に出てそしてづうづうしくやらなくちやいけない。』男からさう言はれるけれども、Tは腹を立てずには居られなかつた。

Tは乞食かまたは泥棒にでも成り下つたやうな氣がした。大抵の家では手を振つて斷られた。少しづうづうしくやると『要らんといふのにわからんか。』押賣をすると、警察に渡すぞ。』などと奥から男の聲に呶鳴られた。たまさかに此方の言ふことを聞いて呉れたと思ふと、庇髪に結つた細君が、『今日は折角ですから買ひますがね。今度はお斷りですよ。』などと言つた。

それで、一日いくらの商賣があるかと言へば、賣上額が三十錢にならないことが多かつた。しかも、その下宿の男の群達は何處かにかうした商賣をするにつけての腕を持つてゐるらしく、一圓以上多いのは二圓足らずの賣上げを持つて歸つて來ないものはなかつた。かれ等は一錢の元を五錢位に賣つた。

Tは自分の力も自分の魂も何も彼もすつかり蹂躪されたやうに思つた。またかうしたことを甘んじてやつてゐる自分は——魂をも生活のたつきにしてゐる自分は、自分ながらあきれ果てた奴だと思つた。つゞいて世間の人達に對する反抗が熾に起つた。綺麗な着物を着てかれ等は歩いてゐる。大きな邸宅を構へてかれ等は住んでゐる。旨い物を食つて肥えてゐる。行くに車があり自働車がある。そしてかうした商賣して歩いてゐるあはれなものを乞食か泥棒のやうに言つて追ひ返すのを何とも思つてゐない。社

にも思はれなかつた。それでも、上さんは、Tが自轉車を持つてゐるので、それに信用を置いたらしく、『好いともな、お前さん方が一緒なら。』かう言つて承知した。

かれはライオン齒磨だの、筆だの、鉛筆だのの室の隅に澤山に積んであるのを見た。かれ等の群は何か一言二言言つて、金の勘定などをした。何かしてゐる連中に相違なかつた。しかしかれは非常に疲れてゐた。日が暮れると、飯を食はせて貰つて、蒲團を借りてぐつすりと寢込んで了つた。

三

一日二日經つた後には、Tはその男の群のやつてゐる爲事を自分もやつて見ることにして、鉛筆やはみがきや筆などを持つて出かけた。品物の代りに、かれは自轉車を抵當にした。山の手の垣を取り廻した大きな邸、花崗石の立派な門、赤いモスリンの蒲團の干してある二階屋、琴の音の洩れてきこえる瀟洒な家、または坂のだらだら下りになつてゐるところにある冠木門の家、さういふ家にTの見すぼらしい慘めな姿は入つて行つた。

Tは今日で三日ほどその苦學生の行商をやつた。つくづくTは自分の身の情けなさを感じた。何處に行つても、相手になつて呉れるものはなかつた。玄關の硝子障子を細目にあけて、『家ぢや要りませんよ、』と下女に突ッ慳貪に言はれたり『本當に困るよ。無用心で爲方でありやしない。』とわざと聞えるやうに

つた。

『もし、もし。』

かう追懸けるやうにしてTは呼んだ。

漸く氣が附いたやうにして、その男は振返つた。『僕ですか。』

『此處等に下宿屋はないでせうか。』

『あるでせう、いくらも……』

『田舍から、今日來たばかりで、丸つきり東京を知らないで、困るんですがね。』

男はじろじろとTの顏やら自轉車に結へつけた小さな行李やらを見たが、少し考へて、『僕も下宿屋にゐるんだ。僕んところへ來給へ。一晩位何うにでもなるよ。』かうぶつ切ら棒に言つた。

Tは救はれたやうな氣がした。かれは幾重にも感謝した。心から感謝した。で、二人は並んで歩いた。男から訊かれるにつれて、Tは昨日からの旅の話をした。今日東京中自轉車で乘り廻した話をした。男は、『誰も知つてゐるものはないのか。それは困つたらう。』かう度々同情するやうに言つた。

男について行つたTは、露地の中にあるやうな汚ない家と、破れて黑くなつた障子と、中年の上さんと、男と同じやうな靑年が二三人一間にごろごろしてゐるのを認めた。恐ろしいやうな氣がした。自分の財布には金がないから好いやうなもの〻、もし多い金でも持つてゐたら、とても安心してゐられさう

二

日の暮れる時分、Tは白山の坂を自轉車を押しながら、困憊したやうな顔の表情をして歩いてゐた。Tは終日東京の重なるところを自轉車で乘り廻した。京橋、日本橋、神田、本郷、すべて乘迴した。自分の生活のたつきになりさうな家、例へば職業案内とか雇人受宿とか、さういふ處を何軒も何軒も聞いて歩いた。しかし保證人がなくては、何處でもどうにもならなかつた。Tは午飯をある蕎麥屋で腰かけてすました。そこの上さんにさうした生活の口の話や自分の冒險の話をした時には、上さんは呆氣に取られたやうな顏をしてTを見た。無論取り合つては吳れなかつた。

Tは非常に勞れてゐた。精神的にも、肉體的にも。……眼病以來、かれには夜の來るのが恐ろしかつた。兎に角、どうかして安眠するところを得なければならないと思つた。今日も二度も三度も涙はかれの頰を傳つて流れた。

ふとTはその前に、丈の高い木綿の紋附の舊いのを着た頭髪のもぢやもぢやした大きな男ののそのそと歩いて行くのを眼にした。

『もし、もし。』かうTは呼びかけた。

大きな男は自分が呼ばれたとは氣が附かないと見えて、知らん顔をして、同じ態度で平氣で歩いて行

晩の混雜した汽車の中を振返つて見るやうにした。急行車でなくつても好いと思つたけれども、生中京都あたりで待つて時間を取ると、旅舍に泊らないまでにも、物を食つたり何かして金が費る。急行劵を買ふ方が却つて得だ。かう思つてTはそれからずつと辨當を一つ買つたばかりで長い旅をして來たことを思つた。「何と思つたつて、もう來ちやつたんだ。實行したのだ。先に進むより他に爲方がない。」かう思つてゐる間にも、急行車は早く早く駛つて、やがて再び海が見え、張り上る大都會の煤煙が見え、電車の輕く滑るやうに賑やかな街頭を通つてゐるのが見え、大きなガスタンクが見え、ゴタゴタした人家が見え、遂に汽車は大都會の轟音の漲りわたる眞中の大きな停車場へと着いた。

Tは大勢な人達と一緒に、小さな柳行李をかついで、石造の大きな階段を出口から待合室の方へと來た。

あたりの賑かな足音が廣い天井に反響して、それがTに一種恐怖に近いある感じを與へた。Tは行李を待合室に置いて來て、それから自轉車を受取りに係りの方へと行つた。

自轉車は安らかに、かれのやうな苦しい思ひもせずに、A驛からこの東京の手荷物係のところにちやんと來てゐた。それを受取つた時にはTはなつかしいやうな力強いやうな氣がした。Tはそれを押して荷物を置いてある待合室に行つて、それを太い柱に立てかけて置いて、これから執るべき最初の第一歩に就いてかなり長い間考へに沈んだ。

今度東京行を思立つた一つの原因ではあるけれども、しかし急にでもわるくなつたら、他人ばかりの東京で、自分は何うなつて了ふのであらう。かう思ふと、Tは折角思立つて其處までやつて來た勇氣がすつかり挫折して了ふのを覺えた。京都の病室で醫師に宣告された時の悲觀が、自分の不幸の身の上と一緒になつて、魂が地の底深く沈んで行くやうなのを感じた。

Tが何方にも心が極らずに、躊躇して停車場前でぐづぐづしてゐると、其處に改札がやつて來て、

『お前さん、上りに乘るんぢやないのかな。乘るなら乘るで、早うせんといかん。もう汽車は來るぜ。』

かう言つて、Tの前を通りすぎた。

Tは遂に決心した。『さうだ自轉車も持つて行かう。これは養父のものだけれど、あとで返せば好い。自轉車を持つてゐれば、萬事につけて便利だ。心丈夫だ……』かう思つて、Tは急いで東京までの通し切符を買つて、自轉車を手荷物の係りのところへ持つて行つて預けた。

『東京行ぢやな。』

かう言つて、係りの男はその自轉車を受取つた。

その自轉車は、A驛で、白い紙片をつけられて、かれが汽車に乘込む前方を他の旅客の手荷物と一緒に運送車に載せられて行つたが、京都で乘替へる時には、そこらを見廻して見ても、何處にもそれは見えなかつた。しかしあの自轉車もTと一緒にこの東京へはるばるやつて來たに相違なかつた。Tは一日一

もいくらかしてゐるので、荷物の取扱にもTは扱き使はれた。小柄な非力なかれの體に似合はないやうな勞働にも服させられた。Tはいつも粗くごそごそした手を、または力業に發達した手を、友達の群の中で自から撫でゝ見たりした。

それに、Tは十五六歳から、眼がわるかつた。晝間は別に差支はないが、又夜でも電氣かランプの下ならば、何うやら彼うやら本位讀むことは出來たが、何うも夕方から闇にかけて物がはつきり見えなかつた。初めは鳥目と言ふものだらうなどゝ言つて、八つ目鰻などを用ひて見たり、田舍の醫師にかゝつて見たりした。しかし何うしても癒らなかつた。さうかと言つて、またそれがたぎつてわるくなるのでもなかつた。それに、田舍の醫師達は、はつきりその病因と病性とを知ることが出來なかつた。Tは二十二の時、矢張、自分で貯蓄した金で、京都の大學病院に行つて診察して貰つた。そこでは、腦から來た眼病で、不治ではないが、非常に難病であると言はれた。Tは絶望して眼病に靈驗のあるYの觀音へお詣をして、その平癒を祈つたこともあつた。

苦勞はこれまで澤山にやつて來た。あらゆる勞働にも服した。二十四の青年として世の中のことも知りすぎるほど知つてゐる。だから、東京に行つても、苦勞はいかやうにもする。勞働も何んな勞働にも服する。しかしその念が一度眼病のことに及ぶと、Tは心細くなつて來ずには居られなかつた。京都でも治らなかつたが、東京は名醫の多いところだ。其處に行けば、治るかも知れない。かう思つたのも、

普通なら海を連絡船で渡つて、對岸にある停車場から汽車に乘るべきであるが、自轉車の上手なTはわざと陸路を取つて、大廻りをして、追蹤の危險のある路をよけて、五六時間もかゝつて、故鄕から十二三里、それ以上もあるA驛に來て、そしてその停車場の待合室でほつと呼吸をついた。しかしそこではTは躊躇した。思ひ立つて夢中のやうにして其處まではやつて來たが、廣い東京、不知案內の東京、極樂のやうな且つ墓場のやうな東京、そこにこの弱い體で、金の準備も不十分で出かけて行くことは恐ろしいやうな氣がして、Tは待合室の榻の上で、自轉車をわきに置きながら、汽車の時刻の近づいて來るまで思ひ煩つた。一度はあとへ引返さうかと思つて、自轉車を押して待合室を外に出て見た。しかし、何うしても養父母の冷めたい家庭の空氣の中に歸つて行く氣にはなれなかつた。母は赤兒の時別れた。父はまた母親の夭死もそれに連關してゐると言はれてゐるけれども、それでも、國に歸つて來た時には、相は神戶のフランス語のガイドで、道樂もし、女にも關係し、隨分遊蕩の生活を送つたさうであつたが、應の財產は持つてゐた。現にその弟である養父が、今の旅籠屋をあれだけに大きくしたのも、父がその財產の大部分をそれに注ぎ込んだからである。で、父の生きてゐる中は、叔父もやさしい叔父だつた。父の死ぬ時には、養子として無論Tを粗末にしないから安心して下さいと言つた。しかしさうしたことはすべて氷のやうに溶けて流れた。間もなく、今の養母が先の養母の死んだあとに來た。それからは、Tはもう養子でなくなつて忙しい旅籠屋の小番頭として働かなければならなかつた。それに、運漕の方

けば、國の人はゐる。その人達の二三の宿所も萬一の時と思つて、手帳に書きつけて來た。しかし兎に角自分は叔父であり且つ養父である故鄕の家から默つて脫走して來た身である。滅多に寄り附くことが出來ない。またある成功を見るまでは寄り附くまいと思つてゐる。さうかと言つて、かれは養父の家からは、金一文持ち出した譯ではない。自分が持つて出た金は、旅籠屋の養子ではありながら番頭のやうにして働いて、客から貰つたのを長い間ちびちび心がけて貯へて置いたものである。俯仰天地に恥ぢるやうなことはひとつもしない。かう思ふと、Tは昨日の今頃旣に出京の心構へをして、あの旅客の泊つてゐる長い廊下を土藏の方へこつそり入つて行く自分の姿を歷々と眼の前に見た。土藏の中で、かれは一昨日から小さな柳行李にさし當り必要なものだけを選んでつめた。持つて行きたい本などが非常に多かつたけれど、またあとで養父母が送つて吳れるやうな深切はないと思つたから、殊に持つて來たかつたけれど、餘り荷が大きくなつては目に立つと思つて思ひ留つた。養母が、『Tや何してゐるんだえ。土藏にばかり入つてゐるね。』かう言つて此方にやつて來さうにした時にはTはぎよつとした。しかし幸ひなことには、かれは其朝自轉車であるところに客引に行くことを命ぜられてゐる。Tは小さな行李をソッと店の外のところに持ち出して置いて、そして家の人達には、少しも感附かれずに、その古い空氣の漲つた、思出の多い、父母の墓のある、友達の二三人ゐるなつかしい町を自轉車を飛ばして勇ましくあとに殘して來た。

遺傳の眼病

一

烟草の烟と多い乘客とで夥しく不愉快な長い長い汽車の三等室でTは昏睡から眼覺めた。もう朗らかな朝になつてゐる。汽船が無數に烟突から煤煙を漲らして碧い海に碇泊してゐるさまが、線路に沿つた低い家屋の上に蜃氣樓のやうにちよつと見えてそしてすぐ消えた。『もう東京だらうな。』かう思つてゐると、通過驛の『ひがしかながは』といふ白い板に書いた字が逸早くかれの眼を掠めて過ぎた。『あ、あれが、あの汽船が横濱だ。愈々東京だ。』

Tは一種の胸騷ぎを覺えた。來たには來たが、長い間あくがれてゐた東京に來は來たが、知己とてもなく、丸で不案内な土地で、自分は何うする積りだらう。かう思つたがTは決して後悔はしなかつた。懐にはもう七八圓内外の金しかない。普通の旅客のやうに旅舍に泊れば、一日二日でその金はなくなつて了ふ。何うにかしなければならない。何んなことでもしなければならない。それは此方から訪ねて行

熱されたやうな大きな光芒のない日輪が、次第に下へ下へと沈みつゝあるのであつた。毒々しい赤い花、インチアンーエロオの民家の壁、錆色した屋根、凡て私に堪へ難い旅情を誘つた。私は涙ぐましい心持でぢつと一刻毎に落ちて行くその大きな夕日を眺めた。

『何をぼんやりしてるんだい。』振向くとそこにYとTとが來てゐた。

たものが到るところにごた〳〵と巴渦を卷いてゐるのを私は見た。

小屋のすぐ後に小路を挾んだ二つの廣場、その一つの右の廣場には茶色の天幕が張つてあつて、それを支へるための柱に、あらゆる色を集めたデコレイションが施してあるのが見えた。そしてその下には三箇所ばかりに火が焚かれてあつて、大きな鍋がかゝつてゐるが、その周圍には二三人づゝの土人が暑いとも思はずに火と鍋とを代る代る搔き廻してゐる。そして鉋屑で拵へたラッパを鳴らしてゐるやうな單調な得體のわからない音樂の響が、その後の黃ろい壁の四角の家から起つて來てゐた。それには太鼓や鉦に似た音も雜つてゐた。『は〻ァ、さつきから變な音がしてゐると思つたが、何か土人の部落に祝ひごとでもあるんだな、結婚の披露會か何かでもあるんだな。』かう氣が付くと、そのあたりの混雜した光景も成程と點頭かれて、一種不思議な心持が私の胸に漲つて來た。

やがてもう一つの左の方にある廣場に目を移した私は、そこでも土人が四五人で同じやうな式場らしいものを精々と拵へてゐるのが映つた。丸太や竹竿や繩やが他の土人の手で運ばれて來たと思ふと、前の四五人の中の二人は、苦もなげにするすると椰子の樹に上つて行つて、下から出す竹竿を木へとわたしかけた。それをまた下では泥で拵へた人形のやうな土人の子供が、わいわい言つて騷いでそれを見てゐた。中には惡戲をして叱られて逃げまどつてゐるものなどもあつた。

かうした不思議な混雜を前景にして、その向うには二三町とも隔つてゐない一面の椰子の林に、鋼が灼

立寄つて覗いて見ると、その女達の眞中には、キヨトキヨトした鸚鵡が一羽置かれてあつて、おてるが手拍子を取つて、『ナチユカロ、ナチユカロ』と囃し立てると、靑い色をしたその鳥は、頸を横に傾けながら、羽を擴げてぐるぐると二三度廻つた。土人の踊りの眞似をするのであつた。女共は聲を立てゝ笑ひ興じた。

私はやがて其處を去つて、今一つの別のバルコニイに通ずるヱランダの方へと歩いて行つた。私の胸には『詩』が漲るやうに押寄せて來た。私は古代ロオマの廢址のやうな支柱を前にし、下までは五六丈もあらうと思はれる土人の町の混雜した不思議なさまを眺めながら、悠々とした永遠に近い心に滿されながら、じつとそこに立盡した。

不思議な繪だ。エキゾチツクな異國の情調だ。下には低い長屋のやうな小屋が幾棟となく並んでゐて、錆色した細い半圓筒體の瓦で葺いてある屋根。壁の代りに色の褪せた笹の葉のやうなもので巧みに編んで圍んである小屋、その前の狹い汚ない路に板の臺を出して寢ころんでゐる土人の幾群、その群の中には、腰をかけて、その膝に大きな土器を載せて、素性の知れぬ食物を黑い手で摘んで食つてゐるものなどもあつた。かと思ふと、そこから一間ばかり離れて、大地にそのまゝ胡座をかいて、頻りに檳榔樹の實をしやぶつてゐるものなども見られた。灰色に汚れたサロンを腰の周圍に卷いた褌のまゝの黑光に光つた土人の婦、檳榔樹の實に染まつた眞赤な齒と舌、それにギヨロギヨロと光る黑い眼、さうし

ベッドに來て、下にある古ぼけた文藝倶樂部や講談本などを引ずり出して、あちこちと拾ひ讀みをしてゐる中に、ついうとうとした私は、

六

『お湯を使ひまつせ……』

といふお春の聲に呼び起された。はつとして時計を見ると、もう四時を過ぎてゐた。日は斜に、空氣は濃かに、大分涼しくなつて來てゐた。私はそのまゝ起きて湯殿に行つた。そこはひろいセメントを敷いたバルコニィの一隅に、眞四角に劃られた湯殿で、生溫い、しかし澄み切つた溢れた湯は、寢覺めの皮膚に和らかな好い感覺を與へた。髪から體からすべて綺麗に洗つて、別にお春が持つて來て置いて行つた糊のこはごはについた浴衣に着更へると、私は別な人になつたかのやうに、何とも言はれない爽かさを覺えた。で、好い心持で湯殿を出て、階段を上つて來ると、室の前の上り段のところに、お春とおまさとおてるとが三人寄つて、蹲踞つて頻りに何か面白がつてゐるのを私は見た。側にはシミズを着た此家の娘と、黑い裸のボウイとが立つて頻りに笑つて見てゐた。

お春は私の方を振向いて、

『あなた、こゝへ來て見んの、鸚鵡が踊つとるですばい。』

『面白いな。』

かう言つて私は傍に寄つて、『よく馴れてゐるね。』

『えゝ。』お春はかう答へて、掌の上に鳥を載せた。青い羽色と、さうした女と熱帶の日影や空氣とが私に一種不思議な、內地などでは想像の出來ない情調を誘つた。かれ等女の群は、他に樂みがないので、皆なかうして一羽づゝ鸚鵡を飼ひならして、二年位かゝつて、『お母さん』とか、『おはやう』とか、『おやすみ』とかいふ言葉を覺えさせて、そしてそれを相手にしてゐるのである。私はロチの旅行記を思ひ出さずにはゐられなかつた。

私は戲れに、

『よくなついてゐるな、それを僕に讓つて吳れないか。』

かう言ふと、お春は眞劍になつて、

『これだけは御免なさい。わたしの可愛い可愛い息子ですもん――離すのは、それは〳〵つらいとですばい。』

そして下を向いて了つた。私はいよ〳〵女が可哀相になつた。私は默つてお春の肩に、腕に馴々しくとまつたり飛んだりする青い鳥を眺めた。

の金を手に入れて、人も眼を瞬るやうな全盛をしたことがあつたが、情人のためににすつかりなくなして了つたといふことであつた。かの女には今年十一になる女の子がゐて、可愛らしく洋服などを着て、女共を『姐さん、姐さん』などと呼んでゐた。

ミストレスは皺の多い手で巻烟草を吸ひながら、カルカツタとラングウンの生活を比較して話してきかせたりしてゐたが、私が船の醫師であるのを知つてゐるので、段々話が其方の方に向いて行つて、此地で日本の醫者が土人に信用を得さへすれば、巨萬の財産を作ることは譯はないなどゝ話し始めた。さうした話を三十分ほどしてかの女は室を出て行つた。

五

廊下で何かごとごとと音がしてゐたが、立つて行つて見ると、お春はそこに吊してある籠から、青い一羽の鸚鵡を出して、それを馴々しく自分の肩に載せなどして、餘念なく豆をやつてゐるのを私は目にした。

鸚鵡は女の手から餌を啄みながら頻りに首を傾げたりあたりを見廻したりしてゐた。

『アリガトーアリガトー。』

不思議な聲を出して鸚鵡は言つた。

『それぢや、お前もう餘程お婆さんだな。』

『十三の時生んだで、まだそんなにお婆さんでないとですよ。』

『十三？　えらく早いな。好い加減なことを言つてるんだらう。』

『そら、見せて上げまつせ……』おてるは眞劍に、自分の部屋から男の子の寫眞を持つて來て見せたりなどした。石炭積、荷物積になつて來たとは言へ、かれ等にも皆それぞれかうした遠いところまで流れて來るについての前生の種々の物語や事情があるのであつた。私は廣い悲しい、またロマンチックな人生を思はずにはゐられなかつた。

こんなことをして、かれ是一時間ばかりも過ぎたであらうか、漸くボオイが歸つて來た。Tの返事に出ると、急に不意の爲事が出來て、忙しいから日中は行けない。晝寢でもして夕方まで待つてゐろといふことであつた。私は輕い失望を感じた。しかし思返して、この女共を相手にしてゐたら、半日位何うかかうか遊んでゐられるだらうと思つた。其處に此處のミストレスが入つて來た。前齒の二本缺けた脊の低い五十ばかりに見える女である。かの女はこの前來た時に、私達の酒の席に出て、皺枯れた聲で唄を唄つたり三味線を彈いたりしたことがあるので、互ひに懇意になつてゐた。この地に渡つて來てもう三十三年にもなる女としては、さう人が惡るさうでもなく、女共にも割合に慕はれてゐるらしかつた。若い時長崎で藝者をしてゐたはなしなどをかの女はした。なんでもこつちに來てから、一時非常に莫大

今度はおまさが言つた。
『あなた方は好いのう?』
『何うしてかい?』
『船ではたんと旨いもん食うて、あがると女を買つて、そして、日本にいゝチンタ(戀人)が待つてるですばい。』
『お前達だつて、チンタさんがいくらもあるだらう。』
『そんな人あつたら、こんな苦勞せんとです。』
『Hがゐるぢやないか。』
『あの人駄目、おかみさんあるから。』かう言つておまさは笑つて、『ほんとばの……おんども好いスイトハアト持つとるのですよ。早く來ませんやらうかの?』
『おんどにも早く來ませんやらうかの?』ノンセンスで愛嬌者のおてるは、おまさの口眞似をして、わざと本當らしく指を折つて數へて見たりしたが、急に、
『おんどに、今年十一になる息子があるとです――。ほんたうですばい。生れるとすぐ來たですもん――。一度嫁に行つたことですけど、そこが厭で厭で、たうとうこんな處まで逃げて來たとです。そやばてん、あなたも娘さん大きうなつたら、厭だといふところへは、やるもんではなかとですばい。』

…。死に瀕した父親も枕を擡げて嬉し涙に溢れるであらう……しかしさうしたことはとても出來ない。

私はコップを置いては、また默つて考へた。

急に足音がしたと思ふと、廊下の方のカァテンが開いて、肉附の好い莞爾としておまさがシミズ（寢卷）を着たまゝで入つて來た。さう綺麗でもない、色の黑い腕が半分以上もあらはに出てゐた。

『あゝよう眠つた。』

不機嫌さうな顏を兩手で摩りながら、どつかりベッドの上に腰を下した。

お春はさつきの密航の話を證據立てるためのやうにして、

『お前も石炭積になつた方だね。』

『私かえ、私は石炭の上より、もつと〳〵辛かつたどすばい。』

おまさは何うしてそんな話を突然に、お春が持ち出したかを怪しみもせずに事もなげにかう言つて平氣で笑つた。

私も餘りのんきな無頓着な女達の問答に思はず笑ひ出した。

『だつてさうだもん。』

おまさはお春とは違つて、いくらか莫連で、『シガレットをお吳れや、』と言つて、私のスリイカッスルを一本取つて、そしてそれに火をつけて、すぱ〳〵吸つた。

れや僕が持つて、歸りに門司で入れてやるから……。一つ書いて出した方が好いぢやないか。』
お春は頭を強く振つて、
『いゝえ、かまはんといて下さい。どつさり親不孝したついでぱつてん、何も便りせんとです。どうせ歸られる體でなかとですもん。』
私は悲しい暗い氣がした。かうした不幸な者と一夜を過したこの身さへ淺ましい人間のやうな氣がして來た。お春も口ではさう強いことを言つてはゐるが、その心の底にはいろいろな追想やら、悲哀やらが力強く押寄せて來てゐるらしく、『一杯くだされ』と言つてその前にあるコップのウヰスキーをグッと呷るやうにして飮んで、
『もう、そんな話よかばつてん。陰氣になるもん。』
『本當だ。もうよさう。さういふ話は。』かう私も思ひ返したやうに言つて、女の出したコップにタンサンと一緒にウヰスキーを注がせて、そしてそれを一氣に飮み干した。
『使が遲いね。』
『もう歸る頃ですがの……』
しかし、私は考へまいとしても、考へずにはゐられなかつた。さうした不仕合せな女もあるのだ。自分に金さへ澤山あるなら、借金を拂つて伴れて國に歸つてやつたら、何んなにその父母は喜ぶだらう…

船の人達と一緒に見物して歩いてゐる途中、はたきを幾つも並べて立てたやうな椰子の林の下に無數に縱橫にころがつてゐる内地人の墓石のことを思ひ出した。今ではさうした女の無緣佛の型ばかりの墓標も百以上になつてゐるのである。

『何うして歸れないんだね？』

『歸りたいと言つたばつて、誰も連れて行つて吳れてがなかとです。――お金も少しもなかとですもん。』

『一生懸命に貯めたら好いぢやないか。』

『たまるもんですか。』

『親達は何うしてゐるの、まだ生きてゐるんだらう？』

『この間、お父さん、病氣だつて言うて來ましたよ。』

『見舞でも出したのかえ？』

『いゝえ。』

私は非常に悲痛な事實にでも觸れたやうにして頭を振つた。

お春は少し考へて、『今頃は死んだかも知れんとです。だいぶきついさうだつてことだから。』

『手紙くらゐ出さなくつちや不孝ぢやないか。親がそんなに大病だといふのに……。此處で出せなけ

て行かれ、警官の目を忍んで、深夜に荷物か何ぞのやうにして船艙に乘せられ、それからは日光を見ず、話も出來ず、暗い天井の低い一室にさうした大勢の女と一緒に押しこめられて、そしてもう泣いても叫んでも何うすることの出來ない異郷へと伴れて來られたのだといふ。船の中では握飯につけ物で十數日餓を凌いで來たといふ。また便所にも行くことは許されないので、石炭の山の上で連日用を足したといふ。そして最初はかの女はシンガポウルで下され、そこに一月ほどゐて、それから此處にやつて來たといふ。

『何うしてあゝいふ氣になつたか、私にもようわからんばつてん……ほんの娘氣でついその旨い口に乘せられたんだすな。』かうお春は昔を思ふやうにして言つた。

『船の中にゐる中は、きつうて、きつうて、こんななら、死んだ方がよかばいと思つたですよ。』

かう言つたお春の眼には、微かに涙が光つてゐるのが見えた。

『それで成功したものはあるかね？』

『あるもんですか。千人の中にも一人もなかばつてん……』

私はいろ〳〵なことを考へずにはゐられなかつた。餘程巧妙に運命を開拓したものゝ他には、かれ等はとても人買の言つたやうな贅澤な榮華は、容易に得られないのであつた。それどころか、七年も、十年も、乃至は一生もかうして、眼色膚色の變つた人種を相手にし、生れもつかない土語を口にし、最後は熱い黄いろな異郷の土に、土人の手で穴を掘られて埋められて行くのであつた。私は一昨日だつたか

『一體、此處に來てからもう何年になるんだえ？』
お春は低頭いて浴衣の裾あたりの皺を伸してゐた。
『え？』
『もう七年。』
『七年？　おまさは？』
『あの人は十年。』
『すると、お前は十八の時に來たんだね。』
お春は默つて點頭いて見せた。
『初めは何うして來たんだえ？』
『矢張騙されて、賣られて來たばつてん……』急にいろ〳〵なことが女にも思出されて來たといふ風に、暫し悲しさうにしてゐたが、やがてそのこゝまで流れて來た話を意味のよくわからない長崎言葉で話し出した。
矢張新聞などに書いてある長崎天草地方の空氣や、外國に出稼に行つたものに對する憧憬や、人買ひの惡辣な手段や、甘言や、さうしたことは皆な事實であつた。それは決して他で思つたやうな怪奇なロォマンスではなかつたのである。かの女も矢張人買ひに騙されて、村の祭禮に行つた夜に、その旅宿に伴れ

四

初めは藥を飮むやうに思つたタンサンを割つたウヰスキーも段々旨くなつて、漸く冗談口の一つもきくことが出來るやうになつて來た。
私は脊中に汗が滲み出して來たので、肌ぬぎになつた。
『暑いな。』
女は絶えず團扇で私の方を煽いで吳れた。
『暑うおすな……』
突然私は言つた。
『何うだい、もう好い加減に歸つたら？』
『何處へどすか。』
『國へさ、本國へさ。國が戀しくはないかね？』
『だつて、いくら歸りたいと言うたかて、歸ることがなけんとです。』
『何故だえ？』
『何故つて……何したかて駄目どすばつてん。』

島影に堪へ難いなつかしい思ひを走らせたこともあつた。ある日は同じ日章旗を掲げた船がすれ違つて通つて行つたが、互ひに船路の安全を祝すための相圖のホイッスルの音は、縮緬のやうに小波の立つた水面に、何んなに言ひ切れないなつかしさと親しさとを互ひの心に込み上げさせたか知れなかつた。しかし、それもほんの束の間であつた。乗組の人達が、互ひに帽子や手巾を振つてゐる間に、船は次第に離れて遠く遠くなつて行つて了つた。

船室には電氣のフアンが備へつけられてあつても、徒らに室内の生溫い空氣を掻き亂すだけで、却つて不愉快なものであつたことや、暑苦しい眠られない夜はよく艫の方の欄干に身を寄せて、來し方の暗い海原を夢のやうに見詰めてゐたことや、かうした海上生活に位置を得るやうになつた自分の運命や、もがけばとて、あせればとて、一度踏み出した以上生命の緒と結び附けた船のエンジンは、きまつたスピイドでプロペラアを廻しながら、一日一日に暑さの加はつて來る海を突進して來たことや、『明日の晩は久し振で生命の洗濯が出來るぞ、』と皆な喜んで、このカルカッタの港に近寄つて來たことや、さうしたことがいろいろと思ひ出されて來た。(『遠くもやつて來たものだなア。』)かう思ひながら、私は前に置いてあるウキスキーのコップに口を當てた。

『それはさうさ。いくらボーイだつて、この暑いのに、唯ぢや厭だらう。ワン、ルツピイもやれば好いぢやないか。』

『だめですよ。あいらは……。やると、癖になるばつてん……』

かう言つてお春は頭を振つて見せた。私は自分の生れた國に居りながら、他國のかうした賤しい女に酷使される土人共を思つて、あはれな氣がした。暑い灼くやうな日光の中を、てく〳〵とその黑奴が海岸に近く歩いて行くさまが私の眼に映つて見えた。と、そこに展開されてゐる明るいカルカツタの港、ごてごてと赤い青い繪具を塗りこくつたやうな感じのする港、その港の岸壁に遠くやつて來た二本マストの自分達の船の大きく晴れた強烈な日の光線の放つた空氣の中にくつきりとあらはれてゐるのが見えた。その船の煙突から薄いぼやけたやうな煙の靡いてゐるのが見えた。

と、それにつゞいて、花の咲き初める頃ののどかな時節に日本を出て、殆ど一月近くは夜となく晝となく鮮かに群青に彩られたり黑味の勝つた紺碧に變色したりする渺茫とした大海を南へ南へと漕ぎわけて來たことが思ひ出された。追手を受けた、船に微風だにない暑苦しい夕は、水平線の雲の峰によく電光が鋭く閃いたり、または逆卷く怒濤が甲板まで溢れ上る時には、荒海の中天に冴え冴えと弦月がかゝつてゐることなどもあつたことが思ひ出された。時には油のやうに重たらしく靜まり返つた水面に、午後の日光を浴びながら銀色した飛魚が幾つも幾つも飛び交はしてゐたこともあれば、遠くに霞んで見える

つて、

『ボーイにさう吩咐けたばつてん。今忙しいかの、道が遠いかの言うて、言ふことをきかんどすよ。あいつはいつも私を馬鹿にしとるですわい……。』

息をはずませ怒を含んだやうな口調で、訴へるやうに……。

『私が言つて見よ。』

二人が揃つて廊下に出ると、其處にボーイがゐたと見えて、お春が何か土語で言つてゐるのが、手に取るやうにきこえた。私は立つてカアテンのところから首を出して見た。そこには、口髯を生やした泥人形のやうな一人の黑奴が、片手にその手紙を持つて何か頻りに早口に饒舌つた、おてるに口汚なく罵られるのを、何か言ひわけをしてゐるやうに、妙な手眞似、身眞似をしながら……。

おてるは猶ほ甲高い調子で、頻りにそれに喰つてかゝつた。それをお春は、

『いく言ふたら、よかごすばい、おてるさん！』

と言つてなだめた。黑奴のボーイは、ぶつ〳〵言ひながら、不服さうな顏をして出て行つた。

『わたしらの使をしても、お金をやらんもんばつてん、ぐづ〳〵言ふどすばい……』

こんなことを言ひながらお春は室に戻つて來た。

私は言つた。

『今おてるさんに賴んで來ました。』

『さうかえ？　難有う。あの女が船に行つて來るのかえ？』

『いゝえボーイをやるやうに……』

女は傍に寄つて來て酌をしやうとした。

コップを出しながら、『やつぱり酒はまづいね――』

『なにか食べんとですか。』

『何もいらんけどもね……』

かう言つて少しついで貰つて、

『おまさは何うしたえ？』

『休んでをります。』

內氣な女は此方の問ひに答へる他、口數を多くきかなかつた。それが却つて情緖を私に誘つたけれども、しかもその情緖は明るい繪ではなくつて、さびしい憂鬱な色彩をした繪であつた。何うしてこんな女がかうした遠い異鄕に流れて來てゐるのかと思つた。

廊下に荒々しい草履の音がきこえると思つてゐると、やがてドアのカアテンを押しのけるやうにして、其處におてるの丸ぼちやな色の白い顏があらはれた。私を見てちよつと輕く挨拶したが、すぐお春に向

『誰か船に使をやつて吳れないか。大急ぎで……』

『え……』

『誰かゐるだらう?』

『居りまつせ、屹度……。おてるさんに賴んで見たら……』

かう言つて女は素直にその手紙を持つてまた出て行つた。

三

私は大きなコップに少しばかりウヰスキーを注いで、甜めるやうにして一口當てゝ見たが、舌は忽ちそれを反撥して、なにかにがい藥でも飮んでゐるやうな氣がした。何故か神經が動搖して、そこに、眼の前に白いベッドが依然として横はつてゐるのがいやないやな厭惡の情を起させた。まざ〳〵と皮肉に赤裸々に種々なことを見せつけられたやうにも思はれゝば、人間のあさましさが、または女の醜い仕業が一つ一つはつきりと頭に蘇つて來るやうに思はれた。せめて晝間だけは何處かに片附けて置けば好いのに……と思つた。長い年月の間、同じ蚊帳の下で、眼色と膚色の變つた種々の人種と女とのやつてゐることなどの想像がいやに私を刺戟した。異樣の繪を見てゞもゐるやうに……。

女は入つて來た。

『ウヰスキー？』

女は、《まア、あんなに昨夜醉つたのに……》といふ表情をちよつと顏にあらはして見せたが、しかし別にそれをとめるでもなく、素直に默頭いて向うに出て行つた。

私としても別に酒が欲しいのでもなかつたけれども、かうしてたゞぢつとしてゐたつてしやうがないといふことゝ、言はゞまア女に擒になつて取殘されたといふことの心のいらいらした氣を紛らすには、酒より他爲方がないと思つたからであつた。ふと私は、《誰か船の奴を呼んでやれ》と思つた。さうだ、それが好い、そしてもう一度遊ばうと思つた。この思ひ附きは私を力づけた。また私のいらいらする心を和げた。私はあたりを見廻した。室の卓の隅にインキとペンが置いてあるのを急いで此方へ持つて來て、矢張それもその傍にあつた紙を卓の上にひろげながら、今の時間に手の空いてゐさうな奴をあれかこれかとさがして見た。Sも駄目、Aも駄目、Tも恐らく來られまい。Nは手は空いてゐるか知れないが、あいつはいやに傲慢ぶつてゐるから面白くない……。で、結局Tへ宛てゝ私は手紙を書いた。

《この手紙を受取つたらすぐ來い》といふ文句を書き終つて、横封筒に入れて、船の名と宛名とを書きかけてゐるところへ、女はタンサンとウヰスキーとを運んで來た。

土語の不通であるといふことと、刺すやうに日の照り反す黃ろい土などのことを思ふと、それもとても實行は出來さうには思はれなかつた。

『おなかが空いたでせう？　何かあがるの？』

かう女は莞爾しながら言つた。

『いや何も食ひたくない……』

別にさういふつもりではなかつたが、不機嫌さうな私を見ると、女は强ひて勸めもせず、また其處を立去らうともせず、さうかと言つて編物を取上げるでもなく、バルコンの方のドアの處に行つて後姿を此方に見せてそして默つて立つてゐた。

容色こそそんなによくはなかつたが、かうしたところに流込んでゐる女の群の一人としては、思つたほど莫連でも蓮葉でもなく、何處かおとなしい不仕合せな女といふやうなところがあるのを私は前から見遁さなかつた。それに一夜一緖にゐたといふことが、女に對する一種の情緖を微かに私の胸に呼起した。

『おい。おい！』

『何ァに！』

女は此方を向いて笑つて見せた。

『ウヰスキーを持つて來ないか。』

見てゐた。

やがて私はベッドから下りて、女が差出したブラシとタオルとを默つて受取つたが、そのまゝスリッパを突かけたなりに、バルコンの方へと出て行つた。眩しく灼くやうに直射した熱帶の朝の光線は眞向から照り附けて、とてもそこにぢつとして低徊して見てはゐられなかつた。で、私は急いで顏と脊の汗を流して、遁れるやうにして、元の室に入つて來たが、今度は眞中に据ゑてある椅子にその身を凭らせた。女は頻りにベッドを取り片附けなどしてゐた。

と、急に自分だけ取殘されたやうな、または自分一人女に擒にされたやうなさびしさが脈々として浮んで來て、かうしてゐても爲方がないやうな氣がし出した。いつそこのまゝ歸らうかしらとも思つて見た。しかし碇泊中には船に用事のない身であるといふこと、ケビンが蒸し返しされるやうに暑いといふこと、殊に、今時分ひよつくり船に歸つて行くと、何んなに奴等にひやかされるか知れないといふこと、中でも最後のそれが一番氣になつて、憔悴した顏を船の者に見られるのがきまりが惡いやうな氣がして、思ひ切つて船に歸つて行く氣にはなれなかつた。(何んなもんか。一日ゐて見ようか。)かう決心はして見ても、此處にゐたつて別に面白いこともありさうにも思はれなかつた。無智な女達と、殺風景な牢のやうな暑い室と……。その中に默つてぐづ〳〵してゐたつて爲方がなかつた。つゞいて、(いつそ馬車でも雇つて、一人で町を見物してやらうか。)とも思つて見た。しかし帽子を持つて來なかつたといふことと、

二

暫くしてから私は起きあがつた。そしてベッドの上にあぐらをかいて、傍にあつたスリイカッスルに火をつけて、それを口に啣へては見たが、熱を含んだガサノ＼した舌は、爛れてでもゐるやうに痛く刺戟されて感じられた。見ると、天井の高い眞四角な青い壁には、好加減大きな姿見とまづい低級な石版繪とがかけられてあつて、簞笥の恰好をした箱の上には、青い瀬戸の鉢に名のわからない熱帶の植物が栽ゑられて置かれてある。そしてそれがせめてものこの室の裝飾で、他には何にも眼を惹くやうなものはないのを私は見た。戸外からは土人の物を賣る不思議な呼聲や、敷いたばかりの砂利をならすための蒸氣車のギリ／＼軋る音などがいかにも暑さうに響いて來た。

二つの白いピロオの間に飴色した束髮櫛が一つ落ちてゐるのに眼をとめた私は、何だか夢の中かそれともロオマンスの中にでも身を置いてるやうな氣がした。私はぢつとしてその櫛を見詰めた。

ベッドの隅に半ば吸ひかけて置いたシガレットは、徒らに灰になつてこぼれて落ちてゐた。そこからは薄い紫の煙がすうと細長く眞直ぐに立つてゐた。

『水を取つたから早く顏を洗ひまつせ。』

バルコンに通ずる入口から、入つて來た女は、かう言つてぼんやりしてゐる私を不思議さうに立つて

してゐる位置が疑ひ怪まれるやうな氣がした。
ドァが再び開いた。
女は赤い盆の上に、水の一杯滿されたコップを載せて持つて入つて來た。
私は半ば起き返つて、そのコップを取つて、一息にぐつと飲み干した。湯冷しか何かのやうな水だ。
『溫い水だな。』かう言つて見たが、爲方がないので、またごろりと元のやうに頭を枕に當てた。
『もう起きて顏を洗ひまつせ。』
私の手からコップを受取ると共に、女はかう言ひ置いて、再びドァから出て行つて了つた。私は默つて捲りあげられた白い蚊帳をぢつと見詰めてゐた。意識が漸くあざやかになつて來た。昨夜から今朝の夜明けにかけて飲んだり騷いだりしたことがまざまざと頭に浮んで來た。
『馬鹿げた騷ぎをしたもんだなァ。……それにしても、奴等、もう歸つたらう……。朝の仕事があるから……』かう思ふと、SとKが裸になつて、ドンチヤン騷ぎをやつたことや、女達がテンデに三味線を持つて來て、碌々彈けもしないのに、ガチヤ〳〵と端唄や何かを彈いたり唄つたりした事や、事務長が大きな聲で甚句を唄つた事や、酒の量のないTが逸早く女と別室にしけこんだのを皆なしてからかひ半分に覗きに行つたことや、その他種々な事がごた〳〵と一緒になつて思ひ出されて來た。『馬鹿な騷ぎをやつたもんだなァ。』もう一度かう口に出して言つて見て、私はぢつと天井を見詰めた。

さう言はれて見ると、成程、何か恐ろしい夢か何か見てゐたやうであつた。大勢の群集に追懸けられて慌てゝ自分は逃げてゐるやうな光景が微かにまだ見えてゐるやうであつた。眼がさめても、昨夜の醉はまだ殘つてゐるらしく意識がぼんやりとしてゐたが、汗になつた體が動かす度にわるく冷々して、しつとりしてゐる額から滲み出して來る汗が耳の方へ流れて行くのや、腋の下から脊中へかけていやにべたべたとくすぐつたいやうな氣がするのが、一種たまらない不快を私に感じさせた。私は着てゐた汗臭い浴衣の袖で顏を拭きながら、

『暑い、暑い……かう暑くなつては堪らん……』

かう獨言のやうに言ふと、

『堪らんばい……』かう女も莞爾して調子を合せた。

暫くしてから、

『おい、水を一杯呉れんか。』

と、私は叫んだ。

女はだまつて、編物を椅子の上に置いて、スリッパの音を輕く立てゝ、何方かと言へばすらりとした後姿を見せてドアの外へと出て行つた。私は夢の續きではないかしらと思つた。遠い熱帶國に來て、さうした女と一夜をこのベッドのうへに過ごしたといふことが私に不思議な思ひを起させた。自分の存在

鸚鵡

一

呼吸苦しさと熱さとで、熟睡してゐながらも汗をぐつしよりかいてゐた私は、硝子窓が弛んでひとり手に閉ぢた響で眼が覺めた。咽喉がひつつくやうに乾き切つてゐた。

ベッドの傍の椅子に、女が腰をかけて、眼を下に落して頻りに編物の手を動かしてゐるのを見て、

『もう何時かね？』

かう私が訊くと、始めて客の眼の覺めたのに氣が付いたやうに、頭を上げて、ぱつちりした眼に愛嬌を見せて、

『今、十一時打つたばかりですばい。ずゐぶんようお休みになつてましたの……。なヤ知らんが、きつさうに呻つてお出ででしたばい。』

『さうかな。』

が、町の明るい灯や賑やかな人通りや生々した氣分が忘れかねた。しかしその前にO市がある。かの女がゐる。かう思ふと、さうした別れのさびしさもいくらかは薄らいだ。かれは何うすることも出來ないで、またもその女の許に行くのであつた。やがて車が來て、かれは停車場へと急いだ。

そしてそこから出て來た。
かれは自分の財布の中の金と、宿に置いて來た銀行の小切手とを心の中で數へて見た。『もう一晩お名殘に遊んでやれ！』かう急にかれは思ひ立つて、橋の袂から右に曲つて、濠端を通つてゐる電車に乘つた。

その夜は豪遊の氣分の中に、三味線の音の中に、美しい色彩の中に埋められるやうにして賑やかに過ぎた。そしてかれはあくる朝自分の疲れた姿を狹い四疊半の一間に發見した。『さう、もう國に歸るの？ぢや、私伴れて行つて頂戴――』肥つた妓はこんなことを言つてかれにしなだれかゝつた。

そのため、かれは豫定の日限を一日延さなければならなかつた。かの女が待つてゐるであらうと思つたけれど、手紙ではもう間に合はない。さりとて電報を打つほどのこともない。『まァ好いや、放つて置け！』かう思つて、宿に歸つて、近所の銀行で金を受取つたり、下宿の勘定をしたりした。『もうお歸りなさるんですッてね。お名殘が惜しいわ。』などゝ言つて、女中がそこにやつて來た。『さうですか。今夜の急行で、それは忙しい。……ぢや、又、來年は是非入らしつて下さいまし。いつもお粗末ばかりして、來年はお埋合はせをしますから。』中年の上さんは出て來て挨拶した。『さうですかO市へお寄りになるんですか。』などゝも言つた。

わかれてまた南國の故郷に歸ると思ふと、かれはさびしい氣がした。友達といふほどの友達もゐない

で、そこに一夜泊つて、あくる日の午後には、かれは大通りの大きなデパートメントストアの雜沓の中にその姿を現はした。かれはあちこちに眼を配りながら、二階から三階へと靜かに歩いた。

かれの眼には種々なものが映つた。縮緬、上布、半襟、寶石入の指環などがチラ〱した。かれは彼方の棚、此方の棚に立留つては長い間見廻した。半襟や腰卷などの一杯置いてあるところにも立つて、大勢の女達と一緒にそれをひつくりかへして見た。

『兎に角、襟を一枚。』

かう思つて、あれかこれかと引くり返して見たが、さて選ぶ段になると、或るものは派手すぎ、あるものはぢみ過ぎて、容易にその判斷がつかなかつた。どうせやるなら、かの女の氣に入るものが欲しかつた。最後にかれは草花の白くボツ〱と縫ひをした襟を選んで買つた。

それからかれは反物を一反買つた。それは餘り安くなかつたけれど、かの女の喜ぶ顏を思へば、この位何でもないと思つた。それから女の兒にやる玩具を二つ三つ買つた。

これで出ようと思つたが、今度は亭主のことが氣にかゝつた。かの女と女の兒にだけ持つて行つてやつて、かれに何一つもやらないのは、餘りに勝手すぎると思つた。かれは下りた二階をまた昇つて行つた。決して買つてやりたくはなかつたけれども、かれは亭主のために縫ひつぶしの流行の財布を一つ買つた。

罪ですからな。』かうかれはのんきさうに言つたが、しかしかれは決してさうしやうとは思はなかつた。
かれはいつものやうに、勝手なのんきなことをしやべつて、友達夫妻を笑はせた。吉原の馴染のことをもしやべれば、赤坂の女のことをも話して聞かせた。一つ覺えた小唄ものなどを拙い節で唄つて、『一つこれをお土産にかの女に聞かせてやるんだ。赤坂のは、それは好い女でしたよ。僕になんか惜しいやうな女だ。肥つてゐてね、眼に愛嬌があつてね。どうだ、俺と一緒に琉球に行かないかつて言ふと行くつて言ふんだから面白いね。五百圓あれや好いんださうだ。』
『ぢや、それにすれば好い。』
こんなことを言つて、友達夫妻は笑つた。
細君は細君で、
『矢張、あなたは、肥つた方がお好きね。Ｏ市のも矢張さう？』
『もとは肥つてゐて、その肌が好かつたんだけども、此頃は子供なんか生んで瘦せちまひましてね。』
『それも向うの旦那さんのせゐだと思ふと、變な氣がするでせうね？』
『それはしますな。』
平氣でかれは笑つた。
友達夫妻も笑つた。

には矢張かの女の手紙が置いてあつた。東京での下宿屋の二階であると、南國のバナ、や巴杏斯の綠葉で彩られた窓であるとを問はなかつた。かれは猶ぢつとして一ところを見詰めてゐた。

試驗の成績はやがてわかつた。

×

見事に失敗した。もう少し勉强しなければ矢張駄目であつた。しかしかれは決して失望しなかつた。かれはそこから當然に起つて來る來年の試驗の上京を頭に描いた。また往きに歸りにO市に寄ることが出來ることを頭の中で繰返した。

成績がわかつてからは、最早東京に長く滯在してゐる必要はなかつた。またかの女に逢ふべき日が近づいた。

郊外の友の家に暇乞に行つた時には、友達は夫婦して、いろ〳〵御馳走して呉れたが、かれの戀に對しては、一面盛んにひやかしながら、一面それを否定した。丁度其處に來合せた美しいハイカラの娘を紹介して、『どうだ、あれでも貰はないか。あれなら、喜んで君の妻になるが……』と勸めた。

それは美しい豐頰な娘であつた。單に容色の點から言へば、或はこの娘の方がかの女に勝つてゐるかも知れなかつた。『さうしませう。さうしませう。私等のやうな戀を何時までやつたつて仕方が無い。實際

こればかりではない。さうしたお伽噺は澤山にかれの心に思ひ出された。『ではね、屹度ですよ、私の行つたところにはきつとついてお出でなさい。』かう言つたかの女の言葉は、矢張そのお伽噺の不可思議の約束のやうなものではないかとかれは思つた。

その言葉をかの女が取消さない中はどうしても一生この不自然な愛情を中心にした運命は續いて行くに相違ないやうな氣がした。——かれの下宿した家の二階の窓には、梧桐が栽ゑてあつて、その向うに碧い空が見え、屋根を越した隣の二階屋では、鬚の生えた陶器畫工の男が、終日せつせと仕事をしてゐるのが見えた。かの女からの手紙は五日に一度、遲くも一週間に一度は屹度やつて來た。現に、今もその新しい手紙がその机の上に載せられてあつた。

かれは鬚の生えた頷に二つの手を當てゝ、じつと深く考へに沈んだ。手紙に眼を注ぐでもなく、秋近い碧空に見入るのでもなかつた。かれの頭は唯ぼんやりしてゐた。ふとそこにその亭主の顏がほつかり浮んだ。かれはすぐそれを打消した。

續いてかの女の顏が浮んだ。につこりと笑つた顏である。喜ばしさと嬉しさとに滿ちた顏である。また男の心を捉へずには置かないといふ顏である。……と、それが消えて、お伽噺の城の美しい姫が浮んだ。

かれはぢつとしてゐた。

かうしたことは、南國の故郷にゐてもよくあつた。その時も矢張かれはかうした態度をしてゐた。机

れが烈しかつた。かれはのん氣な、何の苦もない男のやうにして彼方此方へと行つた。自分の苦しい戀のことなども平氣で種々な女に話して、笑の種にした。しかしさうした行爲がかれに何等かの光明を與へたであらうか。また解決を與へたであらうか。大勢の女とかれとの間には、矢張依然としてかの女がその位置を要求してゐた。

×

かれは何かのお伽噺で『沼の主』といふものを讀んだことがあつた。

それは何でも封建時代のことで、あるお城の姫が、幼い時、保姆に負はれて毎日沼のほとりに遊びに行つた。其處には美しいこの世では見られぬやうな花が澤山に咲いてゐた。それを見て、姫は是非欲しいと言つてむづかつた。あれはとても採れない花だからと言つてなだめても泣いて泣いて言ふことをきかなかつた。仕方がないので『では、この姫が大きくなつたらお前に上げるから、どうかその花を採らして呉れ。』かう保姆は沼に向つて言つた。と、不思議にもその花が段々此方へと近寄つて來た。手がとどくあたりにもその花が見えて來た。保姆も姫も喜んでその花を採つて遊んだ。

ところが、姫が美しい女になつてから、奇異なことが非常に多かつた。姫と保姆の夢には毎夜のやうに『沼の主』が見えた。そしてその約束を繰返した。たうとう姫は池に身を投げた。

らうが、また不自然だらうが、かういふ事實がある以上、人間にはさういふことが出來るといふことが肯定されてあるのではないか。かう思ふと、多妻多夫と、一夫多妻と、それから一夫一妻とさうした昔からの難問題が容易に解決することが出來ずに、いつもかれの頭に横はつた。

一夫一妻、さういふことをかれも痛切に考へたことがないではなかつた。時にはその辛さに堪へかねて、自分の方から手を切らうとしたこともあつた。亭主もまたそれを考へたことがあるに相違ない。女もまたそれを考へたことがあるに相違ない。しかし竟に遂にどうにもならなかつた。

かれは東京に來て、昔の多くの友達に逢つた。かれ等は皆それ〴〵衣食の途に就いて、一人づゝ立派な細君を持つてゐる。中には子供が二人も三人も出來たものもある。かくれた事實は知らないが、兎に角表面は立派な一夫一妻の生活を實行してゐる。かれ等は何の顧慮するところもなく、又何の悶ゆるところもなく、晴々した顏をして、相携へ相笑つて街頭を散歩してゐる。從つて心も體も互に平均を得てのんさうである。無論、自分がたまさかに味ふやうな戀の熱烈なる快感を得ることは出來ないに相違ないが、またその反對に、さびしい悲しいつらい懊惱苦痛を持つては居ないのである。かれは其處まで考へて行つていつも溜息を洩した。

時には、『どうとも勝手になれ』と思つて、金のあるにまかせて、さながら放蕩兒がやるやうに、吉原にも行けば、赤坂にも行つて、いろ〳〵な女を相手にして酒に耽つた。試驗をすましてからは、殊にそ

2 と 3

らないといふことは……あゝした態度をしなければならないといふことは……一人野原をさまよはなければならないといふことは……

かの女も不幸だ。時にはかれもあの亭主もかの女のために飜弄されてゐると思ふこともあるけれど、又は一人の女で二つの男の心を自由にしてゐるのを誇りのやうにしてゐるのではないかと思ふこともあるけれども、それは一時の邪推で、又は突詰めた考で、決してさうではない。かの女の眼から流れる涙を見ては、決してさうとは思はれない。女はそのためこ懐姙した子を呪ひ、又はその生れた子に完全に母親としての愛情をそゝぐことが出來ないではないか。

かれだつて矢張さうだ。不幸だ。かの女があるがために、何うすることも出來ない。世間の多くの女は、すべて精神的にも肉體的にもかれに反撥して來る。かの女を除いては他の女のことを何うしても考へることが出來ない。假令他の女と夫婦になつたとて、『私の行くところには何處にでもついて入らつしやい。よう御座んすか。』とあの埠頭で言つた言葉をかの女が取消さない中は、矢張かの女は自分と妻となる他の女との間にその位置を要求するに相違ないのである。かれは何うすることも出來なかつた。『仕方がない、先づこのまゝにして置かう。そして成行を見よう。』かう思つて過して來た月日も、今ではもう五六年にもなつた。

ある人は『そんな不道徳なことをいつまでやつてゐる、』と言つてかれを責めた。しかし實際不道徳た

い不思議な不自然な關係が持續してゐる……。彼はぐつたりと崩折れたやうにクッションの上に倒れた。

汽車は駛つてゐた。

×

郊外の友達の家で、輕い心持で、平氣でいろ〳〵なことをしやべつたことをかれは思ひ出した。

かれ等は——かれ等の多くは、そんなことは少しも知らない。さうした苦惱は煩悶は悲慘は夢にも知らない。そして唯面白い話の材料にしてゐる。『かうした面白い男女關係もあるんですよ』と言つて笑つてかれ等は吹聽してゐる。

それぱかりではない、かうした自分をのんだからと言つてゐる。貴方でなくつては、とてもその眞似は出來ないと言つてゐる。そしてそれをかれの性質に歸してゐる。またある者はその解釋以上にかれの南國の故郷の風俗を捉へて來て、さういふ土地柄だからだと言つてゐる。

實際さうだらうか。

否、否、否——

かれは此前行つた時、自分と亭主と女との位置を考へて、共に不幸な人達だと言つて、夜一夜涙を流したことがあつた。實際、あの亭主も不幸だ。假令稀にではあるけれども、あゝした顏をしなければな

汽笛を耳にし、眼に小さな停車場を見た時には、最早目的を半ば達したやうな歡喜を感じた。

時間が遲かつたので、直通の汽車はもうなかつたけれど、それでもかれは嬉しいと思つた。兎に角其處まで來た。明日はその汽車でO市に向ふことが出來る。久しくあくがれたかの女に逢ふことが出來る。かう思つてかれは、旅舍の二階の窓から其處にある小さな停車場と二三輛の客車と長く連つたレールとを眺めた。

その旅舍が今かれの眼に見えた。丁度長い繪卷の中の一つの印象的なシインのやうに……。そこには人の好いお婆さんがゐたつけ、今も達者でゐるかしらなど丶思つた。と、つゞいて赤い襷をかけた色の白い娘がほつとその中に浮び出して來た。……と、いろ〳〵な追憶が際限なく集つて來る。初めて行つたO市の市街、放浪者のやうな恰好をしてその家の周圍をぐる〳〵歩いてゐた自分の姿、垣根に咲いてゐた紅白の木槿の花、つゞいてかの女の驚いた顏――

『まア――』

かう言つて驚いてかの女は出て來た。

ふとかれはその時分と今とを比べて考へて見た。もうその時からは五六年を經過してゐる。無論もうあの頃のやうにセンチメンタルではない。また情熱的でもない。しかし有效に解決して呉れると思つた『時』が今だにそれを解決して呉れない。そして未だに自分とかの女の間には、どうすることも出來な

それに、その時分は汽車が出來てゐなかつた。かれは田舍のガタ馬車に乘つたり、車に乘つたり、又は徒歩をつゞけたりしてかの女に向つて行つた。何といふ難儀な慘ましい悲しい旅だつたらう。ことに、國境に横はつた大きな峠、登り四里、下り四里もあるやうな峠、そこでは足に大きな豆が出來て、歩くのには一方ならぬ難儀をした。丁度秋だつた。晴れた秋の空だつた。山はくつきりと美しく晴れ、空には悲しいさびしい白い雲が流れるやうに靡いた。かれの手帳は女を思ふ歌で滿された。時にはひとり林の中を歩いて、思ひ餘つて、女の名を呼んだりした。

ある夜は汚い薄暗い旅舍で寢た。前には萬山の中に川が流れて、水の音が夜もすがら枕に響いた。かれの襦袢は汗に塗れ、衣は街道の埃に塗れ、鬚は深く生えて、湯殿にある鏡には憔悴し果てたかれの顏が映つた。

或るところでは、あてにした川舟が增水のために出ないので、降頻る雨の中を辛うじて蝙蝠傘に凌いで、雲霧の深く往來する山路を五里も六里も歩いた。はねは用捨なく衣の上までも上つた。普通ならば、風景が好いので、旅客が立留らずには行かないやうなところをも、かれは忙しい心を抱いて歩いた。

しかしさうしたみじめな旅行もやがて盡きた。かれは漸く晴れ渡つた夕日の影を帶びながら、萬山の中を流れ落ちた濁つた川水と共に、ひろく展開された平野へと出て行つた。そこにはもう汽車があつた。それに乘りさへすればひとりでにかの女の住んでゐるO市に達することの出來る汽車があつた。かれは

2
と
3

ならないと思つた。かうして遠く離れてゐては、女の父母やその亭主が、『なァに、離れてゐれば、そんなことを言つたつて、ぢき解決しますよ、』と思つたことがそのまゝ事實になつて了ふやうな氣がして、片時も落附いてはゐられなかつた。『かうしてゐる中にも女は征服されて了ふ。』かうかれは突詰めて考へた。で、ある日、遂に思ひ餘つて、それと言つては、とても家で出して吳れさうにもないので、こつそり支度して、ちよつとそこまで行くやうな風をして出かけた。

幸ひに汽船の出帆までは、誰にもそれと疑はれなかつた。それにしても、何れほど心配したであらうか。甲板の上で、來る艀來る艀を見守つて、誰か後を逐つて來はしないかと思つた。汽船の碇を捲く音もまどろしかつた。何故あんなにぐづ〳〵してゐるのだらうと思つた。やがて汽船は動き出した。

かれは始めてほつとした。

凄じい海荒れ、甲板の上を洗ふ波、わる臭い船室の空氣、さうしたものもかの女を思ふと氣に留らなかつた。翌る日は大島を船の右舷に見て通つた。屋久島を近く海上に發見した時には、かの女のゐる陸地の近くなつて來たのを喜んだ。

しかし船路は果てゝも、陸路はまだ大變であつた。かの女のゐる陸地ではあるが、そこまで行くには、まだ二日二夜もかゝらなければならなかつた。それに、かれは早く手の廻る追跡を恐れて、K市ではわざと汚ない知らない旅舍に泊つた。そこからかれは女に宛てゝ手紙を出した。

汽車は轟と音を立てゝ入つて來た。

二等室の一隅の窓の前に立つたかの女は、いくらか眼を赤くして、をりをり人に知れないやうにソッと涙を拭いてゐた。

『ぢや歸りにね……それから着いたら、すぐ手紙を下さいね。』

『あ……』

かう言つてかれも顔を窓の外に出した。汽笛は鳴つた。汽車は動き出した。

しよんぼり此方を見送つて立つてゐる女の顔は、やがて小さくなつて遂に見えなくなつた。

始めは女が可哀相のやうな氣がしたが――あゝして亭主と一緒に暮してゐるのがいぢらしいやうな氣がしたが、少し行くと、亭主のにこにこした嬉しさうな顔がすぐそれを打消して了つた。『思ふまい思ふまい。』かう思つて、かれは身をぐつたりとクッションに寄せかけた。と、つゞいて初めて女の後を追つて、この〇市にやつて來た時のことが鮮かに浮んで來た。

それは慘澹たる旅行であつた。今思ひ出しても、自分で自分がいたましく哀れに思はれた。女が嫁いて行つてから、丸半年といふもの、かれは殆ど毎日埠頭に行つた。そしていかにしてこの海山をこえて行かうかと考へた。その頃は今よりもつと突詰めてはゐたし、女はさう言つて別れて行つて手紙は一日おきのやうに寄越したけれども、それでも本當のことが分らないので、何うしても一度逢つて話をしなければ

大きな停車場は混雜してゐた。丁度師團長か何かゞ乘るので、それを見送りに來た軍人で一杯になつてゐた。肩章を下げたもの、參謀の總を下げたのなどが頻りに劍を鳴してあちこち歩いた。師團長の近親らしい女の群は綺麗に着飾つて、二等室の一隅に集つてゐた。

二人は小さくなつて其處に腰をかけた。時間はまだ二十分ほど餘裕があつたけれども、大勢乘客の往來する足音やら驛夫の荷物を運ぶ車の音やらに碍げられて、かれ等は落附いて話す氣分にはなれなかつた。言ひたいことは澤山にありながら、二人は唯默つてゐた。

女は今朝は庇髮に結つてゐた。子持の細君にしては不似合な位な大きな白いリボンをかけてゐる。顏は綺麗におつくりがしてあるので、唯の眼にもまだなり立ての細君としか見えなかつた。

二三日前、かの女は丸髷に結つた。それは庇髮よりも似合つて見えた。亭主も『その方が好いね、奥樣らしくつて……』などゝ言つた。しかしかれにはその奥樣らしい丸髷よりも、南國の故鄕の思ひ出を思ひ出す庇髮の方が好きであつた。それと知つて、かの女は今朝は庇髮にしたのであつた。

人の見てゐないのを狙つて、かれは袖の下からキウと堅く手を握りしめた。女も握り返した。

やがて改札の時が來た。

赤帽が先きに荷物を運んで置いた奥れたので、二人並んで夫婦のやうにして群集と一緒にぞろ〳〵と橋をわたつて、向う側に行つた。

へずには居られなかつた。と、不愉快なイヤな氣が胸を突いて起つて來るのを感じた。何方が本當に戀の勝利者だかわからないといふ疑惑が再び首を擡げて來るのであつた。しかしさういふことばかりは考へてゐられないかれの身の上であつた。試驗はもう近づきつゝある。東京に行つてから一日二日はその準備もしなければならない。それに、この試驗、齒科醫の試驗を受けやうと思立つたのは、實はかの女の慫慂に由つてである。かの女は手紙でかれの身の上を心配してよこした。いつまでぶら〳〵遊んでゐても仕方がない。生活の方のことも考へて下さい。かうかの女が言つて來たので、初めは齒科醫などゝ馬鹿々々しく思つたことをかれはやはり始めたのである。また不便な南國の故鄕では、さうしたことより他に學ぶ道はなかつたのである。

『大變お世話になりました。』

かう言つて、サッサと出て、かれは車に乘つた。

あとの車にはかの女が乘つた。

ところが、途中で二臺も三臺もつゞいた牛車に出會して、かれの乘つた車のまご〳〵してゐる間に、女の車は逸早く先きに出て行つた。從つてかれは女の姿を眼の前に見ることが出來た。かれはふと、ある想像に捉へられた。『誰が見てもかう車を竝べて行く形は、夫婦としか見えまい。』かう思ふとかれは嬉しかつた。

『わかるよ、よくわかるよ。』
『さう、よくわかつて？』
かう言つて、かの女は嬉しさうに、その心も體もすつかり此方に偏つて來るやうな表情をした。
ある期間を經てから、
『では、歸りには屹度寄るのねえ。』
『寄らずには歸れないから、大丈夫だよ。』
『嬉しい……』
かう言つて、かの女は處女時代のやうに胸を撫でゝ見せた。

×

かの女は汽車まで送つて行くと言つた。
實は一緒に歩いて、話しても話し盡くせない話をして來たかつたけれど、少しばかり荷物があるので、さうも出來ずに車を二臺頼んだ。
亭主は『私もお送りするんだけれど、留守をするものがないから、』と言つて莞爾して送つて出た。
かれは來た時の酢を飮んだやうな顏から段々その平生のにこ〳〵した穩かな顏になつて行く徑路を考

『そんなことは出來ないねえ。』

『さうね……』

かう言つたが考へて、『今度試驗が受かれば、東京で開業するの？　それとも國？』

『何方になるかわからない。』

『東京に屹度好い人が待つてゐるかも知れないのねえ。』

『かも知れない。』

かう輕くかれが言ふと、

『試驗に及第して、いよ〳〵開業でもすると、何うしても、さうなるかも知れないのねえ……悲しいわねえ。貴方がなくつて、一生あの人ばかりと暮らして行かなければならないと思ふと、とてもゐられさうな氣がしないわ。その時はどうしたら好いんでせう。その時は、この子ばかりが賴りね。』抱いてゐた女の兒の頰を強く吸つた。かの女はもう涙ぐんでゐた。

『大丈夫だよ。』

『さう……』

涙を拭いて、『勝手ばかりをしてゐて、こんなことを言つては濟まないわ。だけど、戲談にも、貴方に好い奥さんをお持ちなさいつては言へないんだもの。』

或はそのために、どうせもう明日きりゐないんだからと言ふために、亭主はその寛容を示したのかも知れなかつた。否實際さうであつたに相違なかつた。何故と言ふに、かれの歸期が近づくと共に、かの女の顏の曇つて行くに引きかへて、亭主の顏と態度とは次第に生々とした色を着けて來た。時々は樂しさうにして笑つた。『また歸りにはゆつくりお寄りなさい。』などゝお世辭も大抵にするが好いと思ふやうなことをもその亭主は言つた。

×

『歸りには是非ね。』

『でも困るだらう？』

『困りやしないわ。あゝしておとなしくしてゐて呉れるから、何でもないぢやないの？』かう言つてかの女は笑つて、『だつてそれに不思議はないわ。初めから、さういふ約束なんだから。』

『でもね……』

『素通りなんかしちやいやだわ。それこそ恨むから。……さう、幾日かゝるの？　試驗が？　一月半？さう、それぢや歸る時分には、もう涼しくなつてゐるわ。今度は何處か溫泉のあるところにでも行きたいねえ。』

主人の同僚や友達などがやつて來ると、かの女は『これは私の從兄で御座います、』といつて、平氣で紹介した。亭主は矢張それに調子を合せてゐた。

ある夜は市の中央にある賑やかな橋の袂まで、三人して揃つて散歩に出かけた。別に變つたこともなかつた。女も平氣で歩いた。O市は暑い處だが、南の國の故鄕にもまして暑いと思はれろほどだが、その夜は山から來る風が涼しく、水には灯の影が美しく映つて、ぞろ〳〵通る女の浴衣も派手に顏も白く見えた。活動寫眞の前には、電氣が明るくエキゾチックな繪看板を照してゐた。

『國にゐた時分のことを思ひ出すわね。』

こんなことを言つたりした。

かの女はまだその頃は若かつた。豐かな頰をしてゐた。かの女は父母に伴はれて、他鄕から來て、一二年其處に住んだ。かれはその時分を思ひ出しながら歩いた。南國の故鄕の夏とは似てもつかないけれども、それでも二人の戀にはいつも夏の情調と氣分とが伴つてゐた。その頃かの女は派手な浴衣を着てゐることが多かつた。腋あきからはいつも白い肉置が覗かれた。

町をずつと中ほどまで行つて、そこから引返して、氷屋に寄つたり何かしてそのまゝ三人は並んで話しながら家の方へ歸つて來た。

明日はかれはもう立つつもりでゐた。

つてゐては平氣でもゐられないであらう。暗い谷底の中に落ちたやうな氣がして、話も上の空にやつてゐるだらう。それに、さう毎日同僚と友達との處に行くわけにも行かずに、ほつ〳〵野原を歩いてゐることもあるだらう。

運わるく今度は行つた二日目から、社員半數の夏休暇になつて、主人は大抵は家にゐて暮した。

『ちよつと出て來るから。』

かういつて、その亭主は、長押の新しいパナマ帽を取つて、蒼白い顏をしてそして出かけた。

それと反對に、夜はかれが苦しんだ。

子供が時々啼いた。

それを、女は『好し、好し……夢でも見たんだらう。』かう言つて、引寄せて乳を含ませる氣勢がした。

かれは輾轉反側して寢られないやうな夜を幾夜かすごした。

かれはその苦痛を離れたいがために、いつそ別に宿を取らうかと思つた。そしてそれをかの女に話した。しかしかの女はそれを承知しなかつた。かの女も亭主もそんなことをしてその事の他に洩れることを恐れたらしかつた。

小さな家の中に深くかくされた祕密にして置きたいらしかつた。

それにも拘らず、かれはそこに一週間ほど滯在した。

昨日も郊外の友達の細君が、

『一體、貴方がゐらつしやると、そのMさんて方は、どんな顏をなさるんです？　丁度酢でも飮まされたやうな顏をなさるでせうね。』

かう言つて笑つたが、實際何とも形容することの出來ないものであつた。初めて逢つた時、二度目に逢つた時、中でも最初逢つた時の顏！　表面では當り前の落附いた顏をして話してゐながら、態度はその心の亂れてゐるのを名殘なく裏切つてゐた。かれはそは〳〵として落附いて坐つてゐなかつた。自分の妻に向つても、他人のやうな丁寧な口を利いた。琉球の話を何彼としてゐる間にも、その耳は上の空に、心は全く二人の態度に奪はれてゐた。それから比べると、此間行つた時の態度などは落附いたものだつた。

×

亭主は時々子供を婢に負はせて外に出してやり、自分も友達の家に行くと言つて出かけた。かれはその間にゆつくり話をすることが出來た。

その間を亭主はいかに過してゐるであらうとかれは想像した。實際友達か同僚の家に行つてゐるらしかつた。一時間か二時間、平凡な日常の世間話をして歸つて來るらしかつた。しかし、流石に、それを知

けれど時には、それより先きに一歩入つて、男女の間に横はる深い心理といふことを考へることなどもあつた。かうした狀態になつてゐては、さう容易くのしを附けてその妻を逐出すやうなさつぱりした單純な心にはなれないかも知れなかつた。何故なら、勝負が二人の男の間に橫はつてゐるから、力の爭ひだから、又は生命の爭ひだから。……と世間にある出齒庖丁騷ぎや、ピストルや、外國の小說でよく出會す決鬪や、さういふことが種々と思ひ出されて來た。

さう言へば、自分も女もまたはかの亭主も、共に危險な境に身を置いてゐるのであつた。どんなはずみで、さうしたことが三人の間に起らないとは限らなかつた。現に、かれ一人として考へて見ても、思ひ餘つて、さうした考が胸に上つて來たこともある。初めてその住宅を訪れた時などは、殊にさうした深い嫉妬が燃えた。女が少しでも自分を邪魔にするやうな態度が見えたら。捨てゝは置かないと自分は思つた。それと同じ考があの男にも起らないとも限らない。あゝしておとなしく無氣力に見えてゐても何ともわからない。或は却つてあゝいふ男が思ひ詰めてさういふことをするものだ……。

かうは思ふが、それは極く突詰めて考へた時で、ぢきかれはそれを打消した。『さういふことが澤山にあつて堪るものか。世の中にもさうした狀態にある人は澤山にある。けれどもさう突詰めて行くものはその一割もない。一割どころか、一千人に一人、萬人に一人だ。死ぬよりは、隱忍して、女を所持してゐる方が好いからな。』かう思つて、かれはその亭主のために大きく笑つた。

『それはするわ。だけどイヤな氣といふのとも違ふわ。さうね、辛いやうな、顏が赧くなるやうな……』

『矢張、一夫一妻だね、つきつめると、どうしてもさうなるんだね。』

かうその時かれは言つた。

×

亭主の顏！

穩かな、落附いた、いかにも小會社の下級の社員らしい色の白いにこ〳〵した顏、どんな時にも怒つたり眉を昻げたりすることはないだらうと思はれるやうな顏、その顏が、國にゐても、東京に來てゐても、又汽車で旅行してゐても、をり〳〵掠めるやうにしてかれの眼前を通つた。

しかしそれは女の顏のやうに長い間かれの頭に絡み着いてゐるやうなことはなかつた。かれはそれを思ひ出すと、不愉快なものに逢つたやうに、又は思ひ出すべからざるものを思ひ出したかのやうに、すぐそれを脇に振り放つた。でなければ、あらゆる方面からその顏の持主を心で罵倒した。『俺なら、あゝした嘷を默つて見てやしない……。すぐのしをつけて先きの奴に𠱆れてやつて了ふ、』など丶身勝手な思ひ方をした。『俺なら、屹度、別に女を拵へる。世間の口が煩いからと言つて、それに捉へられてゐやしない。そんなぐづぢやない。』こんなことを思つた。

けがわからなくなるわねえ。子供の出來た時には、本當に泣いて泣いて泣き暮らしたわ。人間がいやァに淺間しくなつて了つてね。……だから始めて生れた時には、そんなに嬉しいとも思はなかつたわ。だけども段々愛情が出て來て、本當の親でありながら十分に愛することが出來ないと思ふと、何とも言ひやうもないほどに身が辛くなつて、乳を飮ませながら、思はず涙が出て、ぼた〳〵赤坊の頰に落ちるんですもの……。本當に辛いと思つたわ。それでもまだ貴方と切れやうとは思はないんだから……妾が罪人ね。一番妾がわるいのねえ。』

かう染々と言はれて見ると、さうした淺い邪推などは雲か霧のやうに消えて行つて、不思議な因緣と運命とが矢張かれ等の間に絡み附いて來るのであつた。

女は成る丈亭主のことをかれに話さぬやうに、話さぬやうにとつとめてゐたが、それでも自分のかれに對する誠意を疑はれた時には、かなりに深いところまでいろ〳〵なことを話した。『さうね。あゝいふ人ですからね。さう口に出したり態度に見せたりしませんけれど、矢張いやで〳〵仕方がないらしいのね。見てると、氣の毒だが、何處かイラ〳〵してるわ。私に對しても、言葉が丁寧になつて來るわ。そして怒るとは反對に、却つて私の機嫌を取るわ。』

『でも、お前だつて、僕がやつて來ると、嬉しい一方にイヤな氣がするだらう。僕もこの家の門近く步いて來ると、さういふ氣がするから……』

騒ぎ立て丶世間にぱつとして、それが新聞に出て、今の職業を失ふやうになつてはそれこそ大變である。長い間ではなし、度々來るのではなし、どうせ行末は女は完全に自分のものになつて了ふのだから、現に、自分の子供さへ出來たのだから……かう思つて、自から忍んでゐるに相違ない。

かう思ふと、何方が勝つてゐるのか、負けてゐるのか、また本當に、何方に女の愛情があるのか、それが疑はれずには居られなかつた。

非常に不自然なことをしてゐるといふことも考へられた。女にあやつられてゐる二つの人形であるといふ氣もした。女が平氣でさういふことをやつて居るばかりではなく、此方から寄詰めて、『何うにかしなくては仕方がない、』といふ意志を見せると、それがかの女には何うしても斷乎として決定がつかぬらしく、『貴方と切れる位なら死ぬ、』と言つて赫したり、『だつて、Mだつて、このまゝ捨てるのは可哀相とは思はない？ あゝしておとなしくしてるんですもの、』と言つて涙をこほしたりした。

たまに來るのだから、さう言ふのだらうと言ふと、かの女は、『そんなことはない。貴方にはまだ私の心がわからないんですかね。あんなに手紙をやつてもそれでも私の心はわからないんですかねえ、』と言つて辛さうにして泣いた。

二つの腕を合せながら、

『何うしてかういふことになつたでせうね。運ですね、矢張。前世の約束とか何とか言はなけれやわ

『そんなことはないわ。』

かの女は早口に言つて、男の複雜した心を逸早く讀まうとするやうな眼色をした。

『子供は？』

『今ゐないの。』

『何うしたの？』

『…………』

かの女は最初の印象を恐れて、今朝から婢に負はせて、何處かに遊びにやつたらしかつた。

暫く經つた後では、かの女は、『でも、私の子だから好いでせう。貴方の好きな私の子だから憎くはないでせう。』

靜かな午後の日影は、二人の他に誰もゐない室にさし入つた。

しかしかうした自由は、自分が遠く離れてゐるためではないか。一年に一度、二年に一度やつて來る自分であるがためではないか。『だつて、しやうがない。初めから、さういふつもりで此處に來たのだから……。それは初めからわかりきつてゐることなのだから……。だから、今更そんなことを言はないで、貴方は成るたけ知らない顏をしてゐらつしやいよ。長い間ではないんだから……』かう女はその亭主に言つてゐるかも知れない。又亭主の方でも、困つたことは困つたことだが、會社の方の事情もあるし、

かれは屹立て耳をして茶の間の方の氣勢を聞いた。

竟に、

『M君は?』

『會社よ。』

『僕の來るのを知つてゐるんでせう?』

『え。』

かの女は笑つて見せた。

その笑ひから心がひらけた。征服されたと思つたのは、此方の邪推であつたことが次第に飲み込めて來た。

しかしそれでも未だお互ひに何から話して好いかわからないといふ風で、手持無沙汰で相對して坐つた。子を持つてから、かの女の姿は著しく變つた。もう元のやうな豊かな頰や白い肌を見ることが出來なかつた。その癖、待受けてゐたと見えて、髮を綺麗に束髮に結ひ、着物も派手な似合ふものを選んで着てゐたけれど……。

『私も變つたでせう?』

『征服されたからね。』

2 と 3

れは其のまゝ門の戸をあけた。鈴がチリリンと高く鳴つた。

案内を乞うて格子戸の外に立つてゐると、障子があいてかの女の顏があらはれた。『まア――』かう言つたが、その顏はサッと赧くなつた。

かれもきまりがわるいやうな氣がした。

しかし、それもほんの僅かの間で、『もうお出でになるかと思つて待つてゐました、』とか、『疲れたでせうね、』とか言つて、かの女はかれを奧に通した。

その日は日曜ではなかつたから、主人はゐないだらうとは思つたが、しかしことに由ると、自分の來るのを知つて、會社を休んで、長火鉢のある茶の間にかくれて、こつそりかれとかの女の應對するさまを聞いてゐるかも知れなかつた。かれは何となく落附かない風で、じろ〳〵女の方を見たり、土產物を無造作に其處に出したりした。

かの女もきまりのわるさうにして、座敷を出たり入つたりした。

『子供は？』

かう訊かうと思つたが、さううちつけに訊くのがあたりの氣分を破壞するやうな心持がしてよした。

平凡な普通の挨拶が繰返された。

果して！『果してかの女は征服された！』かういふ風に彼は思つて、不愉快な心が湧き上つて來た。

下りては見たが、土産物の漆器やバナヽが重いので、かれは車夫にそれを持たせてあとからついて來させた。

それは細い巷路をづうと入つて行つたやうなところで、その中には、それと同じつくりの家屋が二三軒あつた。

かれは不思議な氣がした。兎に角その家には新しい狀態があるのであつた。この前來た時とは違つて、幼い兒の啼聲や、物干竿につらねた襁褓がある筈であつた。それがかれの胸にある反響を與へた。あゝして手紙には熱烈なことが書いてあるが――愛情が依然として此方にあるやうに書いてあるが、實際は何うであるかわからなかつた。かれはその狀態を細かに解剖して觀察してやらうといふ氣になつた。

かれはわざと靜かに步いた。

やがてその小じんまりした門がその前に來た。

かれは暫し立ち留つて、あたりの氣勢を聞いた。

何の物音もしない。あたりはひつそりしてゐる。周圍を見廻しても、物干に襁褓のかゝつてゐる樣子もなければ、子供の啼聲らしい聲も母親のそれをあやすやうな聲もきこえない。それでもかれは猶暫く立つて聞耳を立てゝゐた。

と、不意に、後の家の戸があいて、そこから誰か出て來る氣勢がしたので、あやしまれてはと思つて、か

それは今度寄つて來た前の旅行の時だ。その時は東京まではやつて來なかつた。大阪まで行つてそこから引返した。

かう思ふと、そのO市の小ぢんまりした山寄の住宅に對する記憶がいろ〳〵と思ひ出されて來た。かの女がO市に行つてからそれで四度目、今度で五度目だ。

かれは大きな停車場で下りて、そこで車を賴んだ。その家は停車場からかなりにある。いつも二十五錢取られる。賑やかな町の家並、人の大勢集る大きな橋、そこを上下する帆影、名高い公園の裏山につづいてならんでゐる丘の松林、さうしたものを目にしながら、かれはいつも樂しいやうな苦しいやうな悲しいやうな思ひに滿されて行つた。無論、かの女も亭主も、前に既にかれの手紙でかれが何時の汽車でやつて來るかを知つてゐるのであつた。

町は段々さびしくなつて來た。丘の松林も近くなり出した。もう間もなくその家のある一廓が來るのであつた。場末になつた町には、小さな八百屋があつたり、小間物店があつたりした。

次第に道は高くなつて行つた。午前の日は明るく照りつゝあつた。かれはいつもきまつて、小さな炭屋の角のところまで來て車を留めた。

『此處で好いんですか？』

『好いんだ、好いんだ。』

『貴樣は淫婦だ。たうとう征服されたぢやないか。』

かうかれが言ふと、

『さうぢやありません。そんなことを言ふなら、私は死にます。貴方と切れる位なら死にます。』

かう言つてすぐ返事が來る。

從つてかれが自暴自棄のやうに辛く過した月日は、かの女にも辛く悲しかつたに相違なかつた。引きつづいて來た手紙はそれを證據立てた。

かれはまたかれとかの女との間に横はつてゐる五日五夜の海と二日二夜の陸とを考へた。それは決して遠くはなかつた。すぐその近所か何かのやうにかれには思はれた。荒い海、凄じい波、大洋の中にぽつつり浮んでゐる島、帆檣の林立した港口、日が照つたり夜が來たりする汽車、それもかれは決して長いとは思はなかつた。時間もなかつた。また空間もなかつた。その遠い距離も、すぐ其處にあるやうにかれには思へた。

×

その女の重い體から生れた女の兒をかれがまのあたり見たのは、その女の兒がよち〳〵とひとり歩きをすることが出來る頃のことであつた。

の離座敷、そこにかれ等二人は夜寢ることになつてゐる。その室の片隅に、簞笥が置いてあつて、その上に鏡臺がある。その鏡にかの女の顔が映る。……ある時はかれとかの女の並んだ顔が映つた。從つて亭主とかの女と並んだ顔も映るに相違ない。

客間の庭には、かの女の好きな花壇が出來てゐて、ダリヤだの、ヒヤシンスだの、アネモネだのがその季節毎に赤い白い紫の花やかな色をあたりに際立たせた。亭主は女を喜ばせるために、あちこちからさうした花の種を買つて來ては蒔いた。

O市の小會社の社員の家としては、小じんまりして居心地が好い。かれは午前の中によく亭主の出勤した後のその家のさまを幻影に描いた。

數百里を隔てた南國の島の中にかれはゐる。周圍には內地とは違つたつくりの家屋が澤山にある。バナナや巴杏斯の綠葉がある。海の遠鳴の音がきこえる。それにも拘らずかの女の住んでゐるO市の住宅がすぐ眼の前にある。かの女が下婢を相手にあちこち掃除してゐるのが見える。婢が井戸端で釣瓶を繰つてゐる。と思ふと、かの女は裁縫に坐つて、此方のことを考へてゐる。今、現に此方を思ひつゝある。

『作や、まだすまないの、勝手が――』かう言つてゐる聲がきこえる。

此方が、かうしてバナヽの窓の下で思つてゐることがすぐ向うに通じてゐる。確かに通じてゐる。丁度波動の原則で出來た無線電信のやうに……。

かうかれは吹鳴つたりした。しかし、矢張かれに取つては、かの女はその生命であつた。何處に行つても、かれに體と心とを滿足させて呉れるやうな女はなかつた。美しい女は澤山にあつた。白い肌や豐かな頰や眞珠のやうな眼は到る處にあつた。しかしかれは何處にも女の體と心とを發見することが出來なかつた。かれの醉はいつもかの女に向つて覺め、かれの懊惱はいつもかの女に向つて漲つて行つた。

H子――亭主――重い體――さういふ光景が絶えずかれの頭腦の中に廻轉した。

假令淫婦でも、重い體でも、許すべからざる屈辱を感じても、何でも彼でもかれにはかの女が必要であつた。

かれは散々いろ〳〵な女とも戲れ、酒にも荒んだ揚句、ある日、泣きたいやうな心持でSober な顏をして、バナヽや巴杏斯の綠葉に向ひながら、女にあてた長い〳〵手紙を書いた。

×

かの女の住んでゐる山寄りの小じんまりした住宅のさまが、いつも歷々とかれの眼に映つて來た。小さな門、それを入ると格子戸、そこには靴ぬぎがあつて、右に瀨戸物の長い丸いステッキ入れが置いてある。その玄關の二疊、亭主が朝早く會社に行く時には、かの女はそれを見送つて出る。綺麗に結つた庇髮が眼に見えるやうだ。玄關の二疊から、奥が茶の間、そこに長火鉢が置いてある。その隣が六疊

口を取卷いた山に靡いた。

そればかりではなかつた。かの女はそれから三月ほど經て、海を越えて、はるぐ〵かれに逢ひに來た。その時、かれは『もう歸るのはやめたら好いだらう、』と言つた。しかし、女はそれに應じなかつた。

『ね、もう少しかうして置いて下さいね。時が解決して呉れますからね。』かう言つて歸つて行つた。

——その時も、この埠頭から汽船に乘つて行くかの女をかれは送つた。かれは時が、やがて解決して呉れるだらうと思つた時が、更に有効な解決をして呉れないのを考へずには居られなかつた。かれは蒼いさびしさうな顔をして、艀やランチの往來する埠頭を靜かに歩いた。

×

女からの手紙は、引きりなしに來た。かの女は男の變つて行く心を恐れたのである。さうした報知を得て、『これはとてもだめだ、』と思つて、かれのあきらめて了ふのを恐れたのである。三通、四通、五通、——それもいつも長い手紙で、『許して下さい——』といふ言葉が到るところにあつた。

かれはその時分自暴自棄になつたやうにして、茶屋から茶屋へ、女から女へと飮んであばれて歩いてゐた。時にはその女の手紙が二日も三日も開封されずにかれの机の上に置かれてあつた。時にはその『許して下さい——』が大きくかれの醉眼に映つた。『馬鹿々々しい。愛情が俺にあると言ふのか？淫婦！』

かれは埠頭へとよく出かけて行つた。

いろ〳〵な思ひ出がかれには漲つて押寄せた。『ぢや、嫁くには嫁きますが、Ｓさんとは切れませんから。』かう、女はその父母にも、その新たに夫になる人にも打明けて、皆もそれを承知の上で、この埠頭から今の亭主に嫁して行つた。父母や亭主になる男は、それを普通一遍に、『なアに、離れてゐればぢき忘れて了ふ。彼方にもその中には妻が出來る。』かう思つて、存外輕く解釋して、『それでも好い――』と言つて、そしてかの女をつれて行つたのであつた。

その普通一遍の眞理に、彼の女が段々征服されて行くのを思ふと、かれはじつとしてはゐられないやうな焦燥を感じた。

埠頭では、かれは長い間、ぼんやりして海に見入つた。

その別れの最初の光景がいつもかれの頭に浮んだ。かれは泣いた。何遍も何遍も手を握つた。『決してきれないから。』かうかの女は平氣で親や親類の前で言つた。沖には汽船が碇泊してゐる。煙突からは黒い煤煙が颺つてゐる。艀やランチは絶えず碧い海の上を往來してゐる。やがてわかれる時が來た。女は艀に乘移つた。段々それが遠く遠くなつて行つた。かれはその艀の汽船に着くまでその埠頭を去らなかつた。汽船に乘つてからも、女は甲板の上から白いハンケチを振つた。丸で活動寫眞のやうであつた。

その夜、その汽船に出帆した。あくる朝行つて見ると、港は空しくがらんとして、灰色の雲が佗しく港

綠の葉がまだ彼方此方に殘つてゐた。『月の始めに相違ない。』かう思つて、かれは猶ほそれを繰つた。そしてその時分は何うして暮してゐたかを記憶から呼び起した。

『――日、釣に行く』と書いてあつたり、『――日S來る。共に酒飮みにT亭に行く』と書いてあつたりした。その時分のさまがあり〳〵と思ひ出されて來た。その間には、女から手紙が來てゐたりした。かれはその手紙を多い手紙の中から搜し出した。別に變つたこともなかつた。さびしさと戀しさとが書いてあるばかりであつた。ふとあることを思ひ出した。

『さうだ。さうだ。此時分だ。一夜中眠られなくつて、輾轉反側したことがあつた。さうだ。あの時に相違ない。』かう思つてまたかれは赫とした。

家にじつとしてゐられなかつた。何うしても一度行つて、實況を見て來なければならないと思つた。かれは茶屋から茶屋へと行つて、酒を飮んだ。思ひ出してもゾッとするほどだ。その頃、かれは更に一層ヒドイ放蕩兒になつて、女も五人や六人には關係した。

かれの家は中流の產のある家ではあつたけれども、それでもそのまゝかの女のゐる遠い處へ出かけて行くことが出來なかつた。幾度か計畫してそして目的を達しなかつた。悲しいではないか、かれとかの女の間には、五日五夜乘らなければ越えることの出來ない遠い海と、猶それから二日二夜汽車に乘らなければならぬ陸とが隔てゝゐるのである。

――どんなに私は悲んだか知れません。私は私の體を八裂きにしても足りないと思ひました。愛情も何もなしに、かうした體になるといふことは――。又さうした因果な子が私の體に入つて來たといふことは――。なんて人間つて悲しいものでせう。醜いものでせう。淺ましいものでせう。しかし、何うか許して下さい。勘忍じて下さい。ね、ね。貴方の愛情なしには、とても〳〵私は生きてゐられないんですから………。許して下さらなければ、私は死んで了ひますから――

それを讀んだ時には、頭はグワンとした。立つてゐた體が後に倒れさうになつた。姙婦！ かう思はずかれは叫んだ。かの女から來たものはどんな手紙でもかれは丁寧に保存して箱の底に藏つて置いたが、その時ばかりはかれは思はずそれをビリ〳〵破つて棄てた。

『たうとう征服された！』かういふ思ひが、一杯にかれの頭を占領した。つゞいてつはりになつてゐるかの女の蒼白い顏と、やゝ人目にも附くやうになつた大きな腹とが映つた。否それよりも一層かれに辛かつたのは、かうした體になつた原因であつた。

原因の說明は簡單であつた。

かれはいきなり書棚に挾んでゐる日記を取つて、それを飜した。かれは指を折つた。今、七月と言ふ言葉が女の手紙にあつたので、逆のぼつて其日の條をあけて見た。

それは冬の寒い頃だつた。勿論寒いと言つても、南國の暖いところなので、雪も降らず、水も凍らず、

つた。

何の彼のといつても、かれは一緒にさうして暮してゐるといふことが妬ましく腹立しかつた。あの男に對してかの女が愛情を持つてゐないことは確かである。その證據はいくらもある。無論今でも愛情の自分にあるのは手紙でも明かに知ることが出來る。しかし長い間の同棲のために、あの女は遂に征服されて了つたのではないか。

女の手紙はその前から少し調子が變であつた。悲觀した言葉ばかりが書いてあつた。大きな罪惡を犯したやうなことばかりが書いてあつた。不思議だと思つた。しかしそれと夢にも知らないかれは、その悲觀した形が嬉しかつた。自分に靡いて來る言葉だと思つた。『同棲に堪へられなくなつたんだ』と思つた。離れてはゐても、遠い海山を隔てゝゐても、此方の苦しんでゐるだけの煩悶悲哀は矢張女も受けてゐるのだと思つた。それが心強かつた。ところが次第にそれがわかつて來た。『つく〴〵人間があさましく厭になつて來ました。いつそ死にたいと思ふことが日に何度あるかわかりません。貴方さへゐなければ、――貴方のことさへ考へなければ。あゝつく〴〵厭だ……人間が厭ですわ。』かうした言葉をつらねた手紙が二本も三本も來た。そして最後に、『どんなことがあつても私を捨てゝは下さいませんね。切れるのはいやですから……切れる位なら死んで了ひますから……』かう言つて此方の返事を聞いてから、身重になつたことを知らせて來た。

最後に友達は、『要するに君とその女とは、現在の空氣をこはしたくないんだ。何處までも、罪の悲哀から來る快感といつたやうな氣分を味はつて居ないんだね……』といつた。

すると細君は、『でも、先方の御亭主つて方が妙ぢやありませんか、殿方はさうしたことを見て居られない筈ですがね。』

『當り前ならさう來るんですがね、そこがあの男の變つてゐるところでさァ。』

『しかし、どうしても不自然な關係と謂はれることは免れないよ。』と友達はいつた。

『さうさ、因襲は卽ち自然といふ命題が、例外なしに通用するものならばねえ。』

こんな輕い心持で彼れは居られなかつた事があつた。それはその女に子供が生れると、初めて聞いた當時である。

×

それを聞いた時には、かれは頭をガンと鐵の棒か何かで撲たれたやうな氣がした。かれはじつとしてゐられなかつた。用事も何も捨てゝかれは外へ出た。海岸へ行つた。埠頭に繫いである汽船を見て、これからすぐにでも行かうかと思つた。かれの頭には火と水とが一緒にやつて來たやうだつた。自分のでなしに、亭主の子供……あの肉體の中に亭主の愛情の塊りの子供! かれは歩きながら頭の毛を掻き挘

といふので、無理往生に、今の處へ嫁かせたんだからな、さうして、僕とはどうしても切れないと、女がいつたのを、多寡を括つて聞き流しにしたんだからな。』かう、なんの不思議も不自然もないやうにかれは話した。

『ぢや、歸りがけに、またそこで道草ですか。』

かういつて友達の細君は笑つた。

聞かるゝまゝに、かれは輕い心持で、色々なことをしやべつた。『だつて、そんな不自然なことがよく出來るね。早く解決してしまひ給へな……さうした宙ぶらりんの境遇に居ては、お互ひに不愉快ぢやないか。』

かう友達にいはれて、『それは、僕だつて無論、キッパリと片附けて仕舞はなくちやならないと思つて居るし、先方も恐らく、さう考へて居るだらうよ。しかし、さうするには、僕が身を退くか、先方の男が風來者の癖に、われ〳〵の戀の禁苑に踏み込んだ罪を悔いて處決するか、さも無くば、女が僕か彼の男かどつちにしろ、親和力の強い方と化合して仕舞ふか。外に道は無いのだ。處が、これが悪因緣とでもいふもので、なんとも仕樣がない。成行きに任せるんだね。』こんなことをかれはいつて、それから久し振りで吉原の女の話などを、面白可笑しくしやべつた。酒もかなり飮んだ。友達夫婦には、面白い男、無節制な男、琉球の男ででもなければ、さうしたことは出來ないと思はれたに違ひなかつた。

2と3

×

愈々歸國するといふので、昨日、郊外の友達の家へ暇乞ひに行つたまゝ、そこへ泊つて來たかれは、昨夜の自分の行動を翻つて考へて見た。あゝした輕い心持、無節制な言葉、何事にも頓着しないやうな態度、あれが實際の自分だらうか、あゝしたのん氣な輕い心の持主で自分はあるだらうか。友達の細君は、『さうですか、其處へ寄つてゐらしつたんですか、此の間御上京の時も……』かういつて笑つた。友達は友達で『初めにどんな事情があつたとしても、よく平氣で先方の家へ行かれるねえ……一體、君が行つてるうちは、どうしてるんだえ、その男は。』と、かれは得々として『大方、急に態度も變へられないといつたやうな見得かなんか知らないが、大いに寛容の美德を發揮して呉れるよ、……しかし考へて見るとそれも仕方が無いさ。もと〳〵彼の女の兩親や、親類が寄つてたかつて、僕のやうなやくざ者に呉れては、娘が末始終、泣きを見るのは知れ切つて居る。それよりは、溫和で實直な結構人が安心でよい

れる凄じい電光と雷聲とは一緒に來た。二人は思はず打伏しになつた。しかもその瞬間に生佛のかけてゐる金緣眼鏡がキラキラと美しく光つたのを二人は見たやうな氣がした。再びかれ等が頭を上げた時には、生佛の姿はもう其處に立つてゐなかつた。

つきりなしに縱横に交叉する電光につれて、雷聲が其處からも起つた。何とも言はれない凄じい嚴粛な光景となつた。

堂の中からは、その高い透つた生佛の聲が落ちて來た。

『……爾等罪ありながら、罪ありとも知らざる者よ。……魂を蔑ろに自から己を汚しつゝしかも自己の汚れたるを覺らざる者よ。火と水の中にある者よ。火と水の中にありながら火と水の中にあることを知らざる者よ……爾等は皆な救はれざるべからず……菩薩は皆爾等と倶にあるべし。イエスキリストも世尊もマホメツトも皆な爾等と倶にあるべし……爾等一度この天地の憤怒畏怖を抱かば……しかし畏るゝ勿れ、我あらずと雖も畏るゝ勿れ……我は卽ち爾等と常に倶にあり。また、爾等地獄に落ちたるものと雖も、專念にその地獄より浮び上ることを念とせよ……然らば地獄の中にも新しき美しき花の咲き出づるを見ん。世間に對して怒ること勿れ、世間の迫害に畏るゝ勿れ……それよりも爾等は先づ自己を畏れよ、自己の心を畏れよ。然れどもその心も……その心も……亦……』突然凄じい雷聲が起つたので、かれの聲はそれに掩はれて了つた。

堪らなくなつたやうに、二人の學生はまた再び體を宙にして高窓に凭りかゝつた。その時は生佛は最早さつきのやうな狀態ではなかつた、巨岩の如き體はすつくと立つて、爛々とした眼はあたりにかゞやきわたつた。『心も……心もまた畏るゝ勿れ、心も亦虛妄……』かう言ひかけた時、天地も覆るかと疑は

學生の一人は高窓に手をかけて、そして體を半分宙にして中を覗いた。
『見えるか。』
『見える、見える！』
もう一人の方もつゞいて同じやうにして窓から覗いた。
驚くべき光景がそこにあつた。かれ等は、その生佛が右の手を上にして堂の殆ど中央に立つてゐるのを見た。眼は微かに明いて上を向いてゐるのを見た。そしてその周圍には、さつきの老婆を始め、信仰者の群がひれ伏して手を擧げて珠數を一心になつて揉み上げてゐるのを見た。熱狂した屋の内外の群集が混亂と不整と喧囂とを無制限に發揮してゐるにも拘らず、そこの一角だけには、驚くべき嚴肅と沈默と苦痛とが漲り渡つてゐるのを見た。二人の學生は一目見たゞけで胸が俄かに緊張されるのを感じた。恐らくさつきの小さい男がそれを見ても矢張その嚴肅の氣に撲たれずにはゐられまいとかれ等は思つた。
しかし體を宙に浮かせてゐるかれ等は長い間それを見てゐられなかつた。
かれ等はもつと適當の場所がないかと思つた。そして彼方此方と搜した。しかし何處にもかれ等の入り込むやうな隙間はなかつた。と急に凄じい雷聲は彼方の山から此方の山へと轟きわたつた。
思はずかれ等は頭を下げた。
雨は愈々烈しさを增して、今は殆ど瀉ぐばかりに降つた。飛沫は白くなつて山の雲と雜り合つた。し

夕立が來ても、何處かに入れるからな。』

『この人ではな……雨やどりをするやうな餘地があるかしら?』

『でも、此處にまご〳〵してゐたつてしやうがない。』

『それもさうだな。』

で、かれ等は松や杉の樹の中を拔けたり、まご〳〵すれば崖から落ちさうな草藪の中を通つたりして、とても路からでは、群集に遮られて近づくことの出來ない堂の方へと近寄つて行つた。しかしかれ等がまだ全く堂に達しない前に、段々大きくなつて行つた雷聲に伴なつて、銀箭のやうな雨がサッと凄じく落ちて來た。

新しい涅槃圖の中軸らしい光景は始まつた。縱横に鋭い角を引いて凄じく光る電光、つゞいてあたりも振動するやうな雷聲、雨の白く降り頻る中に、ぬれた髮、ぬれた衣服、さうしたものには頓着せずに、手を擧げたり、喚いたり、泣いたり、叫んだりして、群集の堂に迫つて行くさまは、この世の光景とは思はれないやうな感じをかれ等に與へた。かれ等もあたりのさまに興奮したやうにして、雨の瀧津瀬のやうに降りそゝいで來る中をずぶ濡れになつて辛うじて堂の庇の下のところまで行つた。

『だア、だア、だア』といふ聲と『なんまんだア、だア』といふ聲とが一つになつて、小さな堂は殆ど群集のために押潰されさうに見えた。雷聲や雨の瀉いで來るさまなどは誰も心に留めなかつた。

今まで明るく照つてゐた午後五時過の日影はすつかり曇つて、何處となく凄じい陰氣な風が蓬々として暗い谷から吹き上げて來た。樹下の群集の顏もいやに暗く佗しい色を着けて來た。

『變な天氣になつたね。』

『さうだね。』

『夕立でもやつて來やしないかな。』

『さうさな。』

二人の學生は、ある大きな松の樹の蔭に立つてそしてあたりを眺めた。

谷といふ谷、眼に見えるすべての谷からは、半ば白く半ば鼠色をした雲が渦まくやうに捲き上つて、それが此方の高い峯の上の大きな雲に噴烟のやうになつて雜り合つて行くのが手に取るやうに見えた。そして黑い雲の間からをり〳〵洩れて來る黄い佗しい日影は、さながら地獄でも展げて見せるやうに、ぱつと一面に、群集の上を照して、そしてまたすぐ翳つて行つた。と、突然金石と金石との觸れ合はされたやうな雷聲が暗い谷から起つた。

『夕立だな、困つたな。』

かう一人の方が言ふと、

『兎に角堂まで行つて見ようぢやないか。此處まで來て、行つて見ないのも殘念だ。……堂に行けば、

り坐つたりしてゐるものもあれば、手を合せて夢中に祈念してゐるものもある。松の木の蔭に集つて趺坐してゐるものもある。慈父を失つたものゝやうに聲を擧げて慟哭してゐるものもある。さうかと思ふと、雜遝した中を押分け押分け、何うしても今一度その堂に行つてその生佛の顔を拜まなければならないといふやうに熱心に進んで登つて行くものもある。そしてそれ等の人達の顔の表情のかげには、てんでに持つた、或は親に對する罪、子に對する罪、世間に對する罪、男女に對する罪、主人に對する罪、不正と我慾とに對する罪、さうしたものが一つ一つ細かに絡みついてあらはれてゐるのを見た。

二人の學生は、まだその半ばにも至らない中に、さつき聞いた小さな男の皮肉と冷笑とを憫まずにはゐられないやうな心が心から起つて來た。これが本當の人間ではないか。かうした何もかくさないまた何も望まない心が本當の人間の心ではないか。かうしてあるものに熱中する形が本當の人間ではないか。それを——離れて冷かに見てゐる人間は、何のために生きてゐるのか。唯、人間を見たり觀察したりしてそれを冷かに批判するために生きてゐるのか。人間として生きるためでなくして人間として眺めるために生きてゐるのか。——二人の學生も、次第にあたりの渇仰の狀態の中にその心の解けて行くのを覺えた。

ふと氣が附くと、黑い凄じい雲が大きな鳥の翼をひろげたやうに、次第に頭上に近く押寄せて來るのをかれ等は發見した。

二人の學生は益々不思議な氣がした。何れが本當で、何れが虚妄か、かれ等にはちよつと判斷がつかなかつた。しかし到るところで眼に映る衆人の渇仰隨喜の涙をかれ等は虚妄と思ふことは出來なかつた。また山の上の生佛もその男の言ふやうに大山師と言ふ風に考へて了ふことは出來なかつた。しかし、實際科學の全盛の今の世に、新しいメシヤを見たり、または釋迦の再生を見たりすることも不思議でないことはなかつた。かれ等は室に一度は歸つて來たが、いろ〳〵なことを考へると、落附いてそこにはゐられなかつた。『おい兎に角、行つて見ようぢやないか、』と一人の方が誘ふと、『行つて見よう、行つて見よう、』と他の一人もすぐそれに應じた。

二人は急いで支度をしてそして出かけた。

山の上に達する路は、非常な雜遝で、それを押し分けて進むのは容易なことではなかつた。涙と汗と珠數を揉む音と、何とも形容の出來ない『だア、だア、だア』といふ聲はあたりに充ちた。群集がそこに一群、かしこに一群、何も彼も忘れたやうに、または人間の本性を失つたかのやうに、泣いたり喚めいたりしてゐる形は、かれ等に不思議な『繪』を展げて見せた。新しい涅槃圖の最初の一幅を見るやうな感じを起させた。

折れ曲つた路を山の上近く進んで行くにつれて、その雜遝は愈々加はつた。人達は路上に伍して跪いた

一人の方の學生は近寄つて、

『貴方、行つて御覽になりましたか。』

『行つて見た……大山師さ。あつちこつちで散々持餘されて、食ふに困つて、こんな山の中に來たんですよ。』

『でも……』

『君等も矢張愚民黨かね。臨終をするなんて、大きなことを言つて、まさか立腹を切つて見せるわけにも行くまい……。手でさ、それは、奴の……。この前にもそんなことをやつたことがある。……今の科學全盛の世に、新しいメシヤがあつて堪るものか。君達は知らないか。あれで、あの大山師、女にかけては、中々えらい腕を持つてるんだぜ。』

『へえ、そんな話があるんですか。』

『奴の前生を知つてるものには、奴のおどかしなんか駄目さ。』

『それで一體何う言ふんですか。』

『今に死ぬつて言ふんだよ。死んで見せるつて言ふんだよ。』

かうはき出すやうに言つたと思ふと、そんなことは馬鹿々々しいといふやうにして、その男はさつさと向うに歩いて行つて了つた。

時には歩き、時には留り、また時には調子のついた『あゝだァ、だァ、だァ、だァ』といふ聲がきこえた。自暴になつたやうに夢中に珠數の手を高く擧げてそれを揉んでゐる男の顏から汗がだらだら膏のやうに流れた。

『なんだ！　山の上の男が今死ぬんだ？　それは見物だ。』

こんなことを言つて、急いで向うへ驅けて行くものなどもあつた。

種々な噂が二人の學生の耳に入つた。或は深い信仰に入つてゐるもの、或は半ばそれを信じて半ばそれを疑つてゐるもの、また不思議なこともあればあるものだと思つて默つて見てゐるもの、何は何でも兎に角面白い現象だと思つて見てゐるもの、さうしたいろいろの人達の心がその顏やら態度やらにあらはれて見えた。

『愚民共はしやうがないな！』

ふとかうした聲が二人のすぐ上の所で聞えた。二人の學生は振返つて見た。

かれ等にはかうした熱狂の中に、またはかうした渇仰隨喜の中に、さうした冷やかな言葉を放つものが際立つてその注意を惹いた。かれ等は群集をやりすごしてから、その男の方へ戻つて來た。

脊の低い、いやに皮肉な、眼のきよろきよろしたその男は、

『矢張、田舍だ。あゝしてごまかされて賽錢の一つも投げるんだからな！』

幾日かの滿願の時を待つて、遂にあの世にお歸りになるといふお言葉である。それでもまだ私達はその清淨な御聲を聞き、つよい正しい御眼の光を見奉つて、この汚れた心を淨くすることが出來た。しかしもう滿願の時は近づいた。臨終に入らせられる時は近づいた。涅槃に入らせられても、生佛さまは常に私達と一緒にあると仰せられるけれど、それでももう再びあの御聲は聞くことが出來ない。あの御眼は見ることが出來ない……『それでかうして泣くのぢや、』と言ふことであつた。

それを聞くと、信仰者は、一齊に『南無阿彌陀佛』と言つて皆な珠數を繰つて大地に泣き伏した。

老婆の歩いて行く跡には、稱號を唱へる聲と、珠數を繰る音と、大地にひれ伏す氣勢とが到るところに續いた。炊事場の近くに老婆の立留つた時には、米を炊いてゐるものは、その米を置き、水を汲まうとしたものはその柄杓を下に置いて、そして皆その周圍に走り集つた。

大きな家屋の隅の隅にその室を持つてゐた二人の學生の耳にもその噂はきこえて來た。二人が急いで出て見た時には、その群集に取卷かれた老婆は、午後の日を一面にその後に受けながら、靜かに坂を賣店などのある方へと下りて行くところであつた。時々、老婆の何とか言ふにつれて、群集は大きな聲を擧げた。

二人はあとをついて行つた。

何處の家からも人達が皆ぞろ〳〵出て來た。群集の圈は次第に大きくなつて行つた。

と聞えた。そしてそれを繰返す度に涙はぼろぼろと大地に落ちた。
その老婆は今までいつも山の上の堂の中に見出されたすぐれた渇仰者の一人であるといふことが、不思議な動搖と空氣とを四邊に齎らした。噂はそれからそれへと傳はつて行つた。
老婆が涙の間に絶え絶えに話すところに由ると、その生佛さまは、去年自分等の住んでゐる地方から忽ち姿を躲して了はれた。『もう世は末ぢや。末法の世ぢや……私の力では何うすることも出來ない。』かう仰しやつて、そして何處に行くといふことも仰しやらずに搔き消すごとく姿を躲して了はれた。そのため、村は闇になつた。世界は闇になつた。私達は再び元のやうに、父子相そこなひ、君臣相戰ひ、兄妹相姦し、利慾の下に人間同士が互にその肉を食ふやうな闇の世に戻つた。そのため私達は何んなに生佛さまの踪跡をさがして歩いたか知れなかつた。私達は子供が親をさがすやうに、家來が主人を慕ふやうにしてそこからそこへとさがして歩いた。この世間に居られるものならば、草を分けても搜し出さなければならないと思つた。ところが生佛さまはいつかこの山の上に來て居られた。それと知つた時には、私達は何んなに喜んだことか知れなかつた。誰も彼も皆なその跡をお慕ひ申して、險しい山坂を踰えてこのS溫泉場に登つて來た。しかし險しい山坂も何であらう。若い者の容易に登れない山路も何であらう。生佛さまに再び逢ひ奉らんがために、老いたものも、女も、幼いものも皆なそれを踰えてやつて來た。そして光明はまた再び其處にあつた。渇仰隨喜の涙は瀧津瀨のやうに流れた。しかし、生佛さまは

矢張毎日のやうに其處に出かけて行つた群の一人であつた。敗屋の中に、周圍に一杯に滿ち渡つた群集、大きな冴えた金石のやうな聲、難有いと思はれるところに行くと、老若男女は皆な珠數を繰つて稱號を唱へて合掌した。ある時には、餘りに深く感動した群集が家の外から、周圍から皆ドシドシと狹い堂の中に押詰めて行つて、その僧の立つてゐる裾のあたりを取卷いて熱狂したさまなどをも二人は頭に浮べて見た。

ある晴れた日の午後であつた。テントの張つてあるところから大きな浴槽に通ふ廣場——正面に例の高い噴泉の白く奎涌してゐるのが見えて、熱湯が湯氣を立てゝ縱橫に荒れてゐるところに、一人の白髮の老婆の珠數を持つたまゝ跪いて泣いてゐるのを中心にして、男や女や、荒れた唇や、蓬なした髮や、半裸體の銅色した肌や、粗い縞の浴衣やらが取廻いた。斜にさし込んだ日は、赤く其處に立つてゐる肥つた田舍者の顏を照した。

『生佛さまの臨終はもうお近づきになつた……もうあの難有い御說法も、あの難有い御聲もきくことが出來なくなる……あゝもう闇ぢや……あゝもう闇ぢや……元の闇の世界にまたなつて了ふぢや！』

かう半ば泣きじやくりながら、跪いた老婆は何遍となく繰返した。『あゝもう闇ぢや……』といふその言葉が、餘り度々繰返されるので、終には一種の調子を帶びて、それが『あゝだア、あゝだア、だア』

『それは面白いな。』

『だから、事務所の老人の話では、丸で後も先もなささうなことを言つて、ひよつくりこの山に出現して、急に浴客の信仰を得たやうに言つてゐたけれども、さうぢやないらしいよ。かねぐ信仰してゐた信徒が、あれのあとを追つて、この山の上まで集つて來たといふ形も大いにあるんださうだ。』

『さうだらうな……それは面白いな。何故君はそれを今まで話さなかつたんだ？』

『だつて、昨夜は君は寢てゐたし、今朝はちよつとその話を忘れてゐたからね。』

『さうかな……』一人の方は考へて、

『それぢや別に、僧侶つて言ふ譯でもないんだね。』

『僧籍にもゐたことはあるやうなことを言つてゐたよ。何でも佛教ばかりではなく、耶蘇教もやれば、哲學もやつたらしいことを言つてゐたよ。何でも社會主義者の僧侶の中にもその名があつたつて言ふことだ……』

『兎に角、知識は豐富に持つてゐる人に違ひない。外國と日本の今の事情にも決して暗くない。それは、この間、ちよつときいただけでもわかる。』

かれ等はそんな話をしながら噴火坑から下りて來た。

かれ等は折れ曲つた山道の雜遝を思ひ出した。またその荒れ果てた山上の堂をも思ひ出した。かれ等も

『さう言へば、あの生佛は、これまでにも彼方此方で、多少の奇蹟をやつて來たといふ話だね。』
『そんな話をきいたかえ？』
『昨夜、おそく湯に行つてゐると、その話をしてゐる人があつたよ。湯の中はランプ一つしかついてゐないから、それを話してゐた男は何ういふ人だつたかちよつとわからなかつたけれど、何でも白鬚でも生えてゐる老人らしかつたよ。M縣では知つてゐるものがかなりにあるといふことだよ。何でも去年はPあたりの山村にゐたさうだ。そして矢張大勢の信仰者を率ゐてゐたさうだよ。』
『さうかね。それは初めて聞いた。』
『生れは何でもF縣の梁川あたりの山の中だつて言つてゐたよ。陸軍の中尉あたりまでなつて、戰爭にも行つたことがある男ださうだ……。昔から不思議な、宗教めいたことばかり言つてゐるやうな男だつたつていふことだつた。二三年前には、仙臺で大道說法をやつて、信仰者が大變出來て、警察から取締られたことがあるさうだよ。新聞などにも隨分書かれたものださうだ。しかし、決して惡いことはしないから、警察でも何うすることも出來ない。實際、生佛かも知れないんだけれども、さういふものは取締上非常に厄介なので、縣では成るたけ自分の縣に置かないやうに、他縣へ行つて貰ふやうに、やうにとしたんださうだ……。石の卷あたりでも、隨分信仰者が出來て騷ぎだつたつて言ふやうなことを話してゐたよ。』

『不思議な氣がするねえ。あの堂に、あゝした人間がゐると思ふと。』

かう一人の方が言つた。

『本當だ……』

『あゝした人間も、矢張、僕等と同じなんだからな。同じ血も流れてゐれば同じ心や同じ感情も持つてゐるんだからな。僕等にだつて、場合に由れば、あゝした心の形になることはないと言へないからな。』

『それはさうだ……』

『何の意味もなしに、實際的方面の何の要求もなしに、あゝして説法してゐるのだから不思議ぢやないか。そこがまた人を引きつける力が出て來る處ぢやないか。實際、死の近づいて來てゐるのを自分で豫感してそしてあゝして説法をしてゐるのかも知れないからな。』

『實際世間の困難や不如意を餘りに多く嘗めると、あゝした氣分になるかも知れないからな。……何うしたつて、さうした鬱積した氣から起つた説法でなくつては、あゝまで人を引きつける譯はないからね。』

『曾てこの山だつてあの僧のやうに凄じい怒號をやつたことがあるんだからね。』

『天然だつて、人間だつて、同じことだ。一つも違ひやしない。』

かう言つて深く思ひ當つたやうに一人の方は考へに沈んだ。

一人はふと思ひ附いたやうに、

『本當にさうだ……あの生佛さまの仰有る通りだ……。そのために、私達はこれまで苦んで來たのだ。今日から改めよう。……必ず思ひ改める。』

こんなことを言つてゐる人達はそこにも此處にもゐた。誰一人として、その生佛の功德を說かないものはなかつた。人達は女も男も用事を放つたらかして、朝から山の上に登つて行つた。

二人の學生は益々その特色ある溫泉場のさまに心を惹かれた。或時にはその大きな船に似た家屋が、すつかり深い霧の中に埋められて、丸で大海の中にでもゐるやうな心持になることもあれば、凄じい雷聲が山の一角から起つて、天地が今にも覆るかと思はれるやうな恐怖に全身を襲はれることもあつた。そこではすべてが澄んで、張りつめて、疲れてだらけてはゐられないやうな氣がした。

澄んだ空氣の中に、白いくつきりした色を見せて、怒號して空に向つて迸つてゐる噴泉は、をりをりかれ等にある暗示を與へた。その巫涌にも、矢張山の上のその僧の憤怒に似た形が感じられた。

ある日、そこからさう大して遠くないB岳の噴火坑を探りに行つた時には、かれ等は饗舍で教はつた種々の岩石やら高山植物やらを彼方此方にさがして、火口壁のあたりを其處此處と步いた。そこは溫泉場よりも、その溫泉場の上にある堂のある山よりも、更に高く碧い空に聳えてゐるので、その堂とその堂に向つて步いて來る人の群とがそこから小さく黑く見えた。

勞れて岩石に腰を下した二人は、默つてその堂を見下した。

…路といふ路なんかありやしない。もう引きかへさう……』かう一人は言つた。一人の方も、とてもこれは駄目かと思つた。かれ等は行かうか引きかへさうかの二途に迷つて、暫く崖の下の岩に腰をかけて休んだ。

『でも、折角こゝまで來たんだ。もう少くとも三分の二は來た。此處で歸つて了つては、折角こゝまで艱難を經て努力してやつて來たことが冗になつて了ふ。いかにも殘念だ……。それに、人の全く行けない溫泉ではない。この險を冒して行き得る人もいくらもあるんだ……行かうぢやないか。』

かう一人が言ふと、

『行かう!』

かう他の一人も應じた。そしてかれ等は再び路を谷と谷との間にもとめて、そしてやつて來たことを思ひ出した。そしてその勞苦が、普通でなかつた勞苦が、かうした不思議な溫泉場や、そこにゐる熱狂した人達や、長蛇のやうに山の堂に連續して詣でゝ行く群集や、燗々とした大きな眼のかゞやきや、鐘を撞いたやうな高い淨い聲の下にかれ等を伴れて來たことを思ひ起した。かれ等はいよいよ不思議な氣がした。かれ等の身は緣があつて、その低い低い世界からかうした高い淨土に引きあげられたやうな氣がした。

『君も、さうか。不思議なこともあるものだな。』

『あれは一生忘れることの出來ない光景だ……』

『本當だな……』

かう言つて二人の學生は深く考へながら歩いた。

二人は昨日まで滯在してゐた小さな溪谷の温泉場を思ひ浮べた。かれ等には今はそこは人間界の底の底にあるやうに思はれた。さうした考へなければならないことはふかく藏して置いて、むしろそれに觸れることとの辛さのために傍に放つたらかして置いて、平氣で無意味に日を送つてゐる人達の醜さと慘めさとがありありと見えた。此處は何うしても同じ世界とは思はれないやうな氣がした。こゝから比べると、溪谷の温泉場の人達の顏は、何んなに貧弱であつたらうか。何んなに蒼褪めて勞れて見えたであらうか。また何んなに低級なあはれな生活をしてゐたであらうか。かう思ふと、自分達のゐる學舍の慘めな生活が一層慘めに、さながら『餓え疲れた餓鬼』の縮圖のやうになつて見えた。

かれ等はまた昨日登つて來た嶮しい路を思ひ浮べて見た。それはとても人間のやつて來られないやうな路であつた。晝も夜のやうな密林が深く續いた。日光も洩れて來なかつた。谷川は深く底の方で鳴つた。

かれ等は何遍あとへ引返さうとしたか知れなかつた。時には胸を衝くやうな峻阪に逢つて喘ぎ、時には深い谷の中に路を失つて絶望の聲をあげた。あるところでは、『もうとても駄目だ。とても行かれない…

かう言つて學生達は山路につかれた脚半をそこで始めて脫いだ。

折れ曲つた山路の群集をわけて、その堂まで行つて說教を聞いて歸つて來た二人の學生は、最早面白いとか、めづらしいとか言ふ心持ではゐられなくなつた。驚くべき不思議を見たといふ心と、ある大きなものに渴仰する念と、人間の罪惡に恐れ戰くやうな念とが一杯にその體中に漲り渡るのを覺えた。爛爛とした大きな血をそゝいだやうな眼、それがかれ等の眼前に歷々とちらついて見えた。その眼にはあらゆる世間の惡德、または罪惡、または虛僞に對する憤怒が燃えて生きてはゐはしなかつたか。または人間の根本の如何ともすることの出來ない運命に熱い反抗を見せてはゐなかつたか。『一方に金持が金を貯めて持つてゐる。持つてゐるといふことは罪惡である。それだけで既に死に値してゐる！』

かう言つた時に輝いたその眼光の中には、かれがさうした人間の惡德に無限に苦められた醫やすべからざる憤怒が充たされてはゐなかつたか。また『妻は夫を欺き、親は子を捨て、女は男を惑はし、同胞相姦し、友人相陷れるやうなこの世の中に……』と言つた時の眼のかゞやきの中には、あらゆるさうしたかれの內部の憤怒があらはれて來てはゐなかつたか。

『不思議だ……』

『本當に不思議だ。あの眼がちらついてしやうがない。あの聲が耳にのこつて忘れられない。』

『僕も始めは笑つて行つて見た一人です。何處かの山師の坊主が食ふに困つてやつたこと位に思つて馬鹿にして行つて見たです。ところが、さうでない……。全く不思議です。人間もあそこまで行くと、あゝなるものかと思ひました……。說法をしてゐるのを聞いてゐると、その男が言つてゐるのでなくて、そのかげにある大きな力のある偉い物がゐて、そしてそれが人間に向つて、人間の罪惡、人間の惡德、または人間の醜い姿を一々指摘してゐるやうな氣がしました。それに、第一、かれは近い中に死ぬと言ふのです。それを見て居れと言ふのです。人間の罪惡を負つて、代つて自分が死ぬと言ふのです……。それなどが大勢の心を第一に支配したんですな……。』かう言つてその紳士は思ひ出すやうにして、『それに、言ふことがいかにも立派だ……本當だ……。人間の考へてゐることを、またはやつてゐることを、ちやんと見透してゐる。一々本當の、思ひ當るやうなことばかりです。肺腑をつくやうなことばかりです。確かに不思議です。』

『何んな男ですか？』

『立派な男です。體格も大きい。眼光も爛々としてゐる。鬚がかう一面に……』と手眞似をして、自分の顏を撫でるやうにして、『一面に生えて白く垂れてゐる。信じたものには、說法してゐる最中に後光が見えるなどと言つてゐますが……』

『それは面白い。是非行つて見ませう。』

『貴方は行つて御覽になりましたか？』
『わしはまだ行かん。……わしのやうな罪の多いものはとても救はれさうにもないぢやでな。』ちよいと笑つて、『默りくさつてゐる男ぢやつたがな。』
『何處から來たかといふことはつひにわからんですか。』
『わからんな。……この近所のものではないといふことだけはわかるが、何うしてこんな山の中にまぐれ込んで來たか、私も始め度々きいて見たが、默りくさつてつひぞ話しをらん。』
『ふん……』
また學生達は考へて、
『金緣の眼鏡をかけてゐるのは面白いな。坊主でもないいんだな。』
『さうだな……一つ行つて見るんだな。』
こんなことを二人は言つた。
そこでかれ等は本箱を言ひ、ゐる室をきめて貰ひ、自炊の道具などを借りて來た。其處でも此處でもその生佛の感化は著るしかつた。かれ等のわり込んで同宿させて貰つた旅客は、中年の紳士で、何でも東京の方の客だつたが、その人も現に行つて見て、不思議の感に打たれたといふ話をかれ等にしてきかせた。

かれは默つて口も明かなかつた。恐らくは誰もかれが何處から來たか、また何時そこにやつて來たかを知らなかつたであらう。また如何にしてかれが其處に生きてゐたかも知らなかつたであらう。事務所の老人は話した。

『初めは、可哀さうだと思つて、私が米を一日おき位にもつて行つてやつたでさ。……それがなあ、何時の間にか、あんなに大勢に大騷ぎをされるやうになつた。……何でも、始めは女が行つたでさ。それから何でも、M縣の大金持の衆が行つたでさ。その衆は夏になるといつもやつて來る方だがな。それが一度ですつかり信者になつたぢやな。』

學生は訊いた。

『それで說敎でもするんですか？』

『するどころぢやない。それはえらい說敎ぢやさうぢや。大膽な說敎ぢやさうぢや。世間の罪惡と言ふものに對して、一歩も假さない說敎ぢやさうぢや。それに、大きな聲で、丸で、鐘でも撞いたやうで、その時の顏の恐ろしさといつたらないといふことぢや。不動明王の前にでも出たやうぢや。それに、近い中に死ぬと言ふぢや。世間の人達の罪を負つてそして死ぬから、それを見てをれと言ふぢや。』

『ふむ……』

かう二人の學生は言つて考へた。暫くして、

一人の方の學生はかう問ひ重ねた。

『皆なの罪を負つて、あの生佛さまがあそこで涅槃にお入りならつしやると言ふんだ……今の世には、こんな難有いことはねえ。お前さん達も行かつしやれ。そしてな、難有いお説法を聞いてきなはれ。あの生佛さまがお出現になつてから、こゝは、この温泉場だけは、淨土になつたぢや、極樂になつたぢや。』

その熱心な調子は學生達を笑へなくした。かれ等は默つて歩いて行つた。不思議はそれに留らなかつた。その溫泉場に入つて行くにつれて、その所謂生佛に對する渴仰のあらはれは其處にも此處にも見えた。ある女は洗濯をしながらをりをりその手を留めて、手に持つた珠數を繰つて禮拜した。ある男は路傍に立つて山上の堂の方に向いて合掌した。癩病らしい男は大地に跪いて禮拜して涙を流した。

此溫泉場には旅舍はなかつた。そしてその代りに事務所があつた。七月十日から九月二十五日まで。それから後は全く深雪に蔽はれて、あくる年に再び戶を明けるまでは、誰もこの山の上にやつて來るものはなかつた。ところが、今年事務所の老人が來て驚いたことは、自分達より先きに、その上の堂――それは堂と言ふよりも、七八年前に硫黃を採取する人達の住んで起臥してゐたところで、それもその事業の思はしくないために全く捨て去つて了つたものであるが、そこに一人の金緣眼鏡をかけた、珠數を腕にかけた、眼光の烱々とした、俗ともつかず、僧ともつかないものが一人趺坐してゐたことであつた。

『何うしたんです？　一體？』

『…………………』

何も言はずに、こんな難有い不可思議がわからないかといふやうな顏をしてその上さんは此方を見た。

『何うしたんです？　一體？』

學生の一人はもう一度かう言つて訊いて見た。

『あれを見なされ！』

上さんはさう言つて、山の上に續いた黑くなつた群集を指さした。二人の學生もさつきから、それと氣はついてゐたが、かう指さされて凝と眼を据ゑて見た時には、長蛇のやうに黑くうねつてつゞいて行つてゐる群集の上に、小さな古い堂見たいなものがあつて、そこに谷を越した夕日が明るくかゞやいてゐるのが見えた。空氣のせゐか何だか、それが金色の明光を放つてゐるかのやうに見えた。

『あれが何うしたんだね？』

『勿體ねえ！　お前さん方あれを知らねえのか、生佛さまが彼處に御座るだ！』

『生佛が？』

馬鹿々々しいと云ふ語氣をして一人の學生は笑つた。

『そして皆なあゝしてお參りに行くつて譯かね？』

よときよと駈け廻つて頻りに空に向つて吠えた。

もし虚心平氣なすぐれた畫家が此處にあつたならば、何をも忘れて、この世の常でない、世間ではとても見ることが出來ない、外面は靜謐で内部は夥しく沸騰したあたりの光景を描いたであらう。そしてその畫の持つた印象は、滅びずに永久に人を動かしたに相違ないであらう。しかしいかなる天才の畫家も、恐らくは或は落附いてそれを描いてはゐられなかつたに相違なかつた。忽ちその身もその動搖、混亂、不整の中に捲き込まれて行つて了つたに相違なかつた。その平地にゐる多くの群集と同じやうに。

『變だな――何うしたんだ、一體――』

『本當だな。』

かう二人の學生は小聲で囁き合つた。

テントの周圍を駈け廻つてゐる子供等、鍋や釜を大勢一緒になつて洗つてゐる上さん達、洗濯をしてゐる女達、ぢきその前からぞろぞろ出て來る銅色をした裸體の人の形態、深く澄んだ空氣の中にレリイフか何ぞのやうに浮き上り盛り上つて見えてゐる青い色の褪めたペンキ塗の建物――『何だか舟のやうな家屋ぢやないか。』『ついさつきかう下から指さしてのぼつて來たことをかれ等は思ひ出した。何うしても今まで眼にしてゐた世界とは思はれないやうな特殊な氣分と空氣とがかれ等を壓した。かれ等はぢきその近くにゐた一人の上さんに訊いた。

山上の震死

二人の學生が向う側の溪谷の小さな溫泉場から、二千米のS岳の頂上近くにあるS溫泉に來た時には、全く思ひもかけない驚きに目を睜らずにはゐられなかつた。人々が右往左往に織るやうに往來する。そしていづれも何か異常の事件でも起つた樣にいやに興奮した顏をして居る。山合からは白い溫泉の湯氣が凄じい勢で五六十尺以上も高く噴き上がつてゐるのが見渡される。熱湯の瀧は何條となく樋から樋に傳つて流れ落ちてゐる。そして無數の群集が列をつくつて、折れ曲つた山路を蟻の行列のやうに登つて行くのが黑く連つて見えた。

全く思ひがけない混雜、雜遝、不整頓がその前にあつた。何等か不思議の力に、または何等か大きな異常な事件に全くそこにゐる人達は引寄せられて了つたやうに、またそれにすつかり魅せられて了つたやうに、顏の輪廓の線は緊張し、眼の光はかがやき、耳はあらゆる微細な響をも聞くやうに見えた。一種魂をそゝるやうな囁きが一つになつて集つて、それが重苦しくその一帶の平地を壓した。犬までがき

順吉の部屋には、丸い大きな窓があつて、特に嚴重に取圍まれた戶外の矢來塀が悲慘に眼に映つて見えた。外は眞暗であつた。

薄暗い廊下の灯だけ取入れてあるといふやうな安直な部屋の中に、色のいやに蒼白く黑い女を發見した時には、順吉はゾッとした。しかし（なんだ！）といふ氣がすぐそれを打消した。女は傍に來るには來たけれども、まじまじと眼を大きく開いたまゝ、いつまでも何か考へて順吉がゐるので、やがてソッと出て行つた。

いつか順吉はとろりとしたと見えて、ふと廊下で客が騷ぐのに眼が覺めた時には、何時の間にか女は順吉の傍に來て寢てゐるのを見た。すやすやと蒼白い小さな顏が其處にあつた。ふと見ると、その唇は紫であつた。そしてその唇からは血が流れてゐた。順吉ははつと思つて飛び起きた。

『何うしたの？』女は驚いて首を上げて言つた。

『あゝ、夢、夢を見たんだ。』かう順吉はまぎらした。しかし順吉は女の方を見ずに、唯窓の方を見た。

そこには亡女がしよんぼり立つてゐるやうな氣がした。

ない……。もう過ぎ去つたことだ。）かう考へながら順吉は歩いた。

遊廓までの距離はかなりにあつた。かれ等は背につかまり合つたり唄を大聲に唄つたりして歩いた。やがてさびしい遊廓がかれ等の前にひらけた。

寅さんの馴染があるといふので、あまりどつとしない小さな店にかれ等はあがつた。階段から引附へ通されて、大きな膳を挾んで二人は坐つたが、薄暗い電燈や、汚れた古い唐紙などが馬鹿に陰氣な感じを順吉に與へた。何故かれは慾りもせずにこんなところにやつて來たかと思つた。いつそ遁げて歸らうかと思つた。しかしそれも出來なかつた。順吉の顔は蒼白く電燈に映つて見えた。やがて少しばかりの酒が運ばれて、二人の女は出て來た。

『まアしばらくぢやないの？』

こんなことを言つて、寅さんの馴染の女は、いきなり寅さんの傍へ寄つた。三十位の、頰の赤い、伊勢音頭の芝居で貢に顔を切られて西瓜になるやうな女だつた。

順吉に當てられた女は、十七八位にしか見えない顔の色艶のわるい女だつた。こんな女を馴染にするものもあるかと思へた。

『好いでせう、若くつて？』かう遣手がつくり笑ひをして言つた。

やがて二人は廻し部屋らしい狹い座敷に、女に伴れられて行つた。

『ウム。』

順吉の懷にも、今夜はいくらか金があつた。(これがわるいのだ……夜がわるいのだ、十時すぎがわるいのだ、懷に金があるのがわるいのだ。)かう自分ではちやんと知つて居りながら、わかつて居ながら、また、これから酒を飲むと女のところに行かずにはすまされない、女の處に行けば、また深い陷穽の中にはまらずにゐられないといふことを十分に心得て居ながら、何うしてもそれを抑制することが出來なかつた。

順吉には醉つたり、喋つたり、ふざけたり、または女と騷いだりする自分が悲しかつた。しかし何うすることも出來なかつた。つい順吉は酒をすごして了つた。

したゝかに醉つて飮食店から出て來た二人は、いつか遊廓の方への坂をのぼつて行つてゐた。順吉の頭には、ある重い物が載つてゐるやうな氣がしたけれど、行かうと約束がきまつてからは、反つて順吉は寅さんを促すやうにした。『たまには好いさ、』などと寅さんは言つた。

(全くだ！)

かう順吉は心に思つた。つゞいてたまだけですまされる人達が羨しいやうな氣がした。あそこでの凄じい慘劇、その凄じい光景が眼の前に浮び上つて來るのを、順吉は酒の力で何遍も何遍も押へた。(氣のせるだ。そんなことを考へてゐられるもんか。そんなことを考へてゐては一生女の肌に觸れることも出來

『冗談ぢやないよ。』上さんは眞面目な顔をして、親方の腕を引張つた。

『あはゝ、勘辨々々。』親方は意氣地なく轉がされた。

『さア、よしたり、よしたり。』今度は上さんはかう皆なに向つて言つて、『本當にしやうがありやしない。直ぐそこに交番があるのを知つてゐながら。』

女王の意見とあつては爲方がないといふやうに、皆な强情を張らずに、そのまゝ素直に片つけ始めた。誰が先きともなしに立上つて、三人は店の方へ來た。

『海の方へ行つて見よう。』やがてかう其處の職人が言つた。で、三人は出かけた。あとから、上さんは、『皆な夕飯時分には歸つて來なよ。』と聲をかけた。

それから海岸に行つたり、あちこちと歩いたり、酒を飮んだりして、夕暮近くまで三人は一緒にゐた。洞の家に夕飯を食ひに歸らうなどとは思はなかつた。

寅さんと順吉の姿は、十一時頃に、活動小屋から出て來た。小屋の中は馬鹿に暑かつた。順吉は寅さんを促がして、そしてそこから出て來て了つた。洞の職人はまだそこで見てゐた。

空はいつか曇つたと見えて、星の光も見えなかつた。夜風は生溫くかれ等の顏を吹いた。それでも活動小屋の中と比べては凉しかつた。二人はあてもなく歩いた。

『一杯飮まう！』

皆なはドヤドヤと奥の三疊の方へ行つた。

『順さん、來給へ。』

かう寅さんはそこから手招きした。

順吉が行つて見ると、もうその眞中には花札が出されてゐた。

順吉は知らないことも無ければ、また嫌ひでも無かつた。で、莞爾してそこに坐つたので、忽ち遠慮無く花は始まつた。

順吉には昔のことが思ひ出されて來た。苦學生をして東京にゐた時分のこと、神田の新聞配達の店の二階で、今は高等工業に行つてゐたり、明治大學に行つてゐたりする筈の友達とよく一緒に花を引いたことなどが……。今も皆丈夫で學校へ行つてゐるだらうと思はれた。と、順吉は悲しくなつて來た。

何番となく花は進行した。順吉には不思議にも好い役がついたり、起きがよかつたりして、一厘花にすぎなかつたけれど、一二時間の中に、一圓近く順吉は勝つた。

『またやつてらあ！』

かういふ聲がしたので振返ると、上さんはいつか歸つて來てゐて其處に立つてゐた。上さんはわざとむづかしい顔をして皆なを睨むやうにした。

一座は皆な笑つた。

『さァ。』

こんな事を言つて三人は笑つた。やがて寅さんは、新調した着物の出來てゐるのを取りに行くために出かけた。順吉と洞の職人とは將棊をさした。

かれ等の揃つて出かけたのは、もうかれこれ晝頃であつた。何處に行かうの、彼處に行かうのといふ計畫は、皆な駄目になつて了つてゐるのをかれ等は見た。

爲方が無いので、三人の足は洞の方へ向いて行つた。途中寅さんは、牛肉を買つたり果物を買つたりした。順吉も夏蜜柑を三つ四つ買つた。夜來た時と違つて、そこからは美しい海が見えたり、海の中にぽつつり浮んでゐる島が見えたりして、こんなところだつたかといふ風に順吉には眺められた。

休日だけに、洞の家は綺麗に片附いてゐたばかりで無く、何處となく靜かで、落附いて、世離れた感じがした。此處でも一月の中の一日の休暇の樂みが、小さい巴渦を卷いてゐるやうな氣がした。肥つた親方もにこにこしながらかれ等を迎へた。

寅さんはやがて買つて來たものを其處に出した。順吉が夏蜜柑をごろごろと其處にころがした時には、『まァ、まァ、大變に……』と言つてその小さな上さんは喜んで手にした。上さんは何處か出て行くところらしく、何事か亭主に言つたり、または寅さんに話しかけたりしてゐたが、やがてちよこちよことして出かけて行つた。

ある夜、寅さんは、洞へ行かうと言つた。わけもわからず順吉は唯その後について行つたが、それは他でもない、目見得の翌日にやつて來て、順吉に顏を剃らせた親方の家であつた。そこにも色の黑い、肥つた口の重い職人が一人ゐたが、懇意だと見えて、寅さんは親しげに話した。小角力のやうに親方は肥つて大きいのに引かへて、上さんは子守のやうに背が小さく且つ若かつた。順吉は不思議な氣がした。一時間ほどしてかれ等は歸つて來た。

七

十七日が來た。一月に唯一度しかない休日――それを如何に過さうかといふことは、かうした稼業をするものに取つては、かなりに大きな問題であつた。何處に行かう、彼處に行かう、かう誰も十日も前から指折り數へて、その日の來るのを待つてゐた。その日は遲くまでゆつくり寢てゐて好いのであつたが、却つて早くから目が覺めて、床の中にゐるのが惜しいやうな氣がした。順吉は一番先きに湯に行つて歸つて來て、いつものやうに朝飯の膳に向つたが、遊び先きで今日は食ふ筈の午と夜との御馳走が胸につかへでもしたかのやうに、何故かその飯が旨くないので、二杯でかれは箸を捨てた。

順吉と寅さんが食後の一服をやつてゐるところに、洞の職人がやつて來た。

『今日は何處へ行かう？』

『いゝえ………』

『そんなに遠慮するには當らんよ。何うせ、返しては貰ふんだから。』かう寅さんは言つて、其處からそんなに遠くない質屋を教へて呉れた。

順吉は幾度となく辭つたけれども、寅さんは言ふことをきかないので、餘りしつこく辭退して却つて氣をわるくしてはと思つて、順吉は質屋に行つて、金を借りて來て、その言ふなりに單衣を拵へた。

その時以來、順吉は寅さんを深切な人だと思つた。段々打解けて、いろいろな話もすれば、湯にも一緒に行くやうになつた。酒を飲まない時には、町に揃つて二人して出かけて行つたりした。

寅さんは、順吉のためにいろいろなところを教へて呉れた。市と言つてもさびしい町とばかり思つてゐたのに、思ひもかけず、夜も晝のやうに賑やかな活動寫眞があつたり、見世物があつたり、夜店が並んで出たりするところへも段々順吉は伴れて行つて貰つた。

『此處が一番、横須賀で賑やかなところさ。』

かう寅さんは教へた。

時には角のそばやに順吉を促して入つて行つて、これまで順吉が食つたことのないやうなめづらしいものを誂へたり、酒を取寄せて飲んだりした。そしてその勘定は決して順吉に出させなかつた。勿論順吉もさういふ金は持つてゐなかつたけれど……。

る）と思つたからであつた。人を背めてゐる爲方だと思つたからであつた。しかし、寅さんは平氣で、窓の敷居のところへ頭を押つけて、天井に眼を置いて、何か頻りに考へてゐたが、
『そして、着物を一枚買ひ給へ。』
と言つた。
順吉ははつと思つた。
人を馬鹿にしてゐるどころか、寅さんは深切に自分の着物を質に置いて、そして順吉のために新しい着物を拵へさせようとしてゐるのであつた。
『いゝえ……』
『だつて、袷ぢやもう暑いや。』
暑いのは我慢が出來るにしても、垢染みて汚くよごれた袷が順吉にも氣になつてはゐたのであつた。白い上衣の服の下から裾の汚れた袷の出るのを順吉が絶えず氣にしてゐるのを寅さんは知つてゐたのであつた。
寅さんはそのまゝ二階に自分の着物を取りに行つたが、やがて風呂敷包を小脇にかゝへて下りて來て、それを順吉の傍にソッと置いた。
『これを入れて來たまへ。』

順吉が二階に上らうとすると、

『順さん一杯飲まないか。』

かう寅さんはいつも聲をかけた。

『僕は澤山です。』

かう言つて大抵は斷つたけれども、それでも三度に一度はそこに行つて坐つて、一杯二杯の相手はしなければならなかつた。しかし、此頃餘り酒を飲まなくなつたかれは、いつまでもそこに坐つてゐるやうなことはなかつた。やがて座を外して二階へと上つて行つた。かれの室には、奥の電燈の光りがさして來ないので、窓から、外の星の光りがよく見えた。順吉は何うかすると、床も延べずに、暗い座敷にひとり坐つて、凝と何か考へてゐることなどもあつた。

六

『順さん、君、質屋へ行つて來ないか。』

かう不意に寅さんが言つた。それは日見得がすんだ翌日のことであつた。

『え？』

かう言つたきり、順吉は押默つて了つた。何故なら、（質屋に使ひに行けとは、人を餘り馬鹿にしてゐ

較にならないほど田舍であることもやがてわかつて來た。橫濱では二十五錢の料金は平氣で取つた。客も皆よかつた。仕事場も、ツルツルと滑かな板の間で、職人も皆なスリッパを穿いて仕事をした。それに引かへて、此處は未だに昔ながらの鷲鳥椅子で、運轉椅子などは藥にしたくもなく、土間は三和土、料金は十五錢、客は大抵海軍々人のぐるぐる頭で、これまで丁寧な仕事をしてゐた順吉には、何だか馬鹿馬鹿しいやうな氣がした。寅さんの爲事なども、何うかすると、見てゐられないほど下手なことがあつた。

しかし居心地のわるい家でないことは事實であつた。主人夫婦が素人で、仕事の上には何の干涉もしないといふ點がのんきだし、來た當座は、氣心が知れないと思つた寅さんも、段々つき合つて見ればさうわるい人ではないし、それに、給金の他に、店の收入が一月五十圓以上になつた時には、その剩つた分は四分の一を吳れるといふやうな規定などもあつて、田舍と言つて馬鹿にされないやうな金が段々入つて來るのも順吉には面白かつた。

寅さんは夜業がすむと、湯に入つて來て、上さんのいつも坐つてゐる長火鉢の處で、胡座をかいて、樂しさうにちびりちびりと酒を飮んだ。素人の主人夫妻に取つては、仕事が何んなに拙くとも、長年ゐて氣心の知れた寅さんが大事らしく、上さんもそのために每夜酒の肴をちやんとつくつて置いてやつたりした。

五

三日目に、横濱の周旋屋の親方がひよつくりやつて來て、主人から順吉の世話料を取つて行つた。『まア、田舍は靜かで、體にも好いに違ひないから、辛抱してゐて呉れ給へ。』などゝ言つて歸つて行つた。給金もその時分にはもうきまつて、前からゐる寅さんよりは二圓だけ少く、九圓呉れることゝなつた。田舍にしては、先づ優待された方で、横濱で貰つた給料といくらも違はなかつた。それと言ふのも、昨日こゝの親類の親方だといふのが來て、ちよつと順吉に顏を剃らせて、その腕を認められたためであつた。かれは先づ落附いて此處で暮さうと思つた。田舍ではあるし、誰も知つてゐるものもないし、存外落附いた氣分でゐられさうにも思へた。唯、性慾だけ抑制しなければならないと思つた。何處に行つても、かれはそのために、その土地にゐられなくなるのであつた。女に關係しさへすれば、かれは何うしても深間にならずにはゐられなかつた。自分でそれがわるいといふことも、それが亡女の思ひだといふことも、はつきりわかつて考へられるのであるけれども、しかもいつとなく深い陷穽の中に墮ちて行つた。本所でも、横濱でも、其處にゐられなくなつたのは、皆なその爲めだ……。(今度こそ十分に抑制して新しく生れ變らなければならない。)かう順吉は心から思つた。

月日は經つて行つた。土地の客にも習慣にも次第に馴れた。横濱と比べては、同じ市でも、此處は比

かう上さんが臺所から首を出してびつくりしたやうに言つた。
『ちよつと運動に――』
かう言つて順吉はさつさと出て來た。
空は明るいが、路はまだいくらか暗かつた。何處の家でもまだ戶がぴつしやりと閉つて、朝炊の烟を立てた家もたまにしか見當らなかつた。順吉は好い心持で、身を離れずに絡みついてゐる重荷も暫しは忘れられたやうにして、靜かに茫とした朝の空氣の中を步いた。ふと、前に新綠に包まれた低い丘、その丘をよぢよぢと曲つて上つて行くやうな路――急に、そこに登つて見たくなつて、かれは草原の露をわけつゝ行つた。
それは丸太を置いては土が盛られ、土が盛られてはまた丸太が置いてあるやうな路であつた。さうした路はかれは何年にも步いたことはなかつた。ふと、故鄕の山のお宮がほつかり浮んで來た。
こゝにも何かお宮でもあるのか知らと思つて上つて行つたが、別にさうしたものも見當らずに、かれはやがて山の頂きのやうな廣い處に行つた。
そこからは市街――眠つた市街、朝の海近いしつとりした空氣に包まれた市街、狹くごたごたと連つた不揃ひな人家の屋根が三角形に碧い海に向つて開けて行つてゐる市街をかれは見た。かれは長い間そこに立つて海を眺めた。

夙起きの癖のついてゐる順吉は、何處に行つても、いつまでも床の中にゐることは出來なかつた。健康のため、一つは一日の中でその身の得られる自由の時間として、かれは朝の散步を樂むのを例としてゐた。何處に行つても職人にはめづらしいと言つて褒められた。その癖その夙起を迷惑がつてゐるのではあるけれども――。

其處に行つたあくる朝も、順吉は早く目覺めた。かれはそのまゝ立つて雨戶を明けた。初夏の晴れた朝の爽やかな空氣は曉の光と共に流るゝやうに窓から入つて來た。ふと氣が附くと、その傍に昨夜二語三語口をきいた職人がいぎたなく熟睡してゐた。頭から蒲團をかぶつて足を出してゐたが、恐ろしく毛の生えた丈夫さうな足で、しかも何處か床屋の職人らしく瘦せてゐるのを順吉は思つた。昨夜此男が何處かへ出かけて行つて、歸つて來て寢たのをかれは少しも知らなかつたのである。（まア、まア、寢首を搔かれなくつて好かつた）といふやうな心持が何處かでした。

順吉は暗い階段を下りた。襖を明けて、まだ電燈のぱつと明るくついてゐるのに驚いたが、更に異樣に感じられたのは、大きな息子が胡座をかいたまゝあつい飯を吹き吹き食つてゐながら、じつと順吉を見詰めた姿であつた。青い服を着てゐるので、やつと工場に行くのだなといふことがわかつた。臺所の方では、主人と上さんとが何か頻にごたごたやつてゐたが、默つて順吉が店に下りようとすると、

『順さんかえ、早いぢやないか。』

親方は晩酌をすました赤い顔をして出て來た。

深切にも今夜すぐ伴れて行つてやらうといふのであつた。で、順吉はそのあとについて行つた。さう大して遠くはなかつた。それに、いくらかは場所も好く店も綺麗に出來てゐた。話をしてゐる中に、いろいろなこと――主人夫妻はこの道には全くの素人であるといふこと、店は職人二人に任せてあるといふこと、その一人がゐなくなつたがためにあとをもとめてゐたといふこと、今ゐる一人の職人は、かれよりも年は三つか四つ上で、いやに權力を振つてゐるといふこと、主人は海軍の工廠の古い職工で、この店は寧ろ主人よりも上さんの内職にやつてゐるやうなものであるといふこと、さうしたことが次第にそれとなく順吉には飲み込めて來た。否そればかりではなかつた、この家では、上さんが女王であらゆる權利を持つてゐて、十一二になる娘を姫のやうに、亭主と二人ある息子――これも、矢張朝早く青い服を着て工廠に通つてゐた――を店の職人のやうにしてゐるのを順吉は見遁がさなかつた。亭主や息子は上さんの吳れるものをおとなしく食つて、朝は早く出て行つた。夜は遲く歸つて來て寢た。

順吉ともう一人の職人の寢るところは二階であつたが、その二階の奥の間の六疊には、亭主と息子がいつも寢ることになつてゐた。上さんは階下で娘を抱いて寢た。

かれをつれて來た親方は、茶を飲んだり話をしたりして、一時間ほどして歸つて行つたが、それから間もなく、店を閉めて、順吉は上さんに敎へられて、自分の寢るところに行つた。

三

落附かない夕飯ではあつたけれども、それでもかれは遠慮なしに御馳走になつて、半日何も食はなかつた餓を醫やした。

『何うも突然上つて、いろいろ御迷惑をかけてすみませんでした。』

かう丁寧に上さんに挨拶して、そして店に出て來た。

若い職人は、丁度一人の客の鬚を當りかけて、小刷毛に石鹸をつけて、それを顔やら耳の周圍やらに塗つてゐるところだつた。默つて口もきかなかつた。

順吉は店から戸外へ出て見た。

それは暗い淋しい通りだつた。片側は町らしく家並がつゞいてゐるけれども、電燈の光も稀れに、人通りもなく、いかにも田舎らしかつた。すぐその向うには、樹の深く生ひ茂つてゐる山が眞黒に見えた。星がキラキラとその上の闇の空に輝いた。

四

『それぢや行きませう。』

『逗子、逗子？』

といふ車掌の聲を耳にすると、かれの頭は忽ちある烈しい刺戟を受けて、俄かにキとなつたからくり人形のやうに身を起してあたりを見廻した。

そこに白いペンキで塗つたブリツチがある。同じペンキ塗の改札口がある。その向うに構外の砂利地が見えてゐる。その砂利地だ、かれが妹をその奉公してゐる家から無理に伴れ出して來て、その背負つて來た大きな荷物を下に下したのは――。

その時分にも矢張辛い悲しい心の重荷の持主ではあつた。何うかして金をつくらなければならない。二十圓、三十圓の金は何うしても要る。妹がいくらかは持つてゐるだらう。かう思つて其處に訪ねて行つた。しかしその希望は外れた。妹は金は持つてゐなかつた。爲方がないので、妹をそこから引張り出して、別の奉公口をさがさせて、それでいくらかの金をつくらうとした。『僕は年頃になる妹の白粉氣ひとつなしでかうして働いてゐるのが可哀相なんです。』かう大きな聲をして順吉は呶鳴つた。そしてその頰からは涙が流れてゐた。妹の奉公先の主人は、彼が妹を無理に暇を取らせて酌婦にでもするだらうと思つた。しかし、あの時分は心の重荷があつたにしても、まだそれは輕かつた。かう思ふと、鮮血の漂つてゐる中に、かけつけて來た妹が、『まア兄さん、何うしてこんなことを……』と言つた言葉が今でもはつきりと耳に聞えた。

符まで買つて汽車に乗込ませて呉れた周旋屋の親方も腹の中では何う思つてゐたであらうか。』これで、厄介拂ひをした、』と思つてはゐなかつたであらうか。

あの遊廓の一間での悲劇以來——一度死んで、蘇生しなくとも好いのに蘇生して以來、もう二年は經つた。あれから新しい生涯がかれのために始まらなければならないのであつた。かれ自身にしても、生れ更つた氣で眞面目に働かなければならないのであつた。否、かれは創痍が治つて、長い間世話になつた養育院を出てから、眞面目に眞劍に働くつもりであつた。それが亡女の靈を慰める唯一の道だと思つた。現に、本所にゐた時には、落附いて働きもした。しかし、しかし、しかし……。

かれの頭には、半年以上も性慾を壓抑してゐた頃のかれが浮んで見えた。性慾と一緒に屹度その女が出て來た。死んだ女が出て來た。かれが突き刺した短刀に、迸る血と共に後にたぢたぢになつて斃れた女が出て來た、かれはいかなる時でもその亡女の姿から離れることは出來ないのに痛感して、自棄になつて行つたその後一年のことを繰返した。さつきもある停車場で、かれの頭は大腦や小腦の代りに、烟が一杯詰められてあるのではないかと思つたことを思ひ出した。窓外を走り行くすべての景色も、車室に乘つてゐる澤山の客も、何も彼も、唯茫然とかれの開いてゐる眼に映つてゐるばかりであつたことを思ひ出した。

ところが、それが、

んなことは何でもないといふやうに、平氣でやつて吳れただけそれだけ一層不安な心持が萠して來た。しかし、親方はそんなことは念頭に置いてゐなかつた。親方はすぐ言葉をつゞけた。『けども、折角來たもんだ……。こつちで遊んで行く氣なら、何うだね、家で世話してやるがね。』かう順吉の顏を見い見い言つて、『それとも、歸りなさるつて言ふなら、汽車賃は何うにでもして上げるが――』

『ぢや、何うか、折角、來たもんですから、何處でも宜しう御座いますからお世話して頂きます。』

順吉はやさしいわかつた親方の言葉に感激したやうにして言つた。流石はこの社會の人達だとも思つた。書生だの、事務員だのを雇ふ小さな會社や、職工を雇ふ工場などでは、とてもかうした人間らしさを味ふことは出來ないと思つた。不安はいつかあとをひそめた。

二

今日の午後に橫濱を發つて來たことが繰返してかれには考へられた。垢に汚れて、襟や袖口など黑光りになつてゐる筒袖一枚の自分の姿――、その姿が、白いパナマを被つた紳士の胸の金鎖や、綺麗な女の紗の羽織を着た姿などに雜つてゐるさまが歷々と眼に刻みつけられたやうに殘つた。何も彼も、下駄の音も、靴の音も、荷物を運ぶ車の音も、すべて皆なかれの尖つた神經を刺戟して、ゐても立てもゐられないやうな氣がした。『まア、田舍にでも行つて落附いて來る方が體のために好いから。』かう言つて、切

かう言つて、手紙を卷きながら、元の座に戻つて、立膝で親方は坐つた。『まァ、しかしおかけなさい……。私んところでも、此間、もう一週間も前に、芳木に賴んではやりましたんですがね、ちよつとも よこして吳れないもんだで、つい二三日前、若い衆を賴みましてね。』

親方は下を向いて煙草を吸つたり、時々順吉の顏を見たりして言つた。

『はァ。』

と順吉も當惑して了つた。

『親方、すみませんが、兎に角、この車屋を返して下さい。』

突然かう順吉は言つた。思ひきつて言つた。何うせ一文なしのかれである。そんなことをぐづぐづ考へてゐても爲方がない。無いものは無いんだから爲方がない。かうかれは思つた。

『あゝ、おい、車屋に、お錢をやんな。』親方は別に厭な顏もせず、奧の方にゐる上さんにかう聲を懸けた。上さんはちよつとかれの方を見たが、しかし別に何の感情も起さないといふやうな風で、亭主の言ふまゝに、きさくに車屋に金を拂つてやつた。神經質らしい、蒼白い顏をした、しかも何處となくやさしいところのある上さんだつた。

順吉はこれでいくらかは氣安くはなつたが、しかしまたその一方では、いかにも自分が旅のわたり職人のやうな態度に出たことを後悔するやうな、まだは濟ないと詫びたいやうな氣がして來た。親方がそ

つたが、さうかと言つて、それが何ういふ用事を持つて來たものであるかといふことがわからないといふやうに――。

『私は……私は……』

少し狼狽して、『あの、横濱から參りましたんですが。』

『横濱？』

『芳本からです。』

これで漸くその用件がわかつたらしく、親方は、『あゝさうですか。』

順吉はすぐ周旋屋の爺から貰つて來た手紙をそこに持出した。と、疱痕面の、眼の赤い、見るから一癖ありさうな親方は、それを取つて、起上つて、それを電燈にかざして見た。もうあたりは昏くなつてゐた。

『さよなら。』

『あゝ、何うも難有う。』

順吉が入つて來たので、話を端折られたらしい客は、やがてかう送られて出て行つた。暫く親方は手紙を見てゐたが、

『わかりました。しかし、實は私のところでも……』

電燈の光が既にキラキラと彼方此方に點いてゐるのを順吉は見た。しかし町の通りは狹く、さう賑かといふほどでもなかつた。『これが、横須賀の町か？』順吉にはさういふ風に思はれた。

その通りを二三町ほど行つた。

ふと、車は横町に入つて行つた。いとゞ淋しいのが更に淋しくなつて行つた。山の崖下のやうな、または暗い坂道のやうなところを暫しがほど通つて、空地などのある處を向うに拔けたが、またそこに裏町らしい汚い狹い町があらはれ出して、やがて一軒、田舍風の理髮店がその前に見えて來た。と思ふといきなり其處に車夫は梶棒を下した。

唯一度ところと名とを知らせただけで、其あとは訊きもせずに、よくこんな店が車夫にわかつたものだ。これも矢張田舍だとかれは思つた。

店にゐた白い服を着た人達は、かれが車から下りると、きよとんとして皆な不思議さうにかれの方を見た。

車から下りた順吉はおづおづしながらその店へと入つて行つた。

主人と見える五十歳位の男と、職人だかそれとも弟子だかちよつとわからないやうな若い男とが、今、頭を刈つて貰つたばかりらしい客を相手に何か頻りに話をしてゐたのであつたが、急にそれを止したといふやうにして、一樣に順吉の方を見た。無論、かれが客でないことは、かれ等にも初めからわか

にきまつてゐるのだから車賃位すぐ借りたつて構はないと思つた。

『A町に、高島つて言ふ床屋があるかね？』

かう寄つて來た車夫に聲を懸けた。

『あります、あります。』

『ぢや、そこまで……』

かう言つて、順吉はそこに引き寄せられて來た一臺の車に乘つた。

汚い車だつた。車夫も五十先きの何方かと言へばよぼよぼした爺で、ちよこちよこと走つては足を留め、足を留めてはまたちよこちよこと走るといふやう風であつた。路もわるいと見えて、ガタガタと車は絶えず動搖した。

長い煉瓦塀が盡きると、大きな門があつたり、またその前に廣い草原があつたり、その向うに思ひもかけず碧い碧い海が狹く崖で圍まれたやうに立つて展げられて見えたり、造船所らしい混雜した建物を中心に白い黄い烟が夥しく渦まき上つて見えてゐたりしたが、猶今暫く行つた時には、碧い海波の上に大きな白色の一本マストの軍艦の碇泊してゐるのがはつきりと手に取るやうに見えた。あそこいらが（横須賀の鎭守府だな……海軍の工廠だな）ひとり手にさうしたことが順吉の頭に上つて來た。

何處からともなく薄暮の色があたりを掠めて來て、町の大通りらしい賑かな家並の附近に來た時には、

彼女の幻影

一

横須賀の停車場に着いたのはその日の夕暮であつた。順吉は急いで構外に出たが、一番先きに懷に持つてゐる手紙を出して見た。それは、周旋屋の爺が、『これを持つて行けば好い。大丈夫使つて吳れる。』かう言つて渡して吳れたものであつた。封筒には、A町理髮店高島利作殿と大きく拙い字で書いてあるのがはつきりとかれの眼に映つた。

かれは兎に角人の大勢步いて行く方へと步いた。赤い煉瓦塀が左に長く連つて、右は全く山であつた。――妙なところだと順吉は思つた。

『いかゞです、いかゞです。』

暫く行くと、かう見つて、路傍にゐた車夫が二三人寄つて來て勸めた。懷には金は一文も持つてゐなかつたけれど、知らない處を聞き聞き步くのも面倒だと思つた。何うせ、行つた先きでは使つて吳れる

と、屹度、亡女が恐ろしい眼をして睨んだ。

かれは此間、かれ等の仲間の交際が斷り切れなくつて、花見に行つた歸りに、一緒につれ立つてなかをひやかしたことを思ひ起した。無論、かれはあがる氣にはなれなかつたが、また仲間の一人は、それを知つてゐて、知らない人達から遁れさせてかれを歸らせて呉れたが、そこを歩いてゐる間の心の痛さをかれは忘れることが出來なかつた。其處にも此處にも亡女がゐるやうな氣がした。また、其處にも此處にも血まみれになつた二人がゐるやうな氣がした。またそこらにゐる女達の淺ましい生活を、外面は派手やかに内部は悲慘な生活をじつとして見てはゐられなかつた。一緒に伴れ立つて歩く仲間の男達の浮いた心は又かれに不愉快な心を誘つた。灯の明るい賑やかな夜櫻の狹斜街も、かれには墓場のやうに暗かつた。

かれの禁慾ももう一年以上になつた。かれはをりをり睨むやうにするその亡女の眼の一生ついて廻ることなどを胸に描いた。

夜になつてから、客が込んで來たので忙しかつた。そのためかれの心がいくらかまぎれた。かれは遲くなつてから、親方と一緒に湯に行つて、歸つて來てすぐ二階に行つて寢た。

が深く深く考へられて來た。

……『男は生きてゐる。』妓夫は女の腹の上から男を下しながら、驚いたやうに言つた。

『溫たけえんだ、まだ。』

『檢屍が今、下に來たから、動かしてはいけねえんだ。』

かう誰かが言つて妓夫を制した。……急にまたさうした光景が眼先にちらついて來たので、かれは急いでそれを打消すやうにした。

此頃、かれは午後の日影が溫くなつて來る頃、獨りで店にゐると、うづついて來るやうに、ひとり手に情慾の湧いて來るのを覺えた。それも身體が健康になつて來たためであらう。そしてさういふ時には、きまつて亡女のことを思ひ出した。

かれはその事件以來、丸で僧侶のやうな生活をして來た。街頭で見る美しい色彩とか、艶な匂とか、またはやさしい表情とか、さういふものがちよいちよい眼には映るけれども、また、人々がさうした廓の女の話などをするけれども、かれの胸は單に亡女の追想で一杯に塞がれて、世間の女達は決して、かれの體に入つて來る餘裕はなかつた。かれの心は全く世間を離れて了つた。そして體の情慾が起つて來る

職工、それかそれへと落ちた。富豪を呪ひ、社會を呪ひ、また世間を呪つた。それにしても、あの社會主義のKは、今何處に行つたであらうか。何處に行つても、刑事につき纏はれて弱つてゐたが、田舍に歸つたか、それともまた外國に行つたか。かれの悲劇の記事の新聞に出た時には、無論、それを何處かでKも見たであらうが、何う思つてゐるであらうか。

『お歸んなさい、難有う。』

親方の聲に氣が附くと、客は今歸つて行くところだつた。

客が歸つて了ふと、かれは再び一人になつた。親方はまた蒲團をかぶつて寢て了つた。

また思ひ續ける……。

今朝早く電車通りで見たお新に似た娘を思ひ出した。つゞいて、お新のことが思ひ出された。あれと夫婦になつてゐたら……。かう思つたかれは、さうしたら、仕合せであつたかも知れないと思つた。お新のお袋も贊成だつたし、自分だつて、そんなにイヤではなかつたのであつた。唯、さうして小さく家庭なんかつくるのがイヤさに、無理をして、そこを出て來た。

お新は壁の處で泣いて居たつけ……。かう思つて來ると、あの亡女が、ちよつとした行きが、りで、寧ろあの最初の晩、あの店に並んで坐つてゐたばかりに、または自分のさびしさを慰めるつもりで懐にいくらかあつた金に誘はれて、そしてあがつて行つたばかりに、自分の一生を附いて廻る重荷となつたこと、

客は腰掛のところで親方と話を始めた。順吉は順吉で、難かしい本を、雜誌を、――床屋の職人には小生意氣な本を、その客に見られないやうにそつと隱した。

相槌を打つと、際限がないので、かれは成るたけそこから身を離してゐた。その客は誇大妄想狂に近く、頻りに自分のことを大袈裟に話し出した。W大學にゐたことなどを話した。新聞記者をしてゐたこともあるなどゝ言つた。

ふと、順吉は田舍にゐて、小さな新聞の通信員をしてゐたことを思ひ出した。

その時はまだ元氣だつた。無邪氣でもあつた。來年は是非東京に出て、好きな文學をやらなければならないなどと思つてゐた。かれはその時分から、今も讀んでゐる『文章世界』を買つて讀んでゐた。いろいろな青年達の書いた文章を見て、自分にもこの位のものなら書けさうなものだなどと思つてゐた。それは山裾の町と言つたやうな小さな町で、外側には綺麗な小石交りの川などが流れてゐた。その時分にも、矢張かれが相手にしてゐた娘があつた。お照と言つたつけ……。その町を出て、東京に來るやうになつた時、年來の希望の達せられるのは嬉しかつたが、その娘にわかれて來るのが辛かつたつけ。あの女ももう人の妻になつてゐるであらう。

極樂と思つてやつて來たところが地獄で、又希望が達せられると思つてやつて來たところが絶望の都會で、かれはそれからそれへと漂泊した。新聞の配達、牛乳配達、勞働夫、砲兵工廠の職工、活版所の

つくづく順吉はさびしい氣がした。かうした生活が厭さに、何うかしてそこから脫却したいために、かれは一度は奮鬪した。あの時分はまだヒユマニチイの爲めに働いてゐる氣がしてゐた。それが、その事件のために、悲劇のために、すつかり變つた。それをある人は爲めになつたと言つた。『順吉もこれから本心に立かへるだらう、』と言つた。何方が本心なのか。前の心の狀態か。それとも今の心の狀態の方が好いのか。『それにしても、自分は何うしてあんなことをしたのか。』かう思ふと、ひとり手に溜息が出て來た。

『何うかしたかね。』

かう客はじろじろ笑ひながらいふ。

『なんでもありません……』

『女のことでも思ひ出したかね。』

この客はかれの悲劇を知つてゐる筈はないから、この『女』は、普通に言ふ女のことである。しかも、順吉にはそれがぐつとゑぐるやうに胸に來た。

種々と女の話を始めるのに調子を合せながら、成るべく丁寧に順吉は剃刀を使つた。で、暫くしてすむと、客は五錢のところを十錢置いた。餘計置いたからとて、それが自分の金になるのではない。それでも氣持がわるくなかつた。

てゐる傍に、上り口からごろりと仰向けにかれは寢て見た。しかし、眩しくつて眠れない。それを無理に眼をつぶつて眠らうとする。やがてうとうとと半眠狀態になると、妄想が――いろいろな妄想が、夢ともつかず、現ともつかず、頭の中を往來し始めて、生活のどん底のどん底に自分は落ちて行つてゐるやうな氣がした。

無智な社會へ社會へと自分の魂が散つて行くやうな氣がした………。

はつと思つて起きた。丁度深淵の中に今一步で陷るところを漸く引きかへして來たといふやうに――元の火鉢の處に來て、また暫くぐづ〳〵してゐたが、今度はかれは午前に讀んだ雜誌を取出して、短篇小說を讀みにかゝつた。半頁までも讀んだか讀まない中に、『顏を一つ』と言つて、お客が入つて來た。

お客は金緣の眼鏡をかけてゐる。いつも來る自働車の會社員である。平生は火鉢の處でのんきさうに話をするのが例だが、今日は急いでゐるやうなので、順吉はすぐ椅子へと指した。

相變らず、女の話が始まつた。二三日前、活動で女にひつかゝつたなどと――。順吉は唯調子を合せた。

ふと、自分の今の境遇も、矢張女郎のやうなものだと順吉は思つた。種々なお客を相手に、自分の心は深く包んで、好い加減に、まことしやかに調子を合せて行く。と、また亡女が眼を掠めて通つた。

行つてE町で下りた。

自分では、隨分手間を取つたつもりであり、町の往來の繁くなつた樣子から推して、もう朝も餘程遲くなつたやうに思つたが、歸つて來て見ると、店の硝子戸のカアテンがぶら下つたまゝで、まだ誰も起きてゐなかつた。で、聲をかけて起して、店を少し片附け始めたが、これから上さんや親方が起きて飯を炊くまでは、まだ大分間があると思つたので――それに、いくらか腹もへり加減になつてゐるので、近所に牛乳を飮みに行つた。

歸つて來ても、まだ家の人達は起きてゐない。さう度々起すもわるいと思つて、かれは店を掃除に取かかつた。それのすんだ頃、上さんは起きて、漸く飯を炊きにかゝつた。

例の通り氣が滅入りさうだ。午前中、客がないので『文章世界』を讀んだり、國語漢文の本を讀んだりした。なんのために、こんなことをやるのか、また何の希望でこんな本を讀むのかわからない。あの悲慘な光景を、あの事件を、何うかして曲りなりにも書き殘して置きたい。かう思つてさうした雜誌を買つて來たりするのだが、今はそれさへもう何うでもよくなつた。

午後、飯を食つてから、親方は午睡をした。順吉は埃りつぽく風の吹いた表を眺めながら、ぼんやりして暫くそこに腰をかけてゐたが、今朝早起をしたから、自分も少し晝寢をしようと思つて、親方の寢

故生きたかと思つた。死んで行つた女は仕合せだと思つた。それでも唯一人きりの妹なので、何彼と深切にして呉れた。養育院に行つてからも、困る中から、小遣を十錢、二十錢と呉れた。そして、『今度こそ兄さん、本當に、眞劍にやつて下さいよ。』と涙をこぼして言つた。親身なればこそあのやうに言つて呉れるのだ。しかし、この俺に何が出來るだらうとかれは思つた。世の中の悲慘な壁に突當つたかれだ。魂も粉微塵に碎かれて了つた身だ。一度はかの亡女の爲めに、その爲めにのみ働かうと思つたけれど、今ではさうした張詰めた心もない。

かれは世間の人達が、殊にかれと同じ年頃の若者が嬉々として笑つたり騷いだり女と戲れたりしてゐるのを見ると、自分はそれとは丸で別種類のまたは別世界の人間であるやうに感じられた。世の中のあらゆる艱難と歡樂とを嘗め盡したやうな底深い淋しさがいつもかれの心を占領した。

K橋行の電車がやつて來たので、かれは乘つた。そして何も考へてゐないやうな、またあらゆることを取留めもなくごた〳〵と考へてゐるやうな、そしてまたその隙間々々を世間の艱難や、亡女の顏や、悲慘な光景や、情ある世間と無情な世間との錯雜したさまや、好いが好いでなくわるいがわるいでない心が縫つてゐるやうな心の狀態で、停つたり動いたりする電車の進行をぼんやりと眼にしてゐたが、氣が附くと、もう其處は自分の近所のK町であるのが分つた。かれはそこで下りて、また乘替へてちよつと

て、それで丁寧にするのではない。好い身裝をして來るものは、丁寧にして貰ひたがる。ぞんざいにすればもう來はしない。

それに引かへて、身裝のきたないものは何うだ。かれ等はお客でゐながら、お客でも何でもないやうに、ぺこぺこと頭を下げて、お世辭をつかつて、そして賴むやうにして刈つて貰ふ。丁寧にしてやると、賃錢を餘計置かなければならないやうに氣遣ひをする。

それは兎に角として、ぞんざいにやる處を見るために、かれはわざ〳〵やつて來たのではない。その位なら、家でも、近所でも出來るのだ。ちやんとした刈方を見るには、お馴染になるのか、でなければ好い身裝をしなければ駄目だ。もうあそこに行くのはよさう。こんなことを取留めもなくかれは考へながら歩いた。そのため、亡女のことはちよつと念頭から離れた。

かれは思つた。しかし、亡女がさうして常にかれにつき纏つてやつて來るのは、決していやではない。流石に、血みどろな、悲慘な光景だけは、時が經つて、給のやうになつて、以前のやうに強く苦しく思ひ出さなくなつて來てゐても無氣味だが、亡女の來るのは、決していやでない。また無氣味でもない。忙しい日なんか、爲事に追はれて、一日思ひ出さずにゐるやうなこともあるが、さういふ時には、何となく淋しいやうな氣がする。かれは今でもその寫眞の一枚を持つてゐる。

かれはまた收容されたその際の病院を思ひ出した。そこに始めてやつて來た時の妹の顏！　かれは何

りして、それを旨く仕上げるのに、主人が焦々してゐるのが順吉にはわかつた。
顏は無造作にやつた。殆ど無料のお客でもやるやうに――。
しかし、兎に角綺麗には刈れたと順吉は思つた。一方ではまだ亡女の顏が鏡に映つてゐるやうな氣がしながら……。かれはその刈方が少しも自分の顏に似合つてゐるとは思はなかつたが、兎に角もう一度刈上つた顏を鏡に映して見て、その奧に亡女の顏をも見て、そして二十五錢拂つて其處を出た。
かれは二十錢で好いのに、ばら錢を五錢さがして、そしてそれをそこに置いて來たのである。少し歩いて來て、何故五錢やつたのだらう? かう思つたが、その何故がかれには說明が出來なかつた。二十五錢！ 馬鹿々々しいと思つた。そのため、何ういふ利益があるかしらと思つた。
それは店が上等で、場所が好ければ、高い金が取れるのである。中流以上の人々は、金を餘計さへ拂へば好いと思つてゐる。しかしあの主人は、この自分などは問題にはしてゐやしない。こんな汚ないなりをして、再び來るお客と思つてゐやしない。ずつと大切にしなければならないお客は、他に澤山にあるのだ。
或は身裝が好かつたなら、もつと丁寧にやつたかも知れない。ひがみではない。自分だつて、矢張さうである。好い身裝をした人が來れば、自然丁寧にする。さうかと言つて、自分はその好い身裝に恐れ

ふ思ひが唯一の努力となつた。……女は二三分で、ううんと最後のうめきをしてぐつたりとなつた。彼は女の胸に刺した短刀を周章てて拔いた。女はかれの胸にさした短刀から手を弛めて了つてゐた。かれは自分だけ死にそくなつてはと慌てゝ女の刺した短刀を拔いて更に右の胸を刺した。しかし痛苦に力が入らない。それに氣が附いたかれは、疊に柄の頭を立てて、自分の體の重味をかけて、ずぶずぶとつき刺した。それでもかれはまだ意識がはつきりしてゐた。彼はもうこれで今に死ぬであらうと思つたけれど、女のやうに死に達する瞬間の狀態にまだ自分が達してゐないことを思つて、更に咽喉に二ヶ所、短刀を突き立てた。しかしそれは無駄であつた。力の弱つた彼の狼狽した手のすることは、大變創をつけたやうに自分では思つても、傷はいくらもつかないのであつた。しかし、かれはぐつたりとなつた。咽喉が非常に乾く。ひりつくやうに乾く。で、苦痛をこらへつゝ、枕元の水差の水を飮んだ。夜が薄く明けて來た。かれは女の死顏を見た……。そこにあの新造のおとらがやつて來たのだ。

――眼を明くと、自分の顏が鏡に映つてゐるのを順吉は見た。そこに、その亡女の顏もあるやうな氣がする。かれは今でも決して馬鹿なことをやつたとは思はなかつたけれど、何うしてあんなことをやつたのだらうと思つた。悲しくなつて來た。かれはまた眼をつぶつた。

頭の上で鋏の音がしてゐる。もうかなり時間が經つたと思ふのに、まだやつてゐる。今度はかれはそれを見る氣になつて注意すると、始めは元氣よく無造作にやり出したが、あつち此方曲つたり角張つた

ふと氣がさして、鏡の中を見詰めるのをよして了つた。お客に鏡の中をじつと見詰められるのは、彼にしてもあまり好い心持ではない。出來るだけ上手に刈らうとする努力、殊にちよつとむづかしい頭に對する時の熱心、その時、客に鏡の中の自分の頭を氣にするやうな風をされると、何となく氣分が焦々して來て、お客はそんな神經過敏にせずに、應揚に眼でもつぶつて刈る人のするまゝに任せて置けば好いと思ふものである。――で、彼もつぶつた。それにその主人の刈方が一生懸命に見てゐるほど器用なやり方をもしなかつたので……。

むしろ親方よりも職人にやつて貰へば好かつたと順吉は思つた。何處の理髪店でも、親方よりも職人の方が上手だと言はれてゐるが、それがきまつた言葉のやうに言つてゐるが、成程さうだと思つた。何處でも職人は、生意氣に氣取つて、何うだ! かういふ風に刈るものだらうと見せつけたがるやうにやるものだ……。

しかし、眼をつぶると、初めはそんなことを考へてまぎれてゐたが、すぐあとから、その恐ろしい續きが、隙もないやうにまたかれを襲つて來た。

……かれは急に氣附いた。俺れは生きてゐるのだと思つた。女は死んで了つたのだ。かれは不思議のやうに思つた。かれはぢつと考へて見た。……短刀を互に心臟部に當てた。みりみりと突き刺した。苦しさを互に思ひやるなどといふ餘裕はなかつた。互に一生懸命であつた。死にそくなつてはならないとい

へた。

腰掛に腰を下して、暫し待つてゐると、やがて主人が出て來た。

順吉の想像では、職人が眠さうな顏をして、また、小僧が思つたと同じやうな思ひをして、そして出て來るだらうと思つてゐたのであるが、その豫想はすつかり外れた。見てゐると、主人が刈るらしいので、

『すみませんね、早くから……』

かう言つて、かれは主人の命ずるまゝに、鏡の前にある椅子の方へと行つた。回轉する椅子はふわふわとして好い氣持をかれに與へた。

幸ひにまぎるゝものがあるので、悲慘な心の繪は再びかれを脅かさなかつた。それに、刈り方をよく注意して參考にしようといふ念が、かれの心をそつちの方に作れて行つた。

主人はやがてぱちぱちと鋏を使ひ出した。極めて無造作である。始めバリカンで裾をかけた時にも、隨分刈上げるなとかれは思つた。

白米の粉を髮にふりかけながらぱちぱちぱち刈つた。

かれは始めの中は、じつとそれを見てゐたが——何んな風に刈るかといふ興味に惹かれて見てゐたが、

ふとそこにかれが曾て新聞配達をしてつとめてゐた新聞販賣店があるのを思ひ出した。見られるのはいやだと咄嗟の間に思つた。で、かくれるやうにして、N町の細い通りに曲つた。生憎、向うからR新聞の半纏を着た配達が、一軒々々新聞を家の戸に挾み挾みやつて來るのを見た。で、また傍の路に外れた。しかしそこでも順吉は同じ配達のやつて來るのを見て、またかくれるやうにして小路に曲つた。しかし、暫くしてかれは、何も遁げかくれることはないぢやないかと思つた。會へば、あそこの者は誰だつて、『ヤア』と驚いたやうに、またはなつかしがるやうに、聲をかけるに相違ない。あの事件が新聞に書かれたとて、わるいことをしたのではない。顏を見られて、きまりがわるいたつて爲方がない。それにT君の樣子もきくことが出來る――。

さう思つて引かへして見たが、その時にはその配達の姿はもうあたりには見えなかつた。

N町の通りに出て、その理髮店の前に來ると、丁度そこは今起きたばかりといふ風に戸が明いてゐて、こまつちやくれた頭の刈方をした小僧が頻りに床を拭いてゐるのを順吉は見た。

『やれますか。』

かう言つてかれは入つて行つた。

小僧は伸び上つて、きよとりとして順吉を見た。『氣のきかない野郎だ……。早くから、まだ掃除もすまない中からやつて來やがつた。』かうその小僧は思つたらしかつた。尠くとも順吉にはさういふ風に思

客のあつたことを思ひ出したりした。

矢張、初めから目當にした神田に行くより爲方がないので、かれはS町まで電車で戻つて來た。其處では賣子が鈴を鳴して新聞を賣つてゐる。日曜でなければ附錄がついてゐないから面白くないと思つたけれども、それでもかれは讀賣を一枚買つた。それに、この新聞を買つた理由はまだ他に一つあつた。それは、こつちも理髮店の職人だといふことを思はれたくなかつたからであつた。現に、讀みもしないのに、家を出る時、『文章世界』を一册持つて來たのもその爲めである。まさか、理髮店の職人がかうした雜誌や新聞を持つてゐるとは思はないから……。

かれ等理髮店の職人は、何處でも、晝間は出られないので、朝早くとか、夜遲くとか頭を刈りに出かけて行くが、何うも同じ職人だと見られると、此方も面白くないし、先方もあまり好い氣がしない。それで成るたけそれを隱すやうにするのが例になつてゐる。

青物市場の前を通る時には、其處ではもう野菜の荷車が一杯集つて、ぼつぼつせりを初めてゐるのを順吉は見た。O町に來て電車を下りたかれは、其處に、好い理髮店のあるのを知つてゐるので、ちよつと其方へ行つて見たが、戶がまだぴつしやり閉つてゐた。爲方がないので、かれは朝の通りを歩いて行つた。

かれはもう一軒好い理髮店のその近所にあるのを知つてゐた。で、そつちの方面へ曲らうとしたが、

たか。その遊女屋に上つてからその事件に至るまで、僅かに三月の月日しか經つてゐないのである。順吉かれ自身にしても、何うしてさうした心の形になつて行つたかわからないのである。勿論かれ自身も金がなくつて困つてゐた。亡女も好いお客がなく、借金が澤山にあるらしかつた。しかし、約束して短刀を持つて行つたまでは、まだ戯談のやうな氣がしてゐた。

……妓夫が飛び上つて來た。障子を兩方に手荒く明けひろげた。家中は急に騷ぎ出した。『なんだつて、こんなことをしやがつたんだな。』妓夫はかう呶鳴りながら、蚊帳を拂つて二個の死體を足下に眺めるやうにした……。

その聲が今だに耳に響いて來るやうな氣がした。

氣が附くと、電車は思ひがけない處を走つてゐる。O町に行く筈なのがN町の方へ來てゐる。その饅頭屋の招旆は確かにさうだ。見覺えがある。で、電車の方向を書いた箱を周章てゝ見ると、S行だつたのが、いつかO行に變つてゐる。何處かで改へたものと見える。それを、妄想に耽つてゐたので、かれは氣が附かなかつたものと見える。

此處等でも好い。好い理髮店さへあれば……と思つてあたりを見渡して見たが、何うもありさうにもない。爲方がないので、その次のH町まで行つて、車掌に話して、更に乘替の切符を貰つて下りた。

本町の理髮店にかれがゐた時分、H町からわざわざ來たものだといふ髭の生えたパナマ帽を冠つたお

順吉は去年あたりまでは、學生を見ると、一種の刺戟を心に受けるのが常であつた。自分も夜學をもつと勉强しなければならないと思つた。しかし、今はもうそんな氣は起らなかつた。一年を隔てゝ、かれは全く別種の人間になつたことを思つた。

Hの大通りに來て、

『さよなら。』

と言つてかれは下りた。

學生と並んで腰をかけてゐる間も、ちよい〳〵亡女のことが思ひ出されたが、HからS行の電車に乘換へると、空いてゐたためか、妄想が盛んに起つて來て、押へても押へても押へ切れなかつた。何うして、今日はかう思ひ出すんだらう？　かう思つて考へて見ると、月こそ違へ、日は同じであつた。不思議な氣がした。續いて、一年の間に降つたやうに起つて來た事件が、益々不思議な念を、かれに誘つた。かうした念は、これまでにもかれは幾度も起したことはある。しかし幾度起して見ても、その不可思議は消えない。かれがあそこに行つたのは、『一夜遊ぶ』といふ外には別に意味はなかつたのである。亡女は亡女で、大勢の娼妓と一緒にそこに店を張つてゐたにすぎないのである。それが、何うしてあの亡女が最初にかれの眼についたか。また何うしてその情が路傍の人とは思へないやうに深くなつて行つ

暫しの間は立つてゐたが、やがて腰を下すことが出來るやうになつた。それと同時に、彼と並んで立つてゐたセルの袴をつけた學生も彼の傍へ腰をかけることが出來た。

その學生は車掌に訊いた。

『K町へはまだでせうか？』

『え、まだずつと先きです。』

かう車掌は素氣なく答へて、向うの方へ行つた。

順吉は餘計なことだとは思つたが、傍から、

『K町はまだ七つ八つの停留場を越してから、乘り替へるのですよ。』

『さうですか、難有う……』

『まだ隨分ありますよ。』

その學生は、今朝、用事があつて、S町まで行つて、それから學校に行かなければならないのであつた。

『間に合ふでせうか。』

『合ひますよ。』

學生は十七八で、何でも三田に通つてゐるらしかつた。にきびだらけの顏をしてゐた。

なつて、臺の上に、ぽつとりとした血を塗つて、柄まで血に汚れてゐる短刀がほうつてあるのが見えた。女の左手の傍にも投り出された血塗みれの短刀があつた。……

さうした心の光景を押へ押へ、かれは橋を渡つた。しかし、さうした悲慘な光景も、その當時乃至は病院にゐた時分、または養育院にゐた時分とは違つて、さういふ風に思ひ出して來ても、決して烈しい強い悲哀や悔悟を誘つては來なかつた。古着屋の店にぼんやりしてゐる時分には、よく死んだ女のことを思ひ出しては涙を流した。俺はもう一生獨身だ。俺には死んでもあの女がゐるのだ……。俺のこれからの一生は、あの女のために働くのだ。かう痛感してよく心の中に絶叫したが、今ではもうさうした色濃い感じは起らなかつた。かれは自分のやつたさうした悲劇を、單に繪として見ることが出來るやうな氣がした。

しかし、單に繪としても、決して好い繪ではなかつた。かれは漸く橋を渡つて、電車の交叉するところに來た。

ふと路を隔てゝ向うに、娘を伴れた田舍の人が通るのがかれの眼に入つた。その娘がお新に似てゐる。曾て自分に熱くなつて來たN町のお新に似てゐる。もしやさうでないかと思つたが、さうでなかつた。

やがて電車が來た。

かれは其處に待つてゐた大勢の人達と一緒に乘つた。

ぞと思つてゐた。それが今では……。氣が附くと、一人の若い新聞配達が、向うの横町から走つて出て來て、その横町の角の家の戸の隙から新聞を一枚さし入れて、そしてまた向うに走つて行つた。その男が何處か、横濱の支局にゐる時分、集金を拐帶して逃げて行つた男に似てゐるので、かれはその時分のことを思ひ出した。

……また眼の前に見えて來た。眞黑な女の脣が蠟のやうに白く、觸ると圓く冷くなつた顏、自分の左の胸の傷口からは血がどうどうと流れた。漏斗の口から醬油の出るやうに……

かれは簇るやうに起つて來た心の綸をかきのけるやうにした。

大通りを通つて行く人の方にその心を移すやうにした。

氣が附くと、橋の畔だ。

もうそこには、電車の來るのを待つてゐる人がチラホラゐた。かれも乘つて行かうと思つたが、何うせ、橋を渡ればすぐ乘り替へるのだから、それよりはと思つて、ずんずん歩いて行つた。大きな鐵橋が朝霧の中に見える。川が晴々と見わたされる。傳馬が碧い水の上を滑るやうに動いて行く。向うの岸の二階屋はまだ雨戸が閉つてゐるのが見える。……男の長く床の外にはみ出した手の向うに、床と不平行に

朝の空氣が好い心地にかれの周圍にあつた。まだ都會はすつかり眼覺めない。電車はもう通り始めたけれど、大通りにはまだ人も車も多く通つてゐない。六月の朝霧が薄くしつとりと濡れたやうにあたりをこめてゐた。

その薄い霧の中に、黑ずんだ割下水が見え、つゞいて橋が見えた。橋の上を通る時、ふと綺麗な白髮頭の中老の人が立つて川を見てゐるのを見た。すれ違ひさまに見た顏が誰かに似てゐるのだと思つたら、それは自分が半年ゐた養育院のMといふ收容者上りの役員の顏に似てゐるのだといふことが思ひ出されて來た。あの男だつて、この人のやうにネルの着物でも着せて、綺麗にしてゐたら、立派な旦那になるだらうと思ひながらかれは歩いた。

順吉が今朝特に早く起きたのは、店の仕事を始める前に、いつも親方に起される時間までに、頭を刈つて來ようと思つたからであつた。人の頭は刈つてやつても、自分の頭は刈るひまがない。毛が延びてぼさぼさしてゐる。それに、今日は一つ好い理髮店の職人の刈るのをよく見て來て、そしてそれを自分の參考にしやうなどとかれは思つた。

かうして朝早く町を歩くのは、かれに取つても、久し振りなので、全く好い心持がした。ふと新聞の配達をした頃のことが思ひ出されて來た。あの時分は、よくかうした朝を早く出て歩いたものだ。何も苦勞といふ苦勞もなかつた。無邪氣だつた。今の中はかうして苦學してゐても、今に、豪くなつて見せる

『昨夜、二十錢もやれば好かつた……』

通りに出ても、かれはこんなことを思つてゐた。

しかし、親方が下にゐるから、それが知れると、また面倒だ……。親方のゐない時にしよう。かう思つてやめたかれの心が、歷々とかれの居る小さな理髮店のさまをかれの眼の前に展げて見せた。

そしてかれは其處に來るまでの徑路を繰返した。死ねば好いと思つた創痍が治つて、誰も引取人のないために入れられた養育院から戾つて來たが、それからかれは、其處と、彼處とを訪ねた。何處でもやさしくして吳れた。昔のやうに人が辛くかれに當らなかつた。またかれからその話を、悲慘なその話を、誰も聞かうとはしなかつた。人は唯かれの顏と體とを搜した。

新聞配達、勞働夫、印刷所の職工、牛乳配達、さうしたものゝ中から、かれが以前にやつてゐた職業の中から、かれは生活の道を求めなければならなかつた。しかしもう何も彼もする氣はなかつた。殊にさうした烈しい勞働めいたことは――。で、かれは砂塵の立つ古着屋の店に一月ほどゐた。そこにそのまゝゐても好かつたのだが、そこの主人は深切で、かれのやつて來た悲劇に同情して吳れて、いつまでゐても好いと言つて吳れたけれど、ふと十七八の頃に一二年年期を入れた理髮店にまた入つて見る氣になつて、そして此處にやつて來た。此處の親方はその時分知つてゐた人だ………。

『さつきから、もう眼が覺めてゐるだよ。年寄は何うも寢られねえ。』

『何うも難有う……』

かう起して貰つた禮を言つて、そして順吉は着物を着改へた。

『何處へ行くだね。こんなに早く……』

『朝、一廻りして來ように思つて……。此頃は今時分、町を歩いて來ると、好い心持だからね。』

『さうだらうな。』

順吉は昨夜爺さんに酒を買ふ錢をいくらかやれば好かつたと思つた。二三日前かれは親方から給料を貰つたので、財布の中にはいくらか金がある。可哀相な爺さんだ。親方が親身の子でありながら、食はせて置くのさへ餘計な者のやうに言はれて、始終ぶつぶつ言つてゐる。好きな酒も滅多に飲めやしない。時々カブトをきめて來るが、それは親方の妹の他に嫁いでゐるところから貰つて來るので、親方は一文だつて小遣をやりやしない……。爺さん、今年七十五だ。かう年を取つて、かうした眼に逢つても、それでも生きてゐたいのかしら? この爺さんでも、矢張若い時は種々なことをして來たのかしら?

……俺はあの時死んでたら? ひよいとさうした考が順吉の頭を掠めたが、その時のことは、既に餘りに多く思ひ出したり、考へたり、涙を流したりしたので、もうかれにもめづらしくなくなつたと言ふやうに、別に深くもかれを動かさずにそのまゝ頭の中を通り過ぎて行つて了つた。

彼の一日

『順さん、順さん。』

かう言ふ聲が耳に入つて、はつとして眼が覺めた順吉は、爺さんが床の中で眼を明いて笑ひながら此方を見てゐるのを見た。さうだ、昨夜頼んだ通り、爺さん、忘れずに起して呉れたのだ……。かう思つてかれはすぐ飛び起きた。

もう外は明るくなつてゐる。何時かしらと思つてゐる途端に、何處かの工場での汽笛がボウと長く引くやうに鳴つた。いつも聞く汽笛である。爺さん、よく忘れずに起して呉れた――。

『五時のボウだね。』

『さうだ――』

爺さんは笑つてゐる。

『お爺さん、よく眼がさめるね。昨夜頼んだ通りに起して呉れたね。』

七

やがて入つて來た叔父も山子も、流石にあたりのさまを見ては、はつとせずにはゐられなかつた。かれ等の眼には、板の間にころがされて、じつと眼をつぶつて、痩せこけた頬に涙をほろほろと流してゐる順吉のさまが映つた。

息も絶え絶えに見えた。

『これは！』と叔父は思つた。

傍には働きの男が立つてゐたので、『や、いろいろとお世話さまです、』と言つたが、その聲にはつとして眼を明いた順吉は、其處に叔父と妹の立つてゐるのを始めて見て、急に嗚咽が込み上げて來て、顏の筋肉がひッつるやうになつて、思はずウオオと泣いた。

『何うした、うん、何うした……』

叔父と妹とは傍に寄つて來た。

働きの男も、此さまを見ては、流石に氣の毒になつたといふ風で、生憎、空いた寢臺がなくつてとか何とか言つてゐたが、そんなことには頓着せずに、また大勢そこに人が見てゐるといふことにも頓着せずに、『叔父さん、僕は飛んだ事をしました。僕は……僕は……』かう言つてまた順吉はウオウオ泣きつゞけた。

待ち兼ねて立つて來て、二人も三人もその周圍に集つた。

『今日は遲いぢやないか……』

かうその一人が言つた。

『え、向うで手間を取つちやつて……』

辯解するやうに、菓子屋が言ふと、

『もう二人三人來ても好いんだ。賣れるぜ、本當に……。好い儲けが出來るぢやねえか。もう一人は何うした……』

『岩松、何うしたか、さつき、そこらにゐたつけがな。』

一人買ひ、二人買ひして、菓子屋は段々向うに行つた。順吉の横はつてゐる傍を通る時にも、何の注意を拂ふでもなく、そこに人が寢てゐるのも何も知らぬやうにして平氣で掠めて通つて行つた。

順吉は堪らなく悲しくなつて來た。

これでも人間だらうか。生きてゐる人間だらうか。かう思ふと、今更ながら突落された深い悲痛な谷底、浮び上りたくても容易に浮び上ることの出來ない谷底が深く顧みられるやうな氣がして、またはこのまにいつまでもいつまでも永劫に此の板の間に死體か何ぞのやうになつて横はつてゐなければならないといふやうな氣がして、かれは聲をあげて泣き出したくなつた。

あつちからもこつちからも聲がかゝつた。

その男は先づ手近なところから、一つ一つ用をすまして、そして多い寢臺の間を縫つて、段々呼ばれた方へと近寄つて來た。

始めは順吉にはそれが何であるかちよつと飮み込めなかつたが、やがてそれは小芝居や活動小屋などでよく見る仲賣のやうなものであるといふことがわかつた。かうしたところにゐる人達も、矢張午後には茶受が欲しいのであつた。

『おい、早く來て呉れ。』

『此處だ、此處だ。』

などといふ呼聲がそこからも此處からも起つた。

丁度順吉の横はつてゐる前にその男がやつて來た時には、そのすぐ上の寢臺に寢てゐる患者が呼んだので、男はそこに黑い風呂敷に包んだ菓子箱をひろげた。其處にはビスケットだの菓子パンだの安い餅菓子だのがゴタゴタに入つてゐた。

『これを二つ。』

かう言つて、その患者は鹿の子らしい菓子を手で取つて、寢臺の蒲團の下からいくらも入つてゐないらしい財布を出して、そこから銅貨をチャラチャラ音させてわたした。近いところにゐる體のきく患者は、

わるい唸聲を立てた。

そして、かうした混雜した一間の中を、自分も曾て收容者であつた男が、世話役とか、働きとか言ふ名に呼ばれて、その多くの寢臺の間を縫つて、いろいろと病人達の世話をして歩いた。

その世話役の男は、何遍となく、また何人となく、かれの横はつてゐる傍を通つて行つたけれど、また傍に近寄つて來る度に、きめられた寢臺へ自分を伴れて行つて吳れるのかと期待したけれども、しかもいつも知らん顏をして、そこに板の間に物か何かのやうに轉がされてあるかれの傍を何の注意も拂はずに通つて行つた。

午はもうとうにすぎて了つた。否、尠くとも午からはもう三時間は經つた。護國寺を通る少し前に、かれは午砲の音のひゞくのを聞いた。それからもう隨分時は經つた。見ると、日差しもかなり傾いて、廣い間の西の硝子窓からは、廊下の板の間に二尺も日光がさし込んで來てゐた。

午の牛乳もお粥も順吉は竟に得ることが出來なかつた。

と、不意に、風呂敷に長い箱を包んだやうなものを持つた男が入つて來たっと、

『おい！』

『おい、此處だ。』

『菓子屋、此處だ。』

『誰も、引取手が無いんだとよ。』

こんな言葉が一時ガヤ〳〵とあたりに喧しく聞えた。皆な首を擡げて、――重い病人らもわざわざ首を擡げて、そしてかれを見るやうにした。順吉は身の置きどころもないやうな氣がした。

六

しかしそれも暫くの間で、何んなめづらしいものでも、見るものを見て了ひさへすれば、それでたんのうしたと言はぬばかりに、――または他のことよりもてんでに自分の身が顧みられるといふ風に、皆なかれから注意を離して了つた。

いろいろな聲や、話聲や、笑聲がまたガヤガヤと廣いその一間の空氣に滿ちた。

それは順吉のやうな悲慘な境遇に身を置いたものゝ眼から見ても、あさましい悲しい情ない氣のするやうなシインであつた。此處は離隔室と言つて、此處に入つて來た病人を、病室のきまるまで一時ゴタゴタに入れて置くところであるが、かうしたところに入つて來るものだけあつて、一人として滿足な人間のさまをしてゐるものはあたりに見當らなかつた。青白い顏、鐵色をした顏、餓ゑ切つたやうな顏、死に瀕した顏、病に衰へた顏、さうしたものが丸で地獄へでも行つたかのやうにごた〴〵とあたりに滿ちた。かれの置かれた向うの寢臺にゐる中年の女は、今にも死ぬかと思はれるやうな呼吸で、時々氣味の

『幾日になる。』

『もう、今日で十一日目です。』

それだけで、外に何もきかずに、醫者は胸の傷を檢した。しかし別に病院にゐた時のやうに詳しく診るでもなく、ちよつと見て、顏をしかめて、そして今度は首の傷を檢べた。

かうした重い患者である。死ぬか生きるかもわからないやうな病人である。從つてそれと知つたならば、重い傷痍を檢べたならば、一刻も早く此身を何處かに伴れて行つて、寢臺の上に寢させて呉れるだらうと順吉は思つた。しかし醫者にはさうしたことは望まれなかつた。醫者はそれがすむと、さつさと向うに行つて了つた。そのまゝかれを板の間の上に殘して――。

以前にもまして、そこにゐる大勢の人達の眼はかれに注がれた。その短かい會話、ほんに短かい會話であつたけれども、女と短刀で突き合つたと言ふ言葉は、人達に情死を思はせるに十分であつた。囁くやうな聲はそこにも此處にも起つた。近いところから段々遠くへと波でも傳はるやうにして傳はつて行つた。

『情死だとよ。』

『えらいことをやつたもんだな。』

『女は死んだんだとよ。』

けれども、何うも順吉にはさうは言へなかつた。それから順吉は、自分でやつた傷ばかりでないと言ふことを言つたのを、何だか殊更に責任を他に嫁して、しかも死んで了つた女に嫁して了つたやうな卑屈さを感じたけれども、情死とはつきり言ふことの出來ない上は、何うしてもその狀態をそのまゝに言ふより他爲方がなかつた。

『何うしてそんなことをしたんだ……』と醫者がつゞけて聞くかと思つたら、醫者はそれはきかずに、却つて、

『えらい事をやつたな。』

いくらか親しみを持つたやうな調子で言つた。

『相手は何うした？』

つゞいて小聲で訊いた。

『死にました。』

『フム。』

醫者は頭を振るやうにした。すぐ言葉をつゞけて、

『で、今日まで引取られた病院にゐたんだな。』

順吉は點頭いて見せた。

首を伸ばすやうにした。

さつきとは違つた醫者がやつて來た。周圍の視線は益〻密に彼の身に集つて來るのを順吉は感じた。

『何うしたんだ！　一體……？』

かう醫者は訊いた。

『…………』

矢張、默つてはゐたけれども、もう何うせ聞かれずには置かれまいと思つて、かれは腹の中で覺悟をしてゐた。しかし、かれに取つては、かうした大勢の人達のゐる中で聞かれるのが辛かつた。何處か別なところで調べるなり聞くなりして貰ひたいとかれは願つた。しかしそんなことは言つてゐられなかつた。

醫者は胸の傷だの、首の傷だのを調べてゐたが、

『何うしたんだ？　此處は？』

かうまた繰返した。

順吉はいくらか自暴氣味になつた。面倒臭いなァとも思つたゝあらひ浚ひ言つて了ふ氣になつて、

『自分でやつたんです。……女と一緒に短刀で突合つたんです……左の方の傷は女がつき刺したんです……首の方は……』

二人で情死を計つて、自分一人死にそくなつたんですと言へば、一番わかりが好くつて好かつたのだ

默つた不機嫌らしい顔が順吉の青白い憔悴した顔と相對した。他の二人も矢張默つて見てゐた。

診察はごく簡單であつた。

『よし。』

と言ふやうな表情をして、醫者は向うへ歩いて行つた。

と、今度は二人は傍に寄つて來て、戸板に載せたまゝでなしに、そのまゝかれをぢかに抱きかゝへようとした。順吉は戸惑つたやうな氣がした。かれはするがまゝに任せた。

胴を抱へ、手足を持つた三人は、足早に向うに見える古い大きな家屋の方にかれを伴れて行つた。

順吉の眼には、古い、田舍の紡績工場のやうな家屋が映つた。棟は高いが、あたりはがらんとして、低い二三段の入口の階段を上ると、ひろい板の間に種々の病人を乘せた寢臺がごた〳〵と置いてあるのが見えた。

かれの重い體を抱いて來た二人は、寢臺と寢臺の置いてある板の間にぢかにかれを下した。二人ははアはア呼吸を吐いた。

そこは人の通る道だつた。

あたりにゐる人達は、皆なめづらしさうにして、さながら蜜に集る蜂のやうにして、板の間にぢかに置かれたかれを覗くやうにした。二人も、三人も……。すぐかれの頭の上の寢臺にゐる病人もわざ〳〵

てはのそのそと向うに歩いて行つて了つた。
構内はしんとして蟬の聲の他には何の物音もきこえなかつた。
また暫く經つた。
ふとまた向うの古い家屋からさつきの二人の此方にやつて來るのが小さく見え出して來た。それを見た時には、順吉はほつとした。救はれたやうな氣がした。
今度は二人の後に、さう若くもない醫者がついて來た。
三人はこの戸板の周圍に來て立つた。
二人は順吉の傍に寄つて、今まで着てゐた着物を脫がせて、持つて來た院の白い着物を着せた。繃帶が彼方此方にしてあつたり、手足や體が自由にならなかつたりするので、その着物を着せるにも容易なことではなかつた。傍で立つて見てゐた醫者までがぢれつたさうにして、
『何うしたんだ?　一體……』
かう突慳貪にかれに訊いた。
『…………』
かれは何とも言はなかつた。
漸く院の着物を着せたあとで、醫者は傍に寄つて來て、かれの身體を診察した。嚴めしい鬚の生えた

そのまゝ釣臺をかついで、靜かに向うに行つて了つた。
消毒着の二人も、しばし其處に立つてゐたが、これも矢張默つたまゝ、元來た古い家屋の方へと引返した。
一人そこに置き去りにされた順吉は、悲しいとも何とも言はれないやうな心持がした。病院の柔かい蒲團、あのやさしい細君の拵へて與れた枕、白い毛布、さういふものは皆な持つて行かれて了つて、薄つぺらな一枚蒲團の上に古着物を丸めたのを枕にして、かうして一人地上に――戸板の下はすぐ土である地上に横はつてゐるのを何とも言はず悲しく思つた。これでは、これから先き、どんなことをされるか知れないとすら思つた。
蟬が頻りにヂィヂィと鳴いた。

五

かうしてかれは一時間近くもそこに横はつてゐた。
涙は絶えずかれの青白い頰を流れた。
樹の間を洩れて來る日影は、濃淡の縞を横はつたかれの體の上に投げた。大きな茶色の犬がちよつと傍に寄つて來て、あたりを嗅いで、そしてそこにゐるかれを不思議さうにして見てゐたが、それもやが

て來て、釣臺の上を蔽つた白い布を人夫と一緒に外した。

と、急に、青い明るい空の光線がぱつと順吉の顏に落ちた。

順吉は眼をつぶつた。

消毒衣を着た若い男は、小屋の方へ歩を運んで行つたが、やがて其處から戶板を一枚其處に持つて來た。その上には既に薄い白い蒲團が敷かれてあるのを順吉は見た。

矢張かれ等も人夫も何も言はなかつた。かれ等は人夫と共に默つて順吉の頭と足と胴とを持つて、かれの體を釣臺から戶板の上へと移した。年を取つた方の男の持つて來た白い着物を枕にして……。

しかしそこは前のところよりも、いくらか涼しい樹の影の深いところで、風が靜かに傍の芝草の上を吹いて通つた。

人足はこれで自分だちの仕事はすんだといふ風に、そこそこにあたりを片附けて、そして歸る支度をした。

『元の路を歸るかな！』

『あそこよりも、橋の方へ出て行く方が近いだらう。』

『さうだ……あの方が近い。』

こんなことを言つてゐたが、別に挨拶をするでもなく、また消毒衣の男達に言葉をかけるでもなく、

『此處だらう？』

『さうだ、此處に違ひねえ。』

こんなことを言つて、かれ等は釣臺をそのまゝ其處に下した。

小屋の方へ行つたらしい人夫はやがて戻つて來て、

『誰もゐねえや。』

『何うしたんだ？　がら空きか？』

『がらあきだ……』

かう話し合つてゐたが、爲方がないので、そのまゝ始めの人夫は、奥の古い家屋の方へと行つた。

下した釣臺の上には、高い樹が涼しい陰をつくつて、梢では油蟬がヂィヂィ暑さうな聲を出して鳴いてゐた。あとに殘つた二人の人夫は、棒端に身を凭らせかけて、頻りに汗を拭いてゐた。風の通る度に涼しい影が釣臺の白い布の上に搖いた。

暫く經つた。

やがて白い消毒衣を着た若い男とそれよりはいくらか年を取つた男とが、さつき行つた人夫を先きに立てゝ、その大きな古い家屋の方から步いて來た。年を取つた方の男は白い着物を抱へてゐた。

かれ等は何も言はなかつた。また病人にも話しかけようともしなかつた。かれ等は唯默つて傍に寄つ

靜かにその大きな門の中に釣臺を入れて行つた人夫の一人は、すぐ左のところにある門番のところに行つて、

『新宿の役場から病人を伴れて來ましたが……』

かう言ふと、

『はァ、はァ。』

と面倒臭さうに門番の爺は答へて、『これからずつと行くと、正面の玄關に行く前に、左へ行く廣い道があるから……そこに行つたら、左に小屋があるから、そこに行つてお聞きなさい。』

それでも爺さんは下駄をつゝかけて、表へ出て、その道を人夫に指し示すやうにして言つた。

人夫達は默つて、また釣臺を擔いで、褐色をした土地のやゝ小高くなつてゐる、潤い、兩側に檜の坊主形に刈り込んである庭樹の傍をゆらゆらと靜かに歩いて行つた。

日は暑くキラ〳〵と照つた。

少し行くと、果して門番の言つた通りに、正面の大きな嚴めしい玄關に突當る前に、左に入つて行くかなりに大きい道があつて、その向うに新しく建てたらしい小さな家屋があつた。そこらには芝草が一面に綺麗に刈込まれてあつて、その彼方には、硝子窓のかなりに古くなつたペンキの色の褪めた大きな家屋があつた。

『もうぢきだ。』

『あそこだ……。あの坂を登つて、大塚に出ればもうすぐだ。』

こんなことを言ひながら、人夫達は立留つて肩を代へた。

順吉も養育院のあるところをよく知つてゐた。その長い板塀につゞいて大きないかめしい門のあるのを通りから覗き込んで、かういふところに入れられる人間もあるんだと思つたこともあつた。壯健な、まだ年若いかれには、そこは人生の最も悲慘なところ、暗いところのやうに思はれた。そこに入るやうな人達は、生きながら地獄にでも墜ちたものゝやうに思はれた。可哀相を通り越して、淺猿しくすらも思つた。其處に今はかれも行きつゝあるのであつた。

だら〳〵した坂を上り切ると、そこに電車のレールの通つてゐる大きな白い埃の立つ通りがあつて、そこを斜に横切つて、向う側の日蔭のところの方へ人夫達は寄つて行つた。

『あそこだらう?』

『あそこだ。』

かうかれ等は指し合つた。

間もなく向うに、右に、長い板塀の連つてゐるのが見え出して來た。大きな石の門の柱の立つてゐるところまでは、もうそこからいくらもなかつた。

だと言つて相談に行くことも出來やしない。これが當り前の病氣つて言ふんなら、親類にでも誰にでも相談のしやうがあるんだけれど、恥晒しな、本當に、馬鹿なことをしたもんだ。』

『…………』

妹は何も言はなかつた。

四

ふと氣が附くと、大きな寺の門が見えた。かれは頭を横に振つてあたりを眺めた。廣い白い埃の立つ通りがかれの前にあつた。

『護國寺だな。』

かう順吉は思つた。

こゝらはかれが東京に出て來た時によく歩いたところであつた。あの長い廣い通りの山に寄つたところにSといふ國の友達がゐて、そこにかれはよく遊びに行つた。寺の境内などをもよく獨りで種々な空想に耽りながら歩いた。櫻の見事に咲いてゐる山門の下の休茶屋の赤毛布の上にも休んだことが何遍もあつた。

矢張失敗して國の方へ歸つて行つたSのことなどをかれは思ひ出してゐた。

三

妹はそれでもよく來て世話をして吳れたとかれは思つた。

妹の身にしても可哀相だ。親のない二人は互に援け合はなければならない筈であるのに……。妹は兎に角東京に出て、兄には世話もかけずに、自分で奉公口をさがして、二三年そこに奉公して、その家族の人達にも信用され、行く行くは、そこから嫁にやつて貰ふことが出來るまでに辛抱したのに、かうしたことを自分がやつたがために、それが新聞に書かれたために、その家族の中に奉公してゐることが出來なくなつて、そしてそこをも出なければならなくなつた。それは今は別に奉公口を捜して、困つてはゐはしないけれども、そのことがあつた時には、一番先きにかけつけて吳れて、それから何のかのと言つてはよくやつて來て吳れた。こんな腑甲斐のない兄を持つた妹は可哀相だ……。

かれは昨日、始めて叔父が田舍から出て來た時にも、口をきかなかつた。かれは叔父の顏を避けた。覗かれる時にはわざと眼をふさいだ。叔父も重大な病人と思つたらしく、强ひて口を利かうともしなかつたが、日が暮れてから、叔父はギィ〳〵と蟲のなく庭の方へ足を投げ出しながら、暗い方に眼をやつて、團扇をつかつてる妹に小聲でいろ〳〵なことを話した。

『本當にしやうがありやしない。何處にだつて顏向けも話も出來やしない。だから、順吉がかう〳〵

を耳にした時の暗い心を再び心にくり返した。

俺はそこに行つて死ぬかも知れない……。かう思ふと、いつそ死んだ方が好かつたと度々思つたそれとは丸で違つた悲しい心が湧くやうに簇り上つて來た。かれは養育院で死ぬべく生れては來なかつた筈だ。まだ希望も理想もあつた筈だ。何うかして人間として浮び上りたいばかりにいろ〳〵な苦痛をも難儀をも凌いで來た。……それが僅か一年ばかりの間に颶風のやうに捲き上つて來たこの事件、そこまで考へて行つた。かれは、急にさうした考へから離れるべく努力した。その先には、思ひ出すにすら堪へられない悲慘なシインがあつた。女はうんと唸聲を立てゝぐつたりとなつた……。かれは再び眼をつぶつた。

かれはまた體の流れて行くのを感じた。かれは何をも思ふまいとした。

肩をかへた人夫達は、

『暑いな！』

『何うも暑い……』

かう言つて、だらだら落ちる汗を拭ふらしい氣勢がした。釣臺はまた靜かに動いて行つた。今度眼を開いて見た時には、順吉の眼には阪のやうになつてゐるところが映つた。そこにある店の前では、若い丸髷の上さんが頻りに何か話してゐるのが見えた。自轉車が飛鳥のやうにかれの傍を掠めて下りて行つた。

に映つた。かれはをりをり眼を明いた。と、忽ち硝子の破片のやうにきらきらする光が眩しくかれの眼を壓した。かれはまた眼をつぶつた。

何處を通つてゐるのだらう。時には、こんなことを思つて、首を少し捩つて、横に頭を伸して、三角にひらいてるところから外の樣子を覗いて見た。

そこには白く光る廣い道があつた。暗い低い家がゆらゆらと流れるやうに搖いて行くのが見えた。電車の線路もなく、人通りもあまり澤山ないのから押して、こゝは山の手のさびしいところだらうと思つた。

をりをり人夫は立留つて肩を替へた。時には豫備について來た一人がそれに代つたりした。かれ等は『重い病人だから』と豫め吩咐つて來てゐると見えて、さういふ時にも成るたけ靜かに丁寧にするらしかつた。歩く時にも成るたけ靜かに、釣臺が動かないやうにして歩いた。俺のやうな碌でなしを、叔父にもあれほど罵られたやうなこの身を、假令重い病人であるとは言へ、かうして劬つてやつて呉れると思ふとまたしても涙が出さうになつて來た。

時にはまた順吉には、かうしてあるところからあるところへと移されて行く途中が、かれの數奇な、ロマンチックな半生のある際立つたシインのやうに思はれた。出て來たところも見ず知らずの他人なれば、これから行き着かうとするところも社會の最も底の暗いところである。かれは昨日、養育院の二字

順吉は病院の人達に何か一言お禮を言ひたいと思つたけれども、しかもそれすらかれには言へなかつた。

朝の庭の樹の葉の影が日影を透してかれの顔やら手足やらにチラチラ動いた。人足達はやがてそのまま釣臺を擔ぎ上げて、庭から柴折戸の開いたところを靜かに戸外へと出て行つた。

二

順吉は誰か一緒に尾いて來るのだと思つてゐた。しかし人足達はそのまゝ足を留めなかつた。釣臺はぐんぐん動いて行つた。叔父も、妹も、役場の役人も誰もついて來なかつた。

かれはさびしい悲しい氣がした。涙が胸につき上げて來た。

美しい晴れた夏の朝がかれの周圍にあつた。碧い空、そこに浮いてゐる引きちぎつたやうな白い雲、朝の中にだけ見られる町の涼しい影、涼しさうな浴衣がけで、歩いてゐる男や女の影、その間を釣臺は輕い動搖と靜かな足取りで動いて行つた。そしてその動搖の中にかれの悲しい涙と悲痛と追憶とが雜り合つた。かれは胸の上に手を固く組んで、爲方がないといふやうに弛んだ瞼をつぶた。果てなく流れひろがつて行く洪水の中にその身が浸つてゐるやうな氣がした。

きらきらと照りかゞやく日の光は、釣臺にかけてある白い布を透して、黃く明るくかれのつぶつた眼

順吉は何故あの時死んで了はなかつたかと思つた。

しかしさうした考も、既に餘りに度々起したので、始めのやうに、始めて遊女屋から此處に擔ぎ込まれた時分のやうに、強い刺戟をかれの心に齎さなかつた。かれは何方かと言へば、ぼんやりしたやうな心持で、自然の成行に任せるより他に爲方がないと思つた。

叔父だの妹だの役場の人だの書生だのがやがてぞろぞろとかれの室に入つて來た。かれは妹の肩に體を寄せ、足を書生に持つて貰ひ、胴中を叔父に支へて貰つて、そしてその十日間ゐた寢臺から廊下に出て、それから庭の石の上に置いてある釣臺の方へと伴れられて行つた。廊下や緣側には、赤兒を抱いたやさしい此處の細君や、その上の幼い兒を負つた老婢などが皆な出て見てゐた。老婢の涙ぐんで見送つてゐるのを順吉は見た。

『いゝよ、いゝよ、敷布はその方が好いよ。そつちの方が綺麗だよ。』

かうやさしい細君は言つた。

釣臺には既にさつぱりした蒲團が敷かれ、枕の布も新しく、寢心が好いやうに十分に設備されてあつた。順吉はそこに移された。

『氣をつけてね、あんた等……』

老嫂はいくらか聲をうるませて人夫達に言つた。

庭では人夫等が何か言つてゐる聲が聞える。大方緣側にでも腰掛けて煙草でも吸つてゐるのだらう。と、凉しい朝の庭に釣臺の置いてあるさまだの、澤山並んでゐる盆栽だの、朝顏の花だのが眼に見えるやうな氣がした。空が紺青のやうに美しく晴れてゐるのは、窓からさし込んで來てゐる明るい日影で知れた。

人夫の話聲に雜つて、をりをり役場の人らしい太い聲がしてゐたが、突然叔父の『御苦勞さまです。』といふ聲がした。矢張叔父は來てゐるのであつた。

順吉は此處に來て、もう十日以上になることを思つた。人間一人を生かすためとは言へ、またさうした行懸りであつたとはいへ、見ず知らずのかれのために、此處の院長、細君、看護婦から受けた手厚い深切な取扱ひをかれは感謝せずには居られなかつた。從つてかうしたかれを、引取手のないかれを、言はば追ひ出すやうにして養育院に送り出さうとするのをも順吉は決して憾みには思つてゐなかつた。順吉は事件があつてから、散々促されてそして昨日漸く田舍から叔父が出て來たことを思つた。役場の役人と院長と叔父と、かう三人して種々善後策について話したことを思ひ出した。叔父は最後に、『それはとても私には出來ません。さういふ資力はありません。いくら叔父でも何うも爲方がありません。』と言つた。と、役場の役人は、いくらかその薄情に激したといふやうにして、『好う御座んす。それなら、私の方でします。』かう言つて、そして直ちに養育院に送る手續をしたことを順吉は思ひ出した。

號泣

一

順吉が寢臺の上で朝の牛乳と小量の粥を食つて了つた時であつた。體が起されないので、それを見ることは出來なかつたが、ふとかれは釣臺のギチギチする音だの、柴折戸を明けて、そらそら突つかゝるなどと注意する聲だのを耳にした。もう役場の人が釣臺を人夫に擔がせてやつて來たのであつた。

『あゝ來た！　今日は行かなくちやならない。』

かう順吉は思つた。

續いて叔父は來てるかしらと思つて耳を欹てた。まだ來てゐないやうであつた。妹はさつきちよつと顏をかれの寢臺のところに見せたが、何か用事でもあるやうにそはそはして、やがて何處かに行つて了つた。順吉は淋しい氣がした。

『そんなことはない。兎に角、伯母さんだけでも助かつて好かつた。』
『私なんか死ねばよかつた……』
老母はさめざめと泣いた。

九

その夜、遲くそれを聞いて轉ぶやうにして入つて來たお元は、奥の間に二つ並べられた死骸に取附いて、
『私だけ何故殘して行つて下すつた……。奥さんは、一緒に行かれたから好い。私は、私は……一人殘された私は！』かう言つて泣いて泣いて泣き盡した。

支度をしてゐたぢや、あゝ、さうぢや、さうぢや、お元――あの女のことがあつたぢやよ。隱して、せがれが匿つて置いたのぢやよ。それがな、おのし、』小聲で、從弟の耳の傍に口を寄せて、『昨日あたりすつかり嫁に知れてな……。それから一喧嘩ぢやつたのぢや。私はもう聞くのがいやぢやで耳を塞いでゐたぢや。ところがな、あの雷樣ぢやらう。二階の戶が外れてそれがガタ〱する。雨が降り込む。せがれは一度上つて行つたつけ……。下りて來て、戶を釘で打ちつけるとか何とか言つて、また上つて行つたぢや。そしてな、おのし、カン〱やつて御座つたが、長い釘がないとか何とかで、M子を上から呼んだぢや。M子も喧嘩はしてゐても夫婦ぢやでな、何かぶつ〱言ひながら、せがれの言つたものを持つて上らうとした――その時ぢや、あの雷樣は……』

『釘か、金槌かに感電したんですね。』

『さうぢや。嫁のは、二階に上らうとするところを簪か何かに落ちたといふことぢや……。罰ぢや。罰ぢや。罰に違ひないぢやが、それにしても、二人一緒に死ぬとは！　あの一生喧嘩して來た二人が一緒に死ぬとは、よく〱のことぢや。これも前世からの劫ぢやなあ！』かう言つて老母はさめ〲と泣いた。

『その時伯母さんは何處にゐたんです？』

『私はすぐそこにゐたぢやがな……。私一人取殘されて。因果ぢやな。』

『二階です。』

かう言はれて半ば燒けて危なくなつてゐる階段を上つて行くと、果して其處にぴたりと押潰したやうに黑焦になつて死んでゐるSが横はつてゐた。

『ふむ……』

かう言つたきり、從弟は暫しは口も明けなかつた。

老母は奥の一間に小さくなつてすくんでゐたが、その嚴かな光景からは、今だに恐怖の念を脱することが出來ないやうに、ぶる〳〵と體や手を顫はしながら從弟を見た。話してきかせやうにも容易に話してきかせることは出來ないといふ風であつた。『罰だぞな！　矢張、あまりに我儘をした罰だぞな。』かう言つてまた體を顫はせた。

傍でいろ〳〵なことを言ふのを老母は押へるやうにして、『罰だともな……。あらたかなもんぢや、恐ろしいもんぢや、でなくつて、何うして二人がこんな死にざまをしよう！　罰だ罰だ！』かう言つて手を振つた。

その怖ろしい光景は、顫へおのゝかずにはゐられないやうに今も老母の眼の前にあつた。老母はどもりながら絶えぐ〳〵に話した。『なァ、その少し前にだつて、二人は喧嘩してゐただ。見なされ、それ、そこに荷物が出來てゐるだらう。嫁は、何うしても、もうゐられないつて言うて、荷物をまとめて里に歸る

『お袋さまア、すぐ下にゐたんださうだが、大丈夫だつた！　屋根から黑い煙が出るのでびつくらして近所で行つて見たら、二人打たれて死んだ中に、お袋さまア、死んだやうになつて突伏してゐさつしやつた。』

『兎に角、俺が先きに行く……。お前はあとから來う。』

かう言つて、足を洗つて、着物を着改へて、從弟は作と共に大急ぎで出かけた。

いろいろなことが飈風のやうに從弟の頭の中をかけめぐつた。（あの夫婦が――あの一生を喧嘩で送つて來たやうな夫婦が雷に打たれて死ぬとは！　しかも一緒に死ぬとは！）第一にさうしたことがかれの胸を塞ぐやうにした。目に見えないある不思議の力があつて、そしてそれが必然的に自分達の上に働いてゐるやうにも考へられた。お元のことなどもそれに雜つて浮んで來た。

隣村までは足も地に附かないやうであつた。かれの眼には、忽ちそのＳ家の周圍に大勢人達の集つてゐるのが映つた。一ところ穴の明いたやうに雷に燒けた屋根から、火を消したあとの煙が薄く白くのぼつてゐるのが映つた。かれはそこらに手傳に來てゐる近所の人達に挨拶するのも匆々に、舊い大きなＳの家の中に入つて行つた。一番先きにＳの妻の慘めなさまをして俯伏になつて倒れてゐるのがかれをぎよつとさせた。それは丁度二階に上る階梯の下のところになつてゐた。

『Ｓは？』

『え？　さつきの……』
かう言つて、間を置いて、
『二人ともか？』
『上さまも一緒だァ。』
『え、……それは大變だ。』
かう從弟は言つたが、二三歩妻の方に戻つて、
『Sが死んだとよ。夫婦とも……。さつきの雷樣で……』
『え！　姉さんも？』
畠の中に棒立に立つてゐた細君もびつくりして了つた。
『何んちふこんだんべな……』
『何うして、二人とも打たれたんだ。一緒にゐたんか？』
『俺ら知らねえが、大急ぎで知らせに來たゞァ。』
『それは大變だ……』
從弟夫婦は慌てゝ田から上つて此方へとやつて來た。
『お袋さまは大丈夫か？』

『何だんべい、大變だつて言つてるな。』

『さうだねゝ。』

皆から此方の上つて行くのを待ち兼ねたやうに、

『大變なこと出來ただア……』

また續いてその作は吸鳴つた。

『何だな、一體？』

かう言つて近寄つて行くと、

『Sさァおつ死んだ？』

『え？』

『Sさァべいぢやねえ、Sさァ上さまもおつ死んだ！』

從弟は耳を疑ふやうに、

『え？』

『俺ァお袋さまに賴まれて、慌てゝ、知らせに飛んで來たゞ。』

『何うして死んだゞ？』

『何してッちふこともねえ、さつきの雷樣に打たれたゞ。』

『いゝおしめりだ。本當に好いおしめりだ。』

こんなことを言つて、從弟が雨戸をあけた時には西の空は既に一面に晴れて、さやかな日の影が、ぬれた草の葉やら畑やらにキラキラと照つてゐた。

『怖かないには怖かないが、雷樣は氣持が好い。あとがからつとするからな。』

二人はかう言つて、まだ仕事から上がるには早い時間なので、そのまゝ臺所に下りて笠を取つて、前の畠に出かけた。

畔のほとりの小川は、凄じく濁流を漲らして流れてゐた。

で、二十分ほどそこでかれ等は働いてゐたであらうか。ふと見ると饅頭笠をかぶつた一人の農夫らしい男が家の中へ入つて行つたが、子供が、(父ちやんや母ちやんはあそこにゐる。)と教へたと見えて、そのまゝ出て來て此方へとやつて來た。

『作公ぢやねえかな。』

『さうだ、作公だ。』

こんなことを言つて二人は此方から見てゐたが、その作は遠くから、

『旦那さ、大變だ！』

かう言つて呶鳴つた。

強く凄じく驟雨が降り込んで來るので、裏の雨戸を從弟が引寄せた時には、野は白く茫と飛沫に蔽はれてゐるやうに見られた。大きな電光が鍵を引いたやうに眼を掠めたと思ふと、それと殆んど同時に、轟然として雷聲がその頭上にとゞろき渡つた。

『これはひどい！』

思はず從弟はかう言つて首をすくめた。

凄じい雷聲はそれからそれへと來た。子供達は母親に噛り附いて、生き心地もないやうに突伏して眼を閉ぢ耳を押へてゐた。大人達も默つてそれに壓迫されたやうにして、一刻も早く恐ろしい雷聲の過ぎて行くのを待つた。突然、耳を劈くやう雷聲が鳴りわたつた。

『今のは落ちましたね。』

『桑原、桑原……』

思はずさうした言葉が從弟の口から出た。かれは線香を持つて來て立てた。

頻りに五つ六つ大きな奴が鳴つたが、それからは、次第に雷聲は遠く退いて行つた。『あゝもう、雷樣もお歸りだ……。平生おとなしくないものは、かういふ時に怖いんだよ。わるいことをすると屹度雷樣に打たれて了ふんだから。』こんなことを母親が子供に言つてきかせてゐる中に、次第に雷聲は小さく低く、雨もいくらか小降りになつて來た。

八

ある日の午後、近來にめづらしい凄じい雷雨があつた。

Ａ岳の方からやつて來た雲とＮ岳の方から寄せて來た雲とが一つになつて、墨を潑したやうな空には縱橫に電光が交叉し、それにつれて凄じい雷聲が天地をも撼かすやうに轟きわたつた。

從弟はその妻と一緒に畠に出て働いてゐたが、白箭を投げるやうな驟雨がやつて來たので、慌てゝそこから家の方へ戻つて來た。

『今日のはＮの雷が一緒に來たからひどいぞ。』

『でも好いおしめりだ。』

夫婦はこんなことを言ひながら、大きな笠を臺所に脫いで、そして家の方へと上つて來た。そこにこはがつて末の女の兒とその上の男の兒が寄つて來た。

『それ、定、裸でゐると、雷さまにおへそを取られる。』

こんなことを言つて、細君は急いで單衣を女の兒に着せた。

凄じい、凄じい光景がやがてそこにあつた。どしやぶりに降る雨、縱橫に交叉する電光、樋といふ樋から、雨水が瀧津瀨のやうに落ちて、樹も草も草の葉もすべてそれに震へ戰くやうに見えた。あまりに

『K町にゐるの？』
『さういふわけでもないんです。』
『一度、逢つて話をしたいことがあるんだがね。』
『私がお伺ひ致しませうか。』
『でなくつても好い。この町にも來ることがあるのかえ？』
『滅多に來たことは御座いません。』
『ぢや、K町の？』
『K町のAつていふ家に、今ではをります。』
もつとき〻たいことが澤山に澤山にあるのに、此時汽笛は鳴つて、上りの汽車は靜かに動き出した。
『ぢや、また……』
『では、左樣なら。』
で、すれ違つて了つた。（Sの旦那によろしく）とか何とか言ひさうなものだつたが、それも言はなかつた。かう思ふと、矢張自分の想像かしら？　といふ風に從弟には考へられたが、しかしそれをひつくり返して考へて見ると、それは言はないのが却つて關係があるのを示してゐるのではないかといふ風に思はれた。夕暮の灯の涼しい町をかれは靜かに歩いた。

『や。お元さん！』
『まァ旦那！』
『久し振りだつたね！』
『本當に……』
『此頃は何處にゐるんだね。この間から、ちよつと氣になることがあつて貴方のゐるところなんかを訊いたり何かしてゐたんだ。』
『私を！』
『あゝ……』
『………』
『何處にゐるんです。此頃は？』
『何處つてきまりもありませんけれど。』
『A町かえ？』
『A町にも行つたり來たりしてをります……』
『今日は何處へ行くんだね？』
『K町まで。』

で、従弟はその教へられたところに行つて見た。しかし、そこでもお元の所在はよくわからなかつた。A町にもゐたにはゐたが、今は無論そこにはゐない。東京に行つてゐるらしいといふことであつた。(ぢや、矢張、僕の想像かな。Sの言ふ通りに、矢張關係はあの時きりなのかな。)こんなことを思ひながら従弟は自分の家の方へ歸つて來た。

七

『や、お元さん!』

かう言つて、従弟は驅け寄つた。——

それはそれからいくらも經つてゐないある日の夕暮のことであつた。かれはちよつと用事があつて、Kまで行つて下りの四番の汽車で歸つて來た。

かれの下りた驛は、丁度列車の交換驛になつてゐて、かれの乘つて來た汽車がそこに着くと殆ど同時に、上りの汽車が轟然とした響を立てゝそれに入つて來るのをかれは見た。

かれは列車から下りて、急ぎ足に、橋を渡つて、向う側に下りて來たが、その下り切らうとする處で、ふと、その上りの汽車の三等室の窓にお元が青白い顔を夕暮の空氣に浮び上るやうにしてゐるのに従弟は眼を留めた。

従弟はその足で、何處かでお元に逢つたといふ人を一里ほどある町に訪ねた。
その人は言つた。
『え、逢つたには逢つたけれど、それはもう餘程前のことですよ。Sの渡頭で、何氣なしに見ると、そこにお元さんがゐる。え、無論一人ですとも……。年も取りましたよ。それやね、あゝいふ元が意氣な人だから、それほどではありませんけれど。それから、おやめづらしい、此頃は何處にゐますつてきくと、何でもA町あたりにゐるやうな話でした。矢張誰かに圍はれてゐるやうな風でしたぜ。』
『それがSぢやないかしら?』
『さア、な――』
『何うもさうらしいと思ふですが……』
『しかし、それなら、それで、知れさうなもんですがな。』
『でも、A町あたりなら、ちよつと世離れてゐますからな……』従弟は考へて、『はつきりA町つていふことはわかつてゐますかしら?』
『それがわからない……』
かう言つたが、その人はちよつと頭を傾げて、『さう、好いことがある。あそこには、お元さんは何うかすると顔を見せるやうだ。あそこのお上さんに行つて訊いて見ると好い。それが好い。』

『そんなことはない……』

かうSはすぐに否定した。

『でも、事實なら……それを僕に話して貰ふ方が好い……。さうすれば、また僕にも考へることがあるんだから。』

一歩を進めてかう從弟は言つた。

『いや、そんなことはない……』

かう強くSは言つた。

しかしこの強く言つた言葉の中に、一層事實が確められてゐるやうな氣が從弟にはした。

從弟は凝つとSの顏を見詰めた。と、それをSは避けるやうにした。(いよ／＼それに違ひない。)と從弟は深く思ひ込んだ。

從弟にしては、それに對して、別に反感を抱かなかつた。始めの時に感じたと同じやうに、さういふことが起るのもSに取つては無理はないと思つた。もしまたそれが事實ならば、今度こそは、Sのために、またSの妻のために、すつかり問題を解決してやる方が双方のためだと思つた。Sの妻には氣の毒だが、それにはそれ相應に方法の立てやうがいくらもある……。あゝして年中互に苦しんでゐるよりは好いと從弟は思つた。

いろいろなだめたり話したりしてゐる中に、從弟はふとあることに氣が附いた。かれは考へた。（さては、またお元との關係が元に戻つたかな……。それで、かうした爭ひが始まつたんではないかな……）しかしかうは思ひ附いたけれども、はつきりさうだとは斷定することは出來なかつた。

從弟はそれからそれへと想像して見た。と、いろ／＼なことが思ひ當つた。何處にゐるかわからないが、兎に角、お元がこの近所にゐるといふことだけは確かである。現にそれを見た人がある。それからまたお元が一時東京に行つてゐたといふことも確かな事實である。またSが一時度々東京に行つたことも事實である。（或は、或は）と從弟は考へた。（或は、あの二三年前に、二月ほどSが家を明けたことがある。あの時なども或はそのかげにお元がゐたのではなかつたか。或はまたその頃まではわかれてゐたが、その時分からかれ等の關係は復活したのではないか。）

かういふ風に想像して來ると、何うもさうらしい……。それから新しい爭ひが二人の間に再び芽を吹き出したに相違ないらしい。無論、Sはそれを秘密にしてゐる。Sの妻には殊にそれを秘してゐる。それでありながら、それが何處からかSの妻にわかつて來る。その事實をつきとめないまでにもその氣分なりその空氣なりからわかつて來る……。それで要領を得ないながらに爭鬪が起つて來る、（それに相違ない。）と從弟は思つた。

從弟はそれとなくSに訊いた。

母は從弟の家にやつて來て、『でもな、此頃はちつとは好いだよ。お寺詣りをするやうになつてから、段々考へ直したと見える。』などゝ言つた。

ところが、今度、再び以前にも増して凄じい爭鬪が夫妻の間に起つた。それは例の暗鬪、默鬪ではなく、近所の人達にも心配されるやうな凄じい爭ひであつた。從弟も遂にまた引張り出された。

いくらなだめても、なだめても効がないといふやうに、Sの妻は腹を立てた。

『何うしても、もう、私は里に歸して貰ひます。四十二三になつて、今更、離縁を取るの何のと言つて、恥かしいことですけれど、何うも爲方がありません。私は私の女としての價値をかう蹂躪されてゐるのですから……。それをも忍んでゐるわけには行きません。』

『女としての價値を蹂躪されたといふのは何ういふことですか。』

かう從弟が訊くと、

『それは私に訊かずにSに訊いて下さい。Sは知つてゐる筈です。』

Sの方に行つて訊くと、

『里に歸すことなどは、今更出來ない……。爲方がなければ、別居でも何でもして、今の狀態を避けてゐるより外に爲方がない……』かう言つたきりで、その理由については、默して語らないのであつた。

たけれども。もう成るたけ寄りつかないやうにする。實際、何か怨靈でも取附いてゐるかも知れないと思はれる位だつた。あの姉さんとSの顔を見るとぞッとしちやつた。』

『困つたねえ！』

從弟の妻も心から困つたやうな顔の表情をして見せた。

《だから、夫婦は始めをよく見なければならない。》とか、《星といふものはだから肝心だ。》とか、《原因がなくつてする喧嘩だから何うもしやうがない。》とか、さうしたいつも出る言葉もその日は二人の間に交はされなかつた。かれ等も何だかその陰氣な重苦しい空氣の中に浸つたやうな氣がして、默つて唯顔を見合せた。

從弟は溜息を吐いた。

六

しかしその時からは、S夫婦の狀態は一時大分よくなつて、互ひに深く爭ふやうなことはなくなつた。二人は何う思つたか、二里ほど隔てたある村の寺の高德の僧を訪ねて種々話を聞きに出かけるなどゝいふ噂であつた。

從弟は成るたけ觸らぬやうに、足を遠くして暮してゐた。一年二年はさうした狀態の中に過ぎた。老

て、従弟の顔を見ると、困つたものだと言ふやうにして愚痴をこぼした。

『嫁がわるいとばかりも言へないけれど、何方にもわるいところがあるに相違ないとは思ふけれど、もう少しすなほにして呉れると好いと思ふよ。M子は一白でSは五黄の弱い方の星ぢやでな。あゝして一生喧嘩ばかりして終るのかと思ふと、本當に可哀相にも可哀相だし、困つたもんぢやな。』

ある時には、そのおとなしい老母が威丈高になつて、『お前たちは、もうこの家から出て行つて呉れ。お前達の喧嘩は、もうわたしには見てゐられない。この世に生れてこの世の恩知らずといふのは、お前達のことぢや。その日樣に對しても申譯のないことぢや。淺間しいにも何にも……。年を取つてかうした思ひをしなければならないとは何といふことだらう。前の世にさうした種が蒔かれてゐるその劫が盡きぬのぢや。もうつくづくわしも愛想が盡きた……』かう言つて、果ては袖を掩つて泣いてゐるところに従弟は邂逅した。

従弟はその時ばかりは輕い心持で夫婦の喧嘩を見ることは出來なかつた。常識に富んだかれですら、そこには何か不思議なことがあつて、人力では何うすることも出來ないものがひそんでゐるやうに思はれた。恐ろしいやうな氣にさへなつた。Sの銷沈した顏とM子の興奮した顏とを見るのさへ氣味がわるかつた。従弟は歸つて來てその妻に言つた。『あゝもうつくづくあの仲裁は御免だ……。今日といふ今日は本當に恐ろしくなつて身の毛がよだつた。伯母が氣の毒だから、それでも言ふだけのことは言つて來

『馬鹿言つちや困るよ。』

『だつて、本當にさういふ氣がするんだから爲方がない。つくづく惡緣だと思つた。離れたくても離れられない、愛したくつても愛されないつて言ふのは、僕のことだねえ。此頃では妙なことを考へた。……お元の心が始終僕等の上に働いてゐるんぢやないかと思ふよ。』

『馬鹿な。』

『だつて、さうかも知れないよ。』

『ぢや、君はまだお元のことが忘れられないんだね。』

『忘れられないんなら好いけれども、さうぢやないんだよ、忘れて了つてゐるのを恨まれてゐるんだよ。』

『馬鹿な……』

しかし從弟は何うすることも出來なかつた。Sはその時旅に出て二月ほど家に歸つて來なかつた。

五

Sの老母はその頃六十五六で、父親の頑固が努力家であつたに似ず、何方かと言へば、のんきに無頓着に、唯その日その日を送つて行くといふやうな質であつたが、それでも、S夫婦の暗鬪、默鬪を氣にし

『貴郎が來て下すつたんで、大分氣分がよくなりました。』

かう細君は從弟に謝した。

ある時は、Sが突然從弟の家にやつて來た。

その不愉快さうな顏と、何處か興奮したやうな姿とは一目ですぐ從弟にその家庭の重苦しい空氣を思はせた。

『何うしたい？』

『いや今日は相談があつて來たんだ……。何うも、僕の家の空氣がわるい。あそこにゐると、イヤにじめじめして氣が滅入つて爲方がない。何處かに行つて來ようと思ふんだ、當分……』

『細君と一緒に……？』

『いや、ひとりで……。旅にまでM子に附纏はれては、わざわざ出かけて行つた甲斐はないからね。』

『何うしてさうだらうな。』

『僕にもわからない……』

『長く行つてゐる積りかね？』

『僕の希望を言はせると、もう二度とあの家には歸つて行きたくないやうな氣がしてゐるんだけど……

……』

『いや、駄目だ……。僕の方はそれも面白いかも知れないと思ふけれど、妻が全然さうした氣がないから駄目だ。子供なんかを欲しがるやうな女なら好いんだけども……。とてもそんな心は露ほども持つてゐないやうな人なんだから……。お元のことの時だつて、さうした性質がよく出てゐるぢやないか。』

『それはさうだね。』

從弟も首肯かずにはゐられなかつた。

『ぢや、旅でもしたら何うだ?』

『旅だつて、駄目だよ。とても妻と旅行したつて落附いてなんかゐられつこはないから。』

『困つたねえ。』

かう言つて從弟は手を引いた。

從弟にしても、Sの妻の生活を見ると、矢張同情せずにはゐられなかつた。Sが言ふやうに、細君だつて決して面白いことはないらしかつた。白い興奮した青い顏をして、ヒステリックに每日納戸に入つて寢てゐるさまは決して慘めでないことはなかつた。それに、若い時の美しかつたこと、二人の仲の睦ましかつたこと、人に何の彼のと羨ましがられたことを知つてゐるだけそれだけ、從弟には一層あはれに感じられた。爲方がないので、從弟はいつも先きに立つて、細君を納戸から引張り出して、そのつまらない濁つた空氣から浮び上つて來るやうに仕向けた。

『さうだよ、何うもさうだ……。その證據には、僕は始終押されてゐるんだから。二人比べると、何うしても僕の方が弱いんだから、一體僕の妻は僕のやうなものに配せらるべき女ではないんだ。僕なんかよりもつと豪い奴の妻になるとぐつと引立つて來るし、幸福にもなつたのだよ。僕等がそもそも始めて逢つて、そしてラブし合つたといふことが不仕合せの元だといふことを僕はつくづく考へたね、此頃。』

『そんなことはないよ。』

『そんなことはないことはない。つくづくさういふ風に僕は考へて來た。僕は何うかすると、そのため却つて妻が可哀相になつて來て爲方がないことがある。妻の身になつて見給へ。面白くなくなるのは當り前ぢやないか。こんな田舍にくすぶつて、何一つ仕事らしい仕事をするではなし、朝起きて、夜寢るまで同じ緊張しない顏を見て、もぐらもちのやうな生活をしてゐるんだからね。これがね、君、僕等の生活が今よりもつと貧しくつて、働かなければ何うしても食つて行くことが出來ないとか何とか云ふのだと、またそこに新しい面白味とか意味とかゞ出來て來るのだらうけれど、下幸なことは、じつとしてさへゐれば食ふには困らない。ちやんと小作が冬にさへなれや一年中食ふ米を持つて來て吳れるし、何一つ不足つて言ふものはないんだからね。』

從弟は考へて、

『子供でも貰つて見たら何うだね？』

半ば笑ひながら從弟は言つた。
『うむ。』
かう鬚の生えた詰らなさうな顏をSは撫でゝ、『喧嘩つていふでもないがね。』
『何うしてさうだらうな。』
『氣質だな、矢張。』
『本當にこまるよ……。それで愛してゐないつて言ふなら、何うにでもなるけれども……。お互ひに愛してゐないんぢやないからな。』
『それはさうだ……』
『しかし、もう年も年だし、君にしても、もうさうのべつに顏を赤くし合つてゐる年ぢやないんだから……好い加減理解が出來さうなもんだがな。』
『理解はしてゐるんだよ、お互ひに……』
『なら、何うして、さういふことになるんだな?』
『元を糺せば、矢張、僕がわるいのかも知れない。僕がこれまで何事にも成功せずに、かうしてぐづぐづしてゐるのがその原因だと言つたやうな處があるんだね。そこが妻には物足らないんだね。』
『そんなことはないだらう?』

『またやつてるのかね？』

笑ひながらかう從弟が言ふと、Ｓは、

『うむ。』

などゝ言つて、自分で立つて來て鐵瓶の下の火などを見た。

お元と別れて以來、Ｓは益ゝ消極的になつてゐるのを從弟は見落さなかつた。それ以來、Ｓの持つてゐた活氣とか、努力とかいふものは、日増に凋落して行つてゐた。Ｓはあらゆる世間から離れた。大勢の人達に交つて事業をしようなどゝはもう思はなくなつてしまつた。『何うせ人間のことは思ふやうにはなりはしないよ。焦つたり何かするだけ損だよ。出來るものは出來るし、出來ないものは出來ないんだからね。』こんなことを常に言つた。そしてその言葉の中には、かれが夫妻の間に於て經驗した儼とした事實がそれとあらはれて來るのであつた。從弟は平生さうしたことは餘り深くは考へない方の質であつたが、時にはＳ夫妻の事實に由つて覺醒でもさせられたやうに、『何うも夫婦と云ふものは難かしいものだ。あまりに同じやうな氣質のものは不仕合せだ。何方かに隙があるやうな夫婦でないと、お互ひの身の發達の上から言つても、いやに固まつて了つて暢びないもんだ。……亭主がえらくなるのも妻の力、妻が利口になるのも亭主の力だつてよく言ふが、實際さうだ。』などゝ言つた。

『もう、好い加減に、さうした喧嘩はよした方が好いでせう……。』

四

それから後も、SとSの妻の喧嘩は遂にやまなかつた。

五年も六年も續いた。

從弟はその間に、何遍その仲に入つたか知れなかつた。從弟はSに向つては、『だから、あの時、あゝすれば好かつた。思切つて斷乎とした處置に出れば好かつた。私の言つた通りだ……』と言つた。Sの妻に向つては『姉さん、それは無理ですよ。もう少し夫のことを考へておやんなさいよ。S君だつて、姉さんのことは考へてゐるんだから……』かう言つては、お元と別れる時に言つた言葉をよく持ち出した。

Sの妻にもそれはわかるらしかつた。また夫のかの女に對するさうした價値の認識を感謝してゐないではないらしかつた。しかも何ぞと言つてはよく爭つた。

從弟がひよいと遊びに行つて見ると、一目見たゞけで、(またやつてるな)といふことがすぐわかつた。もう今では流石に元のやうな烈しい喧嘩はしなかつたけれども、それでも三日や四日は兩方とも默つて互に睨み合つて、不愉快な思ひをしてゐるらしかつた。さういふ時には、Sの妻はよく納戸に行つて臥床の中に入つて寢てゐた。蒼白い興奮した顏に頭痛膏などを貼つてゐた。

ない別れの辛さが從弟にも目に餘つた。

從弟はSに言つた。

『ぢや、歸つて來て貰はなくつても好いぢやありませんか。かうした情がわからないM子さんでは、歸つて來て貰つても、行末が案じられる。いつそ斷乎とした處置を取る方が好いぢやありませんか。』

かう言ふと、Sは、

『いや、それはいけない……。僕がわるかつたのだ。妻の女としての價値を侮蔑したのは確かに僕だ……。人間の立場から言へば、何うしても妻の言ひ分に正理がある。正理はまげられない。妻が僕の爲めを思つて呉れてゐるのは僕にもよくわかる……。それが辛いとか、それがさびしいとか言ふのは僕がわるいのだ……。またその辛さ、淋しさからお元にまでかうした目に逢はせるのは、一層僕がわるいのだ……。お元は可哀相だが、妻もこれで捨てゝ了ふことは出來ない。』

で、お元とSとは、泣きの涙で別れることになつた。お元にはSの言ふこともよくわかつたらしかつた。雨の降る秋の日、あの路の角のところで、お元はわかれをつけて、傘をさしてそして向うに行つた。

從弟もあの時は泣いた。

いくら言つてもきかせてもわからなかつた。さうしたことは世間にいくらもある。またあのお元といふ女だとて、決してさうわるい女ではない。夫の心も汲んでやらなければならない……。かうしたことを口も酸くなるほど從弟は中に入つて言つたことを覺えてゐる。しかしSの妻は、Sがそのお元とすつかり離れて、手切金までやつて、その上猶ほいろいろとその眞僞をたしかめて、いよいよそれが本當だ、夫はあの女と確かに離れたといふことを確めるまでは、決して里から歸つて來なかつたことを從弟は思ひ出した。

從弟は猶それに連關して、あの悲しいロマンチツクなシインを思ひ浮べることが出來た。それは忘れもしない　あの町の煙草屋を疊んでから、いよいよ別れるといふ時であつた。お元は身も世もないやうに泣いて泣き盡した。始めは、『私は何うせ日蔭者だから何んなにされても好い。食はせて戴いて生きてゐさへすれば好い。旦那に別れさへしなければ好い……。一年の中に一度でもお目にかゝれば好い。決して奧さんなんかを何う斯うとは思つてゐない。奧さんのためには下女となつても好い。何んなことをされても好い。』かうお元はやさしく素直に出たのを、何うしてもSの妻が承知しないと言ふので、それで止むなく町の家をも疊むことになつた。手切金を從弟が持つて行つてやつた時には、何うしてもそれを受取らないで困つた。お元は泣き盡した。

さうしたやさしい心であつたから、Sにしても決してお元と離れようとはしてゐなかつた。その餘儀

あつた。Ｓは郡會にゐた時分、それを何處からか伴れて來て、かなり長い間、誰にも知られずに、村から一里ほど離れた町に、煙草屋などを出させて圍つて置いた。

從弟は始めてそれと知つた時のさまを今でも思ひ出すことが出來た。『不思議だなア！　よくあそこにＳが出入りするなア！』とかう思つてゐたが、遂にそれが知れさうになつたのがわかつて來たので、Ｓはある日それを從弟に打明けて話した。そしてかれをそこに伴れて行つた。

お元はその時二十六だつた。丸髷などに結つて、ちよつと小綺麗にしてゐたが、その何處かに溫かみを持つた眼と、心の影の複雜した表情と、ぢき顏を赤くするやうな純な姿とは、從弟にも決して惡い印象を與へなかつた。從弟は直にそれをＳの妻に比べて考へた。あのやうなしつかり者の妻を持つたかれが、かうした女を愛するやうになるのも自然な道行だとすら思つた。從弟はＳにもお元にも同情した。

しかもそれが隱してもかくし切れずに、遂にＳの妻に知れた時のあの爭ひは何んなであつたらうか。Ｓの妻はそのためにヒステリィになつて、そして半年近くも里の方に歸つてゐた。

そのためにすつかり自分の生活が破壞されたとＳの妻は言つた。自分がＳに捧げた犧牲は決して尠いものではない。Ｓあつてのかの女、かの女あつてのＳであつた筈であつた。それを、一生の力とも生命とも賴んだＳはあゝした卑しい學問も何もない女に彼女を見替へた。そしてかの女にこの上もない恥辱を與へた。女としてのかの女の價値を奪つた。かう言つてかの女は容易に家に歸らうとはしなかつた。

はないんですけども……』
『それにしても、いつからあゝ喧嘩をするやうになつたらう？』
從弟はかう言つて昔を思ひ出すやうにした。
『伯父さんが亡くなられた頃までは、まだ仲があんなぢやありませんでした。』
『さうだね。』
『ひどい喧嘩をするやうになつたのは、郡會に出なくなつてからですね。それに、お元のこともありますね。』
『さうだな、あの時分からだな。』
かう言つて從弟はもう十年近くもなる昔のさまを頭に浮べた。

三

お元といふのは、Ｓの妻に比べては、やさしい、從順な、日蔭に生えた草のやうな女であつた。その地方に特有な茶屋などにもゐたことがあるやうな生立で、從つて學問などもなく、何方かと言へは思想も卑しい方であつた。しかし從弟などの眼から見ても、Ｓが一時夢中になつたのも無理はないと思はれるやうな女で、あまりに饒舌でもなく、情味もあつて、男に偏つて來る心には何處かいぢらしいところが

と、その妻は、

『本當ですね……。でも、姉さんがわるいとは思はれないやうなところもありますね。姉さんの方が氣象が勝つてゐるんですね。兄さんがぐづぐづしてゐるのを見てゐられないつて言ふやうなところもあるんですね。』

『それはさうかも知れない。』

『姉さんの腹では、もつと兄さんに働いてしつかりして貰ひたいんですよ。……それを、好い加減に言つて置けば好いのに、あまり強く言ふもんだから、それで、兄さんもじつとしてゐられないので、それでつい怒らなくても好いところを怒るつて言ふやうになるんですよ。』

『つまりは仲が好いんだねえ。』

『それはさうですとも……。姉さんはあれで兄さんを思つてゐるんですよ。』

『困つたもんさ……。』

『兩方同じやうなところのある人が寄つたのですよ。そんなもんだから、いつでも好い時は好いけれども、わるい時にはまた馬鹿にわるくなつて了ふんですよ。』

『子供がないのもいけないんだね。』

『それはたしかにさうです。私達のやうに子供さへ多ければ、忙しくつて、喧嘩なんかしてゐるひま

漲つてゐる中で、S夫婦は長いことその夫婦喧嘩の生活をやつて來た。時にはバイブルの話が始まつたり、イブセンが出たり、ハウプトマンが出たり、トルストイの性慾論が持ち出されたりした。

『何故、それぢや貴方はさうなさらない？　男性の孤獨の價値をさういふ風に仰有るなら、私は一緒にゐなくつて好いんです……。女性にも孤獨の價値と言ふことがあります。』

かうしたことを言ふかと思ふと、

『ノラなんかには私はなりません。私は出て行きません。一生貴方の傍にくつついて、貴方を鞭撻して上げるのが私のつとめです。妻としてのつとめです。貴方はかうして田舍に埋れてゐる筈ではなかつたではありませんか。文學で失敗し、田舍政治家で失敗し、俳句なぞといふ小さな道樂に甘んじて、それで一生を終つて了ふのを私は見てゐられません。』

かうその妻は肩を昂げ聲を高ぐしてSに喰つて蒐つた。

ノラといふ言葉が非常に多く出るので、從弟はある時、

『一體、ノラつて何です？』と聞いて笑はれた。

『何うもあの夫婦喧嘩の仲裁は俺には荷が勝ちすぎる……。何で喧嘩してゐるんだか、ちよつともわからないやうなことがあるんだから。』かうある時、心から自分の無學を恥ぢるやうにして、從弟はその妻に言つた。

圍の人達はすぐかう言つて批評した。

二

Sの從弟は好人物で、よくSの家に出入りした。矢張その隣村の中產以上の農夫だが、Sがさうしたハイカラな妻を持つたのに引かへて、地味な近村の田舍の舊家の娘を貰つて、それには子供が既に五六人もあり、年中一緒に二人して田畠に出て働いてゐるといふやうな質であつた。平生、從兄のSが自分に比べて學問があり、都會人であるのを尊敬して、よくやつて來ては、いろいろとめづらしい話などを聞いたが、後にはSに勸められて、矢張柄にない俳句などに熱中した。かれの田舍生れの妻も一面ではSの妻を冷かに見てゐるところがありながら、一面ではその學問があり、理窟がよくわかり、何と言つても役者が一枚も二枚も上なのに兜を脫いで、『姉さん、姉さん』と言つてはよくやつて來た。亭主がS夫婦の喧嘩の仲裁にこまつてゐると、その妻は、『何うも困るねえ、兩方とも學問があつて理窟があるんだから――。何方も何方つて言ふことが出來ないんだもの……。姉さんも、もう少し折れると好いんだけれども……』などと言つて額を押へた。

財產こそ二流三流に落ちてゐるけれども、村での舊家ではあり、樫の高い垣で取圍まれた白壁の土藏などもあたりに際立つて、天井も古びて高く、棟には大きな鬼瓦が載つて、祖先傳來の空氣があたりに

であつた。大きな新式な旅鞄、厚ぼつたいコォル天の敷物、派手な大きな丸髷に綺麗な八字鬚、『羨しかんべ。あゝ仲の好い夫婦は――。前世に、何か好いことでもして置いたんべ、』などと道すがらの噂達はかう言つて、その二臺つゞいた車を見送つたものだつた。

先代の爺はその頃五十八で、一生コッコッと祖先の産を殖すことにのみ力を盡したやうな人だけに、そのハイカラ娘との結婚には、最初は不同意を唱へて、容易にそれに承諾を與へなかつた方だつたが、Sが一人息子なのと、その戀に陷り方が一通りや二通りの眞劍ではなかつたので、止むなく承諾して、表向きに結婚の式を擧行させたが、生きてゐる中は、『宅の奴等にも困つたもんだ……。あの嫁にも困つたもんだ。』と口癖のやうに言つて、それから猶五六年生きて、そして、或ロぽつくり急病で死んで行つて了つた。

先代の生きてゐる中は、さういふ風だつたから、夫婦はその一年の半は東京暮しをして、田舍の家の方は餘り構ひつけなかつた。Sは英語の先生をしたり、ある時代には新しい文學の仲間に入る了簡で、それに妻からも勸められて、一生懸命に外國の小説を讀んだり、物を書いたりして、當時二流三流の文士などがよく家た出入りしたが、何うも思はしくないのと、一方田舍政治家に對する嗜好をSが持つてゐたのとで、父親が死んでからは、田舍に戻つて來て、次第に都會生活、文士生活から離れるやうになつて了つた。

『何うも、あの上さんがハイカラさんだで……中々亭主に負けてゐないからな。』喧嘩が始まると、周

町はあり、先代までは家でも自から鋤を取つて田畠を耕した舊家の農夫であつたが、Sになつてからは、無人なのを口實にすつかり小作任せにして、唯、俵の入つて來るのを待つて、そして何不足なく暮らしてゐるのであつた。從つてSは農夫でありながら、若い時分から東京に出て法律などを修め、また好きで文學などをもやり、地方の政治家として一時は郡會になども出たこともあつたが、そのつまらないのをさとつてからは、全く俳句に隱れて、のんきにふところ手をして、その半生を送つて來た。碧花といふ俳名は、かなりにその地方に知れてゐるばかりでなく、中央文壇にもをりをりその名は見えて、その社中の俳句がある雜誌の片隅に小さく毎月出てゐたりした。埼玉に碧花子のあるといふことは、俳句の宗匠達も皆よく知つてゐた。

殊に、昔を知つてゐる人々に、一層不思議に思はれたのは、その妻のM子が、その當時矢張非常なハイカラで、美人で、英語なども出來て、Sと深い戀に落ち、何うしても一緒にならなければ死ぬの生きるのと言つて、そしていろいろ障害があつたに拘らず、それを排して無理やりに夫婦になつたといふことであつた。M子の里は矢張その近所の町の豪商であつたが、二人は故鄕に於て相識つたのではなく、東京に遊學中、互ひに何處かで知り合つて、そしてそれの人々に知れた時には、既に深い深い戀に落ちてゐたのであつた。

從つてかれ等が戀を遂げて、一緒に東京に出かける時などには、隨分田舍の人達の目には立つたもの

に不思議だよ。』

『矢張、子供がないせゐかしら？』

『それは大にあるね……。何うしても、子供がない夫婦の仲は殺風景になるからね。情味がなくなるからね。』

『Sはそれでも矢張遊ぶんだらう？』

『遊ぶ方は此頃ぢやもうそれほどやらないけれど……。何かがあるにはあるらしいね。矢張、それが夫婦喧嘩の元になつてゐるにはゐるらしいがね。』

『あのお元ぢやない……？』

『あれとは十年も前に切れた筈だがな。……もうあれとの關係ぢやあるまいと思ふけれども……。それでも、あのお元を此の近所で見かけたと言ふものがあるから、何處かで、こつそりやつてゐて、それで揉めるのかも知れないがね。』

『よしんば、そんなことがあつたにしたつて、五十近くで、もう夫婦喧嘩でもなからうと思ふけれどもな……。お互ひにもう好い加減理解しさうなもんだがな。』

『本當だ……。』

かうした噂がそこでも此處でもきかれた。田舍でも中產以上で、田地は七八町も持つて居り、山も一二

Sとその妻

一

周圍の人達は、この頃またS夫婦が喧嘩して出るの入るのと言つてゐるのを聞いた。

『何うしてあゝだかな？』

『本當に何うしてあの夫婦はあゝだかな？　ちよつと想像が出來ない。財産だつてあるし、Sだつてそんなにひどい道樂をする方ぢやなし、何方かと言へば、圓滿でなければならない家庭なんだがな。』

『本當だ……。一人ゐる姑さんだつて、やさしい、好いお婆さんだし、それに、もうあの夫婦だつてお互ひに五十近くなつてゐるぢやないか。若い中なら、お互ひに我儘が出たといふこともあるが、今になつて、まだあゝしたすつた揉んだをやるといふことは、ちよつと想像に苦しむね。』

『いつも、仲裁役はあの從弟のTがやつてゐるが、あの世話好きな、人の好い男すら、あの夫婦には手こずつてゐるよ。もう何遍出るの入るのつて言つて大騷ぎをしたか知れやしないんだからな……。實

女達は毎朝綺麗に廊下から本堂を掃除した。爺達は箒を持つて一塵も殘らないやうに境内を掃き淨めた。若い女達はさまざまの色彩を持つた草花を何處からか持つて來て栽ゑた。

昔のさびしい荒れた中に寂然として端坐してゐた如來佛の面影は段々見ることが出來なくなつた。大きな須彌壇、金鍍をした天蓋、賓頭顱尊者の木像、其處此處に置かれてある木魚、それを信者達は代る代るやつて來て叩いた。

本堂も隙間がない位に一杯に信者が集つて、異口同音に誦經した。その中に雜つて、慈海の誦經の聲は一段高く崇嚴に高い天井に響いて聞えた。

半ば山に凭り半ば平野に臨んださびしい村は、今や驚くべき賑やかな光景を呈した。人々は山を越し野を越し丘を越して此處に集つて來た。

大きな誘拐者、大きな山師、かうした批評は、世間の一面にはまだ依然として殘つてゐるけれども、信者はそんなことには最早頓着してゐなかつた。荒れ果てた本堂に籠るものは日に日にその數を增して行つた。

かれ等は皆なその衣食を持つてやつて來た。破れた山門の前には、米や味噌を乘せた車が多く集り、あらゆるものが庫裡に滿ち溢れた。

初めはその態度に呆れ、中頃はその始末に困つた村の世話人達も、今ではこの盛んな光景に驚き且つ怖れた。遂には自から熱心なる信者にならない譯には行かなかつた。

朝の讀經の聲は一村に響きわたつてきこえた。

しかし、慈海かれ自身は、決して以前の生活を改めなかつた。かれは寂然として唯ひとりその室にゐた。小さな机、古い硯箱、二三册の經文、それより他はかれの周圍に何物もなかつた。かれは飢を感ずるのを時として、出て來ては七輪を煽いだ。

しかも、かれの命を聞くをも待たずして、やがて本堂の破れた屋根は繕はれ、庇は新しくせられ、倒れかけた山門はもとの狀態に修繕された。

一人ならず其處にゐた人達は、皆なさう話した。

娘は娘で、何うしても、此處に暫くの間、かうして置いて呉れと言つて、決して父親に從つて家へ歸るとは言はなかつた。警察の人達も何うすることも出來なかつた。

で、止むを得ず、一同は引上げたが、その噂は更に廣く深く人々の心を動かした。大きな誘拐者――かうした議論が一町村ばかりでなく、郡から縣までへも問題にされて行つたが、それと共に。不思議な坊主の噂は益々近縣に聞えた。ある田舍の新聞は二號活字か何かで、半ば信じ半ば怪しむやうな記事を載せた。

夏になり秋になつても、娘は竟に家に歸らなかつた。後には、その父母は娘の雜用の米やら衣類やらを其處に運んで行かなければならなかつた。母親もやがてはその信者の群の一人になつた。

十八

さうした不思議は猶ほこれに留らなかつた。貧しき者は富み、乏しき者は得、病める者は癒え、弱き者は力を恢復した。

『求めざるものは得、欲するものは失ふ。』かうしたかれの悟は、かれの日夜の行と共に益々生氣を帶びて來た。

る。しかし金も持つて行つた形跡もなければ、豫めさうした豫定があつたらしい跟跡も殘つてゐない。娘は奧の自分の居間に坐つてゐて、ふと思ひ立つて出かけたらしく、座蒲團も硯も筆もそのまゝになつてゐた。外國の小說らしい本が半ば開けられて、そこにちやんと赤い總のついた枝折が挾んであつた。

その日も暮れた。

ところが、更に驚くべき報知が町や村を騷がせた。それは娘が長昌院の信者の中に雜つてゐたといふことであつた。はたでそんなに大騷ぎをしてゐるのを少しも知らないやうにして、且つは信仰的エクスタシイが不意に娘の魂を誘つたといふやうにして、かの女は汚ない大勢の群の中に雜つて、一心に經を誦してゐたのである。人々は皆な驚愕の眼を睜つた。

署長や巡査はすべてを捨てゝ、劍を鳴して寺へと行つた。それと知つて、父親や分家の人達も車を飛ばした。

しかし署長や父親や村の人達が想像したやうなものではなかつた。慈海と娘とは未だに言葉すらも交へなかつた。群集の中の信者は話した『何うしてそんなことが、あの生佛さまにあるものですか。このお孃樣は昨日の夕方にひよつくりお出なすつて、私達に雜つておつとめをなすつてゐらしつた。何處のお孃樣か知らぬが、めづらしい篤志の方もあるものだと思つてゐた。そして昨夜はかうして私達と此處に一緒にお出になつた――生佛さまは、少しもそんなことは御存じなかつた。』

た成績と評判とを持つてゐた。父母の愛も深かつた。

何うしても誰れか惡者か何かに誘拐されたに相違ない。警察でも最初の鑑定は主としてその方面に傾いた。しかし、その管內は平和で、此頃、さうしたわるい者が他から立廻つた跡もない。

『不思議なこともあるものだ。』かう署長も刑事も巡査も皆な首をひねつた。

一番先きに調べにやつた停車場では、昨日から今日にかけて、娘が汽車に乘つて行つたやうな跟跡はないと言つて來た。

娘は或は村や町の人々の眼に觸れるのを顧慮して、わざと別な停車場まで行つて、そこから乘つて上京しはしないかと思つて、念のため、前後二三の停車場をも調べて貰つた。しかし矢張さうした形跡は何處にもなかつた。

もしこれが誘拐でなしに、自發的だとすれば、何處かの淵川にでも身を投げやしないか。世間では何も知らないけれど、その奧に何かこんがらかつた事情があつたのではないか。搜しあぐんだ後には、警察でも、かう言つて、方針をかへて、あちこちと沼の畔や河の岸を探らせた。

矢張わからなかつた。

父母の悲痛の狀態は見るに忍びないほどであつた。さうした覺悟の家出なら、何とか書いたものか何かゞ殘つてゐさうなものである。又生きてゐるものなら、途中から何等かの便がありさうなものであ

人々は噂してゐた。
それが突然姿を躱した。
昨日ちよつと用事があると言つて、餘所行きのちよいちよい着に、銘仙の羽織、縞のコオトといふ扮裝で、何氣なくひとりで出懸けた。その姿を村の人は其處此處で見かけた。ところがそれが夜になつても歸つて來なかつた。初めは町の友達の許にでも行つて、話が面白くなつて、つい歸るのを忘れたのだらうなどゝ思つて、思ひ當るところに彼方此方と迎への使者を出したが、その人達はやがて皆な手を空うして歸つて來た。夜は更けて行つた。
朝になつた。
それでも娘の姿は何處にも發見されなかつた。
父母、親類の心痛は一方でなく、村の人達は、一大事件としてやがて騷ぎ立つた。しかし成たけ、表沙汰にしたくない。不都合でもあつた時に困る。かう言つて、分家や別家の人達は町の警察に行つても頼めば、役場に行つても頼んだ。それを聞いた人々は皆な驚愕の目を睜つた。
これが不斷さうした操行のわるい評判でもある娘なら、別にそれほど世間の耳を驚かしもしないが、K氏の娘に限つては、これまでつひぞさうした噂は一度もなかつた。また家出をするやうな事情が家庭にあるなどとも思はれなかつた。それに、娘は學問もすぐれて出來、外國語の本も讀み、人一倍立優つ

それを聞いた多くの女達は、皆な隨喜の涙を流した。

十七

その平野の中でも、富豪として、品位ある舊家として知られてゐるＳ村のＫ氏の邸は、綺麗に刈込んだ樫の垣を前に、後に深い杉の森を繞らし、數多い白堊の土藏の夕日に照されてゐるのが常に遠く街道から指さされた。

主人夫妻は土地でも評判がよく、慈悲に富んで、多い小作人に對しても常に寛大な處置を取るのを以てきこえてゐた。村の内にはその家からわかれた分家、別家なども多く、その中にも既に巨萬の富を重ねてゐるものなども尠くなかつた。

ところが、ある朝、驚くべき報知が村の人達を驚かした。

それは娘の家出であつた。

娘は今年二十一歲、昨年まで東京の學校に出てゐて、暑中休暇、正月の休みなどにはよく洋傘を日にかゞやかして、停車場からの長い道を歸つて來たが、町の人達、村の人達にも、『それ、Ｋさんのお孃さんが通る。美しくならしたなア。』などゝ言はれてゐたが、今年は正月からずつと此方にゐて、東京に上つて行くやうな樣子もなかつた。『もうそろ〳〵良緣があるんだらう。』寄ると觸るとかう言つてあたりの

かれは手を合はせながら唯一言かの女に言つた。
『今日からは、佛の道に、まことの道に……』
『難有う御座います。』
かうかの女は微かに言つた。
上さんはかれの足を洗ふ資格すら自分にないやうな氣がした。路々いろ〳〵に考へて來たことも、つひに一言も言ひ得なかつた。
暫くして、本堂の前に行つて端坐したかれは、長い長い間、誦經の聲をやめなかつた。それは皆なかの女の爲めに、罪の多いかの女のために……。
其處に集つた信者達は、それにつれて皆な熱心に聲を張上げて誦經した。崇嚴な氣分があたりに滿ちわたつた。
上さんは遂に信者達と其處に二日滯留して合掌誦經した。かの女も亦他の人達と共に熱心な信者の一人となつた。
その話――この一條の話は、上さんの口からやがて人々に傳へられた。『ちやんと、私のやつて來るのを知つてゐらしつた。もう來さうなもの、來さうなものと思つて待つてゐらしつた。私の罪の爲めに誦經して下すつた恩は、戀人の情よりも、親の恩よりも深い。』かう言つて上さんは話した。

其時分には慈海はもう一人ではなかつた。群集の中の信者は、代り代りにやつて來てゐた。出來るならば、師の洗ひすゝぎをさせて頂きたい。朝夕の食事の世話をしたい。水を汲んで上げたい。高恩に堪ゆるための勞働に服したい。かう言つて、信者の男女はやつて來た。現に、かの女の行つた時にも、若い老いた女や男が五六人庫裡に集つて經を誦してゐるのを見た。

かの女は難有いやうな尊いやうな悲しいやうな涙の溢れて漲つて來るのを感じた。上さんは暫しゝ盡した。

信者達の熱心な誦經の聲はあたりに滿ちた。取附く島もないやうにして上さんは立つてゐたが、やがて庫裡の奥から五分刈位に髮の毛を延した鬚の深い僧が此方にやつて來た。それはかれであつた。

かれはちよつと此方を見た。しかし別にこの不意の訪問に驚くといふやうな風もなしに、默つてじつと其處に近寄つて來た。さながらかの女の來るのを今日は待つてゐたと言はぬばかりに――。

少くとも上さんには無量な感慨が集つて來た。何を言つて好いか、何から話して好いかわからないほど胸が一杯になつた。しかし昔馴染と言ふやうな、又は昔の戀人と言ふやうな單純な氣分ではなかつた。凝として見詰めて立つた彼の前に、かの女の頭はおのづから下つた。

長い間抱いてゐた苦痛、重荷、罪惡――さういふものをすつかりそこに投出して、かの女は思はず合掌した。

噂に聞いたどころではなかつた。それは非常な評判であつた。『生佛――』かう言つてその人も話した。

上さんの胸は愈々躍つた。何より先きに、車をさがした。そしてそこから一里位しかない村へと志した。上さんは不思議な念に燃えた。珠數を持つてゐたならば、それを繰つて、幼い時に覺えたお經の一節を誦したいと思ふほどであつた。そしてその渇仰の念に雜つて、昔の幼なかつた時分のことが、美しく彩られた繪になつて見えた。次第になつかしい村は近づいて來た。

林、それにつゞいた森、その間からは寺の屋根が見える筈であつた。果して少し行くと見え出して來た。その壞れた屋根が、山門が、境內が、例の酒を禁じた石と鼻の缺けた地藏尊とが……。上さんは胸がある聖い尊い物に壓しつけられるやうな氣がした。

『そこで好う御座んす。』

で、車を上りて、上さんは靜かに山門の中へと入つて行つた。銀杏返に結つた髮、黑の紋附の縮緬の羽織、新しい吾妻下駄、年は取つてもまだ何處かに昔の美しさと艶やかさとが殘つてゐて、それがあたりの荒廢した物象の中にはつきりと際立つて見えた。

破れてはゐるが昔のまゝの寺である。昔のまゝの長い敷石である。井戸も深い草の中に埋れてはあるけれども昔のまゝである。かの女はさま〴〵の思ひに滿されながら庫裡の方へ行つた。

『それぢや、慈海さんに違ひない。何時から來たんだ？』
『何でも去年あたりだんべ。丸つきりお經べい讀んでゐるッていこつた。』
『へえ？』
上さんの心は動かずには居られなかつた。東京に行つてからの慈海の噂も初めは少しきいてゐたので、さうした和尙になるとはちよつと想像が出來なかつたが、段々聞糺して見ると、てつきりそれは慈海であるに相違ないことが段々わかつた。
上さんは不思議にもじつとしては居られなかつた。ある深い渇仰に似た念が溢れるやうに漲つて來た。それは昔の慈海に逢ひたいといふ心持ではなかつた。單になつかしいといふやうな心持でもなかつた。長年抱いてゐた重荷を下ろして救つて貰はなければならないやうな氣がした。
店が忙しいために、その願ひも遂げられずに幾日か經つたが、其間にも片時もそれを忘れることは出來なかつた。上さんは願をかけて佛にお禮參りを怠つてゐるやうなすまなさを感じた。
ある晴れは日に、かの女はガタ馬車で出かけた。指折り數へて見ると、もう十二三年、それ以上もその故郷に行つて見たことはなかつた。町が近づくにつれてその心は躍つた。やがて昔馴染の町や人家や半鐘臺や小學校があらはれた。やがて馬車の繼立場に來ておろされたかの女は、一番先きに、その近くにある懇意なある家に寄つて寺のことを訊いた。

上さんとその亭主の間には子供がなかつた。

亭主は四十五六位の正直な男で、せつせと箕で大豆や小豆に雜つてゐる塵埃を振つてゐるのを人々はよく見かけた。

その村の不思議な僧の話を馬方や町の人達が上さんに話した。

初めはそれが自分の成長した寺での出來事とは知らず、また先代の放埒のために廢寺同樣になつてゐる寺にさういふことがあらうとは思はないので、好い加減に聞いてゐたが、その話が度々耳に入るので、ある時、

『何て言ふんだね、その寺は?』

『何て言つたけな……』馬方は考へて、『さう〳〵長昌院ッて言つたつけ。』

『長昌院?』

上さんは眼を瞠つた。

それはかりではなかつた。段々聞くと、その不思議なことをする僧は、かれの知つてゐる慈海らしいので、いよ〳〵驚愕の念を深くした。

『その和尙、慈海ッて言ひやしねえかえ。』

『何んて言ふか名は知らねえが、何でも先代の弟弟子だッて言ふこつた。』

ですから……。い丶え、別に不思議なことをすると言ふのではありません。唯、お經を讀んでゐるばかりです。別に說教めいたことは致しません。あ丶して托鉢して步いてゐるばかりです。」

署長も後には首を傾けずには居られなかつた。

かれのあとについて行く群集は、次第にその數を增した。或は町の角、或は停車場の方へ行く路、或は小學校の裏の畑、或は小川に沿つた道、さういふところを大勢の信者達はかれと同じやうにして合掌讀經してついて行つた。ある驛からある驛へと通じてる長い街道には、うら丶かな春の日が照つて、かげろふが靜かにその群集の上に靡いた。

時には今出たばかりの月が、黑いはつきりした林を背景にして、圈を成して集つてゐる群集と僧とを照した。

十六

この不思議な僧の托鉢の話は、五六里隔つた町に嫁して行つてゐる寺の先々代の娘の許まできこえた。娘はもう三十六七の上さんであつた。そこは穀物を商ふやうな店で、街道に面した家の前には、馬に糧をやるために、運送の荷車などがよく來てはとまつた。上さんはふすまを馬方の出した大きな桶に入れてやつたりした。

ついて來た。

驚くべき光景が常にかれの周圍にあつた。鍛冶屋の亭主、青縞屋の主人、苦しみを持つた女、戀にもだえた女、若いのも老いたのも皆なぞろ〳〵とかれの後について、合掌しながら步いた。

初めの中は、町の警察の人達は、愚民を惑はすといふかどで、頻りにそれを取締つたが、しかもこの不思議な信仰の『あらはれ』を何うすることも出來なかつた。ところどころで、巡査が劍を鳴してやつて來て、その群に解散を命じた。一時は群集はあちこちに散つて行つても、瞬く間にまたあとからぞろぞろと續いた。店で仕事をしてゐた女が跣足で飛び出して來てその群の中に雜つた。

ある時は、寺の世話人達が町の警察署に呼ばれて行つた。

世話人は種々なことを訊かれた。しかしその不思議な僧の行爲の中には、あやしいやうなことは少しもなかつた。すべて自然であつた。愚民を惑はすための行爲らしい行爲は何處にも發見することが出來なかつた。

世話人の一人は言つた。

『何うも、私達も困つてをりますのです。實は、寺の再興のために呼んで來たのですが、私達の申すことや、普通の僧侶のしなければならないことや、寺のことは何にもせずに、朝からお經ばかりを讀んでるるのですから……。米を持つて行かなければ行かないで、二日も三日も食はずにゐるやうな坊さん

かれは朝早く起きて本尊の前に行つて讀經した。

明けの明星の空に寒くかゞやく頃には、かれはいつももう起きてゐた。寄捨された暖かい衣はそこらに澤山にあつたけれど、かれは矢張一枚の衣しか着なかつた。櫃にも米が滿ちてゐたけれども、かれは一鉢の飯しか食はなかつた。

寒い朝は續いた。霜は本堂の破れた瓦を白くした。時には雪が七寸も八寸も積る時もあつた。食がなくなつて軒に集つて來る雀にかれは米を撒いてやつた。寄捨の米を、淨い心のあらはれである淨い米を……。人に食を乞ふ身は、生物に食を與へる身であることをかれは考へた。感極つたやうにしてかれは默つて合掌した。

雀は、ちゝと鳴きながら、軒から其處に下りて來て、かれの顏を見るやうにして、又は食を與へて呉れるかれの恩を感ずるやうにして、首をかしげながら、小さな嘴で、雪の中に半ば埋れたやうになつてゐる米粒をついばんだ。中には、緣側まで入つて來るものなどもあつた。

今までに味ふことの出來なかつたやうな歡喜がかれの胸に漲り渡つた。

十五

垣に梅が咲き、田の畔に綠の草が萠える頃には、托鉢に出るかれの背後にいつも大勢の信者が集つて

にして慈海は話した。

大學生は一時間ほど其處にゐた。

別に話といふほどの話はなかつたが、その態度の片鱗にも、容易に知ることの出來ない心理が深くかくされてあるをかれは感ぜずには居られなかつた。その僧は新しい科學の話をも深い洞察と自信とを以てかれに話した。

大學生は歸つて來てから言つた。『さうですな。すつかり感心させられて了ひました。とても、私達にはあの境はまだわからない。普通の催眠術などと言ふものよりはもつとぐつと奥ですな。』

『矢張、不思議ですな。』

かう人々は言つて眼を瞬つた。

十四

世間の罪惡が此頃では愈々深くかれの體に纏り着いて來た。

しかもそれは皆な自己を透して、立派な證券を持つてかれに迫つて來た。かれは愈々佛の前に手を合せなければならないことを感じた。

かれは求めざる處に集り、離るゝところに卽き、捨てたところに拾ひ得る心理を深く考へた。

聞くと、急にそれが堪らなくなつて、自分で自分を忘れて、そして飛び出して行つた。えらい和尚さまだ。生佛だ。この恩は忘れられない。これからは俺は善人だ。』

かう言つて涙を流した。

これに限らず、さうした不思議の話は、その近所の町と村とを中心にして波動のやうにして傳つて行つた。ある時はひそかに嫂に通じてゐた小商人の店にあらはれて、それをして悔い改めさせた。ある時は長い間人知れず自から咎めてゐた殺人の罪を持つた男をしてその胸を開かしめた。父親の子を生んだ娘は泣いてその汚れた袈裟に縋つた。

その冬から春にかけては、何處に行つてもその噂が繰返された。『そんなことがあるものか。』と言つて否定した人達も、後にはそれを信じない譯に行かなかつた。

ある時には、その不思議を知りたいと言ふので、その町の唯一の大學生――心理學研究の大學生が、正月の休暇に歸省してゐるのを好い機會に、ある人達と共に慈海のゐる寺へと出かけて行つた。

荒廢した寺のさまが先づかれを驚かした。山門は半ば倒れかけてゐた。本堂は本堂で、庇は落ち、屋根は崩れ、草が一杯にそこらに生えてゐた。

つゞいて大學生を驚かしたのは、疊の眞黑になつた中に、ひとりぽつねんとして坐つてゐる僧の姿であつた。しかもそれは普通の僧侶のやうに頭も剃つて居なければ、僧衣も着てゐなかつた。普通のやう

その一人で、その家の門に慈海の立つた時には、いくらか尊敬の念を以て、その姿と行動を凝視した。成ほど世間の評判のやうに、その讀經の聲に深く人の魂を引附けずに置かないやうな深遠微妙の調子を持つてゐるのをかれは見た。

『兎に角、普通の僧侶とは違つてゐる。』

かうかれは人々に話した。不思議な乞食坊主の話は、次第に村から町、町から野へとひろがつて行つた。

ある日、また一場の話が傳つた。それは町の外れに住んでゐる鋤や鎌や鍬などをつくる鍛冶屋の店での出來事であつた。鍛冶屋の亭主は岩乘な五十男で、これまでつひぞ寺にお詣りしたことなどはない男であつたが、その坊主が來て門に立つて讀經してゐると、忽ち深い感動に心を動かされたらしく、仕事をしてゐた金挺の手を留めて、いきなりその前に行つて、隨喜合掌した。

それを見てゐた弟子や嗅は吃驚してそれを人々に話した。

鍛冶屋の亭主は、聞く人がある度毎に言つた。『俺にもわからない。しかし、俺ァ、あのお經を聞いて手を合はせずには居られなくなつた。實際、俺ァ、何も知らずに來た。わるいこともわるいと思はずにこれまでやつて來た。女も何人泣かせたかわかりやしねえ。弟子共にも薄情な眞似をした。親には殊に不孝をした……。泣いても悔んでも足りねえやうな不孝をした。不思議だ。金挺を持ちながら、あのお經を

十三

不思議な乞食坊主の話は、時の間にそれからそれへと傳へられて行つた。ある者は肯定した。ある者は否定した。

否定したものは『今の世に、そんなことがあつて堪るものか。それは丁度その女がさうした苦痛を持つてゐたからだ。自分の影だ。自分の影を見て驚いたに過ぎない。』と言つて笑つた。

『そんなことを言つて、良民を迷はすものは、捨てゝ置かれない。第一、人の門に立つて乞食をするさへ邪魔なのに、その家の内部まで見え透かしたやうなことを言ひふらすのはけしからん……。警察で取りしまつて貰はなければならん。』

かう敦圍いて言ふものなどもあつた。慈海の生立を知つてゐるものは『あの坊主、二十年振りで國に歸つて來たが、その間には何をやつて來たかわかりやしない。風說によると、何處にも行きどころがなくなつて、それであの寺に入り込んだつていふ事だ。油斷がなりやしない。現に、ちよつと見てもわかる。薄氣味のわるい眼をしてゐるぢやないか。』などと言つた。しかし中にはかれの不斷の讀經やら、寺に來てからの行狀やらから押して、普通の僧侶――其處等にざらにある噂を持ち、被布を着、稼穡のことにのみ沒頭してゐる僧侶とは違つてゐるのに眼を留めるものなどもあつた。ある大きな靑縞商の主人は

『本當かな!!』

『本當ですともな……。あの和尚さんは、普通の和尚さんではない。あゝして托鉢して歩いてゐるけれども、苦しい辛い罪惡がある家の前に行くと、きつと立留つて長くお經を讀んでゐる。きつとそれが中る。そのお經の聲がじつとその人の胸にこたへる。現に、私なんかも、その一人で御座います。私は心中をしました。男が死んで自分が生き殘つたのです。その時は別に何とも思ひませんでした。好いことをしたとも思ひませんが、生命があつて好かつたと思ひました。しかしそれが何んなにその後私を苦しめましたか。私は行く先き先きで、きまつて男から心中を誘はれました。男がそのために生命を失つたものは一人ではありません。そしてその度毎に、私はいつも生殘つて來るのでした……。あゝ、もうしかし、生きた佛に逢つて、この苦惱を救はれました。』かう言つて女は手を合せて珠數を繰つた。

『あの和尚さんは仰有つた。一度心中しそくなつたものは永久に心中のしそこなひをするものだ。姉を姦したものは、又必ずその妹を姦するものだとかう仰有いました。あの和尚さんは私の苦しみを救つて下すつた。佛に向つて手を合せるやうにして下すつた。生みの親の恩よりももつと深い。』かう女は群集に向つて言つた。

不思議な思ひに滿たされた群集の上に、薄暮の色は蒼く暗く押寄せて來た。

を合せて立つてゐた。

『坊主、女でもだましたかな！』

かうした悪聲を放つた人達も、そこに來て、その狀態を見ては、思はず不思議な思ひに撲たれた。女は合掌して涙を流してゐる。そしてその前にゐる一人の乞食坊主――汚い坊主が神か佛でもあるやうに、それに向つて隨喜渴仰してゐる。

かれは唯默つて讀經した。

かれは五六日前に、その女の抱へられてゐる小さな料理屋の門に立つた。それは夕暮で、これから忙しくならうとする頃であつた。奥には、もう客が二組三組も來てゐた。そこの上さんは、面倒だと思つたかのやうに、一錢をその托鉢の中に入れてやつた。しかしかれは容易にその讀經と祈念とをやめなかつた。かれの心がこの門に引かれたと同じやうに、かれの讀經の聲に心も魂も歸依せずには居られないやうな女が其處に一人ゐたのであつた。それはかの女であつた。男に對する苦痛と罪惡とに日夜虐なまれ通しで生きて來たかの女であつた。かの女はその重荷に堪へかねた。

かの女は店から外に出て來て、かれの前に跪いて合掌した。

その話を聞いた時には、そこに集つた人達は皆な不思議な思ひに打たれた。

トボトボと野に向つて行くかれのさびしい姿を人々は見送つた。

『失禮ですけれども、これを和尙さんにさし上げたいと思ひまして……。私が心がけて、この間から洗つたり縫つたりしたものです。何うか、私の些かばかりの志だけを納めて下さいませ。』

かう言つた女はまた顏を赧めた。かれは深く心を動かされずには居られなかつた。かれは凝と女を見詰めた。

『志ばかりで御座いますから、何うか……』

『これは難有いお志だ。』

かう言つたきりで、かれの眼から淚がにじみ出さうとした。

しかしかれは何も言はなかつた。默つて禮拜合掌した。

十二

『ヤア、また、あの乞食坊主が何かしてらあ……』

かう言つて人達は其方の方へと走つて行つた。それは町の角である。長い町を通つてこれから寒い風の吹く野に出ようとする角である。通りかゝつた荷車や人足や女子供などが一杯に其處に立留つた。深い鬚の中に明るく眼をかゞやかし、破れた僧衣に古い袈裟をかけ、手に珠數を持つたかれの前には、二十八九になる一目見て此處等に大勢ゐる茶屋女だとわかる女が、眼に淚を一杯に溜めて、そして矢張手

達のために、殊にかれは手を佛に合はせなければならないことを思つた。

ある寒い夕暮に、かれは自分の居間で默つて坐つてゐた。かれの衣は薄く且つ汚れてゐた。破れたところをかれは自分で處々繕つて着た。

『御免なさい。』

かういふ聲がした。

しかしそれはやさしい聲だ。若々しい女の聲だ。この頃では、世話人ももう滅多にはやつて來なかつた。かれ等は自分の勝手に托鉢に出たかれの行爲を不快に思つた。『あゝいふものに構つてゐては仕方がない。』かうある者は思ひ、あの者は、『餘りに勝手だ。何うかしたに違ひない。』と思つた。寺には人はつひぞやつて來なかつた。

『御免なさい。和尚さん、お留守ですか。』

かれは顏を其處に出した。見たこともない二十三四の若い女がそこに立つてゐた。

『何か？　用？』

女は顏を赧めたが、抱へて來た包の中から、一枚の綿入を出した。新しくはないが、綺麗に洗ひ、縫ひ疊んだ綿入を……。

かういふ主人らしい男の聲が奥からきこえた。

やがて五厘は投げ入れられた。

しかしかれは讀經の聲をやめなかつた。また容易にそこを立去ることをしなかつた。靜かにかれは讀經をつゞけた。

かれ自身にもそれはわからなかつた。何ういふ理由で、その家の前で、さうして長く立留つて讀經しなければならないかと言ふことが解らなかつた。不思議の奇蹟がかれの心の周圍をめぐつた。

幼時に習つた經文に書いてあつた奇蹟、そんなことがあるわけがないと思つたやうな奇蹟、それが今不可思議の事實としてかれの前にあらはれて來た。古來存在した幾萬億の佛達、菩薩達の行が、言葉がかれの心に蘇つて來た。

かれの姿はあちこちに見えた。時には寒い碧い色をした小さな沼の畔の路に見えた。時には川添の松原のさびしい中に見えた。かと思ふと、ある小さな町の夕日を受けた家並の角に見えた。

寒い西風の吹き荒るゝ路を靜かに歩いて通つてゐたりした。

かれは日毎に出懸けては、家々の軒に立つた。

辛い悲しい生活をかれは其處此處で見かけた。しかしさうした生活以上に我々人間の大切なことがあるのを誰も知らない。人々はそれを知らないがために苦しんでゐる。慨いてゐる。その無知な、無辜な人

あるところでは、大勢の子供達がかれの周圍を取卷いた。
かれはをりをり路の眞中に立留つて讀經した。
家から家へとかれは行つた。ある家では、
『まア、お寺の和尙ぢやないか。托鉢に出なすつたがな。世話人たちは何うしたんぢやな、米も持つて行つて置かないと見えるぢやな、もつたいない。』などゝ言つて、袋に入れた米を渡した。
かれの眼には、到るところでいろいろな光景が映つた。收穫の忙しい庭、唐箕のぐるぐる廻つてゐる家、あるところでは、若い女が白い新しい手拭で頭を包んで、せつせと稻を扱いてゐた。誰も彼も世のしわざにいそしんでゐた。しかし、この穩かな平和な田舍も、それは外形だけで、爭鬪、瞋恚、嫉妬、執着は到る處にあるのであつた。道ならぬ戀の罪惡、乾くことなき我慾の罪惡、他を陥れなければ止まない猜疑心、泥土に蹂躪せられた慈悲、深く染着しつゝもその染着をわるいと思はない心、さういふ光景は一々かれの眼に映つて見えた。
ある大きな家では、かれは長い間立つて讀經した。
『出ないと言ふのに、うるさい坊主だな！』
かういふ主婦の尖つた聲がした。
『やれよ、やれよ、一文やれよ、うるせい坊主だ。』

ある朝は霜は白く本堂の瓦の上に置いた。村の人達は段々朝毎の寺の讀經の聲に眠をさまされるやうになつた。

十一

口の中にかう言つて、かれは僧衣の上に袈裟をかけて、何年ともなく押入の中に空しく轉つてゐた托鉢を手にして、そして出かけた。

『淨乞食――淨乞食。』

かれは藁草履をつッかけて穿いた。かれは寺を出て、一番先きに、近所にある貧しい長屋の人達の門に立つた。

破れた笠の中からは、かれの熱した眼が光つた。

『オ、オ、オー、オー。』

と言つて鈴を鳴らした。

ある老婆が、最初に五厘錢を一つその鉢の中に入れた。

かれに取つては、それは最初のまことの寄捨であつた。かれは老婆の冥福を祈つて長い間讀經した。

『乞食坊主、乞食坊主――』

日米を食はずにゐたと見える。』

『それで何とも言つて來ないのか。無けりや、乾干になつても食はずにゐるのか。何うしても變だな、不思議だな。』考へて、『此頃は前よりも一層何も言はなくなつて了つた。前には寺のことなどいろいろ心配したり何かしたが、此頃では、もうそんなことは少しも言はない。唯、默つて聞いてゐる。困つたものだな。』

寺の近くに住んでゐるある百姓の嬶は言つた。

『すつかり變つて了つた。もう元のやうな姿はなくなつた。そして、いつでもお經べい讀んで御座らつしやる。此間、本堂の前で出會したから、お辭儀をしたが、默つて莞爾と笑はしやつた。えらく痩せなすつたな。』

それでゐて、葬式が行くと、どんな貧乏なものでも、乃至は富豪でも、同じやうな古い僧衣を着て、袈裟をかけて、そして長い長い經を誦した。そしてその聲も初めに比べて、次第にその聲量を増し、威嚴を増し、熱意を増して來るのを誰も認めた。淋しい大破した本堂の中に漲り渡る寂滅の氣分は、女や子供、乃至は眞面目に考へる人達の心を動かさずには置かなかつた。他の寺の僧達の誦した讀經ではとても味ふことの出來ない微妙な深遠な感じに人々は撲たれた。

さまざまの評判の中に、秋は去り、冬は來た。木の葉は疎々として落ち、打渡した稻は黄く熟した。

る時にも、暗い夜の闇の中に坐つてゐる時にも、をりをり颶風のやうに襲つて來る過去の幻影の混亂した中にも……。

かれの姿はをりをり寺の境内の中に見えた。幾日も頬に剃刀を當てたことがないので、鬚は深く顔を蔽つた。誰が見ても、かれが此處にやつて來た時の姿を發見することが出來なかつた。かれは夥しく變つた。

かれの立つてゐる垣の傍には、紅白の木槿の花が秋の靜かな澄んだ空氣を彩つて咲いてゐた。

十一

『何うかしたな。氣がふれたぢやないかな。』

かう世話人は言つた。

『あゝして一人でゐるんだから、それも無理はないな。困つたもんだな。此頃は丸で此方の言ふことなどは取り合はないつて言ふ風だからな。』

かう言つて、ある人は首を傾けた。種々な人々が種々のことを言つた。

米をきまつて運んで行く一人は、『此間なんか、つい自分の忙しいのにかまけて、二三日米を持つて行くのを忘れてゐて、あわてゝ持つて行くと、もう櫃には米は一粒も殘つてゐない。あの和尚め、一日二

ゐる。デカダンはデカダンと相食んでゐる。惡と惡とは互にその牙を磨いてゐる。それは皆我に着した處から起つて來る。現に自分すらその染着を捨てることが出來なかつた。捨てることの出來ないがために、かれは『幻影』に脅かされた。この『幻影』――あらゆる世間の人達を絶えず苦しめるこの『幻影』のために、佛の前に手を合せなければならないと思つた。

ある日は殆ど一日本尊の前に行つて讀經した。世話人がやつて來て、用事を話さうとしても、かれは竟に其處から立上らうともしなかつた。世話人は仕方がないので、一度歸つてそして又やつて來た。矢張かれは讀經を續けてゐた。

寂然として端坐してゐる如來像、それはもう昔の單なる如來像ではなかつた。あの時ある人の手で鑄られたブロンズの佛像では猶更なかつた。かれは其の端麗な顏に、人間の慈愛を發見し、その威嚴を保つた表情に人性の根本に横つた金剛の相を發見した。そしてまたその寂滅の姿には、着したものを拭ひ去つたあとの不動不壞の相の名殘なくあらはれてゐるのを發見した。今まで廣い空間に孤獨を歎き、自然の無關心を慨いた自己は、杳かに遠い過去に沒し去つた。今はその如來の像はかれに向つて話し懸けた。又かれに向つて微妙不可思議の心理を示した。

佛の前に端坐讀經してゐる時ばかりではなかつた。日常の坐臥進退にも、その本尊は常にかれと倶にあつた。かれと倶に笑つた。かれと倶に語つた。古い長火鉢の前に坐つた時にも、七輪の下を煽いでゐ

て坐つた。

一しきり讀經の聲が風雨の吹き荒るゝ中に聞えた。

九

新しい覺醒が來た。

恐怖を感じ、寂寞を感じ、孤獨を感じ、倦怠を感じた時にのみ佛の前に行つて手を合せたかれは、今では自から進んでその本堂の本尊の前に行くやうになつた。最早かれの讀經はかれのための讀經ではなかつた。また佛に向つて合掌するかれの手は、かれのための合掌禮拜ではなかつた。新しい力はかれの魂を蘇らせた。かれはかれの後半生を佛の功德を讃するために用ゐることを悔いなかつた。

不思議の心理ではないか。また不思議な顚倒ではないか。かれは今まで消極的であつた自己を最早何處にも見出すことが出來なかつた。かれを苦しめたあらゆる幻影、恐ろしい溺死の光景、恨を含んだ心の形のあらはれた光景、絞首の刑に逢つた『恐しい群』の人達の光景、さういふ無限のシインは最早かれを脅かすことはなかつた。新しい力は滿ちた。

貧、苦、乏、病に滿ちた世界である。それは皆我に着いたために起つて來たあらゆる光景である。ある國はある國と爭つて、無辜の血を流してゐる。ある人間はある人間と爭つて、互に虛僞の勝敗を爭つて

に、又は恐ろしい心の所有者が闇の中に怖れ戰いて立つてゐるかのやうに……。

廊下の途中で、かれはまた凄じい風雨の吹き込んで來るのに逢つて、立留つて、その蠟燭の火を保護した。

轟といふ音、ザアと降る音、それがあとからあとへと續いてやつて來た。樹の鳴る音、枝の撓む音、葉の觸れ合ふ音、あらゆる世の中の雜音、悲しいとか佗しいとか辛いとか恨めしいとかいふ音が一齊に其處に集つてやつて來たやうにかれは感じた。

かれは漸く長い廊下を通り越して、本堂へ入つて行く扉の前に行つて、靜かにそれを明けた。闇にもそれと見える屋根や庇の壞れたところから、車軸のやうに雨は落ちて來てゐた。堂の板敷はすべて水で滿たされてあつて、それに、かれの手にした蠟燭が微かに照つた。

この風雨の凄じい音の中に、この洪水のやうになつた大破した堂宇の中に、本尊の如來佛は寂然として手を合せて立つてゐられるのである。かれは自分の體が、魂が、又は罪惡が、欲望がすつかり佛に向つて靡いて行くのを感じた。かれはこの世では見ることも味ふことも出來ない光景に出逢つたやうな氣がした。かれの口からは思はず佛を念ずるの聲が出た。

贖罪——神の贖罪、佛の贖罪と言ふことが、漲るやうに、今迄つひぞ感じたことのないほどの強さを以てかれの總身に迫つて來た。かれはそのまゝ手にした蠟燭を燭臺の上に立てゝ、そのまゝ佛の前に來

かれは苦行といふことについて、三日も四日も考へた。『苦行は僧や婆羅門の徒の行するものばかりではない。人間はすべてこれを行してゐるでないか。意識せると、意識せざるとの區別はある。蚊の食を求めるのもまた是れ行、盲目の戀をするのも亦これ行、生死も亦是れ行ではないか。』

かうしてゐる中にも、時は經つて行つた。ある夜は凄じい風雨がやつて來た。本堂ばかりではない、自分の居間にも雨が盛んに洩つた。

かれは裸蠟燭に火をつけて、それを持つて立上つた。あまりに凄じい音に起されて、その光景を見ようとかれは思つたのである。

破れた雨戸から雨が礫のやうに降込んで來た。從つて何處も濡れてゐないところはなかつた。廊下に出ようとすると、風が凄じく吹いて來て、手に持つた蠟燭は危くそのために消されようとした。

かれは袖でそれを蔽つた。

廊下には裏の林の木の葉が雨に濡れて散り込んで來てゐる。銀箭のやうな雨脚が烈しく庭に落ちて來てゐるのが、それと蠟燭の光に見える。裏の林は鳴つて、枝と枝との觸れる音、葉と葉とのすれる音が一つにかたまつて轟と言ふ音を立てた。空は墨を流したやうに暗かつた。

ともすると風に吹き消されさうになる裸蠟燭を袖で護りながら、一歩一歩長い廊下を歩いて行くかれの蒼白い鬚の深い顏が見えた。それは丁度罪惡の暗い闇夜に辛うじて佛の慈悲の光を保つてゐるやう

じたやうな『孤獨』と『寂寥』とをかれは感じなかつた。また華やかな面白い『世間』に向つて引戻さるゝやうな心をも感じなかつた。

饑ゑを覺えた時に、かれは始めて立つて七輪の下を煽いだ。また、世話人の持つて來て置いて行つて吳れた四角の小櫃の中の米をさがした。

夕暮になると、夥しい蚊が軒に蚊柱を立てた。室の中を步いても、それがバラバラと顏に當るほどである。かれは思つた。『これも自分と同じ生物だ。饑ゑたがために食を求めてゐるものゝ聲である。でなければ、生殖のために、不可解の生命の連續のために盲目の戀をしてゐるものゝ聲である。生命のために冒險をしてゐるものゝ聲である。『恐ろしい群』の人達のあげた悲鳴と同じ悲鳴を擧げるものゝ聲である。』

かれは思ひつゞけた。

『しかし、この冒險のためには、盲目の戀のためには、食を求めるためには、生死を問題にしては居られない。從つて、かれ等に取つて、生死はその運不運であり幸不幸であるのは勿論である。しかし、更に一步を進めて考へて見る。運不運ではあり、幸不幸ではあるけれども、それ以上に生の力が、盲目の生の力が肯定されてゐるではないか。生死を問題にしてはゐられない境があるではないか。扞格した力の上に起つて來る悲劇は、これは何うも致し方がない。』

なもの眞劍なもの〻探檢者であつた。本當のものを求めるためにかれは水火の中に入ることをも辭さなかつた。虎穴に向つて突進して行くことをも辭さなかつた。ふとかれは考へた。『かうしたいまの生活も矢張その探檢者の心ではないか。虎穴に向つて突進して行くもの〻心ではないか。』

さうだ、それに相違ない。昔は、聖者はあらゆる苦行を行した。一生を苦行の中に終つた人達もあつた。婆羅門の徒の苦行――そこまで考へて行つてかれは思つた。自分のこれまでの生活は、あらゆる苦行ではなかつたか。あらゆる忍苦ではなかつたか。放蕩もまた苦行、殘忍無殘もまた苦行、デカダンもまた苦行、『恐しい群』もまた苦行、歡樂もまた苦行ではなかつたか。美しい少女の肌に觸れ、美酒にあくがれ、音樂に心を蕩かしたのも亦苦行ではなかつたか。

山海の珍味を盡し、美を盡し、善を盡し、出るに自動車あり、居るに明眸皓齒あり、面白い書籍あり、心を蕩かす賭博あり、飽食し、暖衣し、富貴あり、名譽あり、一の他の不滿不平あるなくして、それでも猶ほ魂に滿たされざる聲を聞くのは何の故か。かうしたことも亦苦行の一つであるからではないか。

ふとある光景がかれの眼の前に起つた。それは恐ろしい光景であつた。弱きもの〻虐げられ、滅さる〻光景であつた。數本の足――或は毛深い、或は青白い、或は滑らかな數本の足がだらりと空間に下つて見られた。かれは思はず手を合せて、口に經文を唱へた。

次第に幼ない頃の空氣がかれの心の周圍に集り且つ醸されて來るのを覺えた。最早初めに來た時に感

う御座んすから。』

『でも、相應なのがあつたら、一人お貰ひになる方が好う御座いませう。貴方だつてまだお若いんだから。』

『まア、その話は、もう少し先に寄つてからにして戴きませう。』

それよりも他に何も言はないので、世話人達は止むを得ずに引返した。

世話をする婆さんももうやつて來なかつた。かれは一人でその廢寺の中に埋れたやうにして住んだ。小さな土鍋、一つの茶碗に一つの味噌椀、皿はところどころ缺けたのが二三枚あつた。腹が減ると、かれは立つて、七輪に火を起した。

時には以前の生活がかれの心に蘇つて來た。新しい思想のチャンピオンであり『恐しい群』の第一人者であり、デカダンの徒の一人であつたかれが、かうして田舎の廢寺の中に孤り生活してゐるといふ事が不思議に思はれた。廣い世間にも、かれ程有爲轉變の生活を送つたものはないであらう。また明るい影と暗い影と互に縺れ合つた生活をしたものはないであらう。罪惡と慈善との一緒になつた生活をしたものはないであらう。彼の心は時には一人の孤兒の爲め、一人の飢ゑた者のために振ひ立つた。また或時は欲求した染着した心の虜となつて、美しいものすぐれたものに向つてその魂を浪費した。かれは本當

りで土鍋で飯を炊いて食つてゐた。

「何うも世話をするものがなくつてお困りでせう？」

かう一人が言ふと、

「いや――」

「何うも矢張、お寺はさびしいと見えて、落附いてゐるものがなくつて困りましたな。」

「いや――」

「さぞ御不自由でせうな。」

「いや、別に……」

鬚の深く生えたのを剃らうともせずに、青白い肌膚の色をその中から見せて、さびしげにかれは笑つた。

世話人達が斷らして來た話を聞いた時には、かれは何等の答をも與へなかつた。かれは唯笑つた。それも快活に笑つのたではなく、にやにやと笑つたのでもなく、反抗的に冷かに笑つたのでもなく――唯、笑つた。

暫くしてかれは言つた。

「まア、暫く、かうやつて、落附かせて置いて下さい。……イヤ、世話するものなぞはなくつても好

の時などに讀むやうな小さな聲ぢやねえだ。大きな聲で、後ろに私が行つて見てゐるなどは夢にも知らねえで、一生懸命に讀んで御座らつしやる。……不思議な氣がしたにも何にも……。』

『淋しいんだな、矢張……。』

『淋しかんべいよ。』

世話人達は、これでは駄目だと思つた。折角、寺の復活を考へて伴れて來たが、これでは駄目だ……。しかし、一人あゝして放つて置くといふことが間違つてゐるのである。何處の寺でも、今では女房子を持たないものはない。和尙にも一人相應なのがあつたら、持たせるに限る……。かう世話人達は寄り合つて相談した。

しかし、あの寺に、あの廢寺に、本堂に雨が洩り、庇が落ちてゐるやうな寺に、誰が女房になりに來るものがあるであらうか。『とても來手はねえな。すたり者のねえッていふ女つ子だ。誰が物好きにあんな寺に行つてさびしい思ひをするものがあるもんか。』かうそこから出て來た婆さんは笑ひながら言つた。

世話人は猶いろいろなことを婆さんから聞いた。誰もたづねて來るものはないか。郵便は來ないか。又誰か訪ねて和尙は行きはしないか。――その答はすべてNo・である。

ある日、世話人は二人して出かけた。一人はかれを都から此處に伴れて來たものであつた。かれ等は庫裡から入つて行つた。婆さんに出て行かれたかれは、ひとりぼつねんとして庫裡にゐた。かれはひと

『本でも讀んでるのか？』
『いや、本なんか一册もねえ。』
『ぢや、物でも書くのか？』
『書きもしねえ。』
『それぢや唯ごろごろしてゐるのか？』
『唯、一日中ちやんと、机に向つて坐つてゐるだ。』
かう言つて、その婆さんは、比較的詳しくかれの平生の狀態を世話人達に話した。葬式が來ると、古びた僧衣を引かけて、默つて本堂に行つて、いつものやうにお經を讀んで、それがすむと、そのまゝ元のやうにその居間へ行つて坐つた。
『朝のおつとめは？』
『朝のおつとめなんかしねえ。』
『ぢや、葬式の時きり、お經はよまねえんだな？』
『さうだな、まア、よまねえつて言ふ方が好いだんべいな。それでも、此間雨のふるさびしい日に、何うした拍子か、大方和倘さんも淋しかつたんだんべい。本堂でお經を上げてゐる音がするから、不思議に思つてそッと行つて見ると、本尊樣の前で、一生懸命にお經を讀んでゐるだ。それもいつもの葬式

八

新しい住職の世話をするために來た婆さんは、始めの一人は十日ほども經たない中に、世話人の許に行つた。

『國から急病人があると言つて來たもんですから。』

かう言つて、二三日の暇を貰つて行つたが、日限が來ても、その婆は竟に歸つて來なかつた。二人目も五六日で暇を乞ひに世話人の許にやつて來た。

三人目、四人目……。

世話人は訊いた。

『何うして、さうだらう。何か和尙がいやなことでもするのかな?』

『いゝえ。』

別にさうしたことがあるのでもないらしかつた。ある婆さんは言つた。『でもな、ひとりぢや淋しいだ。和尙さん、何も言はないで、一日自分の室に引籠んでゐて、話もしねえから——。』

『出て來ねえか。』

『出て來ねえどころか、飯に呼んでも、それがすむと、すぐ居間に入つて行つて了ふだでな。』

告しよう。知らないものを知り得ると考へるやうな危險な直覺は成るたけ避けよう。かう考へたところに、「偶然」の價値があるのであつた。しかしかれがこれに不滿足を感じ出したのはもう餘程前のことである。女と子供の溺死體を見た以來のことである。……突然かれの心は內から外に向つた。墓があらはれて來たのであつた。

要垣の綠葉に圍まれた墓があるかと思ふと、深い苔蘚に封じられた墓があらはれて來た。新しい墓もあれば、古い墓もある。或は五輪塔型、或は多寶塔型、其他いろいろな型がある。或は倒れてゐるのもあれば、長い間の風雨を平氣で凌いで來たらしいのもある。中にはその墓石の表面に佛像が刻まれてあるものなどもあつた。かれは立留つて一つ一つその墓を撫でゝ行きたいやうな氣がした。

かれは茫然として立盡した。

このかれの立つてゐる向うに、深い深い草藪があつて、その中に黑い暗い何年にも人の入つて來たことのない古池が湛へられてあつた。そこには雲の影も映らなければ、日影も滅多にはさして來ない。しかも人知れず埋れたその池の中にも、生物は絕えずその生と滅とを續けてゐるのであつた。夜は蛙の鳴く聲が喧しくそこからきこえた。

ア、さう急がなくつても好う御座んすから。』かうかれは靜かに言つた。

かれの足は行くともなく墓地の方へと行つた。それもそこに行かうと言ふ意志がかれを其處に伴れて行つたのではなかつた。かれは唯ぶら〳〵と歩いて其方へと行つた。

墓地は昔と比べては頗る明るくなつてゐるのをかれは見た。それも先住がその後の杉森を伐つた爲めであつた。女に對する愛慾の結果がかうした形に影響するといふことも、彼には不思議なやうな氣がした。つゞいて先住と自分との生活がちよつと比べて考へられ、二人が曾ては此處で同じ飯を食ひ、同じことを考へ、或は同じ寺の娘を戀したかも知れなかつたことがつゞいて頭に上つて來た。偶然――偶然。『本當に、偶然の二字でこれを解釋して了つて好いのであらうか。』

かれの今までの經驗は、何も彼もその『偶然』で解釋された。考へて不思議の境に至ると、『これも偶然の事實だ。』と考へて、そして片を附けた。時には内心に不滿足を感じ、餘りに疑惑の伴はない薄い心を感じたこともないではなかつたけれど、それ以外に、その『偶然』以外に何う解釋して好いかわからないので、有耶無耶の中にその不思議な心理を抑塞した。

それに、その『偶然』と考へる處に、あらゆるものを『無意味』にして了ふところに、一種微妙な科學の權威があつた。また肯定された科學の不思議があつた。敢て深く入つて行かないところに、勇ましい男らしさと誤りのない精確さとがあつた。知らないものは知らないものとしてこれから研究しよう、報

『あゝ、もうよさう、考へるのは止さう。もつと靜かに休まなければならない體だ。何事をも捨てたやうに、この簇つて來る千萬の考慮をも捨てよう……。』かう思つて、かれは庫裡の一間から出て來た。

いつもゐるところに婆さんがゐない。道具と言つては唯これ一つしかないと言つても好い長火鉢、その上には鐵瓶がかゝつて、しかも沸え立つてブウブウ白い湯氣を立てゝゐた。

かれはそれに水を足した。

そしてそこにあつた下駄をつツかけて戸外に出た。

廣々として美しく日にかゞやいた野がその前に展けた。夏のさかりの大地から湧き上る暑氣は、草にも木にも一面に漲りわたつて、キラキラとかれの眼と體とに反射して來た。

畠には笠をかぶつて百姓が頻りに草を取つてゐた。

ふと昨夜世話人がやつて來ていろ〳〵に言つた寺の經營の話がかれの頭にのぼつて來た。『兎に角、昔から由緒のある寺だから、この儘かうして置くのは殘念だ。何うか、貴方が來たのを機會に、昔のやうには行かなくとも、本堂も修繕し、庫裡ももう少し住み好いやうにし、寺としても餘り人に馬鹿にされない寺にしたい。……中興の祖には、貴方より他になつて下さるものはないんだから。』かう言つて、重立つた世話人は、寺の財産や、無住にして置いた間に出來た金や、乃至はその中から先住の借金を埋めた話などをした。かれはそれに對して深く心を留めてはゐなかつた。『段々さういふことにして……ま

かれは其處まで考へて、大きな溜息を吐いた。そこに大きな缺陷があるやうな氣がした。染まるべからざるものに染つて行く可能性を賦與した自然は？　絶對に自己のものにする事の出來ないものを自己のものとなし得る可能性を賦與した自然は？　滿たされたる心の飽滿から生ずる倦怠、餓やされたる心の寂寥から起つて來る憧憬、これは實は一つであるのではないか。同じことではないか。

しかし滿されざる心と餓やされたる心とは同じでない、飽滿と寂寥とは同じでない。倦怠と憧憬とは同じでない。それでゐてこれが同じであると言はなければならなくなるのは何の故であらう。死にまで深く染着した心は美しくはないか。勇ましくはないか。雄々しくはないか。また優しく悲しくはないか。これが人間の最後の『詩』であり且つ『宗教』ではないか。

文明は虚僞を生んだ。デカダンを生んだ。勝者の權利を生んだ。『自己』を生んだ。現にかれなどはそれを眞向に振翳してこれまでの人生を渡つて來た。知慧を戰はして勝たんことを欲した。自己の欲するまゝにあらゆるものを得んことを欲した。そのために、かれには富んだもの榮えたもの主權を把持したものがその對象となつた。山も丘も平野も一緒に平らにならなければならないと思つた。

しかし平等は物質にあるのではない。人生と人性との表面にあるのではない。勝利者にあるのではない。知慧と手段とを戰はして勝つたところにあるのではない。かう考へると、『恐ろしい群』の人達のことが、再びかれの胸に迫つて來た。折角さぐり出した祕密の緒がそこでほッつり絶えてゐるのを感じた。

らない。現に、今でも、かうして寂然としてかれが坐つてゐる間にも、さういふ悲劇が何處かで繰返されてゐるかも知れない。何のために、滿たされざる心のために、辛い辛い捨てられた心のために、痛い痛い刺戟のために……。

自から殺さうとしたことの一度ならず二度まであるかれに取つては、さうしたシィンが殊に堪へ難い痛い刺戟を與へた。

それは近いことではなかつた。かれに取つてはもう遠い昔だ。しかしをりをりその心の光景が描き出された。二つにわけられた心と二つに突き詰めた心と、この心は實は一つである。わけられる心も突詰める心も同じ心である。その區別は唯境遇に由るのである。その時の存在の形によるのである。一と一とぴたり合つたものは幸福である。一と二と合つたものは不幸である。しかし幸福と言ひ、不幸と言つても、それは共に外形であつて、もう少し深く考へると、幸福なもの必ずしも幸福でなく、不幸なもの必ずしも不幸でない。何の故に？　一つと一つと合つたものも矢張もとは二つのもので、永久に一つであることは出來ないが故に――。一つと二つと合つたものも、遂には一に歸さなければならないが故に――。

自己の持つたものを失ふの辛さ、自己の持ち得たと思つたものを失ふの辛さ。これほど辛いものはない。それがよく女や男を川へと伴れて行く……。

『身投げ！　身投げ！』

かう言ふ聲が其處此處から起つた。誰の心も皆なそれに向つて躍つた。

丁度その傍を大きな帆をあげた舟が通つてゐた。舵のところにゐた船頭もそれを見たらしく、急いで此方へとやつて來た。と、手が浮いた。淺黄がゝつた着物と帶とが見えた。しかし、船頭の持つた棹はそこに達しなかつた。

その手は、着物は又沈んだ。あとには大きな川のたぷたぷとした滑らかな水面。

『あゝもう沈んだ！』

『救けてやれ、おい船頭！』

暫くすると、

『南無阿彌陀佛――』

『可哀さうだわねえ。』

『まだ若いのに……』

かういふ聲がした。誰も見てゐるに忍びないやうな氣がした。

土手の上には、白樺色の蝙蝠傘と派手な鼻緒のすがつた下駄と――。

かうした光景は其處にも此處にも起つた。廣い世間には、かうして自から殺すものが何人あるかわか

てその苦痛を處分した。しかしそれで完全にそれが處分され解釋されたであらうか。かれは今でもその溺れた女と子供とが自分に向つてその解釋を求めてゐるのを覺えた。かれはぞつとした。

七

渡船小屋の雁木がずつと川に延びて行つてゐた。そこには船が一隻繋いであつた。人が五人も六人も乘つて、船頭の下りて來るのを待つてゐる。大きな河は傳馬やら帆やら小蒸汽やらをその水面に載せてたぷたぷとして流れてゐる。櫓の聲が靜かに日中の晴れた水に響いた。帆が鳥の翼のやうに大きく動いた。

土手の上には、人や車が陸續として通つてゐた。氷店、心太を桶に冷めたさうに冷して賣つてゐる店、赤い旗の立つてゐる店、そこにゐる爺の半ば裸體になつた姿、をりをりけたゝましい音を立てゝ通つて行く自動車、川の向うに見えてゐる大きな煙突から渦まきあがる煤烟、――ふと、『あれ、あれ！』とけたゝましい聲が起つた。

其方を振向くと、丁度、今二十位になる女が、派手な着物を着た女が、その渡船小屋の雁木の少し手前のところから水へと飛込んだ處であつた。

水煙がサツと立つた。

像を微かに照した。

流石にかれは經を忘れなかつたが、しかし不思議な氣がせずには居られなかつた。かれは讀んで行く經の中に自分の遠い過去が再び蘇つて來たのを感じた。始めは靜かであつた聲は次第に高くなつて行つた。その聲の中にはまだけがれない無邪氣な心が籠められてあつた。

暫くの間、その讀經の聲は、荒れたさびしい本堂の中にきこえた。

で、それがすむと、その父親は、そのまゝ小さな棺をかついで、サッサと墓地の方へと行つた。かれは不思議な氣がせずには居られなかつた。かれはその姿の夕暮の闇の中に見えなくなるまで見送つた。

『佛は人間のことのすべてを知つてゐる。人間の犯した過去の罪を總て知つてゐる。』かう思ふと、かれは其處に落附いてぢつとして立つてゐられないやうな心の恐怖を感じた。

急いで庫裡へと戻つて來た。

『何故、あの時、あの女はあの子を抱いて井戸に身を投じたであらうか。何故？　何故？』かうかれは心の中に絶叫して、長い間その答を待つたが、竟にその答はやつて來なかつた。自己は自己である。愛した女だとて、自己の總てを占領することは出來ない。それが出來ない爲に死んだとて、恨を他に投げかけて死んだとて、それが誰の責任になるであらう。占領させなかつたこの自己がわるいのか。それとも又それを嘆いて子を抱いて死んだ女がわるいのであらうか。かれは其時は唯『自己』に取縋つて強ひ

夕暮の色は既に迫つてゐた。

かれは外に出て見た。果して小さい棺が山門と本堂との敷石の上に置いてあるのが白くさびしく見えた。

かれは傍に行つた。

『穴は掘つてあるのか？』

『今、掘つてらあ！』

見ると、もう一人の男が墓地の方で頻りに鍬を動かしてゐるのが見えた。

『本堂へ持つて行つたら？』

『さうすべいか。』かう言つたが、『新しい和尙さんだで、餓鬼も浮ばれべい。』

こんなことを言つて、軽々とその棺を持つて、さながら小さな荷物でも運ぶやうにして、本堂の前の木階――それはひどく壞れた木階を上つて、賽錢箱の向うに置いてある棺臺の上に置いた。

かれは古い僧衣に袈裟をかけて、草履を穿いて、廊下から本堂の方へと言つた。もう蚊がわんわんと音を立てゝゐた。歩くとそれがバラバラと顔に當つた。

かれは一本持つて來た蠟燭を取出して、それにマッチをすつて火を點した。本堂の中はもう眞暗であつた。蠟燭の火は青くかれの鬚の濃い顔を照した。つゞいて奥に寂然として端坐してゐる本尊の如來の

やかな參詣者、上さんに取つてもその一時代は追憶の最も派手なものであるらしく、それからそれへといろいろなことが浮び出して來た。こつちから訊ねもせぬのに、寺の玄關の三疊の窓へ來た女のことをも上さんは話した。

『あれもな、不仕合せでな。足利に行つてついこの間まで一人でゐたが、今ぢや亭主でも持つたか何うか。』

かう上さんは話した。

其處を出てかれは猶あちこちと町を歩いた。上さんの話で、自分が長い年月種々な經驗を體感した間に、この昔馴染の人達がいかに生活してゐたかと言ふことが漸くわかつて來たやうな氣がした。かれは自分の辛い恐しいデカダンの生活を思ひながら、町の外れに出來た小さい停車場の方まで行つて見てそこから引返した。

六

かれが來て、最初にやつて來た葬式は、生れて一月しか經たないといふ子供の棺であつた。

『其處へ持つて來て置いたで、ちよつくらお經を讀んで與れなせい。』父親らしい男は庫裡の入口に顔を入れてのんきさうに言つた。

眞珠の玉のやうな寶をつかんだと思つた。しかし、つかんだと思つたその珠は、いつの間にかかれの掌中から落ちて行つてゐた。

かれは時には一里ほどある町の方へと出かけて行つた。麥稈帽をかぶつた單衣に絽の古びた羽織を着たかれの姿は、午後の日の暑く照る田圃道を靜かに動いて行つた。町は市日で、近在から出た百姓がぞろぞろと通つた。種物屋の暖簾は、昔と少しも異らずに、黑い地に白く屋號をぬいて日に照されてゐるのを見た。氷屋の店では、赤い腰巻をして田舍娘が二三人腰をかけて、氷水を匙ですくつて飮んでゐた。

ある店の前を通ると、

『慈海さんぢやないか？』

かうある婆さんがいきなり呼んだ。ちよつとはその誰れであるかゞわからなかつたが、暫くしてそれは不動堂の前の湯屋をした上さん――その時分は三十位でいきな如才のない上さんであつたといふことがわかつた。『まァお上り……歸つてゐるつて聞いたから、一度逢ひたいとは思つてゐたんだよ。』かう言つてかれは無理に引上げられた。上さんは亭主に四五年前に死なれて、今は息子が家のことを萬事やつてゐた。湯屋から町へ出て、今の小間物商を始めたといふことであつた。

話の中には再び昔の不動前の賑やかな光景が蜃氣樓のやうに浮んで來た。老僧、世話人、三味線、賑

『何うも今年は雨が少くつて、田植にも困つた。一雨來れば好い。』

かれ等は何百年前から繰返した黴の生えたやうな言葉をくり返してのんきに生活した。

勿論、その間にも、家々の浮沈がないでもない。それはかなりにある。ある家では息子が放蕩で田地の半を失つた。ある家では養蠶に成功して身代がその三倍になつた。ある家では次男息子が學問好きで大學まで行つてこの夏學士になつた。かれの知つてゐる、かれと同じに遊んだ貧乏人の息子は、田舍では何うすることも出來ないので、東京へ出かけて行つて、種々の艱難辛苦を甞めた揚句、貧民窟近くに金貸の看板をかゝげて、十年間に巨萬の財產を造つた。今では東京に大きな邸宅を構へて、大名のやうな生活をしてゐるといふことであつた。

これが世の中の變遷である。しかし、さういふことが、さういふ表面の漣が、どれだけの意味を持つてゐるのであらうか。かうは思ふものゝ、かれは時々、『それが人生ではないか。それが本當の人生ではないか。自分のやつて來た生と死、戀愛、個人と自由、さういふことは、餘り深く自己に執着しすぎたためではないか。』といふやうにも翻つて考へて見た。

『そんなことはない。』

かれはすぐかう打消した。

かれはあらゆる艱難の中をも、巴渦の中をも、恐怖の中をも通つて來た。そしてその中からすぐれた

五

寺に來てから、かれは種々な人達に逢つた。世話人の重立つた人達、それは昔見た時よりも年を取り白髮が多くなつてゐるばかりで、矢張或者は青縞の製織に、ある者は小作の取り上げに、或者は養蠶の事業に一生懸命に携はつてゐるのを見た。世の中にあつた種々な大事件、恐ろしい戰爭の殺戮、無辜のものの流るゝ血、乃至は新しい恐ろしい思潮、共同生活を破壞する個人思想、意志と魂との扞格、さういふものがこの世界にあらうなどゝは夢にも知らずに、朝は早く起き、夜は遲く寢て、唯その家業にのみいそしんでゐるのであつた。かれ等は廣い世の中を知らなかつた。都會の生活をも知らなかつた。文明といふことも、新聞の上で見るばかりで、それが果して何んなものであるか、何ういふことであるかを知らなかつた。いろいろな恐しいこと、醜いこと、聞くさへ眉の蹙められるやうなこと、さういふことも、ほんの一時の黑雲の影のやうなもので、その耳目から早く早く通過して行つた。そしてあとには田舍の平和がいつも殘つた。

かれ等の若い者は、婚し、生殖し、生活して、唯年月を經て行くのであつた　かれ等は循環小數のやうに子供から大人になり大人から老人になり老人から墓になつて行くのであつた。春が來て花が咲き、秋が來て紅葉が色附き、冬は平野をめぐる遠い山の雪が美しく日に光つた。

が。』かうその世話人から言はれた時には、そこより他に、その古い人知らない田舍の廢寺より他に、自分の身を、體を置くところはないやうにかれは思つた。老師の魂が荒んだ自分の魂を救つて呉れるやうにすらかれは思つた。

かれは尠くとも落附いて考へて見なければならないと思つた。これまでに自分のやつて來たことは、すべて皆失敗に終つた。あらゆる悲喜、あらゆる事業、あらゆる思想、すべて皆な不自然であつた。自由を欲する――唯この一語にすら、かれはあらゆる矛盾と撞着とを感じた。意志と魂との區別も、もつと深く靜かに考へて見なければならなかつた。それには、田舍の山の中の寺、廢寺、何の束縛もないのが好いと思つた。餘りに多く世に染まりすぎた。世間と人間とに捉はれすぎた。靜かに休息させて下さるなら……一二年行つて見たいからといふ手紙をかれは世話人に書いた。

かれは郊外の或る家に置いた自分の書籍――かれやかれの『群』が一生懸命に讀んだ書籍、パンの問題、精神の問題、自由意志の問題、さういふことを書いた澤山の書籍をある日古本屋を呼んで賣つた。古本屋は何も知らない半ば老いた男であつた。この書籍の中に、人間の意志が、魂が、恐怖が、事件が一々こもつてかくされてあるのは夢にも知らずに、平氣でそれに評價をつけて、錢をちやら〳〵そこに勘定して置いて、そしてそれを背負つて行つた。

かれはあらゆるものを捨てゝ、着物を入れた行李一つを携へて、そしてこの故郷の寺へと來た。

差支ない。世に罪惡と言ふものはない。惡と言ふものはない。唯自由があるばかりである。責任を負ひさへすれば――。かう言つたが、その責任が卽ちかれ等の死ではなかつたか。

その意志の實行は、果して死を價値してゐたか否か。飜つて考へて見なければならない餘地はないか否か。かれ等は少くとも犬死ではなかつた。すぐれた芽を蒔いたには相違なかつた。しかしその芽を蒔かなければならないほどの必要をかれ等の魂は感じつゝあつたのであらうか。

かれは失敗して本國に歸る舟の中でそれを聞いた。かれはその時の烈しいショックを忘れることが出來なかつた。急にかれの世界は狹くなつたやうな氣がした。其處にも此處にも自分を監視する眼がついて廻つてゐるやうな氣がした。かれは自分の舟の本國に向つて航しつゝあるのを恐れた。かれは船室の中にのみ閉籠つた。

エイア・ブウルからは美しい碧い海が見えた。行つても行つても海である。掀翻し、飛躍し、奔跳する海である。その上には時には明るい朝日が照り、わびしい黃い夕日が落ち、赤い湧くやうな雲が浮んだ。『群』の人達の記憶は拂つても拂つても絕えずかれの魂を襲つた。かれは時にはいつそ身を海中に躍らせようと思つて甲板の上を往來した。

――『何うです、一度故鄕の寺に歸る氣はありませんか。あなたが跡をついで下さるなら、それに越したことはないのですが、世話人達も、村の者共も、貴方ならば喜んでお迎へするにきまつてをります

達が往來し、老僧は老僧で、同じ年恰好の世話人と一緒にあの湯屋の二階の女を傍に終日碁を打つてゐたとは思へなかつた。かれは不思議な氣がした。瞬間も『址』をつくらずに置かない『時』が恐ろしいやうな氣がした。そしてその『址』が唯だ『址』として埋められては了はずに、いつかそれの再び蘇つて來ずには置かないやうな氣がした。

かれはもう不動堂の中の荒廢した形をのぞいて見る元氣も何もなかつた。昨年のあの時から習癖になつた恐怖——いつ襲つて來るか知れない災厄の恐怖がかれを少なからず不安心にした。かれは急いで庫裡の方へと引返した。

四

自分ももう少しであの『恐ろしい群』の一人になるところではなかつたか。あの時もし東京にゐたならば——。

外國でなければ見ることの出來ないやうな事件、乃至は空想したロオマンスでもなければ出逢ふことの出來ないやうな事件、かれ等は皆獸のやうに一人々々引き出されて、斷罪の場にひかれて行つたのであつた。

意志の實行——意志の實行のために虐げられた人間の魂ではなかつたか。あらゆることを實行しても

『さうですか……。』

意想外な氣がかれはした。

それからそれへと種々なことを思つてゐる中に、かれはいつとなく睡眠の襲つて來るのを感じた。そのまゝぐつすりと寢込んで了つた。

朝起きると、日がもう高くあがつてゐた。婆さんはもうとうに起きて、廣い勝手元で、昔のまゝの土竈で、釜と火箸で朝飯を炊いてゐるのを見た。何を見ても、昔のことが思ひ出されないものはなかつた。かれは夏草に半ば埋められた井戸を見た。本堂から山門につゞいてゐる長い敷石を見た。それも依然として元のまゝである。唯、その時分には掃除が綺麗に行屆いて、その石に添つて松葉牡丹の赤く白いのが長く見事に咲き續いてゐた。

かれは横楊枝で齒をみがきながら、鐘樓から、昔賑やかであつた不動堂の方へと足を運んだ。そこでは不動堂の他にかれは殘る何物をも發見することが出來なかつた。門前町と言ふほどではないが、一時は兩側に人家が並んで、參詣者がかなり遠い處からやつて來た。やれ護摩をたけの、やれ蠟燭を奧れのと言つて、かれも慈雲も忙しい思ひをした。しかもその人家は『時』の大きな手にすつかり掃つて取去られて了つたかのやうに一軒もそこに見出されなかつた。すつかり桑畑と野菜畑とになつてゐた。何う考へて見ても、其處にあの遊蕩の氣分が渦卷き、三味線の音が聞え、赤い裾をチラホラさせた色の白い女

ど荒んだ生活をやつて來た。或は寺にゐられなくなつた兄弟子よりも、もつと〳〵烈しいデカダンの生活を送つて來たかも知れなかつた。

寺の世話人――今度此處にかれを伴れて來た寺の世話人に東京でゆくりなく逢つた時、かれは寺のことを聞き、老僧のことを聞き、兄弟子のことを聞き、最後に柔しい淚を含んだ眼の持主のことを聞いた。

『さうですか、K町に行つてゐますか。K町の商人の妻になつてゐますか。それは何より結構ですな……。子供は? へゝえ、御座いませんか。一體、何方かと言へば體の弱い女でしたからな。』

かう何氣ない風をしてかれは言つた。

世話人の話で、かれは始めてその寺の娘が兄弟子の妻にならなかつたことを知つたのであつた。世話人はつゞいて話した。『いゝえ、別にさういふわけではないですけれども、……老僧のある中は、隱居してからも、先代ほ固かつたのですけれども。ふとしたことから……、さア、そのふとしたことは何ういふことかわかりませんけれど、兎に角急にあゝいふ風に、惡魔でも魅入つたやうになつてしまつたものだから。』

『娘の片附いたのは、老僧が死んでからですか?』

『いえ〳〵、貴方が寺をお出でになつてから二年ほど經つか經たないほどです。』

か。かう思ふと、かれは不思議な一種の恐怖を感じた。

もう死んでゐるのかも知れない。弱い身體の女だつたから、おとなしい女だつたから、不仕合せな女だつたから……。と、その肉體が亡びて、その思ひだけがその空氣の中に生きて動いてゐるのかも知れなかつた。そんなことはない筈だ。かう打消しても打消しても、矢張それがついて廻つた。

ふと氣がつくと、自分は蚊帳の中に寢てゐるのだつた。それは圍爐裏のある隣の一間であつた。世話をする婆さんの寢てゐるいびきの音は向うの間からきこえて來てゐる。蚊のぶんぶん唸る聲が聞える。かれは容易に眠られなかつた。

『遠い昔だなア――』

かう思ひあつめたやうにしてかれは考へた。

此間も一度さういふことを考へたが、其夜もかれはかれ自身と放蕩無殘な行爲をした兄弟子との二つの生活をつゞいて考へずには居られなかつた。兄弟子は慈雲と言つた。かれより四つ五つ上であつた。學問も出來て老僧の氣に入つてゐた。老僧の了簡では、それを柔しい涙を含んだ眼の持主の配偶者にしようと思つたらしかつた。現に、かれが寺から東京へ、僧から俗へと移つて行つたのも半ばそのためであつたのであつた。十九でかれはそれまで學んだ佛の道を捨てた。それからそれへと種々なことをして歩いた。臺灣にも行けば滿洲にも行つた。佛の戒めた戒律をわざと破つて行くやうに見えるほどそれほ

現に、その板戸がある。竹と松の繪が黑く烟に煤けた板戸が依然としてある。その庫裡に何のために？その一つの心をわけた方の怒るとこはい眼が何處にゐるかを見るために――。

幸ひにその眼は其處にゐなかつた。かれはこつそりと玄關の戸を明けて、そして戸外へ出た。月の美しい夜であつた。樹と樹と重り合つた黑い影がところどころに絣のやうなさまを展げた。本堂の灯がぽつつりとさびしく見えた。

かれはあたりを見廻した。

其處にゐる筈の女の影が何處に行つたか見えない。屹度調戯ふつもりに相違ない。かう思つて靜かに樹の影の中に入ると、影と影の重り合つた中に、更に濃い影があつてそれが動いてゐる。急に、微かに笑ふ聲がした。つゞいてかれは柔かい女の腕の自分に絡みついて來るの感じた。女の髮の匂ひがした……。

『慈海さん。』かう微かに女は言つた。

こんなことをかれはもう何年にも思ひ出したことはなかつた。それも、かれが深く戀したやさしい涙を含んだ眼の方を思ひ出さずに、却つてそれを思ひ出したといふことが不思議であつた。

その心が、そのやさしい心が、又は男を思ふ心が、今だに、廿五六年を經過した今だに、そこに殘つてゐて、その窓の下の空氣の中にちやんと殘つてゐて、そしてそれが自分の心に迫つて來たのではない

默つてゐる。

『慈海さん！』

まだ默つてゐる。

しかしかれは自分の小さな心臟の烈しく動くのを感ぜずには居られなかつた。二つにわかれた心、その幼い時ですら、かれはその『二つのわかれた心』を既に深く經驗してゐた。その涼しい二つの眼ではない方の眼、可愛い涙をふくんだやうな眼、それでゐて怒るとこはい眼、さういふ眼をかれは恐れた。その眼がすべてかれの後にあるやうな氣がした。

『慈海さん！』

また女は呼んだ。

『あとで、あとで……。』

『そんなことを言つちや、いや――』

かう言つて頭を振つてゐるのが窓に映つて見える。

『ぢや、待つて……』

かう言つてかれは立上つた。

かれは其處を出て、この庫裡――圍爐裏のあるこの庫裡に來た。今と少しも變らないこの庫裡に……。

がまだゐる。綺麗な女が……。時々やつて來て三味線なんかを彈く女が……。扉を明けると、老僧の赤い顏、太い腕、女の髪に笑つた顏！

と、今度はそれと違つたあるシィンが浮び出して來た。かれはもう十五六であつた。

かれは庫裡の玄關のぢき傍の三疊――さつきそこをかれは明けて見た。一杯蜘蛛の網、山のやうに積つた塵埃、ぷんと鼻を撲つて來る『時』の臭ひ、なつかしく思つて明けては見たが、かれはすぐその扉を閉めて了つた。その三疊の格子の前のところで、輕い艶めかしい駒下駄の音が來て留つた。かれは幼心にもそれが誰だかちやんと知つてゐた。そこから眞直ぐに向うに行くと、鐘樓――それは今でもある。その鐘樓の隣りの不動堂、蠟燭の灯、讀經の聲、消えたことのない不斷の火、その賑やかな光景の向うには、更に一層賑やかな明るい灯、料理店、湯屋、三味線の湧くやうにきこえる音、月の光の下に巧い祭文語が來て、その周圍に多數の男女を黑く集めてゐる――そこからその輕い艶かしい足音がやつて來たのであつた。

かれは默つて經を前にして坐つてゐる……。と、こと／＼と音がする。唾で窓の紙をぬらす氣勢がする。黑い瞳をした二つの笑つた眼が其處に現はれた。

『慈海さん！』

かうその靜かな聲で言つた。

『今は何うしてゐるだらう？』

かう新しい住職はをりなり兄弟子のことを考へた。『何でも、東京に行つてゐるさうです。最後の女と淺草あたりで道具屋か何かしてゐるさうです。』かう世話人は言つた。しかし、それももう八九年も前のことであつた。今は死んだか生きてるかわからなかつた。

兎に角、庫裡……二三年前まで留守居の男のゐた庫裡を掃除して、そこに住居することの出來る準備を世話人達がして呉れた。黑く煤けた天井を洗つたり、破れた壁をざつと紙で貼つて繕つたり、圍爐裏の緣を削つたり、疊を取り替へたりして、世話人達は新しい住職のやつて來るのを待つた。庫裡の前の庭も皆なしてかゝつて綺麗に掃除した。『長い間、無住にして置いたので、金はいくらかは出來てるだで、二三年したら、本堂の修繕も出來ると思ふが、まア、それまでは我慢してゐて下せい。これも先々代の寺だと思つてな。』かう世話人達は新しい住職に話した。

三

『老僧だつて、決して女戒を守つた人ではなかつた。』

かれはかう思はずには居られなかつた。……ふとある光景が浮んで來た。それは新しい住職がまだ此寺に貰はれて來たばかりの時であつた。老僧も六十位であつた。ふと二階へあがつて行く。さつきの女

ちた。佛具なども、金目のものはもう何もなかつた。金の燭臺、鍍のキラキラと日に輝く天蓋、雲龍の見事な彫刻のしてあつた須彌壇、さういふものはもう跡も形もなかつた。本尊の如來佛が唯さびしさうに深い塵埃の中に埋められたやうにして端坐してゐるばかりなのをかれは見た。

庫裡から本堂に通ずる長い廊下は、風雨に晒されて、昔かれが老僧に叱られながら雜巾がけをしたところとも思へなかつた。中庭の樹木も唯繁りに繁つた。蜘蛛の網や塵埃や乞食の頭のやうにボサボサと延びた枝や――その中でも、金目な大きな伽羅の丸い樹はいつか持つて行つたと見えて、掘つたあとが大きくそこに殘つてゐた。唯、霧島の躑躅が赤くあだりを綸のやうにした。

年老いた世話人が來てかれにかれの先代――かれの兄弟子の話をした。

あのおとなしい靜かな兄弟子が、世話人の話すやうな殘忍無恥な、又は貪慾な、又は無殘な行爲をして、あの老僧の經營した寺をかうした廢寺にして了はうとはかれは夢にも思はなかつた。世話人の言ふ所に由ると、この先住の女戒を破つた形は殊に烈しかつた。最初の中は此方から身を躱して、こつそりさういふ土地に出かけて行つたが、後には平氣で、幅で、女を庫裡へ伴れて來ては泊らせてやつた。かれは放蕩のための金がなくなると、佛具を賣り、植木を賣り、經文を賣り、後には僧衣や袈裟までをも賣つた。たうとうそのために問題が大きくなつて、寺にゐられなくなつた。伐採した杉森の跡は、今でもちやんと指點された。

そのうち好いのがあつたらと思つてはをりますのです。無住でおきましたから、もう先住の拵へた借金もあら方ぬけました……。』

『兎に角、由緒のある寺をかうして置くのは惜しい。』

『さやうですとも……。』

で、その紳士は多くの布施を置いてそして歸つて行つた。あとはまた長い月日が經つた。

二

新しく出來た住職は、四十二三位で、延びた五分刈頭、鐵緣の強度の眼鏡、單衣にぐるぐる卷いたへこ帶、ちよつと見ては何うしても僧侶とは思へないやうな風釆であつた。『あれが慈海さんけえ？　何うしてもさうは思へねえだ。丸で變つちやつたな。何處かの別な人としか思へねえな。あの可愛い小僧さんとは何うしても思へねえ。』昔を知つてゐる年を取つた村の婆さん達はかう言つて噂した。

若い住職に取つても、あたりは餘りにひどく變つてゐた。變りすぎてゐた。これが昔のあの寺かと思つた。あの盛んな立派な堂々とした寺かと思つた。最初來た時には、これが先々代の老僧が威權を振つたあの寺とは何うしてもかれには思へなかつた。數年前に紳士がやつて來た時とは、更に更に寺は荒れた。裏の大きな垂木は落ち、壁は崩れて本堂の中は透いて見え、雨は用捨なく天井から板敷の上へと落

ろさうですから……。』
『さやうで御座いますか。こゝから、お跡が野州に？』
かう村長は別に感動するやうな風もなしに言つた。
紳士は最初に村の西の隅にある館の址に行つた。濠、草や笹に埋められた壕、それもかれには非常になつかしさうに見えた。かれはわざわざ草藪をわけて、その小高いところまで入つて行つた。しかし其處には何もなかつた。
『城ッて言つても、その時分は、館なのだから――』
こんなことを獨言のやうに言つた。で、そこを出て、かれは用水縁の路にその都人士らしい姿を見せつゝ寺の方へとやつて來た。途中では、丁度ひろい庭で麥を打つてゐる百姓達が連枷を留めてじろじろかれの方を見た。
寺にも一時間ほどゐた。留守居の男が赤く濁つた茶などを勸めた。
かれは又訊いた。
『寺に、先代の弟子と言ふものもなかつたのですか？』
『大勢あつたのですけれども……。それも先々代のですが……。先住にはありませんけれど……。何うも皆な還俗したり何かして了ひましてな……。しかし、いづれは住職を置かないでは困るんですから、

しさうに住んでゐる古い庫裡の方へ行つて見たりした。奥の苔の蒸した五輪形の墓の前に行つた時には、紳士は長い間跪いて手を合せた。

この紳士は今朝突然この村にやつて來た。そして村長の宅を訪ねた。かれは其處から一里に近い田舍町の旅舍に昨夜わざ〳〵やつて來て宿を取つてゐたのであるが、その出した名刺を見た村長は、俄に言葉を丁寧にして、紳士の綺麗な顔を恐る〳〵見た。名刺には田舍の村長を驚かすに足る官名が書いてあつた。

紳士は寺のことを聞き、墓を聞き、またその昔の館の址を聞いた。今だに壕の跡が依然として殘つてゐるといふことを村長から聞いた時には、紳士の顔にはある深い感動の表情が上つた。やがて紳士はその墓と館の址とを殘して永久に立去つた昔の城主の遠孫であることを村長に話した。村長は愈〻辭を低うした。

『何も他には殘つてはゐませんかな。』

『何も……舊家といふのも大抵潰れて了つたものですから……。』

『ふむ……。』

かう言つたが、『さうすると、その先祖は小田原に亡されて、それから、野州に行つて、そこで今の主人を持つたんですな。何でも、野州で今の藩侯の家來になつたのは、こゝに墓のある人の孫に當つてゐ

舊家で、昔は寺の爲めに非常に寄捨をしたといふSTといふ家でも、その分家の分家が僅かに小さく殘つてゐるばかりで、古い苔蒸した無數の墓の外にはその昔の何事をも語らなかつた。唯、雲雀が高く囀つて空に上つた。

今から數年前であつた。ある夏の日の晴れた午後の日影を受けて、此處等にはつひぞ見たことのない新しいパナマ帽を冠つた、絽の紋付の羽織にちやんと袴を着けたハイカラの若い綺麗な紳士が、銀の環の光つたステッキをつきながら、村長につれられて夥しく荒廢したその無住の寺の山門へと入つて來た。

こんな會話を二人はした。

『えらく荒れてますな!』

『どうも……好い住職がないもんですから……それに、もとの住職が寺の借金を澤山殘して行つたもんですから……。』

『もう、長くゐないのですか、住職は?』

『八九年になります。』

村長は丁寧な言葉で深く尊敬するやうにして話した。

紳士は庇の落ち、軒の傾き、壁の崩れてゐる本堂の中に下駄のまゝ上つて行つたり、留守居の男の淋

どは、駕籠に乘つて伴廻りを三人も四人も伴れなければ決して戸外には出ないほどであつた。それに古い由緒が更にこの寺を價値づけた。寺の奥にある大きな五輪塔形の墓、苔の深く蒸した墓、それは歴史上にも聞えたこの土地の昔の城主なにがしの遺骸を埋めたところで、戰國時代にあつては、この城主は、この近隣數郡の地を攻略して、後にはその勢威がをさ〳〵一國を震慴させたといふことであつた。今でもその住んでゐた城の址はその村の西の一隅に草藪になつて殘つてゐるが、半ば開墾されて麥畠、豆畑、桑畑になつてゐるが、それでも館の址だけは開墾すると祟があると言つて、誰も鋤も入れずにそのまゝにして置いた。取卷いた壕の跡には、深く篠笹が繁つて、時には雨後の水が黑く光つて湛へられてゐるのが覗かれた。春はそこから出て野に行く道に、蓮華草や菫の一面に咲いたところがあつて、村の小娘達はそれを採つては束にして終日長く遊んでゐるのを誰も見懸けた。

梅雨の降頻る頃には、打渡した水の滿ちた田に、菅笠がいくつとなく並んで、せつせと苗を植ゑて行つてゐる百姓達の姿も見えた。かれ等は用水の漲つて流れる線を通つて、この昔の館の址の草藪に埋められてある傍を掠めて、そしていつも揃つて野良の方へと出掛けて行つた。

少くとも、このH村では、半ば野に、半ば丘に凭つてゐるこのH村では、その城主の館の址と、五百年も前からあつたといふ寺と、その寺に殘つてゐる苔蒸した墓と、この三つが、長い『時』の力の中に僅かに滅びずに殘つてゐるもので、それ以外には何物も昔の跡を語るものはなかつた。寺の大檀越で、

ある僧の奇蹟

一

久しく無住であつたH村の長昌院には、今度新しい住職が出來た。それは何でも二代前の老僧の一番末の弟子で、幼ない時は此の寺で育つた人だといふことであつた。『ほ、あのお小僧さんが？　それはめづらしいな。』など丶村の人達は噂した。

先代の住職が女狂ひをして、成規を踏まずに寺の杉林を伐つて賣つたりして、そのため寺にもゐられなくなつてから、もう少くとも十二三年の歳月は經過した。初めは一里ほど隔たつた法類のT寺がそれを監督したが、そこの和尙も二三年して死んで了つたので、あとは村の世話人が留守居などを置いて間に合せに來た。寺は唯荒る丶に任せた。

長昌院と言へば、この界隈でもきこえた古い寺である。德川時代にもいくらか御朱印のついてゐる格式の好い方であつたし、田地も十分についてゐたし、境内も廣い廣いものであつたし、先々代の老僧な

ある僧の奇蹟

外二十三編

花袋全集第九卷目次

田山花袋著

花袋全集

第九巻

ある僧の奇蹟

外二十三編

花袋全集刊行會